

国立国語研究所
共同研究報告 13-02

ISSN 2185-0127

首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書
首都圏言語研究の視野

三井 はるみ 編

2014（平成26）年2月

国立国語研究所
共同研究報告 13-02

首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書
首都圏言語研究の視野

三井 はるみ 編

2014（平成26）年2月





大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所
萌芽・発掘型共同研究プロジェクト

首都圏の言語の実態と動向に関する研究

研究期間

2010年11月～2013年10月（取りまとめ期間～2014年3月）

研究組織

プロジェクトリーダー

三井はるみ（国立国語研究所）

共同研究者

亀田裕見（文教大学）

久野マリ子（國學院大學）

田中ゆかり（日本大学）

鎌水兼貴（国立国語研究所）

吉田雅子（実践女子大学） ※2013年4月から

主な成果物

- (1) 鎌水兼貴（編）『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 全国若者語調査地図集』, 国立国語研究所共同研究報告 12-04, 2013年3月
- (2) プロジェクト成果公開 Web サイト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」,
<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>, 2013年6月30日公開
- (3) 三井はるみ（編）『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』, 国立国語研究所共同研究報告 13-02, 2014年2月（本書）
- (4) 吉田雅子・三樹陽介（編）『首都圏の言語に関する研究文献目録（稿）』（『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』別冊）, 2014年2月

※（1）（3）は、国立国語研究所ホームページからダウンロード可。

はじめに

1. 本報告書の目的

本報告書は、国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」の主要な研究成果を、論文・講演録の形でまとめて公表するものである。各論文・講演録は、本プロジェクトの共同研究発表会、各種学会での口頭発表などの内容に基づく。口頭発表から完成論文への発展の途上にある、現時点での途中経過をまとめた論考を中心とするが、研究の進展が早く、すでに論文として学会誌等に掲載されたものの再録も含む。プロジェクトの中で議論された研究課題を、その広がりとともに記録しておくという意味で、このような構成をとることにした。

2. プロジェクトの目的と本報告書の内容

本プロジェクトの目的は、首都圏の言語の総合的研究の基盤を築き、今後取り組むべき課題を見出すことであった。具体的には、各共同研究者がそれぞれ興味を持っている課題に取り組み、その報告を持ち寄って研究交流を深める中で、共通する現代の「首都圏の言語」の特質が見えてくるのではないかと考えた。

首都圏、とりわけその中核地域である東京のことばは、「現代日本語」と密接に結びついた中央語としての位置づけをもつ。そのためこの地域の言語は、方言研究のみならず、近代語研究、都市言語研究、言語動態研究といった、多様なアプローチによる研究が行われてきた。そこに本研究が「萌芽・発掘」として何を加えようとしたかと言えば、主として地域言語研究の立場から、現在の首都圏という地域のありようの中で、あらためて言語の現状をつぶさに具体的にとらえ、今後この地域の言語に切り込んでいくために有効な観点を洗い出すところにあつたと言えよう。

本報告書には、21編の論文、講演録、紹介文を掲載した。そのテーマは多岐にわたる。地域言語研究のほか、近代語研究、国語教育の分野からも寄稿いただいた。本書の内容は、完全に網羅的なものとは言えないけれど、その全体において、特質や観点を導き出すベースとなる「首都圏言語研究の視野」を提示したものとなった。

3. 本報告書の概要

3. 1 全体の構成

本報告書は、内容のまとまりごとに全体を3部に分けて構成した。総論にあたる「第1部 対象と方法」、各論にあたる「第2部 個別研究」、研究の基盤となる「第3部 研究ツール・アーカイブ・データベース」である。第1部には4編の論文・講演録を掲載した。第2部はさらに「地域研究」「全国の中の首都圏」「アクセント」「音声」「方言利用・言語景観」「教育」の6つに分類し、計14編の論文、講演録を掲載した。第3部には論文2編と紹介文1編を掲載した。

なお、本報告書の別冊として、吉田雅子・三樹陽介編『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』を作成している。併せて利用していただければ幸いである。

3. 2 「第1部 対象と方法」の概要

「第1部 対象と方法」は、総論にあたる。プロジェクトタイトルの「首都圏」は、いまだ研究者間で言語圏としてどの地域を指すか明確な一致を見ているとは言いがたい。

本研究で作成した「首都圏の言語に関する研究文献目録」(Web版 http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/3_summary.html, 冊子版 吉田雅子・三樹陽介編『首都圏の言語に関する研究文献目録(稿)』)の分析によると、東京を中心とする都市圏を一つの言語圏をなすものとして注目した論文は、1970年から現れた(第3部三樹論文)。タイトルに「首都圏」という地域名が用いられるのは1983年(河崎裕子・井上史雄「首都圏の〈新方言〉」井上史雄編『〈新方言〉と〈言葉の乱れ〉に関する社会言語学的研究』科研費報告書)、地域方言としての「首都圏方言」という名称をタイトルに用いた論文は2003年(田中ゆかり「首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの — 「気づき」「変わりやすさ」の観点から —」『語文』106)に現れる。

1960年代の高度経済成長期に進んだ東京への人口集中に伴う通勤圏の拡大と市街地の拡張、移住に伴い母方言とは異なる共通語で日常生活を送ることになったノンネイティブの増大と二世化・三世化、それと平行して進んだ東京および周辺地域の在来方言の共通語化...、こういった社会変動の中で生まれたのが、共通語に近い比較的均質な言語的実態を持つと意識される「首都圏」という言語圏であったと考えられる。この地域が一つの言語圏として注目され、名付けられ、研究対象として措定される過程は、この地域の言語状況の変動と言語的実態の変質を追いかけるように進んだものと捉えることができる。

このような変動を経て生まれた「首都圏」地域の言語は、しかし、実際には均質というわけではない。それどころか今日では、個人差場面差はむしろ非常に大きいと捉えられている。また少なくともアクセントについては、東京都23区東部・埼玉県南東部・千葉県北部という首都圏東部一帯に、共通語・標準語基盤方言とは異なる体系を観察することができ、その記述は現在も課題の一つである。このようなことから本研究では、「首都圏」のことばを何らかの均質性が想定可能な一つの方言と積極的に捉えない。その意味で研究課題名として「首都圏方言」という術語は用いず、仮にではあるが、「首都圏の言語」という名称を採った(もちろん、従来一つの「方言」とされていることばも、内部に多様性を有しているのが普通である。むしろ自然言語である限り、完全に均質ということは考えにくい)。ただしこの点は、本報告書の執筆者の間でも立場に違いがある。

第1部の各論文では、これら、研究の基礎となる対象と方法について、最近の調査から、あるいは、これまでの研究の蓄積に基づいて、それぞれの立場から論じている。

三井論文は、地域差の存在が意識されにくい現在の首都圏若年層の言語にも、明瞭な地域差や分布域の変化が認められる例があることを、本プロジェクトの共同アンケート調査の結果から報告した。

久野論文は、この地域の言語を「首都圏方言」ととらえる。他方言、および、他の都市言語と

の比較を念頭に、共通語との違いを含めた検討を行い、「東京方言の共通語化したもの」との性格付けを提案する。付録の「新・東京都言語地図」（1989-1991 調査）は、東京周辺を含んだ地域の実態を示す資料の一部である。

鎌水論文は、首都圏の言語をめぐる関連術語の整理、という方向から研究の観点の概観を行う。各概念の違いを明確にすると同時に、観点の重なりや連続性にも留意し、流動する言語や言語意識との関わりを論じている。

飛田論文（講演録）は、公開研究発表会における講演の記録である。飛田氏の御専門は近代東京語成立史の研究である。この時代の「東京語」もまた、地域の流動性、話し手の多様性、スタイルの問題、「標準語」との関係、という点で、現代の首都圏の言語と同様の捉え難さを持っている。飛田氏は、1990年代に東京の鉄道沿いの年代別言語調査も実施されており（詳細は第2部竹田論文）、近代語研究と地域言語研究の橋渡しというべき内容となっている。

3.3 「第2部 個別研究」の概要

首都圏の言語は多様であるだけに、実像をとらえるためには、一見ばらばらに見えるようでも、ターゲットを絞った個別の研究をそれぞれ積み重ねていくことは重要である。第2部には、首都圏の言語を扱った個別研究を15編、6つの分野に分類して掲載した。

〔地域研究〕は、首都圏内の地理的分布を扱った研究である。

鎌水・三井論文は、第1部三井論文と同じ、首都圏大学生への共同アンケート調査の結果から、語形の使用だけでなく、改まり・通用範囲・使用頻度といった語形に対する評価意識にも地域差が見られることを報告している。意識の地域差から、語形の普及・衰退のプロセスや地域の言語的志向性が推定される可能性にも触れている。

竹田論文は、第1部飛田論文で触れられていた、鉄道路線沿い世代別言語調査の概要と、結果の一部を報告するものである。未整理未公表であった資料が、今回竹田氏によって整理・公表された。結果はグロットグラムで提示されており、23区中央部（山手線・総武線）と多摩西部（青梅線）について、年代差、地域差を観察することができる。「坂」のアクセントの1型が青梅線沿線に広く現れるなど、これまでの調査とは異なる結果も見られ、今後の精査が期待される。

亀田論文は、埼玉県西部における伝統的方言の分布調査報告である。「今が最後の時期」と位置付けた継続的な臨地調査により、これまで曖昧であった「秩父方言」の東側境界の状況が明確に示された。共通語化著しい首都圏の伝統的方言は、他方言に劣らず、跡形もなくなるような消滅の危機に瀕している。その中で地道な取り組みの成果である。

〔全国の中の首都圏〕は、一般的には全国的な変化を先導すると捉えられている首都圏のことだが、実際には、全国方言との間でどのようなインターアクションを持ちながら存在、変容しているか、という観点からの研究である。

鎌水論文は、全国35大学約2700名を対象に行った、全国若者語調査の結果に基づく報告。全国規模の地域差の存在、「東京←→関西」のような大都市中心部間の相互伝播、各都市中心部から周辺部への伝播、属性差の中に隠れた地域差の存在等、伝統方言の伝播とは異なる側面を持ったタイプの言語伝播モデルを提唱している。

三井論文は、関西方言出自の「～てほしい」という形式が共通語として普及定着する過程に着目し、この形式が関西から東京に受け入れられるにあたっては、「～てもらおう」という受納表現の補助動詞用法の変化が下地にある、という仮説を述べる。「～てもらおう」の変化自体、関西方言で先行していたものであり、根本には、都市部独特の発想法の存在といったものが考えられるとする。

[アクセント] は、共通語形・標準語形の選定、ということとも関わって、東京語、東京方言のバリエーション研究として取り上げられることの多いテーマである。

佐藤論文（講演録）は、御自身の取り組んで来られた東京アクセント研究の成果を中心に、「変化」「地域差」「世代差」「方言アクセントの共通語化」「関東方言アクセントとの関係」の諸観点からこれまでの研究をレビューし、最後に、今後の課題を提言されている。この地域のアクセント研究を行う上でのガイドとなるものである。質疑応答では、具体的な例をめぐっての議論も行われており参考になる。

坂本論文は、首都圏の最も外側に位置する小田原市方言のアクセント体系を記述する。前の佐藤論文（講演録）で触れられていた「関東方言のアクセントと東京アクセントとの関係」は、このような基礎的な記述があって初めて成り立つものであろう。

亀田論文は、共通語基盤方言のアクセントと異なり、ゆれが多く、従来曖昧で体系がとらえがたいとされてきている埼玉特殊アクセントを取り上げる。久喜市高年層の複数の話者の発話実態に基づき、音韻論的型と音声学的音調規則という二つの力の張り合い関係の異なりとしての解釈を試みる。実際の音調のゆれのほか、アクセント体系の移行をも説明しうる枠組みであり、注目される。

林・田中論文は、アクセントに止まらず、各研究者が保有する言語調査データを、共有して活用するための仕組みを提案している（『語文』145 から再録）。Web 言語地図システムそのものの整備のほか、データの管理というより微妙で難しい問題にも一定の提案をもって踏み込んでおり、今後のデータ共有の取り組みの核になるものと思われる。なお、調査データ共有については、第3部鎌水論文でも RMS システムの方法について述べられている。

[音声]には、首都圏若年層に見られる新しい現象を報告した久野論文を収める。母音間の「ん」の発音が不安定であり、非鼻音の長音と認識している人が少なくないというこの事実は、久野氏によって初めて報告された。このように気づかれないうちにかなり広まっている新しい非標準的な事象は把握することが難しいが、発生後間もないと思われるので、その発生・伝播の過程を捉えることも可能かもしれない。事実のさらなる把握と、背景について興味を持たれる。

[方言の利用・言語景観] は、言語形式のメッセージとしての利用に見られるような、言語の拡張利用に関する研究である。

亀田論文は、首都圏における方言の地域資源として活用に関する、自治体（広報部署、観光部署、教育委員会）と商工会への悉皆通信調査の報告である。方言への社会的評価への高まりとともに、キャッチフレーズやネーミングへの方言の使用、方言集の編纂等、方言を地域の資源として活用する例が全国で増えてきている。首都圏は、従来、方言への社会的注目が高くないと考えられてきたが、今回の悉皆調査によって現状を把握することができた。首都圏の中でも、神奈川

県が他の地域と異なる採用態度を見せるなど、首都圏内の地域差もうかがわれた。

三井論文は、さらに、東京都多摩地域における「のめっこい」という語にターゲットをしばって、この地域における在来方言の地域資源としての利用の実態と背景を考察したものである。「親しみがある」という、この語の意味の一部だけが特に利用される理由、若年層における「ニセ方言」としての取り入れの予兆など、語誌としての記述を試みた。

田中・早川・富田・林論文（『言語研究』142より再録）は、東京秋葉原の多言語表示に着目し、他地域と異なる多言語化の状況、および、店舗分野の違いによる使用言語の違いを明らかにした。その上でこれを、街を構成する要素と関係するものと位置づけ、地域類型論への広がりを示唆している。本報告書の他の論文が直接扱うことなかった、「全国・世界から人の集まる都市の言語」としての「首都圏の言語」の側面にアプローチした論考として、ここに収録させていただいた。

[教育]では、小学校の国語教育の現場から、小林氏に寄稿（講演録）していただいた。小林氏の在職する福島県の小学校の教育現場では、方言と共通語の問題は、日々の生活と学習の中で常に意識されるものとして取り上げられている。国語教育としての普遍的な課題である「ことばの力を育てる」ということと、東京では意識されることのない「地域のことば」との絡み合いを、豊富なご経験に基づいて具体的に述べている。なお、冒頭にあるように、小林氏は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって現在も避難生活をされており、そのような中での、ゲスト授業、ご寄稿であったことを申し添える。

3. 4 「第3部 研究ツール・アーカイブ・データベース」の概要

本プロジェクトでは、研究会活動と調査研究活動を行うほか、新たな研究につなげるための基礎となる「研究資産の再構築」に取り組んだ。また、特に首都圏若年層の言語実態を把握する調査を行う上で、有効な調査方法を検討し、システムの開発を行った。第3部は、これら、研究の基盤となる活動に関連する論考と紹介である。

鎌水論文は、携帯電話を用いた言語調査システム、Real-time Mobile Survey (RMS) システムの概要と、その開発にいたる調査方法論に関する解説論文である（『国立国語研究所論集』6から再録）。RMSは、若年層を対象とした言語調査において、回答者に負担をかけず、大量の精度の高い回答を得、速やかに集計・処理・地図化を行い、データを蓄積利用する、といった、従来ニーズがありながら実現が難しかった点を幅広く検討し、Web調査等との比較検討を経て、鎌水氏が開発したシステムである。特に、首都圏若年層における言語の地域差の把握、といった、試行錯誤的な調査の繰り返しが予想され、かつ、多人数高密度の分布を得ることが必要な調査において、有効性が見出されている。第1部三井論文、第2部鎌水・三井論文で扱った、「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」は、このシステムを利用して調査、作図を行ったものである。

三井論文（紹介文）は、本プロジェクトの成果公開サイト（<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>）の紹介である。メインコンテンツである、「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」地図と解説、東京のことば研究者インタビュー、首都圏の言語に関する研究文献目録、東京語アクセント資料の4種の資料・データベースについて、内容と作成の経緯を紹介した。

三樹論文は、Web版、冊子版で公開した「首都圏の言語に関する研究文献目録」に採録した論文を対象に研究動向の分析を行ったものである。発表年代、対象地域、言語分野から文献数を分析し、1970年代以降、単一都県を対象とした論文数は横ばいであるのに対し、複数都県を対象とした論文数が増加していることなどを指摘している。

4. 今後に向けて

本報告書におさめた21編の論文は、本プロジェクトの共同研究発表会、各種学会の口頭発表などで発表した内容に基づいているが、学術誌や著書などでは未発表のものがほとんどである。それらは、今後より完成されたものとしてまとめられていくはずである。このような報告書を編むことができたのは、「首都圏の言語」という、多様、多面的で流動性に富む対象の「現在」の解明を目指して共同で研究に臨むことで、各研究者がそれぞれの目から見える「首都圏の言語」を描き出そうとし、それらが交わり始めた結果だと考えられる。

今後の研究の発展のために、この報告書が役立てられることを願うものである。

2014年1月28日

三井 はるみ

首都圏言語研究の視野

目次

はじめに (三井はるみ)

第1部 対象と方法

1. 非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差 (三井はるみ) 1
 - (1) はじめに
 - (2) 「首都圏」の位置と範囲
 - (3) 「首都圏」で話されていることばの性格
 - (4) 首都圏若年層のことばの地域差を探ること
 - (5) 調査の概要
 - (6) 結果の概要
 - (7) 明瞭な地域差
 - (8) 分布域の変化
 衰退／普及／再普及
 - (9) 23区内の言語境界線
 - (10) 非標準形の使用を避ける地域
 - (11) 非標準形から新しい共通語へ

2. 首都圏方言の形成と共通語化 (久野マリ子) 19
 - (1) 首都圏方言について
 - (2) 首都圏方言の特徴
 - (3) 首都圏方言と共通語との違い付録：「新・東京都言語地図」より

3. 「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して (鎌水兼貴) 39
 - (1) はじめに
 新しい世代の方言使用を説明する枠組／研究背景の変化／首都圏構成員の変化／
 - (2) 地域としての「首都圏」

- 東京・首都／旧東京 15 区・東京 23 区／多摩地域・都下／首都圏／
中心・周辺関係からみた首都圏／構成員における「はえぬき」の割合
- (3) 「首都圏の言語」を考えるための観点
標準語⇔共通語／公的⇔私的／方言⇔俗語／意識⇔無意識／理解⇔使用
- (4) 「新方言」「ネオ方言」と首都圏の言語
新方言とネオ方言の違い／中間段階の体系の位置づけ／
首都圏における新方言・ネオ方言／首都圏の中心である東京中心部
- (5) おわりに

4. 【講演】私のとらえたい東京語（飛田良文）…………… 55

- (1) 問題の所在 — 「東京語」の定義の曖昧さ
- (2) 「東京語」に対する意識，東京人としての意識
- (3) 文学作品においても重要視された「東京語」
- (4) 外国人も必要性を主張した「東京語」
- (5) 「東京語」の区域と東京人意識
- (6) 「標準語」・「東京語（＝共通語）」・「東京方言」の捉え方
- (7) 「東京弁」と「東京語」の違い
- (8) 武士言葉が「東京語」へ与える影響
- (9) 標準語（国定教科書）が「東京語」へ与える影響
- (10) 世代差が見られた「東京人意識」
- (11) 「東京語」研究の流れ
- (12) おわりに

質疑応答

第2部 個別研究

[地域研究]

5. 首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布（鏝水兼貴・三井はるみ）…… 73

- (1) はじめに
- (2) 調査概要
- (3) 首都圏若年層における非標準形の分布
非標準形の分布概観／首都圏若年層における非標準形の分布境界
- (4) 使用意識の地域差
使用意識に地域差はみられるか／非標準形カタスの普及経路
- (5) まとめ

6. 飛田良文「東京語調査」の概要
—山手線・青梅線・総武線を中心に— (竹田晃子) 84

(1) 本稿の目的と資料の経緯

(2) 調査の概要

企画立案と調査全体の概要／調査方法 (地点・話者) ／調査項目 (言語意識) ／
調査項目 (言語項目) ／調査結果の集計

(3) 調査結果

東京人意識／日常ことば意識／音韻 (シ／ヒ) : 「東」「人」／
音韻 (ジュ／ジ) : 「新宿」「手術」／アクセント : 「坂」／アクセント : 「心」／
語彙 : スターキ／語彙 : おにぎり／語彙 : かつおぶし／
文法 : 「食べちゃう (食べちゃった)」／文法 : 「起きれなくて」

(4) おわりに

付録 : 飛田良文「東京語調査票」1994-1999 調査項目一覧

7. 埼玉県西部地域における伝統的方言の分布調査の経過報告
—「秩父方言」の広がりと境界— (亀田裕見) 111

(1) 研究目的

(2) 先行研究

(3) 調査概要

(4) 地図例の紹介 —3点に注目して—

東秩父村の位置づけ／児玉郡の位置づけ／文法項目の地図 「～サレル」の分布

(5) まとめ

[全国の中の首都圏]

8. 「全国若者語調査」における言語伝播モデル (鐘水兼貴) 129

(1) はじめに

若者語とは／若者語の地理的研究の意義

(2) 全国若者語調査

調査準備／調査の実施 (調査期間 調査項目 生育地) ／
言語地図の作成 (作図方法 地図の特徴 地図の注意点)

(3) 分析

全国規模の地域差 (関西圏中心の分布 首都圏中心の分布) ／
中心部から周辺部への伝播 (各地方の中心部への普及 大都市間の相互伝播) ／
属性差に含まれる地域差 (男性のみに現れる地域差 女性にあらわれる地域差)

(4) まとめ

若者語の普及モデル／今後の課題

(5) おわりに

9. 関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及の背景（三井はるみ）……………153

(1) はじめに

(2) 前稿で明らかになったこと

(3) 「～てほしい」進出の背景をさぐる観点

(4) 「～てもらおう」の用法の全国的地域差

(5) 受益明示の積極性

「～てもらおう」による受益明示の積極性とは／受益を必ずしも明示しない方言／
受益を積極的に明示する方言

(6) 待遇表現的使用

「～てもらおう」の待遇表現的使用とは／待遇表現的使用の活発な関西・近畿方言／
東京・首都圏方言の場合

(7) 「～てもらおう」の用法の地域差とその変容についてのまとめ

(8) 「～てほしい」の普及の背景としての「～てもらおう」の待遇表現的使用

[アクセント]

10. 【講演】東京・首都圏アクセント研究の課題（佐藤亮一）……………165

(1) 東京アクセントの変化 — 『東京語アクセント資料』（1985）から

(2) 東京アクセントの地域差

(3) 東京アクセントの地域差と世代差 — 『東京語音声の諸相(3)』（1993）から

(4) 方言アクセントの共通語化（東京アクセント化）

名古屋市 1997／宇都宮市 1984／仙台市 1983・福井市 1982／気仙沼市 2006

(5) 関東地方のアクセントと東京アクセントとの関係

(6) 東京・首都圏アクセント研究の今後の課題

質疑応答

11. 小田原市方言のアクセントの古相について（坂本薫）……………187

(1) はじめに

(2) 本稿で用いる表記について

(3) 調査について

調査方法／話者／調査語例

(4) 小田原市方言のアクセント体系

名詞／動詞／形容詞

(5) 古相の保持

三拍名詞の中高型のアクセント／多拍語の頭高型のアクセント／

動詞の同音異義語のアクセント／形容詞の2つの型の保持

(6) まとめ

12. 埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調

—久喜市高年層に見られるゆれとその解釈— (亀田裕見) …………… 199

(1) 曖昧アクセントにおける音調のゆれ

(2) 調査概要

(3) ゆれの実態

(4) 音韻論的型以外の音調規則

(5) 音調をつくる規則とその適用の解釈 —二人の話者を例に—

(6) 「曖昧アクセント」という久喜市アクセントの位置づけ

13. データ統合・共有を目指した Web 言語地図の構築

—成果公開サイト「日本大学文理学部 Web 言語地図」の試み—

(林直樹・田中ゆかり) 【『語文』145 (2013.3) より再録】 …………… 208

(1) はじめに

(2) 「日本大学文理学部 Web 言語地図」概要

(3) 言語地図の描画

言語情報データ／話者情報データ／鉄道駅データ

(4) 言語データの統合・共有

試行データ／データ形式の統合

(5) 言語データの管理

参加登録／管理画面による言語データの管理

(6) Web 言語地図を利用する際の注意点

(7) 今後の課題

[音声]

14. 首都圏方言若年層の音声の変種 (久野マリ子) …………… 219

(1) 首都圏方言大学生が話している音声の実態

(2) 調査項目

(3) 結果

「雰囲気」／「全員」／「原因」／「定員」と「店員」／「会員」／「体育」／「女王」

(4) この調査からわかること

[方言の利用・言語景観]

15. 首都圏における方言の地域資源としての活用
— 通信調査の結果から — (亀田裕見)226

- (1) 研究目的
- (2) 調査の概要
- (3) 事例数の特徴
- (4) 使用される方言の特徴
- (5) 意識調査の特徴
- (6) 首都圏の方言資源利用のタイプ分け

16. 首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例
— 多摩地域の「のめっこい」を例として — (三井はるみ)231

- (1) はじめに
- (2) 在来方言の地域資源としての利用
- (3) 「のめっこい」の意味・用法
多摩地域の方言集から／多摩地域の市町議会会議録から／
「のめっこい」の意味・用法と方言利用
- (4) 地域資源としての方言利用の動機
- (5) 接触機会の増加と用法の変化の兆し
- (6) 首都圏若年層の現状と今後の動向
- (7) 地域語の観点から見た首都圏の言語

17. 街のなりたちと言語景観 —東京・秋葉原を事例として—
(田中ゆかり・早川洋平・富田悠・林直樹) 【『言語研究』142(2012)より再録】
.....241

- (1) はじめに
- (2) 秋葉原言語景観調査概要
- (3) フロアガイドからみた秋葉原
フロアガイドとは／フロアガイド調査概要／フロアガイド調査結果／
フロアガイド追加調査／フロアガイド調査のまとめ
- (4) メッセージからみた秋葉原
メッセージの定義と調査概要／メッセージ調査報告と分析
メッセージ免税店追加調査／メッセージ調査のまとめ
- (5) Web上の店舗サイトからみた秋葉原
Web調査概要／Web調査結果／Web調査のまとめ
- (6) おわりに

[教育]

18. 国語教育と方言（小林初夫）……………257

- (1) はじめに
東日本大震災の発生と原発事故による避難／方言への関心と取り組み
- (2) 国語教育の現状と課題 ―国語の授業を考える―
国語の授業は好きですか？／変わらない国語の授業／
ことばの力を育てる授業になっていない／「伝統的な言語文化」＝古典か？／
国語教育に方言を取り入れる必要性／「聞く」ことを鍛える／
『学習指導要領』に対応させた方言の扱い方
- (3) 小学校での国語の授業の実際
「しっぽのやくめ」の授業例／ことばの力は育っているか／
ことばを大事に考える授業とは／国語の授業で最も大切なこと
- (4) 方言教材の必要性
ことばのゆれ／方言を調べよう
- (5) これからの国語教育
子どもたちの将来のことばを形作る教育／地域素材を見つける ―学校用語の地域差／
方言調べは自分の耳で聞いて／方言を扱った授業の実際

第3部 研究ツール・アーカイブ・データベース

19. 首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践（鎌水兼貴）

【『国立国語研究所論集』6（2013.11）より再録】……………279

- (1) はじめに
- (2) 首都圏の言語について
「首都圏」の範囲／首都圏若年層の言語について／
首都圏若年層における地理的調査の必要性
- (3) 首都圏若年層に対する効率的な調査
調査コストを低くする必要性／授業時を利用した大学生に対するアンケート調査／
回答意欲を高める調査／授業を妨害しない調査／授業で活用可能な調査システムの必要性
- (4) 言語地図形式による回答結果の自動出力
言語地図作成の工程／言語地図作成の自動化／回答データ入力の自動化
- (5) 携帯メールを用いた調査
インターネット経由での回答データの収集／WEB調査と携帯メール調査の比較

(6) RMSシステム	
RMSシステム概要／各段階の説明／複数の調査の組み合わせ	
(7) RMSシステムを利用した調査例	
関東方言形カタス／カタスのRMS調査／調査結果／	
授業におけるRMSシステムの利用	
(8) おわりに	
20. 「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト紹介 (三井はるみ)	306
(1) はじめに	
(2) プロジェクト成果公開サイトの概要	
(3) 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する研究	
(4) 「東京のことば」研究者インタビュー	
内容／企画の経緯／公開部分の選定	
(5) 首都圏の言語に関する研究文献目録	
内容／作成の経緯／補充・改訂	
(6) 東京語アクセント資料	
(7) おわりに	
21. 「首都圏の言語に関する研究文献目録」からみる研究動向 (三樹陽介)	316
(1) はじめに	
(2) 文献目録の作成方針	
(3) 文献目録「論文編」の概要	
全体像／地域別件数／地域・年代別, 文献数／言語分野別, 文献採録比率	
(4) まとめと今後の展望	
研究発表会開催記録	325

第1部
対象と方法

非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差

三井 はるみ¹

(国立国語研究所)

1. はじめに

本稿は、2012年7月から11月にかけて、当時の共同研究者5名（三井、鎌水、久野、亀田、田中）が共同で行った、非標準形の使用と意識に関する首都圏大学生アンケート調査の結果の一部を報告するものである。調査の概要と結果の地図は、プロジェクト Web サイト内「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」(http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/1_summary.html)で公開している。また本稿は、Urban Language Seminar 11th（2013年8月17-18日、広島市文化交流会館）における口頭発表、三井はるみ・鎌水兼貴・久野マリ子・亀田裕見・田中ゆかり「非標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差」(“A Study of the Geographical Distribution of Lexical Variation among Younger Generation Speakers in the Tokyo Metropolitan Area”)を元に、三井が原稿化したものである。

なお、同調査のうち、本稿で扱わない、言語意識の地域差に関する調査結果については、本報告書第2部の鎌水論文を参照していただきたい。

2. 「首都圏」の位置と範囲

初めに、対象地域である「首都圏」の位置および、「首都圏」で話されていることばの性格について確認する²。

「首都圏」は、日本の首都東京を中心とする都市圏である。「首都圏」の範囲について、行政用語等としては様々な定義があるが、「言語圏としての首都圏」に関しては、田中ゆかり（2010:6）の提案がある。これは、首都圏を「通勤・通学圏に代表される日常的な言語接触が生じうる範囲」と捉える考え方で、具体的な範囲は、東京駅から約70キロ圏、ほぼ、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の1都3県と重なる地域とされている。鉄道網に大きく依存した日常的な人の移動範囲は、現代の東京都市圏形成の大きな要因であり、後述のとおり、言語分布の面からも、一定の妥当性があるものとして支持される。そこで本稿ではこの提案を採用し、その上で、周辺部との影響関係も視野に入れるために、1都3県とその周辺部を加えた地域を扱うこととした。

次に、「日常的な言語接触が生じうる範囲」について、社会調査データで見ておく。

図1は、国勢調査のデータに基づく、東京都区部（23区）への通勤・通学人口の地図である。各地点に二つ並んだ●のうち、右側の●（原図では赤）が、直近の国勢調査である、2010年の数

¹ mitharu@ninjal.ac.jp

² この点に関しては、第1部収録の鎌水論文「「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して」が、より包括的な論点整理を行っている。

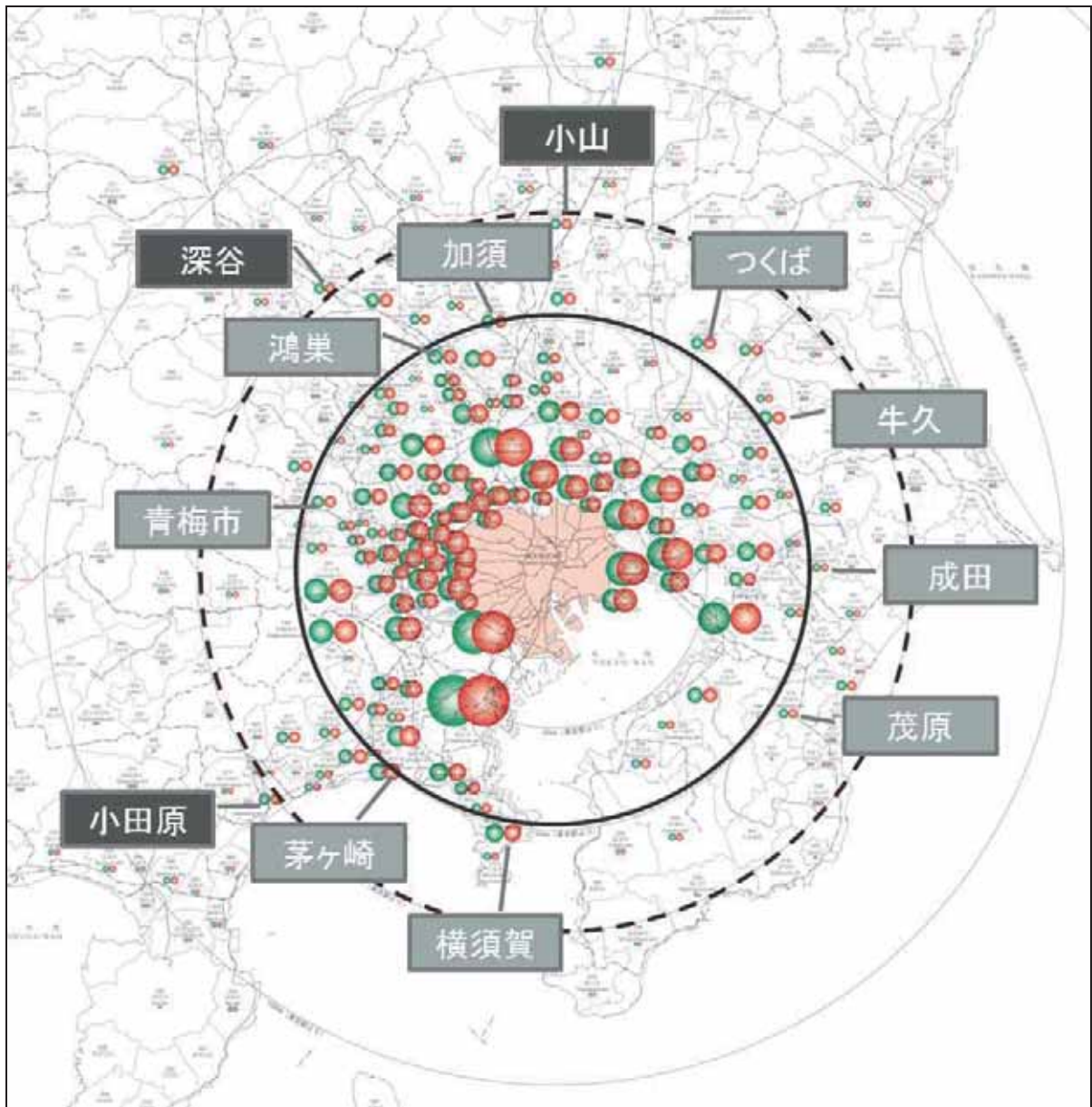
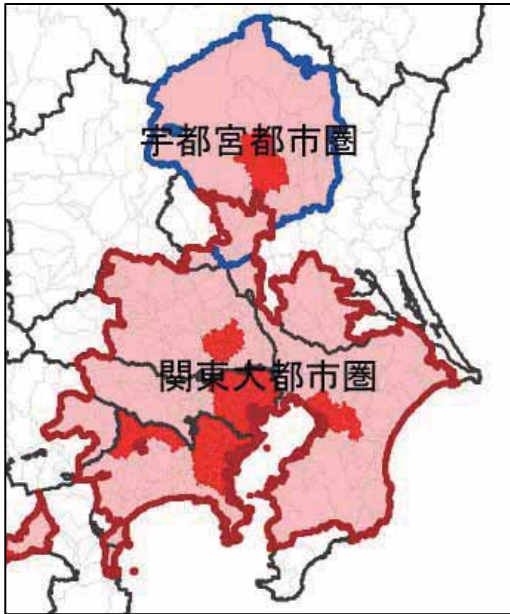


図1 東京都区部への通勤・通学人口（平成12年＝各地点左●・22年＝右●）
 （総務省統計局日本統計地図より、
http://www.stat.go.jp/data/chiri/map/c_koku/dtukin22/index.htm）

値を示している。通勤・通学人口の多い、つまり●の大きさの大きい地域は、実線で囲んだ範囲の内側にほぼ収まる。この実線の円は、東京駅から50キロ圏を示す。図中に、50キロ圏のライン上にある市の名称をいくつか表示した。50キロ圏のだいたいのイメージがつかめよう。一方、50キロ圏より外側にも、やや通勤・通学人口の多い地点が見られる。小田原、深谷、小山といった、東海道本線、高崎線、東北本線等の主要鉄道路線沿いの市がそれで、これらはおおむね、点線で示した70キロのライン上に位置している。鉄道アクセスのよい場所であれば、70キロ圏くらいまで、東京への通勤・通学圏となっていることがわかる。

図1は実数によるものだが、これを、自治体ごとの人口に対する割合で示すと、図2のように



なる。図中の「関東大都市圏」（薄い色（原図ではピンク色）で塗りつぶされ、太線（原図では濃い赤色）で囲まれているエリア）が、1.5%通勤通学圏、すなわち、東京 23 区、横浜、川崎への通勤・通学者が、15 歳以上の人口の 1.5%以上を占める市町村である。やはり、東京駅から約 70 キロ圏、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の 1 都 3 県にほぼ重なる。²

以上のような社会的データは、「東京駅から約 70 キロ圏」、「東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の 1 都 3 県」を、概括的に「日常的な言語接触範囲」として扱うことのできる可能性を示唆していよう。³

図2 1.5%通勤・通学圏（平成 22 年）
 （総務省統計局「平成 22 年国勢調査大都市圏・都市圏全国図」より、
http://www.stat.go.jp/data/chiri/map/c_koku/daitoshi/index.htm）

3. 「首都圏」で話されていることばの性格

東京首都圏は言うまでもなく、全国政治・経済・文化の中心地である。その活動に関与して、人口は多く流動性が高く、物と情報の流通が盛んで、この地域で発生した新たな事象は、しばしばほどなく全国に波及する。言語も例外ではない。

このような首都圏の言語を捉えるにあたっては、いくつかの層、あるいは、面を想定することが妥当、との考え方が、これまで、東京、および首都圏のことばを研究対象とする複数の研究者によって主張されてきた。加藤（1970）、野村（1970）、田中（1983）、飛田（1992）らである。

加藤（1970）は、総武線・常磐線沿いの「東京の東側」の郊外地帯（千葉県）に住む人を次のように分類した。

- (イ) 昔から住んでいる土着の人
- (ロ) 東京から“移住”した人
- (ハ) 東京のつもりでたまたま郊外に住んでいる人

移住者のうち、(ロ)は、「大震災、戦災、戦後の混乱、また最近では過密から逃れて」移住した人で、土地に対する愛着を持っているが、(ハ)は、「東京に実家があるが、新家庭を持ってここに住

² 実数と比率の違いは、自治体の規模の違いを反映する。50～70 キロ間地帯では、実数はさほど多くなくても、50 キロ圏内より人口の少ない自治体が多いので、比率はある程度高くなる。このため 50～70 キロ間地帯からの通勤・通学者については、地元と東京中央部とで、捉え方が異なる可能性がある。地元では「ここから東京に通う人も意外にいる」という意識であるのに対して、東京中央部からは「そこ（そんなに遠く）からも通うのか」と捉えられている、というように。これは 50 キロ圏内と 50～70 キロ間地帯で、都心部への通勤・通学者の社会的位置づけが異なることにもつながるが、このような首都圏内部の構造的な多様性と、言語との関係を探ることは、今後の課題と考えている。

³ ここでは、首都圏の範囲付けに際して、人の日常的な移動に伴って言語接触が生じる、という点を重視したが、他の観点からの検討も可能であろう。例えば、地域社会の都市的な性質を見る一つの指標として、住民の出身地構成、さらにはその一つに現れとしての、自治体の首長、市区町村議員の出身地別構成なども有効であると考えている。

んだとか、全国各地から東京へ流入したが、たまたまここに住むことになった」人で、住所は千葉であっても、そこは東京であると意識しており、土地のことに関心がない、という違いがあるとし、後者が「現在どんどん増えている」とした。

野村（1970）は、「都市としての東京の性格や、東京人の言語意識を併せて考え」、現代東京語の構造を、次のような三層の構造として捉えた。

- (1) 家族や親しい友人などとの日常の会話。（東京弁を含むそれぞれの母語である方言が、かなり自由にあらわれる）
- (2) 社会的な活動を行なう時の、ややあらたまりの気持を持つことば。（相手との間に一定の距離が置かれる。敬語の問題は大部分ここに含まれる）
- (3) 特定の個人を対象としない、公共的なことば。（放送のことばや演説のことば）

非ネイティブを「現代東京語」の話し手に含め、パーソナルコミュニケーションとマスコミュニケーション、日常と改まりといった、言語の社会的運用面に広く目が向けられている。

野村（1970）でも踏まえられている、田中（1983:35）は、「東京語は三つの顔を持っている」として、

- (1) 東京人の日常語（各地の方言に当たるもの）
- (2) 全国各地の人々が寄り集まる植民地・東京，大都会・東京の性格を反映した，植民地語ないしは都会語
- (3) いわゆる標準語をめざして，日本の公用語として，かなり意識的に手を加えられ続けてきた側面

の三つの面を挙げている。ネイティブの日常語（(1)）をベースに、「都会語」「公用語」といった、東京および東京語の社会的位置を反映した側面を指摘している。

飛田（1992:10）は、近代語研究の立場から、東京の言葉の性格として、

- (1) 都会性
- (2) 文学性
- (3) 標準性

を挙げた。そしてそこから、「東京」と「東京人」の範囲を導き、「東京」は、時代を下るにしたがって拡大している「江戸文化を受けつぎ発展させてきた都市部」，「東京人」は，都市部「東京」に住み，移住者を含めて東京人意識を持つ者，とした。

これらの捉え方を踏まえ、本稿では、地域の言語として見た場合、首都圏の言語は少なくとも、三つの層を含んでいると考える。

- (1) その土地に生まれ育った人の日常のことば
- (2) 全国・世界から人の集まる都市のことば
- (3) 標準語の基盤となる基準性のあることば

(1)は、他の地域の方言と同様の側面、(2)は、都市言語“Urban Language”としての側面、(3)は、主として他地域の人々や、放送・教育など公共性のある言語表現を求める立場から要請され

る側面である。⁴

この全体像の把握はなかなか難しく、これまでの首都圏地域の言語研究は、それぞれの比重で、この三つの層の解明を目指してきたと行うことができよう。

今回の報告は、(1)の「その土地に生まれ育った人の日常のことば」という面を切り口とし、(2)(3)の側面との関わりを探ることを目的としている。

4. 首都圏若年層のことばの地域差を探ること

首都圏若年層のことばは、一般的には、新現象を先取りし変化を主導する、というポジションにあると考えられる。逆に、「その土地に生まれ育った人の日常のことば」、すなわち方言という面はあまり注目されることがない。この地域のことばは、もともと共通語との違いが小さいことに加え、共通語化が早く徹底的に進んだ。意識の上でも東京のことばを志向する傾向が強い。その結果現在の若年層のことばには、目立った俚言も地域差もなく、全域同じようなことばであって、むしろ個人差や場面差が大きい、と意識されている。

しかし、ことばの地域差が生まれる原理的背景を考えると、いかに人や情報の移動や流通が盛んであるとは言っても、一人一人の個人の日常的な移動・接触の範囲は限定的なのであり、特に、主として話し言葉で用いられる非標準形が人的接触により伝播する状況は残されていると考えられる。実際、高度経済成長期後の1980年代には、井上史雄（1985 他）によって、東京新方言の存在が指摘されている。

そこで、「首都圏言語」プロジェクト共同研究者グループでは、あらためて、現在の首都圏若年層の言語に地域差はあるか、あるとしたらどのような様相で存在しているか、ということ明らかにしたいと考えた。

しかし、それをどのように調査するか、という問題がある。地域差を明確に捉えるためには、個人差等の誤差ではないと判断できる程度に高い密度での分布調査が必要である。また、どのような項目に地域差があるか、あまり予想のつかない段階で調査を始めるので、いろいろな項目をまず調べてみて、違いのありそうな項目が見つかったら、さらに地点を増やして共同で調査を行う、というような、探索的な進め方が望まれる。調査と集計・地図作成の労力、また、回答者のモチベーションなど、様々な面での阻害要因が次々と浮かぶ。

そこで私たちのプロジェクトでは、このような調査を実現するために、携帯電話を用いた言語調査システム、“Real-time Mobile Survey System”（略称：RMS）を開発した。開発者は共同研究者の鎌水兼貴氏である。

RMSは、調査協力者にメールで回答を送信してもらい、それをサーバ上で処理して、数分後に分布地図として出力する、というシステムである（調査用紙で回収し、その回答を入力・表示することもできる）。大学の教室で学生に回答してもらうことを前提として開発されており、調査場所が Web 閲覧できる教室であれば、メールで送信した回答を、数分後に、分布地図として、

⁴ (3)は、野村（1970）の(3)、田中（1983）の(3)、飛田（1992）の(3)に近いが、実態そのものを指すだけでなく、ゆれや変化、文体差、多様性を含む自然言語でありながら、「標準語」の具現に最も近いという「基準」としての眼差しを受ける、というありようにも注目している。

回答者自身が見ることができる。本稿で提示する分布地図は、RMSシステムで出力したものである。

RMSシステムについて詳しくは、解説論文である、鎌水兼貴（2013）「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」（『国立国語研究所論集』6）（本報告書第3部に再録）を参照していただきたい。

5. 調査の概要

2011年度から10ヶ月間程度、RMSシステムを用いた試行調査を行い、その結果を踏まえて、統一調査票による調査を行った。調査票は次ページに挙げる。

調査の概要は以下のとおりである。

目的 首都圏若年層の言語的地域差の把握

内容 非標準的な言語事象の使用と意識に関するアンケート調査

回答者 首都圏8大学に在学する大学生約700名

うち、首都圏1都3県出身者 約500名

実施年月 2012年7月・11月

調査項目 調査票を次ページに示す。

- ・言語事項 38項目（うち7項目で使用意識を質問）

新語・新用法，新旧方言形，若者ことば，アクセント 他

※先行調査のある語形を含む

語形の使用については、「言う」「聞いたことがある」「聞かない」の三者択一回答

- ・メディア接触等に関する言語生活項目
- ・フェイス項目

方法 教室における集合調査。携帯メール，または，アンケート用紙で回収

調査者 三井はるみ，鎌水兼貴，亀田裕見，久野マリ子，田中ゆかり

表示 5～15歳の最長居住地を大字レベルで地図上にプロット

調査内容の検討は、調査当時の共同研究者5名（三井、鎌水、亀田、久野、田中）が共同で行った。調査した8大学は東京都と埼玉県に立地する。そのため、千葉県と神奈川県の手回答者が少ない。これを補うため、その後、神奈川県に立地する大学で補充調査を行った（現在整理中）。本稿では、この調査のデータに、前後に行った小調査で得られたデータを加えて検討する。

調査項目には、過去の状況と比較する目的で、井上（1983，1984，1985a，1985b，1988），柴田・馬瀬・佐藤（1985）等の先行調査で取り上げられている語形を含めた。

結果はRMSシステムで集計し、回答者が言語形成期に最も長く居住した地点を、ほぼ大字のレベル（「東京都立川市緑町10-2」なら「緑町」，「東京都北区西が丘3-9-14」なら「西が丘」）で地図上にプロットして示した。なお、この後に示す地図表示には、上述のとおり、別の調査で得たデータが含まれているので、総地点数は700を上回る。

ことばのアンケートのお願い

2012年7月

以下のことばに関する意識についておたずねします。欄にチェックを、()欄に記述をしてください。

授業の解説以外に聞いたことがない単語については「聞かない」と回答してください。回答は、個人が特定されない形で集計処理されます。「最長居住地」の回答を元にして地図を作成しますが、誰がどこにいるかといった利用はしません。

チェック例 a a x a チェックは内に入れて下さい

1. カタス (片付ける)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

2. モス (燃やす)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

3. パナナムシ (ツマグロオオヨコバイ (黄色い小さな虫))

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

4. ダイジ (大丈夫)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

5. アオタン (青あざ)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

6. ヨコハイリ (割り込み)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

7. ズルコミ (割り込み)

- (1) 使用するか (a, b, c を選択) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない わからない
- (2) どのくらいの頻度で使うか (7段階評価) 低い←1 2 3 4 5 6 7 →高い
- (3) どの範囲に通じるか (7段階評価) 身の回りだけ通じる←1 2 3 4 5 6 7 →誰にでも通じる
- (4) どんなときに使えるか (7段階評価) 特定のときだけ←1 2 3 4 5 6 7 →どんなときでも
- (5) どのくらい改まっているか (7段階評価) くださった言い方←1 2 3 4 5 6 7 →改まった言い方

8. [イ]チゴ (イを高く発音する)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

9. コ[コ]ロ (2つ目のコを高く発音する)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

10. アルゲダ (ありそうだ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

11. アルッテ (歩いて)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

12. アンマ (あまり)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

13. 食堂イクベ (食堂に行こう)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

14. イットキアル? (行ったことある?)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

15. ウザッタイ (不快だ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

16. 自転車のウラ (自転車の後ろ)

a 言う b 聞いたことがある c 聞かない

17. エゲツ (あからさまにひどい) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
18. シヤ (視野) (~もありだ) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
19. シレル (知ることができる) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
20. スルナシ (するな) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
21. センヒキ (定規) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
22. ソースット (そうすると) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
23. ソースント (そうすると) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
24. ソーナン? (そうなの?) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
25. ソレナ (そうだね) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
26. ダベ? (だろ?・でしょ?) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
27. チガカッタ (違った) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
28. チガクテ (違って) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
29. 先生チャウ (先生ではない) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
30. ノセレナイ (乗せることができる) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
31. モヤイ (性格が暗い) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
32. ヤノアサツテ (3日後・4日後) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
33. ユーテ (そうはいつでも) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
34. ワリカシ (わりと) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
35. ワンチャン〜アル (もしかして〜かもしれない) a 言う b 聞いたことがある c 聞かない
36. イカナイデシタ (行きませんでした) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい
37. 髪キラナイ? (髪切ったんじゃない?) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい
38. ノメレナイ (飲めない) a おかしくない b ややおかしい c かなりおかしい

39. 日常でよく利用するメディアを全て選択してください

- a テレビ b ラジオ c 新聞 d マンガ雑誌・単行本 e マンガ以外の雑誌 f マンガ以外の書籍
g パソコン h 携帯電話 (スマートフォン以外) i スマートフォン j タブレット端末 k. なし

40. ふだんよく使うもの、よく見るもの全てを選択してください

- a YouTube b ニコニコ動画 c 2ちゃんねる d twitter e Facebook f ミクシィ
g GREE h モバゲー i なし

41. 都心(山手線の周辺・内側)に行くことがありますか(通学を除く。都心在住者は外出先として) a あまり行かない b よく行く c いつも行く

42. 外出時に関西弁を聞くことがありますか(大学内及び、自分・同居家族の関西弁を除く) a あまり聞かない b よく聞く c いつも聞く

43. 自分の話すことばは何だと思いますか。(1つだけ選択。その他にチェックした場合はカッコ内に自由記述)

- a 標準語 b 共通語 c 東京方言 d 関東方言 e その他→()

44. 人と話すときに方言が出ることを気にしたほうがよいと思いますか。

- a 気にせず方言のまま話せばよい b なるべく共通語になおした方がよい c 場合による

45. 方言が使えたらいいと思いますか。 a すでに使える b 使えるようになりたい c 使えるようになりたいとは思わない

46. 問47のa~yの25語のうち、ふだん、いくつの語を使いますか。(bに続いて語数(1~25)を記入)(例:10語使用 → b10)

- a ひとつもない b 1つ以上 → () 語

47. 以下のa~yの25語のうち、よく使う語を、最大5語チェックしてください。

- a アニ(何) b アメンボー(氷柱) c ウツチャル(捨てる) d オコサマ(蚕) e オッペス(押す)
f カテル(仲間に入れる) g カマギッチョ(カマキリ) h カンマス(かき回す) i キナイ(来ない) j ケナルイ(うらやましい)
k ケンド(けれども) l コレキリナイ(これしかない) m コワイ(疲れた) n セナ(兄) o ソーダッペ(そうだろう)
p ソラ・チク(嘘) q タカカンペー(高いだろう) r タツペ(霜柱) s タマゲル(驚く) t テングルマ(肩車)
u トーナス(南瓜) v ドコイクエ・イクイ(どこに行く?) w ヌクトイ・ヌクイ(暖かい) x ハー来た(もう来た) y ヤマサ(山へ)
z よく使う語はない

最後にご自身について a~k についておたずねします。該当しない欄は空欄でかまいません。(問 b, c, i はありません)

a. 5~15歳までで一番長く居住した場所 (地図にするため、ある程度の詳細な生育地が必要ですが、住所まで細かい必要はありません)

例) 東京都西多摩郡瑞穂町大字箱根ヶ崎 2335 ←「2335」は不要

埼玉県さいたま市浦和区常盤 6-4-4 ←「6-4-4」は不要

※留学生の方は、国名と省・道・県・州名を教えてください。

()

d. 5~15歳の間に引越した回数 ()回

e. 現在住んでいる場所(郵便番号でも可。市区町村まで) ()

f. 父親の出身地(市区町村まで) ()

g. 母親の出身地(市区町村まで) ()

h. 配偶者の出身地(市区町村まで) ()

j. 性別 男 女 k. 19 () 年生まれ

6. 結果の概要

回答を調査項目ごとに地図上にプロットし、それぞれの地理的分布を概観すると、地域差の読み取れない項目も多いが、いくつかの項目には明瞭な地域差が見出された。この調査で明らかになった、首都圏若年層の言語の地域差の傾向をまとめると次のとおりである。

- (1) 明瞭な地域差が認められる言語項目がある。
- (2) 過去の調査報告と比較して、分布域に変化がみられる。
 - ① 衰退 ② 普及 ③ 再普及
- (3) 東京 23 区の北東部（下町地域）と南西部（山の手地域）の間に、大きな言語境界が存在する。北東部は埼玉県・千葉県と、南西部は東京都多摩地域・神奈川県と連続性がある。
- (4) 南西部の一部は非標準形の使用を避ける傾向がある。

(1) は、地域差が薄いと見られていた当地域において、若年層の言語的地域差の存在を面的な分布として明らかにした点で、新たな知見である。ただし、明瞭な分布を示さない項目もあるので、それらを含め、今後、統計的手法を用いるなど、他の角度からの分析を検討する必要がある。

(2) は、通時的な視点で、主として 1980 年代に行われた先行調査と比較した結果、多くの語形に分布域の変化が認められたものである。その変化には、「①衰退」「②普及」、それから、いったん衰退しかけたものが再び広がるという「③再普及」のパターンがある。この他に「維持」というパターンがありうるが、先行調査との調査方法の違いにより、「分布に変化がない」ということを積極的に判定するのは難しかった。

(3) は、共時的な視点で、東京 23 区の中の北東部と南西部の間に大きな境界が認められた。北東部は「下町」、南西部は「山の手」、と言われることもあるエリアである。北東部は埼玉県・千葉県と、南西部は東京都多摩地域・神奈川県と連続性があり、全体として、首都圏が二分される。現代若年層の言語使用に関して、東京 23 区内に境界が存在するということが新知見である。

(4) として、まだ見通しの域とも言えるが、東京都内の一部地域には、非標準形の使用を避けるとみられる傾向がうかがわれる。首都圏の中に、非標準形採用への態度が異なるエリアが存在するとすると、「標準語の基盤言語」の実体を解明する上で、重要な手がかりになるものと考えられる。

以下、(1)～(4)のそれぞれについて、例を示しながら説明する。

7. 明瞭な地域差

最初に明瞭な地域差の認められる例を挙げる。

図 3 は、草むらなどに生息している黄色い 1 cm くらいの小さな虫を「バナナムシ」と言うかどうか、の地図である。正式名は「ツマグロオオヨコバイ」。地図を見ると、●で示した「言う」は、東京 23 区西部から多摩地域、および、それと接する埼玉県、神奈川県に存在し、はっきりとした東京中心の分布を示す。既刊の方言集には記載がなく、「現代の東京方言」と言える。

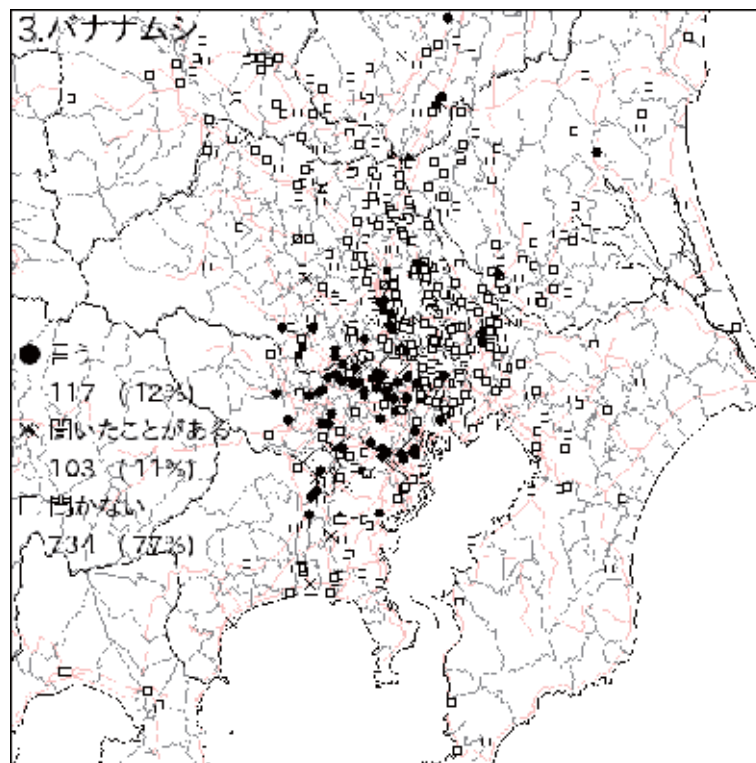


図3 バナナムシ（ツマグロオオヨコバイ）

8. 分布域の変化

次に、過去の調査報告と比較して分布域が変化した例を挙げる。

8. 1 衰退

図4は、「燃やす」という意味の「モス」という言い方の地図である。かつては東京中心部でも、むしろ「モヤス」よりも優勢であった語形だが、現在の若年層では、□の「聞かない」が特に中心部では優勢になっている。全体として、中心部に「聞かない」、周辺部に「聞いたことがある」、そしてさらに外周部に「言う」が多い傾向にあり、この語形の衰退が、首都圏中心部から外周部へ向けて進行していることがわかる。（退縮の周圏分布）

1980年代の調査報告（河崎・井上1983，井上・荻野1984，井上1988＝図5）では、高年層は、首都圏全域で使用率が高く、若年層でもやや使用率が減少する程度であった。この30年間に衰退が顕著に進んだことがわかる。

8. 2 普及

逆に、分布が広がった例がある。

図6は、並んでいる列などへの「割り込み」という意味の「ヨコハイリ」の地図である。●の「言う」は、神奈川県と東京23区西部・多摩地域、および外周部に広がっている。

1980年代の神奈川県と東京都での調査報告（井上1988＝図7）では、高年層はほとんど「ヨコハイリ」を使わないのに対し、若年層では、神奈川県全域で「ヨコハイリ」が優勢になり、東

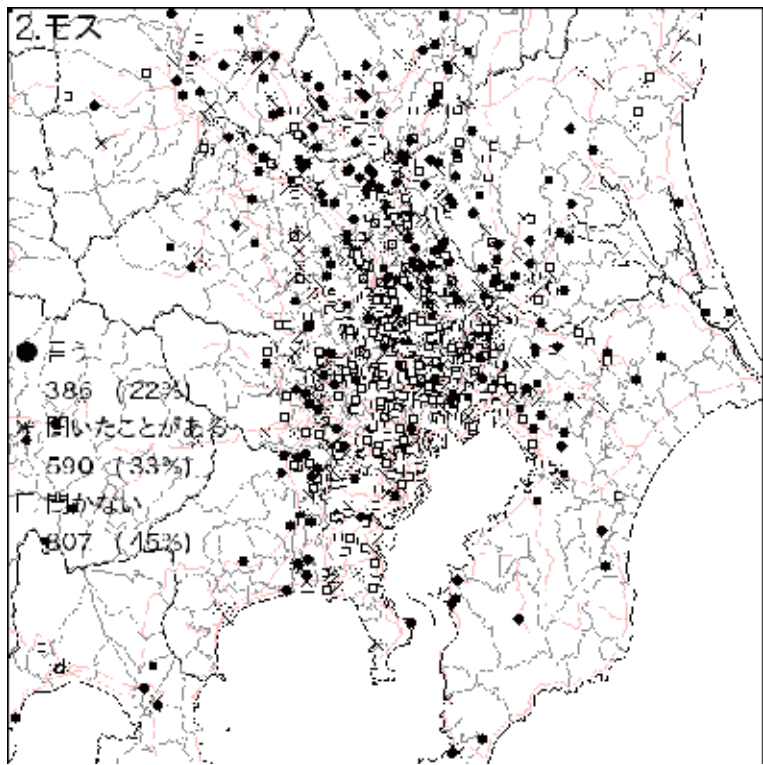


図4 モス (燃やす)

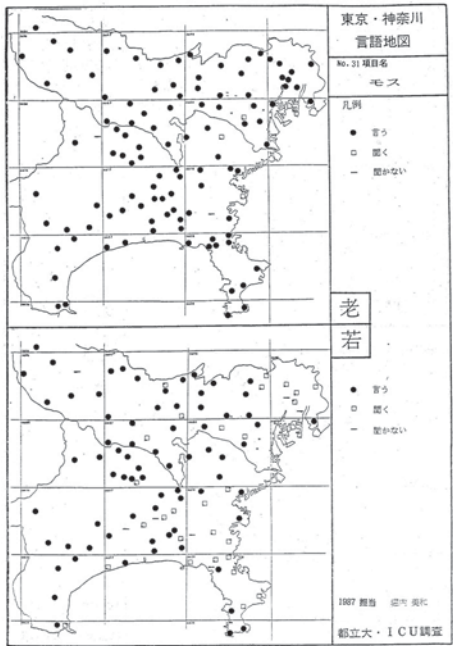


図5 モス 1987 調査
(『東京神奈川言語地図』)

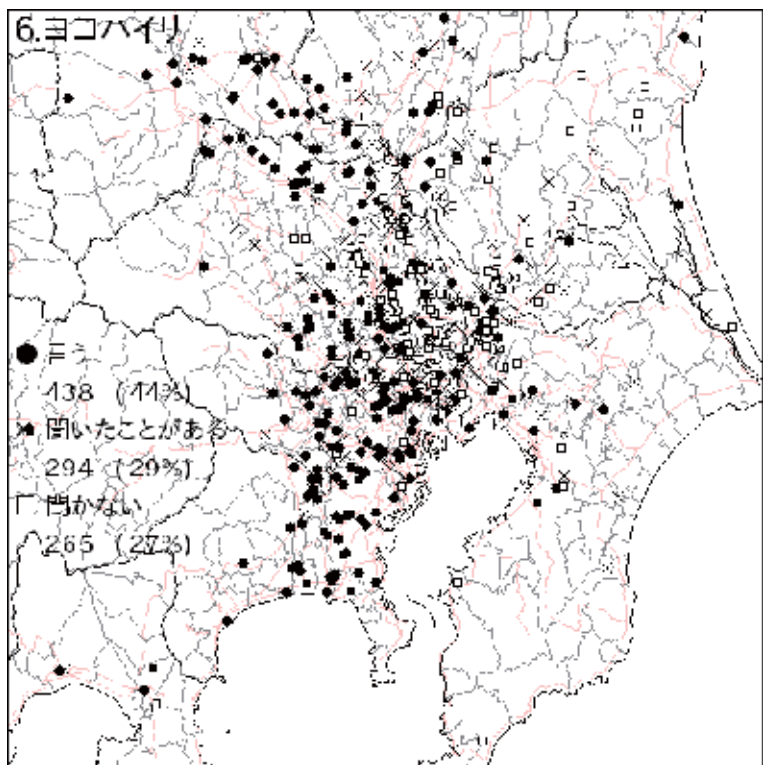


図6 ヨコハイリ (割り込み)

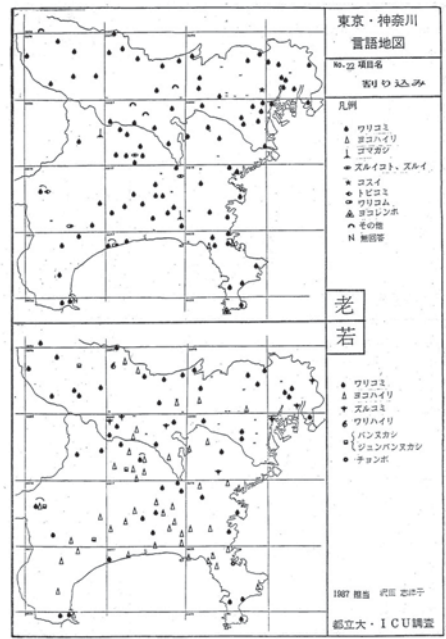


図7 割り込み 1987 調査
(『東京神奈川言語地図』)

京にも散見されていた⁵。今回は、東京都内の使用地域がさらに広がり、首都圏外周部まで及ぶ。なお、東京都北東部と埼玉県南西部には、「ヨコイハイリ」があまり浸透していない地域がある。この地域には、図8に示したように同じ意味の別の非標準形「ズルコミ」が使用されていて、「ヨコハイリ」と「ズルコミ」は、ちょうど相補分布をなしている。

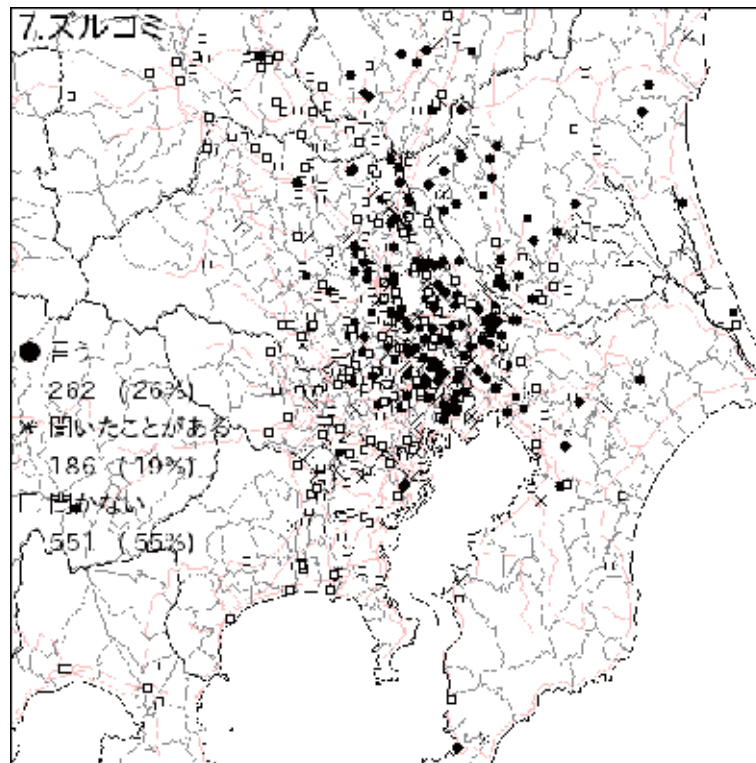


図8 ズルコミ (割り込み)

8.3 再普及

分布が広がった語形の中には、一旦衰退しかかったものが、再度勢力を強めた例がある。

図9は、「片付ける」という意味の「カタス」の分布図である。ほぼ全域に「言う」が広がっている。

「カタス」は、1980年代の調査では、地域差について、首都圏北東部、つまり、23区東部から千葉県・埼玉県にかけて多く使用され、首都圏南西部、つまり、23区西部から多摩地域・神奈川県にかけては使用率が低いことが報告されている（河崎・井上 1983:203=図10, 荻野・井上 1984:385）。また、高年層に比べて若年層では使用が減少し、衰退傾向にあった（荻野・井上 1984:112-113, 東京都教育委員会 1986:266-267, 井上 1988:53）。

今回の調査では、30年前にうかがわれた衰退の方向はまったくうかがわれない。30年前の地域差の傾向を残してはいるものの、全域で使用が増加している。「カタス」は再普及したものと見られる。

⁵ 同時期の調査である井上・荻野（1984）では、特に中学生で、「ヨコハイリ」が近畿以北に広く分布する。

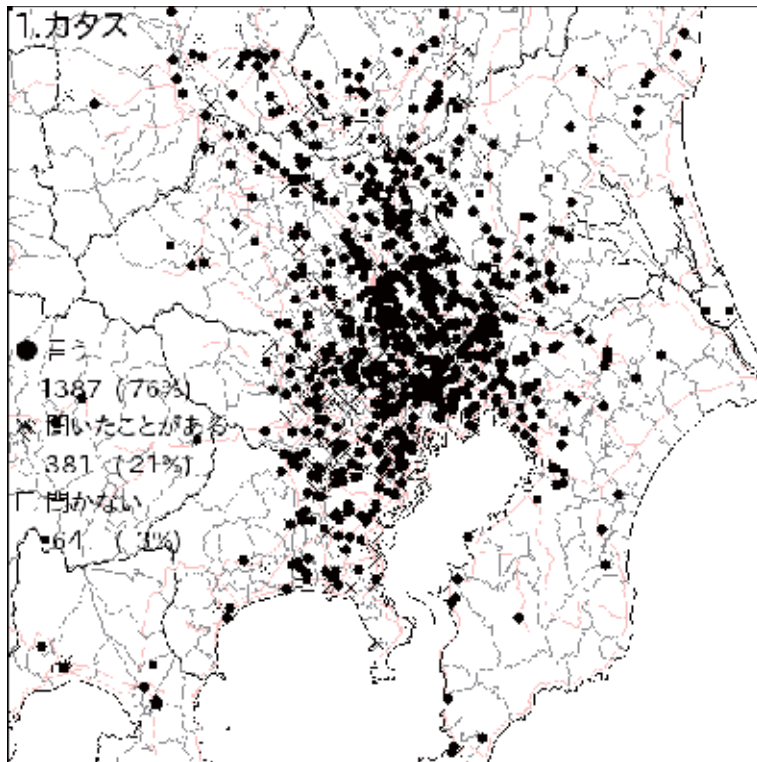


図9 カタス (片付ける)

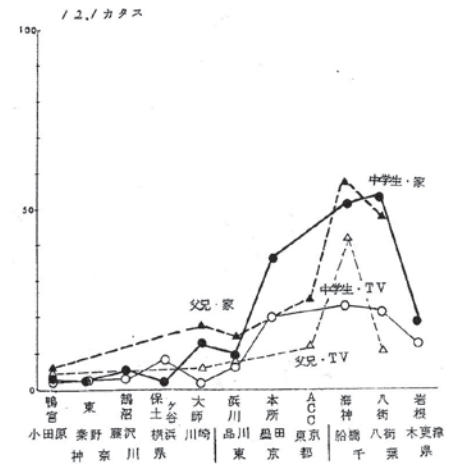


図10 カタス 1982 調査
(河崎・井上 1983)

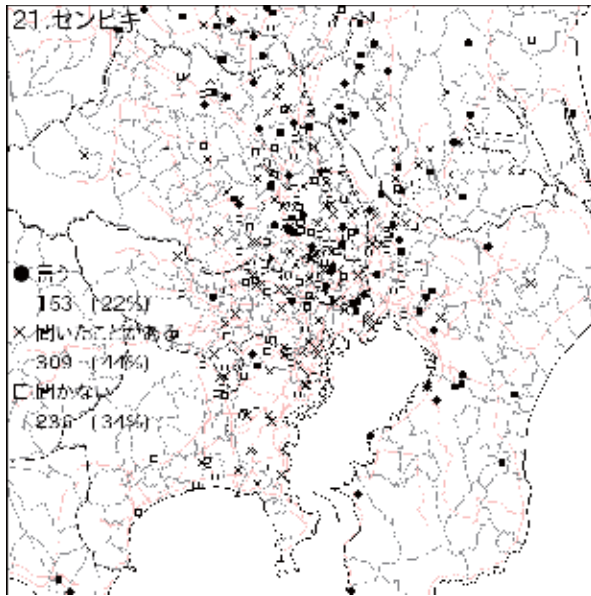
「カタス」の再普及は、1990年代の千葉県松戸市の調査でその兆しが現れていた（早野 1996:61-66）。今回その傾向が、首都圏全域に広がっていることが確認された。再普及のきっかけについて早野は、「高年層の使用するカタス（松戸伝統方言）と若年層の使用するカタス（東京語）とは象徴的意味が異なる」と述べている（p.63）。このような語形に対する価値付けの変化のほか、例えば、首都圏若年層の人々の間にくだけた物言いへのニーズが広がった、といった、言語使用態度の変化についても併せて考える必要があるかもしれない。

9. 23 区内の言語境界線

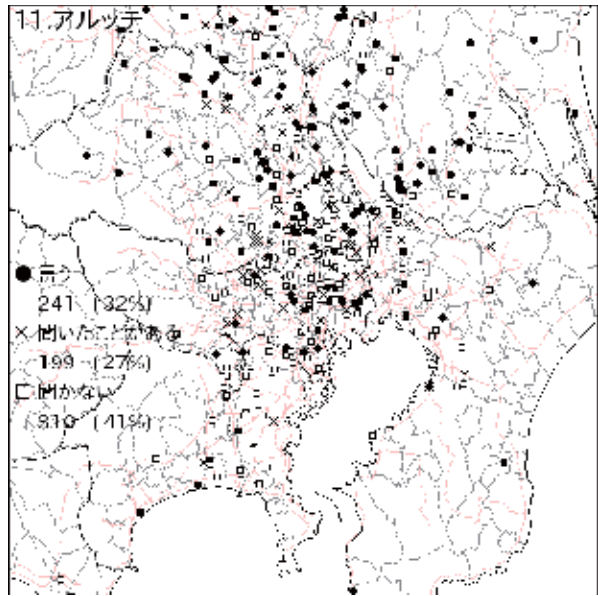
図3「バナナムシ」、図6「ヨコハイリ」、図8「ズルコミ」に現れているが、共時的に見ると、複数の分布図に共通して見られる境界に気づく。

「バナナムシ」「ヨコハイリ」「ズルコミ」はいずれも、東京 23 区中の北東部と南西部の間で分布に違いがある。この境界線の両側で使用語形が全く異なる、というような線ではなく、その違いは傾向的なものだが、他にも（以上の例に比べるとあまりはっきりしないが）、図 11 に示したように、「定規」の意味の「センヒキ」、 「歩いて」の意味の「アルッテ」、 「～したことがある」という経験の意味の「～タトキアル」など、このラインの北東部と南西部で、非標準形の使用傾向が異なる項目が見つかった。

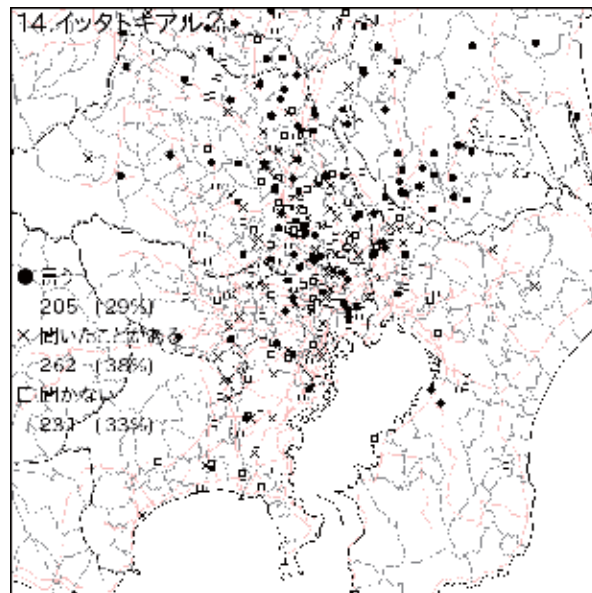
東京 23 区の北東部は広い意味での下町地域、南西部は広い意味での山の手地域とされること



①センヒキ（定規）



②アルッテ（歩いて）



③～タトキアル（したことがある）

図 11 東京 23 区北東部と南西部

がある⁶。この二つのエリアの間に言語的地域差があり、前者は埼玉県・千葉県にかけての地域と、後者は東京都多摩地域・神奈川県にかけての地域と連続性があるということがうかがわれる。

現代の社会的地域差としての下町地域と山の手地域の間での言語使用の違いについては、文京区根津（下町的地域）と文京区西片（山の手的地域）を調査した荻野（1983）、荻野・山敷（1983）、東京の東西 8 地点（氷川・青梅・八王子・国分寺・永福・市ヶ谷・根岸・東小岩）を調査した荻

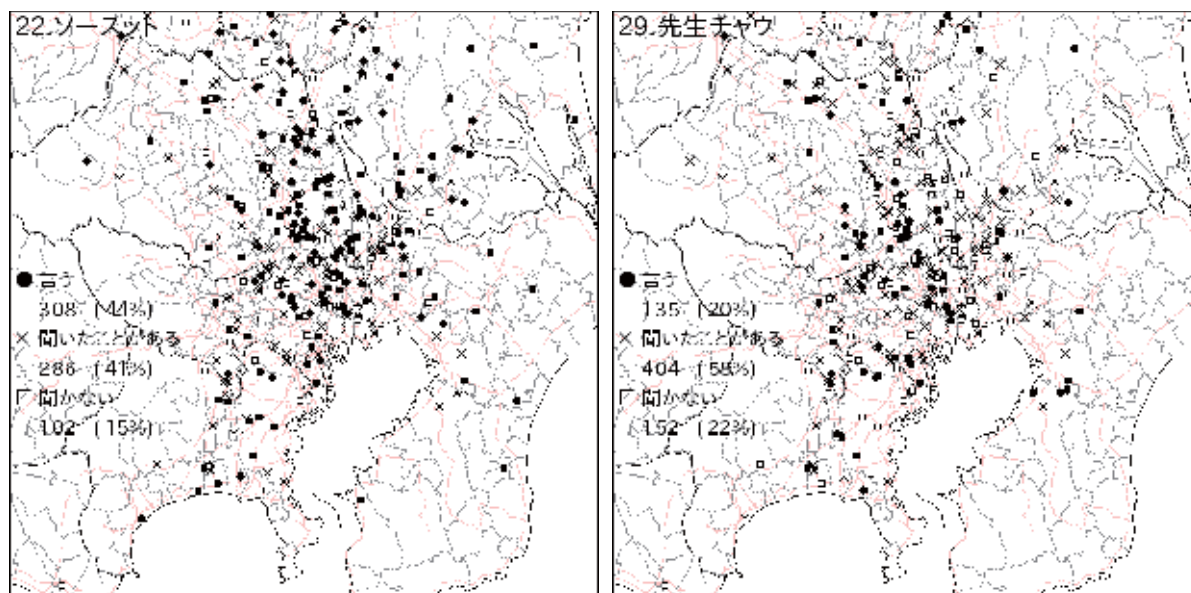
⁶ 「下町」「山の手」という地域区分の指標は明確ではないが、一般的には、学歴、所得、職業などによって判断される、住民の社会階層の構成が大きな手がかりになっていると考えられる。ただし、地域の社会的特性と言語使用との関係付けの理路を立てるためには、西澤（2004）が指摘するように、「統計上の階層分化はそれ自体社会の分極・分解傾向をただちに意味するものではない」（p.185）点に留意し、慎重に考察を進めたい。

野・井上・田原（1985）に指摘がある。その傾向が現代若年層においても存在することを明らかにし、さらに、首都圏内の地域差を面的に把握したことは本調査研究の成果である。今後の精査により、より綿密な地域差を把握することも可能である。

また、先行研究はいずれも、下町地域では非標準形の使用率が高く、山の手地域では低い、（敬語使用はその逆）という傾向を指摘している。これに対して今回は、むしろ、山の手地域で使用率の高い非標準形（「バナナムシ」「ヨコハイリ」）の存在が明らかになった。今後は、同じ「非標準形」でも、語による語感や使用意識の面の違いを把握することが、地域差の背景を知るために有効であると考えられる（本報告書第2部鍮水論文参照）。

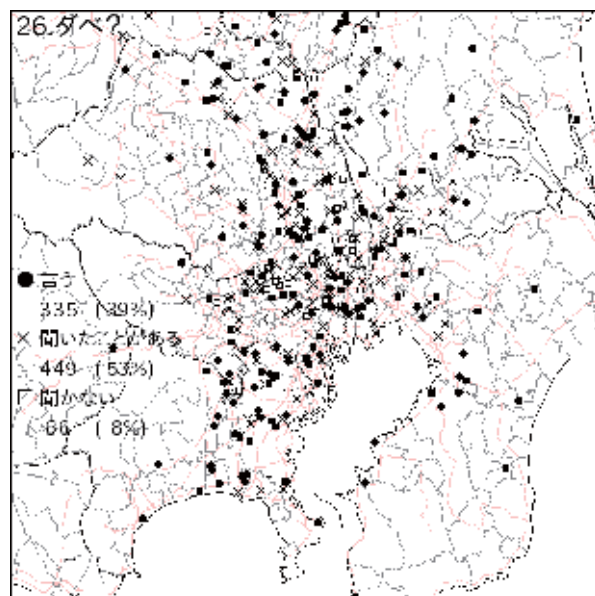
10. 非標準形の使用を避ける

地域最後に、いくつかの分布図から、東京都内の一部に、非標準形を受け入れにくい地域がある



① ソースット（そうすると）

② 先生チャウ（先生ではない）



③ ダベ?（でしょう?）

図12 非標準形を受け入れにくい地域

ことが予想される。

図7「カtas」の地図を見ると、首都圏全域で「言う」が多い中で、東京の23区西部から多摩地域東部に、「言う」という回答がまったく見られないエリアがある（×「聞いたことがある」と□「聞かない」が分布）。このエリアはまた、今回の調査で、接続表現の「ソースット」、関西方言由来の「～チャウ」という否定の表現、伝統方言の「べ」が再生し首都圏全域で若者語的に使われている「ダベ」という同意要求の表現等を「言う」という回答が、周辺部に比べて少ない地域でもある（図12）。当該エリアの調査地点数が充分でないため、現在のデータから確定的なことは言えないが、今後地点密度を高めて調査を行い、再検討したい。

首都圏の中に、非標準形を避ける地域がエリアとして存在するとすると、首都圏の言語と共通語・標準語との関係を考える上で注目される。今後精査したい。

以上、この調査で明らかになった、首都圏若年層の言語の地域差の傾向について報告した。

11. 非標準形から新しい共通語へ

最後に、首都圏若年層の使用する非標準形と、共通語との関係について述べる。

8. 2で述べたように、列などへの「割り込み」を意味する「ヨコハイリ」という語は、この

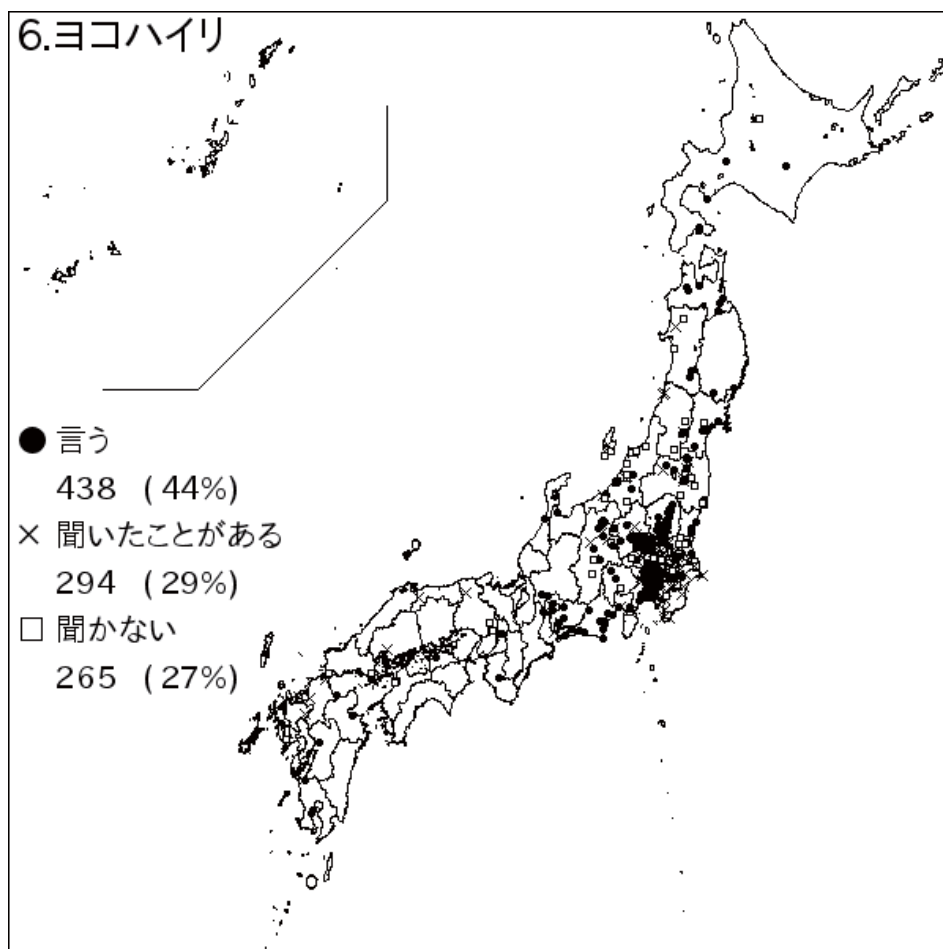


図13 ヨコハイリ（割り込み）全国

30年間で分布地域を拡大し、神奈川県から東京さらに首都圏外周部にまで広がった。図で示すと、**図13**のようになる。あくまでも、首都圏の大学に在籍する各地の出身者の回答である、ということに注意する必要があるが、北海道から沖縄まで、ほぼ全国に「言う」が広がっている。

また、書きことばでも、小説のような、言葉の選択に意を用いる文章に使用例を見出すことができるようになっている。

- なにしる人間たちときたら、すぐに横入りをしたり、並ぶのを面倒がって人の腕をよこどりしたりする者ばかりなのだ。

(川上弘美『竜宮』文藝春秋2002、著者は1950生、東京出身、BCCWJより)

これらの事実から、「ヨコハイリ」は、使用地域の限定された首都圏の「方言」から、使用地域が限定されず、文体的にもインフォーマルに限定されない「共通語」へと、その性格を変えつつあることが推測される。

このように、首都圏若年層の使用する非標準形は、無意識に周辺地域および全国に発信され、「くだけた共通語」を含む新しい共通語として普及していく可能性がある。それが、周辺地域から流入したことばである場合もある。また、非標準形が共通語となる過程では、規範意識を初めとした様々な言語意識が関与していると考えられる。これらのことを含め、「首都圏のことば」と「現代日本語」との関係性を、具体例に則してつぶさに明らかにすることが、首都圏の言語を研究していく上での一つのテーマであると考えている。

文献

- 井上史雄（1983）『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究 —東京・首都圏・山形・北海道—』昭和57年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書。
- 井上史雄・荻野綱男（1984）『新しい日本語・資料図集』文部省科学研究費補助金「言語の標準化」資料集。
- 井上史雄（1985.2）『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院。
- 井上史雄（1985.3）『関東・東北方言の地理的・年齢的分布（SF グロットグラム）』東京外国語大学語学研究所。
- 井上史雄編（1988）『東京・神奈川言語地図』。
- 井上史雄（2011）『経済言語学論考』明治書院。
- NHK 放送文化研究所（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会。
- 荻野綱男（1983）「山の手と下町における敬語使用のちがい」『言語研究』45-76。
- 荻野綱男・井上史雄・田原広史（1985）「周辺地域から東京中心部への《新方言》の流入について」『国語学』、74-65。
- 荻野綱男・山敷陽子（1983）「東京における新方言」井上（1983）、17-69。
- 加藤正信（1970）「変化する郊外のことば —東京の東側—」『言語生活』225、64-72。

- 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康（2004）『関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線
グロットグラム』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 河崎裕子・井上史雄（1983）「首都圏の《新方言》」井上（1983），183-208.
- 金田一春彦監修・秋永一枝編（2010）『新明解アクセント辞典 CD付き』三省堂.
- 倉沢進・浅川達人（2004）『新編東京圏の社会地図 1975-90』東京大学出版会.
- 国立国語研究所（1981）『大都市の言語生活 分析編』三省堂.
- 佐藤亮一他（1998）『東京周辺地域におけるアクセントの古態性に関する調査研究』科学研究費
補助金研究成果報告書.
- 柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』文部省科学研究費特定研
究「言語の標準化」資料集.
- 田中章夫（1983）『東京語 —その成立と展開—』明治書院.
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- 東京都教育委員会（1986）『東京都言語地図』.
- 西澤晃彦（2004）「職業階層からみた東京圏」倉沢・浅川（2004），163-185
- 野村雅昭（1970）「現代東京語の展望」『言語生活』225，18-28.
- 早野慎吾（1996）『地域語の生態シリーズ関東篇 首都圏の言語生態』おうふう.
- 飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版.

首都圏方言の形成と共通語化

久野 マリ子
(國學院大學)

1. 首都圏方言について

首都圏方言をどのようなものか整理してみよう。ここでの提案は、首都圏方言を東京方言が共通語化した方言ととらえてみたいということである。

首都圏方言に対する考え方はまだ定まっていない。さまざまな概念が整理されないまま、便利な名称として「首都圏方言」とよんでいるようである。また、使用する研究者の言語的背景によってこの名称の用法が異なるようである。伝統的東京方言の話し手や東京出身の研究者のいう首都圏方言と、東京周辺が生育地である研究者の考える首都圏方言、あるいはもっと広く関東地方が生育地である研究者が考える首都圏方言は、それぞれその意味内容が異なっていると思われる。本稿でいう首都圏方言は、母方言を持ちながら生活の場が東京であるため、日常の言語生活では学校教育で学習した共通語を使用している話し手が考える「首都圏方言」である。首都圏で話される「首都圏方言」は、学習した共通語を使っている話し手から見ると、学校教育で学んだり、書籍で学習したりして習得した共通語とは、かなり様相が異なる点が目立つ。

東京方言は成立から見ると江戸時代後半から日本の政治経済、文化の中心として日本語の中心的役割を担うことばとして発展してきた。そして、今では現代日本語の話しことばのスタンダードとして国語教育や、日本語教育の場で教えられている。教育現場や一般のとらえ方としては、共通語といっても標準語といっても東京語といっても、ほぼ同じような内容で使われているようになっている。

従来、方言研究では使われる地域と使用する人が安定している方言を研究対象としてきた。特に野外調査をもとに行う方言研究では、典型的な～方言が行われる地域があり、典型的な～方言の話し手がいる。ところが、共通語は何処でも誰でも通じる言葉であるから、もともと決まって話される地域がなく話し手もいない。

一方、伝統的方言研究から見ると、共通語の基盤となった東京方言は、話される地域がはっきりしていて、典型的な東京方言の話し手がいることになる。しかし、話し手、地域という観点からみると、現在の東京方言が話されている地域は近隣方言との境界が曖昧で、話し手の数も生え抜きの話者が少ない。平成25年の東京都の人口は約1327万人である。このうち伝統的東京方言の話し手は少ない上、個人差や属性差が大きく人の移動も多い。東京のどこの誰を調べたら東京方言の代表といえるのかも判然としていない。東京方言のように使用する地域も使用する人も多様で安定していない方言の研究は従来の方言研究の手法では捉えきれない。

このような東京を中心とする首都圏に行われている方言を「首都圏方言」と考える。首都圏方言は、今では東京を中心とした首都圏に行われる主流の方言で、話し手の数が多く話さ

れる地域も交通の発達につれて広がり続けていることから、地域も典型的な話し手も特定しにくい。

このような事象は、東京で起きている現象が最も顕著に現れている例であるが、地方の大都市でも多かれ少なかれこのような現象がおこっていると考えられる。つまり、伝統的な方言だけでなく、それに共通語化してわかりやすくなった言語現象が混在して、伝統方言でもなく、単なる共通語でもないことばが行われているのである。このような生え抜きの話者が少ないため伝統方言の影響力が弱くて継承されにくいという言語現象は日本の中だけでなく、世界中の大都市で同じような現象が起こっていると考えられる。

首都圏方言調査の重要な点は、このような話し手も話される地域も方言の実態も曖昧なまま、共通語とか標準語とかスタンダード日本語とか思われるようになり、その話し手が増え続け、その人達が現代日本語の担い手として主流になっていることである。一方、その陰で伝統的東京方言や東京周辺の方言は「東京と同じ」と見なされて詳しい調査も十分ではないまま消滅しようとしている。首都圏方言の調査では、詳細な生え抜きの話者の多人数調査が必要である。

首都圏方言調査の緊急性と必要性がここにある。

2. 首都圏方言の特徴

首都圏方言の特徴は次のような点が指摘できる。

(1) 日本語の話しことばの標準語、共通語として使われている。

首都圏方言は、まだ明確な定義はなく、その話し手に共通している意識は無邪気に「自分は標準語を話している」と思っていることで、その実態の解明はまだ十分とは言えない。

東京やその周辺の人々は、自分の話していることばが文化の中心地である「首都」のことばであるという自負があるため、各自の母方言の干渉やバリエーションを許容しつつ、共通語とか標準語とかという意識をもっている。これが首都圏で行われている方言の実態であろう。

首都圏方言は、共通語にきわめて近いものから山の手ことばや下町ことばにきわめて近いもの、関東地方の伝統的方言の特徴を色濃く持つものまで、幅広いバリエーションを含むと考えられる。日本語には標準語はなく共通語があるだけであるというのが通説であるが、一般的には共通語よりも標準語という語の方が広く知られて使われている。今や標準語といっても共通語と言ってもその差は明確ではなくなっている。

「東京のことば」は共通語の基盤であり、誰にでも通じる共通のことばとして日本中にほぼ通じるので標準語と言ってもよい。理想的な日本語を追求してそのことばを標準語と呼ぶという理想はあるが、この議論は、あくまでも理想であって実現はいつになるのかわからない。東京のことばが「共通語」ではなくて「標準語」であるという風潮は一人歩きをしていて、もはやこれをとどめることは難しい。かつてのように方言コンプレックスの弊害が軽減されたこともその背景にある。

終戦後までに言語形成期を終えた東京市生育の話者なら、自分のことばと標準語、共通語とは違うと自覚している話し手がたくさんいた。しかし、今では、伝統的な東京方言の単語

でも自分が使わなければ方言、自分が使えば共通語と意識している若年層が増えている（田中 2010）。この世代は伝統的な山の手ことばも下町ことばも聞く機会も学習する機会もないままに育ち、移住者 2 世の世代であれば、親の世代が学習して覚えた「共通語」を母方言として育った世代である。

そしてこの世代が今では日本の活躍層として日本語使用の中心となり、スタンダード日本語の使用者となっている。この点が首都圏方言の研究の重要性を強調しなければならない点である。

(2) 首都圏がどこの地域をさすかが明確ではない。

このような世代の人たちが首都圏で話している話しことばを首都圏方言と呼ぶことにしたが、次に首都圏がどこの地域をさすかが問題となる。当然のことながら、行政区域としての東京ではない。東京市が東京 2 3 区に広がり、多摩地区を含み、伊豆七島も小笠原も東京都である。このように首都圏方言の話されている地域が、今も広がり続けているという現実がある。NHKの首都圏ニュースでは、一都六県を首都圏と呼んでいる。東京都といっても伊豆七島から小笠原諸島まで含むが、島嶼部の方言は首都圏方言とは言われない。政治的にも地理的にも決められない首都圏は、今や首都圏に通勤通学する人々の意識の上での首都圏といってもよい。首都圏方言の研究には、首都圏としては主に東京、埼玉、千葉、神奈川が中心となる。そのほかに通勤通学に可能な地域で本人が「自分は標準語を話す」と思っている地域も調査対象に含まれるから、東京都の調査だけでは首都圏方言は明らかにできない。

首都圏方言の中に地域差があることは、すでに三井プロジェクトの成果の中で指摘されている。

(3) 江戸語を継承する伝統的方言の話し手の数が少ない。

東京の成立からみれば、伝統的な方言を継承するだけの東京語話者の勢力が十分ではないため圧倒的多数の移住者のことばに影響を与えることができず、伝統的方言が主流方言とはなりきれないという事情がある。しかし、東京やその周辺の人々は、自分の話していることばが文化の中心地である首都東京のことばであるという自負があるため、各自の母方言の干渉やバリエーションを許容しつつ、共通語とか標準語とかという意識をもっている。これが首都圏で行われている方言の実態であろう。

江戸、東京は、江戸時代、明治維新後の東京市を通じて、人口の増減が激しい。明治維新直後、江戸に住んでいた人が一端出身地に帰り全国に散ったため一時的に東京の人口が急激に減ったが、その後、全国各地から東京への人口の流入も始まった。関東大震災、東京大空襲など人口減や流動化もあったが全国からの人の移動は絶えることはなかった。現在も東京に本社のある企業や官庁が地方出身者を新規採用することによって東京出身でない人々が東京に定着する流れは続いている。

現代の首都圏で行われていることばの話し手は、首都圏以外の地方からの移住者が多く、その人達の 2 世、3 世は首都圏方言を話している。例えば高度経済成長の時代に東北や九州

から集団就職した人たちや、全国各地から東京で高等教育を受けてそのまま首都圏に住み着いた人たちが首都圏方言の話し手になっているのである。東京都の近郊に住んでいても東京都内に通勤、通学する人も含まれる。この人達は、伝統的方言が話せず、親世代が学習した共通語を母方言としている。

(4) 移住者 1 世の共通語を母方言とする 2 世、3 世が話し手の中心である。

首都圏方言の話し手は、東京を中心とする東京都内に通勤通学できる範囲に住む人で、伝統的なその土地の方言を継承していないので伝統的方言を話すことができず、標準語や共通語を母方言として言語生活を送っている人々の方言をさす。主な使用範囲は主に東京、千葉、神奈川、埼玉であるが、それ以外でも東京に通勤通学してその土地の伝統的方言を継承していない人の話しことばも含める。つまり、首都圏に住む人で、本人がその土地の伝統的方言が話せず、自分は、標準語、共通語を話していると思っている人のことばが首都圏方言である。

東京 23 区以外の地域や都下でも伝統的な山の手ことばや下町ことばを継承していない人々が話す方言もこれに含まれる。これらの話し手は、主として親か祖父母の世代に東京やその近郊に住み学習した共通語を使う人々の子供や孫の世代が主である。

移住者 1 世の世代は出身地の伝統的方言と、学習した共通語を使って生活している。その学習した共通語は、日常の生活は共通語で行うが自分の身についた方言の干渉から逃れることはできないので、伝統的な東京方言よりは規則的で説明的な共通語である。2 世、3 世は 1 世の共通語を母方言として育つ。それはすでに共通語と言うよりは生活語であって、彼らは伝統的な東京方言と接する機会は少ない。このような成立過程を経た首都圏方言は共通語と似た特徴を持っているが伝統的東京方言とは異なる。

(5) 多様なバリエーションを許容し、様々なスタイルの話し手が含まれる。

このような成立事情から首都圏方言は様々なバリエーションを許容し、さまざまなスタイルを選択する話し手が存在すると考えられる。地方の小さな言語集団では典型的なその方言の話し手がいて典型的な言語事象があるが、首都圏方言では全員が同じ言語現象を共有しているわけではない。たとえ、ある言語現象が優勢であっても、全員がそのような事象になるわけではなく、異なる事象を保つ人もいる。そのような人の数は首都圏方言全体の中では少数であってもかなりの数になる。個人差とか個例とかとして無視できない数に上がることが予測される。首都圏方言の調査は首都圏に含まれる、東京とその周辺地域での多人数調査が必要である。

3. 首都圏方言と共通語との違い

共通語とは、日本中どこでも通じることばで、理想のことばとしての標準語はまだ存在しないが、現実に行われているものであるとされている。

すでに指摘されているように、共通語は「教養のある山の手ことばを基盤」としているが東

京方言そのものではない。伝統的東京方言の勢力が弱くなった今、伝統的東京方言は共通語化した首都圏方言に取って替われ、首都圏方言が東京方言の位置につこうとしている。しかし、首都圏方言もまた共通語に似ているところもあるが全く同じというわけではない。首都圏方言と共通語の差について考えてみよう。

(1) 使われる文体が違う。

丁寧な文体や上品、教養のある人の話し方、丁寧な話し方をしなければならないと意識され緊張をもって話される場、あるいは公の場では、首都圏方言と共通語はあまり差がない。またこの場合、地方出身者が学習した共通語ともあまり差がないと考えられる。伝統的東京方言の話し手でも、首都圏以外の地方に住む人でも、このような丁寧な文体では共通語を話そうとするから、共通語と首都圏方言との差は小さい。日本全国の義務教育の場で「国語」の授業で丁寧な文体の話しことばを教科書などで学習する。話しことばを書きことばに文字化したものを日本全国の人が学校教育で学習するので、主として音声を除けば、この文体は日本全国共通である。

ただし、東京以外の地方の話者は、教科書で扱われる場面以外の日常の言語生活で使われることばの全てを共通語で話すことできない。学習した経験がない場面が現れた場合には、地域方言や地域差が現れる。地域方言の話し手は丁寧な場面では共通語を使い、それ以外の日常の言語生活では伝統的方言を使って話す。かりにすでにその伝統的方言がかなり共通語化していたとしても、公の場ではないところで話されるのは共通語ではないし、首都圏方言の話し方とは異なっている。当然、地域方言の中でも日常の言語生活を共通語と共通語に近い表現を好む話者と、共通語と地域方言を使い分ける話者がいる。

(2) どのような場面で共通語が使われるか。

それでは、共通語の使われる場面はどこか。共通語化が進んだ今では、日本全国で地域方言しか話せない人はほとんどいないといってもいい。日本中の人々が共通語を話せるが、日本中で日常の言語生活全てが共通語で行われているかということとはそうではない。共通語を話す場面と話さなくても言い場面とを使い分けている。

コミックの中での会話で共通語の使われる場面をみると、職場や教室での公式な話し方は共通語で行われることが多い。たとえば、『じゃりん子チエ』（はるき悦巳）では、部長と呼ばれる職階の警察官が部下の警察官を前に指示を出す場面や、花井拳骨の出身大学の大学教員には関西弁ではなく共通語を使わせている。また、チエの小学校担任である花井渉は共通語である。また、小学校低学年向けのコミック『キャプテン翼』（高橋陽一）や、大企業が舞台となっているサラリーマンもの『課長島耕作』（弘兼憲史）や、『釣りバカ日誌』（作・やまさき十三、画・北見けんいち）などの会話も共通語である。『海街ダイアリー』（吉田秋生）、『リアル』などでは、会社、病院、大学などの職場での公的な立場の会話や、相手と距離を保ちたい場面では共通語を使わせているし、独白、説明する場合でも共通語が使われている。関西方言が役割語として使われている。

(3) 首都圏方言の使われる場面はどこか。

共通語は誰にでもわかることばで、学校教育で「国語」で学習した話しことばであるが、言語生活全般をまかないきれほどの用法までは定まっていないため、規範はかなり緩やかである。日常の言語生活は、丁寧な文体だけでは成立しない。その結果として、首都圏に移住した2世3世の話す方言は、伝統的な方言がもつ体系からも学習した共通語からも異なる実態を持つようになってきている。

それでは、首都圏方言の使われる場面はどこか。首都圏方言の特徴は、小学校や中学校、高等学校での生徒間でのあまり丁寧でない内輪の会話にその特徴が目立つことが多いようである。この場合の首都圏方言は学校で学習する「共通語」とは、あきらかに違っている。丁寧な文体の首都圏方言は日本中の学校で教えられる共通語にきわめて近い。小学生や中学生や、高校生が日常生活の友達同士や家族内での気の置けない会話で使われることばは、共通語や標準語とは異なる表現が用いられることが多い。地域方言では丁寧な場面では共通語、それ以外の日常の気の置けない場面では伝統的方言の使いわけがある。首都圏方言でも、日常の気の置けない場面での方言は共通語ではない。例えば、小学生や中学生が学校内で使う丁寧でない文体として「ゼッター ナカス (ぜったいに泣かせる)」「チゲーヨ (違うよ)」「アメバッカ フル (雨ばかりふる)」「モンクバッカ イッテンジャン (文句ばかり言っているのではない)」「アンタニ マカシタヨ (あなたに任せたよ)」のような表現は、共通語や標準語としては認められないし、共通語化の進んだ地方都市でも使用されない。

(4) 丁寧でない文体にみる首都圏方言。

首都圏方言の若年層の話し手は丁寧な文体と内輪の気の置けない場面での文体の差を意識していない。「ソナノ ヤダカラ (そのようなことは嫌だから)」「ナンダッテ シッテンダヨ (何でも知っているのだよ)」という表現は首都圏方言であって共通語ではない。このような表現にたいして、地域方言の話し手は「共通語」ではないと思っている。共通語は丁寧な場面で使われることばで乱暴の言い方やくだけた言い方は共通語ではないと意識している。

たとえば、「アメニ フラレチャッタ (雨に降られてしまった)」とか「ズイブン ムカシオト カワッチャッタダネ (ずいぶん昔とは変わってしまったのだね)」のような「てしまった」を「チャッタ」という表現を、公の場の話しことばとして使う人が増えている。首都圏方言であって共通語ではないことに気づかない首都圏方言話者も多いが、地域方言の話し手にとっては、この表現が公の場で使用されることには抵抗感がある。

このような丁寧でない普段のくだけた会話で使われる首都圏方言には、従来、伝統的な下町ことばとして指摘されている事象や、関東方言に広く報告される事象と類似した点が多く観察される。

参考文献

- 秋永一枝ほか (2007) 『東京都のことば』 明治書院。
- 井上史雄編 (1983) 『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』 (昭和

56・57年度 文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書）。

- 大島一郎・久野マリ子（1991）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』
（1）（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）。
- 大島一郎・久野マリ子（1993）「東京都の言語実態の諸相」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(3)（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）。
- 加藤正信（1977）「共通語」佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典 第6巻』三省堂。
- 木川行央・久野マリ子（2012）「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」
『Scientific approaches to language 11』神田外語大学。
- 国広哲弥・中本正智（1984）『東京語のゆれ調査報告』（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」総括班）。
- 久野マリ子編（2009）『首都圏方言の研究』國學院大學大学院文学研究科。
- 久野マリ子編（2010-2013）『首都圏方言の研究』（1）－（4）國學院大學大学院文学研究科久野研究室。
- 久野マリ子・木川行央（2012）「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要 18』神田外語大学。
- 國學院大學日本文化研究所編（1995）『東京語のゆくえ』東京堂。
- 真田信治（1987）『標準語の成立事情』PHP研究所。
- 神保格（1950）『標準語研究』日本放送出版協会。
- 田中章夫（1983）『東京語 一その成立と展開一』明治書院。
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院。
- 土屋信一（2009）『江戸・東京語研究 一共通語への道一』勉誠出版。
- 東京都教育委員会編（1986）『東京都言語地図』東京都教育委員会。
- 中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房。
- 飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版。
- 松村明（1977）『近代の国語一江戸から近代へ』桜楓社。

付録：「新・東京都言語地図」より

首都圏方言の実態を示す資料として、『新・東京都言語地図』作成のための調査から、地図を何枚か示す。『新・東京都言語地図』作成のための調査の概要は次のとおり。

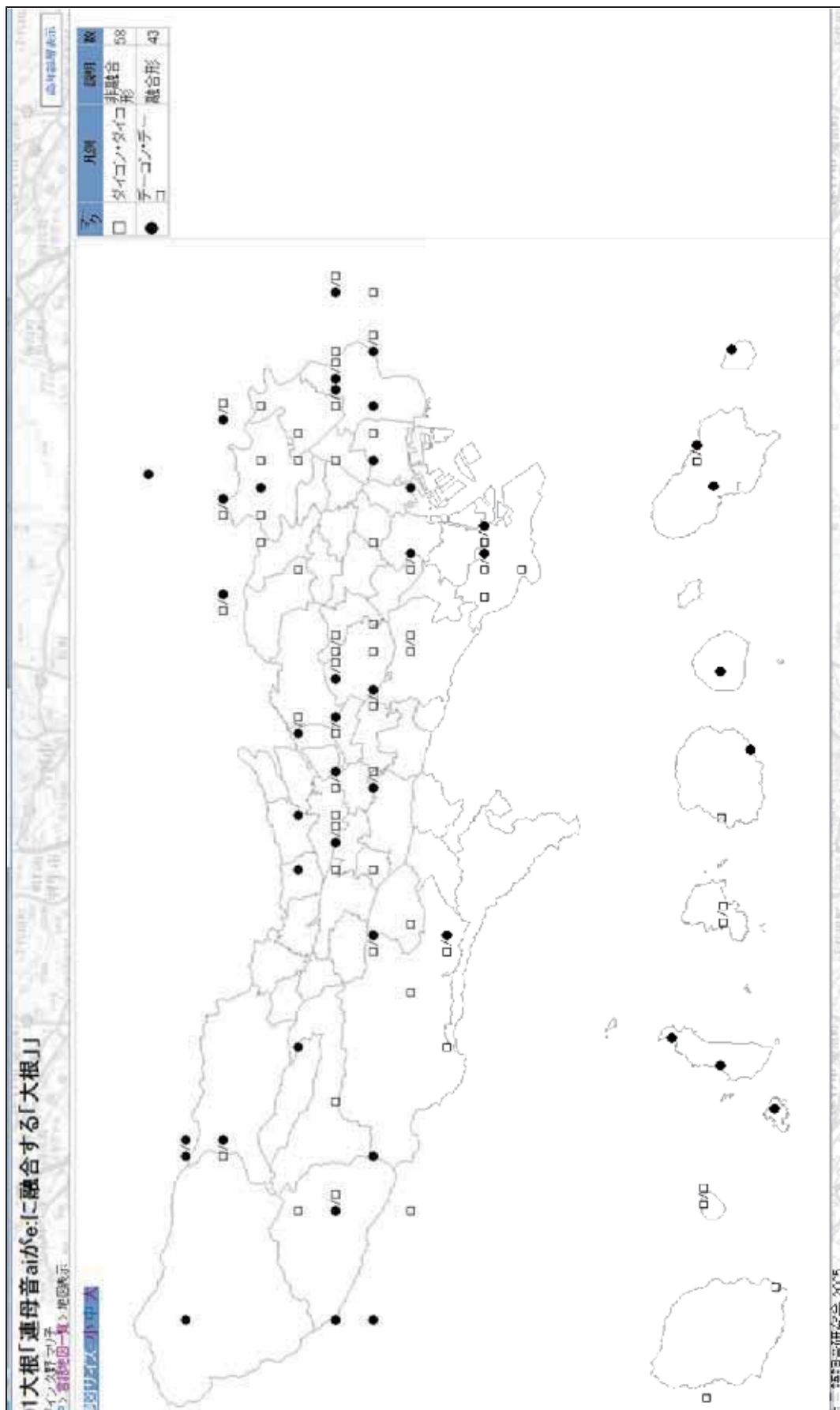
- 実施 東京都立大学大学院大島一郎研究室、國學院大學大学院生・学部学生、
神田外国語大学大学院生、
東京言語調査研究会（故大島一郎 東京都立大学名誉教授 主宰）1会員
- 調査年 1989（平成元）年～1991（平成3）年
- 調査地点 東京都及びその周辺地区を含む地域を、人口の密集度に応じて、約250地点以上、
300地点以内を等分に選定した。
- 調査対象 生年 高年層（大正15年以前に出生）
青年層（昭和39年から昭和49年の間に出生）
言語経歴 生え抜き
性別 男性
人数 各地点1名ずつ
- 調査項目 面接質問法によるもの 計283項目
音韻 62 アクセント 98 文法 50 語彙 43 言語意識 30
アンケート記入方法によるもの 計55項目

『新東京都言語地図』は、東京言語調査研究会の会員と國學院大學文学部日本語学専攻の学生が中心となって作成した。以下の地図は、久野（2013）の中から転載した。これらの地図は大島一郎研究会代表から生前に発表の許可を得た地図の一部である。

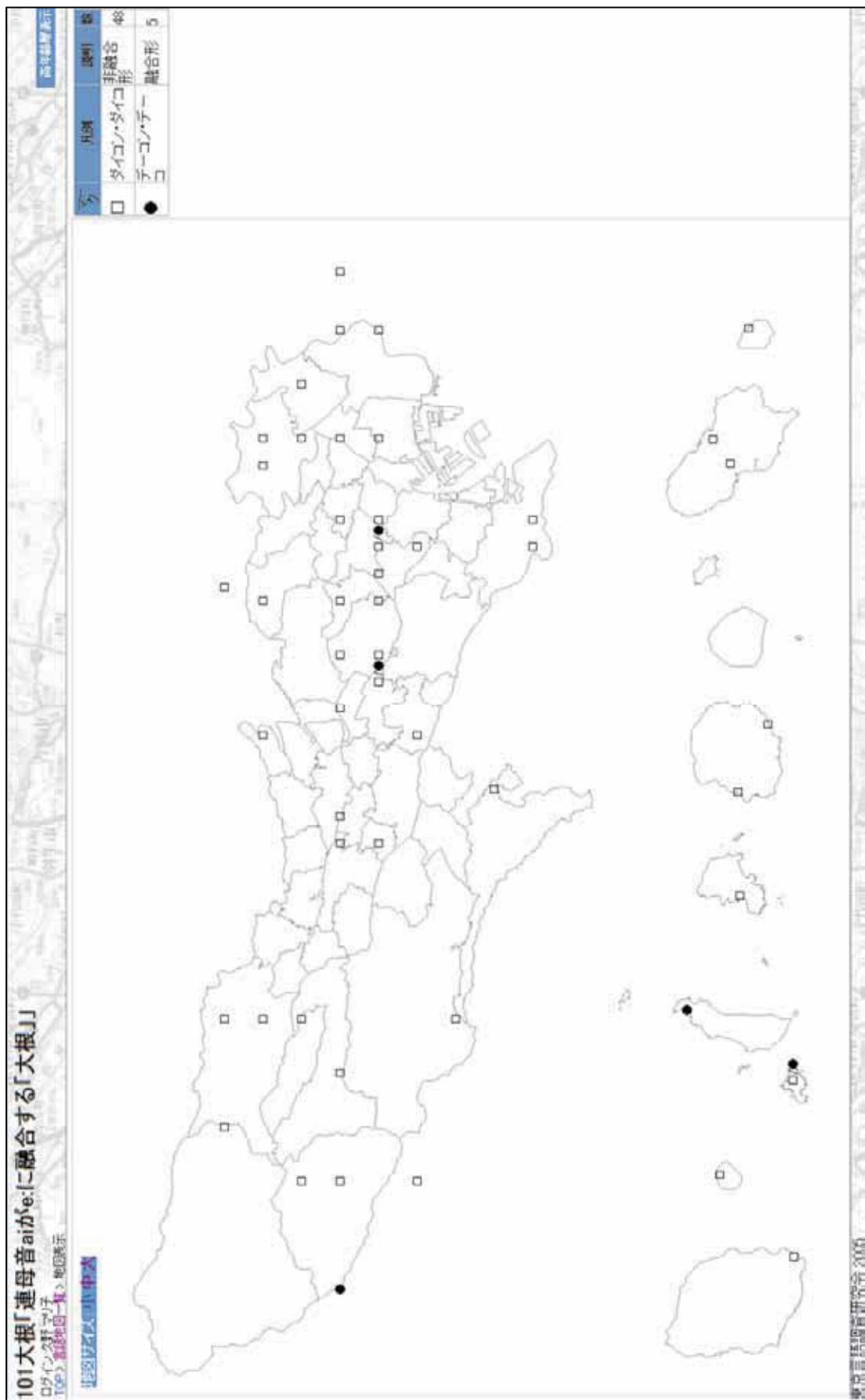
参考文献

- 大島一郎・久野マリ子（1991）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』（1）（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都（及び放送関係者）における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）71-97.
- 久野マリ子（1996）「はじめに」國學院大學日本文化研究所編『東京語のゆくえ』東京堂出版 1-19.
- 久野マリ子（2013）「新東京都言語地図点描 ―音韻・アクセントといくつかの項目の分布から―」『国語研究』76（國學院大學国語研究会）
- 濱中誠・竹林暁（2007）「言語地図の簡単に新しい作成方法 ―ウェブアプリケーション bunpu. jphougen. jp ―」『日本方言研究会第84回研究発表会発表原稿集』25-32.

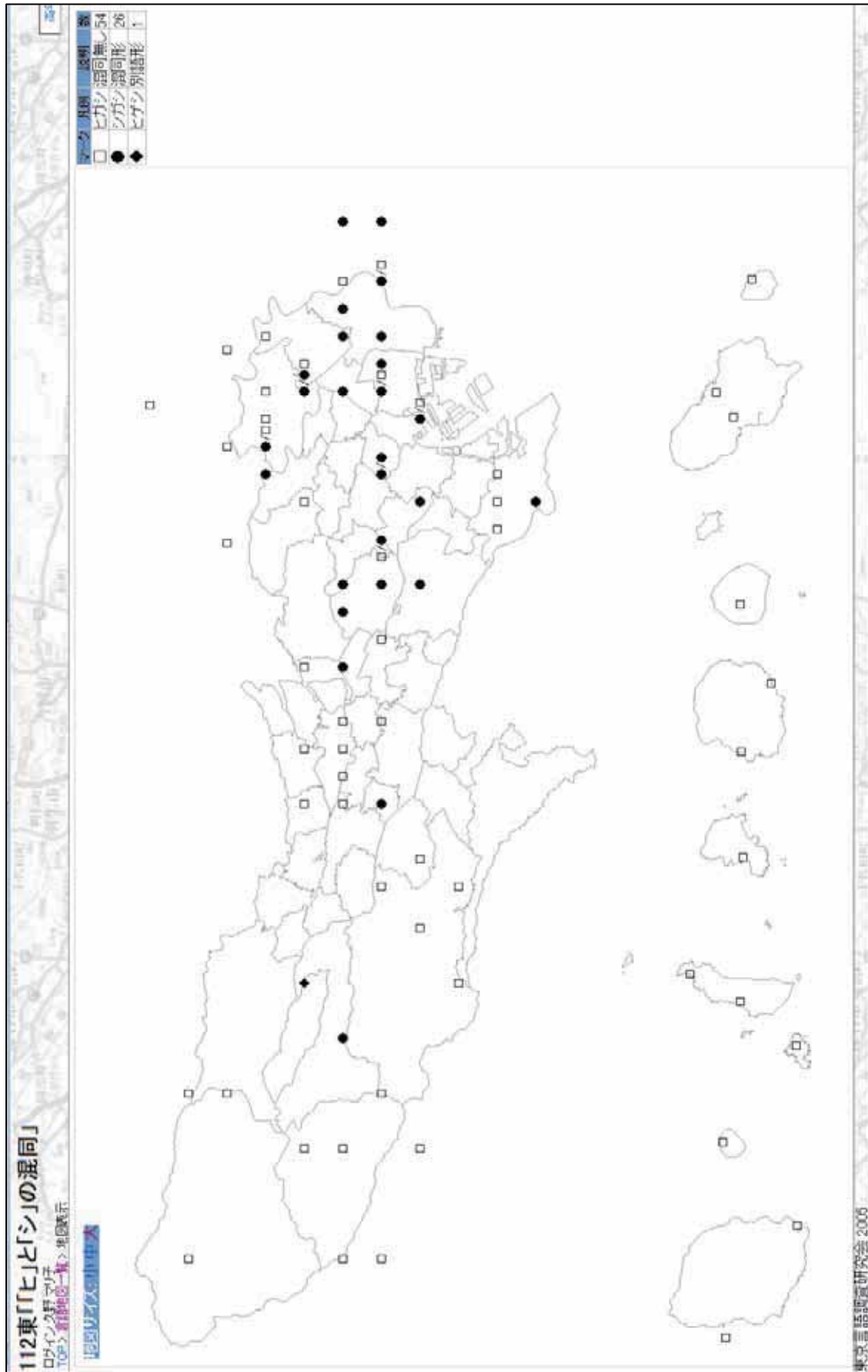
¹ 久野が副代表として所属している。



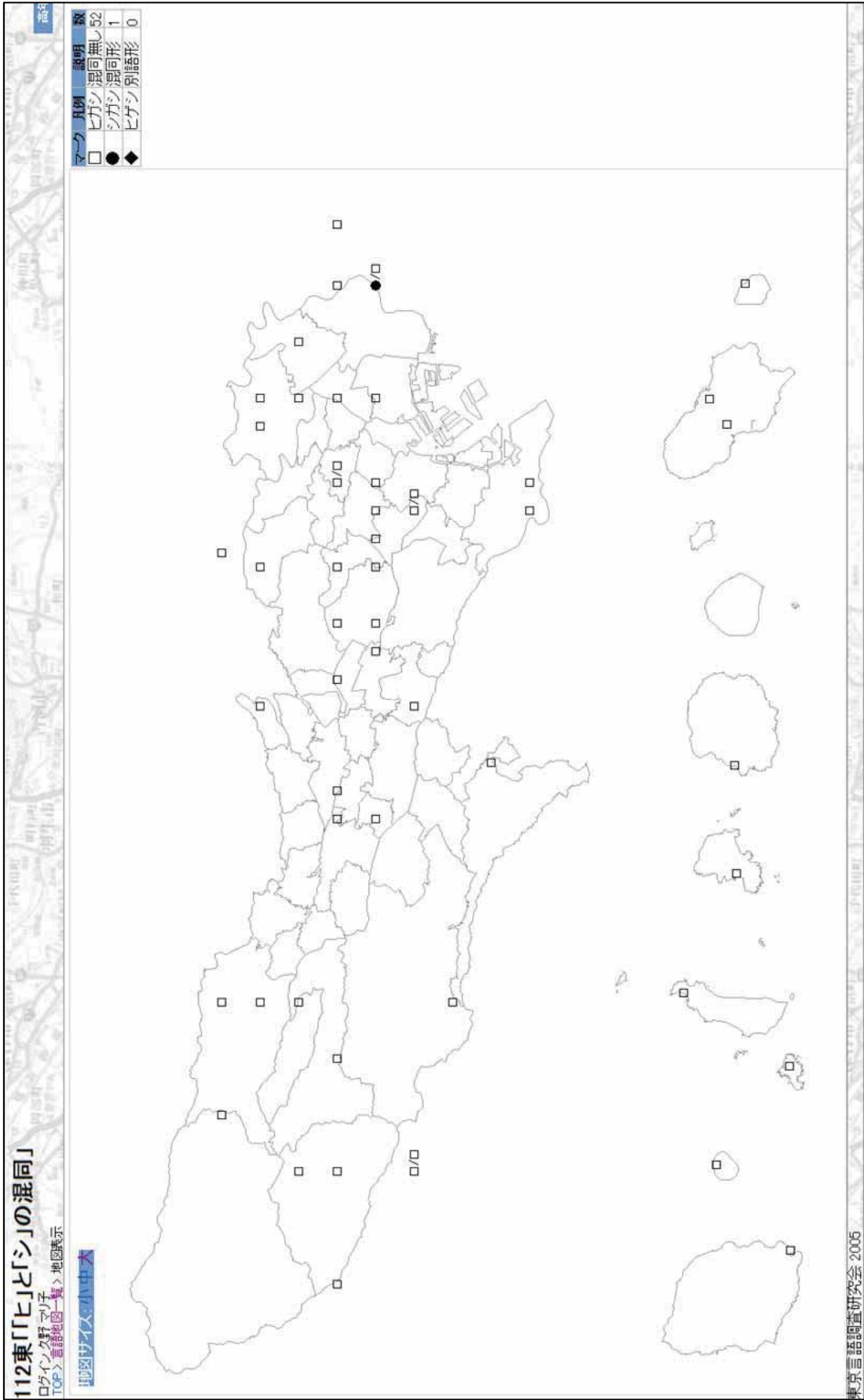
地図 1 連母音アイの融合「大根」(高年層)



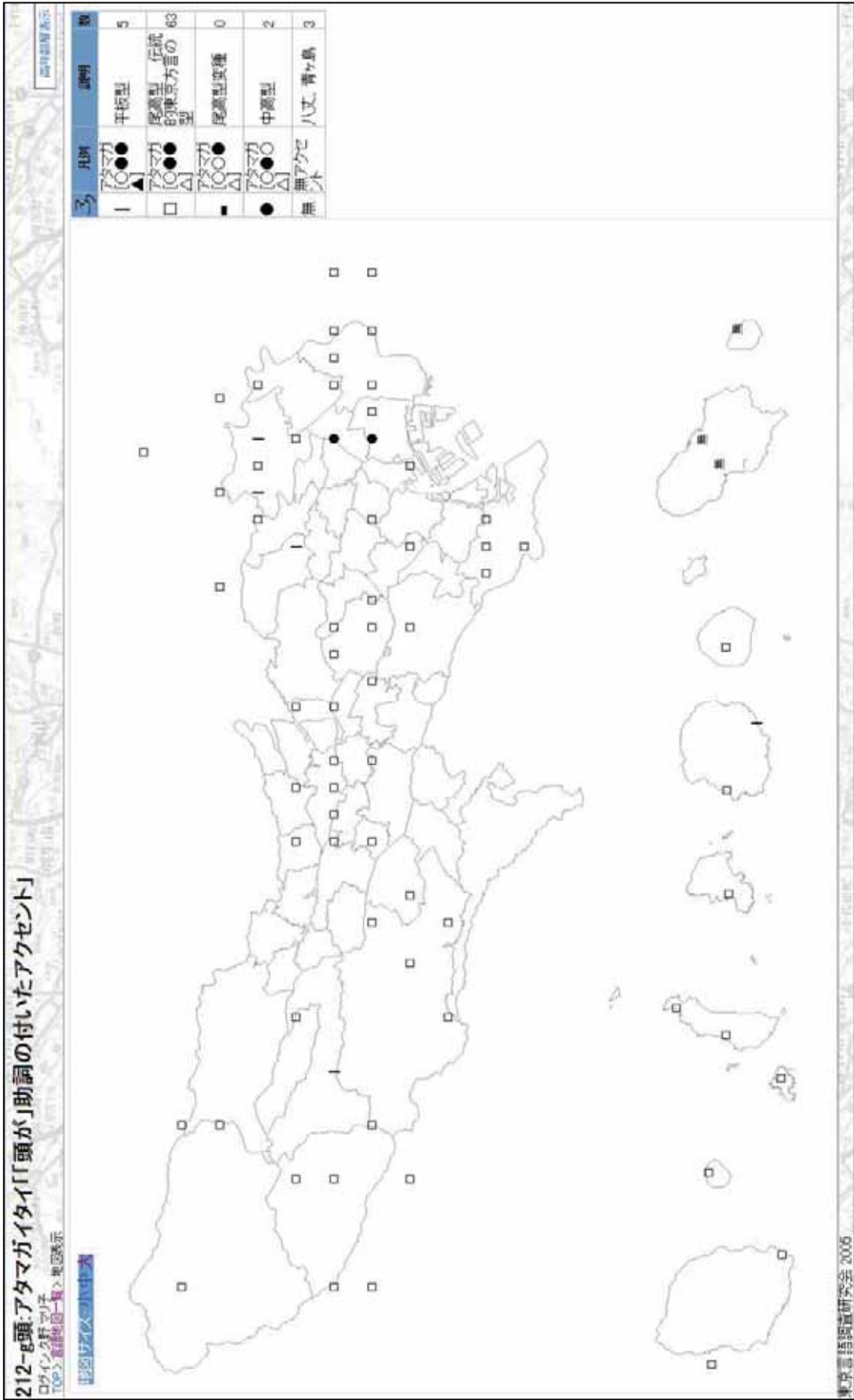
地図2 連母音アイの融合「大根」(若年層)



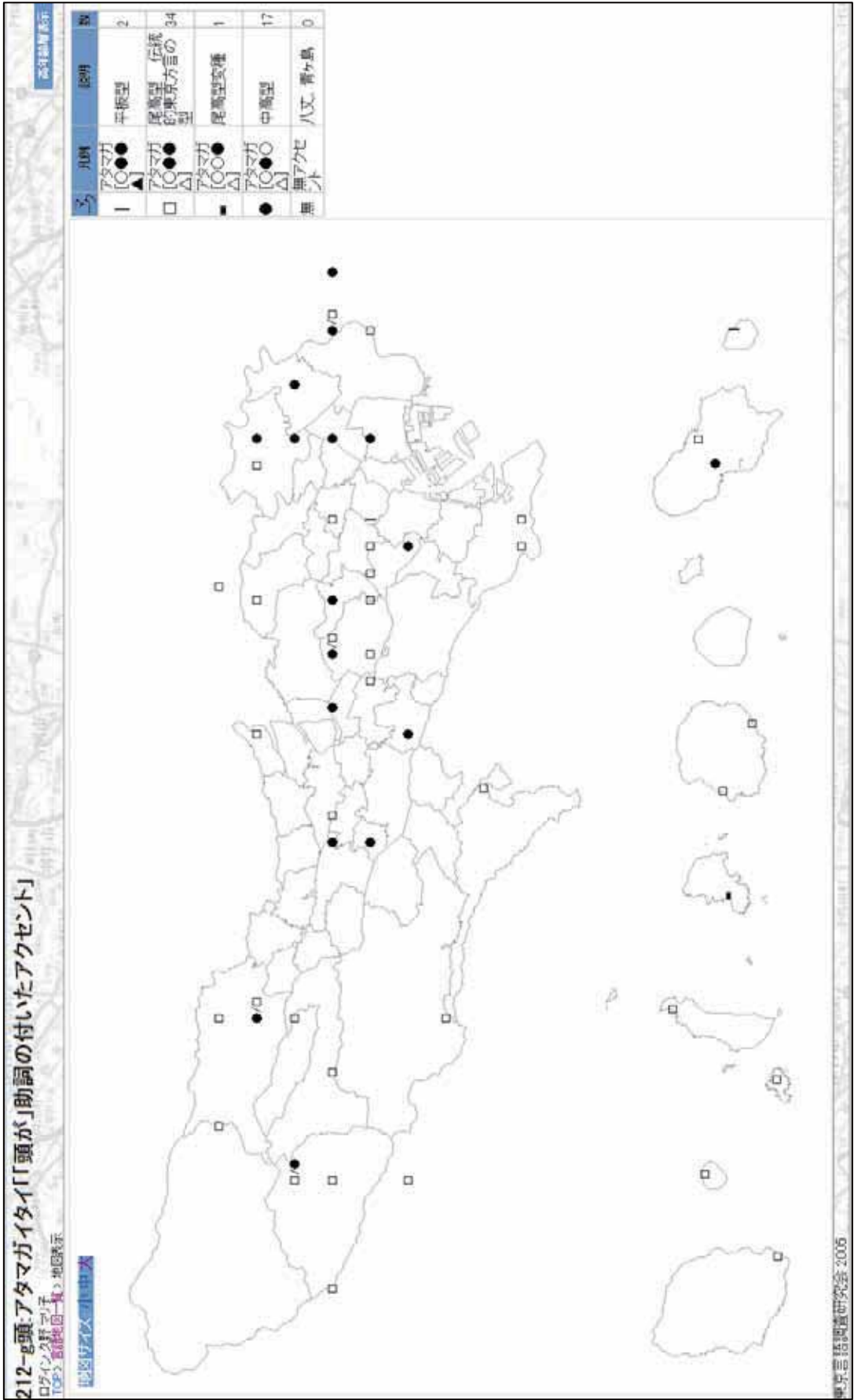
地図3 ヒとシの混同 (高年層)



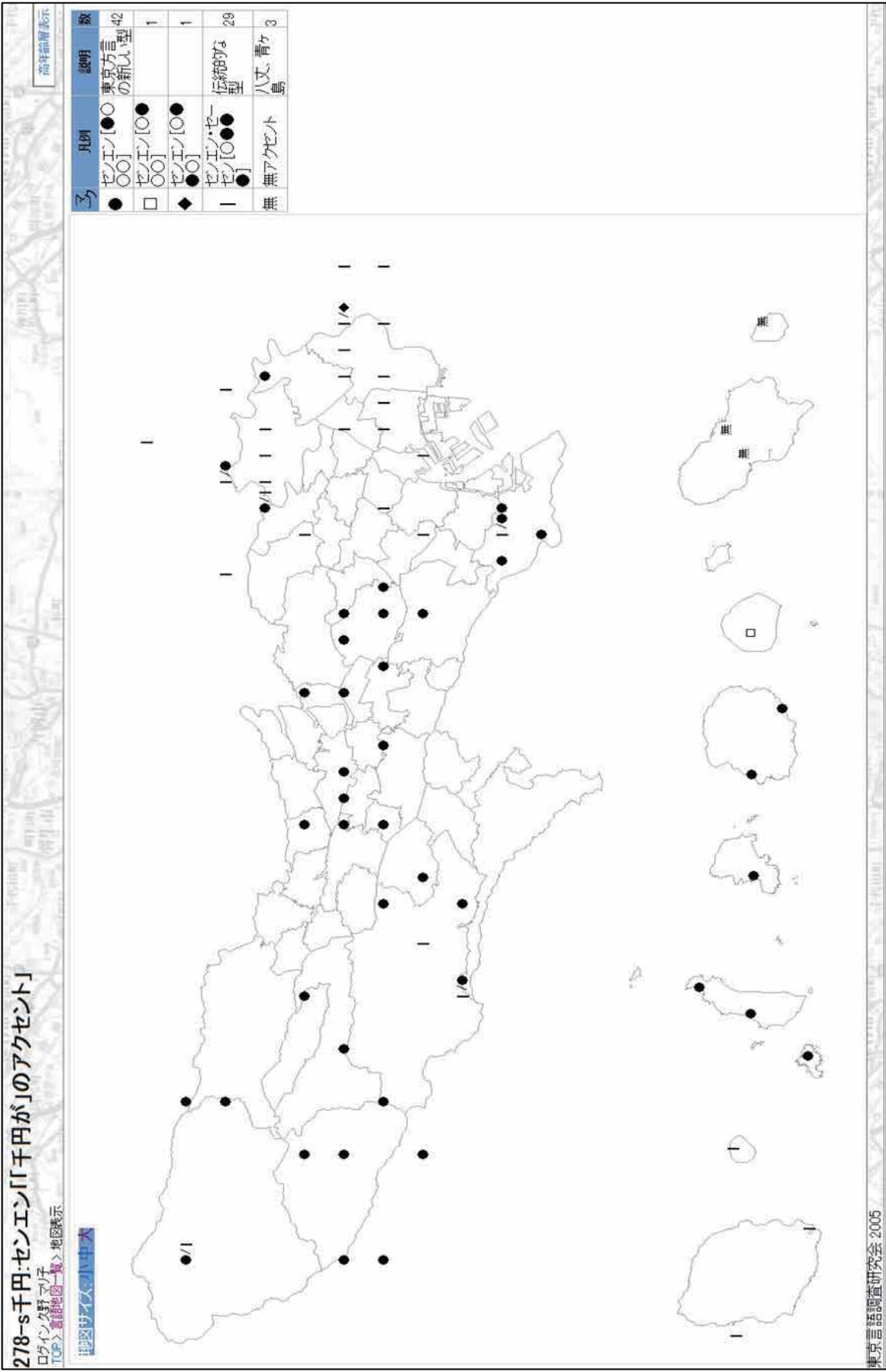
地図4 ヒとシの混同 (若年層)



地図5 「頭が」の中高型のアクセント（高年層）



地図6 「頭が」中高型のアクセント (若年層)



地図7 「千円」頭高型のアクセント (高年齢)

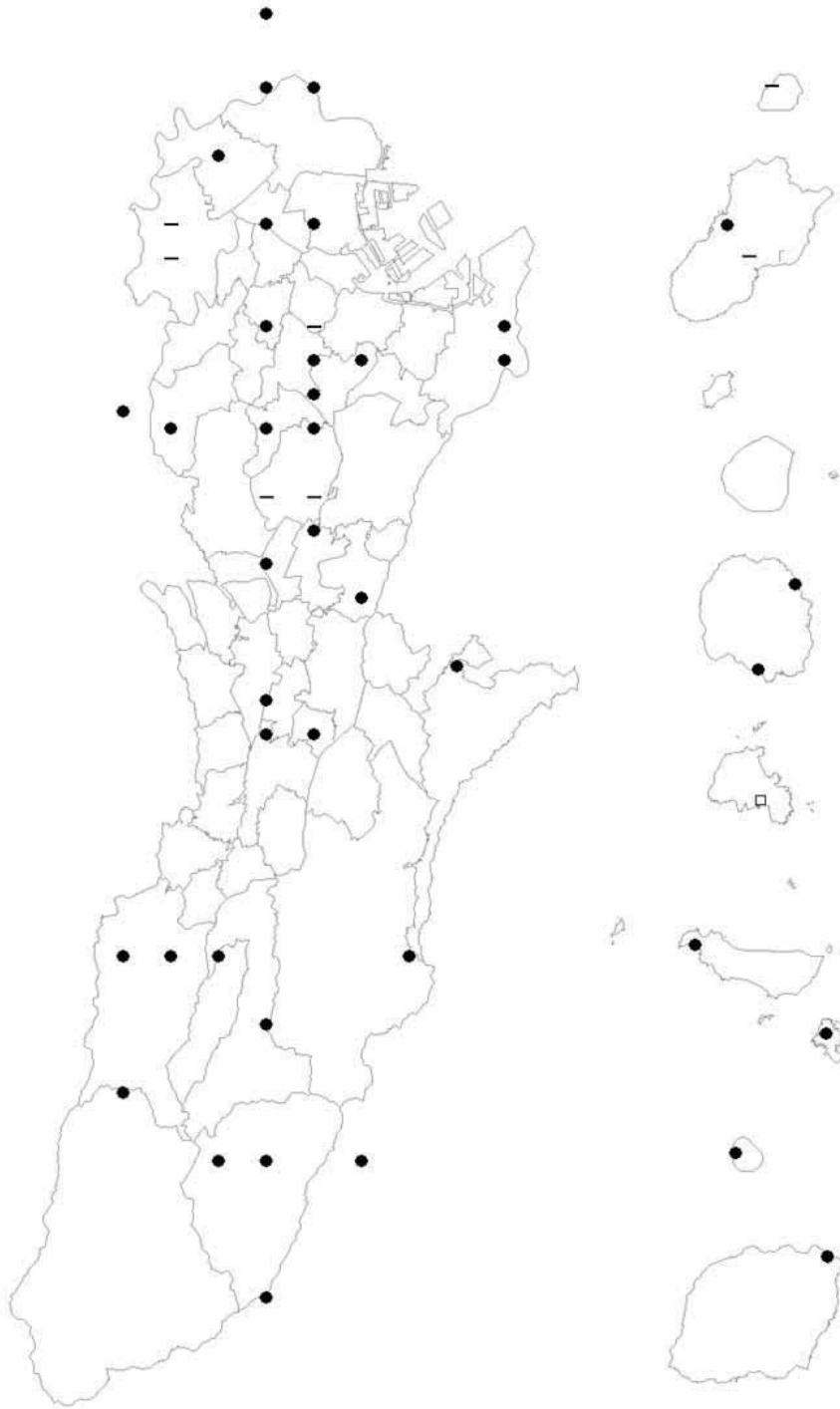
278-s 千円:センエン「千円が」のアクセント

ロケインク野子
TOP > 言語地図 > 方言 > 地図表示

地図サイズ: 小中大

高年齢層表示

ふ	凡例	説明	数
●	センエン[○○] ○○	東京方言 の新しい型	40
□	センエン[○○] ○○		1
◆	センエン[○○] ○○		0
┆	センエン[セー] セン[○○] ●	伝統的な 型	7
無	無アクセント	八丈、青ヶ 島	0



東京言語調査研究会 2005

地図8 「千円」頭高型のアクセント (若年層)

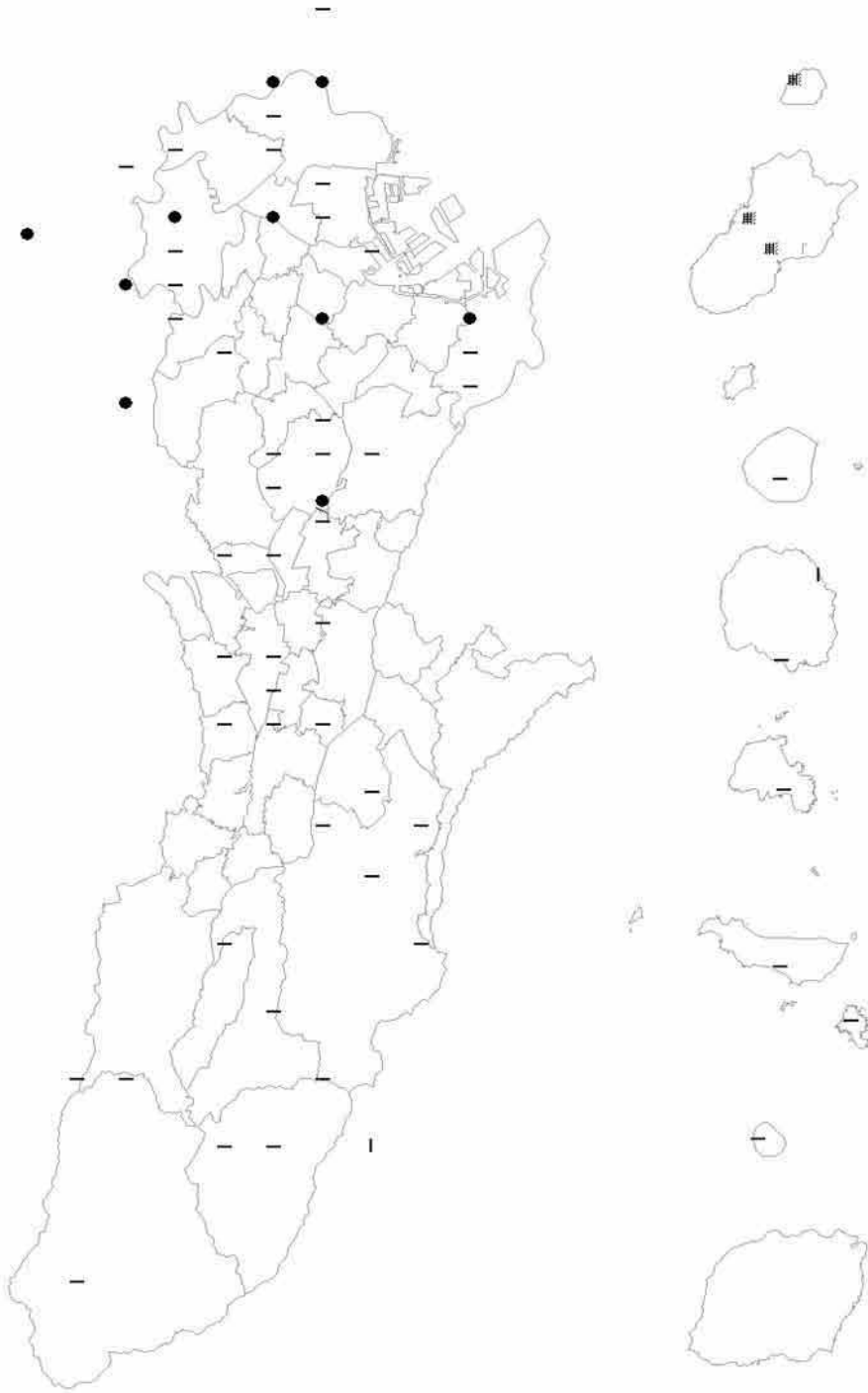
214-g心:コロガキレダ「3拍名詞助詞のついた発音「心が」

ロクイン森野マリ子
TOP > 言語地図一覧 > 地図表示

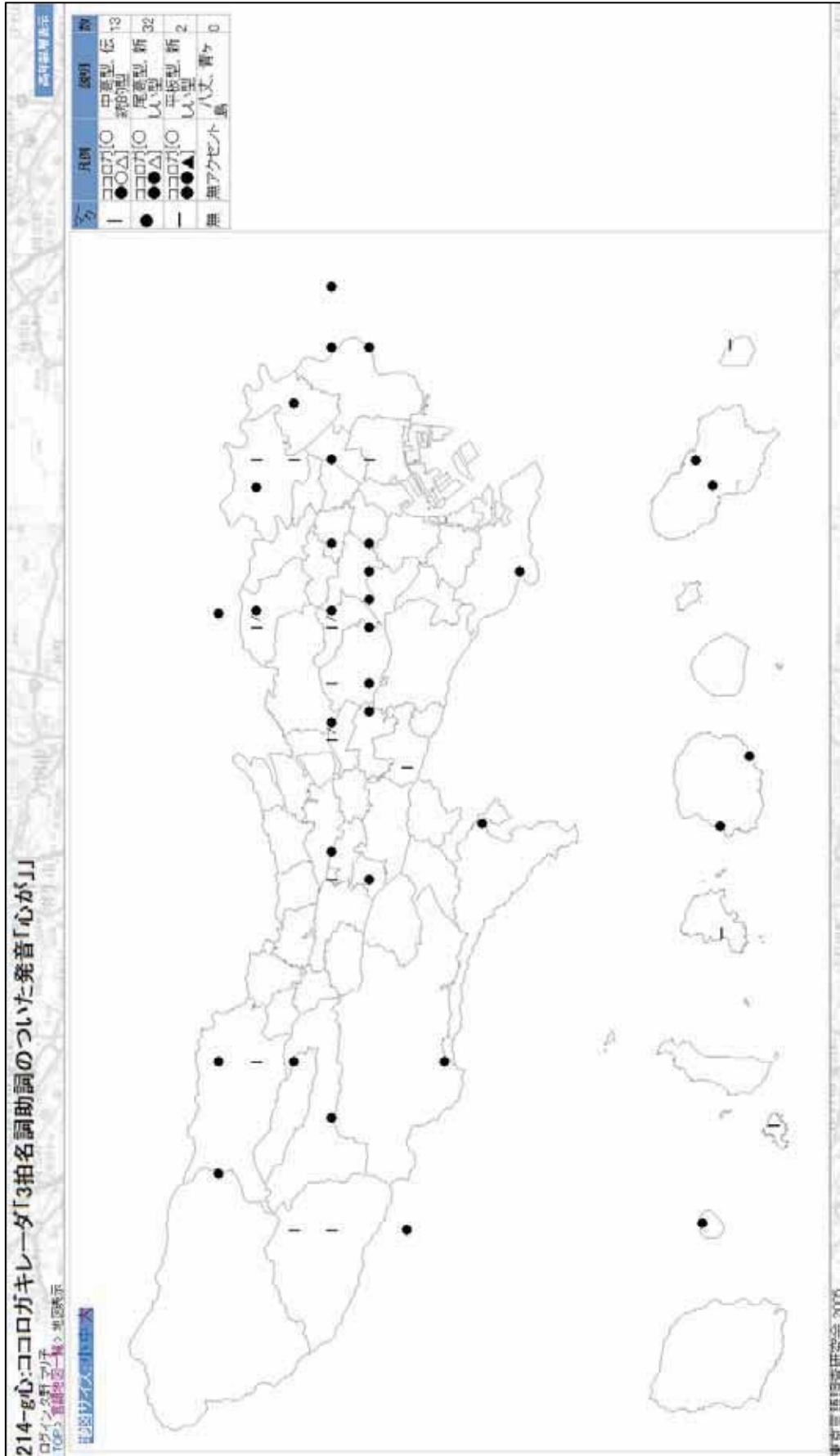
高年齢層表示

地図サイズ: 1000x1000

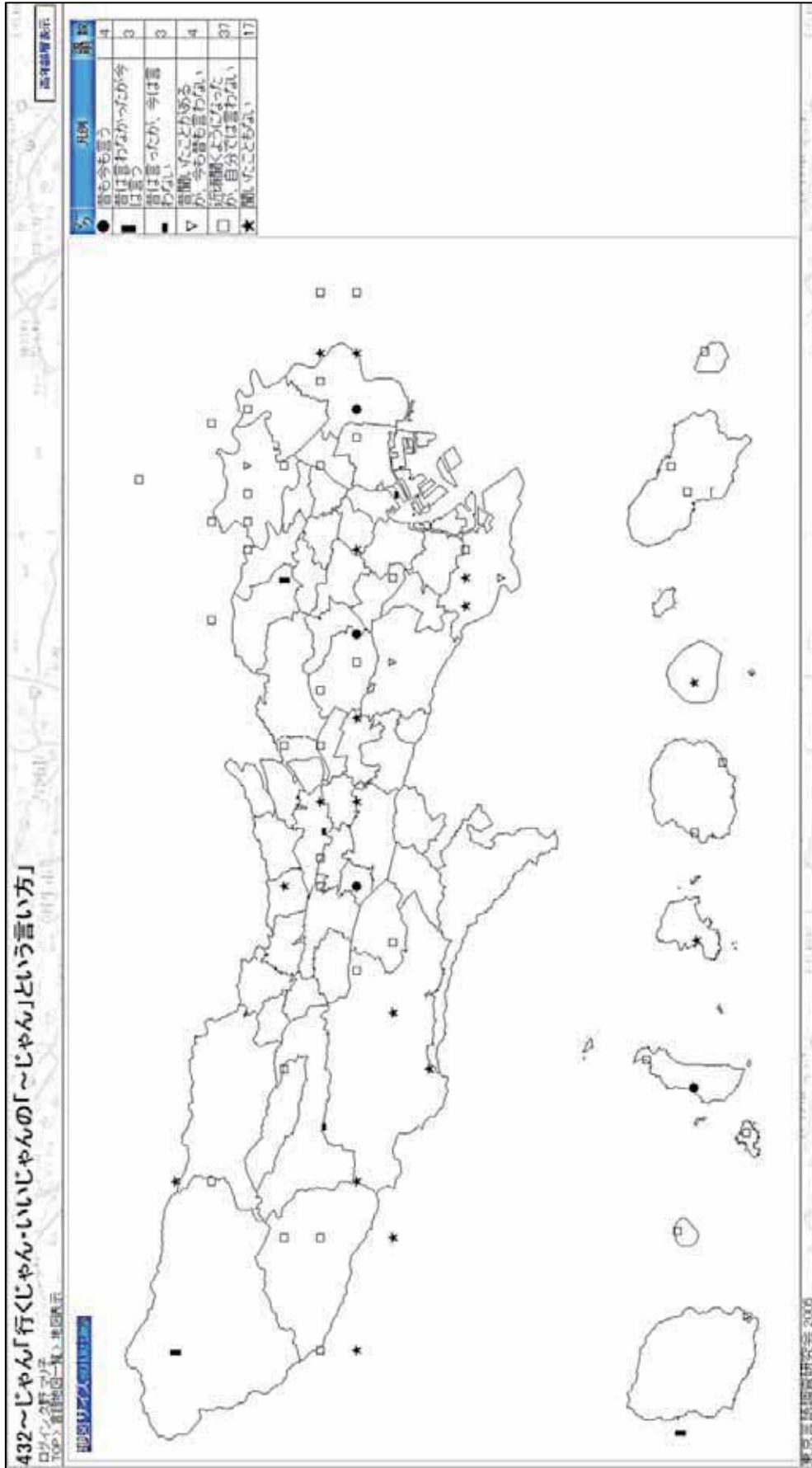
発	凡例	説明	数
1	コロガ[○ ●○△]	中高型・伝 統的型	48
●	コロガ[○ ●●△]	尾高型・新 しい型	10
一	コロガ[○ ●●△]	平板型・新 しい型	2
無	無アクセント	八丈、青ヶ 島	3



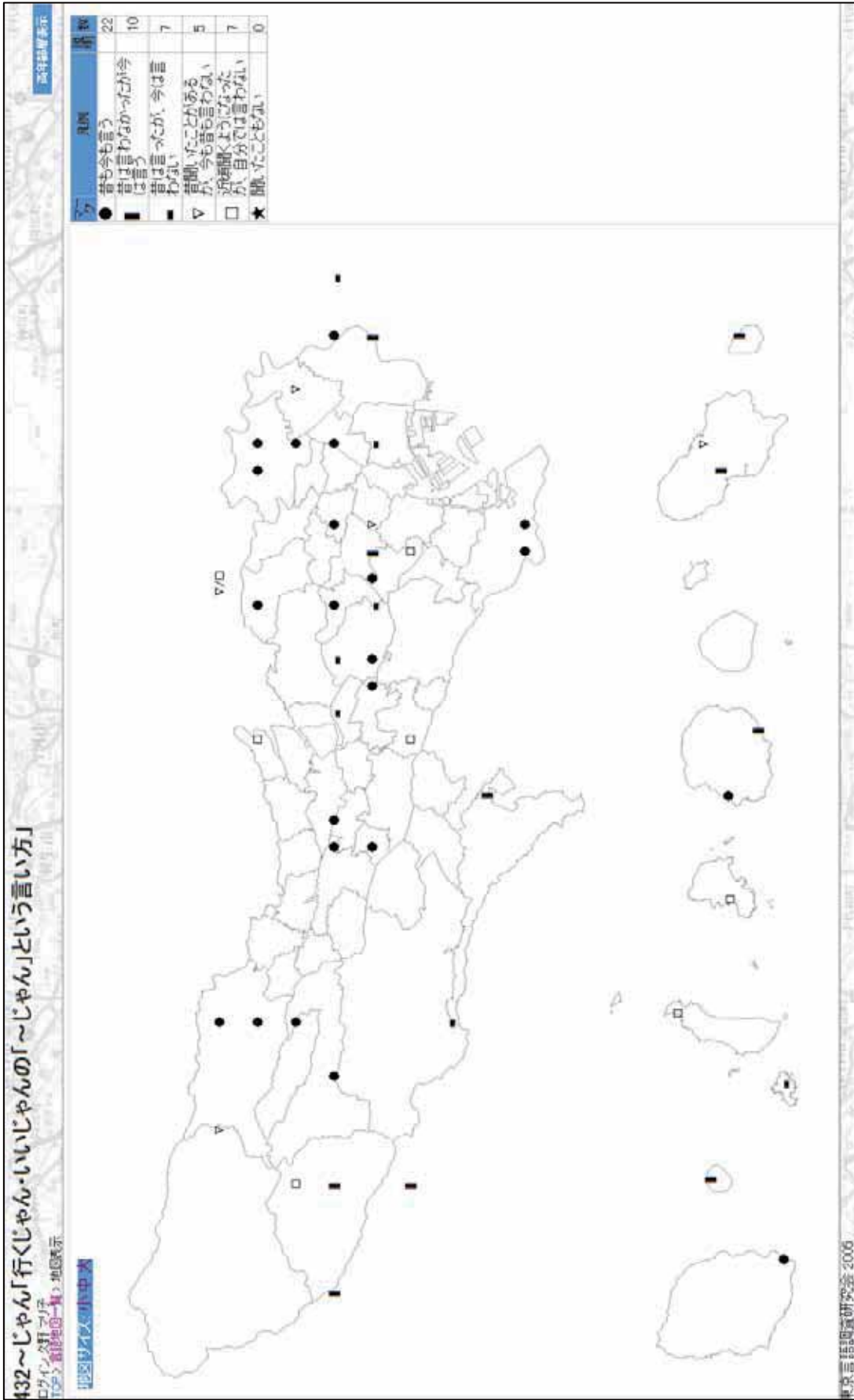
地図9 「心が」中高型のアクセント(高年齢層)



地図10 「心が」中高型のアクセント（若年層）



地図11 ～じゃん「行くじゃん・いいじゃん」(高年層)



地図12 ~じゃん「行くじゃん・いいじゃん」(若年層)

「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して*

鎌水 兼貴

(国立国語研究所)

1. はじめに

「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関しては、これまで多くの研究者が言及してきている。本稿では「東京」ではなく「首都圏」という観点から、術語の整理自体は志向せず、議論の上で必要な背景や観点に関して考察するという位置づけで論じていきたい。

1. 1 新しい世代の方言使用を説明する枠組

現代日本語における「共通語」化は、国立国語研究所の設立（1948年）当初より長らく調査の主要なテーマであった。当時は、近代化の進展によって各地の方言使用は衰退し、共通語に交替していくという単純なモデルが考えられていた。しかし、調査が進展するにつれて、単純には共通語使用に向かわないという実態が明らかになった。さらに、共通語を習得しても方言と切り替えて使い分けていることや、方言自体も伝統的な状態から変化しているということがわかってきた。

1970年代後半になると新しく生まれた方言形が注目されるようになり、井上史雄によって「新方言」という術語が提唱された。また1980年代になると中間言語の観点から真田信治による「ネオ方言」が提唱されるようになった。「新方言」「ネオ方言」を軸として、1990年代には、共通語化の進展に伴う新しい世代の方言使用を説明する枠組の模索が進み、整理のためのさまざまな術語が提唱された。

国立国語研究所による1991年の鶴岡調査の結果（国立国語研究所2007）に代表されるように、1990年代は全国で共通語化がほぼ完了した時期といえる。共通語化が完了してもなお方言使用が続いているという状況に対して、佐藤(1992)が「方言安定期」と命名するなど、1990年代はそれまでの研究を総括するのにふさわしい時期であったといえよう。おうふうによる『地域語の生態シリーズ』全6篇(1996)や、小林・篠崎・大西編(1996)『方言の現在』（明治書院）、言語編集部(1995)『変容する日本の方言』（大修館書店）など、この時期らしい研究が多く世に出た。

1. 2 研究背景の変化

こうした研究の背景には、調査研究の蓄積だけではなく、学問的要因や社会的要因も関係している。1990年代は、真田ほか(1992)『社会言語学』（おうふう）や、社会言語学研究会（現・社会言語科学会）の発足（1994年）、日本方言研究会第60回大会シンポジウム「言語地理学と社

* 本稿は、「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」研究発表会（2011年10月30日 國學院大學）指定討論用資料『「首都圏の言語」をめぐる概念と用語に関して』を元にして、大幅に加筆・修正したものである。

会言語学の間」（1995年）にみられるように、方言学の中に社会言語学の概念を導入しようとした時期でもあった。それまで「地域差」「世代差」「場面差」といわれてきたものが、「変異」「コード」「スタイル」「レジスター」といった概念によって再定義された。方言と共通語の「二言語併用」の研究や、方言使用における「言語意識」の研究も盛んになった。

社会言語学の影響だけでなく、日本社会の変化も大きく関係した。一般的な方言学的調査における話者は老年層が中心である。1990年代までは、明治（～1912年）・大正（～1926年）生まれの、伝統的な地域社会の中で生育した人々に対する調査が実施可能であった。しかし当時すでに社会的活躍層は、戦後生まれの中年層・若年層へと移りつつあった。彼らは国内の産業構造の変化や、交通・通信手段の発達による影響を強く受けており、言語使用における変化も大きい。特に共通語の使用能力の向上が著しく、若年層における伝統方言の使用能力の衰退が問題化した時期でもあった¹。共通語使用能力の向上は、東京における低いスタイルの普及にもつながり、新しい方言ブームの基礎にもなっている²。

概念の整理がなされた時代から約20年が経過した現在、日本語は再び大きな転換点を迎えるようとしている。戦前期に言語形成期を終えた人々に対する調査は、今後は困難になり、戦後に生育した人々がほとんどになる。首都圏でも、後述する「首都圏移住二世」が社会的な活躍層となり、若年層は三世・四世になってきている。このことは首都圏の言語にも大きく影響を与えていると思われる。

1. 3 首都圏構成員の変化

首都圏に関しては、1980年代に井上史雄や荻野綱男によって東京周辺地域の調査が行われ、東京にも新方言があることがわかった。井上・荻野(1985)はそうした現象を「東京新方言」と名付け、他地域の新方言とは異なり全国への発信力をもっているとした。このころから標準語とも共通語（全国共通語を指す）とも異なる、ややだけた場面でも全国で理解（使用）可能な「首都圏の言語」が意識され始めたといえるだろう。

背景には、首都圏の構成員の変化がある。首都圏では、終戦の経済発展にともなう労働力の需要から、多くの人々が東京とその周辺部へと流入し、人口の社会増加が自然増加を大きく上回る状態が続いた。そのため、首都圏（1都3県、東京・神奈川・埼玉・千葉）の人口は、1950年の1300万人から1970年の2400万人と、20年でほぼ2倍になった。そして1960年代後半からの「第二次ベビーブーム」以降は、移住二世の自然増加の影響で、自然増加が社会増加を上回るようになり（図1）、「首都圏移住二世」とでもいうべき人々が多数となっていった。

¹ 山形県三川町の「全国方言大会」（1987～2003）などに代表される、初期の方言再評価と関係する。研究分野においては、1990年代後半から「危機言語」や「消滅に瀕した」という具体的な危機意識をもったキーワードが使われるようになり、伝統方言の記述的調査研究の動きが広がった。

² 2000年代前半のテレビ朝日系「Matthew's Best Hit TV」内コーナーの「なまり亭」は、タレントの方言と共通語の切り替え失敗を楽しむ企画であった（進行役が大阪出身者である点も興味深い）。これは視聴者も出演者も共通語能力が完全であることを前提としている。方言は、特定の地域の人を対象としない楽しみ方（共通語との距離を楽しむ）が可能になったといえる。こうした流れは、2005年の女子高生ケータイ方言ブームや、2010年代の独立放送系「方言彼女。」「方言彼氏。」人気にもつながっていると思われる。

移住一世・二世は新しく造成された新興住宅地に集住することが多く、古くからその土地に住む人々との交流が少ない。しかも移住者の人口のほうがかつ圧倒的に多いため、その土地の伝統方言の継承が困難になる。

こうした首都圏移住者の言語使用に関しては、井上(1987)の埼玉県の高校生親子の研究や、井上(1989)の東京都の大学生の研究がある。首都圏における伝統方言形の急速な衰退や、新現象における東京とその周辺部とが連続性などが明らかにされている。従来の「東京」という地域ではなく、広域の「首都圏」で使用される方言研究が必要となったといえる。

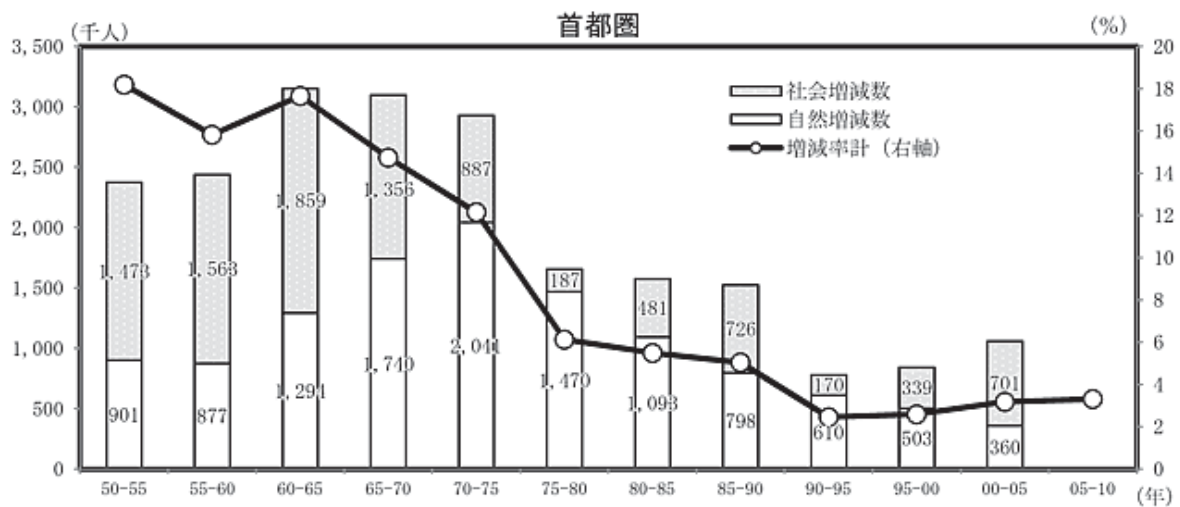


図1 首都圏の人口増減推移 (内閣府 2011)

2. 地域としての「首都圏」

首都圏の言語を考える上で、重要となるのがその範囲である。首都圏の中心は東京であり、東京や、その前の時代の江戸について考える必要がある。そして、その範囲は、時代の経過とともに拡大を続けて現在に至っている。そのため「東京」「首都圏」に対する意識もまた変化し、言語とも関係している。東京の言語に関する代表的な先行研究としては、田中(1982)、飛田(1992)、秋永(2004)、土屋(2009)などがある。

2. 1 東京・首都

東京は日本の首都であるため、「東京都」や「東京 23 区」といった行政区画を意識しやすい。しかし、本稿で問題とする「首都圏の言語」の地理的範囲は、東京都の外側の周辺地域も含んでいる。この「周辺地域」には行政区画的には東京都となる多摩地域も含まれる。「東京圏」という場合、中心である東京に力点が置かれるが、本稿で扱う対象は、東京の周辺地域に意味があると考えている³。そのため「東京」という語が入らない「首都圏」が適当と考える。

³ Yarimizu & Mitsui (2012)の首都圏の大学生調査の結果から、東京をとりまく周辺地域の言語使用には、東京中心部とは異なる特徴があることが明らかになってきている。もし周辺部であることに意味があるとしたら、「首都圏」という語を積極的に用いる必要性も高まると思われる。

しかし一般的には、「東京」でも「首都圏」でもほとんど違いはない。そのため「東京の言語」と「首都圏の言語」の違いは、微細なものであり、「共通語」ともあまり変わらないであろう。こうした使用地域による方言意識の違いも重要な問題である。

2. 2 旧東京 15 区・東京 23 区

東京 23 区は旧東京市の区画であり、自治体としては分割されているが、「東京特別区」として統計などでは 1 つとして扱われることが多い。

江戸時代の「大江戸」は「朱引」と呼ばれる範囲を指し、そのやや内側に町奉行が管理する範囲である「墨引」が存在する。これらの範囲は、江戸から改称した東京市でもほぼ変わらず、東京 15 区（1878 年成立）に近い。山手線（とその周辺部）に下町（隅田川東岸）を加えた部分に相当し、現在でも東京の中心部として意識される範囲といえる。

明治以降の東京の拡大にともなって、旧 15 区を囲むようにして、隣接郡部を統合したものが、旧東京 35 区（1932 年成立）である。この範囲はほぼ現在の東京 23 区（東京特別区）に引き継がれている（図 2）。旧郊外も含む広い地域であるため、「都心」という場合には、主に旧 15 区（狭義には、現在の千代田区・中央区・港区部分のみ）を指す。

いわゆる「山の手」「下町」地域も、旧 15 区の中で区別されるものだが、現在ではその連続体である 23 区南西部と 23 区北東部が、同傾向の性格をもつ地域となっている。



図 2 東京 23 区・旧東京 15 区 (①~⑮) ・旧東京 35 区 (①~⑳)
(秋永 2004)

2. 3 多摩地域・都下

「県下」が「県内」と同義なのに対し、「都下」は東京「都」の「下（シモ）」である多摩地域を指し、東京 23 区と区別される⁴。多摩地域は江戸の水源として、玉川上水など、江戸時代から江戸と密接な関係がある地域である。明治維新後、武蔵国がおよそ東京都と埼玉県との2つに分割（一部、神奈川もある）された際に、江戸は東京市となり、東京都の一地域を占めた。そのため東京都は、東が東京湾、西が山地という、東西に細長い形状となった。

東京市は、旧東京 35 区に拡大した段階で、すでに行政区画上の東京都の北端・東端・南端まで到達していた。そのため「東京」の伸びる余地は、西側の多摩地域以外にない状態となった。

なお、東側は下町地域との連続体となるが、西側は山の手地域の連続体となる。そのため、戦後に東京 23 区の範囲を超えて拡大した際に、山の手地域の拡大の受け皿となった。

2. 4 首都圏

「首都圏」の定義は様々で、詳細を論じるものではないが、大別すると以下の考え方がある。

- (1) 関東 1 都 6 県（関東地方）＋山梨県
- (2) 関東 1 都 3 県（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）
- (3) 東京都市圏（東京 50km 圏、東京 70km 圏、その他、通勤通学者の割合などで定義）

範囲としては、(1)>(2)>(3)の順に狭くなる。(1)の 1 都 7 県は「首都圏整備法」（1956 年制定）における範囲で、鉄道・道路などの交通網やテレビなどの放送もこの地域で行われている。方言区画的にもほぼ関東方言に相当する範囲であり⁵、首都圏の言語の基盤となっていると考えてよいだろう。

首都圏の中心である東京と接触する範囲となると、ずっと狭くなると思われる。(3)の東京都市圏は、国勢調査などの政府統計で多く使用される範囲である。日常的に通勤・通学や買物などで東京を往復できる距離であり、50km 圏や 70km 圏などが設定される。通勤通学者比率などから市区町村単位で算出されるが、都・県の内部で分割されてしまうため、統計資料では、都県単位の簡便な、(2)の 1 都 3 県を首都圏とすることが多い。

東京の影響圏は、東京 23 区外まで拡大しているが、東京都内の拡大の余地は西側にしかない。北側は埼玉県、東側は千葉県で、ともに東京都の下町地域と地理的に連続している。埼玉県は東京都の多摩地域と長い県境によって接しているが、東京都から放射状に延びる交通網は、周辺の都市間の交通は貧弱であり、接触は少ない。

一方、南側は神奈川県であるが、神奈川県は近畿（上方）へと続く東海道や、港湾都市として発展している横浜のほか、京浜工業地帯もある。このため、神奈川方面は、埼玉、千葉方面と比較して早くから発展している。また多摩地域と同様に山の手地域と地理的に連続としている。

⁴ 東京旧 35 区内で旧 15 区でない地域（旧郊外 20 区）は「都心」扱いにならないことが多いが、すくなくとも「都下」には扱われないであろう。

⁵ 山梨県郡内地方は、方言区画としては西関東方言に属する。

2. 5 中心・周辺関係からみた首都圏

前節の点から「首都圏」を考える場合、「東京 23 区」「多摩地域」というような地域区分でとらえるのではなく、「東京を中心とする範囲」として中心・周辺という関係からとらえることが必要である。すなわち首都圏とは、核となる東京 23 区を中心に、周囲を埼玉（北）、千葉（東）、神奈川（南）、多摩（西）に囲まれた地域と考えることができる。

中心となる東京 23 区の内部は、主に下町と山の手 の 2 地域に区分できる。北東部が下町、南西部が山の手に相当するが、この北東部・南西部の区分は、旧東京 15 区（旧江戸）における下町・山の手から拡大している。言語的にも、伝統的な下町方言、山の手方言は旧 15 区の狭い範囲で使用される方言を指すのが普通であり、注意する必要がある。

現代日本語の話しことばは、東京方言、特に山の手方言が基盤とされている。「首都圏」を中心・周辺という関係からとらえる場合、東京都北東部（下町地域）を「中心」と考えてよいかという問題が生じる。地域方言としての「東京方言」「東京弁」には下町方言は含まれるが、現代の言語的中心という点では、下町方言は入らない可能性がある。Yarimizu & Mitsui(2012)や鎌水・三井(2013)の大学生調査では、山の手と下町の間言語的境界がみられる反面、下町と埼玉・千葉の間には言語的連続性がみられるとしている。

Yarimizu & Mitsui は、現代首都圏若年層における、東京山の手地域を中心とする 3 重円からなる周圈的言語分布モデルを作成している（図 3）。東京山の手（東京 23 区南西部）とその連続地域（多摩東部）を言語的中心とし、それを取り囲むように、中心とは異なる性質を持つ地域が分布するとしている。この場合、周辺部とは、東京 23 区北東部～埼玉南部（北）、東京 23 区北東部～千葉西部（東）、神奈川北部（南）、多摩東部（西）となる。

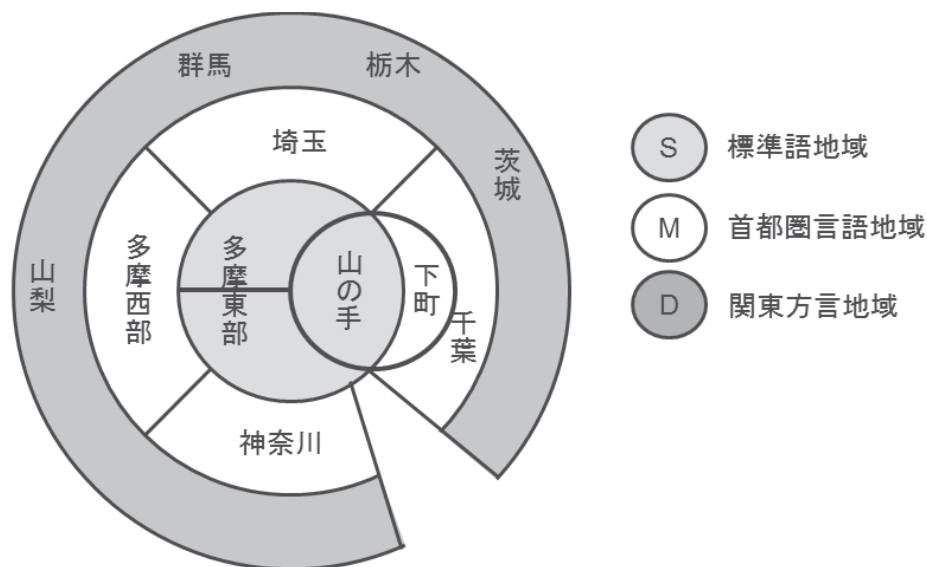


図 3 首都圏における言語分布モデル (Yarimizu & Mitsui 2012 の改変)

2. 6 構成員における「はえぬき」の割合

言語を考える上で、地域社会の構成員は非常に重要である。前述のように、戦後の首都圏における人口増加は、はじめは社会増加が多く、それから自然増加となった。しかし、もっと狭い地域で考える場合、もともと江戸・東京は人口の流出が多く、伝統的な地域社会のように、出生地・生育地に一生涯居住し続ける人ばかりではなかったと思われる。

図3は、地域社会の住民構成の2世代の変化を示したものである。「はえぬき」は、その土地に従来から住む人と新規出生者からなり、「よそもの」は、以前から住んでいる転入者と他地域からの新規転入者からなる。転入者と出生者は次世代の構成員となるが、転出者と死亡者は次世代の構成員からは外れる。

人口移動の少ない伝統的社会においては、その土地の「はえぬき」が多数を占める(図4上)が、首都圏(大都市一般でも当てはまると思われる)では、「はえぬき」が少数になってしまう(図4下)。

世代別にみると、伝統的社会の場合は、第1世代と第2世代とで構成員の交代は少ないが、首都圏では構成員の交代が多くなる。土地の「はえぬき」の人々が、住民構成の少数派になる地域社会においては、従来の伝統的な方言使用は保持されない可能性が高い。

ただし、首都圏の特に第2世代では、「はえぬき」が少数であっても、転入者に「首都圏生育者」、すなわち近隣地域での生育者が多い可能性がある。この場合、首都圏においては、その土地に限られた伝統方言の保持は難しいとしても、首都圏内で広く流通するような「方言」に関しては維持・発展する可能性がある。ただし、それを使用者が「方言」と意識しているかについては、また別の問題となる。

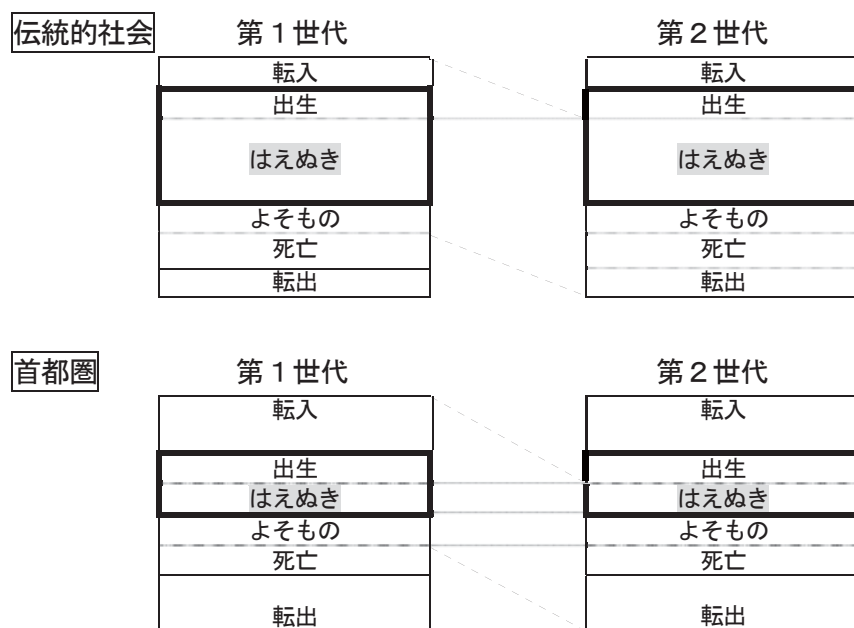


図4 伝統的社会と首都圏における地域住民構成

3. 「首都圏の言語」を考えるための観点

3. 1 標準語⇔共通語

標準語と共通語は、一般的には区別されず同じように用いられる状況がある。そのため、定義が厳密であっても、実際の術語使用上はあまり変わらないという問題がある。さらに、首都圏の言語は、そうした標準語・共通語の基盤言語であるため、一般に「首都圏（東京）のことば」も含めて、「共通語」「標準語」などと同義に使われる傾向がある。以下に、それぞれの術語の定義の特徴を示す。

標準語 : 規範性が重要である（正しさを定めることが重要。「ゆれ」を許容しない）

共通語 : 非地域的が重要である（どこでも通じることが重要。「ゆれ」を許容する）

共通語については、戦後まもなく国立国語研究所(1951)によって「全国どこでも通ずるようなことば」「どの地方の出身地かわからないようなことば」といった定義がなされている。通用範囲が広いために地域の特定が難しくなる。「地域共通語」といった全国でない場合にも使われる。

標準語には「人為的」「理想的」いった定義もなされるが、戦後の「共通語」という術語の普及で、議論があいまいなまま放置されたと考えられる（柴田 1988）。基本的には規範性、すなわち「正しさ」を求めるものと考えてよいだろう。唯一の正解を定めるため、「ゆれ」は許容されないことになる。

真田(1996)は「ネオ方言」の定義に際して、標準語はスタイルの問題、共通語は分布の範囲の問題としている。この定義では、標準語は定められても、運用上使用者がそれを規範的と思うかどうかによって左右されることになる。規範の認識のずれもありうるため、正しいと思って誤った形式・用法の標準語形を使用してしまうこともある。真田はこれを「疑似標準語」としている。

「共通語」についても調査をすることで客観的な分布領域は調べられるだろう。しかし、それよりも、使用者がその形式の通用する範囲をどう意識しているか、どの程度通用すると意識しているかといったものが関係するのではないかと思われる。

公的場面では「規範的かつ非地域的」である形式が望まれるため、結果として標準語と共通語は区別されにくい。術語上の区別をする前に、このような概念には規範性と地域性の2つの側面があり、それぞれ実態と意識から連続的にとらえることが必要ではないかと思われる。

3. 2 公的⇔私的

公私という分類はよく用いられる。フォーマルかカジュアルか、という言い方もある。これにはいくつかの側面があると考えられる。ここでは以下の3つをあげる。

- (1)丁寧度 ぞんざいか丁寧か（低文体か高文体か）
- (2)使用場面 親密か疎遠か
- (3)使用範囲 地元で使うか否か

(1)はおもに言語側、(2)(3)はおもに使用相手と関係する。ただし(2)については親疎だけでなく、「大勢の人の前」のような状況的な考え方もありうる。(1)と関連して、厳粛な状況か遠慮が必要な状況かどうか、などということも関係する。「大勢の人」の場合は「疎遠の人」「他地域出身者」含まれやすくなり「遠慮が必要」であることが多い。丁寧であることは、前節の「標準語」の規範性とも関係する。同様に(3)は、「共通語」の通用範囲とも関係する。

以上から、公的・私的といっても、含まれる要素は広く、実際には(1)～(3)は重なることが多い。総合すると、

- 公的場面 : 「全国の／他地域の」「知らない人」を相手に「丁寧に」話す場面
- 私的場面 : 「地元の」「よく知っている人」を相手に「ぞんざいに」話す場面

ということになるが、公私の境界は連続的な部分もある。

共通語化の進展により、公的場面では共通語を、私的場面では自身の生育地域の方言を用いるというように、多くの地域で2変種併用状態になった。つまり共通語と方言の切り替えは、コードの切り替えでもスタイルの切り替えでもある。

表1は、一般に想定されている共通語と方言の使い分けの状態を示したものである。この表では、共通語と方言の使用は明確に分かれている。

しかし、首都圏の言語においては、(3)の使用範囲が問題となる。首都圏の人々は、自身の使用言語に地域性があることを意識しにくく、日本全国どこでも通じると考えている。コード切り替えの意識がなく、スタイル切り替えのみの場合、「ぞんざい」か否かは地域性と無関係となる。

そのため、本来想定されていない、「全国で（他地域で）」通用する「ぞんざい」な形式が、首都圏の言語においては存在することになってしまう。

表1 共通語と方言の切り替え

	全国で（他地域で）	地元で
丁寧	共通語	(方言)
ぞんざい	なし(想定外)	方言

3. 3 方言⇔俗語

「ぞんざい」な形式としては、「俗語」がある⁶。俗語には、日常生活で多く用いられる「丁寧でない形式」と、罵倒語や反社会的な語、下品な語のような日常生活ではあまり用いられない「積極的に卑俗な形式」とにわかれる。

そのため表1のような二分法では表現しにくいのだが、大きくわけて、「ぞんざい」な形式が、公共の場で使用されることは想定されてこなかった。そのため俗語が教育場面で扱われることはなく、共通語が何か議論されることもない。

公的な流通が制限され、広範囲での言語的交流が行われなため、分布領域が限定されるものがあり、これは方言として扱われる。真田・友定(2011)による罵倒表現の全国調査では、地域的に多様なバリエーションの存在が示されており⁷、俗語と方言が密接に関係していることがうかがわれる。

しかし、通信手段の発達により、テレビ・インターネット等による広範囲の遠隔コミュニケーションが容易になった現在、娯楽目的に日常的会話を共有する必要性が生まれてきた。そのためには、地域性を持たないぞんざいなことばが必要になる。首都圏のくだけた形式は、共通語のくだけた形式として採用されやすい。

そういった地域性をもたない低いスタイルの需要は、ドラマやマンガ、流行歌などに多い。金水(2007)や定延(2011)は「役割語」の概念によって、地域性が登場人物の性格を決めてしまうことを説明しており、非地域的な主人公が共通語を使用しやすいことが述べられている。このとき低いスタイルも含まれてしまうため、首都圏の方言形も含まれる⁸。全国的に使用されるくだけた形式として、共通語と似たようにふるまうことになる。

芸能という点では、関西方言も一定の影響力を保っており、一部の関西方言のくだけた形式が、全国に広まることがある。関西方言の広がりについては、陣内・友定(2005)の研究がある。俗語形は共通語が定められないぶん、関西方言も一定の影響力を持っているものと思われる。2000年代初期までは関西方言とみなされていた程度副詞「めっちゃ」は、10年の間に全国の若年層に普及し、地域差を意識せずに用いられている。

「雅語」とは異なるが、俗語と対極的な位置にある非常に丁寧な形式として「敬語」がある。しかし表1のように、丁寧な場面に関しては、各地域の方言形式が用いられることも多い（敬語が未発達の地域もある）。ただし丁寧な場面は共通語的でもあるため、敬語形式もまた、共通語の影響を受けやすいと思われる。

⁶ 洗練された「雅語（雅言）」の対比としての「日常語」の意味ではなく、くだけた場面で用いられる卑俗なことばをさす。

⁷ 公的に使用されない場合、他地域での使用状況はわかりにくいいため、地元だけの方言と思われる可能性もある。

⁸ 1995年にヒット曲「DA.YO.NE」の方言翻訳ブームがあったが、ラップが一般的ではなかった当時、従来の歌詞からはるかに低文体の首都圏の話しことばが全面に出るラップの歌詞は、他地域では（特に作り手世代にとって）受け入れづらかった可能性がある。

3. 4 意識⇔無意識

首都圏の言語を考える上では、コードの切り替えが意識的に行われているかどうかも重要な視点となる。前述の「俗語」のように、共通語を使用中に、あえて卑俗な表現が必要となった場合、気づかずに話者の方言形式から選ばれてしまうことがある。一般には、社会文化的に多くの人の耳に入りやすい首都圏の形式が選択されることが多いが、当の首都圏出身者は、そういった選択の意識をせずに使用していると思われる。

東京都教育委員会(1986)において、東京都出身者は東京の伝統方言形を単に「俗語」として認識していることが報告されている。また、田中・前田(2011)の調査でも、首都圏出身者は方言と共通語の切り替え意識が希薄であるとされている。

方言形だと気づかないで使用してしまう、いわゆる「気づかない方言」とも関係するが、首都圏のように方言使用に対する意識が低い場合は、たとえ方言だと分かったとしても、修正せずに「俗語」とみなして使用し続ける可能性が高い。この「俗語」がマスコミ等を通じて、全国的に認知されるようになると、全国で使用されるくだけた形式として、共通語的な地位を獲得することになる。

首都圏においては、自身の使用する言語形式がすべて全国的に使用されている、と考えているのではなく、自らの言語を無標的にとらえているために、言語使用に関する意識そのものが低いと思われる。

3. 5 理解⇔使用

「全国的に通じること」と、「全国の人が日常的に使用していること」はイコールではない。首都圏以外の人々は、共通語と方言の二言語併用状態にあり、日常では方言が中心である。しかし、前述のように、首都圏出身者はこの点に関しても無自覚である。

形式は、意味を理解できていなくても、音声や文字によって伝播が可能である。そのため、共通語形や俗語として普及する首都圏の方言形が、どの程度意味やニュアンスまで共有されているかは不明である。

高橋(1996)は、新語の使用調査において、意味を正しく理解していない場合があり、そのために言語変化を引き起こしうることを示している。また、方言形であることを気づかないまま公の場で使用する、いわゆる「気づかない方言」には、共通語にも存在する形式で、意味がずれているというものが多くある。

そのため、首都圏から全国に広がる俗語形式についても、どのような意味で理解・使用されているのかについて調査を通じて考える必要があると思われる。このことは、ぞんざいな形式に限らず、共通語についても同様で、共通語内の意味や用法の差異を調査することが重要であろう。

4. 「新方言」「ネオ方言」と首都圏の言語

井上史雄による「新方言」と、真田信治による「ネオ方言」は、首都圏の言語を考える上で重要な概念である。類似した現象を指すものであり、その点についても確認する。

4. 1 新方言とネオ方言の違い

新方言とネオ方言の違いとして、しばしば言及されることとして、個別的か体系的かという点がある。以下に両者の定義をあげる。

新方言 : ①増加傾向 ②非共通語形 ③改まった場面で不使用(方言と認識)

ネオ方言 : ①体系的 ②標準語の干渉(中間方言) ③改まった場面でも使用可能

新方言については井上(1985,1994)や井上・鎌水(2002)などで「3原則」として仮の定義⁹をしている。一方、ネオ方言については真田(1996)の説明からまとめたものであり「原則」があるわけではない。両者の違いとして「新方言は個別的、ネオ方言は体系的」「新方言は言語変化、ネオ方言は中間方言」「ネオ方言はスピーチスタイル」、といった説明がなされる。しかし「方言」自体に個別的、体系的両方の側面がある。どちらの術語もスタイル切り替え(改まった場面で用いるか否か)について言及しており、個別的か体系的については言われるほど意味はないと思われる。

両者を「共通語形の干渉」という条件下で比較すると(ここでは「標準語」「共通語」の違いは述べない)、共通語コードとの切り替えという点では同様であり、異なるのは伝統方言コードとの切り替えを言及しているか否かだけである。

両術語が大きく異なるのは、提唱の時期と調査環境による共通語化モデルの違いであろう。井上が新方言を提唱する以前(1970年代まで)の方言学では、共通語と方言の二言語併用状態が想定されておらず、単純な共通語・方言の交替モデルが中心であった。また、井上の調査フィールドである東日本方言は、東京方言・共通語との言語的類似性が高く、地理的な東京の影響も強いため、短期間での交替が起こりやすい環境にある。共通語が強力な環境であるため、共通語形に類似した形式であっても、方言と扱われて共通語と切り替えられることを重要視したと考えられる。

一方、西日本を調査フィールドとした真田にとって、単純な交替モデルは地域内の言語使用感覚にあわなかったと思われる。東日本のような東京の強い影響下でない場合、簡単には共通語に交替しない。しかし日常的な高いスタイルでの言語使用の需要は存在する。これは広域方言化とも関係しており、「関西共通語」に近い位置付けをすることができる¹⁰。

⁹ あくまで判断しやすくするための定義であり、井上・鎌水(2002)でも定義に議論があることが述べられている。

¹⁰ 「関西共通語」という場合は、共通語(標準語)の干渉である必要はない。個別には、内的変化や近隣方言との接触による、共通語との干渉でない「新方言」も多く存在する。真田の定義では、ネオ方言の地域性については述べられていないが、地域内の改まった場面で使用されるという点では「地域共通語」として機能すると思われる。関西以外の西日本においては、関西方言が「西日本共通語(標準語)」として機能し、他地域の方言コードに干渉することがあり(陣内1996)、西日本の言語状況を複雑にしているといえる。

4. 2 中間段階の体系の位置づけ

ネオ方言コードは、伝統方言コードから見れば共通語的（改まっている）だが、共通語コードからみれば方言的（くだけている）であり、中間段階を一つの体系とみなすことが重要とされる（図5）。新方言の切り替え対象が共通語だけであるのに対して、ネオ方言の切り替え対象は共通語（標準語）と従来の方言の両方ということになる。

変化初期の世代では、ネオ方言は方言との切り替えにおいて共通語的に機能するのに対し、時間が経過すると、ネオ方言は共通語との切り替えにおいて方言的に機能する。井上(1996)は、ネオ方言の理論的体系としての意義は認めているものの、安定した体系を保持するか否かについては懐疑的である。この点については真田(1996)も「標準語とネオ方言」「ネオ方言と伝統方言」という2体系だけの使用者がいるとしている。陣内(1996)のモデルでは、個人内に3体系が併存するというより、個人的には2体系で、社会的に3体系が併存するとしている。

個人的な言語変化の場合、中間言語体系は個人内で新たに生まれることになるが、社会的な言語変化の場合、個人内の体系は変化せず、世代の入れ替わりによって変化する。社会的な言語変化の場合、世代によって「方言対共通語」の指す内容が異なることになる。

以上から、中間的な体系とされるネオ方言は、個人内の変化と世代の入れ替わりによる変化の違いを考える必要があるだろう。前述の「理解⇔使用」という観点でも述べたように、非使用のコード（理解のみのコード）については理解内容が不正確である可能性がある。

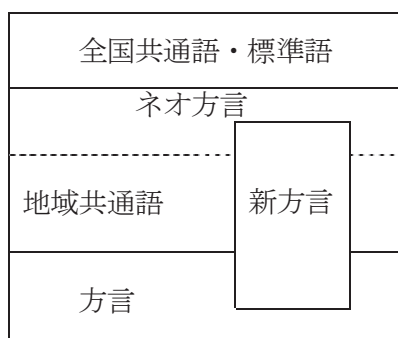


図5 ネオ方言と新方言の関係

4. 3 首都圏における新方言・ネオ方言

新方言・ネオ方言ともに、共通語との切り替えが意識されている。そのため、共通語にもっとも近い言語を使用する首都圏において、このような現象があるか、ということが問題となる。

井上(1994)は、東京で広がる口語的新表現を「東京新方言」と命名している。東京新方言は、初期には東京を中心とした分布領域を持っているが、東日本を中心に全国に発信されることにより、地域性がすぐに失われてしまうものが多い。このため東京では、東京新方言は「新しい俗語¹¹」でしかない。方言という認識がなく、ある程度改まった場面であっても口語的に使用されてしまうため、新方言の3条件目（「改まった場面で不使用（方言と認識）」）が成立しにくい。共通

¹¹ 俗語は「丁寧でない語」と「積極的に卑俗な語」とに分かれるが、後者のような新形式については「新俗語」（井上・荻野 1985）という命名もある。

語ほどに改まってもいないため、スタイル的にはネオ方言に近くなる。実際、東京新方言と呼ばれるものには、関東地方の伝統方言形が変質したものも多い。これを「共通語の干渉」とみなせば、東京新方言、すなわち、首都圏における言語使用をネオ方言的に考えることができる。

首都圏のように、はえぬき話者が少数である地域においては、他地域よりはるかに共通語の伝統方言への干渉は大きい。しかし、逆に新しい表現が共通語そのものに影響を与えてしまう可能性がある。

4. 4 首都圏の中心である東京中心部

首都圏の言語は共通語に極めて近い。そのうえで新しい非共通語形が生まれた場合、方言として認識されないため、「伝統方言とは異なる」「俗語として認識している」という二つの特徴があると思われる。

俗語として認識されている非共通語形は、スタイルとしては共通語形より下になる。ネオ方言においては、上に共通語（標準語）が、下に伝統方言が位置することになるが、これは方言が低いスタイルである、という前提に立つ。しかし、東京中心部の方言は例外的である。

共通語の基盤方言である東京山の手方言は、もともと使用者の階層的も上位にあり、周辺地域よりも丁寧なことばづかいをしていることが報告されている。こうした地域では、俗語的なものを受け入れにくい素地があると予想される。鎌水・三井(2013)は新方言形「カタス（片付ける）」が首都圏に普及する際に、東京中心部を避けるように普及したことがわかっている。

また、Yarimizu & Mitsui(2012)は、図3の各地域において、表2のような「方言形」と「俗語形」の受け入れモデルを示している。首都圏は東京中心部（東京都山の手地域～多摩東部地域）と東京周辺部に分かれるが、どちらとも方言的なものは好まない。一方、俗語的なものについては、東京中央部は好まないが、東京周辺部は使用する。このモデルから、「共通語の俗語」の使用に代表される「首都圏の言語」の形成は、首都圏の中でも東京周辺部が主導しているのではないかと思われる。

東京中心部における方言分布資料が少ないこともあり、今後の研究を待つ必要がある。

表2 首都圏における方言形・俗語形の使用意識
(Yarimizu & Mitsui 2012 を改変)

	標準語地域 (東京中心部)	首都圏言語地域 (東京周辺部)	関東方言地域 (首都圏周辺部)
方言形	好まない	好まない	使用する
俗語形	好まない	使用する	使用する

5. おわりに

首都圏の言語に関する研究は、関東地方、東京周辺部、といった地域言語の問題にとどまらず、現代日本語の成立にも関係する大きな問題である。本稿では、そうした首都圏の言語を考える上で重要と思われる視点を取り上げ、東京とその周辺部に形成された新しい世代の言語の特徴について考察した。

本来は、関連する術語を網羅的に整理し、解説を行うことを目指していたが、全体的に首都圏の言語に対する筆者の考えを述べるだけにとどまってしまった。そのため内容的に散漫な部分が多く、論考を深めるべき点が多々残っていると思われるが、現時点の筆者の考えの記録として残しておきたい。

さまざまな調査結果をもとに、今後も首都圏の言語の位置づけについて考察していくつもりである。

文献

- 秋永一枝(2004)『東京弁辞典』東京堂出版。
- 井上史雄(1985)『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』明治書院。
- 井上史雄(1987)「東京圏の方言と共通語—埼玉県女子高アンケート—」『東京外国語大学論集』37。
- 井上史雄(1994)『方言学の新天地』明治書院。
- 井上史雄・荻野綱男(1985)『新しいことばの伝播過程—東京中学心理調査—』文部省科学研究費報告書。
- 井上史雄・鎌水兼貴(2002)『辞典《新しい日本語》』東洋書林。
- 金水敏(2007)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』くろしお出版。
- 国立国語研究所編(1951)『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』国立国語研究所報告2。
- 定延利之(2011)『日本語社会 のぞきキャラくり』三省堂。
- 真田信治(1996)『地域語のダイナミズム (地域語の生態シリーズ・関西篇)』おうふう。
- 真田信治・友定賢治編(2011)『県別 罵詈雑言辞典』東京堂出版。
- 柴田武(1988)『方言論』平凡社。
- 陣内正敬(1996)『地方中核都市方言の行方 (地域語の生態シリーズ・九州篇)』おうふう。
- 陣内正敬・友定賢治編(2005)『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院。
- 田中章夫(1983)『東京語—その成立と展開—』明治書院。
- 田中ゆかり・前田忠彦(2011)「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」『国立国語研究所論集』3。
- 高橋頭治(1996)『地域差から年齢差へ、そして...』(地域語の生態シリーズ中国・四国篇) おうふう。
- 土屋信一(2009)『江戸・東京語研究—共通語への道』勉誠出版。
- 東京都教育委員会(1986)『東京都言語地図』東京都。

- 内閣府(2011)「1. 戦後の首都圏人口の推移」『地域の経済 2011—震災からの復興、地域の再生—』
補論 1 <http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr11/chr11040101.html> (最終閲覧日 2013 年 1 月 8 日)
- 早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態(地域語の生態シリーズ関東篇)』おうふう.
- 飛田良文(1992)『東京語成立史の研究』東京堂出版.
- 鎌水兼貴・三井はるみ(2013)「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」社会言語科学会第 31 回研究大会.
- Yarimizu Kanetaka and Mitsui Harumi (2012) “A Linguistic Survey of the Tokyo Metropolitan Area Using Mobile Phones” NWAV-AP2.

【講演】私のとらえたい東京語¹

飛田 良文

(国立国語研究所名誉所員)

ご紹介いただきました飛田でございます。本来ならば、竹田さんが発表したことを私が発表するつもりで調査を始めましたが、若い人に手伝ってもらおうということで竹田さんに声をかけました。この調査を行おうとしたきっかけは、たまたま実践女子短大の非常勤講師を頼まれて社会言語学の授業を引き受けたときに東京のことばを取り上げようと思ったからでした。

東京のことばの調査というと、まず大島一郎さんの『東京都言語地図』が挙げられます。これは一定の面積で一か所を調べるという国立国語研究所の日本言語地図の方式をとっていました。しかし私は、ことばというものはそうではないだろうと考えたわけであります。人のいるところはたくさん調べる必要があります、また人が移動する方向を示すのは鉄道網であると考えました。

1. 問題の所在—「東京語」の定義の曖昧さ

以前、國學院大学から出された『東京語のゆくえ』（國學院大學編 1996、東京堂出版）の書評を『週刊読書人』に書くためにじっくりとこれを読みました。そのときに驚いたのは、「東京語」の定義が書き手によってばらばらだという点です。したがって、章ごとに頭を切り換えなければならず、内容が繋がらないということをその書評に書いたわけです。

つまり、「東京語」・「東京方言」・「東京弁」・「標準語」・「共通語」が全て同じように使われている現実があります。そこでまず東京に住む人々のことばと、そのことばを自身がどのように意識しているかということの調査を、今の社会言語学として第一にやるべきだと思いました。

そこでまず、東京駅から高尾駅までの調査を企画立案しました。学生たちが調査したい項目を加えていきましたので、調査項目は年々増えていきました。それで語彙のところがどういうわけか増えてしまったわけです。

私自身は、東京語の研究を始めてから、かれこれ 50 年になります。処女論文が「東京語の連母音『ア・ウ』の成立」（1962、『国語学研究』1）でした。東京語の時代区分を成立期、定着期、展開期と考え、そのうち成立期は『東京語成立史の研究』（1993、東京堂出版）でまとめました。定着期は、国立国語研究所の『国定読本用語総覧』（全 12 巻、1985-1997、三省堂）がその成果であり、戦後の展開期がこの実践女子短大の学生たちとの調査の成果ということになります。

¹ 本稿は、共同研究発表会（2011年10月30日(日)、於：國學院大學渋谷キャンパス）における講演の録音をもとに原稿化したものである。原稿化は椎名渉子（フェリス女学院大学非常勤講師）が担当した。

2. 「東京語」に対する意識、東京人としての意識

まずは、なぜ私が私なりの「東京語」の定義をするかということの論拠を示したいので、資料を紹介するかたちで進めてまいります。

今日、東京に住んでいる人は、自分の使うことばは東京語であり、標準語であると思っている人が多い。私自身も東京人であり、東京語の使用者であると考えている。ただ、私は千葉県に生まれ小学校入学のときから東京都武蔵野市に住み今日に至った。（飛田 1993, 5p）

私は太平洋戦争中には小学生で長野に疎開しましたが、長野のことばを学ぼうとは全く考えませんでした。子ども心にも、「自分のことばが正しい」という自信を持っておりました。

20歳以上の都民のうち、地方出身者は55%、東京出身者は45%である。さらに東京出身者の構成は、東京人二世が26%、三世が7%、四世およびそれ以上が11%である。また、地方出身者が東京へ出てきたときの年齢は、10代が44%、20代が40%で、両世代で84%を占め、その大半が就職・結婚・就学のためであるという。（奥田道大 1963「東京人意識」『人間の科学』9, 飛田 1993, 6p より）

こういうわけで、移住者を東京人と考えるか考えないかによって、あるいは東京出身であっても、一世代、二世代、三世代、四世代以上という見方があるため、いったいどこを東京人と考えるのかということを私は知りたく思ったわけでございます。

そこで調査では、土着の純然たる東京弁——立川だったら立川弁、日野だったら日野弁、八王子だったら八王子弁の、三世代そこに住んでいる家族を調査対象として選びました。そして、東京人という意識について、次のようにまとめました。

また、太平洋戦争後は住宅事情から、逆に東京生まれの人が近辺の神奈川県や千葉県など周辺に移り住む人が増加している。これらの人々は、JRや私鉄の沿線に住み、都心に通い、意識として東京人である。これは私が子どものころ長野に疎開して感じたのと同じように、東京および東京語に対する無意識の優位性・文化性を感じているからであろう。（飛田 1993, 6p）

では、そういった優位性というものを、江戸が東京になったときの東京人は持っていたのかどうかということを知るために探し出したのが、次の用例であります。江戸木挽町生まれの東京人である大槻文彦は『日本文典編輯総論』（1877年『朝野新聞』）でこのように記しています。

今此ノ会話体ヲ取りテ文章ニ交ヘンニモ東京語ヲ取ランカ京都語ヲ取ランカ其ノ適従スル所口ヲ知ラズ然レドモ我国首都ノ地後來複々此ノ東京ヲ転ゼザルノ見込アラバ終ニ此東京語（士大夫以上ニ通ズル者ヲイフ卑話ハ固ヨリ取ラズ）ヲ基本トセザルコト能ハズ（大槻文彦「日本文典編輯総論」1877/1/16『朝野新聞』，飛田 1993, 6p より）

こういうわけで士階級のことば、あるいは大夫というのをどのように捉えるかという点にはいろいろな意味がありますが、一応国語辞典には「官位が五位以上の者」とありますから、「文字の読める人たち、身分の高い人たち」と考えていいわけであります。また、階級・職業・年齢・男女差などによって相違がありました。岡野久胤は明治 35 年（1902）「標準語に就きて」（『言語学雑誌』）において、長袖社会と熊八社会と官吏社会と商人社会のことばを比較すると、「正に一方言と他方言の差位は確に認むること」ができると述べています。

私にもそれを下さい	通用語
あたいにも、それ、をくん	男児
私にもそれを、頂戴な	女児
私にも、それ、頂戴よ	芸妓社会
僕にも、それ、呉れ給へ	書生社会
わしにも、それ、くんねい	職人社会

（岡野久胤「標準語に就きて」1902/8/10『言語学雑誌』第3巻第2号、飛田1993, 7pより）

岡野久胤は、もし標準語を選ぶとしたら上記のことばのうち、「通用語（中流社会の男子のことば）」であると述べています。私も、岡野久胤の述べた通り、現在の東京や教科書のことばは、中流社会の東京の男性ことばによって統一されたと考えています。それを証明しようとしたのが、私の『東京語成立史の研究』ということになるのでございます。

統一という点では、明治 37 年（1904）から使用された国定教科書が大きな変化をもたらしました。教科書が明治 37 年から一種類だけになるのですから、皆統一されていく傾向があるのは当然であろうと思うのでございます。

それが、私が国立国語研究所の国語辞典編集室で編集いたしました『国定読本用語総覧』ということになります。あの用例集を、どうぞこれからご利用いただきたいと思っております。同じ時代の新聞や雑誌、小説と比較すると必ず違いが出るはずですが、いまは「電報を打つ」と使うと思いますが、第1期の国定教科書に「電報を掛ける」とあります。そして、「空中飛行機」などというものがありまして、それがやがて「航空機」になり、「飛行機」へと変わるわけです。そういうものが両方とも採用されていて一方に統一されていくといったことばの変化がありました。

3. 文学作品においても重要視された「東京語」

地方出身の四国松山から上京した正岡子規が明治 33 年（1900）の『ホトトギス』において、文学のことばについて述べております。

東京の文学界は、長く東京人の占むるところとなつたので、文学は東京に限り、文学者は江戸児に限り、文学上の材料は場所も人間も風俗も言葉も、東京でなければならぬといふ事になつてしまふた。

そこで一人の女を書いても鬚の形から衣服のこしらえ、下駄の鼻緒の色に至る迄其時の流行を追ふて五分も透かないやうに書く。それが書けなければ文学者でも小説家でも無いときまつた。そこへヒヨコと田舎の少年が出て来て、どうか文学者になりたいといふて見た処で、よしんば其少年に小説の天才といふやうな者があつたにした処が、『ダムー』や『ガマー』では小説にならぬ。

(正岡子規「はじめに」、1900/10/30『ホトトギス』第4巻第1号、飛田1993、7pより)

正岡子規のいう松山の「ダムー」や「ガマー」は、翻訳して標準語にすると何というのでしょうか。私はまだ調べていないのですが、もしご存じだったら教えてください。というわけで、「ダムー」「ガマー」と書いたのではいけないということです。

要するに、東京のことが文学作品、文化の中心だということを、地方出身者の正岡子規が認めたということは、大きな優位性を「東京語」が持っていたということになるというわけです。同じことを、東京生まれの尾崎紅葉も述べています。

それに会話という奴。是がまた中々むづかしい。矢張文章同様冗長にならないやうにとは、言ふまでもなく務める所だが、男の詞、女の詞、老幼の言葉。円朝の話を聴くやうにそれぞれに使ひ分けて行つて、読んでゐる内に、その会話で人々の性格を現すといふ、むづかしいには違ひない。所が有難い事は、日本の標準語とするものは、この東京の言葉なんだ。同時に吾々此東京で生れ、東京で人となつたものだから、無意識の中に、この標準語を解し、身自らその標準語を話して居るのだから、是を文章にして会話に用ひるといふのには、比較的雑作もない。それがもし標準語が大阪か、仙台でもあつた日には事だね。(山岸荷葉「故紅葉大人談片」、1904/2/1『新小説』第9巻第2号、飛田1993、8pより)

4. 外国人も必要性を主張した「東京語」

一方、外国人は「東京語」をどう見ていたのでしょうか。それについては、バジル・ホール・チャンブレンの『A Hand Book of Colloquial Japanese』(第4版、明治40年)を私が訳した訳文で示します。

日本語には、また、たくさんの方言がある。しかしながら東京語(以前、口語における標準語であつた京都語を少し修正したもの)が日本中の正式の交際の場において、圧倒的重要性をもっている。実用を好む学習者は東京語だけを熱心に勉強なさることをおすすめる。もし東京語が話せるようになれば、標準英語が概して英国で理解されるように理解してもらえる。日本全国の農民層を除いて、いや地方によっては農民にさえ理解してもらえるであろう。(飛田1993、8p)

要するに、農民のことが方言であり、それ以外は方言ではないということになります。極端な言い方をすると、階級語、クラスダイアレクト、つまり「位相語」であるといえいいということになってくるわけです。

5. 「東京語」の区域と東京人意識

では、東京という地域は明治・大正・昭和と同じであったかという、その範囲は次から次へと広がってまいります。

東京が誕生したのは『江戸』が『東京』と改称されたときである。そのとき、江戸すなわち町奉行所支配地域（朱引内）は東京府となり、荏原郡・豊島郡・足立郡・葛飾郡の代官支配地域（農村地域）は、武蔵國知県事の管轄となった。その後何回かの改革が行われ、明治 11 年、旧町奉行所支配地が 15 区となり、旧代官支配地が郡部となる。明治 22 年には 15 区が東京市となった。昭和 7 年には、隣接町村を合併して市域が拡大され、東京市は 35 区となり、昭和 18 年には東京府と東京市が合併して東京都となったが、江戸文化を受けついだのは都市部であった。そして標準語の基盤とされた東京語も、都市部のことばであった。（飛田 1993, 9p より）

そうすると、都市部は次々と行政区画によって広がっていきます。松村明さんは、東京都の 23 区が「東京語」の区域だと言っておられます。

しかし、それでいいのでしょうか。私は、杉並区の隣の武蔵野市におりますから、松村さんによれば私は東京人ではなくなってしまいます。しかし三世代の調査をやってみると、同じ一大家族の中であっても、親子孫という三世代だとその意識は違うことが分かります。子どもは東京人だと思っているのに、親は「立川人だ」、「浅川人だ」と言っている事実気がつきました。

つまり、年齢や世代によって東京人意識は変わっているのだと知ったわけです。そうすると、今度は東京の地域をどんどん広げていくことが可能だと私は思ったわけです。そして最近「首都圏」ということを考えるようになりました。

鉄道線路に従って人が移動することを考えると、鉄道網の広がりが必要になります。私が子どものころは中央線の車庫は新宿から中野まででしたが、その後、三鷹に車庫ができました。その次に豊田というように、次々と車庫が高尾のほうへ伸びていきます。それに伴って東京人意識が変わったのであろうと考え、その関係を探したいというのが、私の東京人意識に関する最大の問題意識であります。つまり、「車庫と意識との関係」ということになりましょう。不思議なことではありますが、やはり人間が移動し、そこに人が住むのだから、そういう問題であると考えます。

そう考えると今度は、それより以前の人の動いたのは昭和 20 年の太平洋戦争の終わったときだというのは当然のことです。そしてその前は、当然関東大震災、その前は明治維新ということになります。

6. 「標準語」・「東京語（＝共通語）」・「東京方言」の捉え方

しかし私は、近代語史研究という立場に立つと、そうとはいかないと内心考えているわけです。それは、教科書のうち国定教科書が行われた明治 37 年から昭和 24 年までの 45 年間は、日本全

国どこでも1つの教科書で教育が行われ、ことばの規範ができました。要するに、文部省で編集し、官製による教科書調査会が審査をし可決したのであります。ですから、審査・可決されたということは、これは国家の決めた規範性があるということになりますので、その時期の教科書のことばを私は「標準語」と呼ぶことにしているわけでございます。

そして昭和24年に、今度は検定教科書に変わります。そうすると、教科書の会社の数だけ「共通語」ができたというように考えられます。いいかえると、「東京語」を「共通語」とする標準ができるわけです。これを標準と呼ぶべきか、何と呼ぶべきか、そのことばはまた考えなければなりません。

そういうわけで、「日本の領土はどこだ」となったときに、教科書によって書かれることは違うわけです。尖閣諸島はどうなっているとか、北海道の先がどうなっているという問題があります。ある教科書では「日本の固有の領土だ」と書いてあるが、ある教科書にはそうは書いてない。そういうことになってくると、やはり大事なところで統一がとれません。よって、この時代は一応文部省が検定をしているので、「共通語」と呼ぶ基準をここに置きたいと思っているわけでございます。

そうすると、今度は「東京方言」のほうはどう考えるかということになりますが、これについては次のように考えました。

親子孫と三世代以上東京で生活し成長した土着の人々のことばを『東京方言』と呼び、『東京語』と区別しておきたい。(飛田1993, 10pより)

7. 「東京弁」と「東京語」の違い

それでは「東京弁」をどう考えたらいいのでしょうか。私は、「東京弁」と「東京語」は同じでいいと考えていたのですが、秋永一枝さんはかなりはっきりと「東京弁」を区別しておられます。あの『東京弁辞典』は、私は名著だと思っております。

というのは、以前、勝海舟の父である夢酔の『夢酔独言』(勝左衛門太郎(夢酔)1802『夢酔独言』)を授業で読みました。しかし、『江戸語辞典』のどれを引いても意味がわかりません。ところが、この『東京弁辞典』を引くと言葉が全て出てきます。要するに、『夢酔独言』のことばは武士のことばではないということです。庶民の日常語が書かれているのです。あるいは武士のことばも入っているでしょうが、「日常生活語」であります。そういうものは、洒落本、滑稽本といった小説の類には出てきていないということになります。

さてそこで「東京弁」について、『東京弁辞典』から紹介します。

東京の地域についての意識は人によって異なるものである。“東京”が東京都をさすとすれば、面積は2,186平方キロ余、東西は最長約90キロだが、島嶼部を除けば南北は、20キロ前後の細長い地域(a)である。／一方、その東端に位置している、特別区である23区は約597平方キロ(b)で、それを東京とよぶ場合が多い。(秋永2004, 658pより)

この（b）が松村明さんの言われてきた部分であります。私はこれを少し修正しようという野心を持っております。それは以下の内容から指摘できます。

更に、江戸墨引内（町奉行支配地）にほぼ相当する東京旧市内（旧15区）をさす場合もあるが、それはたかだか83.6平方キロ（c）。これは23区（b）の約7分の1の狭い区域である。ちなみに朱引内は寺社奉行支配地で、墨引内より多少広い。（秋永2004, 658pより）

このように、江戸という時代背景を考慮すると、上記にある「町奉行の支配地」以外に文化の中心地はなかったと考えられ、『東京弁辞典』によれば「東京弁」はこの「東京（c）生育者」の言葉であると定義されています。また、このようなことも書かれています。

住民の意識としては、東京（a）（b）（c）のどこで生育したかによって、“東京”を意識する地域にずれがある。まして首都圏を含む他地域生育者は、もっと漠然とした感覚でとらえている。（秋永2004, 658pより）

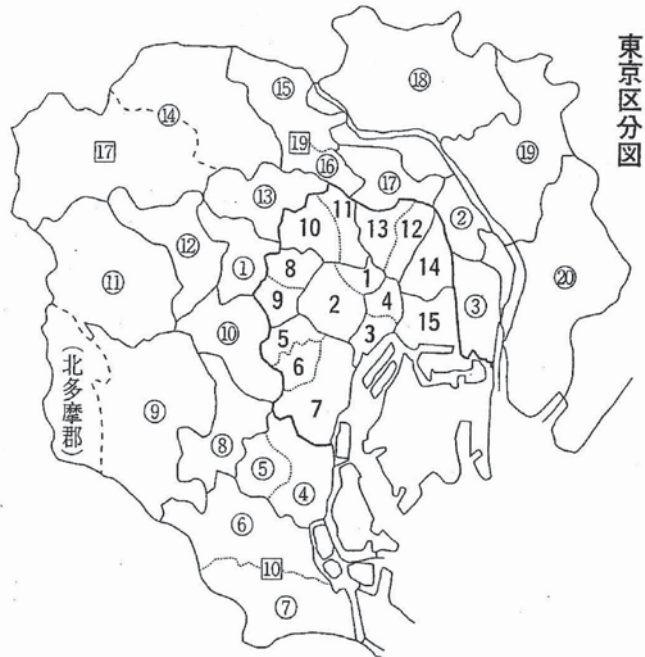


図1 東京区分図（秋永2004, 659p）

秋永さんのつくられた東京区分図（図1）と東京地区対照表（表1）によれば、ゴチックの1～15までがこの旧市内になるわけです。ここが純然たる昔の「町奉行の支配地」になります。そして、その周囲にある⑪番の杉並区、⑨番の世田谷区や北多摩郡などが加わり、これが現在の23区ということになります。

	()旧15区 []新20区 【 】新々3区	11 ⑧[目黒区] 12 ⑨[世田谷区]	神奈川県北多摩郡編入
1 千代田区	1(神田区) 2(麹町区)	13 ⑩[渋谷区]	
2 中央区	3(京橋区) 4(日本橋区)	14 ⑪[杉並区]	板橋区より分離
3 港区	5(赤坂区) 6(麻布区)	15 ⑫[中野区]	
4 新宿区	7(芝区)	16 ⑬[豊島区]	⑮[王子区] ⑯[滝野川区]
5 文京区	8(牛込区) 9(四谷区)	17 ⑭[練馬区]	
6 台東区	⑩[淀橋区]	18 ⑰[板橋区]	⑱[荒川区]
7 墨田区	10(小石川区) 11(本郷区)	19 ⑲[北区]	
8 江東区	12(浅草区) 13(下谷区)	20 ⑳[足立区]	㉑[葛飾区]
9 [品川区]	14(本所区) ①[向島区]	21 ㉒[江戸川区]	
⑩ [大田区]	15(深川区) ②[城東区]		
	④[品川区] ⑤[荏原区]		
	⑥[大森区] ⑦[蒲田区]		

表1 東京地区対照表（秋永2004, 659p）

8. 武士言葉が「東京語」へ与える影響

さて、江戸では武士の人口がたいへん多かったということを認めておく必要があります。その人口構成については、外国人J・C・ヘボン（ジェームズ・カーチス・ヘボン）の手紙によりますと、次のように記されています。

外国人J・C・ヘボンの手紙によると、総人口約150万、「そのうち約50万人が一般民衆、すなわち商人、職人、労働者などで、20万人は僧侶、残りの80万人は大君御一家、大名、役人、武士、大名の家臣です」（高谷道男訳『ヘボン書簡集』）という状況で、武家の人口がもっとも多かった。（飛田1993, 33p）

いままでともすると、江戸の人口の統計に信頼のおけるものがなく不明でした。幕府は、とにかく人口が多いほうがいいとプラスアルファをつけているので信頼がおけません。しかし、外国人の資料の数字は、キリスト教の宣教師が本部へ送るものですから、正しい数字だとみてよいと思います。

そしてまた、武士の中の旗本と御家人の人数もある程度はわかりますが、統計はまだわかりません。ここには引用しませんが、明治になると、旗本が何軒、士族が何軒といった初年の戸数はわかります。戸数だけでいうと、武士のほうが商人より多いか同数であり、武士の数は決して少なくありません。つまり、「武士言葉」の存在を証明できるだろうと考えます。

それを証明するために、アーネスト・サトウとかチャンブレンやサムエル・ロビンス・ブラウンの「Colloquial Japanese」といった「英学資料」, 「洋学資料」と呼ばれている会話書の類を調べました。そういうものに代名詞の項目があり、そこに「これは大名が使う」, 「これは将軍が使う」, 「これは旗本が使う」と書いてあります。それでは、実際に武士言葉にはどのくらい特色があったのでしょうか。

この表2（飛田1993, 36p）には明治4年（1871年）『安愚楽鍋』の「鄙武士」・「士」・「町人」・「商法個」・「職人」の和語と漢語の使用率を示しています。ここでは、ことばの使用率を「武士階級」と「町人」との間で区別することができるのではないのでしょうか。異なり語数の漢語を見ると、35%の「士」と26%の「町人」では大差があるとみてよいと思います。これは、藩校へ通ったか寺子屋へ行ったかの違いでしょう。

	延べ語数		異なり語数	
	和	漢	和	漢
鄙武士	58.0	42.0	54.1	45.9
士	72.1	27.9	64.8	35.2
町人	77.6	22.4	74.1	26.0
商法個	80.8	19.2	76.0	24.0
職人	83.8	16.2	83.1	16.9

表2 『安愚楽鍋』の和語と漢語の使用率(%)

表3・4（飛田1993, 35p）は、『安愚楽鍋』に出てくるすべての人物の使っている代名詞と文末の表現の出現数を示しています。文末の表現は、「AはBである」の「である」にあたる場所で「指定表現」と言っています。

まず、表3をみると、「僕」を使っているのは「士」のグループだけであることから、「僕」ということばは「士」から一般化したことはまず間違いないとだろうと考えられます。そして、右下へと続くと、「職人」は「おら」と「こちとら」を使っていることがわかります。「芝居者」,

「落語家」，「幫間」は「わちき」と「わっち」を使っているというふうに，はっきりと代名詞が違います。

また，表4をみると，「ダ」は「士」を除いて「女(B)」の一番下まで使用されています。それに対して「ジャ」は，「士」を含む「男(A)」の分類に属する，文字・漢字を読むことができたと考えられる人々が使っています。

そして，今度は「デゴザル」から「デゲス」までは現れ方が斜めに傾斜していることがわかります。「デゴザル」は「武士」だけが使っており，「町人」は「デゴザリマス」と「デゴザイマス」だけだとわかります。また，「落語家」は「デゴゼエヤス」と「デゴゼエス」と「デゲス」を使っている。しかし，「職人」は「ダ」しか使っていません。

語種	漢語	混和語										計	
		愚拙	わが輩	わたくし	われわれ	おれ	おいら	おら	こちとら	わちき	わっち		
男(A)	士	3											3
	鄙武士	1											2
	生文人	2											1
	新聞好きの男	5		2									7
	西洋好きの男				1								1
男(B)	町人			2									2
	異人			1									1
男(C)	商法個						5						5
	なまけものの男						5						5
	あくぬけた男					1	1						2
男(D)	通がっている男					1							1
	職人							1	1				2
	車夫							1					2
男(E)	牛馬					1							1
	芝居者											6	6
	落語家						1				1	3	5
女(F)	野幫間		1									5	6
	まじりみせの娼妓										6	1	7
	新造(小の町)										1	1	2
女(B)	歌妓										6	1	7
	ころき										11	1	12
	ひき											2	2
計	11	5	1	2	3	1	4	12	2	2	30	12	85

表3 『安愚楽鍋』の一人称代名詞

指定語	1		2						3			計						
	デアル	デアリマス	ダ	ジャ	デゴザル	デゴザリマス	デゴザイマス	デゴゼエヤス	デゴゼエス	デゴウス	デゲス		デス	ザマス	ダマス			
男(A)	鄙武士	2		2	3										7			
	士			15											15			
	生文人			7	3										10			
	藪医者			6	6					1					13			
	新聞好きの男			16	1										17			
男(B)	町人					4	5								9			
	商法個			23											23			
	唐物屋の番頭			1											1			
	車夫			4		1		1							6			
男(C)	芝居者	1	9					3	8						21			
	生文人のファン					1									1			
	異人	1													1			
男(D)	落語家		9					2	7			5			23			
	幫間		3						4			4			11			
	西洋好きの男		8					1	2	3	2				16			
女(A)	職人			19											19			
	文盲の男			15											15			
	なまけものの男			8											8			
	あくぬけた男			27											27			
	牛馬			2											2			
女(B)	娼妓	1	9										7	4	21			
	新造											1	1		2			
	番新													1	1			
女(B)	歌妓			16											16			
	芸者			1		1									3			
	茶屋女			21								1	2		23			
	それしゃあがり			17								1			18			
計	3	2	228	27	3	6	6	3	11	12	2	4	11	5	7	5	1	336

表4 『安愚楽鍋』の指定表現

9. 標準語(国定教科書)が「東京語」へ与える影響

そこで今度は「標準語」と「共通語」という問題に入ります。標準語が存在したのは，明治37年から太平洋戦争終了後の昭和24年までで，国定教科書の言葉がそれであります。

文章ハ口語ヲ多クシ、用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取り、カクテ国語の標準ヲ知ラシメ、其統一ヲ図ルヲ務ムルト共ニ、出来得ル丈児童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りテ、談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ。（明治37年国定教科書『尋常小学読本』の「編纂趣意書」、飛田1993, 10pより）

ここで大事なことは、「談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ」という部分です。要するに、話しことばだけ書きことばだけではなくて、「話しことばも書きことばもこの教科書の文章を手本にして話さない、書きなさい」と言っているということなのです。このところがいままでいちばん欠けているところで、書きことばだけだと思っている人、話しことばだけだと思っている人が研究者の中にもたくさんおられます。

さて、小学校の就学率の一覧表を紹介します。

表5（飛田1993, 47p）の平均を見ると、明治6年では小学校へ入ったのが28%です。男が39%、女は15%を示し、だいぶ男女差があります。それに対して、国定教科書が使われるようになった明治37年を見てみると、平均が94%で男が97%、女性も91%です。国定教科書がいかに利用され、その影響力があったかということだけはこれだけでも歴然と証明できるのではないのでしょうか。

そして、明治以降の小学校の教科書には、(a) 指定教科書、(b) 準検定教科書、(c) 第一次検定教科書、(d) 国定教科書、そして(e) 「共通語」と私が言っている第二次検定教科書とがあり、影響を与えているというわけであります。

10. 世代差が見られた「東京人意識」

次は、東京人の意識調査という、これは先ほど竹田さんが説明してくださったものについて説明します。

表6（飛田1997, 114p）の調査票では「親」・「子」・「孫」となっておりますが、孫は短大生で十八歳から二十歳ということになると、その親は二十歳で結婚したとすればだいたい四十歳ぐらいを想定しました。

表7（飛田1997, 118p）には「あなたは東京人だと思っ

年度	平均	男	女
明治 6	28.13	39.90	15.14
7	32.30	46.17	17.22
8	35.19	50.49	18.58
9	38.32	54.16	21.03
10	39.88	55.97	22.48
11	41.26	57.59	23.51
12	41.16	58.21	22.59
13	41.06	58.72	21.91
14	42.98	59.95	24.67
15	48.51	64.65	30.98
16	51.03	67.16	33.64
17	50.76	66.95	33.29
18	49.62	65.80	32.07
19	46.33	61.99	29.01
20	45.00	60.31	28.26
21	47.31	63.00	30.21
22	48.18	64.28	30.45
23	48.93	65.14	31.13
24	50.31	66.72	32.23
25	55.14	71.66	36.46
26	58.73	74.76	40.59
27	61.72	77.14	44.07
28	61.24	76.65	43.87
29	64.22	79.00	47.53
30	66.65	80.67	50.86
31	68.91	82.42	53.73
32	72.75	85.06	59.04
33	81.48	90.55	71.73
34	88.05	93.78	81.80
35	91.57	95.80	87.00
36	93.23	96.59	89.58
37	94.43	97.16	91.46
38	95.62	97.72	93.34
39	96.51	98.16	94.84
40	97.38	98.53	96.14
41	97.83	98.73	96.86
42	98.10	98.86	97.26
43	98.14	98.83	97.38
44	98.20	98.81	97.54
45	98.23	98.80	97.62

表5 小学校の就学率 (%)

調べた結果を示しました。これは男女一緒に集計したもので、回答の「半分くらい東京人だと思う」を示す△印が回答の半分くらいといった結果になりました。

表8（飛田 1997, 119p）は男性のみの結果を示してあります。男性だけだと、武蔵境のほうから日野までの親世代は「完全に東京人だと思う」を示す○印です。そして子どもと孫世代は豊田まで○印がつけました。

そして、表9（飛田 1997, 120p）は女性だけの結果です。武蔵境の親世代のほうから見ていくと、立川までは東京人だと思っていることが分かります。そして孫のところを見ると、八王子までが東京人だと思っているのです。こういうわけで、年齢や世代が下になればなるほど東京人意識の範囲が広がっているということがわかったのでございます。

東京語調査票

被調査者名 _____ (歳) (親・子・孫)

調査者名 _____

1. 被調査者

a 名前 _____ 生年月日 ____年__月__日__歳

b 性別 男・女

c 職業 _____

d 学歴 小・中・高・大・その他 ()

2. 現住所

結婚によって現在の土地に移住した場合

結婚前 _____

結婚後 _____

3. 調査環境

個人別 ・ 家族揃って

4. 調査日時

平成 ____年__月__日 午前 ____時__分 ~ 午後 ____時__分

5. 調査者

a 名前 _____ 生年月日 ____年__月__日

b 性別 男・女

c 学歴 白帝大学 国文学科 ____年

表6 東京語調査票（見本）

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	男・女

〔質問文〕 あなたは東京人だと思っていますか

〔記入日〕 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△2	△	△	×	○	○	○	○	×	○2	○	○
子	△	△	△	○	△2	○	○4	△	×	○2	○	△2
孫	△	△	○	○	○	○	○3	○		○	○	○

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿
親	○2	○2 △	○2	○2	△	△	×		○	○2
子	○2	○2	○	○	○	○	×		○	○2
孫	○	○2 △	○		○	○			○	○

○〔はい完全に〕 △〔半分くらい〕 ×〔いいえ〕 他〔 〕

表7 東京語調査集計票

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	(男)・女

【質問文】 あなたは東京人だと思っていますか
【記入日】 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△				○	○	○	○		○	○	○
子		△	△	○	△	○	○		×	○		△
孫	△			○			○	○				

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿
親	○	○	○	○	△		×		○	○
子	○				○		×			○
孫		○		○						○

○ [はい完全に] △ [半分くらい] × [いいえ] 他 []

表8 東京語調査集計票

東京語調査集計票 (A) 世代・地域別

項目番号	調査語	性別
1	東京人意識	男・(女)

【質問文】 あなたは東京人だと思っていますか
【記入日】 1994・11・26

駅名	高尾	西八王子	八王子	豊田	日野	立川	国立	西国分寺	国分寺	武蔵小金井	東小金井	武蔵境
親	△	△	△	×	△	○	○	△2		○		△
子	△	×		△	△	×		○3	△	△	○	○
孫		△	○		○	○	○	○2	△		○	○

駅名	三鷹	吉祥寺	西荻窪	荻窪	阿佐ヶ谷	高円寺	中野	東中野	大久保	新宿
親	○	○	○	○		△			△	○
子	○	○2		○	△	○			○	○
孫	○	○			×	○			○	○

○ [はい完全に] △ [半分くらい] × [いいえ] 他 []

表9 東京語調査集計票

1.1. 「東京語」研究の流れ

その次に「東京語」をめぐる研究史について簡単にふれておきたいと思います。『日本語学研
究事典』には「東京語」という項目がありまして、これは私が書いた事項でございます。それを
資料として説明していきます。まず、「東京語」の定義が(1)～(4)に記されています。中
村通夫さんの書いた山の手言葉について、あるいは「東京語というのは下町ことばだけだ」・「山
の手ことばだけだ」といったような、(1)～(4)の4種類を紹介しておきます。

中村通夫は『東京語の性格』でそれらの諸説を分類して(1)東京でつかわれることばが東京語であると
するもの。(2)いわゆる下町ことばをさして東京語とするもの。(3)いわゆる山の手ことばをさして
東京語とするもの。(4)現代口語文をもって東京語の文字化されたものと考え、それから逆に口語文を

音声化したもの、に整理した。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

次には、東京の範囲、東京人の範囲といったようなことを先ほど述べたことが紹介してあります。

一般には「東京における東京人の使う言葉」を東京語と定義し、「標準語あるいは全国共通語の基礎となっている言語体系」と考えている。しかしながら、「東京」の範囲、「東京人」の範囲がまた、さまざまであって明確ではない。飛田良文は、東京とは首都のあるところであり行政・文化の中心地であるから、その範囲は農村地帯を除いた都市の性格をもつ市街地を考えればよいとする。そうすると、都市「東京」は明治から今日まで、次々とその範囲を拡大してきた。（中略）また、「東京人」の範囲も、親子孫三代東京生まれの人に限るという説もあるが、本人が東京生まれであれば東京人とする考え方が一般的である。しかし、小学校入学前から東京に定住し、東京人と意識するに至った人は、東京生まれでなくとも、東京人と定義してさしつかえないものはなかろうか。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

そして、つづけて山の手ことばと下町ことばについて書いてございます。

東京語を都市生活を反映した言語体系と考えると、明治大正時代の文化の中心は江戸文化の伝統を伝える下町にあった。（中略）しかし関東大震災を契機として、浅草に鉄道の通らなかったことも影響して、下町文化は急速に衰え、山の手文化がこれに代わった。（中略）教科書の口語文のもとになったのは、言うまでもなく山の手ことばであった。（『日本語学研究事典』，543p，「東京語」より）

この『日本語学研究事典』の「東京語」の項目には、以上の説明に続いて【研究史】・【課題】がまとめられ、そして「参考文献」が続いております。「参考文献」は、「研究書」と「論文」とに分かれています。そこに書かれた流れを簡単に紹介いたします。

まず、最初の今村明恒さん（今村明恒編 1915『東京弁』日本のローマ字社）から始まって、小峰大羽さん、斎藤秀一さんあたりまでが方言集であります。その次が中村通夫さんの『東京語の性格』（1948，川田書房），松村明さんの『江戸語東京語の研究』（1957，東京堂）というふうには、今度は東京語の歴史に関する研究書が続きます。そして私も『東京語成立史の研究』（1993，東京堂出版）を書きました。いちばん最後が秋永一枝さんの『東京弁辞典』（2004，東京堂出版）です。あとは、昭和63年に読売新聞の社会部で『東京ことば』（1988，読売新聞社）という書籍を出版しております。

その後、「論文」では、最初のあたりに吉田澄夫さん、その次に中村通夫さん、次に金田一春彦さん、松村明さん、金田弘さん、川上秦さん、田中章夫さん、私、進藤咲子さん、大石初太郎さん、土屋信一さん、加藤正信さんと続きます（『日本語学研究事典』，544~545p，「東京語」より）。

このうち、加藤正信さんの「変化する郊外のことば」（1970，『言語生活』225）というのが、

これが「東京語」から「首都圏語」へということをもとめた最初のものかと私は思っております。

それからその次に、身分・職業・性別との関係を考察した私の「明治初期東京語の否定表現体系」（1974、『ことばの研究』5）がありますが、これは、ことばの形式「ない」、「なんだ」、「ず」といった否定表現を『安愚楽鍋』に登場する全ての人物について調べたものです。先ほど紹介した一人称の調査（表2）と同じような結果が出ました。

次には、清水康行さん、三井はるみさん、小松寿雄さんと出てきます。そして、私が「山の手のことばの形成」（1988、『国語と国文学』65-11）に書いたものは、旗本御家人の武士ことばが現代標準語のもとだと書いたものでございまして、これはぜひ読んでいただきたいと思います。

続いて、『日本語学研究事典』のうち「標準語」の項目についてみていきます。ここには、「標準語」から「共通語」ということばが分離するのは国立国語研究所の岩淵悦太郎の提案によるものだということを述べてあります。

昭和23年には国立国語研究所が設立された。ここから標準語と共通語とを区別する考えが誕生する。

（中略）共通語とは『全国どこでも通ずるような言葉』、標準語とは『なんらかの方法で国として制定された規範的な言葉』という定義であった。この区別をしたのは当時の岩淵悦太郎研究部長であり、その事情は柴田武著『方言の見方・考え方』（『国語シリーズ61』昭和43年、教育図書）に詳しく記されている。（『日本語学研究事典』、540p、「標準語」より）

そして参考までに、加藤正信さんの書いた「共通語」の定義もあるので、ご紹介いたします。

国内に方言差があっても、意思を通じあうことのできる言語。これは標準語のように必ずしも規範性を持たず、実用的・現実的なものである。共通語の母体は、日本語の場合、首都の東京のことばである。（『日本語学研究事典』、541p、「共通語」より）

12. おわりに

今日、「東京語」は土着の人と移住してきた人と外国人との立場から考える必要があり、さらに人口の構成や人口移動を調べる必要性、明治維新、関東大震災、太平洋戦争がその人口移動の最たるものであることを述べてまいりました。

私としましては、太平洋戦争後から今日までの間ではどこで区切りをつけるべきか、これが東京オリンピックなのか、テレビの普及なのか、それとも男女雇用法の問題なのか、そのあたりのご意見が伺えるとたいへんありがたいと思っております。

そして、「親」・「子」・「孫」という世代差によって調査をすると、その家族での言語ボスが見えてきます。そういうことを調べるのが、これからの社会言語学のひとつの観点ではないかと思えます。

そして研究史を大雑把に見ると、まず東京語史研究と方言集の作成、方言地図に関しては国語調査委員会が明治時代に全国調査をやったんですが、東京市だけありません。そのために、東京

市の部分の調査は、私の知っているところでは大島一郎さんの『東京都言語地図』なのではないでしょうか。その前にあるかどうかを私は知らないのですが教えてほしいと思っています。

そしてそのあと、中村通夫さんによる「江戸語」から「東京語」への研究が始まり、これからは「東京語」から「首都圏語」へという研究をする必要があると思います。それでこの三井さんのグループの研究のテーマにつながっていると思います。そして社会言語学的な世代差とか家族ごとの調査というのが、これから新しい分野であろうと考えているわけでございます。

以上をもちまして私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

引用文献

- 秋永一枝編（2004）『東京弁辞典』東京堂出版。
飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版。
飛田良文編著（1997）『日本語文章表現法』白帝社。
飛田良文ほか編（2007）『日本語学研究事典』明治書院。

質疑応答

司会（三井はるみ） どうもありがとうございました。それではご質問などございましたら、お願いいたします。

田中章夫 田中章夫でございます。私は赤坂生まれで麻布育ちなんですが、小学校のときに豊島園に遠足に行きまして、水筒の水がなくなって近所の方に飛び込んで、「水を入れさせてください」と言ったら、井戸を指して「そこにあっぺ」と言うんですね。だから先ほど飛田さんがおっしゃったように、世代、年代によって、東京語圏というものが違う。たぶんその人たちは、われわれは、「あれは東京もんで東京ことばだ、自分たちと違う」ということだったんだと思うんですね。いまは、葛飾柴又が下町ことばの代表みたいになっていますが。

それはそれとして、先ほど飛田さんが挙げた例のなかに「アタイ」というのが出てきます。私も山の手の小学校だったので「僕」「君」なんですが、下町から転校してきた男の子が「アタシ」「アンタ」と言うんですね。その話を学生に大学でしましたら、大野晋先生が、「ぼくが子どものころ『アタイ』だった」と。さらに、「開成中学へ行って、みんな『僕』『君』と言うのでびっくりしたんだ」という話をしていらっしやいました。だからそういう、山の手と下町と、それから深川というのは話しことばでもずいぶん違ったんじゃないかと。私も母が下町だったんで、うちでは「ダイドコ」と言っていて、友だちはみんな「お勝手」と言うんですね。それからうちでは「オツケ」と言うんですが、友だちがみんな「オミオツケ」なんですね。それで下町に親戚というか、米屋さんがあったんですが、その米屋さんがうちへよく配達に来てくれて、その米屋さんが、私たちにも「アンチャン」と言うんですね。まず東京じゃ使わない「アンチャン」と言われて、「何だろう」と、そういうことが経験ありまして。東京方言の中でも、山の手、下町と言いますけれども、深川というのはかなり違っ

たんじゃないかなと思うんですね。それはそのあたりで、山の手、下町という二分じゃなくて、まだいろいろ、きょうのあれでは亀戸もありましたけれども、深川というのはやっぱり、入れておかなきゃいけないんじゃないかなと思いました。どうも。

司会 ありがとうございます。いまお話があって、先ほど調査項目に「台所」とか「みそ汁」という項目が入ってきましたけれども、その設計された理由もわかったような気がいたしました。

上野善道 せっかくの機会ですので、飛田先生にお伺いしたいと思います。まず先生のお考えを正しく理解しているかどうかを確認してからですが、先生が「標準語」とおっしゃるときには、唯一の国定教科書という形で規範が1個しかなく、それを「標準語」とおっしゃっていて、そして戦後になって、検定の教科書になった段階で、一本ではなくなったということから、いわば規範が緩くなった、それを「共通語」というふうにとらえていらっしゃるという理解でよろしいですか。

飛田 はい、それでけっこうです。

上野 はい。それに関連して2つ質問があります。国定教科書という形で、確かに1つに定まった、それはそうだろうと思うんですが、それは形として固定化されているものであって、実際に話し手が使うときにどうなっているかというのは、またちょっと別の問題かなと思うんです。

つまり教科書で1つであるからといって、それを使っている人みんなが同じように話すわけではないだろうし、おそらく書きことばでもすぐに全部統一化されたわけではないだろうと思うんです。そののなんていいますか、規範として定まっていることと実態との関係に関して、先生はどうお考えなのかということが1つ。

それからもう1つは、先ほどの後半のところ国語研究所のお話が出まして、岩淵さんとか柴田さんなどから、いわば「共通語」という概念が普及してきたんですけど、その「共通語」というのと、先生が定義された「共通語」というのは、どうも違うのではないかと私は思うんですね。同じ「共通語」ということばを使っても観点がずいぶん違うのではないかなと思うんです。以上の2点に関して教えていただければと思います。

飛田 まず、国定教科書のことばと現実のことばはどうしてもずれますね。そしてその研究が、まだだれもやっていないというのが私の感想なんですが。だから基準になるものの一覧表は『国定読本用語総覧』でできたということになります。今度はそれがどのように影響を与えたかということを調査する研究が、これからの未開拓の分野だというふうに考えておりますが。

ですからこれから小説と比べてほしいなあと、新聞と比較してほしいなあと、こういうふうに思っているんですが、比較すべきものの語彙調査がないんです。あれば私がすぐでも引くんですけども、あいにくとそれとうまく合うものがないというふうに私は考えております。

それから共通語のほうの国語研究所で言っている「共通語」と、私の定義の「共通語」とが同じか違うかは、ちょっと私もよくわかりません、正直のところ。

というのは、岩淵さんのいった研究所のものは、鶴岡とかの『言語生活の実態』で言われたところから始まっているわけですね。だから仮説として規範的なものと現実に使われているものとを分けて、その具体的に使われているものを「共通語」の調査とされたのではないのかなと思っているけれど、どうでしょうか。

鎌水兼貴 あ、いまのはたぶん白河調査だと思うんですね。

飛田 あ、白河の調査。

田中 それは、「方言でどう言いますか」というような聞き方、あるいは「方言では、こう」というようなことを言って、非常にまだ当時、昭和 20 年代ですね、抵抗があったと。「方言」と言われるともう答えてもらえないというようことで、何かほかに言い方がないかということで、柴田さんあたりが「共通語」というのをつくって、「方言」というのを調査に使うなということを知っていました。私が、東京に帰ったころですね。

あのころまた、「共通語」というのが、小学校の教科書、中学生の教科書に「共通語」が出てきたんですが、「英語は世界の共通語」などというふうな言い方があるので混乱するというような、教育界から「標準語じゃいけないのか」と出てきています。標準語は、やっぱり昔から「方言撲滅」というようなことで使われてたんで、やっぱり「共通語」のほうが抵抗がないということです。

結局、「共通語」とってのは、少なくとも昭和 30 年代までは、「方言」と言うと抵抗があるからということがベースになっていたような気がするんですが。私が関係者に聞いた範囲ではそういうことです。

飛田 私の考える「共通語」は、「地域共通語」と「全国共通語」がありますね。ですから、私の言っているのは「全国共通語」のつもりで先ほどは申ししておりましたが、それで答えになっているのでしょうか。

上野 ありがとうございます。ちょっとこのあと、飛田先生というよりも、田中先生のあとを受けての私の勝手な感想です。「共通語」ということばがはやった背景、1つは、おっしゃったように「方言」との関係なんですけど、1つは「標準語」に対する抵抗をなくすという、あえて言いますと非常に戦略的なもので、それをやったのが柴田先生だと私は見てるんです。実は、「共通語」だという形で「標準語」を普及させたのが柴田先生ではないか。

もちろん、「標準語」とは何であるとか、具体的な語形が2つあったときに1本にしぼれとか、そういう話はちょっと別問題です。現実の言語として、ゆれがない言語なんてあり得ませんから。英語の標準語だってどこだってゆれがある、変化がある。したがって、私は日本語はもう標準語が確立していると見ています。つまり試験問題も全国一律に出して採点ができる、日本語教育もできるというのは、まさにそれを「共通語」という名前でもって、むだな抵抗をなくして非常に滑らかに標準語の普及を成功させた結果であって、それが柴田先生の非常に大きな功績ではなかったかと、私は個人的に思っております。ちょっと余計なことまで申しあげました。

田中 私が言ったのは、「共通語」ということばを使わざるを得なかったということ、いちばん最初ですね、八丈島、白河といったときに、「方言」ということばを使うと調査しにくいと

ということがスタートだったと聞きましたけど。ただ、それからだんだんに「共通語」にいろいろな意味がですね、全国でも……。

上野 いろいろ使われ方によって変わってきたと。

田中 最初使ったのは、「方言」と言うのをやめようと、使わないで調査しようというところからだったと柴田さんたちから聞いております。

上野 はい。

飛田 その「共通語」の問題は、standard language と common language の訳語の区別ということから私は始まったんじゃないのかなあと思っているんですが、これは個人の感想ですからどうか分かりませんが。

それともう1つは、国語教育の世界が、やはり相当大きく影響していると思っております。私はそっちのほうを調べていないのでわかりませんが、国語教育のほうで、文部省で「共通語」というのを非常に広く使ったんじゃないでしょうか。それが影響したんじゃないかと。もちろん、そこに柴田先生のご意見が当然反映しているとは思いますが、私の感想です。

司会 戦後の言語政策史に触れるようなお話になりまして、この場を設けてよかったなというふうに思っております。それでは、きょうの研究発表会はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

第 2 部
個別研究

首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布*

鎌水 兼貴
(国立国語研究所)

三井 はるみ
(国立国語研究所)

1. はじめに

本研究は、首都圏若年層における非標準形の使用意識に関して、大学生を対象としたアンケート調査を実施し、首都圏における言語使用の実態を、地理的分布から分析したものである。

首都圏は、標準語の成立基盤となる地域であり、言語的にもっとも重要な地域である。それにもかかわらず、巨大な人口、多様な構成住民、調査困難などを理由として、言語の地域差に関する調査研究があまり行われない地域である。むしろ、そうした複雑さは、従来の方言学的な「はえぬき」重視の地域差よりも、個人差すなわち社会的・心理的側面に焦点が当てられることが多かったといえるだろう。

このように首都圏の言語は、全域で一様な言語が使用され、特に若年層では、非標準形についても首都圏全体で言語圏を形成していると認識される傾向がある。そして首都圏若年層の言語はインフォーマル場面でも「共通語の俗語」のような位置づけを持っているといえよう。

しかし実態としての首都圏若年層の言語使用をみてみると、地域的均一性が高いのは確かだが、地域差は存在している。すでに1980年代の調査研究で「東京新方言」(井上1994)などの形で、首都圏における非標準形とその地域差は指摘されてきた。

首都圏の言語が他の地域の言語と異なるのは、周辺地域の方言形を取り入れて全国に発信する強力な力を持っていることである(井上・荻野1984)。井上・荻野(1985)は、そうした発信力を研究する上で言語意識を調査し、社会的・心理的側面といった個人差から分析を行ってきた。言語意識を調べることで、なぜその語形が使用可能になるのかを解明することができる。このことから、非標準形の地理的伝播を解明する場合にも、言語意識の地理的分析を導入する必要があると考える。

以上から、本研究では、首都圏における非標準形について、使用に関する地図だけでなく、使用意識の地図を作成することで、

- ・首都圏の若年層にはどのような言語的地域差がみられるか
- ・非標準形の使用意識は使用の地域差とどのように関係しているか

という2点から首都圏若年層の非標準形使用の要因の解明を試みる。

*本稿は、鎌水兼貴・三井はるみ(2013)「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」第31回社会言語学会研究大会の発表原稿に加筆、修正をおこなったものである。また、本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト(「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」研究代表者 三井はるみ)による研究成果の一部である。本研究に調査に協力していただいた、プロジェクトメンバーの國學院大学の久野マリ子氏、日本大学の田中ゆかり氏、文教大学の亀田裕見氏に感謝を申し上げます。また、すべての回答者の皆様に御礼申し上げます。

2. 調査概要

本研究における若年層の調査対象は、大学生とした。大学生への調査手法として、本研究では携帯電話のメールを用いた調査システム RMS (Real-time Mobile Survey system) (鎗水 2011, 2012) を用いたほか、一部にアンケート用紙も用いた。生育地は 5 歳から 15 歳までの最長居住地とし、住所は大字レベルまで回答してもらった。

2011 年 6 月～2012 年 6 月の首都圏での試行調査の結果をもとに 38 の非標準形を選定し、2012 年 7～11 月に東京都と埼玉県に立地する大学生約 400 名に対して調査を実施した。そのため回答者の分布は東京都・埼玉県に多く、神奈川県、千葉県は少ない点で注意が必要である。

調査を行った 38 語のうち、特に回答の分布が明瞭な、以下の 7 つの非標準形については、使用するか否かだけではなく、使用意識をたずねることにした。

- | | |
|----------|------------|
| 1. カタス | 片づける |
| 2. モス | 燃やす |
| 3. バナナムシ | ツマグロオオヨコバイ |
| 4. ダイジ | 大丈夫 |
| 5. アオタン | 青あざ |
| 6. ズルコミ | 割り込み |
| 7. ヨコハイリ | 割り込み |

これらの語形はバナナムシを除き、この 20～30 年間、首都圏で「新方言」として、井上・荻野 (1984) や、井上 (1988) をはじめ、多くの調査がなされてきた語形である。

調査内容は、以下の 5 種類である。

- 「使用」 (「言う」「聞いたことがある」「聞かない」)
- 「使用頻度」 (「低い」～「高い」、7 段階)
- 「通用範囲」 (「身の回りだけ通じる」～「誰にでも通じる」、7 段階)
- 「使用場面」 (「特定のときだけ」～「どんなときでも」、7 段階)
- 「丁寧度」 (「くだけた言い方」～「改まった言い方」、7 段階)

「使用」が 3 択で、これは全 38 語についておこなった。上記の 7 語については「使用頻度」以下の 4 項目もたずねた。意識項目は 7 段階評定 (左が 1, 右が 7) であるが、どれも具体的な場面を設定していないため、回答者がどのような場面を想定して回答しているかは不明である。また、標準形や伝統的方言形の意識は尋ねていないという問題もある¹。

¹ バナナムシやアオタンについては、標準形を確定するのが容易でないが、それ以外については標準形が使用されないことは考えにくい。そのため標準形や伝統的方言形との関係を考慮しないと、何がどう変化したのか、という基準が不明なままになってしまう。ただし、ヨコハイリとズルコミに関して相互の関係はわかる。

3. 首都圏若年層における非標準形の分布

数多くの先行研究で、すでに地域差の存在がわかっている非標準形が多いが、言語地図としての報告は少ない。そのため、まず分布の広がり方について概観する。

3. 1 非標準形の分布概観

図1は、黄色い小さな虫である「ツマグロオオヨコバイ」の呼び名「バナナムシ」の使用に関する分布である。東京都23区西部～多摩地域と、隣接する神奈川県北部に「言う」が分布しており（囲み線）、バナナムシが現代の「東京方言」であることがわかる。

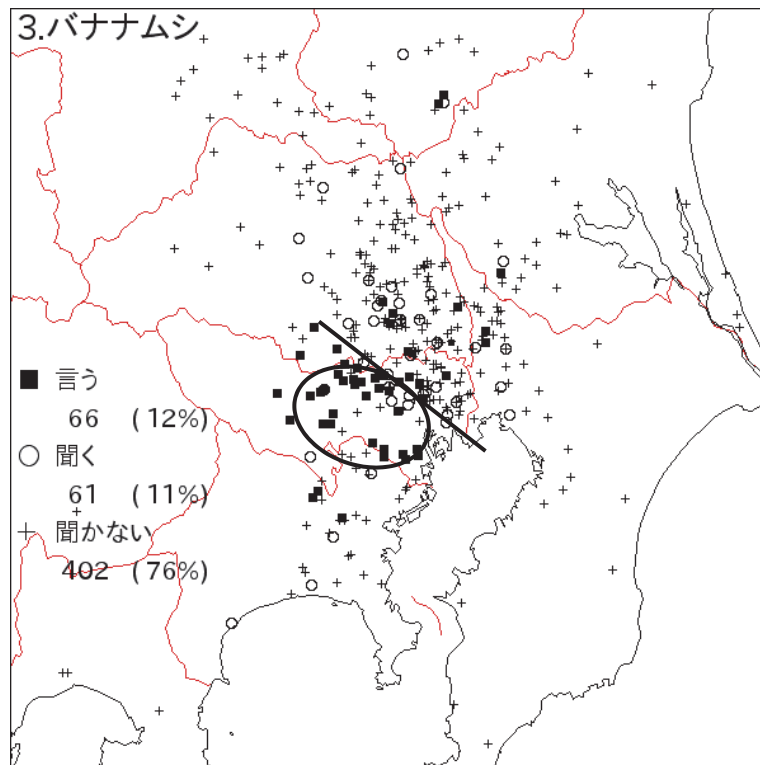


図1 バナナムシ(ツマグロオオヨコバイ)の使用

図2・図3は、列などへの「割り込み」を問わず2つの非標準形「ヨコハイリ」と「ズルコミ」の分布である。図2のヨコハイリは、神奈川県～東京都23区西部多摩と、首都圏外周部に分布しており、埼玉県東部から東京都23区東部にかけて不使用地域が広がっている（囲み線）。ヨコハイリ不使用地域で使われる非標準形が、図3のズルコミである。ズルコミとヨコハイリが相補分布の関係にあることがわかる。

井上(1988)による東京都・神奈川県調査では、高年層では全域で「ワリコミ」が分布していた。ヨコハイリは若年層の新しい語形として神奈川県全域に普及し、東京23区西部、多摩でも散見されていた。一方、ズルコミも若年層の東京23区東部でわずかに使用がみられており、埼玉県側・千葉県側より広がってきた可能性がある。図2・図3において「聞いたことがある」の分布を比較すると、ズルコミよりヨコハイリのほうが「聞いたことがある」の回答者が多い。伝播の力において、ヨコハイリがズルコミよりも強いことが予想される。

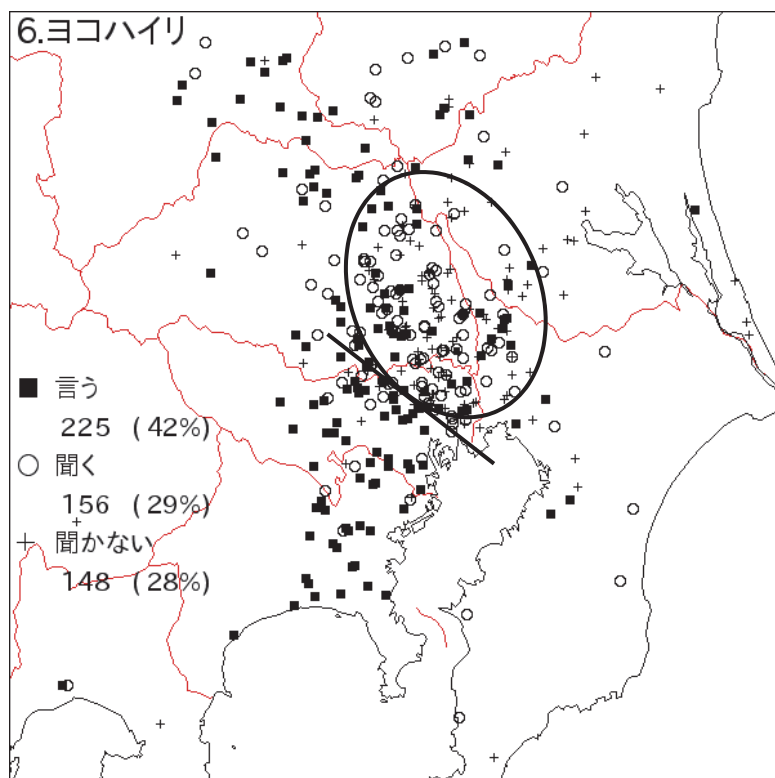


図2 ヨコハイリ（割り込み）の使用

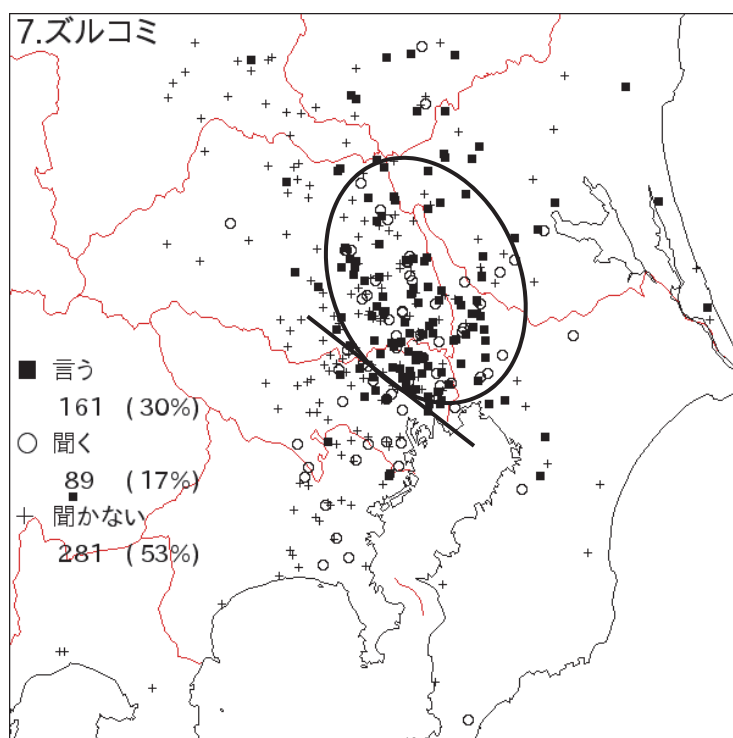


図3 ズルコミ（割り込み）の使用

3. 2 首都圏若年層における非標準形の分布境界

非標準形の分布を概観すると、図1~3の斜線、すなわち東京都23区の北東部と南西部の間に回答の違いがみられる語が多いことに気付く。調査した38語の中でも、これ以外にも、ダベ?(でしょ?)、イクベ(行こう)、~トキアル(~ことがある)、モス(燃やす)、アルッテ(歩いて)、センヒキ(定期)など、さまざまな語でみることができる。

この東京都23区北東部と南西部の間とは、伝統的な方言境界とされている東京の下町地域(北東部)と山の手地域(南西部)の境界にほぼ一致する。つまり現在の若年層においても、非標準形の使用において山の手と下町の間境界²があることを示していると思われる。

この境界が伝統的な方言境界と同一のものかどうかについては検証をする必要がある³が、少なくとも、地域的なまとまりという点で、下町地域が埼玉県・千葉県側と、山の手地域が東京都多摩地域・神奈川県と分布上の連続性をもつ語が多いことが明らかになったといえる。

4. 使用意識の地域差

4. 1 使用意識に地域差はみられるか

つづいて、使用意識の地域差について分析をおこなう。ヨコハイリ(割り込み)は、井上(1988)にあるように、30年前は神奈川県を中心とした分布であったことがわかっている。図2で新しく使用するようになった地域と、従来から使用していた神奈川県とで、ヨコハイリの使用意識がどのように違うかが問題となる。

図4は、図2のヨコハイリ(割り込み)の使用者(「言う」を回答)における使用頻度意識を地図にしたものである。「どのくらいの頻度で使用するか」という意識は、「語そのものの使用頻度」と「使用場面における語の選択頻度」を分離していない、あくまで主観にすぎないものだが、地図で表示すると、地域によって明確な違いがあらわれた。

図4をみると、神奈川県では使用頻度が非常に高いと意識されていることがわかる(囲み線)。一方で、東京都や埼玉県での使用頻度意識はあまり高くない。

前述のとおり、ヨコハイリは神奈川県から北側に普及したことが、過去の調査からわかっている。つまり初期に普及した地域では使用頻度が高く、後から普及した地域は使用頻度が低いと認識されていることになる。

井上(1983)は山形県内陸部の調査で、共通語形の地理的伝播が上位場面から下位場面への普及と複合して進行するため、場面差が普及時期の時間差となることを示している。同様に、図4の結果についても、使用意識に地域差が存在することを示すにとどまらず、共時的な使用意識の違いが、通時的な普及時期の違いを反映していることを示唆するものである。

² 全員使用・全員不使用のような明確な境界ではなく、使用者の割合の違いという形であらわれる。

³ 伝統的な東京方言使用地域としての「山の手」「下町」は、あくまで「はえぬき」話者についてである。東京は人口流動が激しく、現代の東京都23区北東部、南西部において、はえぬき住民は少数派であり、伝統的な東京方言話者もまた少数派であると考えられる。そうした中で、今回の境界が伝統的東京方言の継承としての結果と断定するのは難しいと思われる。この点については、今後もさまざまな観点から調査を継続する必要があると思われる。

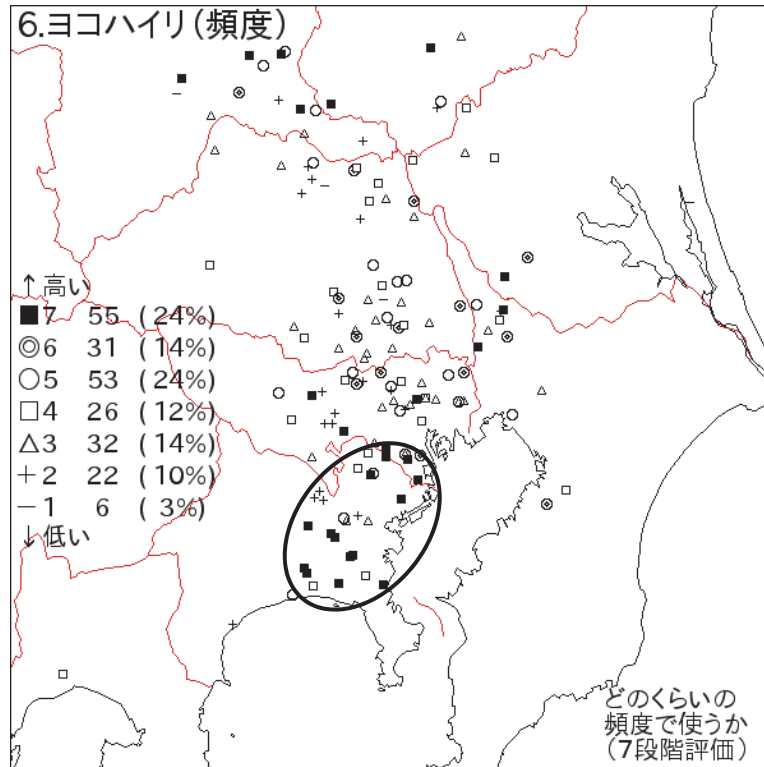


図4 ヨコハイリ(割り込み)の使用頻度意識

4. 2 非標準形カタスの普及経路

これまでのことをふまえて、非標準形カタスの分布について考える。図5は、片付けることを「カタス」と言うか、という分布である。首都圏南部のほぼ全域で「言う」が分布している。井上・荻野(1984)においては、東京都23区西部・多摩、神奈川県では使用率が低いとされ、当時の若年層での使用が減少しているようにみられていたが、1990年代には千葉県松戸市で増加していることが報告されており(早野1996)、近年著しく普及していると思われる。

ただし、東京都西部地域を中心に「聞いたことがある」が分布しており(囲み線)、不使用地域がわずかに残っている。図5では地点数が少ないため、試行調査の結果もあわせた図6をみると、不使用地域の存在がより明確になる(囲み線)。東京都西部のうち、多摩地域の西側にはすでに普及しており、多摩地域の東側だけが使用地域に包囲される形で不使用地域を形成していることがわかる。

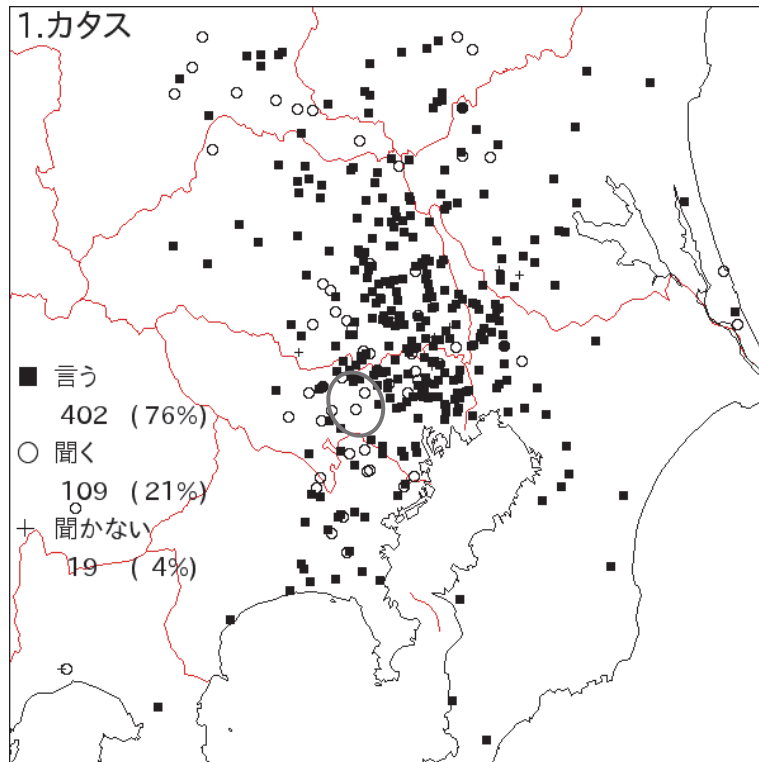


図5 カラス（片付ける）の使用

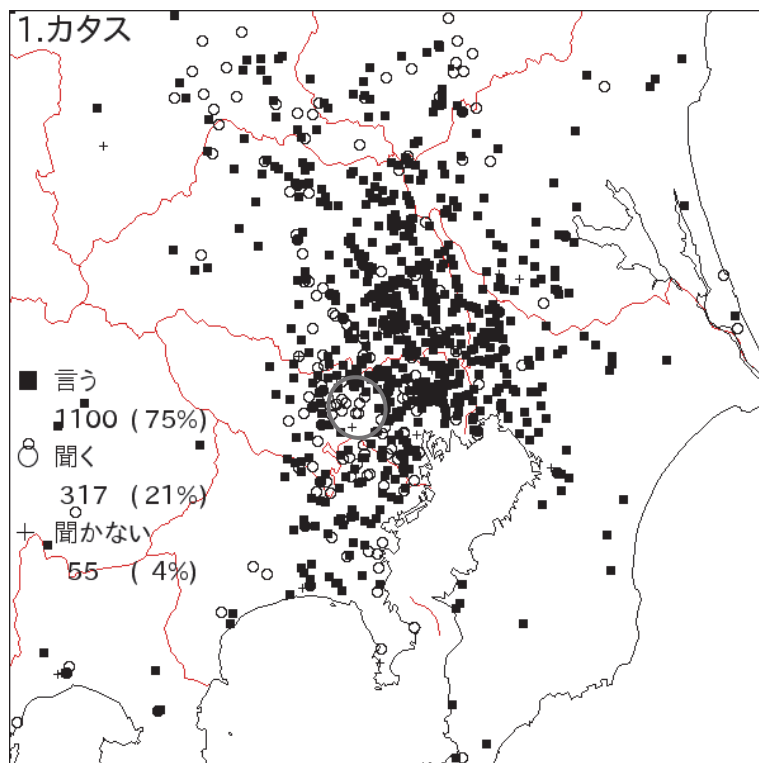


図6 カラス（片付ける）の使用（試行調査も含めたもの）

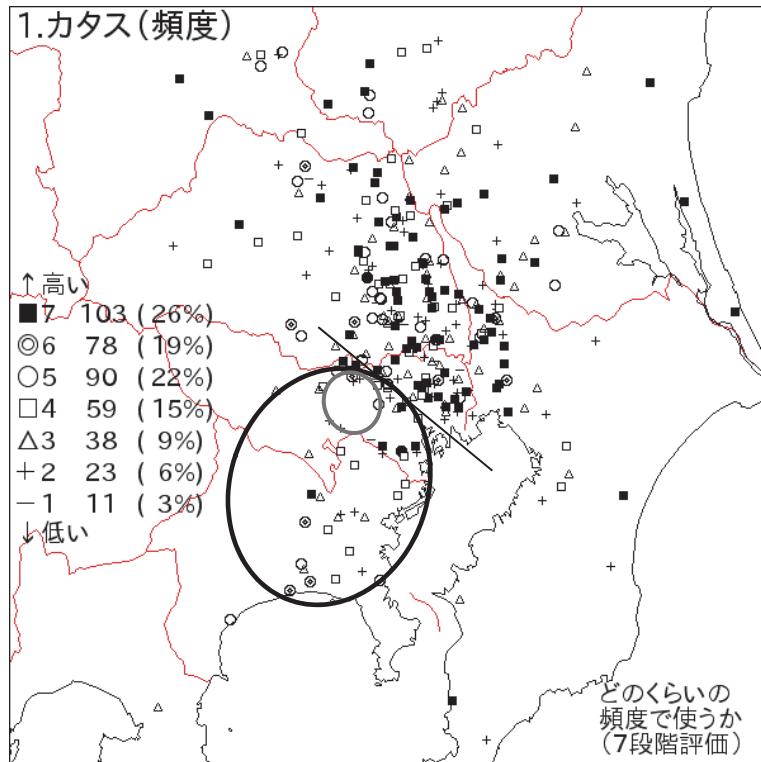


図7 カタス(片付ける)の使用頻度意識

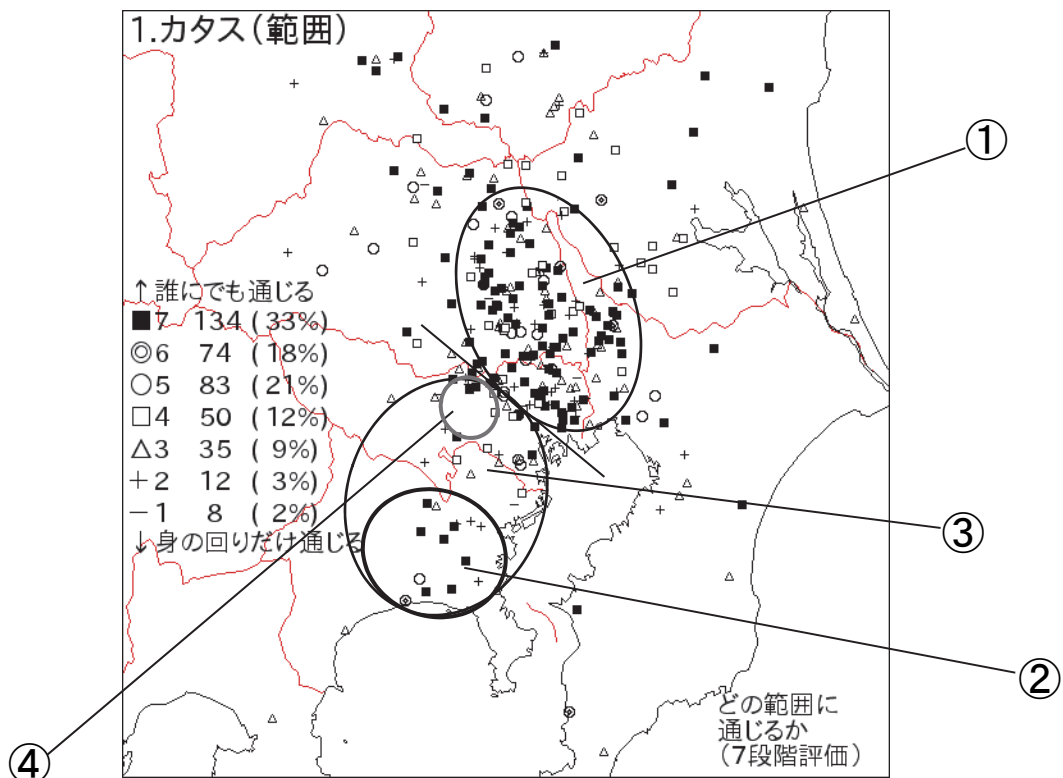


図8 カタス(片付ける)の通用範囲意識

なぜ東京都多摩東部だけが不利用地域となったのか。東京都西部に不利用者が多いことや、前述の井上・荻野(1984)との結果から、多摩東部の周辺地域では、カタスが最近になって普及したことが予想される。ここで前節のヨコハイリのように、使用意識の地域差が普及時期の違いを反映するとしたら、カタスの使用意識の地域差によって、普及時期を予想することができる。

図7はカタスの使用頻度意識の地図である。全体的に使用頻度が高いと意識している人が多いが、東京都23区西部と神奈川県北部では、使用頻度があまり高くないことがわかる(囲み太線)。この地域に隣接する地域は、図5・図6での「聞いたことがある」という回答が多い地域、すなわち不利用地域であることをあわせると、この地域ではカタスが新しく使用が拡大したことが予想される。

しかし、図8の通用範囲意識の地図をみると、東京都23区南西部から神奈川県北部(③)にかけての地域と神奈川県南部(②)とでは、通用範囲の意識において差があることがわかる。神奈川県南部では通用範囲の広いことばとして取り入れられている一方で、東京都23区南西部・神奈川県北部においてはあまり広がらないと意識されている。

このことから神奈川県南部での普及が東京都や神奈川県北部より早く進行したと予想することができる。

以上から、現在は首都圏南部におけるカタスの使用者は東京都多摩地域の一部を除いて全てを覆っているが、かつての使用者の分布は、図7の使用頻度を高いと意識する人々の分布に近かったのではないかと推測することができる。このとき図7の分布の境界は、東京都23区の東西、すなわち山の手と下町であり、これは、前述の首都圏若年層において多くみられる境界と一致することからも妥当な推測であると判断できる。普及に伴って境界を越え、図8のように、神奈川側に普及し、周囲を囲まれるような形で図5・図6のような使用者の分布になったと考えられる。整理した表を以下に示す。

図5~8を整理した表を以下に示す。もともと埼玉県から東京23区北東部を中心に再普及していたカタスは、東京都23区南西部に入る前に、神奈川県側に入り、特に神奈川県南部で先に普及した。それから東京都23区北東部や、神奈川県北部、東京都多摩西部地域に普及し(どの地域からの普及かは不明)、現時点では東京都多摩東部地域だけが不利用地域として残っている状態である。多摩東部地域は使用地域によって周辺を囲まれているため、近い将来使用地域なることが予想される。

表 カタスの普及時期と意識との関係(番号は図8中のもの)

		使用頻度意識 (図7)	通用範囲意識 (図8)	普及推定時期
①	埼玉・東京23区北東部	高頻度	広範囲	早い ↓
②	神奈川南部	低~中頻度		
③	東京23区南西部・神奈川北部		低~中範囲	遅い (将来使用?)
④	東京多摩東部	φ頻度(不利用)	φ頻度(不利用)	

5. まとめ

以上、首都圏若年層の非標準形の使用意識を地理的分布の観点から分析することにより、以下のような傾向がみられた。

- ・東京都の山の手地域と下町地域の間には、非標準形使用に大きな境界が存在する。
- ・下町地域は埼玉県・千葉県と、山の手地域は東京都下・神奈川県とそれぞれ連続性がある。
- ・使用意識項目の分布に地域差が現われる場合、その地域差が、かつての分布の痕跡である可能性があり、普及経路の手がかりとなる。

また、東京都 23 区西部～多摩東部の地域は、非標準形の普及が、周辺地域より遅れる傾向がみられた。本稿ではカtas 1 語だけで説明したが、一般化するには実例が必要である。今回の調査では、ダベ? (でしょ?)、イクベ (行こう) といった「ベ(一)」の使用がカtas と似た傾向を示している。首都圏若年層で再普及中の現象といわれるが、この点でもカtas と似ている。東京都 23 区南西部・多摩地方では不使用者が多く、周辺地域よりも普及が遅いとみられる。

このことは首都圏の言語が中心部と周辺部に分かれる可能性を示唆している。もし中心部で非標準形が避けられているとしたら、前記の「ベ(一)」のような有名な伝統的方言形は、カtas よりも非標準形的色合いが残り、受け入れが鈍い可能性がある。

このような言語現象について検証を重ねることで、首都圏の言語のモデル化ができ、標準語の成立過程の解明にもつながると思われる。さらなる詳細な調査・分析が必要であろう。

文献

- 井上史雄(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究 —東京・首都圏・山形・北海道—』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 井上史雄(1985. 2)『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院.
- 井上史雄(1985. 3)『関東・東北方言の地理的・年齢的分布(SF グロットグラム)』東京外国語大学語学研究所.
- 井上史雄編(1988)『東京・神奈川言語地図』.
- 井上史雄(1994)『方言学の新地平』明治書院.
- 井上史雄(2011)『経済言語学論考』明治書院.
- 井上史雄・荻野綱男(1984)『新しい日本語・資料図集』文部省科学研究費補助金「言語の標準化」資料集.
- 井上史雄・荻野綱男(1985)『新しい言葉の伝播過程—東京中学心理調査—』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 荻野綱男・井上史雄・田原広史(1985)「周辺地域から東京中心部への《新方言》の流入について」『国語学』143.
- 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康(2004)『関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線グロットグラム』科学研究費補助金研究成果報告書.

東京都教育委員会(1986)『東京都言語地図』.

早野慎吾(1996)『地域語の生態シリーズ関東篇 首都圏の言語生態』おうふう.

鐘水兼貴(2011)「携帯電話を利用した首都圏若年層の言語調査」『情報処理学会研究報告』
2011-CH-92, 1-13.

鐘水兼貴(2012)「携帯電話を利用したリアルタイム方言調査システム」『日本行動計量学会 第40
回大会抄録集』 349-352.

飛田良文「東京語調査」の概要 —山手線・青梅線・総武線を中心に—¹

竹田 晃子
(国立国語研究所)

1. 本稿の目的と資料の経緯

本稿の目的は、飛田良文企画立案、実践女子短期大学学生調査による「東京語調査」資料を紹介し、その特徴を明らかにすることにある。調査の動機については、飛田良文講演「私のとらえたい東京語」の「1. 問題の所在—「東京語」の定義の曖昧さ」を参照されたい。

ここでは、筆者が「東京語調査」資料の整理をお手伝いするようになったことについて、少し述べておきたい。筆者の興味は、「共通語」「標準語」の成立および「共通語」「標準語」と地域方言としての東京方言あるいは首都圏の言語との関係である。本稿と直接的に関係するわけではないが、筆者は明治末期の国語調査委員会による全国方言調査資料を対象にした調査研究を進めており²、飛田良文「東京語調査」の資料は、「共通語」「標準語」および東京のことばの様相を明らかにする資料であるという点で共通している。この共通点と、貴重な資料を埋もれさせておきたくないとの考えから、整理をお手伝いすることとなった³。

以下、調査方法の概要、調査結果の集計表、調査結果を紹介する。

2. 調査の概要

2. 1 企画立案と調査全体の概要

企画立案は、飛田良文(当時 国際基督教大学大学院教授)によるもので、調査者は飛田の出講先である実践女子短期大学の授業「日本語研究7—社会言語学」の受講者104名である。調査期間は1994-1999(平成6~11年)の計6年間である。このうち1994(平成6)年度の調査票が見つからないため、以下、現時点では1994(平成6)年度を除外して整理・入力した。

調査内容は、「東京」に関する意識項目と言語項目である。主に学生からの提案によって増補および若干の改訂が加えられたため、項目数は71~125項目、調査票は6種類におよぶ。話者への謝礼は、調査当日に実践女子短期大学ネーム入りシャープペンシルが調査者から手渡され、後日、指導教授飛田良文による礼状と調査結果をまとめたものが郵送された。

これらの調査結果は、飛田良文編(1997)に「第六章 レポートの書き方」(pp.107-125)の調査

¹ 本稿は、2011年10月30日に開催された国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(リーダー:三井はるみ)の公開研究発表会での発表に加筆してまとめたものである。飛田良文先生には、この資料を紹介することをおゆるしくくださったことと、まとめる際にご助言くださったことに、心より感謝を申し上げる。

² 現時点での詳細は、吉田雅子・竹田晃子・鎌水兼貴(2012)『明治期国語調査委員会資料と『日本言語地図』『方言文法全国地図』による分布解釈研究』(科学研究費補助金研究成果報告書・基盤研究(C), 課題番号20520430, 研究代表者:吉田雅子)を参照されたい。

³ 資料については、2011年10月、飛田良文先生宅から、鎌水兼貴さん(国立国語研究所)とともに、資料の一部をお預かりした。なお、本稿をまとめるにあたり、以下では敬称を省略する。

例として、調査票のフェイスシートとJR中央線における意識項目の集計表とその解説が掲載されている⁴。

2.2 調査方法（地点・話者）

調査は、東京都・神奈川県・千葉県の一環の鉄道の駅の周辺地域で行われた。1994（平成6）年度を除く調査地点（話者住所）の異なり数は410地点、1994（平成6）年度を含む調査地点の最寄り駅の異なり数は58駅（うち複数回調査した駅は12）である。最寄り駅をJR路線図上に■記号で示すと、図1のようになる。

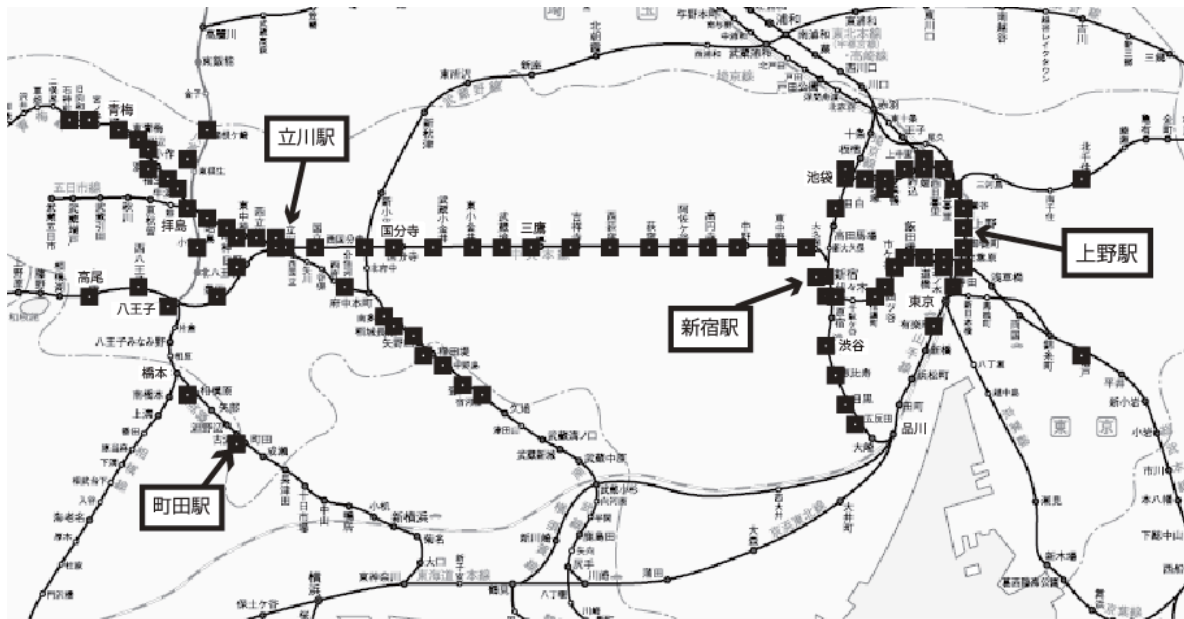


図1 調査地点最寄り駅一覧（JR主要路線における）

表1 調査概要

年度	調査期間	調査地域：JR主要路線名（地域・駅名）	地点数 （最寄り駅）	話者数	項目数
1994	1994 年秋	中央本線（新宿-高尾 間）	21（集計表）	（未確認）	（未確認）
1995	1995 年 7 月 27 日 -12 月 22 日	山手線（北部）・中央線・総武線	13	81	71
1996	1996 年 6 月 22 日 -11 月 15 日	山手線・常磐線	19	136	86
1997	1997 年 7 月 26 日 -12 月 19 日	青梅線（立川-小作 間）	12	96	97
1998	1998 年 7 月 8 日 -12 月 20 日	南武線（立川-宿河原 間）	12	43	107
1999	1999 年 8 月 7 日 -10 月 7 日	八高線（箱根ヶ崎・東福生・小宮）・青梅線（日向和田・宮ノ平・東青梅）・横浜線（相模原・町田）	8	49	125
	6 年間	8 路線	異なり 58 地点	405 名 以上	

⁴ これらは、本報告書第1部所収の講演「私のとらえたい東京語」の「10. 世代差が見られた「東京人意識」」の表6～表9とその説明に引用されている。

全ての調査期間・調査地域・最寄り駅数・話者数についてまとめると、表1のようになる。

フェイスシートには、①話者の属性（氏名・生年月日・年齢・性別・職業・学歴・現住所（結婚前・結婚後）・家族の中での世代（親・子・孫））、②調査環境（個人別／家族そろって）、③調査年月日・開始～終了時刻、④調査者（氏名・生年月日・性別・所属）がある。

1995-1999年度の話者は、1906（明治39）年生から1993（平成5）年生（調査当時90代～6歳前後）の405名である。飛田による「ことばは親から子へ、子から孫へと継承される」との仮説に基づき、話者は同一家族三世代を対象にしており、この点がこの調査の最大の特徴である。家族ごとの話者数は3～5名で、個々の家族内での世代別にみると親世代が128名、子世代が127名、孫世代が148名、不明が2名である。性別は、女性220名、男性182名、未記入が3である。

1995-1999年度の話者の居住歴は、結婚前と結婚後に分けて調査されている。結婚前については、東京都内が92名、未婚・未記入が268名、その他48名は東日本を中心に、西は愛知県・兵庫県・島根県とあり、不明4名である。結婚後については、東京都内が64名、未記入が333名、その他5名は福島県1名・神奈川県4名、不明10名である。未記入が多い理由は、既婚者の多くが調査時の現住所に居住しているためと思われる。

調査は、調査者による面接調査で、家族ごとに調査に応じた話者と個別に応じた話者がほぼ半々である。1995-1999年度の調査時間は平均すると話者1名あたり約30分である。

2. 3 調査項目（言語意識）

言語意識についての調査項目は、全年度を通じて「東京人意識」「東京意識」「日常ことば意識」の3種類で、質問文・選択肢と、実際の回答例（1995-1999年度）は次のとおりである。

【東京人意識】

質問文：あなたは東京人だと思っっていますか。

選択肢：はい（完全に）・はい（半分くらい）・いいえ（何人だと思っっていますか）

「いいえ（何人だと思っっていますか）」に対する実際の回答例

日本人、今は東京人、江戸っ子、調布人、三たまん、青梅人、いなかん、拝島人、八王子、羽村人、羽村っ子、神奈川県人、神奈川人、横浜市民、埼玉県人、山梨県人、日光人と半々、栃木人、世界人、福島県人、宮城県人、山形県人、東北人、新がた人、富山県人、関西人、岐阜人、福岡人、わかんない

【東京意識】

質問文1：あなたは、小学生のころ、どこが東京だと思っっていましたか。

選択肢1：東京市内、東京都区内、山手線の内側、その他（自由回答1）

その他（自由回答1）の実際の回答例

江戸、皇居、東京府、東京市内・東京都区内、23区、東京市内・東京都区内、市内・都区内全て、都内、銀座、23区内、港区内、全部、東京全体、東京タワー、東京駅のまわり、日本橋、中野町、三鷹駅、東京を意識していない、わからない、わかんない

質問文2：JR中央線でいえば何駅からですか。（自由回答2）

質問文3：JR山手線でいえば何駅からですか。（自由回答3）

※1994年度の調査票では質問文3を欠く。

【日常ことば意識】

質問文：あなたの日常使っている言葉は次のうちどれですか。

選択肢：共通語，東京語，標準語，山の手言葉，下町言葉，その他（自由回答）

実際の自由回答の例

日本語，東京語に近い標準語，自分語，多摩言葉，ベーベー語，青梅語，青梅言葉，羽村弁，福井弁，田舎，岩手，地元の言葉，どくとく，幼児ことば

2. 4 調査項目（言語項目）

言語項目は66～120項目で，前述の通り語彙項目は年度によって異なる。分野別には音声・音韻23項目，アクセント22項目，語彙は最多で62項目，文法13項目である。詳細は，本稿の末尾の「付録：飛田良文「東京語調査票」1994-1999調査項目一覧」を参照されたい。

音声・音韻の項目には，連母音の融合，ヒとシの混同，拗音の直音化，欧米語の外来音などの項目がある。アクセント項目には，一拍から四拍までの名詞・複合語・外来語などがある。語彙項目には，外来語を含む名詞，動詞，数の数え方がある。文法項目には，格助詞・助動詞・敬語による項目がある。

すべての項目に選択肢が用意されており，調査者はこれに○を付け，場合によって自由回答を記入することになる。

2. 5 調査結果の集計

「東京語調査」の調査結果は，年度と項目によって，「東京語調査記入表」に集計されている場合がある。この表は，質問文ごとに1枚を要する最寄り駅×話者（親・子・孫）のクロス表で，該当欄に回答を記号で記入する形式になっている⁵。集計は飛田と学生によって行われた。なお，1994年度の調査は調査票が確認されていないが，この記入表のみが確認されている。

本稿では，1995～1999年度の調査結果のうち14項目について，グロットグラム（地点×年齢）様の図を作成した。以下に，山手線・中央本線，青梅線（立川-日向和田），南武線（立川-宿河原），八高線（箱根ヶ崎・東福生・小宮），横浜線（相模原・町田）での調査結果をまとめ，地域差と年代差という観点から特徴を紹介する。

通常，グロットグラムは，直線上の起点と着点の間に地点を設け，地点ごとに年代差を表示し，分布の変動を地域差と年代差の両方から分析するための図である。ある程度直線的に地点を配置するのが一般的だが，今回の調査地点は図1の「調査地点最寄り駅一覧」のとおり直線上に地点が並ぶものではない。そこで，できるかぎりJRの路線図に近いイメージになるよう配置した。

また，「東京語調査」は家族ごとに親・子・孫の三世代で調査を行っているが，話者の生年から確認すると，別家族の親と子あるいは子と孫が同年齢という場合もあり，グロットグラムという手法で三世代を並べることは難しいと思われた。そこで，地点別の話者の生年分布図を作成し，

⁵ 本報告書第1部所収の飛田良文氏講演「私のとらえたい東京語」の表8，表9の「東京語調査集計票」がこれに該当する。

分布に極端なばらつきがないことを確認した。そのうえで、表2のように、生年による10年きざみで8つの年代に分けて示した。

表2 話者の生年分布と年代分け（1995-1999年度）

年代①		年代②		年代③		年代④		年代⑤		年代⑥		年代⑦		年代⑧	
生年	人数	生年	人数	生年	人数	生年	人数	生年	人数	生年	人数	生年	人数	生年	人数
1906	1														
1908	1														
1909	1														
1910	1	1921	2	1931	3	1941	0	1951	6	1961	4	1971	1	1981	3
1911	3	1922	8	1932	3	1942	3	1952	3	1962	0	1972	4	1982	3
1912	3	1923	3	1933	2	1943	7	1953	4	1963	1	1973	6	1983	5
1913	5	1924	3	1934	2	1944	2	1954	4	1964	2	1974	3	1984	7
1914	2	1925	5	1935	2	1945	3	1955	4	1965	3	1975	9	1985	3
1915	1	1926	1	1936	4	1946	4	1956	3	1966	3	1976	9	1986	6
1916	4	1927	2	1937	4	1947	8	1957	3	1967	2	1977	8	1987	6
1917	5	1928	2	1938	6	1948	10	1958	4	1968	1	1978	7	1988	5
1918	4	1929	2	1939	1	1949	4	1959	4	1969	2	1979	11	1989	3
1919	2	1930	3	1940	4	1950	7	1960	2	1970	3	1980	8	1990	3
1920	4														
合計	37	合計	31	合計	31	合計	48	合計	37	合計	21	合計	66	1993	1
														合計	45

3. 調査結果

本稿では、山手線・常磐線・総武線・中央本線・青梅線の調査地点について、全115項目のうち14項目をとりあげ、末尾の図2から図14に調査結果を示しながら、以下で分布の概略を述べる。年代を表2の生年による区分にしたがって①～⑧で示し、路線を次のように7つに分ける。また、話者をさす場合には、「田端①」のように最寄り駅名に年代区分をつけて表す。

- A 1 山手線海側（東北線・東海道線）
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線（山手線の内側部分）
- B 2 中央本線（立川以西）
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

【意識項目】

(1) 東京人意識 (図 2)

多くの話者が、自分を「東京人」だと思っていることがうかがえる。ただし、A1 山手線海側と B1 中央線・総武線（山手線の内側）では×がほとんどないのに比べて、A2 山手線山側では△、C 青梅線には△×がある。このことから、内陸に入るほど自分を「東京人」だと思わない人がやや多い傾向が読み取れる。

(2) 日常ことば意識 (図 3)

全体に「標準語」「共通語」という回答が多い。自分のことばを「下町言葉」として回答した話者は、A1 山手線海側の日暮里①・鶯谷①・御徒町②③・有楽町④⑥と B1 中央線・総武線のお茶の水①③・市ヶ谷①で、有楽町④⑥を除くと①～③の年代にやや多い傾向がある。「山の手言葉」と回答した話者は、A2 山手線山側の駒込③・代々木⑦・五反田⑥、B1 中央線・総武線の水道橋⑦で、年代差はみられない。C 青梅線は、各地点の自由回答で多摩言葉、ペーペー語、青梅語、青梅言葉とあり、独特の言語意識がうかがえる。

【言語項目】

(3) 音韻 (シノヒ) : 東 (図 4) , 人 (図 5)

「東」については、シガシが、主に①～④の年代で回答されており、有楽町⑥を除く⑤～⑧の年代では回答されていない。A1 山手線海側に 10 人と多いが、B1 中央線・総武線は 3 人、A2 山手線山側と C 青梅線はそれぞれ 4 人と少ない。

「人」については、シトと回答した話者が①～④の年代にみられる点では「東」のシガシと同じ傾向である。しかし、全体でシトの回答が「東」のシガシより 5 地点多く、内陸にも回答が多いため、地域差があまり目立たない。

(4) 音韻 (ジュノジ) : 新宿 (図 6) , 手術 (図 7)

「新宿」については、シンジクが①～④の年代に 42 人とやや多い。⑦⑧の若い年代ではシンジクと回答した話者が 4 人だが、圧倒的にシンジユクが多い。地域差は特にみられない。

「手術」については、「新宿」のシンジクと同様、シジツと回答した話者が①～④の年代の話者に 38 人とやや多く、⑦⑧の年代の話者には 3 人と少ない。地域差も特にみられない。

(5) アクセント (2 拍名詞) : 坂 (図 8)

【サ】カと回答した話者が C 青梅線に著しく偏っており、ほぼすべての年代で【サ】カが回答されている。一方、A2 山手線山側・B1 中央線・総武線・A1 山手線海側・D 常磐線では、A2 の巣鴨⑦・渋谷④②名・渋谷⑦の 4 名を除くすべての話者がサ【カ】と回答している。この点で、はっきりした地域差が認められる。なお、E 総武線では亀戸①④⑤⑦が【サ】カと回答している。全体に、年代差は特に見られない。

(6) アクセント (2 拍名詞) : 心 (図 9)

コ【コロ】と回答した話者は、A1 山手線海側にやや多く、それに比べると C 青梅線ではコ【コ】ロが多い。年代差は特に見られない。

(6) 語彙 : ステーキ (図 10)

ビフテキは①～④の年代の話者にやや多く、⑥～⑧の年代の話者ではステーキの回答が多い。C 青梅線ではこの傾向が明確だが、ほかの路線では、A2 山手線山側の鶯谷⑥⑧、B1 中央線・総武線の水道橋⑦、A1 山手線海側の池袋⑧・高田馬場⑥2名・高田馬場⑧・代々木⑦のように若い年代でもビフテキと回答した話者がいる。

(7) 語彙：おにぎり (図 11)

「おにぎり」について、「むすび」と回答した話者は羽村③・福生①・福生②3名・昭島②⑦・中神②2名・東中神③⑤とC 青梅線に集中しているが、他の地域にはみられない。「にぎりめし」は、C 青梅線の福生②・昭島⑤、B2 中央線の立川①、A2 山手線山側の高田馬場③・目黒①・五反田②⑤、B1 中央線・総武線の四谷①、A1 山手線海側の神田②、E 総武線の亀戸①に回答されており、①～③の比較的年代が上の話者による回答が目立つ。「おむすび」「おにぎり」はほぼ全域に点在しているが、海側には「おむすび」がやや少なく、「おにぎり」がやや多い。

(8) 語彙：かつおぶし (図 12)

「かつおぶし」について、「おかか」は17名と少なく、「かつぶし」「かつおぶし」はほぼ全域に点在しており、地域差はみられない。ただし、「かつぶし」と回答した⑧の若い年代の話者は少なく、①の年代の話者には比較的多い傾向がある。

(9) 文法：食べちゃう (食べちゃった) (図 13)

「食べちゃう (食べちゃった)」について、「使わない」と回答した話者はC 青梅線に16人とやや多いのに対して、B1 中央線・総武線とA1 山手線海側には5人とやや少ない。年代差は特にみられない。

(10) 文法：起きれなくて (図 14)

「起きれなくて」と回答した話者は、C 青梅線とA2 山手線山側では⑤～⑧、B1 中央線・総武線とA1 山手線海側では④～⑧の若い年代に多く、①～③の年代には少ない。この年代差が顕著にみられるのはA2 山手線山側である。④の年代については、C 青梅線・A2 山手線山側と、B1 中央線・総武線・A1 山手線海側とを比べると、前者の方がやや少なく、④については海側の方が「起きれなくて」と回答した話者がやや多いことがわかる。

4. おわりに

本稿では、「東京語調査」資料の概要を整理し、その一部を紹介した。以下、今後の課題を述べる。

調査項目について、今回は共同研究プロジェクトの関係者から要望のあった14項目を取り上げたが、他の101項目についても概観する必要がある。また、南武線・八高線・横浜線の地点についても同様である。分析の観点については、資料からは家族内での語形の継承や親・子・孫の関係、性差、出身地による違いなどについても可能であると思われるが、今回は扱う余裕がなかった。

また、分析のための図表作成について、この資料の特長を描き出すための方法を考える必要がある。今回はグロットグラム様の図を作成したが、この図では年代差と地理的分布しか把握できない。また、直線上の地点群ではないため、地理的分布も把握しにくいという難点がある。他に、

話者の現住所をもとにした年代別の言語地図や路線ごとのグロットグラムを作り直して地理的分布を読み取る方法や、回答内容全体を数量的に分析する方法も考えられる。

さらに、東京都や首都圏の方言については、多くはないが他の分布資料もあり、これらの調査結果と「東京語調査」資料を比較することも考えられる。例えば『東京都言語地図』『関東地方域方言事象分布図』『日本言語地図』などである。

残念ながら、今回は1994年度のJR中央線の調査票が見つからず、整理・分析の対象から除外したため、中野や三鷹、国分寺など、この調査の動機ともなる沿線と調査地点群を欠くことになった。発見が期待される。

最後に、「東京語調査」資料は、本稿の執筆時である2013年からすると、最初の調査(1994年秋)から約20年が経過した。現在では得られない方言調査の資料としても、今後いつその利用と分析が望まれる。

文献

大橋勝男(1974-1976)『関東地方域方言事象分布地図』全3巻、おうふう社.

大橋勝男(1989-1992)『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』全4巻、おうふう社.

東京都教育委員会編(1986)『東京都言語地図』東京都教育委員会.

国立国語研究所編(1996-1974, 縮刷版 1981-1985)『日本言語地図』全6巻、大蔵省印刷局

飛田良文編著(1997)『日本語文章表現法』白帝社.

J R 東日本「東京近郊エリア拡大図」<http://www.jreast.co.jp/map/pdf/tokyo.pdf>(2011年10月29日閲覧)

図2 質問文「あなたは 東京人 だと思っっていますか。」

凡例 ● はい
 ▲ はい・完全に
 ■ はい・半くらい
 x いいえ
 ・ 未記入

- 当該年代の話者なし
 / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1921-1931								
1931-1941								
1941-1951								
1951-1961								
1961-1971								
1971-1981								
1981-1993								

明治38 大正10 昭和6 昭和16 昭和24 昭和38 昭和46 昭和56

A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
 A 2 山手線山側
 B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
 B 2 中央本線 (立川以西)
 C 青梅線
 D 常磐線
 E 総武線

C

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
-	x	-	-	■	x	-	■●
-	■	-	-	△x	-	-	■
■	x	-	-	x	-	-	■△
-	-	-	-	-	-	-	■
-	-	-	-	△△	△	-	△△
-	x	x△	-	△	x	-	x△
x	x△	-	-	△	x	-	●
■●	-	△■	-	-	△	△△	△△
x	-	x	■	-	■	x●	x x
-	■	-	-	■	-	-	■
-	■△	-	-	△	△	△	●
-	-	△	△	△	△	△	■●
-	-	-	△	△	△	△	■△

B 2 中央線 立川 東中野

D

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
■	-	■	■	-	-	■	-

常磐線 北千住

A 1 東北線・山手線海側

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端	-	■	■	-	■	-	●
西日暮里	-	-	-	△	-	-	△
日暮里	●	●	-	●	●●	-	●●●
鶯谷	●	●	-	-	●	■	●
上野	-	x	-	■	■	-	-
御徒町	-	■	x	■	■	-	■△
秋葉原	-	●●	-	■	-	-	-
神田	■	△	-	■	■	-	■
東京	■	-	-	■	-	-	■
有楽町	-	-	●	■	-	■	■
新橋	-	-	-	-	-	-	-
浜松町	-	-	-	-	-	-	-
田町	-	-	-	-	-	-	-
品川	-	-	-	-	-	-	-

E 総武線 電戸

B 1 中央線・山手線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
総武線	-	-	-	-	-	-	-
お茶の水	-	-	-	-	-	■△	-
水道橋	-	-	-	△	-	■	-
飯田橋	■	-	-	■	●	-	△
市ヶ谷	△	■	●●	■	-	●●	-
四ツ谷	■●	-	-	●●	-	■	●
信濃町	-	-	-	■	-	■△	-

A 2 山手線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込	△	■	■	■△	■	■	-
巣鴨	△	■	■	■	■	■	■
大塚	-	-	-	-	-	-	-
池袋	■	●	■	■	■	■	■
目白	-	-	■	■	-	■	■
高田馬場	-	-	■●	-	●●	-	●
新大塚	-	-	-	-	-	-	-
代々木	●●	-	■	-	△	●△△	△
原宿	-	-	-	-	-	-	-
渋谷	■	-	■●●●	-	-	■	-
恵比寿	△	-	-	■	-	-	-
目黒	■	-	△	■	-	■△	-
五反田	-	x	-	■x	■	■△	■
大崎	-	-	-	-	-	-	-

図3

質問文「あなたの日常使っている言葉は次のうちどれですか。」

- 凡例 ▲ 山の言葉
 ▽ 下町言葉
 ● ヒ 標準語
 共 共通語
 ・ その他

- 当該年代の話者なし
 / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治58	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
 A 2 山手線山側
 B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
 B 2 中央本線 (立川以西)
 C 青梅線
 D 常磐線
 E 総武線

C 青梅線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田
宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平
東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅
河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺
小作	小作	小作	小作	小作	小作	小作	小作
羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村
福生	福生	福生	福生	福生	福生	福生	福生
牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜
拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島
昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島
中神	中神	中神	中神	中神	中神	中神	中神
東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神
西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川
B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線	B 2 中央線
立川	立川	立川	立川	立川	立川	立川	立川
東中野	東中野	東中野	東中野	東中野	東中野	東中野	東中野

D

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線
北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住

A 1

東北線・山手線海側

東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線
田端	田端	田端	田端	田端	田端	田端	田端
西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里
日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里
鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷
上野	上野	上野	上野	上野	上野	上野	上野
御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町
秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原
神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田
東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町
新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋
浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町
田町	田町	田町	田町	田町	田町	田町	田町
品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川
E 総武線	E 総武線	E 総武線	E 総武線	E 総武線	E 総武線	E 総武線	E 総武線
電戸	電戸	電戸	電戸	電戸	電戸	電戸	電戸

山手線山側 A 2

中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線
お茶の水	お茶の水	お茶の水	お茶の水	お茶の水	お茶の水	お茶の水	お茶の水
水道橋	水道橋	水道橋	水道橋	水道橋	水道橋	水道橋	水道橋
飯田橋	飯田橋	飯田橋	飯田橋	飯田橋	飯田橋	飯田橋	飯田橋
市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷	市ヶ谷
四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷	四ツ谷
信濃町	信濃町	信濃町	信濃町	信濃町	信濃町	信濃町	信濃町
山手線	山手線	山手線	山手線	山手線	山手線	山手線	山手線
駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込
巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋
目白	目白	目白	目白	目白	目白	目白	目白
高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場
新大塚保	新大塚保	新大塚保	新大塚保	新大塚保	新大塚保	新大塚保	新大塚保
新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿
代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木
原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿
渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷
恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿
目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒
五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田
大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎

図5

質問文「人」

凡例 ○ ヒト
 ■ シト

- 当該年代の話者なし
 / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
常磐線	○	-	○	○	-	-	○○
北千住	○	-	○	○	-	-	○○

A 1

山手線海側

東北線・東海道線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端	-	■	○	-	○	-	○	○
西日暮里	-	-	-	■	-	-	○	-
日暮里	■	○	-	○	○	○	○	○
鶯谷	○	○	-	-	○	○	-	○
上野	-	■	○	○○○○	-	-	○○○○	-
御徒町	-	○	■	-	-	-	○○○	-
秋葉原	-	○○	-	○○	-	-	○	-
神田	○	○	-	○	○	○	○	○
東京	○	-	○	○	-	-	-	-
有楽町	-	-	○	■	-	○	○	-
新橋	/	/	/	/	/	/	/	/
浜松町	/	/	/	/	/	/	/	/
田町	/	/	/	/	/	/	/	/
品川	/	/	/	/	/	/	/	/

E

総武線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
亀戸	■	-	-	○	○	-	○

山手線山側

中央線・総武線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込	○	○	-	-	-	-	○○	-
巣鴨	○○	■	○	○	○	○	○○	-
大塚	-	-	-	■	-	-	-	○○
池袋	■	○	-	-	-	-	-	○○
目白	-	■	○	○	○	○	○	○
高田馬場	-	-	○	○	○	○	○	○
新大塚	/	/	/	/	/	/	/	/
新宿	○○	-	○	○	○	○	○	○
代々木	○○	-	○	○	○○	-	-	○○
原宿	/	/	/	/	/	/	/	/
渋谷	○	-	○	○	-	-	-	-
恵比寿	○	-	-	○	-	-	-	-
目黒	■	○	○	■	○	○○○○	-	-
五反田	-	○	-	-	○○○○	○○	○	○○○○
大崎	/	/	/	/	/	/	/	/

A 2

山手線

中央線・総武線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
お茶の水	○	-	-	-	-	-	-	○○
水道橋	-	-	-	■	-	-	-	○○
飯田橋	■	○	-	○	○	○	○	○
市ヶ谷	○	○	○	○	○	○	○	○
四ツ谷	○○	-	-	○○○	-	-	-	○○
信濃町	-	-	-	-	○○	-	-	○○

C 青梅線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田	-	○	-	○	-	-	○○
宮ノ平	-	○	-	○○	-	-	○○
東青梅	○	■	-	○	-	-	○○
河辺	-	-	-	○	-	-	○
小作	-	-	-	■	○	-	○○
羽村	-	○○	○○	○○	○○	-	○○
福生	○○	○○	-	○○	○	-	○○○○
牛浜	○○	-	○○○	-	-	○	○○
拝島	○	-	○○○	○	○	○○	○○
昭島	-	■	-	○	○○	○	-
中神	-	■	○	-	○	-	○○
東中神	-	-	○○	○	○	○	○
西立川	■	○	-	○	○	○○	○○

B 2

中央線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
立川	○	○	○	○	-	○○	-
東中野	■	○	-	■	○	-	○

図6 質問文「都庁があるところはどこですか。」(新宿)

凡例 ◆ シンジク
○ シンジュク
☆ 東京

- 当該年代の話者なし
/ 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側(東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線(山手線の内側)
- B 2 中央本線(立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

D

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993	
常磐線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
北千住	○	-	○	○	-	-	○	-

A 1

山手線海側

東北線・東海道線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端	-	◆	-	-	◆	-	-	○
西日暮里	-	-	-	○	-	-	-	○
日暮里	○	○	-	○	○○○	-	○	○○○
鶯谷	○	○	○	-	○	○	-	○
上野	-	◆◆	-	-	◆◆◆	-	-	○○○○
御徒町	-	○	◆	○	-	-	-	○○◆
秋葉原	-	○○	-	○○	-	-	-	○○
神田	○	○	-	○	○	-	-	○
東京	○	-	-	○	-	-	-	-
有楽町	-	-	◆	-	-	-	-	○
新橋	-	-	-	-	-	-	-	-
浜松町	-	-	-	-	-	-	-	-
田町	-	-	-	-	-	-	-	-
品川	-	-	-	-	-	-	-	-

E

総武線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
亀戸	◆	-	-	○	○	-	○	-

A 2

山手線山側

中央線・総武線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込	◆	○	○○	-	○	○○	-	○○
巣鴨	◆○	○○	○○○	○	○	○○	-	○○
大塚	-	-	○	-	○	-	-	-
池袋	◆	-	-	-	○	-	◆	-
目白	-	○	○	○	○	○○	○	○
高田馬場	-	-	◆◆	-	-	○○	-	○○
新大塚	-	-	-	-	-	-	-	-
新宿	-	-	○	-	○	○	○	○
代々木	○○	-	◆	-	○◆	-	○○○	-
原宿	-	-	-	-	-	-	-	-
渋谷	○	-	○	○○○○	-	-	○○○	-
恵比寿	◆	-	-	○	○	-	○	-
目黒	◆◆	-	○	○◆	-	◆○○○	-	◆○○○
五反田	-	-	-	-	◆○○○	-	◆○○○	○○○○
大崎	-	-	-	-	-	-	-	-

B 2

中央線 立川

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
東中野	◆	○	○	○	○	○	○

C

青梅線

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田	○	○	○	○	○	○	○
宮ノ平	○	○	○	○	○	○	○
東青梅	◆	-	-	○	-	-	○
河辺	-	-	-	○	-	-	○
小作	-	-	-	◆	-	-	○
羽村	-	◆◆	◆	○○	○○	○○	○○
福生	-	◆◆◆	-	○○	○	-	○○○○
牛浜	◆◆	-	-	○○○	-	○	○○
拝島	○	○	○○	○○	○○	○	○
昭島	-	○	-	○◆	-	○	○
中神	-	○◆	-	○	-	-	○○
東中神	-	○○	○	○○	○	○	○○
西立川	◆○	-	○	○	○	○	○

図7

質問文「手術」

- 凡例
- ◆ シジツ
 - ▲ シジュツ
 - シュジュツ
 - △ シーツ
 - ・ 漢字が読めない

- 当該年代の話者なし
- / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度（竹田晃子作図）

1905- 1920	1921-1931-1941-1951-1961-1971-1981- 1993							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	-	-	○	-	○	○	-	○
	-	◆	-	-	○○	-	-	○○
	○	○	-	-	◆	-	-	○
	-	-	-	-	○	-	-	○
	-	-	-	-	◆○	○	-	○○
	-	○○○	-	-	○○	○	-	○○○○
	◆◆	-	-	◆○○	-	○	○	○○
	○	-	○○	○○	○○	○	◆	-
	-	○○	-	-	○	-	-	○○
	-	-	△◆	○	○○	○	○	○○
	◆○	-	○	○	○	○	○	○
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	○◆	-	-	○	○○	-	○○	-
	◆	○	-	○	○	-	○	-

C		青梅線												
		日向和田	宮ノ平	東青梅	河辺	小作	羽村	福生	牛浜	拜島	昭島	中神	東中神	西立川
1905-1920	①	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	②	-	◆	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	○	○○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	○	○○	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○

D		山手線海側													
		田端	西日暮里	日暮里	鶯谷	上野	御徒町	秋葉原	神田	東京	有楽町	新橋	浜松町	田町	品川
1905-1920	①	-	-	◆	◆	-	-	-	▲	◆	-	-	-	-	-
	②	-	-	-	-	○○	-	○○	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

E		総武線							
		亀戸	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1905-1920	①	◆	-	-	○	○	○	-	-
	②	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-

A 1		山手線海側													
		田端	西日暮里	日暮里	鶯谷	上野	御徒町	秋葉原	神田	東京	有楽町	新橋	浜松町	田町	品川
1905-1920	①	-	-	◆	◆	-	-	-	▲	◆	-	-	-	-	-
	②	-	-	-	-	○○	-	○○	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

A 2		山手線山側														
		駒込	巣鴨	大塚	池袋	目白	高田馬場	新大塚	新宿	代々木	原宿	渋谷	恵比寿	目黒	五反田	大崎
1905-1920	①	○	○○	-	○	○	○	-	○	○	-	-	◆	◆	-	-
	②	◆	○○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	○	○○○	-	-	-	-	-	-	-	-	○○○○	-	○	○○○	○○○○
	④	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	○○	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

B 1		中央線・総武線													
		お茶の水	水道橋	飯田橋	市ヶ谷	四ツ谷	信濃町	新大塚	代々木	原宿	渋谷	恵比寿	目黒	五反田	大崎
1905-1920	①	◆○	-	◆◆	○	○○	○○	-	-	-	-	-	-	-	-
	②	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	○◆	-	○○	○	○○○	○○	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

B 2		中央線								
		立川	東中野	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1905-1920	①	○◆	-	-	-	-	-	-	-	-
	②	◆	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-	-

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

- 明治38 大正10 昭和6 昭和16 昭和26 昭和36 昭和46 昭和56
- A 1 山手線海側（東北線・東海道線）
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線（山手線の内側）
- B 2 中央本線（立川以西）
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

D		常磐線							
		北千住	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1905-1920	①	○	-	○	◆	-	-	-	○
	②	-	-	-	-	-	-	-	-
	③	-	-	-	-	-	-	-	-
	④	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑤	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑥	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑦	-	-	-	-	-	-	-	-
	⑧	-	-	-	-	-	-	-	-

質問文「坂 坂を登る」(アクセント)

凡例 ●【サ】力 【】高い部分
 ○サ【力】
 - 当該年代の話者なし
 / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1941-1951	1961-1971	1981-1993			
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
昭和三十八	昭和三十九	昭和四十	昭和四十	昭和四十	昭和四十	昭和四十	昭和四十

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

D

1905-1920	1921-1931	1941-1951	1961-1971	1981-1993			
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
常磐線	北千住						

A 1

東北線・山手線海側

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端							
西日暮里							
日暮里							
鶯谷							
上野							
御徒町							
秋葉原							
神田							
東京							
有楽町							
新橋							
浜松町							
田町							
品川							

E

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
総武線							
亀戸							

A 2

山手線山側

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込							
巣鴨							
大塚							
池袋							
目白							
高田馬場							
新大塚							
新宿							
代々木							
原宿							
渋谷							
恵比寿							
目黒							
五反田							
大崎							

B 1

中央線・総武線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
お茶の水							
水道橋							
飯田橋							
市ヶ谷							
四ツ谷							
信濃町							

C

青梅線

1905-1920	1921-1931	1941-1951	1961-1971	1981-1993			
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田							
宮ノ平							
東青梅							
河辺							
小作							
羽村							
福生							
牛浜							
拝島							
昭島							
中神							
真中神							
西立川							

B 2

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
中央線							
立川							
東中野							

図9

質問文「心」(アクセント)

凡例 ◆ コ【コ】口 【】高い部分

○ コ【コロ】

- 当該年代の話者なし

/ 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

明治38 大正10 昭和6 昭和16 昭和26 昭和36 昭和46 昭和56

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993	
D	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
常磐線	◆	-	◆	◆	-	-	◆	-
北千住	◆	-	◆	◆	-	-	◆	-

1905-1920 1921-1930 1931-1940 1941-1950 1951-1960 1961-1970 1971-1980 1981-1993

C

青梅線

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田	-	-	◆	-	○	-	-	○
宮ノ平	-	◆	-	-	◆	-	-	◆
東青梅	○	◆	-	-	◆	-	-	○
河辺	-	-	-	-	◆	-	-	◆
小作	-	-	-	-	◆	-	-	○
羽村	-	◆	◆	-	○	◆	-	○
福生	○	○	○	-	○	◆	-	◆
牛浜	○	-	○	◆	-	-	-	○
拝島	-	◆	◆	◆	○	-	-	○
昭島	-	○	-	-	○	-	-	○
中神	-	◆	-	-	○	-	-	○
東中神	-	◆	◆	◆	◆	◆	◆	○
西立川	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆

B 2

中央線

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
東中野	○	○	-	-	○	○	-	◆
立川	○	◆	-	◆	○	◆	-	○

山手線山側 A 2

山手線

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込	○	◆	○	○	-	-	◆	-
巣鴨	◆	○	○	◆	-	-	○	○
大塚	-	○	-	-	-	-	-	-
池袋	◆	○	-	-	-	-	○	◆
目白	-	◆	◆	○	○	○	○	◆
高田馬場	-	-	◆	-	-	-	-	-
新大塚	-	-	◆	-	-	-	-	-
新宿	-	-	○	-	-	○	○	○
代々木	○	-	○	-	◆	-	○	-
原宿	-	-	-	-	-	-	-	-
渋谷	◆	-	◆	○	◆	◆	◆	◆
恵比寿	◆	-	-	-	◆	-	-	-
目黒	○	-	◆	○	○	◆	◆	◆
五反田	-	◆	-	-	○	◆	◆	◆
大崎	-	-	-	-	-	-	-	-

A 1

東北線・東海道線

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端	-	◆	-	-	-	○	-	◆
西日暮里	-	-	-	-	◆	-	-	◆
日暮里	○	○	-	-	○	○	◆	-
鶯谷	○	◆	-	-	-	○	○	○
上野	-	◆	-	-	◆	-	-	○
御徒町	-	◆	○	◆	-	-	-	○
秋葉原	-	◆	-	-	○	-	-	○
神田	○	◆	-	-	○	○	-	○
東京	○	-	-	-	○	-	-	-
有楽町	-	-	-	◆	○	-	-	○
新橋	-	-	-	-	-	-	-	-
浜松町	-	-	-	-	-	-	-	-
田町	-	-	-	-	-	-	-	-
品川	-	-	-	-	-	-	-	-

E

総武線

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

亀戸 ○ - - - - - ○ - - -

図10

質問文「「ビフテキ」「ビステキ」「ステーキ」のうちどれを使いますか。」

- 凡例 ● ビフテキ
▲ ビステキ
○ ステーキ

- 当該年代の話者なし
/ 当該地点の話者なし

・ 未記入

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側(東北線・東海道線)
A 2 山手線山側
B 1 中央線・総武線(山手線の内側)
B 2 中央本線(立川以西)
C 青梅線
D 常磐線
E 総武線

C 青梅線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
日向和田	○	-	-	●	○	-	○○
宮ノ平	●	-	○	-	-	-	○○
東青梅	●	-	-	-	-	-	○○
河辺	-	-	-	○	-	-	○
小作	-	-	-	○○	○	-	○○
羽村	●	○○	-	○○	○○	-	○○
福生	○	○○	-	○○	○	-	○○○○
牛浜	○○	-	○○▲	-	-	○	○○
拝島	●	-	●●	○○	○○	-	○○
昭島	-	-	-	-	-	-	-
中神	-	●	-	○	-	-	○○
真中神	-	○	○○	●	○	○	○○
西立川	▲	○	○	○	○	○	○○

B 2 中央線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
東中野	●	-	-	○	○	-	-

山手線山側 A 2

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
駒込	○	○	○	○	○	○	○
巣鴨	●	●	●	●	●	●	●
大塚	-	-	-	-	-	-	-
池袋	●	●	●	●	●	●	●
目白	-	-	-	-	-	-	-
高田馬場	-	-	-	-	-	-	-
新大塚	-	-	-	-	-	-	-
新宿	○	○	○	○	○	○	○
代々木	○	○	○	○	○	○	○
原宿	-	-	-	-	-	-	-
渋谷	●	●	●	●	●	●	●
恵比寿	●	●	●	●	●	●	●
目黒	●	●	●	●	●	●	●
五反田	-	○	○	○	○	○	○
大崎	-	-	-	-	-	-	-

B 1

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
中央線	●	●	●	●	●	●	●
総武線	●	●	●	●	●	●	●
お茶の水	-	-	-	-	-	-	-
水道橋	-	-	-	-	-	-	-
飯田橋	●	●	●	●	●	●	●
市ヶ谷	●	●	●	●	●	●	●
四ツ谷	●	●	●	●	●	●	●
信濃町	-	-	-	-	-	-	-

D 常磐線

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
北千住	○	-	○	○	-	○	-

A 1

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
東北線	●	●	●	●	●	●	●
東海道線	○	○	○	○	○	○	○
田端	-	-	-	-	-	-	-
西日暮里	○	○	○	○	○	○	○
日暮里	○	○	○	○	○	○	○
鶯谷	●	●	●	●	●	●	●
上野	○	○	○	○	○	○	○
御徒町	●	●	●	●	●	●	●
秋葉原	-	-	-	-	-	-	-
神田	●	●	●	●	●	●	●
東京	●	●	●	●	●	●	●
有楽町	-	-	-	-	-	-	-
新橋	-	-	-	-	-	-	-
浜松町	-	-	-	-	-	-	-
田町	-	-	-	-	-	-	-
品川	-	-	-	-	-	-	-

E

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
総武線	●	-	-	-	-	-	-
亀戸	-	-	-	-	-	-	-

図11

質問文「遠足などのときに持つて行く、ご飯をまるめてのりを巻く食べ物は何？」

- 凡例
- ◆ おむすび
 - おにぎり
 - ◎ にぎりめし
 - ▲ むすび
 - ・ 未記入

- 当該年代の語者なし
- / 当該地点の語者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1930	1931-1940	1941-1950	1951-1960	1961-1970	1971-1980	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明後38	大正10	昭和8	昭和16	昭和24	昭和32	昭和40	昭和48

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

1905-1920 1921-1930 1931-1940 1941-1950 1951-1960 1961-1970 1971-1980 1981-1993

C

青梅線

	日向和田	宮ノ平	東青梅	河辺	小作	羽村	福生	牛浜	拝島	昭島	中神	東中神	西立川
①	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
②	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
③	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
④	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
⑤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
⑥	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
⑦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
⑧	○○	○○	○◆	○	○	○	○◆○	○	○	○	○	○	○

B 2

中央線

立川

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

東中野

山手線山側 A 2

山手線

駒込

巣鴨

大塚

池袋

目白

高田馬場

新大塚

新宿

代々木

原宿

渋谷

恵比寿

目黒

五反田

大崎

B 1

中央線

総武線

お茶の水

水道橋

飯田橋

市ヶ谷

四ツ谷

信濃町

A 1

東北線・東海道線

山手線海側

田端

西日暮里

日暮里

鶯谷

上野

御徒町

秋葉原

神田

東京

有楽町

新橋

浜松町

田町

品川

品川

品川

品川

品川

品川

品川

品川

品川

品川

品川

図12

質問文「ダシをとったり、豆腐やおひたしにのせて食べる物は何ですか？」

- 凡例
- おかか
 - △ かつぶし
 - かつおぶし
 - ・ 未記入

- 当該年代の語者なし
- / 当該地点の語者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度（竹田晃子作図）

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側（東北線・東海道線）
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線（山手線の内側）
- B 2 中央本線（立川以西）
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

1905-1920 1921-1931 1931-1941 1941-1951 1951-1961 1961-1971 1971-1981 1981-1993

C	青梅線							
	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田	日向和田
	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平	宮ノ平
	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅	東青梅
	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺	河辺
	小作	小作	小作	小作	小作	小作	小作	小作
	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村	羽村
	福生	福生	福生	福生	福生	福生	福生	福生
	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜	牛浜
	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島	拝島
	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島	昭島
	中神	中神	中神	中神	中神	中神	中神	中神
	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神	東中神
	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川	西立川
	B 2							
	中央線							
	立川							
	東中野							

D	1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線	常磐線
	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住	北千住

A 1

東北線・山手線海側

A 1	東北線・山手線海側							
	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線	東海線
	田端	田端	田端	田端	田端	田端	田端	田端
	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里	西日暮里
	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里	日暮里
	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷	鶯谷
	上野	上野	上野	上野	上野	上野	上野	上野
	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町	御徒町
	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原	秋葉原
	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田
	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町	有楽町
	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋	新橋
	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町	浜松町
	田町	田町	田町	田町	田町	田町	田町	田町
	品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川	品川
	E							
	総武線							
	亀戸							

A 2

山手線山側

A 2	山手線山側							
	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線	中央線
	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込	駒込
	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨	巣鴨
	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋	池袋
	目白	目白	目白	目白	目白	目白	目白	目白
	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場	高田馬場
	新大塚	新大塚	新大塚	新大塚	新大塚	新大塚	新大塚	新大塚
	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿	新宿
	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木	代々木
	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿	原宿
	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷	渋谷
	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿	恵比寿
	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒	目黒
	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田	五反田
	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎	大崎

図13

質問文「食べちゃう・ちゃった」を使いますか。」

凡例

- 使う
- 使わない
- ▲ 食べちゃうx, ちゃった○
- ▽ 食べちゃう, ちゃった

- 当該年代の話者なし
- / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明後38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

D 1905-1920 1921-1931 1931-1941 1941-1951 1951-1961 1961-1971 1971-1981 1981-1993

常磐線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
北千住	○	-	○	○	-	○	-

A 1

東北線・山手線海側

東海道線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
田端	-	○	○	-	○	-	○	○
西日暮里	-	-	-	○	-	-	-	○
日暮里	○	○	-	○	■	○○	-	○
鶯谷	○	○	-	-	-	○	○	○
上野	-	○○	-	○○○○	-	○○○○	-	○○○○
御徒町	-	○	○	○	-	-	○○	-
秋葉原	-	■	○	○○	-	○○	-	○○
神田	○	○	-	○	○	-	○	○
東京	○	-	-	○	-	-	-	-
有楽町	-	-	○	○	-	○	○○	-
新橋	-	-	-	-	-	-	-	-
浜松町	-	-	-	-	-	-	-	-
田町	-	-	-	-	-	-	-	-
品川	-	-	-	-	-	-	-	-

E

総武線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
亀戸	■	-	-	■	■	-	○	-

山手線山側 A 2

中央線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
総武線	-	-	-	-	-	-	-	-
お茶の水	○○	-	○○	■	-	○○	○○○	-
水道橋	-	-	-	○○	-	-	■	○
飯田橋	○○	-	-	○	○	-	○	○
市ヶ谷	○	○	■	○○	-	○○○	-	○○○
四ツ谷	○○	-	-	○○○	-	-	○	○○
信濃町	-	-	-	○○	-	-	○○	-

山手線山側 A 2

駒込	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
東鴨	○○	○○	○	○	○	○	○	○
大塚	-	■	-	-	-	-	-	-
池袋	○	○	○	○	○	○	○	○
目白	-	-	○○	-	○○	-	○	○
高田馬場	-	-	-	-	-	-	-	-
新大塚	-	-	-	-	-	-	-	-
新宿	○	○	○	○	○	○	○	○
代々木	○○	-	○○	-	○○○	-	-	-
原宿	-	-	-	-	-	-	-	-
渋谷	○	-	○○○○	-	○○○○	-	○	○
恵比寿	■	-	-	○	-	-	-	-
目黒	○	-	■	○○	-	○○○○	-	○○○○
五反田	-	○	■	-	○○○○	○	○	○○○○
大崎	-	-	-	-	-	-	-	-

C 1905-1920 1921-1931 1931-1941 1941-1951 1951-1961 1961-1971 1971-1981 1981-1993

青梅線

日向和田	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
宮ノ平	-	○	○	-	○	○	-	○
東青梅	○	○	-	-	■	-	-	○
河辺	-	-	-	-	○	-	-	○
小作	-	-	-	-	■	○	-	○
羽村	-	○○	■	-	▲	○○	-	○○
福生	■	○	○	-	○	-	○	○
牛浜	■	▲	-	○○○	-	-	▲	○○
拝島	○	-	■	○○	○○	-	○	■
昭島	-	○	-	-	○○	-	○	○
中神	-	■	-	-	○	-	○	■
東中神	-	○	○	○	○○	○	○	○
西立川	■	○	-	○	○	○	○	○

B 2

中央線	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
立川	■	○	-	○	○○	-	○	-

東中野	○	○	-	○	○	-	○	-
-----	---	---	---	---	---	---	---	---

図14 質問文「早く(起きられなくて/起きられなくて)」

凡例 △ 起きられなくて / 当該年代の話者なし
 ● 起きられなくて / 当該地点の話者なし

飛田良文「東京語調査」1995～1999年度(竹田晃子作図)

話者の生年

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
明治38	大正10	昭和6	昭和16	昭和26	昭和36	昭和46	昭和56

- A 1 山手線海側 (東北線・東海道線)
- A 2 山手線山側
- B 1 中央線・総武線 (山手線の内側)
- B 2 中央本線 (立川以西)
- C 青梅線
- D 常磐線
- E 総武線

C

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
青梅線	日向和田	宮ノ平	東青梅	河辺	小作	羽村	福生
牛浜	拝島	昭島	中神	真中神	西立川	立川	東中野

D

常磐線 北千住

1905-1920	1921-1931	1931-1941	1941-1951	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1993
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
△	-	△	△	-	-	△△	-

A 1

東北線・山手線海側

東海道線	田端	西日暮里	日暮里	鶯谷	上野	御徒町	秋葉原	神田	東京	有楽町	新橋	浜松町	田町	品川	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
-	-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

A 2

山手線山側

中央線	総武線	お茶の水	水道橋	飯田橋	市ヶ谷	四ツ谷	信濃町	駒込	巣鴨	大塚	池袋	目白	高田馬場	新大塚	新宿	代々木	原宿	渋谷	恵比寿	目黒	五反田	大崎	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

B 2

中央線

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
△	△	△	△	△	△	△	△

付録：飛田良文「東京語調査票」1994-1999 調査項目一覧

- (1) 項目によって意識・音韻・アクセント（以下アクと称する）・語彙・文法の5分野に便宜的に分類し、項目の種類によって並べ替えた。ただし、調査目的としてはこれらの分野が重複している場合もあり、利用には注意が必要である。
- (2) 回答は、「選択肢」に調査者が○を付ける方式になっており、「その他」は自由回答欄である。
- (3) アクセント項目の選択肢は、高く発音される部分を【】で示した。実際の調査票では上線で示されている。
- (4) 語彙項目の話者への提示用資料（絵）は、回答の区別に必要な部分のみ表内に示し、他は省略した。
- (5) 年度ごとに調査項目が増えるため、全項目において全年度の回答があるわけではない。
- (6) 表の左方にある数字は、調査票の冒頭からの全体の通し番号と、分野別の通し番号との2種類がある。一つの欄に2つ以上の質問項目がある場合、番号も対応して2つ以上付した。


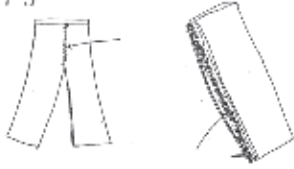
分野		質問文	選択肢
1	意識 1	あなたは東京人だと思っていますか。	完全に／半分くらい／ いいえ（何人だと思っていますか）
2	意識 2	(1)あなたは、小学生のころ、どこが東京だと思っていましたか。	東京市内／東京都区内／山手線の内側／その他
3	3	(2) J R 中央線でいえば何駅からですか。	
4	4	(3) J R 山手線でいえば何駅からですか。	
5	意識 5	あなたの日常使っている言葉は次のうちどれですか。	共通語／東京語／標準語／ 山の手言葉／下町言葉／その他




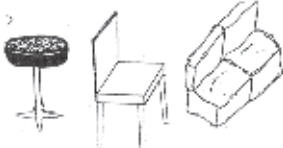
分野		質問文・調査項目	選択肢
6	音韻 1	畑に植えてある太い白い根を持つ野菜は何ですか。（大根）	ダイコン／ダイコ／ デーコン／デーコ
7	音韻 2	大工	ダイク／デーク
8	音韻 3	無い	ナイ／ネー
9	音韻 4	痛い	イタイ／イテー
10	音韻 5	入る	ハイル／ヘール
11	音韻 6	話が「つまらない」の反対は何といいますか。（おもしろい）	オモシロイ／オモシレー
12	音韻 7	あなたは、小学生のころ、家の入り口を、ゲンカンといいましたか。	ゲンカン／ゲンカ
13	音韻 8	火	ヒ／シ
14	音韻 9	昼寝	ヒルネ／シルネ
15	音韻 10	人	ヒト／シト
16	音韻 11	百円	ヒャクエン／シャクエン

分野			質問文・調査項目	選択肢
17	音韻	12	方向を東西南北といますが、日の出る方向を何とといいますか。(東)	ヒガシ/シガシ
18	音韻	13	寝るとき、布団を床に広げることを布団をどうすると言いますか。	ひく/しく
19	音韻	14	宿題	シュクダイ/シクダイ
20	音韻	15	下宿	ゲシュク/ゲシク
21	音韻	16	塾	ジュク/ジク
22	音韻	17	寿命	ジュミョウ/ジミョウ
23	音韻	18	手術	シュジュツ/シジツ
24	音韻	19	半熟	ハンジュク/ハンジク
25	音韻	20	都庁があるところはどこですか。(新宿)	シンジク/シンジュク
26	音韻	21	背中にリュックを(背負う/しょう)	背負う/しょう
27	音韻	22	さあ、食事に(しょう/しょう)	しょう/しょう
28	音韻	23	カメラの中にいれるものは何ですか。	フィルム/フィルム
29	音韻	24	P T A	ピーターエー/ピーティーエー/ ピーチャーエー
30	音韻	25	千葉県にある大きなテーマパークを何と言いますか。(ミッキーマウスのいるところ)	ディズニーランド/ デズニーランド

分野			質問文・調査項目	選択肢 (【 】:高)
31	アク	1	坂 坂を登る	【サ】カ/サ【カ】
32	アク	2	梨 梨を食べる	ナ【シ】ヲ/ナ【シヲ】
33	アク	3	雲	ク【モ】/【ク】モ
34	アク	4	朝日	【ア】サヒ/ア【サヒ】
35	アク	5	枕	【マ】クラ/マ【クラ】
36	アク	6	涙	【ナ】ミダ/ナ【ミダ】/ナ【ミ】ダ
37	アク	7	もみじ	【モ】ミジ/モ【ミ】ジ
38	アク	8	ダダダ…と音を立てて走るオートバイを何とといいますか。	バ【イク】/【バ】イク
39	アク	9	苺	イ【チゴ】/【イ】チゴ
40	アク	10	いっこ	イ【ト】コ/【イ】トコ
41	アク	11	頭	ア【タ】マ/ア【タマ】
42	アク	12	はさみ	ハ【サ】ミ/ハ【サミ】
43	アク	13	鏡	カ【ガ】ミ/カ【ガミ】
44	アク	14	心	コ【コ】ロ/コ【コロ】
45	アク	15	柱	ハ【シ】ラ/ハ【シラ】
46	アク	16	刀	カ【タ】ナ/カ【タナ】
47	アク	17	肉やじゃがいもを衣をつけて揚げて食べるものを何とといいますか。	【コ】ロッケ/【コロッ】ケ

分野			質問文・調査項目	選択肢 (【 】:高)
48	アク	18	雷	カ【ミナ】リ／カ【ミナリ】
49	アク	19	居眠り	イ【ネム】リ／イ【ネムリ】
50	アク	20	缶詰	カ【ンヅ】メ／カ【ンヅメ】
51	アク	21	食べ物	タ【ベモ】ノ／タ【ベモノ】
52	アク	22	楽しみ	タ【ノシ】ミ／タノ【シミ】

分野			質問文 (abc:物の種類=参照絵あり)	選択肢
53	語彙	1	「ビフテキ」「ビステキ」「ステーキ」のうちどれを使いますか。	ビフテキ／ビステキ／ステーキ
54	語彙	2	ポケットに入っていて、手を洗った後に使う四角い布を何といいますか？	ハンカチ／ハンケチ
55	語彙	3	上着の下・ワイシャツの上に着る、そでのない衣服を何と言いますか？	ベスト／チョッキ
56	語彙	4	鼻をかむ時に使う	ちりがみ／はながみ／ ティッシュペーパー／ トイレットペーパー
57		5	薄い紙を何といいますか？ab (絵60)	
			60 	
58	語彙	6	「パンツ」は何をさしますか。	ズボン／下着
59	語彙	7	女の人が、服の下に着る肌着を何と言いますか？	シミーズ／シュミーズ／ 下着／スリッパ
60	語彙	8	ズボンや布製のふでばこについている、開けたり閉めたりする金属器具を何と呼びますか？ (絵75)	ファスナー／ジッパー／ チャック
			75 	
61	語彙	9	男性が会社に行く時、着ていくものは何ですか？	背広／スーツ
62	語彙	10	洋服を掛けるものは何ですか？	ハンガー／えもんかけ
63	語彙	11	冬など寒いときに、首に巻く防寒具は何ですか。	マフラー／えりまき
64	語彙	12	雨の日に、洋服が濡れないように着るビニール製のものを何といいますか。(a 色つきのもの, b 透明のもの)	レインコート／雨がっぱ／ その他
65		13		
66	語彙	14	首が隠れる衣服を何と言いますか。首の部分が	ハイネック／タートルネック／ とっくり
67		15	折り返してあるものと、ないものとがあります。それぞれ、何と言いますか。(a 首の部分が折り返してあるもの, b 首の部分が折り返してないもの)	

分野		質問文 (abc : 物の種類=参照絵あり)	選択肢
68	語彙	16 足にはくものです。何と言いますか。 104の絵を見てください。 	スニーカー/ズック/運動靴
69	語彙	17 ちょっと外に出るときはいていくものは?	サンダル/つっかけ
70	語彙	18 料理をする時、汚れない 71 19 ように身に付けるものは (a) (b) 何と言いますか。 ab (絵 71) 	エプロン/まえかけ
72	語彙	20 家の中で料理をする所を何といいますか	おかって/だいどころ/ キッチン/キッチン
73	語彙	21 ご飯を炊く器具を何と呼びますか?	おかま/電子ジャー/炊飯器
74	語彙	22 味噌を出し汁に溶いてわかめ・あぶらあげ・豆腐などを入れた汁物は?	みそしる/おみおつけ
75	語彙	23 ダシをとったり、豆腐やおひたしにのせて食べる物は何ですか?	かつぶし/かつおぶし/ けずりぶし/おかか
76	語彙	24 北海道でとれる魚で、ほぐしてお茶漬けに入れたりするものを何といいますか?	さけ/しゃけ
77	語彙	25 遠足などのときに持って行く、ご飯をまるめてのりを巻く食べ物は何ですか?	おにぎり/にぎりめし/ おむすび
78	語彙	26 お茶漬けに合う、樽に漬けた野菜は何ですか?	おつけもの/おしんこ
79	語彙	27 夜、食べる食事のことを何と呼びますか。	夕ごはん/夕めし/夕はん/ 夕食/晩ごはん/晩めし/ 晩ごはん/その他
80	語彙	28 レストランなどで食事をする前に何で手を拭きますか。	おしぼり/おてふき
81	語彙	29 寝る時に、敷布団の上をおおう布を何といいますか?	シーツ/敷布
82	語彙	30 寝るときに着るものは 53 31 何ですか? ab (絵 53) 	パジャマ/ねまき
84	語彙	32 あなたが、洋間で 78 33 座る時に使うも (a) (b) (c) 34 のは何ですか? abc (絵 78) 	こしかけ/いす/ソファ
87	語彙	35 学生の時に使った、鉛筆や消しゴムを入れておくものを何といいますか?	ふでいれ/ふでばこ/ ペンケース/カンカン

	分野	質問文 (abc : 物の種類=参照絵あり)	選択肢
88	語彙	36 ラケットを使って、テーブルの上で行う、テニスに似たスポーツは何ですか。	ピンポン/卓球
89	語彙	37 野球で、ボールを打つ人に向かって、ボールを投げる人を何と言いますか。	投手/ピッチャー
90	語彙	38 多くの種類の商品を販売する大規模な総合小売店を何と言いますか。	デパート/百貨店
91	語彙	39 例えば、ゴルフクラブのような団体に所属した一人一人、個人のことを何と言いますか。	メンバー/会員
92	語彙	40 映画を観るときに、入り口で買うものを何と言いますか。	チケット/入場券/切符/その他
93	語彙	41 おしっこがしたくなったとき、用を足しに行く場所を何と言いますか。	(お)かわや/(お)手洗い/(お)トイレ/(お)便所/その他
94	語彙	42 雨の日にでてくる、ナメクジに似た渦巻き形の殻を背負った虫を何と言いますか。	かたつむり/でんでんむし/まいまい/その他
95	語彙	43 晴れた日に空にある、輝いているものを何と言いますか。	太陽/おひさま/おてんとさま/おてんとうさま/その他
96	語彙	44 お使いに行くときに、ペダルをこいで乗っていくものを何と呼びますか?	自転車/チャリ/チャリンコ
97	語彙	45 「学生」という言葉は、次のうちどの人達を指していいですか。	幼稚園生/小学生/中学生/高校生/大学生
98	語彙	46 線をまっすぐ引く時に使う物は?	じょうぎ/せんひき/ものさし
99	語彙	47 (a プラスチック製, b 竹製)	
100	語彙	48 運動会で100mや200mを走る競争のことを何と言いますか。	かけっこ/徒競走/かけくら
101	語彙	49 家で空腹になった時、何と言いますか。	お腹がへった/お腹がすいた/はらがへった/はらがすいた/その他
102	語彙	50 髪の毛をゴムでとめることを何と言いますか?	結ぶ/ゆわく/ゆう/しばる
103	語彙	51 食事のしたくを何と言いますか。「料理を…」のあとをつけてください。	作る/こしらえる/その他
104	語彙	52 ベっぴんさんという言葉を使いますか。	はい(どういう意味ですか)/いいえ(どんな言葉を使いますか)
105	語彙	53 別紙の1から10までを読んでください。1	いち/ひとつ/ひ/その他
106	語彙	54 別紙の1から10までを読んでください。2	に/ふたつ/ふ/その他
107	語彙	55 別紙の1から10までを読んでください。3	さん/みつ/み/その他
108	語彙	56 別紙の1から10までを読んでください。4	し/よっつ/よ/よん/その他
109	語彙	57 別紙の1から10までを読んでください。5	ご/いつつ/いつ/その他
110	語彙	58 別紙の1から10までを読んでください。6	ろく/むっつ/む/その他
111	語彙	59 別紙の1から10までを読んでください。7	しち/ななつ/なな/その他
112	語彙	60 別紙の1から10までを読んでください。8	はち/やっつ/や/その他

	分野		質問文	選択肢
113	語彙	61	別紙の1から10までを読んでください。9	きゅう／このつ／く／その他
114	語彙	62	別紙の1から10までを読んでください。10	じゅう／とう／その他

	分野		質問文	選択肢
115	文法	1	親が子供の成績を（案ずる／案じる）	案ずる／案じる
116	文法	2	電車賃が（足りない／足らない）	足りない／足らない
117	文法	5	あなたは、小学生のころ、「買い物に東京サ行クベイ」といいましたか。	サ／ベイ／いいえ
118	文法	6	ジュース（が／を／□）飲みたい	が／を／φ
119	文法	7	いつも元気（なのに／だのに）今日は調子が悪い。	なのに／だのに
120	文法	8	「食べちゃう・ちゃった」を使いますか。	使う／使わない
121	文法	9	早く（起きられなくて／起きれなくて）	起きられなくて／起きれなくて
122	文法	10	社長、早く仕事（なさって／なすって）ください。	なさって／なすって
123	文法	11	（先生が入ってきた時）教室に先生が	きた／いらっしやった／ いらっした／いらした／ いらした
124	文法	12	「暑いです」は自然な言い方ですか。	自然／不自然
125	文法	13	「美しいです」は自然な言い方ですか	自然／不自然

埼玉県西部地域における伝統的方言の分布調査の経過報告 —「秩父方言」の広がりと境界—

亀田 裕見
(文教大学文学部)

1. 研究目的

本研究では、文教大学文学部日本語日本文学科の学生と2006年以来共同調査を続けている成果の途中報告である。この調査では、埼玉県西端の秩父市や小鹿野町から始まり、徐々に東方に向けて調査地域を拡大している。主に埼玉県の西部と東部の境界がどのあたりにあるのかを、言語地図を作ることで明らかにし、また、既に亀田(2010a)・亀田(2010b)で報告した県東部とどのように連続しているのかを明らかにすることを目的としている。

現在の埼玉県方言がおかれている状況は方言の維持・残存という面からするとなかなか厳しい状況ではある。埼玉県の中の東京都に近い地域や、人口の多い都市部では、当然のごとく共通語化が進行している。それは亀田(前掲)によって東部で世代差を見たことから明らかである。この論文のデータ提供者は、高年層(2012年時点平均81歳に相当)、中年層(2012年時点平均52歳に相当)であったが、東京都に接しているJR武蔵野線以南から速く共通語化が進行していた。それに加え「埼玉都民」ということばがあるほど、埼玉県は東京都に通勤通学する人が多い。それを考えると埼玉県の伝統的方言の様相を知るには今が最後の時期であろう。2008年以降筆者が行っている埼玉県東部の越谷市で方言残存状態の調査の結果では2012年時点50歳代から急速に伝統的方言が消失している。

このような状況のなか、埼玉県東部の高年層を対象にした調査の経過報告をし、埼玉県で「秩父方言」と呼ばれる西部方言の広がりや境界線について改めて考えたい。

2. 先行研究

埼玉県の方言区画を示したものは、まず東条(1937)による東中西の3分割区画が挙げられる。この記述を元に地図にしたものが図1である。東条は以下の様に、郡単位で分けたおおざっぱなものである。



東部(北葛飾郡・北埼玉郡・南埼玉郡・北足立郡)
中部(大里郡・児玉郡・比企郡・入間郡)
西部(秩父郡)

図 1

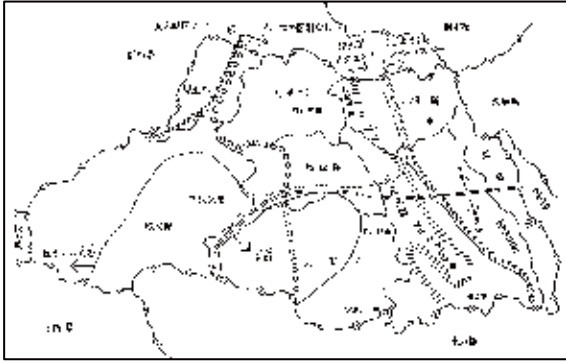


図 2 井上 (1984) より



図 3

埼玉県内の方言分布に関する先行研究は国立国語研究所の『日本言語地図』(以下『LAJ』)や『方言文法全国地図』(以下『GAJ』), また大橋(1990・1991)の『関東地方域方言事象分布図』のような大規模調査の一部として存在する。もう少し規模の小さな調査では九学会連合の利根川流域調査に埼玉県の一部が入っている。

次に井上(1984)では図2を示し、「サツマイモの形をした埼玉県が、タテの線で東と西に二分(または三分)されることに加え、また南北に分かれる傾向」があると述べている。

これらのように、埼玉県は少なくとも東部・中部・西部の区画に分かれ、南北の違いもありそうである。亀田(前掲)でも、埼玉県東部はおおよそ春日部市付近を境に南北に分かれることを指摘している。

埼玉県内の言語地理学的調査は東京外国語大学日本語ゼミナール(1978)『秩父地方方言地図』, 鶴田秀樹(1986)『埼玉県秩父地方における言語地理学的研究』, 柴田武(1984)「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」, そして亀田(前掲)がある。図3はこれらの調査地点を重ね合わせたものである。

埼玉県内の言語地理学的調査は東京外国語大学日本語ゼミナール(1978)『秩父地方方言地図』, 鶴田秀樹(1986)『埼玉県秩父地方における言語地理学的研究』, 柴田武(1984)「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」, そして亀田(前掲)がある。

これらの研究ではいわゆる「秩父方言」というべき埼玉西部とそれ以外の領域の境界はまだまだはっきりしていない。

3. 調査概要

調査は最西端の秩父郡から順次東へ調査地域を拡大している。2006～2011年の調査地点は22市町村の64地点である。調査領域が図4のように秩父郡からさらに東まで(なお、その後も調査

を続け、2013年次点では85地点にまで増えているが、本報告では2011年までのデータを元にする)インフォーマントの平均生年は1935(昭和10)年(2011年時点で平均78歳)の生え抜き男性(外住歴の平均は1.5年)である。

調査内容は語彙項目38項目, 文法項目47項目, アクセント項目60語+ミニマルペア5組である。比較対照する先行地図の相当地域における調査は、『LAJ』で12地点(東秩父村無し), 『GAJ』で5地



図 4 本稿の調査領域と郡の境界

点(東秩父村無し)、関東地方域』で12地点(東秩父村無し)であり、本研究の調査地点はこれらより密である。『LAJ』『GAJ』を見ていると、埼玉県は西部のいわゆる「秩父地方」と呼ばれるところに、埼玉県のその他の部分と異なる語形の分布があることがいくつか確認される。しかし、調査の目が粗いので、およそのところまでしか分からない。

『東京外語大秩父地方方言地図』と重なる地点は119地点で、こちらの密度には及ばないが、この研究は秩父郡のみになっており、秩父郡の中の調査は非常にきめ細かいが、秩父郡とその周辺地域との境界を見ることはできない。次章から、埼玉西部方言の境界について具体的な例を挙げながら考察する。

4. 地図例の紹介－3点に注目して－

4. 1 東秩父村の位置づけ

まず、行政的な土地区画としては秩父郡に属する「東秩父村」の位置づけについて取り上げる。東秩父村は本稿では、より山奥地(秩父市)寄りの「白石」と、秩父山地から平野につながる川沿いの「奥沢」の2地点で調査している。この2地点で回答が異なる語と、同じ語がある場合がある。異なる場合は白石のほうが秩父の語形、奥沢が東側の比企郡や大里郡と共通する語形を示

表1	その他の秩父郡	東秩父村(白石)	東秩父村(奥沢)	比企郡大里郡
ものもらい	メカゴ	メカゴ・メッパ	メッパ	メッパ
蛙	ベッター	カエル	カエル	ゲーロ
うすい	ウスイ	アマイ	アマイ	アマイ・アマジオダ
あぐらをかく	ブチカル	アグロ	アグロオカク	アグロオカク
くるぶし	クルミ	クロボシ	クロボシ	クルミ
雷	カミナリ	ライサマ	カミナリ	ライサマ
とうもろこし	モロコシ	モロコシ・トンモロコシ	トウモロコシ	トンモロコシ
かぼちゃ	トーナス・トーガン	トーナス	トーナス	トーナス
つむじ	マキメ	マキメ	ツモジ	ツモジ
竹馬	タカアシ	タカアシ	タケウマ	タケウマ・タケンマ
まな板	キリバン	キリバン	マナイタ	マナイタ

す。同じ場合は、秩父郡の語形ではなく、東側と共通する語形を持つ。表1に例をまとめる。

また、具体的な地図を図5～12に、埼玉県付近の『LAJ』からの引用図と比較しながら示す¹。

(図注の直線は東秩父村とそれ以外の秩父郡を分ける)『LAJ』とほぼ分布は同じだが本稿の地図では境界がよりはっきり見ることができる。

東秩父村の地形を見てみると、谷川(県道11号線)沿いに集落が発達し、この谷川沿いの道が比企郡・大里郡方面の平野部にむかってつながっている

ことと関係があるのであろう。東秩父村は秩父市方面とは、大霧山・堂平山・丸山の山麓地帯で区切られ、言語は定峰峠を越えて秩父側と結ぶよりは、むしろ東側の平野部からの影響が多いとして、「秩父方言(埼玉西部方言)」区画に属さない、と考える。

¹ 以下、本文中で『LAJ』『GAJ』から引用している部分図は国立国語研究所のサイト http://db3.ninjal.ac.jp/publication_db/list.php?cat=ninjal19 および http://db3.ninjal.ac.jp/publication_db/list.php?cat=ninjal35 から複写させていただいた。

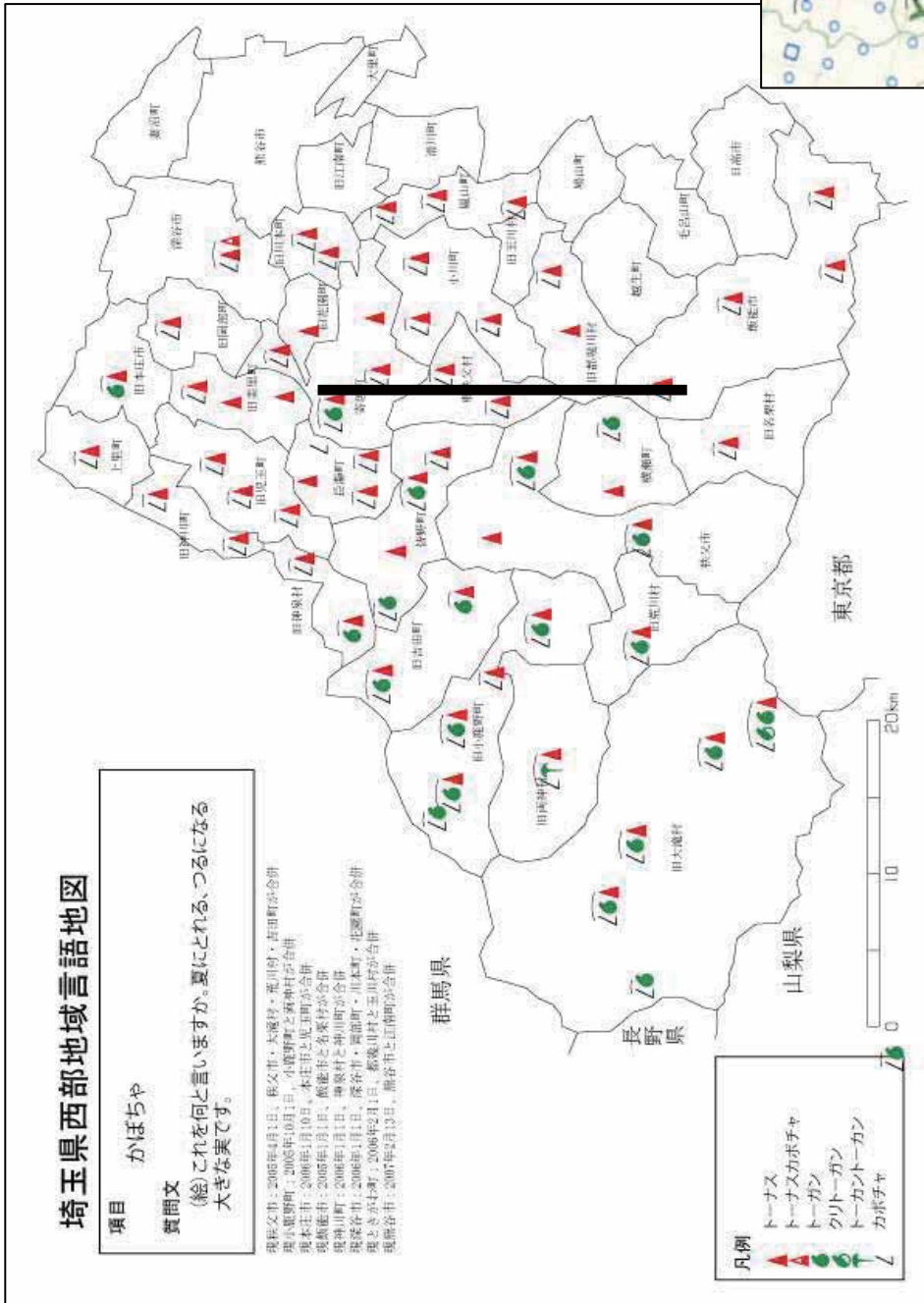


図 7 「かぼちゃ」

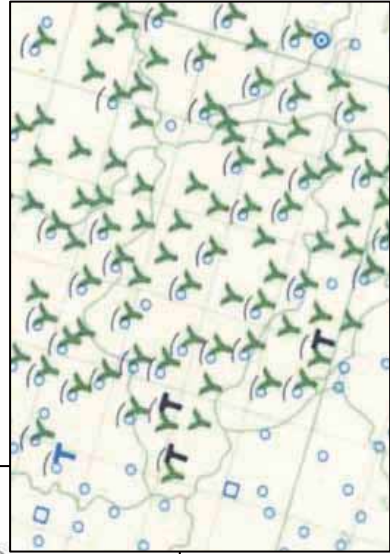


図 8 LAJ 180 図より「かぼちゃ」

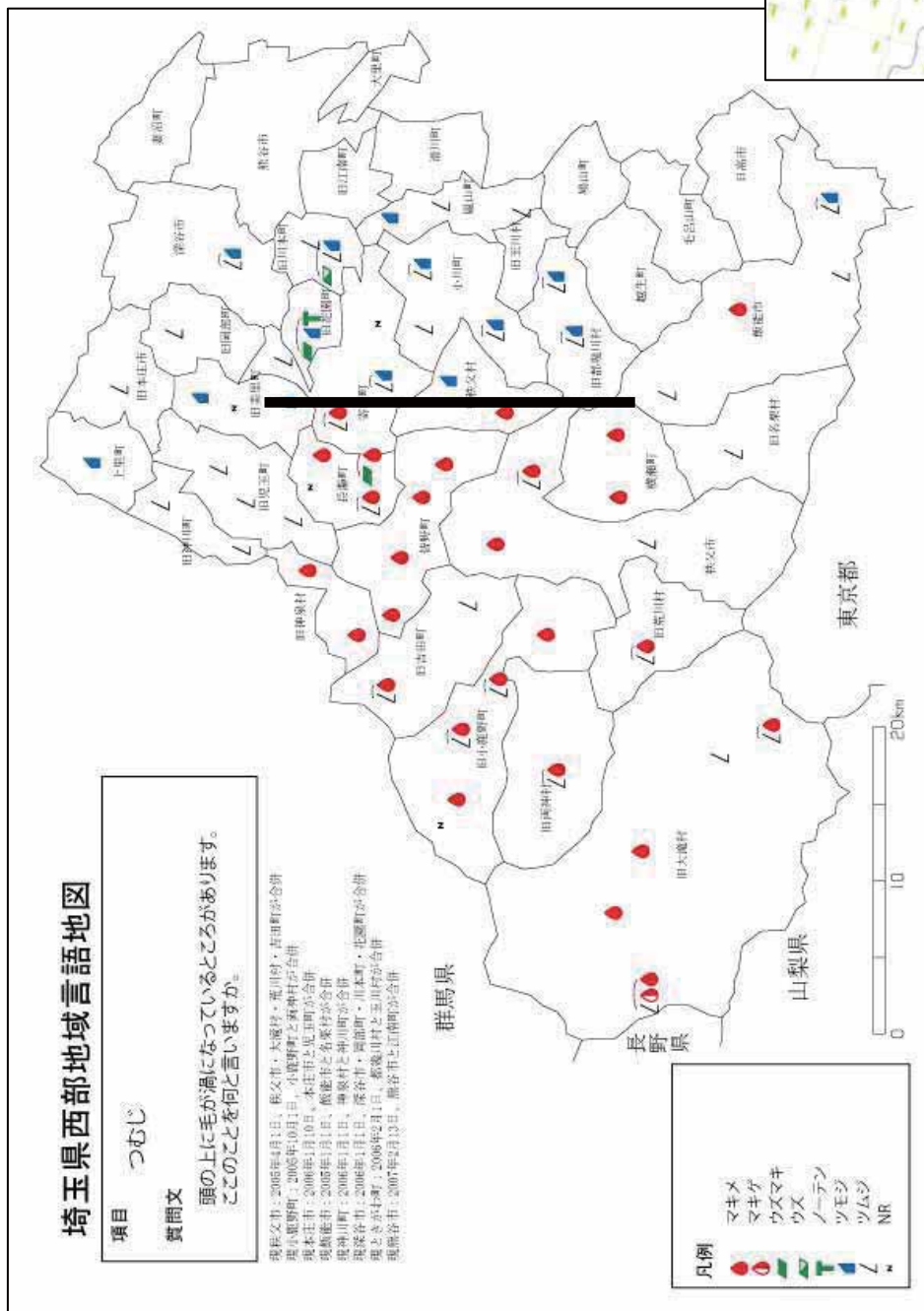


図 9 「つむじ」

図 10 LAJ 102 図より 「つむじ」

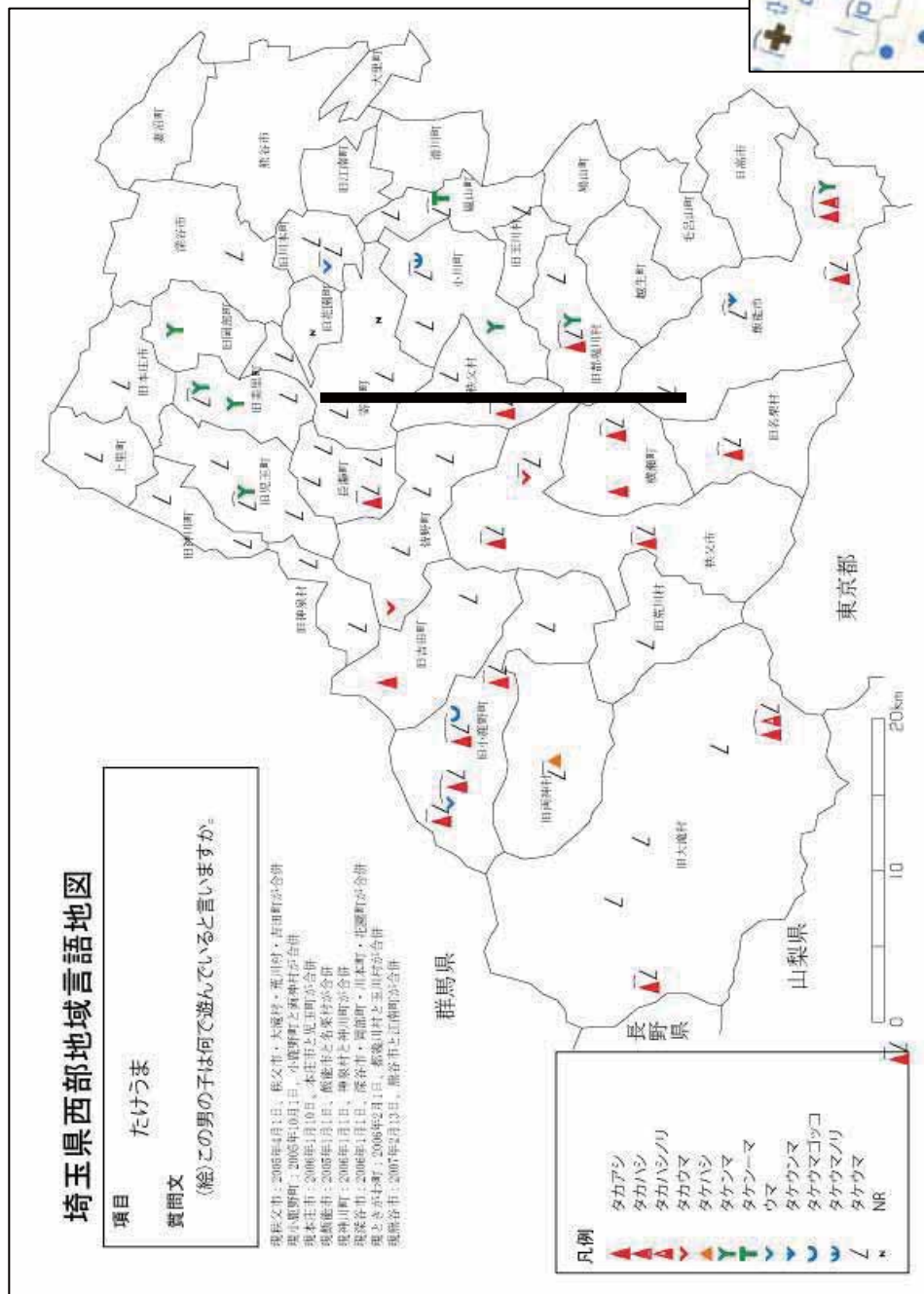


図 11 「たけうま」

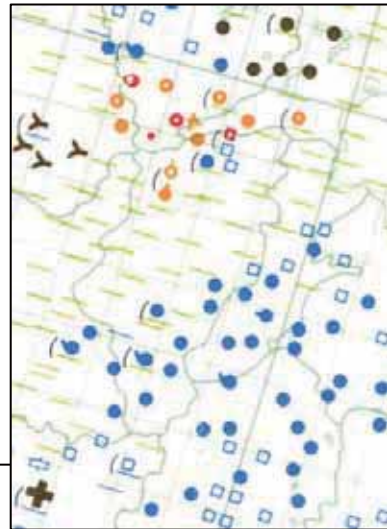


図 12 LAJ 144 図より「たけうま」

4. 2 児玉郡の位置づけ

続いて、児玉郡の位置づけについて取り上げる。秩父郡の北部に位置し、群馬県と接している児玉郡は、「秩父方言」(埼玉西部方言) とどのような関係にあるか。言語地図を作図してみると、

表 2	その他の秩父郡	児玉郡旧神泉村	児玉郡その他	児玉郡美里町・比企郡・大里郡
ものもらい	メカゴ	メカゴ	メカゴ	メッパ
眉毛	マユ	マユ	マユ	マミヤ
稲妻	イナビカリ	イナビカリ	イナビカリ	オヒカリ
うすい	ウスイ	ウスイ ミズッポイ	ウスイ ミズッポイ	アマイ
雷	カミナリ	カミナリ	カミナリ	ライサマ
とうもろこし	モロコシ	モロコシ	モロコシ	トンモロコシ
蛙	ベッター	ベッター ゲーロ	ゲーロ	ゲーロ
あぐらをかく	ブチカル	ブチカル	アグロオカク	アグロオカク
まな板	キリバン	キリバン	マナイタ	マナイタ
もり	モリキ	モリキ・モリ	モリ	モリ

児玉郡の中でも、旧神泉村とその他の児玉郡の地域に分けられる。旧神泉村はほぼ「秩父方言」(埼玉西部方言) に属するが、その他の地域は語によって、属す語と、そうでない語とに分かれる。表2にまとめる。また、具体的な地図を図13～21に、埼玉県付近の『LAJ』からの引用図と比較しながら示す。「ものもらい」「稲妻」などは、秩父郡から児玉郡まで同じ語形が分布し、「西部方言」の境界

が児玉郡と比企郡および大里郡の間に境界が引かれる。「とうもろこし」や「蛙」、「あぐらをかく」などは旧神泉村を除いて児玉郡の語形は秩父郡の語形と袂を分かち、つまり、旧神泉村は、現在旧神川村と合併して神川町となっているが、この現神川町は、言語上は内部に方言境界を持っていることになる。地形的に見ても、旧神泉村の地域は神流湖の南岸沿いとそこから流れる神川に沿って発達した集落であり、山地がほとんどを占める。旧神川村はその神川のさらに下流に位置し、平野部も多い。前節の東秩父村の位置づけについても言えることだが、地形が大きく言語境界を形成する要因となっているとみられる。また、その一方で、その他の児玉郡までが秩父方言から連続する語形の中に組み込まれている語もある。「稲妻」は「オヒカリ(サマ)」という平野部の語形を児玉郡から阻んでいるように見え、「ものもらい」は「メカゴ」「メケゴ」の類が児玉郡まで広がり、平野部の「メッパ」の語形と大里郡と児玉郡の境界で対峙している。同様に「(塩味が)うすい」も、平野部の「アマイ」という語形の分布が大里郡までで、児玉郡から切れて「ミズッポイ」という語形が分布する。この境界の間には自然地形の障害等はない。

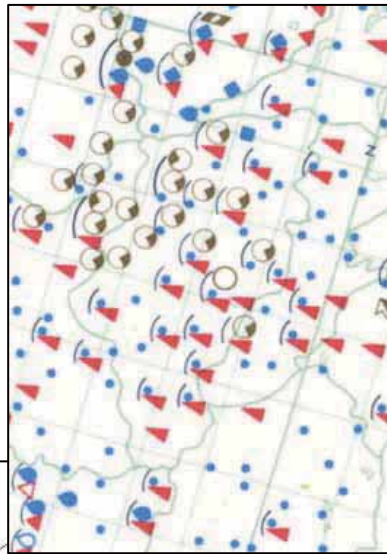
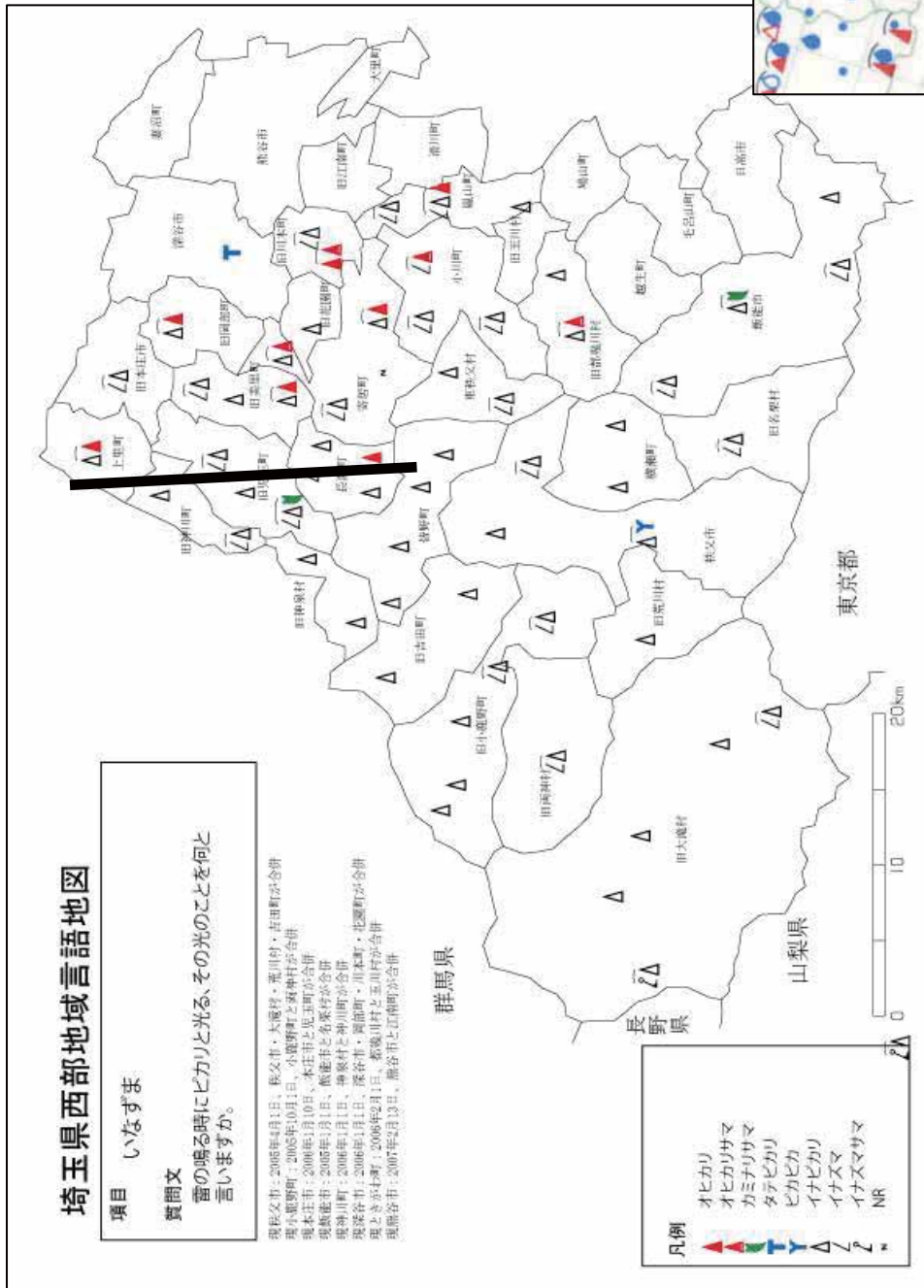


図 13 LAJ 258 図より「稲妻」

図 12 「稲妻」

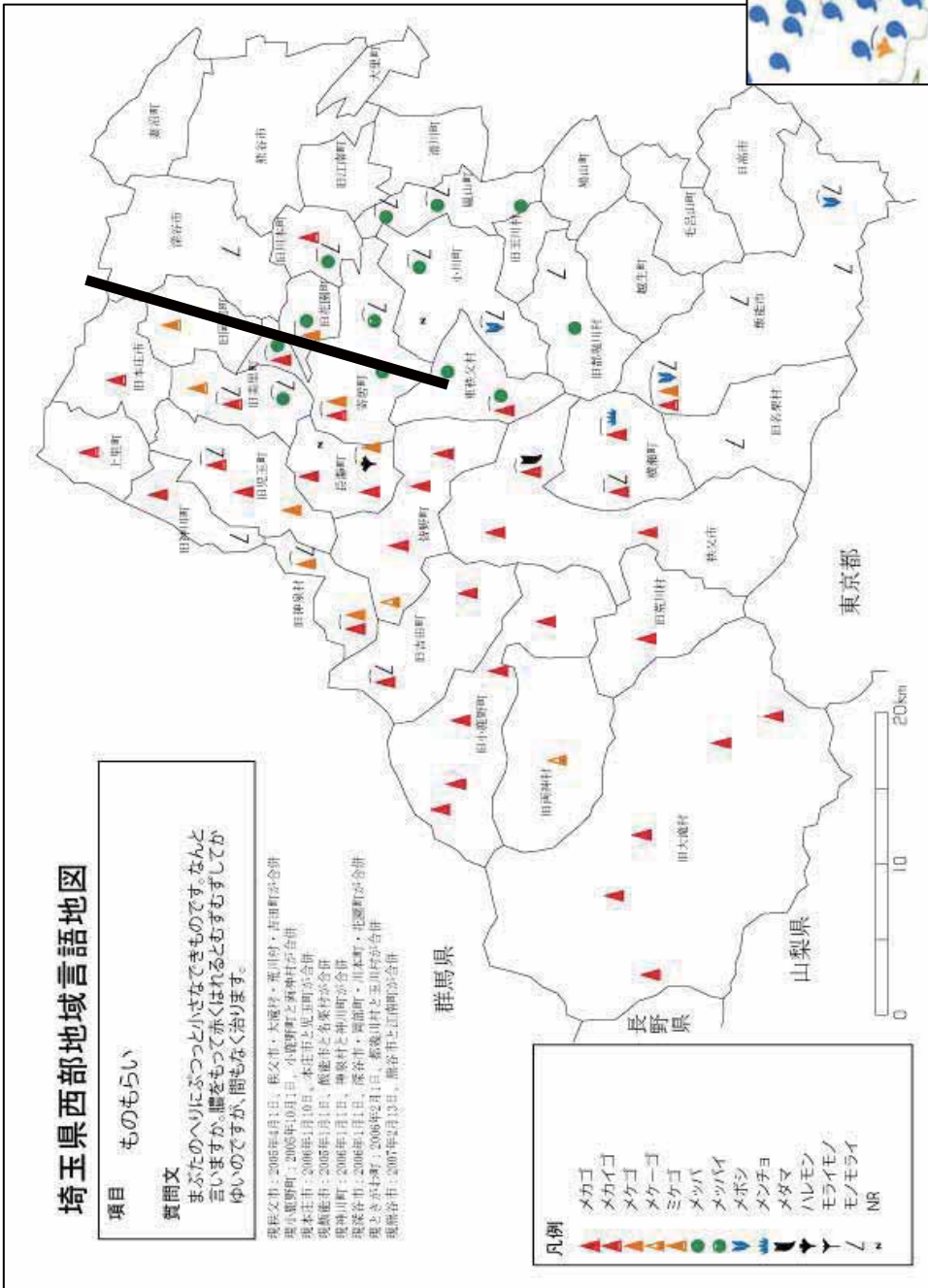


図 14 「ものもらい」

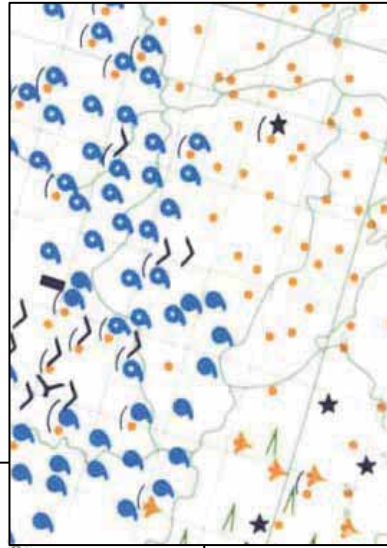


図 15 LAJ 112 図より「ものもらい」

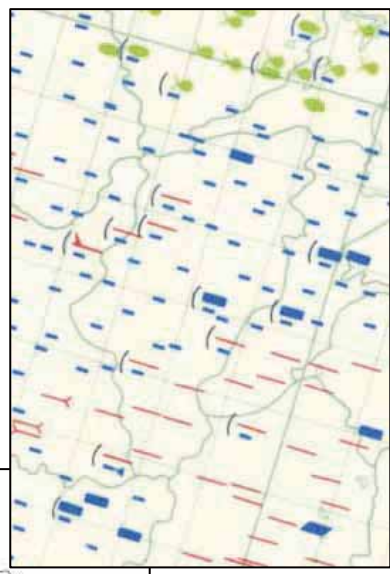
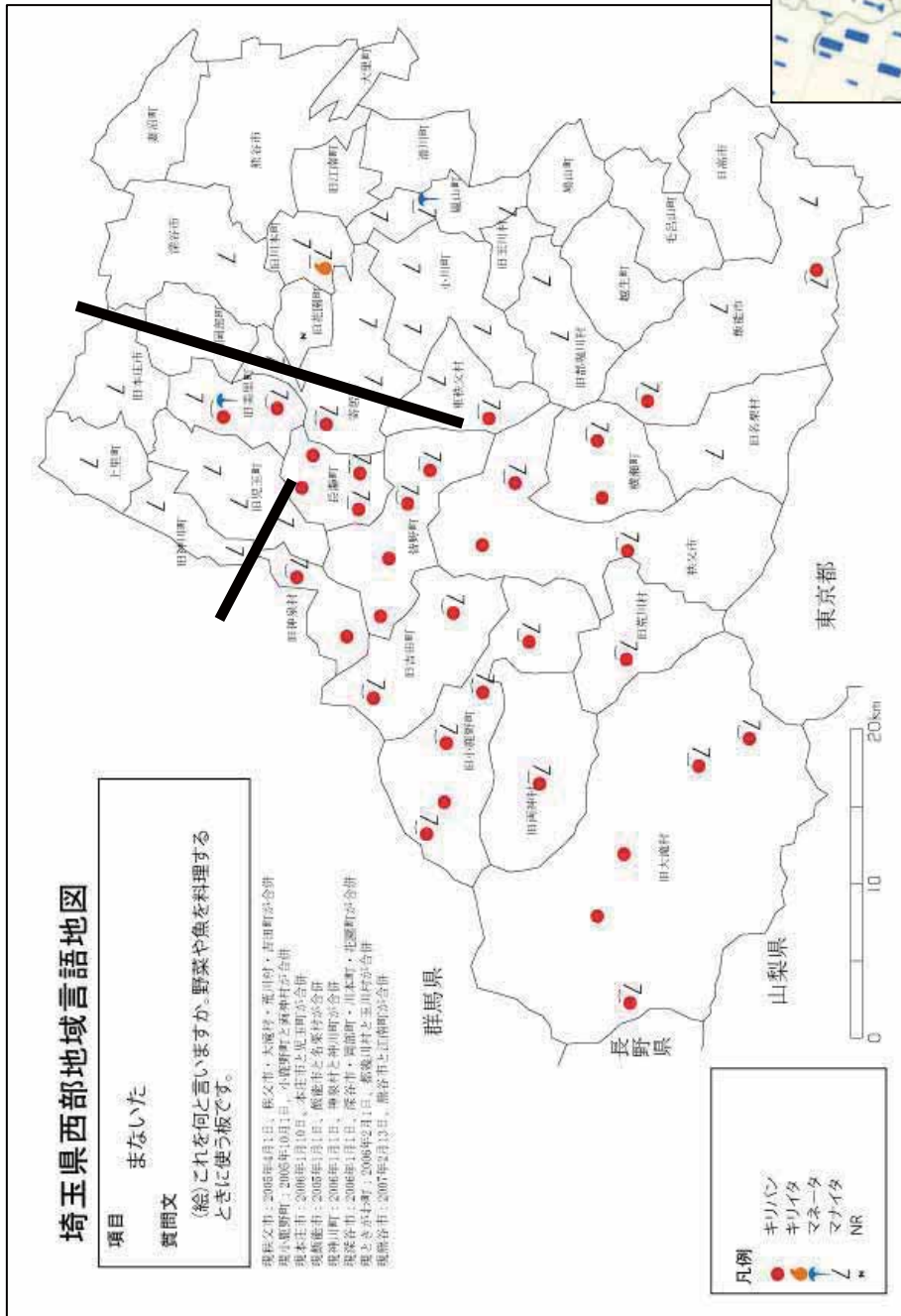


図 16 「まな板」

図 17 LAJ 164図より「まな板」

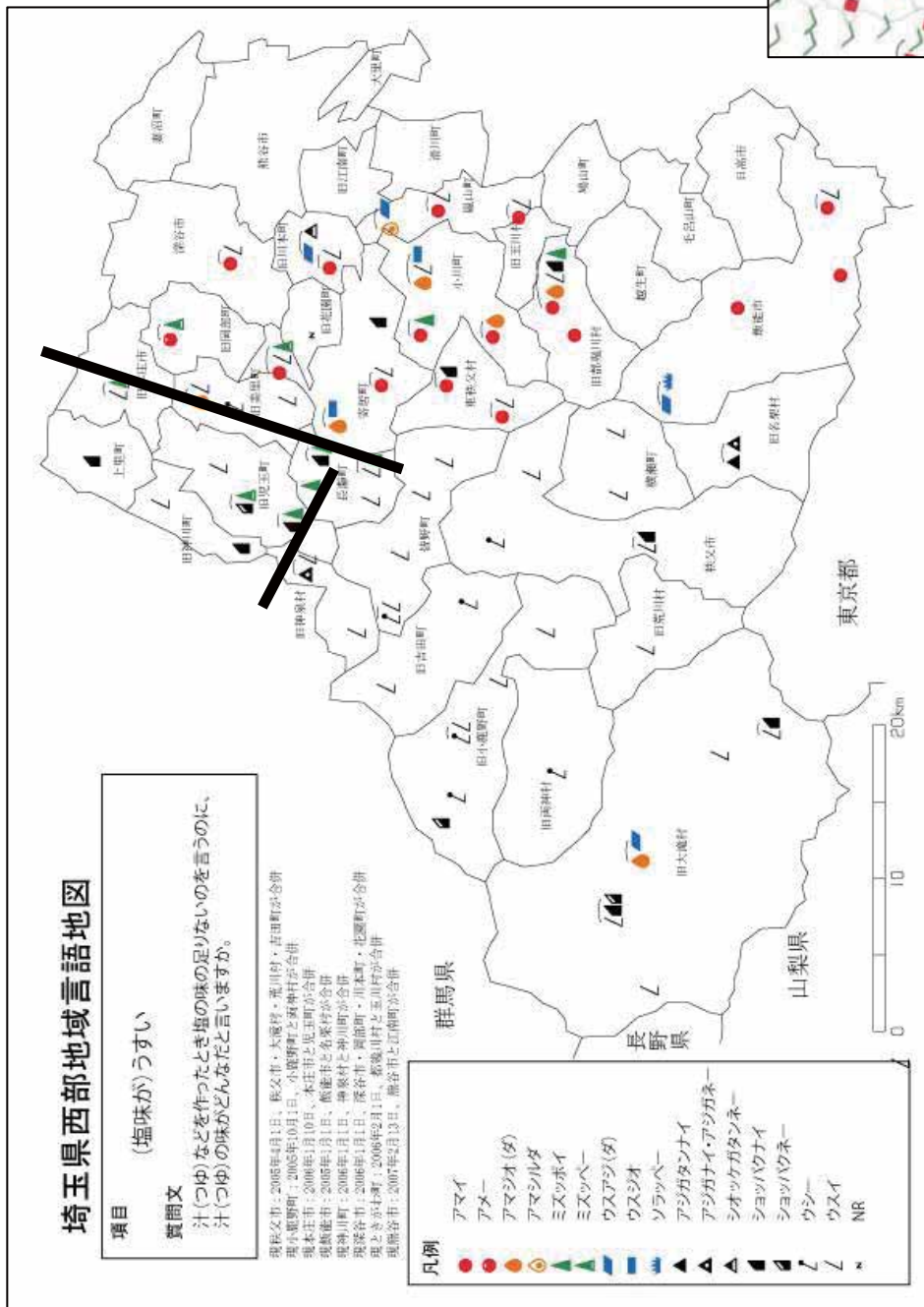


図 18 「(塩味が) うすい」

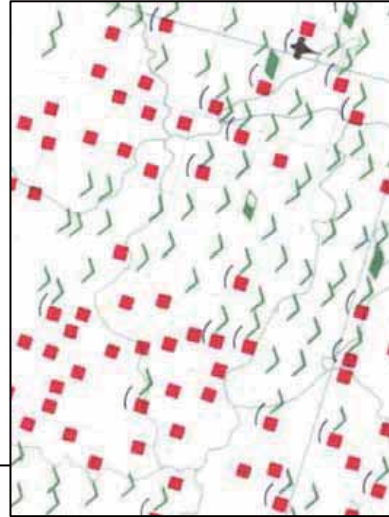


図 19 LAJ 38 図より「塩味が」うすい」

4. 3 文法項目の地図 「～サレル」の分布

次に可能を表す助動詞「～サレル」についての分布について述べる。「～サレル」を可能の意味で使用する地域があることは井上（1984）で既に指摘されている。ただ、その地域が井上（1984）では「三郷市では来サレル，来サエルを用いる」としており，県の南東端の三郷市にのみ聞かれるとされていた。しかし，もっと使用範囲は広いようである。すでに『GAJ』を見ると，図23と図25に引用したように，三郷市以外にも蓮田市で使用が認められる。本稿の図22・24の地図からは，蓮田市よりもさらに西寄りの地域，県中南部に「キサレル」「キサレネー」があることが確認される。受身の「来られる」も『GAJ』では三郷市に「キサエル」が見られるのみだが，本稿の図26では入間郡にも「キサレル」が散在している。ただ，この語形は秩父郡までは分布が及ばず，およそ比企郡や入間郡にとどまる広がりをもっているようである。

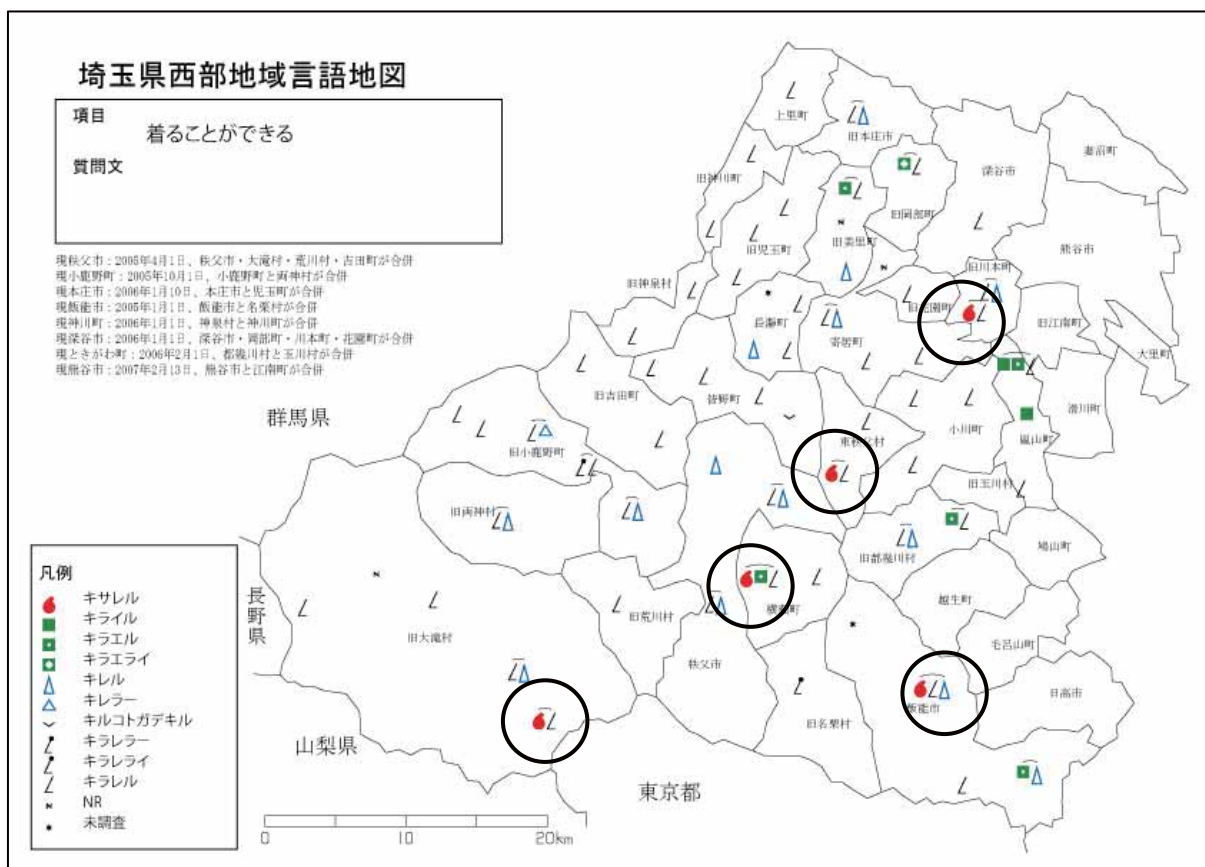


図 22 「着ることができる」

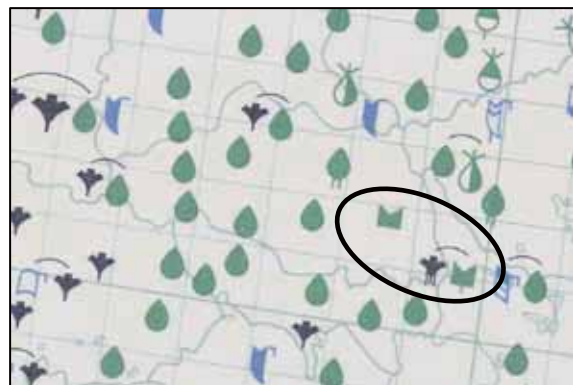


図 23 GAJ 175 図より「着ることができる」

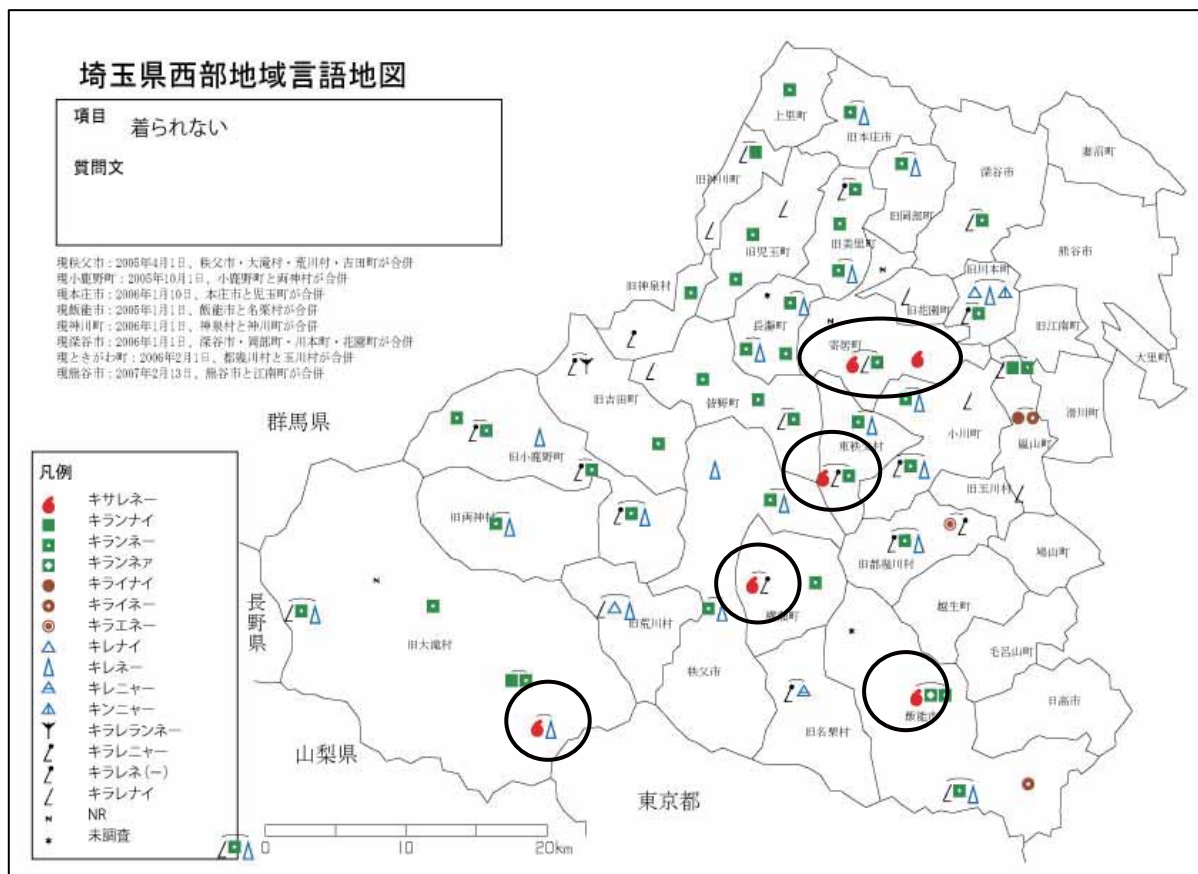


図 24 「着られない」



図 25GAJ184 図より「着ることができない」

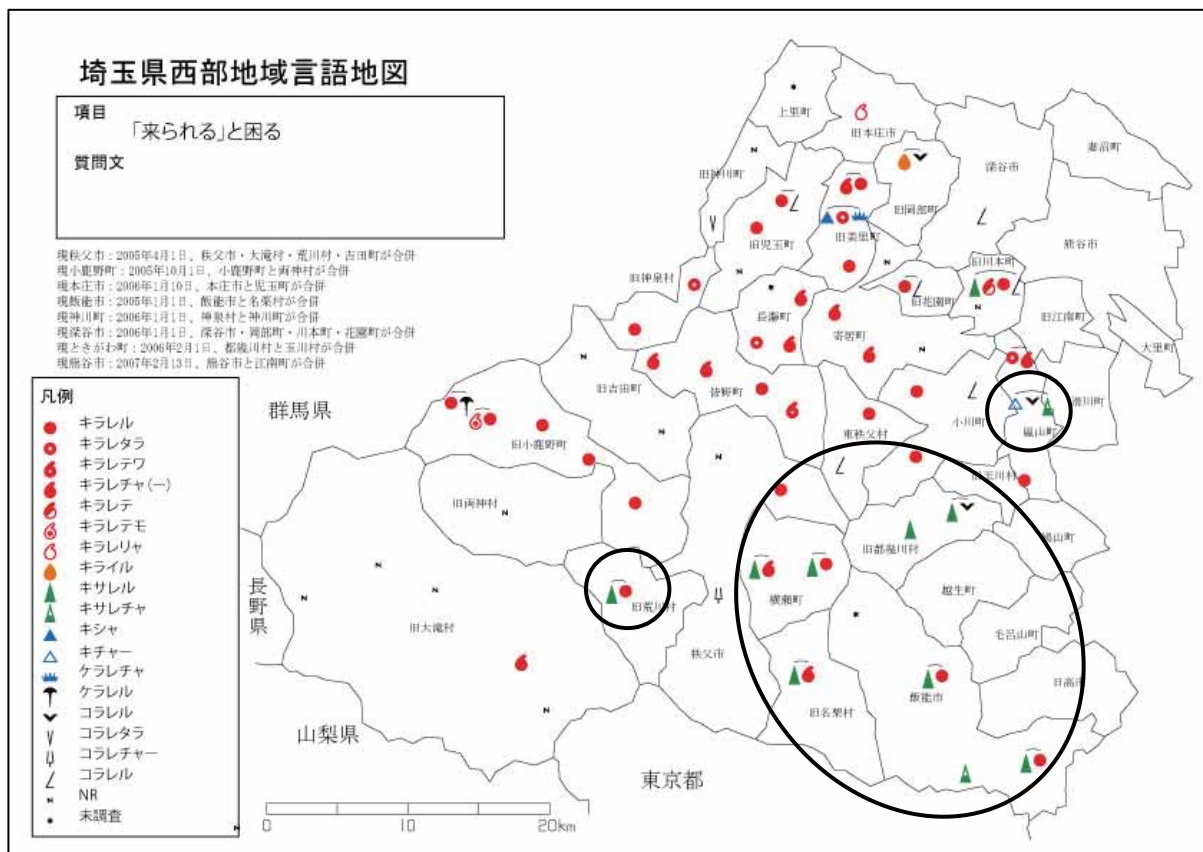


図 26 「来られる」(受身)

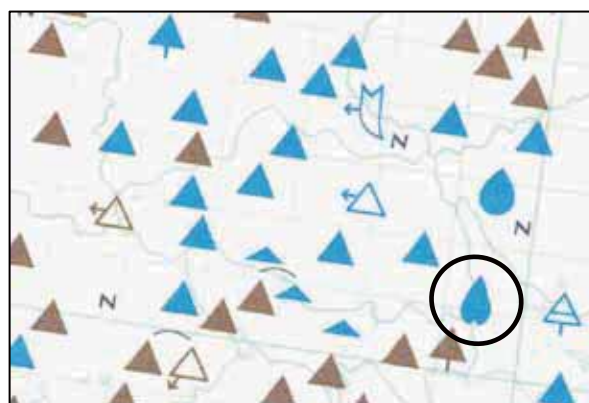


図 27 GAJ 116 図より「来られると」(受身)

5. まとめ

以上、まとめると、埼玉県の「秩父方言」(西部方言)の分布領域は、語彙においてかなり明確な境界線が見いだせる。まず「秩父方言」の東端は東秩父村を除く秩父郡の領域が当てはまる。東秩父村は行政区画上の秩父郡だが方言的には分かれて県中部方言に属する。「秩父方言」の北西部の境界は、児玉郡神川町にあり、これより以南が「秩父方言」に属する。ただ語彙によってはそれ以外の児玉郡の市町まで秩父と同じ語形であることもある。境界をおよそ地図上に書き込むと図 28 のようになる。実線以西は「秩父方言」と言うて良いが、破線部を境界にする語もある。この実線と破線に囲まれた児玉郡の上里町・本庄市・美里町は「秩父方言」か「北部方言」



図 28 「秩父方言」(西部方言)の境界

か、両方の要素をもっていることになる。これについてはもっと詳しく見る必要がある。いずれにせよ、方言の境界は自然地理的な要素によって作られている面が大きいようで、秩父山麓の地域がおおよそ「秩父方言」と見られる。

また、助動詞「～サレル」(受身・可能)が『GAJ』で報告されているよりも、さらに秩父郡のすぐ東端まで広い分布を示す可能性があることが分かった。この助動詞は県南部の特徴といえる可能性がでてきた。県南東部の三郷市や蓮田市から県中南部の入間郡まで連続分布していた可能性がある。現在は、未調査の県中央部にあるさいたま市など、東京の影響が強い地域で、この分布の連続が分断されているかもしれない。今後も調査は継続していく予定であるので、県中部の調査が終わり東部の分布と繋がれば、この点も明らかにしていくことができよう。

文献

- 井上史雄 (1984) 「7 埼玉県の方言」『講座方言学 5 - 関東地方の方言 -』国書刊行会, 171-202.
 大橋勝男 (1974・1976) 『関東地方域方言事象分布地図』第二巻・第三巻 (桜楓社)
 大橋勝男 (1990・1991) 『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』第二巻・第三巻 (桜楓社)
 亀田裕見 (2010a) 「埼玉県東部地方の方言分布と世代差(1) 語彙の分布」『文教大学文学部紀要』23(2), 1-59.

- 亀田裕見 (2010b) 「埼玉県東部地方の方言分布と世代差(2)文法事象の分布」『文教大学文学部紀要』24(1), 37-87.
- 国立国語研究所 (1966-1975) 『日本言語地図』第1～6集 (国立国語研究所報告 30(1)-30(6))
大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』第1～6集 (国立国語研究所報告
97-1, 2, 3, 4, 5, 6) 大蔵省印刷局 (第1～4集) 財務省印刷局 (第5集) 国立印刷局 (第
6集)
- 柴田武 (1984) 「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」『人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究 昭和58年度文部省科学研究費補助金による県境成果報告』
- 東条操(1937) 「埼玉県の方言区画」『方言』7-2, 1-4.
- 東条操(1937) 「秩父地方の方言調査より」『方言』7-2, 5-18.
- 東京外語大学日本語ゼミナール(1978) 『東京外語大秩父地方方言地図』
- 鶴田秀樹 (1986) 『埼玉県秩父地方における言語地理学的研究』本文編・地図編
東京外国語大学日本語ゼミナール (1978) 『秩父地方方言地図』

「全国若者語調査」における言語伝播モデル*

鎌水 兼貴

(国立国語研究所)

1. はじめに

1. 1 若者語とは

本研究は、2011～2012年に実施した「全国若者語調査」の結果報告を通じて、若者語の全国調査分布と、伝播過程に関して考察をおこなうものである。

いわゆる若者を中心に用いられることばは、一般に「若者ことば(言葉)」と呼ばれることが多いと思われるが、術語は安定していない。「若者ことば(言葉)」以外にも「若者語」「若者用語」など、さまざまである。そのため、本稿においては、これらの用語に関する表記を便宜的に「若者語」に統一する。

その「若者語」の定義だが、決まったものがあるわけではない。若者語研究の第一人者である米川明彦は、若者語を集団語の下位概念と捉え、主に機能面から以下のように定義している(米川1996 p.12)。

若者語とは中学生から30歳前後の男女が、仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。また時代によっても違う。若者ことばともいう。

一方、言語変化を扱う方言学、社会言語学においても若者語は研究対象となる。「新方言」研究で知られる井上史雄は、若者語を言語変化の縮約した形として、ある時点での若者が将来老いたときに使用するか否か、後の時代の若者が使用するか否か、という観点から、若者語を以下のように4分類している(井上1994 p.4)。ただし若者語の定義は「若者がよく使い、ほかの世代の人があまり使わないことば、あるいは若者に特徴的とされることば」と簡単な記述にとどめている。

一時的流行語	若者が老いて不使用・後の若者も不使用	例:新語・時事用語, はやりことば
コーホート語	若者が老いても使用・後の若者も使用	例:生き残った流行語, 世相語
若者世代語	若者が老いて不使用・後の若者は使用	例:キャンパス用語, 学生用語
言語変化	若者が老いても使用・後の若者は不使用	例:新方言, 確立した新語

* 本稿は、鎌水兼貴(2014 予定)「『全国若者語調査』結果概観」(『専修国文』94号)ならびに、Urban Language Seminar 11(広島市文化交流会館)ポスター発表(2013年8月)「若者語の地理的分布」を元に加筆・修正を行ったものである。

「若者」という語自体は特定の世代を指す語だが、若者語の内容には使用者の属性や使用意識、使用場面なども含まれている。関連する術語としては「集団語」「流行語」「新方言」「俗語」などがあげられ、どれも若者語と大きく重なる部分があり、これらの術語もまた定義が難しいものばかりである。

以上から、本研究における若者語の定義は、厳密にはおこなわず、外形から判断しやすい「若年層を中心に使用されていると思われる非標準的な新しい語・表現」といった程度にとどめることにする。上述の関連術語との関係なども含め、定義に関しては今後の課題としたい。

1. 2 若者語の地理的研究の意義

定義段階から問題になる原因として、若者語に関する研究があまり進展していないことが考えられる。若者語に相当する現象についての個別の報告や研究は数多く存在する。しかし若者語全体をとらえる研究は少ないと思われる。そのためには、大規模の実態把握調査が必要である。本研究では、全国規模の調査を実施し、若者語の実態の解明を目指す。

現代社会は、インターネットなどのメディアの技術発展により、遠方であってもコミュニケーションを高速におこなうことが可能である。しかし実際の日常におけるコミュニケーションは、生活範囲で直接会うことができる相手とおこなわれることが圧倒的に多い。そのため、若者語の使用においても使用者の生育地という地理的制約が強く働くと思われる。

このことは、若者語にも地理的差異があることを示している。ところが一定以上普及してしまうと、テレビやインターネットなど、メディア経由で急速に広範囲に拡散し、地域差が失われる可能性がある。そのため若者語の普及初期に地域差が表れやすいと思われる。

若者語の地理的差異については、永瀬治郎による先駆的な調査研究がある。永瀬(2006)では、若者語の言語地図を作成し、全国的分布の例を示している。また、属性(性別、世代)と地理的分布の関係についても示唆している。このため、若者語研究においても言語地理学的手法が適用できると考え、本研究では詳細な言語地図を作成し、分析を試みることにした。

地理的伝播に関して、若者語は、人々が集住し、コミュニケーションの密度の高い大都市の中心部から広がることが予想される。そのため、都市における言語の中央と周辺関係を明らかにする上でも、若者語研究は重要である。また、若者語の中でも普及速度や普及経路には違いがあると思われる。そうした語による違いは、前述の関連用語の整理にも貢献するであろう。

このように若者語の実態の解明は、都市の言語、ひいては全国共通語、現代日本語の形成過程の解明にもつながるものと思われる。そのため本研究では、全国の大学生を対象に実施した「全国若者語調査」の調査結果から、若者語の使用実態について考察する。

2. 全国若者語調査

2. 1 調査準備

「全国若者語調査」は、専修大学文学部日本語学科ゼミナールⅡ・Ⅲの演習において、授業の一環として計画、実施したものである。調査票の作成においては以下のような点を重視した。

- ① 現在使用されている代表的な若者語について、主にその普及状況について考察する。
(一部、かつての若者語についても調べ、衰退状況についても考察する)
- ② 若者語の使われ方について、意味や、接触頻度などとの関係で分析する。
- ③ 東京語化・関西弁化などと呼ばれる大都市圏の言語の全国への影響について、若者語の視点から分析する。
- ④ 携帯電話・インターネットで使用される語の、話しことばや、書きことばへの影響を分析する。

調査項目は、ゼミナール所属の学生が収集した若者語を元に、授業中および夏季休暇中に検討を重ね、2011年10月に仮調査票が完成した。

2. 2 調査の実施

2. 2. 1 調査期間

調査対象は調査依頼のしやすさを考慮して、大学生とした。調査概要は以下のとおりである。

調査期間：2011年10月～2012年6月

試行調査：2011年10月

本調査：2011年11月～2012年2月

追加調査：2012年5月～6月

調査対象：35大学 2762人

2011年10月に、完成した仮調査票による試行調査を2大学で実施した。そして問題点を修正したのち、全国の大学の協力者に調査依頼をした。

本調査は、2011年11月から翌年2月にかけて実施したが、年度末に近かったこともあり、調査票の回収中に専修大学での授業が終了してしまった。そのため国立国語研究所の共同研究プロジェクトで調査研究を継続することとなった。2012年3月には、共同研究プロジェクトの研究発表会にて調査の中間報告をおこない、さらに協力者を得て、2012年度も調査を継続することとなった。最後の調査(2012年6月)は、試行調査から8か月が経過しており、流行語的性格の強い語に関しては、注意して分析する必要がある。

2. 2. 2 調査項目

調査項目は、以下の9問から構成される。調査票は本文末の資料を参照してほしい。

- 問1 有名な若者語（使用度・使用意識）
- 問2 度をあらわす語・携帯電話用語（語形選択）
- 問3 方言項目（語形選択）
- 問4 度を表す語の強さ（順位づけ）
- 問5 意味が逆になる語の用法（使用度・規範意識）
- 問6 店舗名の省略と動詞化（語形選択）
- 問7 インターネット用語（使用場面選択）
- 問8 言語生活・言語意識項目
- 問9 フェイスシート

本研究では、分析に地理的観点を重視したため、詳細な言語地図を作成することができるように、問9のフェイスシートの生育地の質問において、詳細な地域までたずねた。この点については後述する。

2. 2. 3 生育地

言語地図を作成するにあたり、地図上の記号の位置となる生育地の精度は、もっとも重要な部分である。本研究においては、言語形成期にあたる5歳から15歳までに、最も長く住んでいた場所を生育地とみなした。

生育地の住所については、個人情報にあたることやアンケート調査であることを考慮すれば、市区町村単位までが妥当と思われるが、あえて大字単位（丁目や番地などの数字の前の部分）までとした。

実際、生育地の回答に抵抗を感じる人は多く、全回答者2762人中、大字単位までの回答は1273人（46%）にとどまった。ただし全国規模の地図においては、市区町村単位でも問題ないと考えられるため、市区町村単位まで回答した646人（23%）も採用とした。そのため1919人（69%）が採用となった。本研究では都道府県名しか書いていない回答は不採用としたが、都道府県別の集計をする場合には採用可能である。

地図を作成するためには、生育地の住所データを、緯度・経度データに変換しなければならない。そのため、大西ほか(2011)や鎌水(2011)などで使用されている、東京大学空間情報科学研究センターによる「CSIS シンプルジオコーディング実験」のサービスを利用した。住所の文字列を入力すると、緯度・経度の数値が出力される。

今回の調査では、市区町村単位までの回答が多くあったが、この場合、市区町村の役所（役場）の緯度・経度が出力される¹。広域の市区町村の場合は、回答者の本来の生育地から大きく離れることがあるため、地図を詳細に見る場合は注意しなければならない。

¹ 同一市町村内に、このような回答者が複数いる場合でも、記号はすべて役所（役場）の1点に重なってプロットされてしまう。逆にそのために、分析において都市中心部に分布が集中している、といったような誤解は起きにくい。

2. 3 言語地図の作成

2. 3. 1 作図方法

本研究は、地理的観点からの分析をおこなうため、結果は言語地図によって出力した。地図は自作プログラムによって出力した。地図データには、岡本義雄氏（大阪教育大学）作成の「日本列島海岸線データ&県境データ」を加工して利用した。地図の図法には、もっとも単純な、緯度・経度をそのまま座標に置き換えた正距円筒図法を採用した。

紙面の都合で、北海道と島嶼部は大きく移動しているが、小笠原諸島ほか、今回の調査で生育地としての回答者がいなかった一部の島嶼部については、地図から省略した。

2. 3. 2 地図の特徴

地図は全国地図のほかに詳細図を作成した。詳細図は、回答者が多く記号が密集して判別困難になる首都圏と中京・関西圏（以下「関西圏」とする）の2地域で作成したが、他にも全国地図では地点が密集している地域がある。

また、属性別集計で性差がみられる項目が多かったため、男女別の地図も作成した。採用回答中の性別の内訳は、男性 689 人、女性 1190 人と、女性の割合が高い。地図を性別で比較する場合は、男女の地点密度が異なる点に注意して見る必要である。

質問項目には、自由記述はほとんどなく、大半が提示語形に関して使用・不使用の選択でたずねているため、記号化は単純である。地図の記号は、基本的に、使用回答には「■」を、不使用回答（未選択回答も含む）には「\」と割り当てている。

2. 3. 3 地図の注意点

本研究における地図は、一般の言語地図と比較して、いくつかの点で注意が必要である。地図記号が表示されている地点は、その地点で生育した人の回答である。これは伝統的言語地図における「はえぬき」とは異なり、転居歴がある人も多く含んでいる。5歳から15歳としたのは、言語が固定化される「言語形成期」という考えにもとづいているが、16歳以後に転居した人や、遠くの大学に進学した人の場合、その後の言語習得により、回答が生育地にいた頃とは異なる可能性もある。

また、地点は回答者の生育地によるため、全国均一にはならない。地域により地点の密度が大きく異なっており、特に大都市は回答者の生育地が多く、地点密度が高い。そのため、たとえ使用率が低くても使用者数は多くなり、分析時に惑わされる可能性がある。分布の読み取り時には、特に注意しなければならない。

地図については、全ての項目ではないが鐘水(2013)として刊行した²。

² 鐘水(2013)は、インターネット上でも PDF ファイルとしてダウンロード可能である。
<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/5-1.html>（最終閲覧日：2013年12月10日）

3. 分析

3. 1 全国規模の地域差

3. 1. 1 関西圏中心の分布

永瀬(2006)の若者語の全国地図でも明らかなように、若者語にも地理的差異が存在する。ここでは全国地図でも分布領域が明確な、使用地域の限定された語について述べる。

図1は「マクド」(マクドナルド)、図2は「セブイレ」(セブンイレブン)の地図である。どちらも店舗名の略称だが、使用回答は関西地方に集中している。他の地域ではほとんど使用者がいないため、現代の関西方言になっているといえるだろう。「マクド」は関東でも有名な関西方言で、わずかに使用者がいるが、普及しているとはいえない。

「セブイレ」も関西地方中心だが、「マクド」と比較して四国地方に広がっておらず、分布領域が狭い。しかし、これは調査時点ではセブンイレブンが四国地方に出店していなかったことと関係していると思われる。四国地方では全国的に使用されている「セブン」が回答されている。セブンイレブンの店舗はないため、使用機会が少なく、メディア等から東京で使用される略称が広まっているものと思われる。

しかし2013年3月より香川県・徳島県にセブンイレブンの出店が始まった。実際の店舗の利用が始まり、店舗名の使用機会が増加することで、関西地方に近い両県では、関西式の「セブイレ」の影響を受けやすくなると思われる。「セブイレ」が四国地方に普及することで、「マクド」の分布領域と同じようになる可能性があるだろう。

3. 1. 2 首都圏中心の分布

図3は、「おこ」(怒った状態)の地図である。全国的に使用者が非常に少なく、関東南部にわずかに分布しているだけである。現時点(2013年)では、テレビでも紹介されて有名になった語だが、2011年当時は、授業における学生のコメントでも「妹が使用する」「中高生で聞く」といったように、大学生には広がっていなかったと思われる。また、「おこ」は、Twitterなどインターネット上での使用が多いとされるが、調査票での選択肢は口頭表現としての使用をたずねているため、使用回答が少なくなった可能性もある。

若者語は、中心都市での普及が進むと、メディアなどを經由して急速に拡散する傾向がある。そのため、使用率が非常に低い状態の地理的分布をとらえられたことは貴重である。さらに、東京から発信される語において、普及初期段階において、東京都区部とその周辺のみという狭い分布が存在することを確認できたのは、語の普及過程の研究においても意義があると思われる。

今回の調査では、「おこ」のほかにも使用回答が首都圏を中心に分布する項目が多く確認できた。東京は日本の情報発信の中心地であり、若者語が首都圏中心の分布となることは予想できる。しかし、今回の調査項目は、神奈川県川崎市に立地する大学に通学する学生が収集した語で構成されており、調査結果に強く影響していると思われる。今後は、他地域、特に関西で使用される語についての全国規模の調査が必要だと思われる。

■: 使う
◇: 未選択

17% (322/1919)

(A) 全国地図



図1 「マクド」(マクドナルド)の全国地図

■: 回答あり
/ : 回答なし

10% (188/1919)



図2 「セビレ」(セブンイレブン)の全国地図



図3 「おこ」(怒った状態)の全国地図

3. 2 中心部から周辺部への伝播

3. 2. 1 各地方の中心部への普及

若者語のように普及速度の速い語は、変化の状態をとらえることが難しい。一定の分布領域を持っていた状態から、広域に普及して分布領域が失われていく過程について把握する必要がある。そのため、普及の段階と地理的分布の関係について、さらに事例を分析する。

図4は「あげぽよ」（気分が高揚した状態）の全国地図である。流行語項目は選択肢が他の項目より細かく、現在の使用と過去の使用とを分けている。しかし、地図では二つの選択肢を合わせて表示している。

「あげぽよ」は、2010年頃に全国的に有名になった若者語であり、調査票作成時（2011年春）に、もっとも多く多くの学生が調査項目の候補にあげた語である。そのためすでに全国に普及しており、どの地域で使われ始めたかについては、一見するとわからない。

しかし図をよくみると、全国に広がったとはいえ、多くの地域で都市の中心部に使用者が集中しており、周辺部では使用が少ないようにみえる。そのため詳細図をみることにする。図5は首都圏、図6は関西圏（中京圏も表示されている）の詳細図である。

厳密ではないが、首都圏には東京特別区を中心とした地域を、関西圏には大阪市を中心とした地域をそれぞれ線で囲んだ（図6では名古屋市周辺についても囲んだが、大阪市周辺よりも回答者数が少ないため、他の関西圏の詳細図では囲んでいない）。

図5をみると、首都圏では使用者が広く分布しているが、広域にみると首都圏周辺部の山梨県、長野県、栃木県、茨城県などで使用者が少ないことがわかる。また図6でも、大阪市や神戸市といった大阪湾に近い都市では使用者が多く、海岸から離れた内陸部、山陰地方では使用者が少ない。同様に、名古屋市でも中心部は使用者が多いが、周辺地域では少ない。さらに図4の全国地図にもどって九州地方をみると、福岡市や北九州市では使用者が多いが、福岡県南部や大分県、熊本県では少ない。このほか、富山県や高知県など回答者の多い地域をみても、使用者が中心部（県庁所在地）に多く、周辺部に少ないようにみえる。

以上から、「あげぽよ」の使用者の地理的分布は、都市の中心部において早く普及し、周辺部には遅く普及するという、周圈的な分布といえるだろう。各地域で中心部と周辺部に差があるような分布を地理的分布をとらえるかは議論があると思われるが、まとまった分布領域が存在するという点で地理的分布とみなすことにする³。

また、都市中心部に使用者が多いということは、単に人口の多い中心部に回答者数が多いだけで、周辺部では回答者一人が占める割合が大きいため、統計的検定では誤差の範囲内に入ってしまいう可能性もある。一方で、人口密度が高い地域は、人々の接触も多い地域であり、伝播が進みやすい条件がある。そのため、使用率が低くても使用者の絶対数が多いため、接触確率が高くなる。数量的分析を行う際には、回答地点の人口密度など、人々の接触を考慮した分析が必要であろう。

³ 生育地の都市規模による差と考えれば社会的属性による差とみなすこともできる。しかし地伝いによる伝播の側面もあるため、言語地理学における方言圏論とあわせて検討する必要があるだろう。

■: 使う・使った
\\: 聞く・聞いた
・ 知らない

21% (403/1919)



図4 「あげぼよ」(気分が高揚した状態)の全国地図

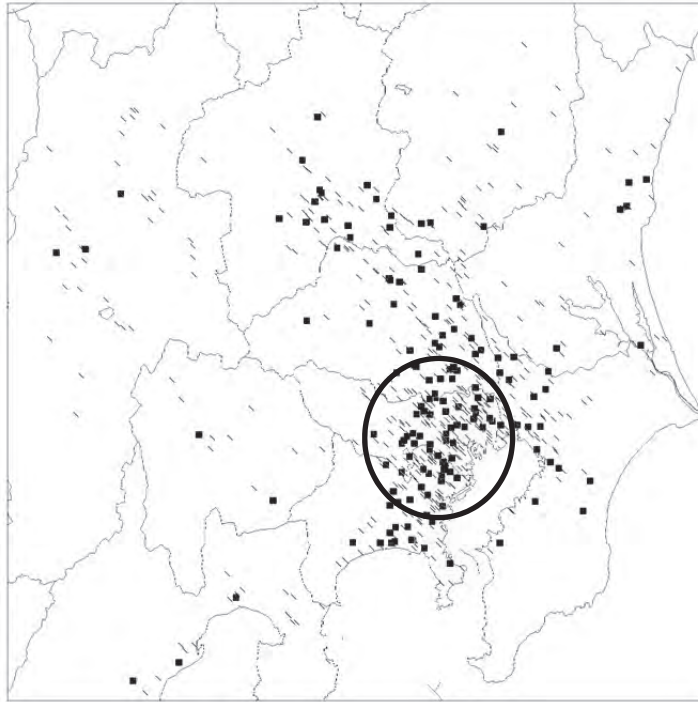


図5 「あげぽよ」(気分が高揚した状態)の地図(首都圏)

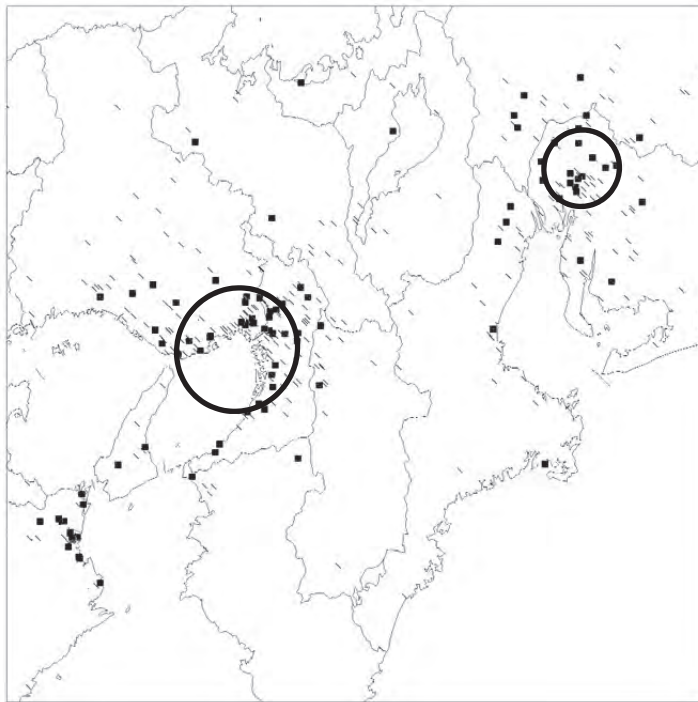


図6 「あげぽよ」(気分が高揚した状態)の地図(関西圏)

3. 2. 2 大都市間の相互伝播

若者語には、各地域の大都市の中心部で早く普及し、周辺部には遅く伝わるパターンがあることがわかった。このことは、全国各地に中心部から各種メディアを経由して直接伝播するのではなく、いったん近隣の中核都市に伝播してから、その周辺部に広がるという階層的な伝播になっていることを表わしている。

中心部となる都市の規模が大きい場合には、相互に影響を与え合う可能性もある。ここでは、日本の二大都市圏である首都圏と関西圏の相互影響についてみる。図7は、関西方言である「オモンナイ」（面白くない）の首都圏での使用を、図8は、関東方言である「イーンジャネ？」（いいんじゃない？）の関西圏での使用を示した地図である。

どちらも若年層で多く使用される語とはいえ、他地域の方言であることもあり、あまり多く使用されていない。しかし、どちらも地域の中心部にも、一定数の使用者がいることがわかる⁴。大都市間において、それぞれの都市の中心部同士で、互いに影響を与え合っている、ということが観察できる。

大都市の中心部は、単に人口密度が高いだけでなく、他地域からの滞在者や移住者が多い。そうした他地域の人々との交流によって、自然と他地域の言語的影響を受けていると思われる。これは、都市の言語が複雑化する要因の一つといえるだろう。

3. 3 属性差に含まれる地域差

3. 3. 1 男性のみに現れる地域差

本研究では地理的分布を重視しているが、若者語の普及は地理的要因ばかりではない。属性差や個人差が主要因であることも多いと思われる。

表1は、携帯電話用語の項目に関する男女差である。ほとんどの語で男性より女性の使用率が高いことがわかる。地理的分布をみると、携帯電話項目は、地域差が明確ではない。これは地域差よりも性差の要因が大きいことが原因であると思われる。

ここでは関西圏における「着拒」（着信拒否）の地図をとりあげる。図9は、関西圏における「着拒」の地図である。やや中心部に使用者が多いように思えるが、地点密度の関係もあるため、この図では地域差はわかりにくい。つづいて男女別にした地図を図10・図11に示す。使用が進んでいる女性（図10）の地域差は、図8よりも分布が明確でなくなったが、使用が遅れている男性（図11）は、大阪市ほか沿岸部の大都市に集中して分布していることがわかる。

伝播の方向が中心部から周辺部に進むとすれば、「着拒」の男性の分布は、今後女性の分布のように移行することが予想される。すでに首都圏では男女とも中心部・周辺部の差がなく、これら共時的な言語地図の中の各状態は、言語変化の各段階として読み取ることができる。

⁴ 関西で生育したが関東の大学に入学している、というような生育地と現住地が異なる移住者の影響が出ている可能性がある。たしかに、移住者を含んでいる言語地図では明確な分布になりづらいともいえる。この点については別稿にて論じる予定である。

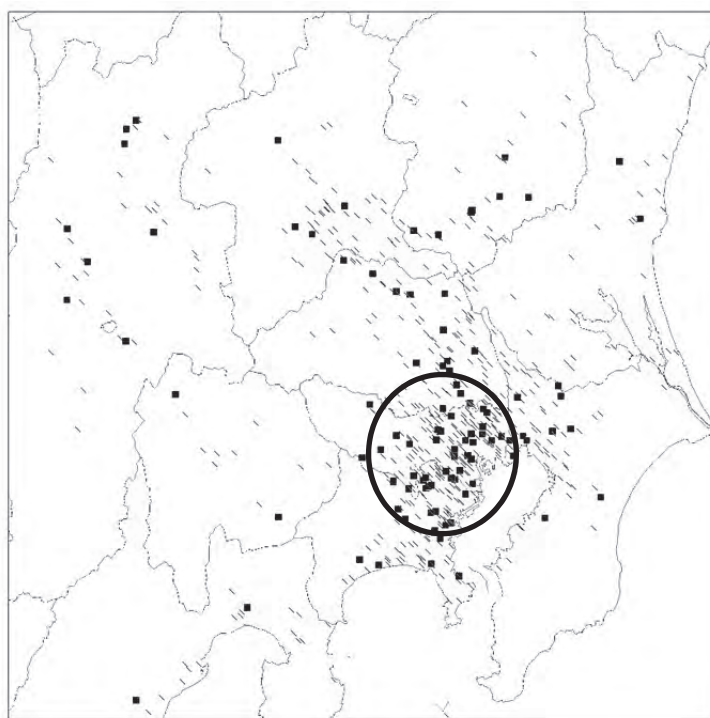


図7 「オモンナイ」(面白くない)の地図(首都圏)

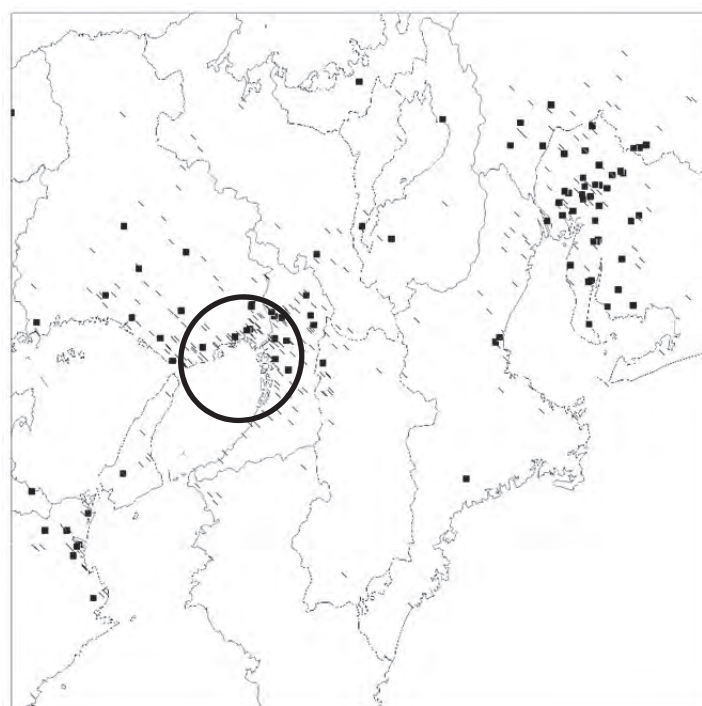


図8 「イーンジャネ」(いいんじゃない?)の地図(関西圏)

表1 携帯電話用語の使用率

語	意味	男(%)	女(%)
携番	携帯電話番号	42	55
知ら番	知らない電話番号	2	2
家(イエ)電	固定電話	61	77
鬼電	頻繁に電話をすること	20	24
アド変	携帯メールアドレス変更	83	91
着拒	着信拒否	43	54

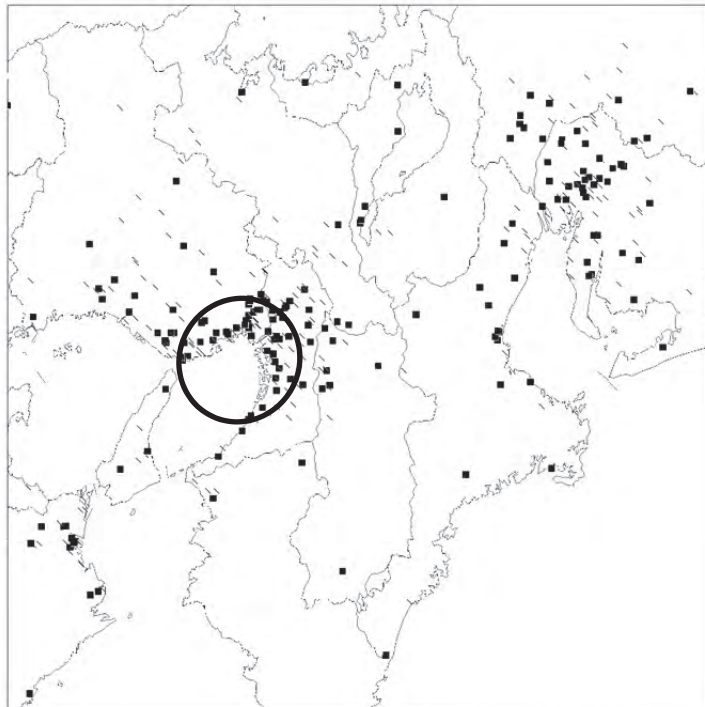


図9 「着拒」(着信拒否)の地図(関西圏)

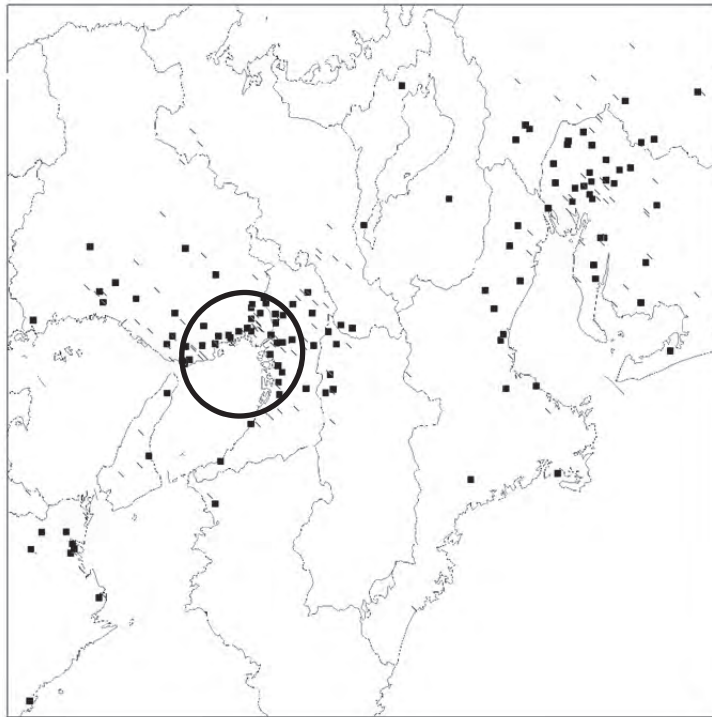


図10 「着拒」(着信拒否)の地図(関西圏・女性)

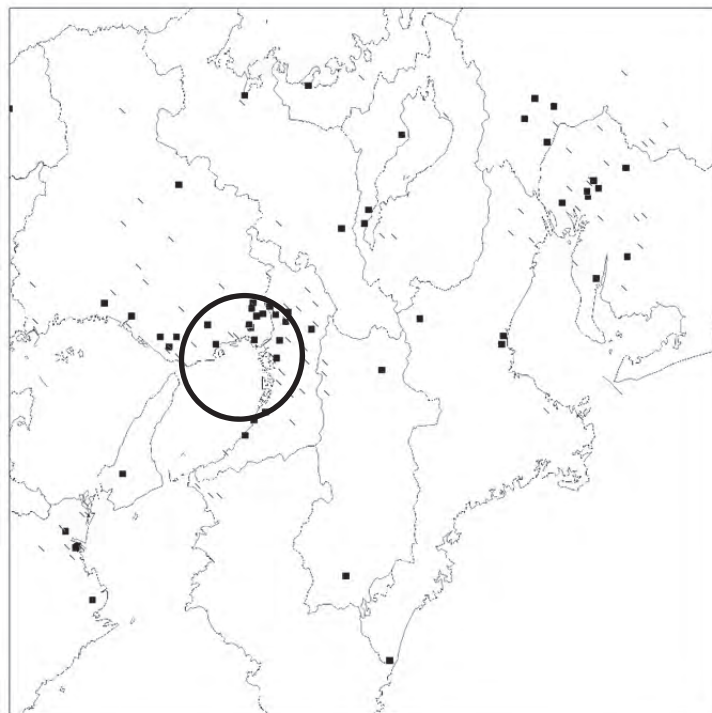


図11 「着拒」(着信拒否)の地図(関西圏・男性)

3. 3. 2 女性にあらわれる地域差

つづいて、インターネットから一般に広がっている「ワンチャン」(もしかしたら～かもしれない)の分布をみる。「ワンチャン」は、元は麻雀用語ともゲーム(格闘ゲーム)用語ともいわれ、主にインターネットで発展した語である。達成する期待を含んだ可能性についての表現であるが、インターネットから、大学のサークルなどに広がった結果、用法が多岐に変化した⁵、いわば若者語らしい語である。

全国使用率は15%とあまり高くはないが、全国的に広がっており地域差がわかりにくい。しかし首都圏の詳細図(図12)と関西圏の詳細図(図13)を比較すると、首都圏のほうが使用者が多いことがわかる。首都圏全体でみると、東京都を中心とした分布になっていることがわかる。

しかし性別の使用率では、男性が27%、女性が8%と3倍以上の開きがあり、性差の大きい語であることがわかる。特に女性の使用率が低いことから、普及初期段階ではないかと予想し、首都圏の詳細図を、男性(図14)と女性(図15)とに分けて作成した。

男女の地図を比較すると、男性では地域差が失われている一方で、女性においては首都圏中心部、とくに東京都中心の分布になっている。男女の区別がない図12の首都圏の地図においても、地域差があるようにみえるが、図15のように女性だけに限定すれば、より明確になる。調査時点で男性の使用者がすでに広域に分布していたためだということがわかる。

「ワンチャン」の地理的分布のように、一見地域差が明確でないような場合でも、属性別の地図を作成すると地域差があらわれることがある。本研究では地理的差異を中心に分析しているが、若者語には流行語や集団語的性格があり、属性からの分析は不可欠である。

地理的な分析するためには、どうしても地図作成という、他の集計とは別の作業が必要となる。しかし、たとえ属性差が主要因であったとしても、2番目以降の要因として地域差が関係する可能性もある。若者語の複雑な動態をとらえる上で、地域差からの分析は不可欠であると思われる。

⁵ 「ワンチャンス」が語源であり、もとは実現可能性が低い事象に対して望みをつなぐような意味であったと思われる。しかし普及するにつれて、実現可能性の上昇(推量に近い)や、意味の限定(男女関係のみ)、統語的位置の移動(ワンチャン〇〇 → 〇〇ワンチャン)など、さまざまな方向への変化が報告されている。

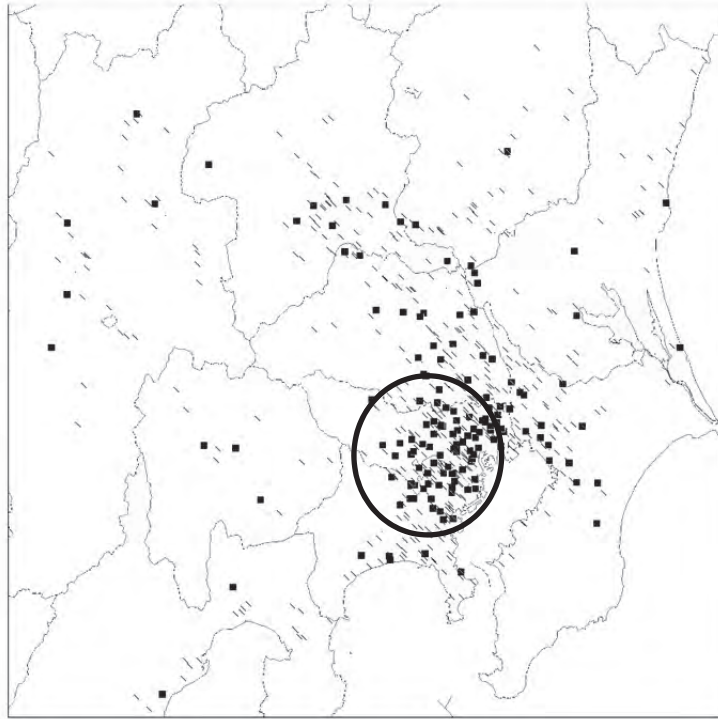


図12 「ワンちゃん」(もしかしたら～かもしれない)の地図(首都圏)

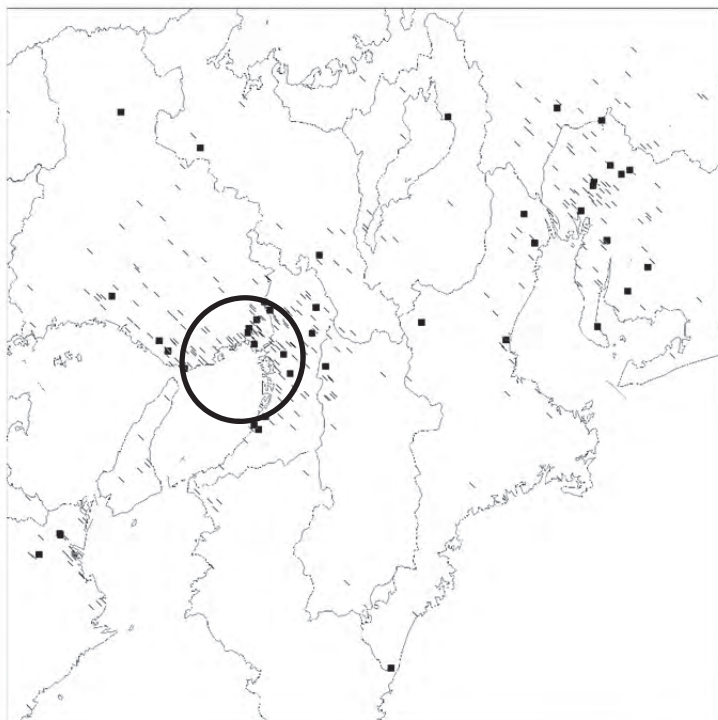


図13 「ワンちゃん」(もしかしたら～かもしれない)の地図(関西圏)

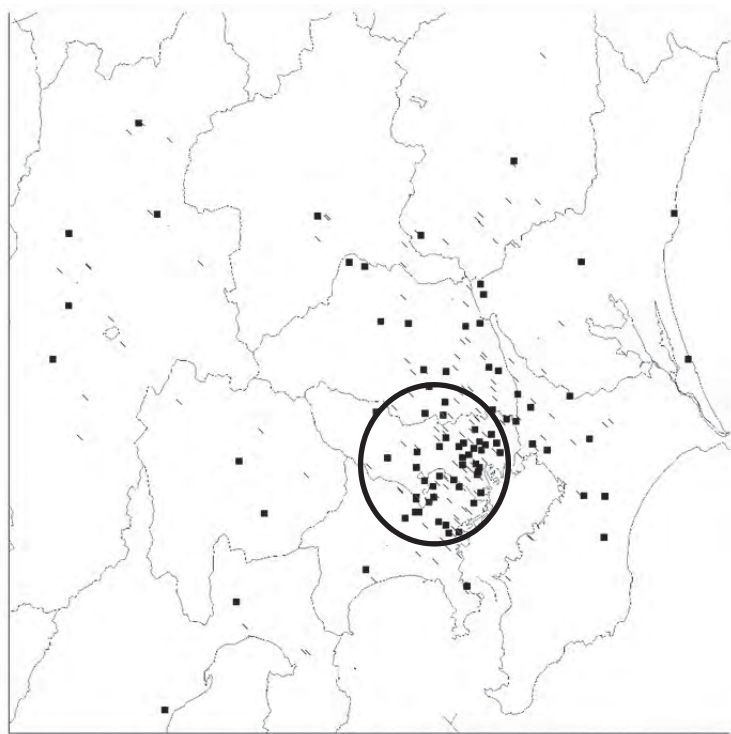


図14 「ワンチャン」(もしかしたら~かもしれない)の地図(首都圏・男性)

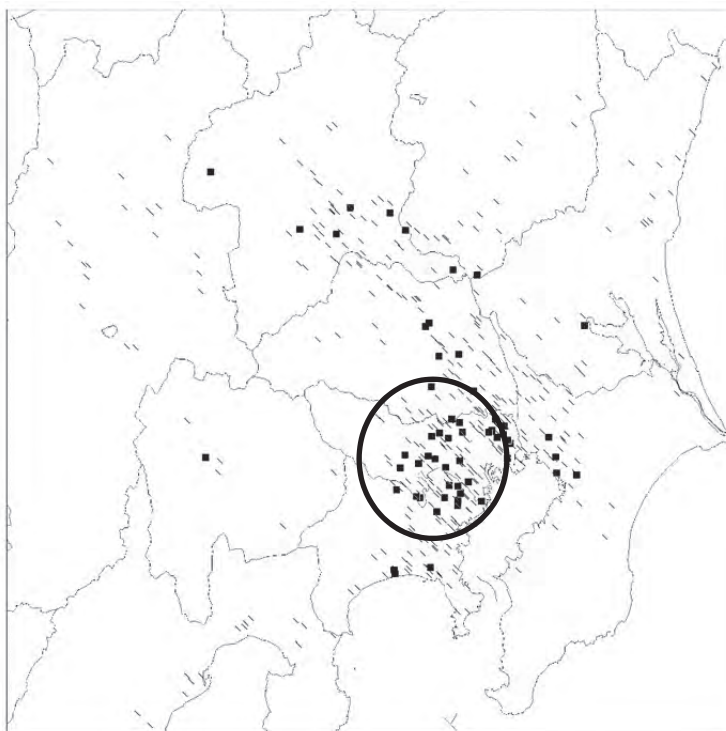


図15 「ワンチャン」(もしかしたら~かもしれない)の地図(首都圏・女性)

4. まとめ

4. 1 若者語の普及モデル

本研究では、2011～2012年に実施した「全国若者語調査」の結果の一部から、若者語の普及過程について、簡単な考察をおこなった。その結果、若者語の地域差と普及過程の関係について、以下の3点がわかった。

- ① 全国規模の地域差の存在
- ② 都市の中心部から周辺部への伝播
- ③ 属性差の中に隠れた地域差の存在

地域に個別に分布するような①の若者語については、②の初期段階とみなすこともできる。また、②において、中心から各地域の大都市に伝播する場合、各地域における使用者の分布は、普及の段階をあらわすことになる。このとき、③のように属性差で説明されるような場合でも、属性ごとに分類して地理的分布をみると地域差があらわれ、②と同様の普及過程の段階を観察することができる可能性がある。

②の中心部から周辺部への伝播について、モデル図にしたものが図16である。階層的に伝播する構造をあらわしている。本研究においては、もっとも大きい中心部を東京とする。まず東京（中心部）から地方の大都市（周辺部）へと伝播し(A)、さらにその大都市（中心部）から周辺の小都市（周辺部）へと伝播する(B)という構造になっている。ただし中心地の規模が大きい場合、メディア等により、小都市に直接影響を与える(C)こともありうるほか、大都市同士（東京もふくむ）が影響を与え合うこともある(D)。

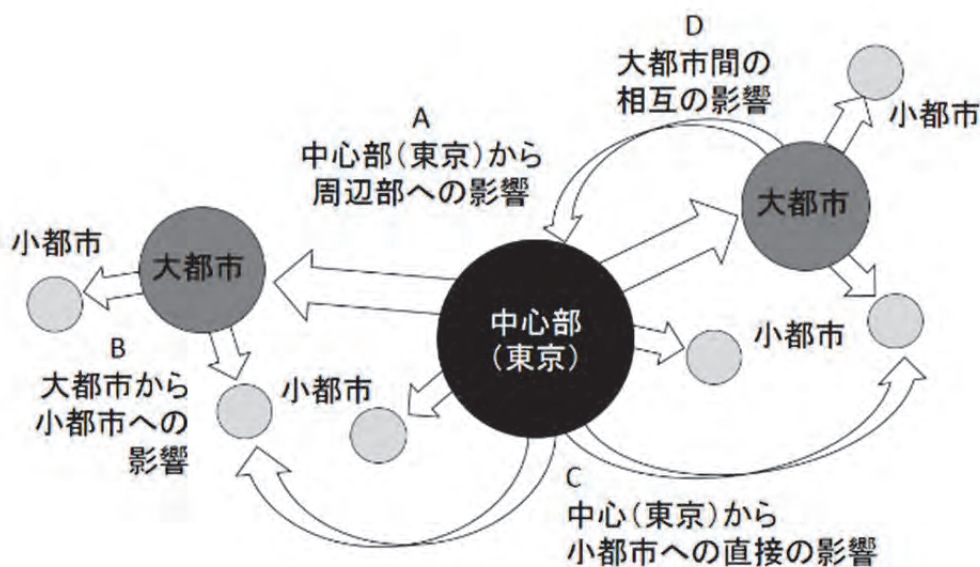


図16 若者語の普及モデル

4. 2 今後の課題

今後の課題として、いくつかの点をあげる。一つめは、言語の分析である以上、語の性質に関する分類をおこなう必要がある。本研究は、言語地図を概観して目立った地域差のある語の分布に関する論考にとどまっている。若者語の伝播過程を考える上では、個々の若者語の性質について検討しなければならない。そのためには、語の用法の記述や、成立過程の調査など、より精密な分析をする必要があるだろう。

二つめは、地理的分布のパターン分類の必要性である。本研究において分布の有無を論じた部分については、数量的分析からの検証が求められるだろう。特に中心部、周辺部といった、領域が漠然としているものについては、客観的基準をもうけた集計作業が必要だと思われる。また語の分類についても数量的側面からの分類ができるため、一つめとも関係する。

三つめは、地理的分布の動態をとらえる必要性である。共時的な調査結果からでも断片的に言語変化の各段階が観察可能である。しかし同一の語の普及過程を地理的に観察するためには、今回の調査を継続する必要がある。全国規模の継続調査を実施するには多大なコストがかかるため、鎌水(2011)による携帯メールを利用した調査のような、低コストの調査方法を検討する必要があるだろう。

このほか本研究で採用した調査の方法や、調査した若者語の項目についても、今後の調査のために検証する必要があるだろう。

5. おわりに

「全国若者語調査」によって、若者語の普及過程を、地理的分布という面から研究する重要性について示すことができたと思われる。地理的分布に関しては、大字単位という細かい生育地をたずねたことで、地点密度が高くなっても、地点が重なることが少なくなり、都道府県単位での集計では見えなかった、都市における分布の広がりを観察することができた。その一方で、男女差だけではあるが、属性差の重要性も再認識できた。

本研究で使用した「全国若者語調査」のデータは、まだ一部分にすぎない。今後、残りの部分についても分析をおこなうほか、本研究における分析についても、他のさまざまな観点から分析を進め、報告していきたい。

文献

井上史雄(1994)『方言学の新地平』明治書院

大西拓一郎・鎌水兼貴・三井はるみ・吉田雅子(2011)『方言の形成過程解明のための全国方言調査：方言メール調査報告書』国立国語研究所共同研究報告 10-2

岡本義雄「日本列島海岸線データ&県境データ」

http://www.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~yossi/programs_trash.html (最終閲覧日：2013年12月10日)

東京大学空間情報科学研究センター「CSIS シンプルジオコーディング実験」

<http://newspat.csis.u-tokyo.ac.jp/geocode/modules/geocode/> (最終閲覧日：2013年12月10日)

永瀬治郎(2006)「若者ことば全国分布図—2005年調査の意味するところ」月刊言語 35-3

鎌水兼貴(2011)「携帯電話を利用した首都圏若年層の言語調査」人文科学とコンピュータ研究会
研究報告 2011-CH-92-1

鎌水兼貴(2013)『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 全国若者語調査地区集』国立国語研
究所共同研究報告 12-04

米川明彦(1996)『現代若者ことば考』丸善ライブラリー

謝辞

本研究は、2012年度専修大学文学部日本語学科ゼミナールⅡ・Ⅲ(担当:鎌水兼貴)ならびに、国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(プロジェクトリーダー:三井はるみ)による研究成果の一部である。

本調査の準備に努力してくれた当時のゼミの学生諸君と、貴重な授業時間を割いてご協力いただいた各大学の先生方、アンケートに回答していただいた学生の皆様、そして研究においてご指導、ご助言をいただいた国立国語研究所共同研究プロジェクトの皆様に、厚く御礼申し上げます。

参考資料 調査票 (第1調査票)

ことばに関するアンケート

2011年12月
専修大学 鍵水ゼミナール

このアンケートは、専修大学文学部日本語学科・鍵水ゼミナールⅡ・Ⅲの研究として、みなさまの普段のことばの使用についておたずねするものです。回答はすべて機械的に処理されるため、**個人が特定されることは決してありません**。また、集計の結果は、今年度中に公開する予定です。ご協力をお願いいたします。

1. 以下のことばについて、**使う(使った)**かどうか、該当する番号に○をしてください。
(「知らない」以外の人は) また、**面識のない同世代の人に対して使える(使えた)**かどうか (1~5の5段階評価) を教えてください。

例) オッハー	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える← (使えた)	1	2	3	4	5	→使えない (使えなかった)
	(今使っている)	(今使わなかった)	(今聞いている)	(今聞いたことがある)	(見たことも聞いたこともない)					4		
							面識のない同世代の人に対して					
①あげぼよ	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
②さげぼよ	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
③テンションあげ	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
④イケてる	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑤オケる (カラオケする)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑥コピる (コピーする)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑦ハブる (仲間外れにする)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑧ググる (Google 検索する)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑨disる (軽蔑する)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑩ツボる (ツボにはまる)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑪キョドる (挙動不審になる)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑫チャライ (チャラチャラしている)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑬オシャンティ (おしゃれ)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑭ジモティ (地元の人)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑮タリい (面倒だ)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない
⑯チョベリバ (super very bad)	1. 使う	2. 使った	3. 聞く	4. 聞いた	5. 知らない	使える←	1	2	3	4	5	→使えない

2. 以下のことばについて、**使うものすべて**に○をしてください。

(「とても」の意味)

1. 鬼 2. ガチ 3. マジ 4. 超 (チョー) 5. めっちゃ 6. むっちゃ
7. すごい 8. 熱い 9. ヤバイ

(程度をあらわすもの)

10. 普通に 11. 地味に 12. 余裕で 13. なにげに 14. さりげに 15. 微妙に

(ケータイ関係)

16. 携番 17. 知ら番 18. 家電 (イエデン) 19. 鬼電 20. アド変 21. 着拒 (チャックヨ)

3. 下線部分について、**使うものすべて**に○をしてください。別の言い方があれば () 内にお書きください。

- ①「今度の新曲、いいんじゃない?」 1.ヨクナイ? 2.ヨクネ? 3.イーンジャネ? 4.エーンチャウ? 5.その他 ()
②「わー、うざい!」 1.ウザイ 2.ウザツ 3.ウゼー 4.ウザー 5.ウザカ 6.その他 ()
③「意味わからない!」 1.ワカラナイ 2.ワカンナイ 3.ワカンネー 4.ワカラヘン 5.ワカラン 6.その他 ()
④「面白くないやつ!」 1.オモシロクナイ 2.オモロナイ 3.オモンナイ 4.ウケナイ 5.ウケヘン 6.ウケン 7.その他 ()

4. 以下の表現すべてについて、**程度が強いと思う順番**に、() 内に番号を入れてください。

※ (1, 2) > (3, 4) のように、一つのカッコに二つ以上の番号を入れて、一部のカッコが空いても構いません。

- ① 1. とてもうまい 2. ガチうまい 3. マジうまい 4. 超うまい 5. めっちゃうまい 6. すごいうまい 7. ヤバイうまい
強 () > () > () > () > () > () > ()
② 1. 意外にうまい 2. 普通にうまい 3. 地味にうまい 4. 余裕でうまい 5. さりげにうまい 6. なにげにうまい 7. 微妙にうまい
強 () > () > () > () > () > () > ()

5 以下の言い方について、**使うかどうか**教えてください。また、**おかしいかどうか**を5段階で評価してください。

- ①「味どう?」「ヤバイ! (味が良い意味で)」 1. 使う 2. 使わない おかしくない← 1 2 3 4 5 →おかしい
②「味どう?」「ヤバイ! (味が悪い意味で)」 1. 使う 2. 使わない おかしくない← 1 2 3 4 5 →おかしい
③「調子どう?」「全然! (調子が良い意味で)」 1. 使う 2. 使わない おかしくない← 1 2 3 4 5 →おかしい
④「調子どう?」「全然! (調子が悪い意味で)」 1. 使う 2. 使わない おかしくない← 1 2 3 4 5 →おかしい

次のページに続きます

6. 以下の店舗について、行く頻度、店舗名の呼び名、また行くときの言い方について、教えてください。

- ①マクドナルド a. 行く頻度 1. かなりよく行く 2. よく行く 3. たまに行く 4. あまり行かない 5. まったく行かない
 b. 呼び名 1. マック 2. マクド 3. マクドナルド 4. その他 ()
 c. 行くとき 1. マくる 2. マック行く 3. マクドル 4. マクド行く 5. マクドナルド行く 6. その他 ()
- ②セブンイレブン a. 行く頻度 1. かなりよく行く 2. よく行く 3. たまに行く 4. あまり行かない 5. まったく行かない
 b. 呼び名 1. セブン 2. イレブン 3. セブンイレブン 4. その他 ()
 c. 行くとき 1. セブる 2. セブン行く 3. イレブる 4. イレブン行く 5. セブンイレブン行く 6. その他 ()
- ③ガスト a. 行く頻度 1. かなりよく行く 2. よく行く 3. たまに行く 4. あまり行かない 5. まったく行かない
 b. 呼び名 1. ガス 2. ガスト 3. その他 ()
 c. 行くとき 1. ガスる 2. ガスト行く 3. その他 ()

7. 以下の表現を、親しい友達相手に対して使うかどうかについて、おたずねします。

①どのような手段のときに使いますか。使う手段すべてに○をつけてください。

- | | | | | | |
|-----------------------------|---------|---------|---------|-----------|---------|
| 1. とりま (とりあえず、まあ) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 2. 同中 (オナチュー／ドーチュー：同じ中学) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 3. いつメン (いつものメンバー) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 4. おこ (怒っている状態) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 5. なう (今を表すとき) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 6. わず (過去を表すとき) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 7. ういる (未来を表すとき) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 8. 神 (ネ申、カミ：すごい人) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 9. リア充 (実生活が充実している人) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 10. 乙 (オツ：お疲れ様) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 11. ワンチャン (もしかして～あるかも) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 12. J K (女子高生) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 13. H K (話し変わって) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 14. w k t k (ワクテカ：期待する様子) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 15. k t k r (キタコレ：出現・登場を表す) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |
| 16. w w w (笑いを表す) | 1. 話すとき | 2. ケータイ | 3. パソコン | 4. 手で書くとき | 5. 使わない |

②「ワンチャン」という言い方についておたずねします。

- a. 使ったり、聞いたり(見たり)したことがありますか。 1. 使う 2. 聞く 3. 知らない
- b. (使う・聞く人)いつ頃、どこで(誰から)知りましたか。 いつ頃 () どこで(誰から) ()
- c. (使う・聞く人)何パーセントくらいありそうなことに対して使いますか(使っているように感じますか)。 () %
- d. (使う・聞く人)「もしかして優勝するかもしれない」というとしたら、どのように用いますか。
 1. ワンチャン優勝ある 2. 優勝ワンチャン 3. その他 ()

8. ことばに関する意識・生活についておたずねします。

①あなたがふだん親しい友達と話すことばは、どのようなことばだと思いますか。

1. 標準語 (共通語) 2. 方言 → (具体的にいうと) () 方言) 3. その他 ()

②あなたは、標準語 (共通語) がうまく使えますか。

1. とても使える 2. やや使える 3. どちらともいえない 4. あまり使えない 5. まったく使えない

③あなたは、最近、日本語が乱れていると思いますか。

1. とても思う 2. やや思う 3. どちらともいえない 4. あまり思わない 5. まったく思わない

④あなたがふだんよく使うもの、よく見るものすべてに○をつけてください。

1. YouTube 2. ニコニコ動画 3. ちゃんねる 4. Twitter 5. Facebook 6. ミクシィ 7. GREE 8. モバゲー 9. その他 SNS

9. 最後にご自身についておたずねします。 (名前はおたずねしません)

①所属 () 大学大学院・大学・高専・高校 () 学部・研究科 () 年生

②性別 1. 男 2. 女

③年齢 満 () 歳 19 () 年 () 月生まれ

④お住まいの場所について、よろしければ、以下の例のように、丁目や番地などの数字の前の部分まで教えてください。

例) × 神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番地1 → ○神奈川県川崎市多摩区東三田 (←数字部分は不要です)

a. 5歳から15歳までの引越回数と最も長く住んでいた場所 (判断しにくい場合は複数お書きになっても構いません)

引越回数 () 回 場所 ()

b. 現在住んでいる場所 (aと異なる場合) ()

※留学生の方は、aでは国名と省・道・県・州名を教えてください。

ご協力ありがとうございました。

関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及の背景¹

三井 はるみ
(国立国語研究所)

1. はじめに

現代共通語の中に、関西方言出自の要素があるということはよく知られている。「けむり(煙)」「うるこ(鱗)」「ひまご(曾孫)」「つゆ(梅雨)」等の語彙や、待遇表現などが例として挙げられる。「～てほしい」は、そのような関西方言出自の形式の一つである。

現代共通語、現代標準日本語は東京・首都圏の方言を基盤として成り立っているが、両者は一致するわけではない。関西方言出自の形式が共通語として取り入れられる際に、東京・首都圏の方言がどのような動向を取り、役割を果たしたか。これを具体的に明らかにすることは、共通語の形成過程だけでなく、地域言語である東京・首都圏方言の特質を解明する上でも、有効な観点の一つであると考えられる。

筆者は三井(2007・2010)において、関西方言出自の「～てほしい」が全国共通語として普及・定着していく過程を確認した。そこでは、主として時期と対象の異なる3回の全国調査と、文献調査の結果を用いて、「～てほしい」が、地域的にも文体的にも使用範囲を拡大していく様子を提示した。これを受けて本稿では、従来用いられていた類義表現である「～てもらいたい」に代わって(あるいは、加えて)、新たに「～てほしい」が用いられるようになった背景について、特に、東京・首都圏方言における受納表現「～てもらう」の用法の変容という観点から考察を行う。

以下、2節で前稿(三井(2007・2010))の要旨を紹介する。3節で、「～てほしい」普及の背景をさぐる観点を示す。4節で、受納表現の補助動詞用法「～てもらう」の全国的な地域差を三点挙げ、5節でそのうち、「受益明示の積極性」について、6節で「待遇表現的使用」について概観する。7節で、「～てもらう」の地域差とその変容についてあらためてまとめ、8節で「～てもらう」の待遇表現的使用と「～てほしい」の普及の関係について仮説を述べる。

2. 前稿で明らかになったこと

はじめに、三井(2007)、三井(2010)の要旨を示す。一部、その後の追加調査に触れる。

2. 1 三井(2007)

「～てほしい」は、方言としては、GAJ段階で近畿地方に限定的に使用される語形であったこと、書きことばとしては、近現代の文学作品全体で、「～てもらいたい」より少ないものの、広く用いられており、増加傾向にあることを示した。

(1) GAJでは、「～てほしい」は明確に近畿地方中心に分布する語形である。

国立国語研究所編(2002)『方言文法全国地図 第5集』(GAJ5)第231図「行ってもらいた

¹ 本稿は、共同研究発表会(2011年2月25日、国立国語研究所)における口頭発表「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及とその背景」の一部に加筆したものである。

い」によると、「～てもらいたい」類が、沖縄県を除く全国に広く分布するのに対し、「～てほしい」は、明らかに近畿地方を中心とした地域にのみ分布している。GAJの調査は1979～1982年実施。対象者は、主として、大正9（1920）年以前生まれの生え抜きの男性、各地点1名である。この時点で、明治末から大正生まれの人々の日常の話しことばでは、「～てほしい」は「～てもらいたい」と異なり、近畿地方を中心とした地域性を帯びた語形であった。

(2) 近現代の文学作品では、「～てほしい」と「～てもらいたい」はどちらも広く用いられている。

CD-ROM版新潮文庫4種（新潮社1995,1997a,1997b,2000、翻訳作品を除く）を資料として、「～てほしい」と「～てもらいたい」の出現状況の調査を行い、著者別、著者の生年順に出現数を整理した。近現代全体では、3,572例のうち、「～てほしい」が1,418例（39.7%）、「～てもらいたい」が2,154例（60.3%）であった。2対3の割合で、どちらも広く用いられていると言える。著者の出身地による偏りは、少なくとも単純な用例数の違いとしては現れてこない。これらの点から、近現代の書きことばにおいては、「～てほしい」は「～てもらいたい」とともに共通語形として用いられているとみて問題ない。

(3) 近現代文学作品では、大局的には、「～てほしい」が増加傾向にある。

(2)の結果からは、大局的に見て、生年の早い著者には「～てもらいたい」が多く、生年の遅い著者には「～てほしい」が多い、という傾向が見て取れる。また、概ね1926（昭和元）年生まれあたりを境に「～てほしい」が全体的に多くなる。このことは、共通語としての「～てほしい」の使用が盛んになったのは戦後であるとする研究者の観察や、GAJの分布（話者は主として1920年以前生まれ）とも矛盾しない。

なおその後、追加調査として、現代の多様な書きことばでの実態を見るために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用状況を検索した（「少納言」を使用）。それによると、全体12,138例のうち、「～てほしい」8,909例（73.4%）、「～てもらいたい」3,229例（26.6%）であった（ただし、不要例除去前の暫定値）。近現代全体の割合と逆転し、「～てほしい」が四分之三を占めている。近現代を通して確認された、書きことばにおける「～てほしい」増加の傾向は、現代において、「～てほしい」が「～てもらいたい」を凌駕するまでに定着していると見ることができる。

2.2 三井（2010）

GAJの30年後の分布追跡調査の結果から、「～てほしい」の分布域が、近畿地方を中心に東西に拡大していること、若年層では「～てほしい」と「～てもらいたい」の勢力が完全に逆転し、「～てほしい」が全国に広がったことを示した。

(4) GAJの30年後、「～てほしい」は、近畿地方を中心に東西に広がったが地域性を保持している。

GAJ調査実施約30年後の2009年に実施した、同一調査文による分布追跡調査の結果によると（国立国語研究所「方言分布」プロジェクトで実施）、依然として、「～てもらいたい」類が沖縄県を除く全国に広く分布するのに対し、「～てほしい」の分布は、近畿地方を中心とした本土の中央部に限られている。ただし、GAJでは使用地域ではなかった、西側の徳島市、東側の長野

県松本市，東京都立川市に使用地点が現れており，この30年間に周圏論的拡大が生じたことがわかった。話者は1939（昭和14）年以前生まれの生え抜きの男女である。

（5）現代の若年層では「～てほしい」が全国的にひろがり，「～てもらいたい」は減少した。

2008年に実施した，若年層（20歳前後の大学生）を対象とした全国調査によると（国立国語研究所「方言分布」プロジェクトで実施），「～てほしい」が全国に広がり，「～てもらいたい」は東日本を中心として地点もまばらに見られるのみになっている。回答者数は，「～てほしい」142名（81.6%），「～てもらいたい」32名（18.4%）。（4）の話者との年齢差は約50年である。この50年間（ただし見かけ上の時間）で「～てもらいたい」は退縮し，「～てほしい」は急速に全国に広がって「～てもらいたい」に取って代わった。（4）の段階で「～てほしい」は東京に入っている。東京で使われ始めたことから，マスメディア，ネットメディア等によりやすくなり，全国で人々の耳目に触れる機会が増えて全国に一気に広まった，と考えられる。

なお，現代の標準語スタイルの話しことばにおける実態の一端を見るために、『日本語話し言葉コーパス』「コア」部分（手作業による精密な形態素分析が施された100万語程度のテキスト。講演370件，収録時間約83時間）における使用状況を検索した。それによると，全体74例のうち，「～てほしい」56例（75.7%），「～てもらいたい」19例（25.7%）であり，ここでも，「～てほしい」が「～てもらいたい」より優位であった。

以上の調査結果を，スタイル，時代，地域に着目して図式化して示すと，次のようになる。網掛け部分が「～てほしい」の分布を表す。「～てほしい」は，明治時代以来，量的にも地理的にも拡大し，現在では「～てもらいたい」に代わって優勢となっている。スタイル，使用地域の両面で，共通語としての地位を確立したと言える。

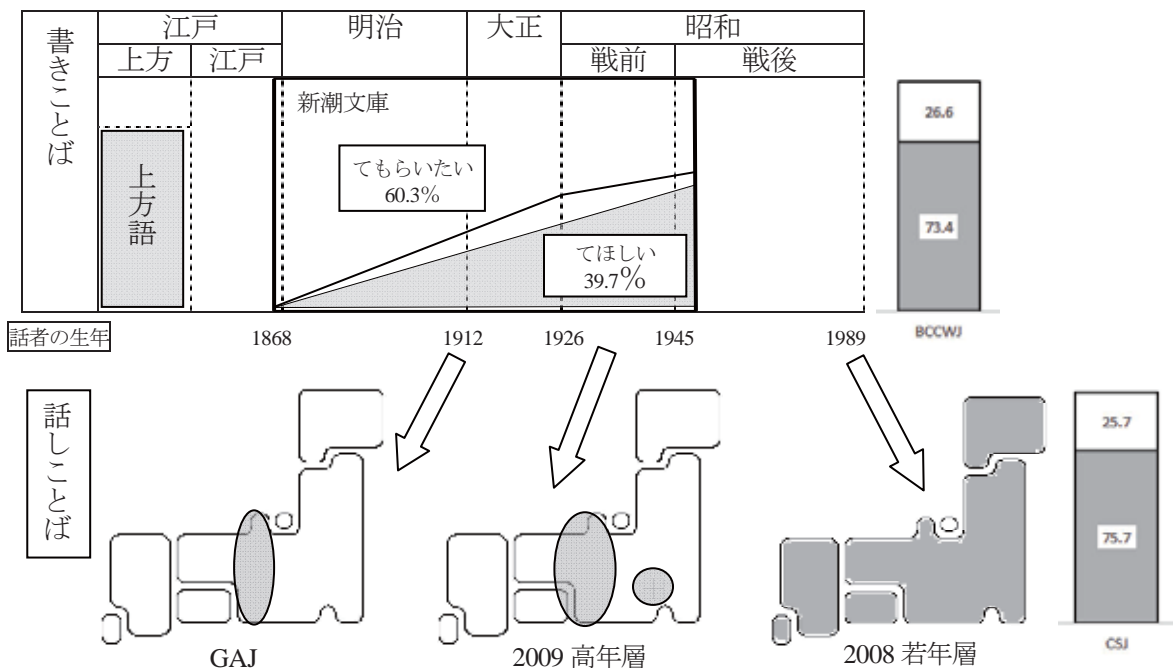


図1 「～てほしい」の分布

3. 「～てほしい」進出の背景をさぐる観点

2節では、「～てほしい」という形式について

- ・ 関西方言を基盤とする。
- ・ 書きことばでは、近現代を通して使用が増加し、昭和の時代に共通語として定着した。
- ・ 話しことばでは、近年、東京から全国に拡大、浸透し、地域差なく使われるようになった。

という、共通語としての普及、定着の事実を提示した。

残された大きな問題は、このような事実があるとして、なぜ「～てもらいたい」という形式があるところへ、新たに「～てほしい」という形式が加わり、拡大していったか、ということである。

これについてここでは、「～てほしい」そのものではなく、その類義表現である「～てもらいたい」の方に、さらにその構成要素である「～てもらおう」という形式の用法に動因を求める方向から考えてみたい。結論を先に述べると、「～てもらいたい」の含意する、「自分が人から恩恵を受けることを希望する」という意味が待遇的ルールに抵触し、特に、「～てもらおう」を待遇表現的に頻用する近畿方言や、近年の東京・首都圏方言では、その違反に敏感になっていて、「～てもらいたい」の使用を回避、それに代わる形式として「～てほしい」を使用するようになった、という仮説を提出する。

「～てほしい」の発生と拡大の過程には、いくつかの局面がある。まず地理的な拡大と文体的な拡大がある。地理的な拡大については、そもそも上方語で「～てほしい」が発生した段階、それが地理的な連続性の中で広がった段階、東京・首都圏でも使われるようになった段階、東京を発信源として全国に拡大した段階の、少なくとも四つの段階が考えられる。このうち、以下で取り上げるのは、地理的な側面のうち、主として、関西で「～てほしい」が先行発生したことで、東京・首都圏で「～てほしい」が使われるようになったことに関連すると思われる部分である。

なお、「～てほしい」の進出と、「～てもらいたい」の退縮の理由については、用例を精査して、現在類義関係として扱っている「～てもらいたい」と「～てほしい」の意味用法の異同を検討することで、何らかの手がかりが得られる可能性がある。この点については、今は大きな課題として捉えておき、別に分析を行うこととしたい。

4. 「～てもらおう」の用法の全国的地域差

「～てもらおう」の待遇表現的使用（実際の恩恵関係を拡張して待遇表現的に使用する用法）が、「～てもらいたい」の退縮と「～てほしい」の普及に関係しているという可能性を検討するために、まず、「～てもらおう」の用法全般の全国的な地域差を概観しておく。

先行研究の指摘と調査結果を統合すると、受納動詞「もらう」の補助動詞形式「～てもらおう」の用法は、次の三点に全国的な地域差があるとまとめられる。

- (1) 琉球方言の多くには「～てもらおう」にあたる補助動詞用法がない。
- (2) 恩恵的な行為を受けることを述べる場合、「～てもらおう」によって受益を明示することにどの程度積極的であるかには方言差がある。(受益明示の積極性)

(3) 実際には恩恵を受ける行為ではないにもかかわらず、待遇表現として語用論的に「～てもらう」を用いる程度には方言差がある。(待遇表現的使用)

(1) は、形式の存在自体に関する地域差である。多くの琉球方言では、授受動詞を用いた「～てやる」「～てくれる」にあたる補助動詞用法はあるのに対し、「もらう」にあたる動詞には補助動詞用法がない(島袋・かりまた 2001, 三井 2002a:70 左)。『方言文法全国地図』第5集 231 図「行ってもらいたい」で、沖縄に無回答の地点が多いのは、このためである。

逆に、琉球以外の本土方言では、「～てもらう」という形式は存在している。(2) と (3) はその中での用法差である。

5. 受益明示の積極性

5. 1. 「～てもらう」による受益明示の積極性とは

(2) として、「恩恵的な行為を受けることを述べる場合、「～てもらう」によって受益を明示することにどの程度積極的であるか」という方言差が挙げられる。これを「受益明示の積極性」としておく。「～てもらう」は、「Aガ Bニ Cテモラウ」という構文をとり、Bが授与動作の動作主、Aが授与動作の受け手で、CはAにとって望ましい事態(Aにとって恩恵性、受益性のある事態)であるという特徴がある。共通語では、Cが望ましい事態であれば必ず「～てもらう」を使うわけではないが、しかし、「～てもらう」を使わないと非常に不自然な場合がある。「～てもらう」と構文的に置き換え可能なのは、受身の助動詞「～(ら)れる」による受動構文である。

5. 2 受益を必ずしも明示しない方言

まず、方言によっては、共通語では「～てもらう」を用いないと不自然であるような、受け手にとって恩恵性のある事態の場合に、受動構文が用いられることがある。次の例は、岩手県江刺市(現 奥州市江刺区)方言の例である(国立国語研究所 1981, 表記と共通語訳を改変)。共通語では「～てもらう」が自然で、受身の助動詞は不自然であると思われる箇所に、受身の助動詞「～(ラ)イル」が現れる。

① イズズノ ドギダッタァ マダ ワラシダガラ ソノコロ オラ マジェライネノス。

(5歳の時だったと思うが、まだ子どもだから、その頃は私は〔仲間に〕入れてもらえないのです。

[? 入れられないのです]) (1912 生 f, p.32)

② チーセ ワラシダズ サギニ ダシ ヤットギヤ カサ ミンナ アズゲンノ。アド
オッキノ ネグナットネ カサ サスノ ネグナンダオネ ワラシチジ イッペダガラ。

ドーロイデ アラ アノヒトサ イレライデゲ ナーンテ(小さい子どもたちを先に出してやるときは、傘をみんな持たせるんだ。そして大きい子どもの〔分が〕なくなるとね、傘さすのなくなるんだよね、子どもたちがたくさんいるから。道路に出て「あれ、あの人に入れてもらって〔? 入れられて〕行け」なあんて) (1912 生 f, p.56)

①は、「子どもの時遊びの仲間に入れたかどうか」という話題である。共通語では「入れてもらえない」と「～てもらう」を用いるのが自然な文脈であるが、この方言では、使役の助動詞(ラ

イル) を用いて「マジェライネ」としている。②は、「雨が降っているが子どもの傘がない」という場面である。共通語では、「入れてもらって」と言うところであろうが、この方言では、やはり使役の助動詞を用いて「イレライデ」としている。このように江刺方言では、「遊びの仲間に入れてもらう」とか、「傘に入れてもらう」といった、動作の受け手がその動作によって恩恵を受ける場合でも、「～てもらう」によって受益性を表現することが必要ではなく、受身の助動詞で表現することが可能である。(ただしこの方言にも「～テモラウ」という形式はあり、受益的な場面での用例もある。三井 2002b)

このような、動作の受け手にとって恩恵性のある事態であっても、必ずしも「～てもらう」によって受益を明示しない方言は、東北方言や九州方言に広く見られる(日高 2007)。

5. 3 受益を積極的に明示する方言

逆に、共通語では「～てもらう」を用いないことが可能な文脈で、積極的に「～てもらう」を使う方言もある。

日高(2007:65-70)は、平井・徳川編(1969)と徳川(1981)に採録された、夏目漱石『坊っちゃん』冒頭部分の各地方言訳を整理して、原文では授受表現が行われていないが授受表現も文脈的に可能な部分について、各地方言での訳出のされ方を検討した。対象とされた箇所のうち、原文では単純な動詞形で表現されている「小使に負ぶさつて帰つて来た時」の下線部について、原文にはない授受表現「～テモラウ」類を用いて訳出しているのは、全国の中で、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫、奈良県、和歌山県の近畿地方とそれに連続的な地域である香川県、高知県であった。具体的な語形は以下のとおり。

オンデモーテ(三重県伊勢市)、オテモオテ(滋賀県大津市)、オオテモロテ(京都市)、セオテモロテ(大阪府堺市)、オタシテモウテ(兵庫県神戸市)、オーテモロテ(奈良県桜井市)、オoppashiteモウテ(和歌山市)、オウテモロテ(香川県丸亀市)、オーテモローテ(高知市)これらは、「～テモラウ」を用いて、自分が恩恵を受ける立場であることを積極的に明示しているものと見ることができる。

以上の傾向をまとめると、「～てもらう」による「受益明示の積極性」に関しては、東北方言や九州方言では「～てもらう」を用いることが少なく、逆に近畿方言は受益の表出に積極的であり、共通語、あるいは、東京・首都圏のことばは中間的である、と位置づけることができる。

6. 待遇表現的使用

6. 1 「～てもらう」の待遇表現的使用とは

次に(3)「実際には恩恵を受ける行為ではないにもかかわらず、待遇表現として語用論的に「～てもらう」を用いる程度には方言差がある」という点について見ていく。これを「待遇表現的使用」としておく。近年、共通語、あるいは、東京・首都圏のことばにも見られる、次のような例がこれにあたる。

③ お荷物持たせてもらいます。(申し出)

④ そこを左に曲がってもらって…(道教え)

⑤ ご住所、書いてもらっていいですか。(指示)

⑥ 本日は、休業させていただきます。(告知)

③のように「(自分が相手のために相手の) 荷物を持つ」、④のように「(相手が相手の行きたいところに行くために) 左に曲がる」ことは、事実としては、話し手が恩恵を受ける行為とは考えにくい(沖 2009)。それにもかかわらず「~てもらおう」を用いて表現するのは、相手の行為によって恩恵を受けているかのように表出することが、一種の待遇表現として機能するためと考えられる。

⑤⑥は、共通語の「問題敬語」として取り上げられることのある表現である。⑤は、「指示」として発話される場合、「住所を書く」ことが話し手の直接の利益となるとは限らないし(「いいですか」という許可求めの対象にも本来ならない)、⑥の場合のような「させていただく」表現(「いただく」は「もらおう」の謙譲語形)が、本来の聞き手の「許しを得て」行う行為への適用から拡大して、ある種の謙譲表現として多用されるようになってきていることについては、多くの議論と論考がある(例えば、菊池 1997、井上 1999)。

6. 2 待遇表現的使用の活発な関西・近畿方言

「~てもらおう」の待遇表現的使用には地域差があり、関西・近畿で盛んであることが、いくつかの調査結果に表れている。

6. 2. 1 『方言文法全国地図』申し出表現「持ちましょう」

図6は、『方言文法全国地図』第6集320図「持ちましょう」(B場面)の略図である。「その荷物は私が持ちましょう」と言うときの下線部の言い方について、「この土地の目上の人にむかってひじょうにていねいに」という場面設定(B場面)でたずねている。図6では、「持たしてもらいます」類の回答のみをピックアップしてプロットした。この言い方が、近畿地方を中心に分布し、その影響の強い中国、四国方面にも広がっていることがわかる。

6. 2. 2 関西科研 道教え談話

陣内(2003)には、7地域(東京、名古屋、大阪、広島、高知、福岡の6都市と、徳島)における、2場面(親しい友人に〈親〉、見知らぬ人に〈疎〉)の、「地図を見ながら駅までの道を説明する談話」が、10~70代の男女、計30名分収められている。この談話の中の「左に曲がる」という指示をする箇所には、次のような例が見られる。

⑦ 大阪・20代・男

- ・1本目の道を一、左に曲がってもらって一。公園がありますんで一。〈疎〉
- ・その前の道、左に曲がって行ったら公園があるから。〈親〉

⑧ 徳島・20代・女

- ・最初の角を左に曲がってもらって一、って、郵便局、右側に郵便局、左には銀行が見えます。〈疎〉
- ・最初の曲がり角を左に曲がって一、って、右に郵便局、左に銀行があるけん、〈親〉

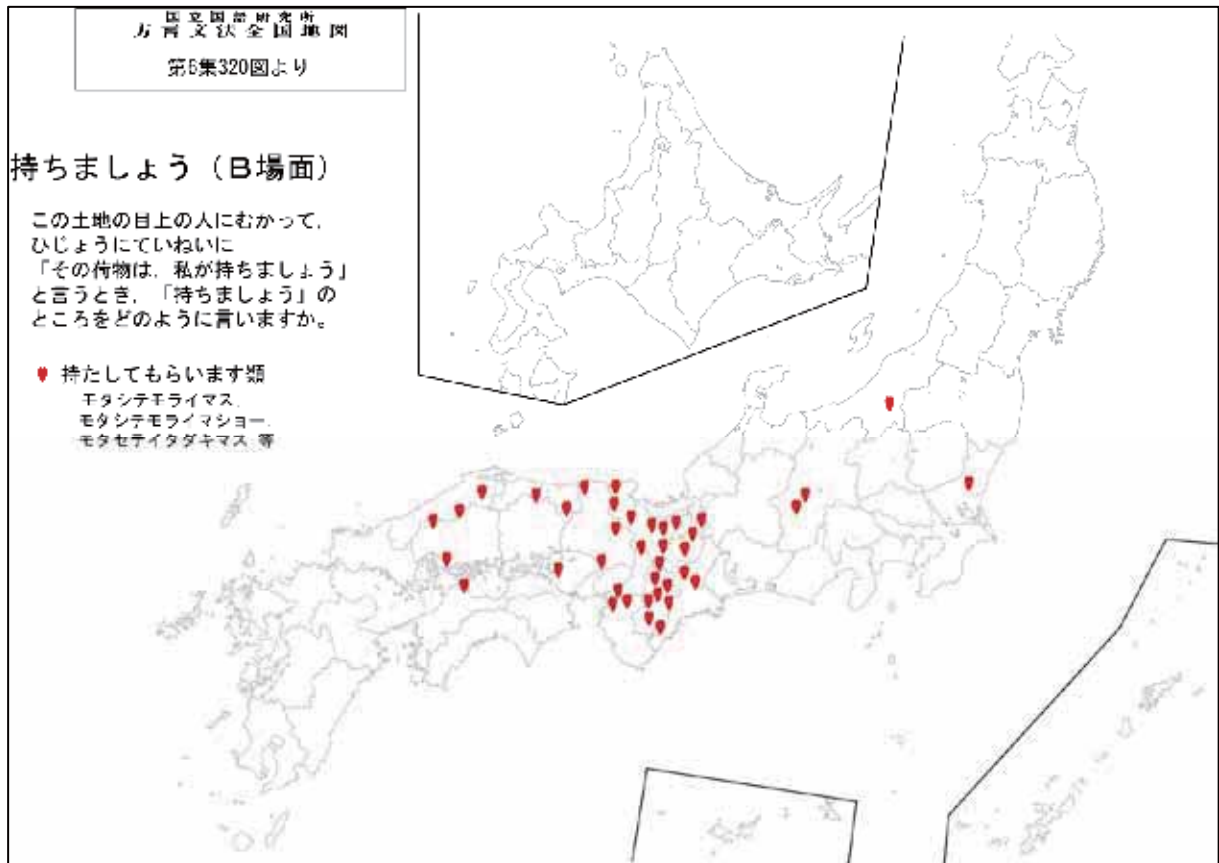


図2 「持たしてもらいます」類の分布

6. 1④で述べたように、ここで、相手が自分の行きたい目的地へ行くために道を左に曲がることは、別段、話し手に恩恵をもたらす行為ではない。それにもかかわらず、「～てもらう」によって恩恵を被る立場にあるかのように表現することで、仮想の恩恵の与え手である聞き手を目上に待遇する効果が生まれていると見ることができる。「～てもらう」を使った表現が、「見知らぬ人」に対する談話に現れ、「親しい友人」に対しては現れないことから、この形式の持つ敬語的効果がうかがわれる。

「～てもらう」に対応する謙譲の敬語形式である「～ていただく」を用いた回答も見られる。

⑨ 大阪・40代・女

- ・左の方に、曲がっていただいたら、右に郵便局、左に銀行の、三叉路があります。〈疎〉
- ・そこを左に曲がったら、郵便局が右手の方で、左手の方に銀行がある、三叉路になってるところがあるやんか。〈親〉

⑩ 広島・40代・男

- ・その郵便局と銀行の間を左にまがっていただいて、それずーとまっすぐいっていただくと 〈疎〉
- ・その銀行と郵便局の間を左に曲がってずっとまっすぐいきよったら、〈親〉

「～ていただく」は、もちろん、「親しい友人」相手の場面には現れないが、かといって、「親しい友人」に対して、その非敬語形式である「～てもらう」が現れるわけではない。このことから

も、「～てもらおう」は、形式としては敬語ではないが、機能としては敬語的な働きを持つと見ることは妥当であると考えられる。

このような「～てもらおう」の待遇表現的使用は、7地域のうち、名古屋、大阪、広島、福岡、徳島に見られる（すべて「見知らぬ人」相手の場面）。東京、高知には見られない。ここからも、関西、および、近畿圏の影響の強い地域で、「～てもらおう」の待遇表現的使用が盛んであることがうかがわれる。

6. 3 東京・首都圏方言の場合

これに対して、東京・首都圏方言、あるいは、共通語では、近年まで「～てもらおう」の待遇表現的使用は活発ではなかったと考えられる。しかし、近年この用法が目立つようになってきており、そのことが、違和感とともに話題として取り上げられることが少なくない。

例えば、よく知られていることであるが、「～ていただく」を含む「させていただく」については、次のような観察がある。

① 北原：「…させていただく」というのは、これはどうなんですか。戦前よりも戦後のほうが、非常に増えているでしょうね。

大石：「…させていただく」の発想は関西ですね。関西の「…させてもらおう」。

奥山：「もらおう」ということばは、関西のことばですね。あれを翻訳して、「いただく」になったわけですね。

大石：ですから、はいったのはいつか知らないですが、戦後東京では盛んに使われるようになったといわれているんじゃないですか。

奥山：「本日休業させていただきます」。これは、私は三代目の江戸っ子なんですけれども、少なくとも戦前は言わなかったことばですね。

戸塚：言わないですね。「本日休業仕り候」。

大石：「…させていただく」がピッタリするような場合も、もちろんありますけれどもね、「…させていただく」とまで言わなくたっていいじゃないか、と思うような言い方がありますね。

（奥山益朗・北原保雄・沢田允茂・戸塚文子・大石初太郎〔司会〕（1973）「座談会：現代敬語の問題と敬語の将来」『敬語講座6：現代の敬語』明治書院，pp.217-243）

事実の確認は別に行うべきであるが、少なくとも語感として、1918（大正7）年東京生まれの奥山氏、1913（大正2）年生東京生まれの戸塚氏が、「戦前は言わなかった」という評価をしている点に着目しておきたい。時期ということで言うと、「してもらっていいですか」という表現が取り立てられるようになったのは、さらに近年のことである（例えば、砂川2005）。

7. 「～てもらおう」の用法の地域差とその変容についてのまとめ

4～6節の概観をもとに、「～てもらおう」の用法の地域差とその変容について概略的に示すと、次の表のようになる。

表 「～てもらう」の用法の地域差と変容

	琉球	東北・九州	東京・首都圏	関西・近畿
(1) 「～てもらう」形式の存否	×	○	○	○
(2) 受益明示の積極性		－	＋	＋＋
(3) 待遇表現的使用		－	－ ⇨ ＋	＋＋

琉球方言は、「もらう」にあたる受納動詞の補助動詞用法を持たない。この形式を持つその他の本土方言の中で、東北方言や九州方言は、「～てもらう」で受益を明示することに積極的ではなく、「～てもらう」を待遇表現的に使用することもない。「～てもらう」の使用自体が不活発である。一方、関西・近畿方言は、「～てもらう」で受益を明示することに積極的であり、待遇表現的使用も極めて活発である。東京・首都圏はその中間で、「～てもらう」で受益を明示することはほぼ義務的だが、待遇表現的な使用は活発ではなかった。しかし近年、待遇表現的使用が目立つようになってきている。

この地域差の状況は、一つには、「かつての中央語圏であった近畿地方とその周辺地域では授受表現の使用度（定着度）が高く、かつての周辺地域であった東日本と九州地方では比較的授受表現の使用度（定着度）が低い」「東京に見られる授受表現は、敬語表現と同様、近畿圏からの表現体系の移入」（日高 2007:70）という、授受体系一般の発達過程を反映したものと見ることができる。一方、発達過程として見た場合、三つの用法は、(1)→(2)→(3)の順で生じたと解釈される。(1)が語形の発生、(2)が字義に忠実な使用の定着であるのに対し、(3)は用法の拡張である。

この用法の拡張が、待遇表現的な使用という方向に生じていること、それが、近畿地方を中心とした地域で先行し、東京・首都圏地域が追随していることは注目される。待遇表現的使用は、恩恵性という意味特徴を含意する授受表現の性質から必然的に発生しうる変化、と捉えることもできるが、それだけでなく、発生・変容の下地として、小林・澤村(2010)が指摘するような「言語的発想法」の地域差を考慮に入れるべきであろう。すなわち、近畿地方を中心とする地域は、「配慮化」（ことばで相手に気遣いを表す）という点で積極的な地域であるとされるが、そのような発想法が、「～てもらう」の待遇表現的使用の発達を促した、という考え方である。

小林・澤村はさらに、「配慮化」他の7種の言語的発想法について、「近畿を中心とした西日本、および関東」はそのような発想法が強く、「東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本」はそのような発想法が弱い、という、大きく対立する二つの地理的類型を提示した上で（小林・澤村 2010a）、前者に「関東」が含まれる点について、都市化という共通の要因を指摘し、歴史的には、「急激な都市化に伴い、「配慮化」という言語的発想法が俄かに意識的になってきた江戸市民が、必要に駆られて上方から取り込んだ」言語的現象が存在することを示唆している（小林・澤村 2010b）。現在、東京・首都圏方言で進行している「～てもらう」の待遇表現的使用の増加は、現代においても、言語的「配慮化」の受容を満たすために（あるいはその要求とマッチするがゆえに）、東京・首都圏の人々が、近畿（関西）方言の表現法を率先して取り入れていることを示すものとも見られ、興味深い。

8. 「～てほしい」の普及の背景としての「～てもらう」の待遇表現的使用

以上を受けて、「～てもらう」の用法、とりわけ、待遇表現的使用の地域差と変化が、「～てもらいたい」の衰退と「～てほしい」の進出・普及に間接的に関与しているのではないか、という仮説を述べる。

「～てもらいたい」は、「自分が人から恩恵を受けることを希望・要求する」という意味を含意し、形式上も明示する。しかしこの「受益を要求する」という言語行動は、内容上、待遇的ルールに反する場合があります。特に、「～てもらう」の待遇表現的使用が盛んであるほど、その違反には敏感であると予想される。そこに、「～てもらいたい」の使用を回避したいという動機が生まれ、代替表現として「～てほしい」が選択され、多用されるようになったと考えてみたい。「～てもらう」の待遇表現的使用が盛んな近畿地方で、「～てほしい」が早く定着し、次いで待遇表現的使用が増えつつある東京・首都圏で、「～てほしい」が受け入れられた、という順序は、この考え方と矛盾しない。

このアイデアが妥当なものであるかどうか、待遇表現体系からの検討をはじめ、具体的な詰めを行っていくことが必要であると思う。本動詞用法の「(プレゼントを) もらいたい」と「(プレゼントが) ほしい」の異同との平行性や、「～てもらう」の有する使役につながる働きかけ性の影響等、文法的意味の面からの考察も必要だろう。

関西方言由来の形式が、共通語に取り入れられるにあたっては、東京・首都圏方言という地域言語の中に、それを受け入れる何らかの素地が備わっているのではないか。ここではそのような観点からの一つの仮説として、提示するものである。

文献

- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』 講談社現代新書。
- 沖裕子 (2009) 「発想と表現の地域差」『月刊言語』38(4), 16-23.
- 菊地康人 (1997) 「変わりゆく「させていただく」」『月刊言語』26(6), 40-47.
- 国立国語研究所 (1981) 『方言談話資料5』 秀英出版 (http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogendanwa_siryo/01/, 2014年1月24日閲覧)
- 国立国語研究所 (2002) 『方言文法全国地図5』 国立印刷局 (http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html, 2014年1月24日閲覧)
- 国立国語研究所 (2006) 『方言文法全国地図6』 国立印刷局 (http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html, 2014年1月24日閲覧)
- 小林隆・澤村美幸 (2010a) 「言語的発想法の地域差と社会的背景」『東北大学文学研究科研究年報』59, 162(71)-127(106).
- 小林隆・澤村美幸 (2010b) 「言語的発想法の地域差と歴史」『国語学研究』49, 73-86.
- 島袋幸子・かりまたしげひさ (2001) 「琉球方言のやりもらい動詞」『月刊言語』30(5), 62-63.
- 新潮社 (1995) 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』, (1997a) 『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』,

- (1997b) 『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』, (2000) 『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版 100 冊』
陣内正敬 (2003) 「関西科研 道教え CD-ROM」 科研費基盤(B) 「コミュニケーションの地域性と
関西方言の影響力についての広域的研究」
砂川有里子 (2005) 「ご住所書いてもらっていいですか」『続弾 問題な日本語』大修館書店, 84-89.
日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』 ひつじ書房.
松本修 (2008) 「東京における「させていただく」」『国文学』 92, 355-367.
三井はるみ (2002a) 「231 図 行ってもらいたい」 国立国語研究所『方言文法全国地図解説 5』 国
立印刷局, 66-74.
三井はるみ (2002b) 「気づかない方言の方言学 一対照方言学的研究の出発点として一」 日本方
言研究会編『21 世紀の方言学』 国書刊行会, 257-267.
三井はるみ (2007) 「要求表現形式「～てほしい」の共通語としての定着」『日本語学』 26(11),
102-110.
三井はるみ (2010) 「方言と共通語のはざままで」『三色旗』 752, 15-21.

【講演】東京・首都圏アクセント研究の課題¹

佐藤 亮一

(国立国語研究所名誉所員)

佐藤亮一です。どうぞよろしくお願ひします。

今日は私が最も関心のある分野のテーマで、しかも非常に新しい先進的な研究が発表されるということですので大変楽しみです。私は、自分が長年続けてきた東京・首都圏アクセントの調査研究の一部を紹介して、今後皆さんにしていだきたい研究の課題についての希望を申し上げたいと思います。

1. 東京アクセントの変化 — 『東京語アクセント資料』 (1985) から

最初に、私どもが多くの研究者の方々のご協力を得て調査し、その結果をまとめた『東京語アクセント資料』(以下『東京ア』)についてお話ししたいと思います。この調査は、1982年から3年間かけて、東京都区内生まれ育ちの21名の方々、若い方からご年配の方まで、山の手と下町、男性と女性があまり偏らないように選んで、約1万2,800の単語を発音していただいた結果を表にしたものです。

この資料を見ると非常に多くの単語に東京アクセントの変化が読み取れます(表1)。例えば「青葉」という単語について見ますと、ア]オバという1型とアオ]バという2型が調査当時発売されていたほとんどの辞典(『新明解国語辞典』『日本語発音アクセント辞典』『明解日本語アクセント辞典』『全国アクセント辞典』)に記載されているわけですが、私どもの調査では2型はまったく出てきません。東京ではアオ]バからア]オバに変化して、その変化がほぼ完了に近づいているということが分かるわけです。また「(電話の)ダイヤル」の場合、すべての辞典に1型と0型が出てきますけれども、1型は私どもの調査ではまったく発音されていません。

また、辞典に載っている型が最高年齢層にだけ出てくる単語もあります(表2)。

例えば「荒物」はすべての辞典に2型が載っていますが、2型は最高年のSさん(1911年生まれ)だけが発音しています。「ライオン」はすべての辞典に1型と0型が記載されていますが、『東京ア』では最高年齢層のSさんとRさん(1920年生まれ)だけが0型と1型の両方を発音しており、他の方々は0型のみです。「荒物」の2型や「ライオン」の1型は東京都区内ではほとんど滅びかけていると言っていい型だと思います。

次に、私どもの調査で年齢差が読み取れるものを示します(表3)。「荒海」の場合、辞典にはアラウ]ミという3型しか載っていませんが、『東京ア』には、0型(平板型)がたくさん出てきます。0型は全年齢層に見られますが、3型は中・高年齢層の方々が発音しています。つまり、

¹ 本稿は、共同研究発表会(2012年7月22日(日)、於: 日本大学文理学部)における講演の録音をもとに原稿化したものである。

「荒海」は3型から0型に変化しつつあると判断されます。

「熊」は、2型のクマ]が1型のク]マに変化しつつあることはかなり知られている話だと思えます。若いアナウンサーはク]マと言わないように注意しているそうです。1型のク]マは、私どもの調査では若年層にしか出てきません。アクセント辞典では1型のク]マは『明解日本語アクセント辞典』だけが「新」という注記を付けて2型と併記しています。

辞典には出ていないアクセント型が『東京ア』では大量に出現する例もあります(表4)。例えば「大病」は、辞典は1型のタ]イビョウだけを載せていますが、私どもが調査では1型のほかに0型が多く発音されています。

以上、多くの単語に見られる東京アクセント変化のごく一部の例を示しました。

私どもが調査した約1万2,800語の単語を全部分析すれば東京アクセントの体系的な変化の流れが浮かび上がってくると思うのですけれども、残念ながら私はまだやっておりません。ただごく一部の200か300の単語について分析した例をお見せします。

表5を見ると、全体的には有核型から無核型に変化するものが多いことが分かります。また、いわゆる平板化が多いことは事実で、例えば4型から0型に変化しているものの例を挙げると、「合札」「網打ち」「家柄」「家元」「生け捕り」「生けにえ」のように、4モーラの和語が多いということが分かります。

表5の1.3に示したように、末尾から3拍目にアクセント核がある型から平板型になっているものの例を挙げると、1型から0型に変化しているものには、「遺訓」「遺跡」「果敢」「華燭」「佳節」「起伏」「御苑」「居城」など、イ+クン、イ+セキ、カ+カンのように1モーラ+2モーラという語構成を持っている3モーラの漢語が多いように見えます。

しかし、すべての単語が平板化しているわけではありません。それほど多くはありませんが、無核型が有核型になっている例も見られます。例えば昔は0型であったものが1型に変化している例としては、「感知」「関知」「個性」「直訴」「上訴」「書道」「私立」「演歌」「伝播」「ラジオ」などがあります。

頭高型化の例としては、2型から1型に変化した例として、「悪意」「彼方(あなた)」「決意」「決議」「国技」「作為」「竹刀(しない)」「支配」などの例があります。

このように『東京ア』のごく一部を分析してみたわけですが、1万2,800の単語全体の分析には手を付けていませんので、どなたかにやっていただきたいと思っております。

見出し	語形	新N明全 明日解國 解Kアア	XY 山下 五二	A 下	B 下	C 下	D 下	E 下	F 下	G 下	H 下	I 下	J 下	K 下	L 下	M 下	N 下	O 下	P 下	q 下	r 下	s 下	t 下	u 下	v 下	w 下	x 下	y 下	z 下
1 青葉	アオバ/ガ	1111	11	111111111111111111	1																								
2 窓	イカル/コトダ	2222	22	222222222222222222	2																								
3 鱧(鮠)	イタチ/オ	0000	00	000000000000000000	0																								
4 一卦	イチザン/オ	0000	00	000000000000000000	0																								
5 炎熱	エンネツ/ニ	0000	00	000000000000000000	0																								
6 置き所	オキドコロ/モ	0000	00	000000000000000000	0																								
7 音曲	オンキョク/ガ	1111	11	111111111111111111	1																								
8 合戦	カツセン/ガ	0000	00	000000000000000000	0																								
9 茶道具	チャドウ/オ	2222	22	222222222222222222	2																								
10 椒歌	テキイ/オ	1111	11	111111111111111111	1																								
11 転転	テンテン/ト	0000	00	000000000000000000	0																								
12 日晷	ニチヤ/オ	1111	11	111111111111111111	1																								
13 後作	アトサタ/ニ	0000	00	000000000000000000	0																								
14 阿呆	アホー/ダ	1212	22	222222222222222222	2																								
15 燈籠	オチド/ガ	2121	11	111111111111111111	1																								
16 駆け引き	カゲヒキ/ガ	2202	22	222222122222222222	2																								
17 空耳	ソラミ/ダ	2220	00	000000000000000000	0																								
18 ダイヤル	ダイヤル/オ	0000	00	000000000000000000	0																								
19 唾	ツバ/オ	2121	11	111111111111111111	1																								
20 手切れ金	テギレキン/オ	3000	00	000000000000000000	0																								
21 土鍋	ドナベ/チ	2000	00	000000000000000000	0																								
22 日時	ニチジ/オ	2121	11	111111111111111111	1																								
23 パーテン	パーテン/オ	1000	00	000000000000000000	0																								
24 ハードル	ハードル/オ	0010	00	000000000000000000	0																								

表1 馬瀬・佐藤 (1989)

見出し	語形	新N明全 明日解國 解Kアア	XY 山下 五二	A 下	B 下	C 下	D 下	E 下	F 下	G 下	H 下	I 下	J 下	K 下	L 下	M 下	N 下	O 下	P 下	q 下	r 下	s 下	t 下	u 下	v 下	w 下	x 下	y 下	z 下
1 売物	アラモノ/オ	2220	00	00003000303003002	0																								
2 買渡	イエキ/ガ	1000	00	000000000000000000	0																								
3 家路	イヅリ/オ	2220	00	000000000000000000	0																								
4 窓外	イガイ/ニ	1010	01	000000000000000000	0																								
5 いきり立ち	イキリタツ/コトダ	2444	44	444444440444444442	4																								
6 賢児	イクジ/ニ	1111	11	111111111111111111	1																								
7 居心地	イゴチ/ガ	0000	00	000000000000000000	0																								
8 着か入る	イタミイル/コトダ	2424	42	44444404444444442	4																								
9 一垂	イチダク/ニ	2022	00	000000000000000000	0																								
10 一級品	イクキウヒン/ダ	0000	00	000000000000000000	0																								
11 楳栗	ウカイ/オ	1100	00	000000000000000000	0																								
12 音信	オンシン/ガ	1111	11	111111111111111111	1																								
13 学位	ガクイ/ガ	1111	11	111111111111111111	1																								
14 壁の子(の横溝)カノコ	カノコ/ノ	2112	11	11001010111111112	1																								
15 果能	タンノウ/ダ	1113	00	000000000000000000	0																								
16 治水	チスイ/ニ	0000	00	000000000000000000	0																								
17 特使	トクシ/オ	0000	00	000000000000000000	0																								
18 ドレス(装)	ドレス/オ	1111	11	111111111111111112	2																								
19 群	ハンケ/ニ	0000	00	000000000000000000	0																								
20 アルバム	アルバム/オ	1000	00	000000000000000000	0																								
21 フライ(野球)	フライ/オ	2000	02	000000000000000000	0																								
22 ライオン(動)	ライオン/ガ	0000	00	000000000000000000	0																								

表2 馬瀬・佐藤 (1989)

- 1 有核型 → 無核型
- 1.1 尾高型 → 平板型
 <4 → 0> (4拍語)
 台札, 網打ち, 家形, 家元, 生け桶り, 中けにえ, 忌み唄, 籠ずく, 海鷲り,
 大杖, 大福, 大待て, 奥書き, 美行き, 片腕, 片言, 金すく, 赤分け, 葉行き,
 き, 幸先(さいさき), しどころ(がまんの〜), 尻馬, 脱込み, 瀬戸際……
 <5 → 0> (5拍語)
 相手方, 男振り, 炬工物, 土用子し……
 <6 → 0> (6拍語)
 お互い様, 算盤ずく, まやかし物……
- 1.2 末尾から2拍目にア核のある型 → 平板型
 <2 → 0> (3拍語)
 忌場所, 浮き名, 回像, 鳴屋, 胡弓, 死相, 死体, 杖体, 姿態, 三權, 白羽……
 <3 → 0> (4拍語)
 向あい, 後ろ手, 零状, 惨たん, 冥杯, 小刀(しょうとう), 杵人, 杉板, 青犬,
 流徳, 谷あい, 口天, 通人, 天笠, 得心, 霧へび……
- 1.3 末尾から3拍目にア核のある型 → 平板型
 <1 → 0> (3拍語)
 運訓, 運鈴, 采歌, 当朝, 佳節, 足駄, 柳扇, 片城, 巨木, 巨万, 云米, 泉律, 下段
 (げだん), 雲衣, 呼号, 湖底, 湖軒, かさ(こびん), 巾着(しじょう), 死人, 書
 状, 静夜, 他面, 多面, 手巻, 星場, バンド(家業), ビアノ, ベルト, ボール……
 <2 → 0> (4拍語)
 合鏡, 惣鏡, 後匣(あとやく), 雨點, アマチュア, 有り体(ありてい), 生き馬,
 生き肝, 一言(いちごん), 扇月, 肉店(かどみせ), 扇口, 切り妻, 岩輪, 黒白(こ
 くびやく), 縮め傘, スエード, スタジオ, スビード, スライド, 呑え状, 半波,
 飛び飛び, 捕り物……
 <3 → 0> (5拍語)
 いわくつき, 表替え, 赤死人, 粗悪品, 弱死体, 拍まり番, プカガリア, ホル
 マリン……
- 1.4 末尾から4拍目にア核のある型 → 平板型
 <1 → 0> (4拍語)
 一草, 怪力(かいりき), 成律, 回願, 貫塚, 林息, 神手, 習語, 邊俗, 言論, 忍又,
- 1.5 高採, 港灣, 財宝, 情熱, 縋合, 大口, ダイヤル, 大老, 当歳, パラ
 ンス, バンスト, ファームスト(野球), フィールド, マウンド……
 <2 → 0> (5拍語)
 紫外線, 市街戦……
 <3 → 0> (6拍語)
 消耗品, 水平線, 赤外線, 立会人……
- 2 無核型 → 有核型
- 2.1 平板型 → 尾高型
 <0 → 1> (2拍語)
 益, 氣, 祝, 粗赤, 幽晴……
 <0 → 1> (3拍語)
 感知, 周知, 問性, 世評, 上評, 善道, 私立, 前秋, 奪取, 重後, 重後, 伝播, ラジオ……
 <0 → 1> (4拍語)
 憲兵, コンパス, シグザグ, 焦点, 新巻, 体育, 農業……
- 2.2 平板型 → 末尾から3拍目にア核のある型
 <0 → 2> (4拍語)
 足寺, 剛力, くちぐち……
 <0 → 3> (5拍語)
 腐藤, 口車, 合成酒, 異服物……
- 3 有核型 → 有核型
- 3.1 尾高型 → 頭高型
 <3 → 1> (3拍語)
 酒旗, 相候, 駿河, 沈漢, 栃木, 本鏡……
- 3.2 末尾から2番目にア核のある型 → 頭高型
 <2 → 1> (3拍語)
 悪態, 後方(かなた), 決意, 快議, 四反, 此方(こなた), 作為, 竹刀, 支配, 脚
 位, 通船, 数集, 三派, 北組……
 <3 → 1> (4拍語)
 一切, おちおち, つやつや, 判筆……
- 3.3 その他
 <4 → 2> (4拍語)
 瓜上げ, 葉袋, 葉き備……
 <3 → 2> (4拍語)

表5 『辞典』と『東京ア』との違いからうかがえるアクセント変化の傾向

2. 東京アクセントの地域差

次に東京アクセントの地域差についてお話しします。皆様ご存じのことと思いますが、昔、小林滋子さん（旧姓。現姓は稲垣さん）が、都区内と多摩地区を調査され、『国語学』にご論文が載っています（小林 1961）。

図1は1985年に刊行された『東京都言語地図』の「雲」の老年層のアクセント分布図ですが、都区内は「ク]モガ」、多摩地区は「クモ]ガ」です。きれいな地域差を示しています。「雲」は類別語彙で第3類ですから、当然2型のクモ]の方が古いわけで、東京は「クモ]ガ」から「ク]モガ」に変化したということが読み取れるわけです。おそらく第5類である虫の「蜘蛛」がク]モであったために、それに引かれて都区内でクモ]→ク]モの変化が起きたのではないかと思います。

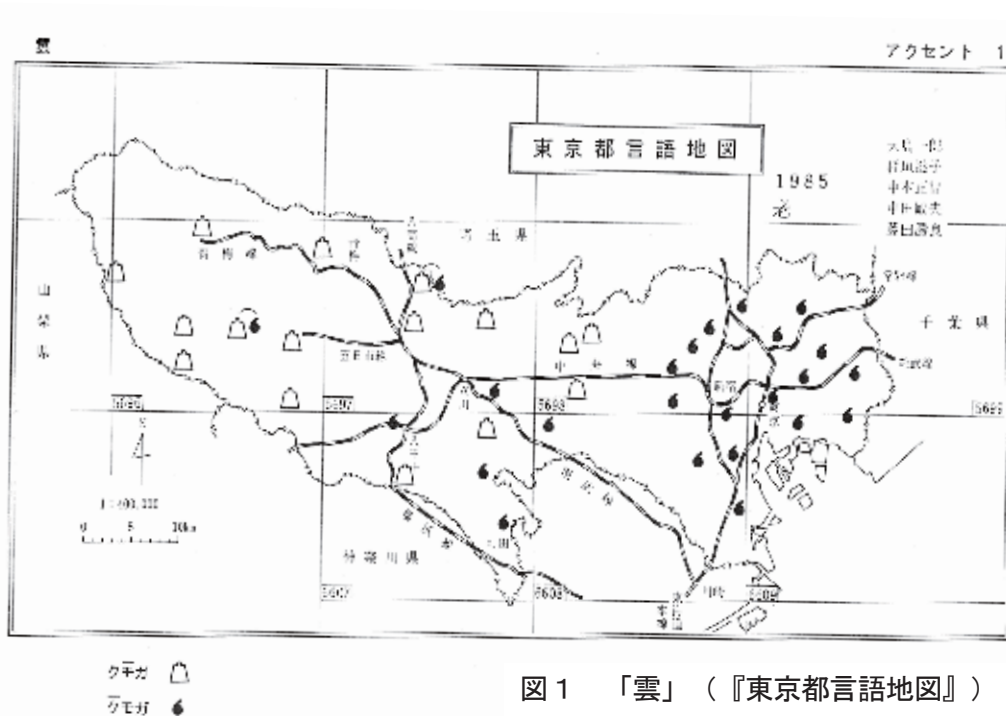


図1 「雲」（『東京都言語地図』）

図2の「朝日」は都区内がア]サヒで、多摩地区はアサ]ヒです。秋永一枝先生編『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂）にもアサ]ヒは古いと書いてありますから、秋永先生も都区内は昔はアサ]ヒであったということをご認識しておられるわけです。

図3の「命」も都区内はイ]ノチが大部分でイノ]チは多摩地区に多いので、おそらく都区内も昔はイノ]チだったと思います。ただし、『新明解日本語アクセント辞典』には、「命」についてイノ]チが古いという注記はありません。

次は有名な「坂」（図は省略）のサカ]とサ]カの地域差です。下町がサ]カと言われていたと思いますが、『東京都言語地図』では多摩地区がすべてサカ]で、都区内はサ]カとサカ]が混在しています。サ]カが下町と読み取れるかははっきりしませんが、「坂」も都区内はかつてはサカ]であ

ったと考えてよいのではないかと考えています。いかがでしょうか。

以上にあげた例のように、都区内と多摩地区で地域差の見られるものは、多摩地区のアクセント型が古いと見るべきではないかと私は思っております。

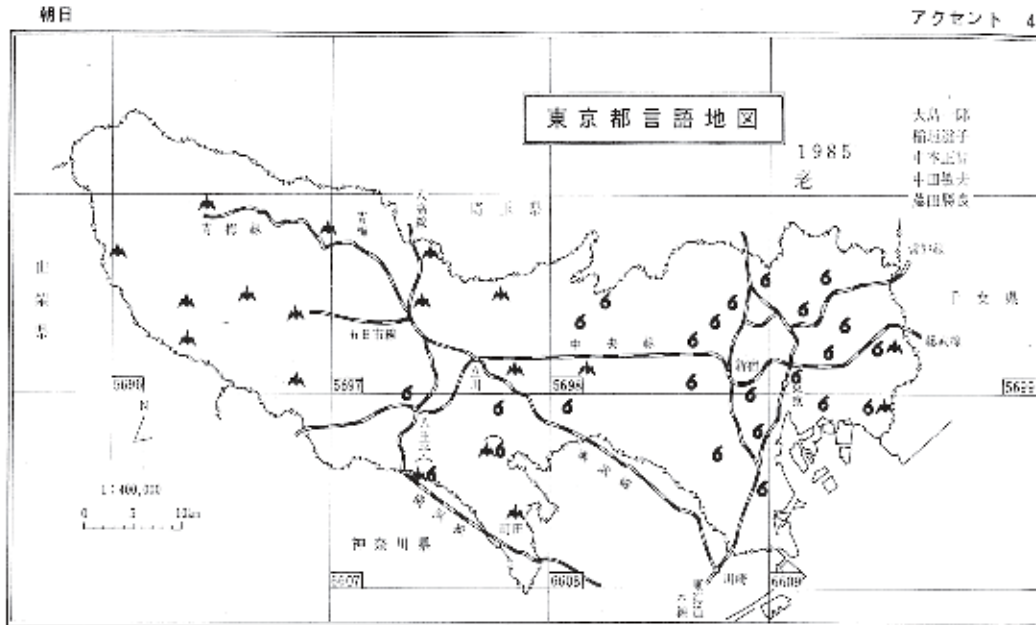


図2 「朝日」 (『東京都言語地図』)

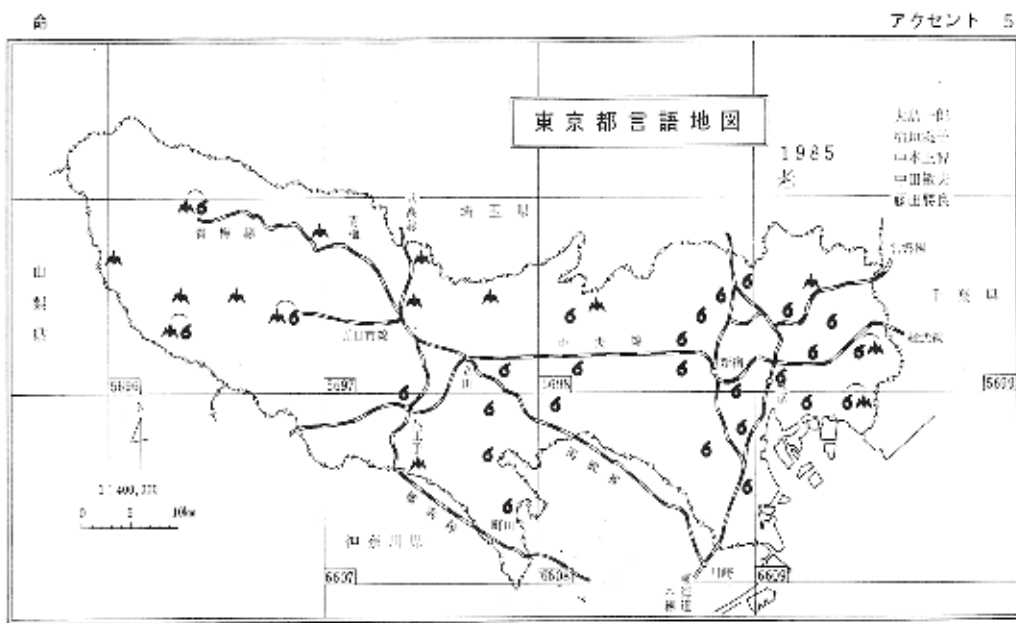


図3 「命」 (『東京都言語地図』)

3. 東京アクセントの地域差と世代差 — 『東京語音声の諸相(3)』 (1993) から

次は東京における「地域差と年齢差」についてお話しします。『東京語音声の諸相』は三井はるみさんや渡辺喜代子さんほかと一緒に調査した結果をまとめた科研費の報告書です。都区内は下町の浅草、多摩地区は五日市町（現あきる野市）で約 200 の単語について、若年層（中学生）、中年層、高年層、それぞれ約 30 名ずつ調査いたしました。

この結果も全体的に見ると、やはり従来言われているように多摩地区に古いアクセントが残っています。例えば「いたち」（図 4）をごらんください。ここに書いてある「日」「神」「寺」は戦前の辞典です。「日」は山田美妙の『日本大辞書』（1892）、「神」は神保格・常深千里『国語発音アクセント辞典』（1932）、「寺」は寺川喜四男・日下三好『標準日本語発音大辞典』（1944）ですが、これらは全部 3 型です。

戦後の辞典はさきほど引用した 4 種の辞典で、「新」は『新明解国語辞典』第 3 版（1981）、「N」は NHK 編『日本語発音アクセント辞典』第 15 刷（1974）、「明」は『明解日本語アクセント辞典』第 2 版（1981）、「全」は『全国アクセント辞典』第 20 版（1979）です。これらの辞典を見ると、戦後の辞典にやっと 0 型が出てきますから、3 型から 0 型への変化ということになりますが、私どもの調査でも都区内はほとんど 0 型になっています。高年層も 0 型が多く、3 型は高年層の 30% くらいしか発音していません。ところが五日市町になると高年層は古い 3 型が 100% です。ですから、五日市町に古いアクセント型が残っていることは明白です。

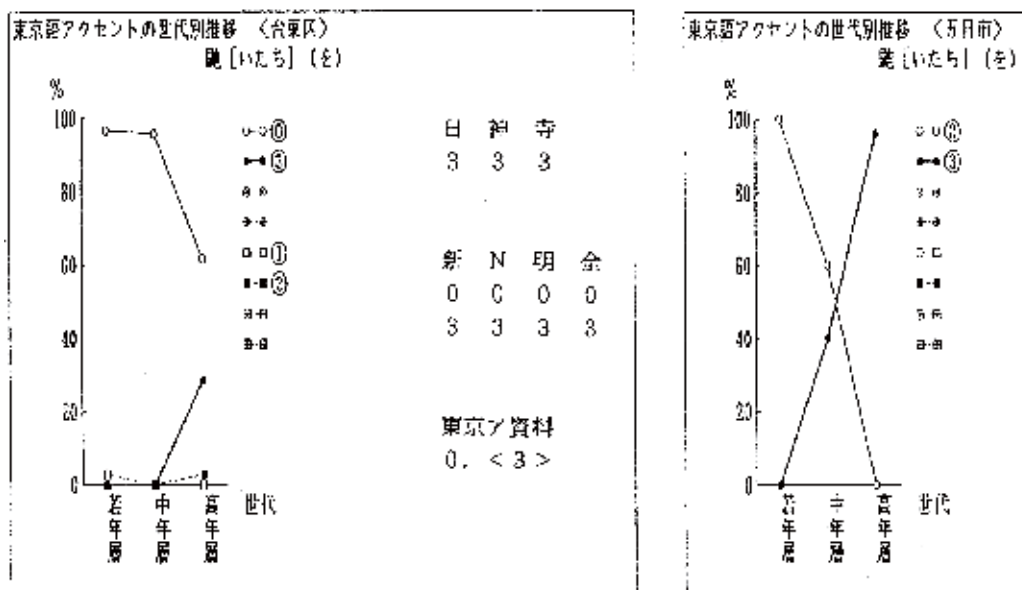


図 4 「いたち」 (佐藤・三井・渡辺1993)

「青葉」（図 5）も同様です。アオ]バという 2 型が古いわけですが、都区内は高年層も含めてほとんど 1 型です。しかし五日市町では、高年層の 70% 近くがアオ]バという 2 型に発音しています。

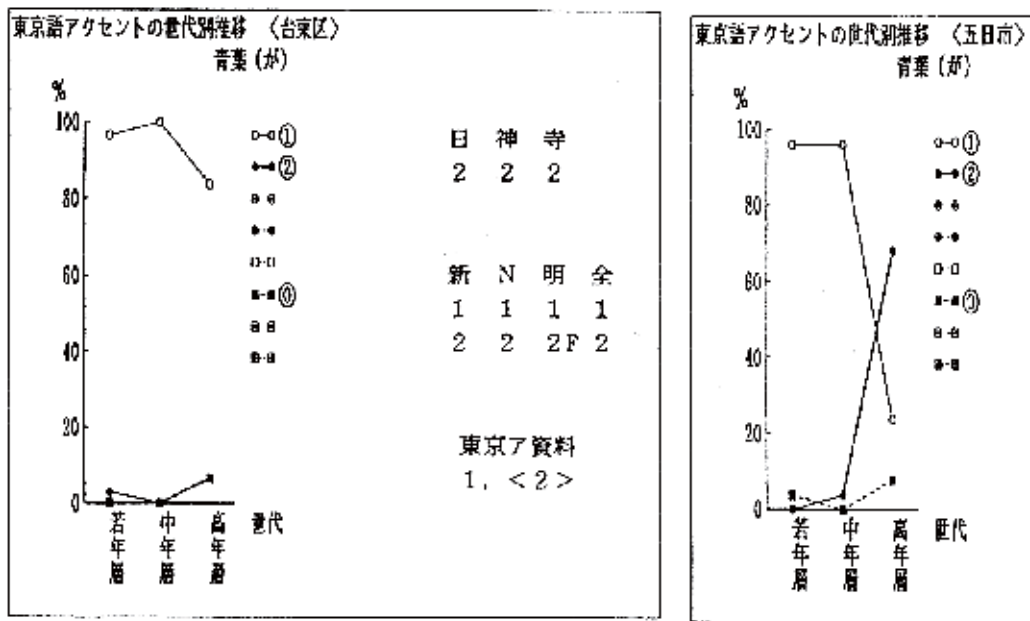


図5 「青葉」 (佐藤・三井・渡辺1993)

「神様」 (図は省略) も都区内では高年層も含めてすべてカ]ミサマという 1 型に変化していますが、五日市町では高年層に 2 型のカ]ミサマが 70% 近く残っています。

このように、全体としては多摩地区に古いアクセントが残っているわけですが、中には例外があります。例えば「ほくろ」 (図6) では、辞典では戦前も戦後もすべて 0 型です。

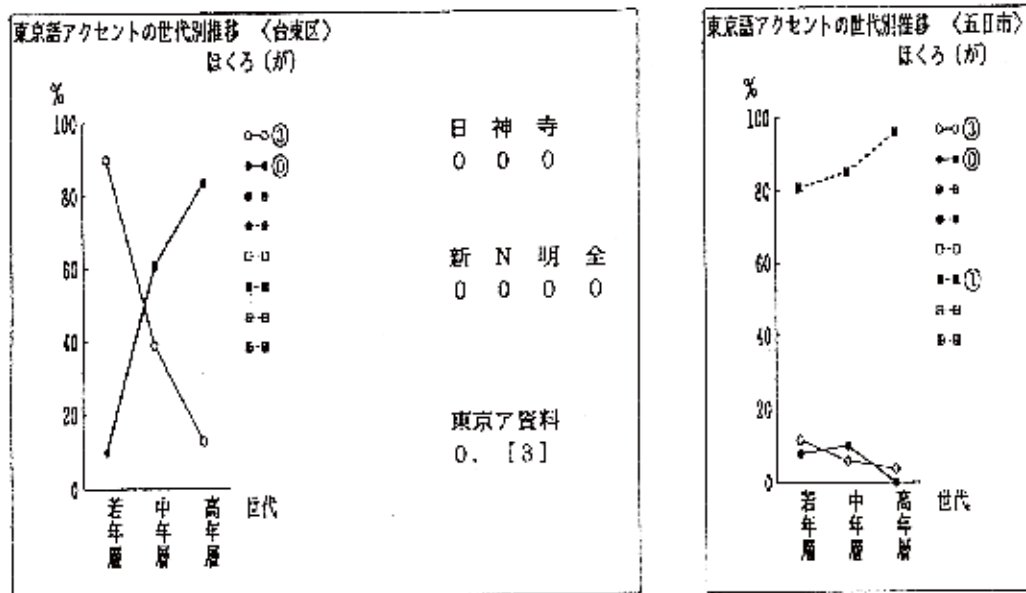


図6 「ほくろ」 (佐藤・三井・渡辺1993)

確かに都区内で高年層は 0 型が大部分ですが、若年層は「ホクロ]ガ」という 3 型に変化しています。ところが五日市町は、東京の古い 0 型も新しい 3 型も、まったくと言っていいほど出てきていません。すべての世代で大部分がホ]クロという 1 型に発音しています。

このような例は多くはありませんが、私どもの調査ではっきり現れたのは「ほくろ」と「柱」です。「柱」（図は省略）も都区内では、0型から3型に変化していますが、五日市町で圧倒的に多いのは2型のハシ]ラです（ただし、五日市町でも若年層は3型に変化しています）。このような多摩地区独特の型は何なのかということが問題です。多摩地区独特の型が東京の古い型であった可能性があるのか、またそのようなアクセント型は関東地方のどの地域に分布しているのかなどは今後の研究課題であると思います。

次にやや特殊な例を紹介したいと思います。

まず、「ハンカチ」（図7）について。五日市町は「ほくろ」のような例外はありますが、若年層（中学生）は東京の若年層と同じアクセント型になっている例が大部分です。「ハンカチ」は、都区内の中年層・若年層の大部分が3型、高年層は0型が約半数です。したがって都区内では0型→3型の変化があったと推定されます。しかし、五日市町では、中学生も含めて全世代の多くが東京の古い型と推定される0型に発音しています。なぜでしょうか。もしかすると中学生のハンカチ自体の使用状況と関係があるのではないかと考えたりしています。

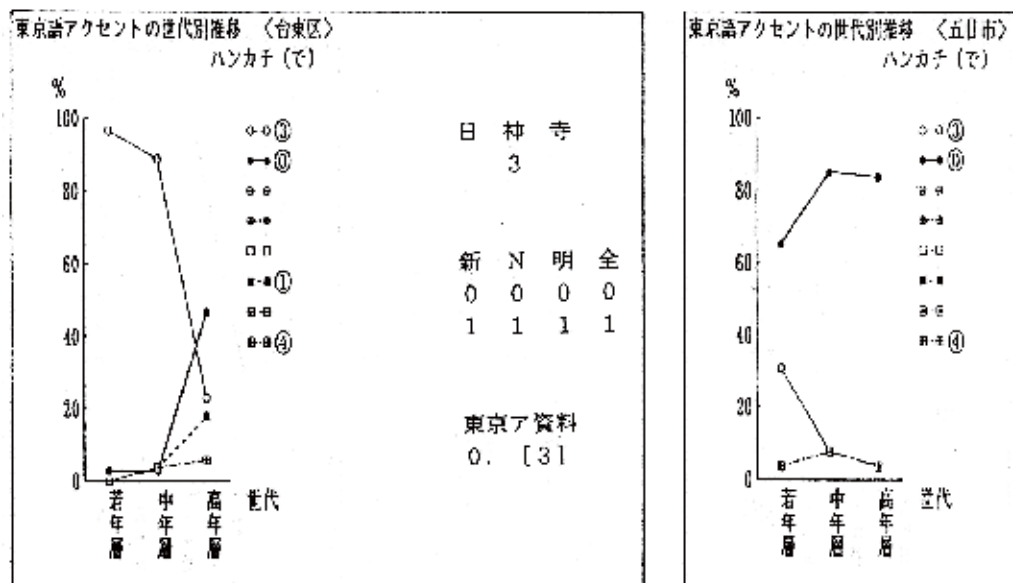


図7 「ハンカチ」（佐藤・三井・渡辺1993）

次は「ライオン」（図は省略）について。「ライオン」は先ほど申し上げたように、ラ]イオンという1型が古いわけです。しかし、都区内では1型はほとんど消滅し、大部分が0型になってしまっています。それでは五日市町に古いラ]イオンが残っているかというところまったく残っていません。都区内と同じ状況です。その理由ですが、私の推定では、五日市町は都区内からかなり遠く、明治・大正時代の人々が動物園に行く機会はほとんどなかったし、テレビもラジオもない時代ですから、五日市町の人たちが「ライオン」という言葉を耳にするようになったとき、つまりラジオ・テレビなどが普及したところには、すでに東京は0型に変化してしまっていたために、五日市町の人たちが古いラ]イオンという1型を耳にする機会はなかったし、そもそも「ライオン」ということば自体を日常生活で発音する機会が少なかったのではないのでしょうか。その点が「神

様」や「青葉」などとの違いなのではないかと思えます。

「頭」(図8)のアクセントも不思議です。五日市町ではすべての世代が100%近くアタマ]ガという3型です。ところが都区内では3型のほかにアタ]マという2型がかなり見られ、しかも年齢差が見られません。ですから将来、若い人がアタ]マという2型に変化しつつあるかという、そうでもありません。しかし、ゆれていることは事実です。辞典では『明解日本語アクセント辞典』だけが3型と2型を併記していますが、そのほかの辞典は戦前も戦後もすべて3型のみです(『明解日本語アクセント辞典』では「地域的にアタ]マ」と注記しています)。ただし都区内では2型よりも3型がやや優勢で、若い世代で3型が増加しつつあるようにも見受けられます。

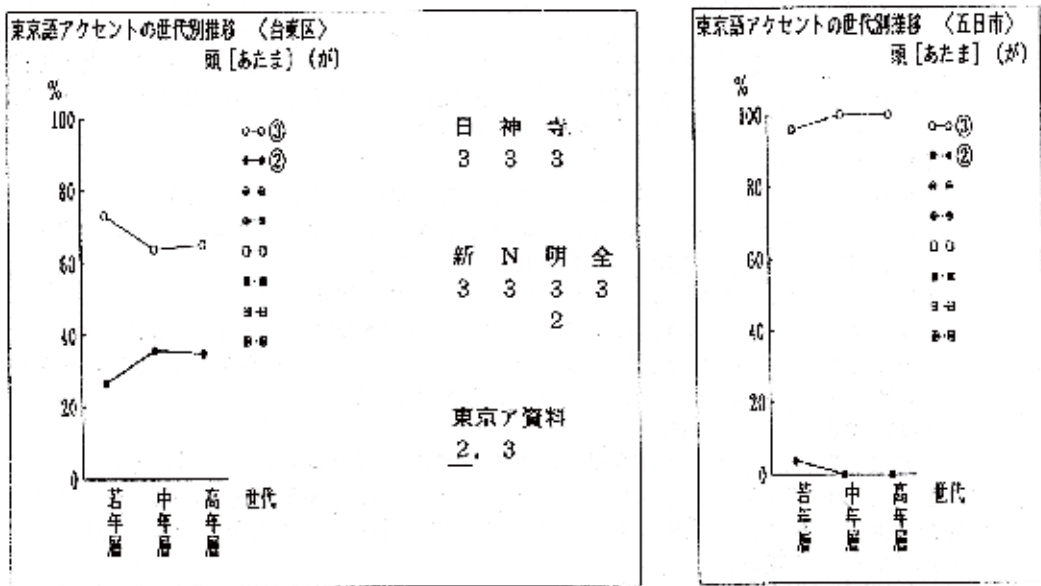


図8 「頭」(佐藤・三井・渡辺1993)

4. 方言アクセントの共通語化（東京アクセント化）

4. 1 名古屋市 1997

次にアクセントの共通語化（東京アクセント化）についてお話しします。

下野雅昭さんが、名古屋のアクセントを『東京語アクセント資料』の単語を使って 1997 年に調査しています。その結果は、大局的に言うと、若い人は東京アクセント化しています。例えば「熊」は年配の方は 100%「クマ]ガ」という 2 型ですけれども、小学生は「ク]マガ」という東京の新しい 1 型に 100%変化しています。

しかし、例外もあります。例えば「つつじ」は、東京ではツツ]ジという 2 型から 0 型（平板型）に変化しつつあります。今では変化が進んで、多く人が 0 型に発音しているかもしれません。

名古屋の場合、高年層は 2 型のツツ]ジが 100%です。それでは小学生が東京の新型である 0 型になっているかということ、そうではありません。0 型はわずか 25%で、小学生の 70%はツツ]ジという 1 型です。中学生は 0 型が 52%で 1 型が 32%です。名古屋では「つつじ」は 2 型→0 型→1 型に変化しつつあるように見えます。実は、関西アクセントが 1 型のツツ]ジなのです。

	項 目	型	小学生	中学生	若年層	中年層	高年層
1	熊（が出た）	0			8	18	
		1	100	96	77	45	
		2		4	23	45	100
2	熊（が出る）	0		4			
		1	100	92	69	36	27
		2		4	46	64	82
3	どんぐり	0			8		
		1	100	92	69	9	
		3		8	15	91	100
		4			8		
4	オアシス	0					9
		1	80	100	92	55	27
		2	15		8	45	64
		3	5				
5	つつじ	0	25	52	15	9	
		1	70	32	15	27	
		2	5	16	69	55	100
		3		4		9	

表 6 名古屋市のアクセント（下野1997）

私は以前調査したことがありますが、名古屋は、年配の方は東京方言の影響、東京の共通語の影響を受けやすく、若い人は関西方言の影響を受けているという結果が出ています。「つつじ」もその例ではないかと思われます。地方のアクセントがすべて東京アクセントに変化しつつあるかということ、必ずしもそうではないわけです。

4. 2 宇都宮市 1984

表 7 は無型アクセント（無アクセント）地域の共通語化について、1984 年に宇都宮市の中学生を調査した結果です。ちょうど『東京語アクセント資料』が出たころに調査したものです。宇都宮市は無型アクセント地域です。

宇都宮市の中学生 31 名を文の読み上げ、文節言い切り、単語読み上げなど、いろいろな調査法で調査しています。表の数字は 10 点満点で、完全な無型アクセントであれば 0 点、完全な共通語アクセントであれば 10 点を与えています。「山が見える」「風が吹く」のような文の読み上げの例を見ると、31 人の中学生は段階的に、0 点、1 点、2 点、3 点、4 点、5 点、6 点、7 点、8 点、9 点、10 点とさまざまです。非常に個人差が大きいわけですね。調査対象者はすべて宇都

宮市生まれで、両親も宇都宮市またはその周辺の無型アクセント地域生まれ育ちです。

このように非常に個人差が大きいということは、当時の宇都宮市の中学生のアクセントは、共通語化の過渡期にあるということになります。

それでは完全な無型アクセント話者がいたかという、表の話者1の中学生は、「文」「文節」

「比較発話」は0点また

はDで完全な無型ですが、単語読み上げの場合は8点で、満点に近い。つまり東京アクセント的に発音しています。一方、話者31の中学生は、文の読み上げは10点で完全な東京アクセントですけれども、「山が」「風が」のような文節言い切り（の読み上げ）の場合にはわずか4点です。話者31の「比較発話」はCランクです。この比較発話というのは、「山が見える」「風が吹く」のように東京で型の対立がある単語（を含む文）を何度も繰り返して発音してもらったものです。何回発音しても完全に東京アクセントであればA、完全な無型アクセントにはDを与えています。この31番はCで、無型アクセントに近い結果です。

ですから、このときの私の結論は、1984年当時の宇都宮市の中学生は、共通語アクセント化しつつある。しかし、完全な無型アクセント話者もいなかったし、完全な共通語アクセント（東京アクセント）話者もいなかったということになります。しかし、それからもう30年近く経過していますから、おそらく今の宇都宮市の中学生はかなり共通語化が進んでいると推定されます。

4. 3 仙台市1983・福井市1982

表8・表9は、宇都宮調査と同じころに仙台市と福井市でおこなった調査です。細かい説明は省略しますが、仙台市の中学生は宇都宮市に比べるとはるかに共通語化率が高いことが分かります。親は大部分が無型アクセントですが、中学生はかなり共通語化しています。実は調査した仙台の中学校は、2割くらいが東京からの転勤族の子供なんです（調査対象者は、すべて仙台市生まれ育ちです）。つまり東京アクセントを持っている子供がクラスの中に2割いるわけです。そこが宇都宮市との違いです。ですから、仙台市の中学生は転勤族である同級生の影響を受けている可能性もあるのではないかと考えています。

話者	読み上げ				比較発話		話者	読み上げ				比較発話	
	文	文節	単語	計	文	文節		文	文節	単語	計	文	文節
1	0	0	8	8	D	D	17	5	2	6	13	A	B
2	0	3	5	8	C	D	18	5	5	6	16	B	C
3	1	3	8	12	D	D	19	5	7	7	19	A	B
4	1	0	2	3	D	D	20	5	9	8	22	C	B
5	1	0	3	4	D	D	21	6	1	3	10	C	D
6	1	0	4	5	D	D	22	6	3	6	15	C	C
7	1	0	5	6	D	D	23	6	7	6	19	C	D
8	1	2	6	9	D	C	24	6	7	9	22	B	C
9	2	0	1	3	B	C	25	6	3	8	17	D	D
10	2	0	0	2	D	C	26	7	5	8	20	B	C
11	3	0	2	5	D	D	27	7	7	8	22	A	B
12	3	1	2	6	D	D	28	7	10	10	27	A	B
13	3	2	2	7	A	C	29	8	3	8	19	B	C
14	3	1	4	8	B	C	30	9	8	7	24	A	B
15	4	1	2	7	B	D	31	10	4	10	24	C	C
16	5	0	6	11	D	D							

表7 宇都宮市のアクセント（中学生）（佐藤1984）

中学生				親			
男		女		男		女	
①	2	①	6	①	7	①	0
②	7	②	9	②	1	②	0
③	8	③	9	③	0	③	0
④	7	④	10	④	1	④	5
⑤	5	⑤	7	⑤	0	⑤	0
⑥	9	⑥	6	⑥	1	⑥	0
⑦	2	⑦	10	⑦	3	⑦	1
⑧	6	⑧	2	⑧	0	⑧	5
⑨	1	⑨	4	⑨	0	⑨	0
⑩	3	⑩	10	⑩	0	⑩	0
⑪	5	⑪	10	⑪	0	⑪	1
⑫	4	⑫	7	⑫	0	⑫	0
⑬	10	⑬	6	⑬	0	⑬	0
⑭	2	⑭	9	⑭	0	⑭	0
⑮	9	⑮	7	⑮	0	⑮	0
⑯	6	⑯	7	⑯	0	⑯	0
⑰	10	⑰	10	⑰	0	⑰	0
⑱	6	⑱	6	⑱	0	⑱	0
⑲	10	⑲	10	⑲	0	⑲	2
⑳	9	㉑	8	㉒	0	㉓	0
㉔	8	㉕	7			㉖	6
㉗	6	㉘	8				
㉙	4	㉚	10				
㉛	5	㉜	9				
㉝	8	㉞	6				
㉟	3	㊱	7				
㊲	10	㊳	10				
㊴	2						
㊵	3						
㊶	9						
平均	6.0	平均	7.8	平均	0.7	平均	1.0

表8 仙台市のアクセント 1983
(中学生とその親)
読ませる調査(短文)の得点(10点満点)

中学生			親			祖父母		
話者	性	得点	話者	性	得点	話者	性	得点
①	m	0	①	m	10	①	f	0
②	m	5	②	m	0	②	f	0
③	m	0	③	f	0	③	f	0
④	m	0	④	m	0	④	m	10
⑤	m	0	⑤	/	/	⑤	/	/
⑥	m	0	⑥	f	0	⑥	/	/
⑦	m	0	⑦	m	0	⑦	f	5
⑧	m	5	⑧	f	0	⑧	f	0
⑨	m	0	⑨	m	0	⑨	/	/
⑩	f	80	⑩	/	/	⑩	f	0
⑪	f	65	⑪	f	5	⑪	m	0
⑫	f	5	⑫	f	0	⑫	f	0
⑬	f	15	⑬	m	0	⑬	m	0
⑭	f	0	⑭	f	10	⑭	f	10
⑮	f	0	⑮	f	0	⑮	m	0
⑯	f	5	⑯	f	5	⑯	/	/
⑰	f	5	⑰	f	0	⑰	m	0
⑱	f	15	⑱	f	0	⑱	f	0
⑲	f	55	⑲	m	0	⑲	f	0
㉑	f	0	㉒	f	0	㉓	f	0
			㉔	f	0	㉕	/	/
			㉖	f	0	㉗	/	/
						㉘	f	0
						㉙	f	15

mは男性、fは女性。なお、話者番号が同一の場合は同一家族であることを示す。/は未調査。

表9 福井市のアクセント 1982
(中学生・その親・その祖父母)
読ませる調査(短文)の得点(100点満点)

ところが同じ無型アクセント地域である福井市の場合は、中学生もほとんどが無型アクセントです(福井市の調査では10点満点ではなく100点満点を与えています。したがって、宇都宮や仙台と比較するためには、表9の数字を10で割る必要があります)。中学生の場合、話者⑩⑪⑲以外はほとんど無型です。つまりこの当時の福井市の中学生は、同じ時期の仙台市や宇都宮市に比べて共通語化していないわけです。

福井市は関西方言圏です。北陸方言は西日本方言圏であって、現在でも関西との交流が盛んで

す。就職なども関西圏への就職率が高い。そのこともあって東京アクセントの影響を受けにくいのではないかというのが私の考えです。それでは関西アクセント化しているかということ、そうでもありません。テレビでは東京アクセントが耳に入ってくるわけです。福井市自体は現在は無型ですが、その周辺には三国式、大野式、今庄式など、体系の大きく異なるアクセントが分布しています。福井市の中学生はさまざまな体系のアクセントと接触するために、なかなか無型アクセントから抜け出せないのではないのでしょうか。

馬瀬良雄先生は、アクセントが東京アクセント化する世代はテレビが普及した以後であるという見事な調査結果を発表していらっしゃいますけれども（馬瀬 1981）、必ずしもテレビの影響だけとは限らないということがこれで分かるわけですね。やはり周囲の環境との関係があるということが分かると思います。

仙台市の中学生は 1998 年と 1999 年にも調査しました（佐藤 2000）。表 8 に示した調査から 15 年経過しています。このときの中学生はほとんど完全と言っていいほど共通語アクセントを示していました。単語別にみても大部分は東京の若い人と同じです。例えば「2 次会」は、東京で昔はニジ]カイ、今の若い人は平板（0 型）です。私も昔はニジ]カイと言っていました。学生と付き合っているうちに、最近は平板型で発音するようになりました。仙台の若年層は全員 0 型です。

しかし例外もあります。「熊」の場合、東京の若年層はク]マという 1 型ですが、仙台では若年層も中年層も 1 型は少なく、大部分は東京の伝統的型である 2 型です。つまり古い型で発音しているわけですね。ですから単語によっては共通語化が遅れるものもある。その理由は今後の課題です。

4. 4 気仙沼市 2006

表 10 は宮城県の気仙沼市で、2006 年に 3 拍名詞のアクセントについて、高年層、中年層、若年層、高校生を調査した結果のうち、高校生の調査結果です。表の右側に「方」と書いてあるのが伝統的方言アクセント型、つまり気仙沼の高年層の大部分が発音している型で、「共」というのは現在の東京アクセントです。「共」は『新明解国語辞典』第 6 版に記載されているアクセントです。この辞典は東京の新しいアクセント型も載せています。数字はパーセントで、点線の左側は「桜 咲いた」のように助詞を付けない文を発音したときのアクセント、点線の右側は「桜が咲いた」のように助詞を付けた文を発音したときのアクセントです（東北方言は格助詞の「が」や「を」は使用しないので、助詞の「が」や「を」を付けた文を発音すると共通語アクセントが出やすいことが分かっています）。太字の数字は、それぞれの単語について、最も多く発音されたアクセント型の割合です。

表を見ると、方言アクセントと共通語アクセントの型が異なる場合、共通語アクセント型の出現率が方言アクセント型の出現率よりも高い単語が多いことが分かります（「朝日」「姿」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「葉」「鯨」「便り」「後ろ」など）。

しかし例外もあります。「頭」は、先に述べたように東京はアタマ] (3型) とアタ]マ (2型) にゆれています。しかし、高校生は方言アクセントと同じ3型が大部分です。「団扇」は、東京はウチ]ワという2型ですが。気仙沼の高校生は2型をほとんど発音していません。伝統的方言アクセントの3型を半分残し、半分は別の方向、0型に変化しています。

以上、いろいろな地域を見てきましたけれども、すべての単語が共通語化するわけではないということが分かるわけです。

5. 関東地方のアクセントと東京アクセントとの関係

最後に東京女子大学の私のゼミの学生が群馬県前橋市の高年層調査し、『東京ア』と比較した結果を紹介します(中村2002)。『東京ア』から1,263語を選び、大正時代に前橋市で生まれ育った方3人を調査しています。

その結果、181語は東京の古い型と一致している。これは当然ではありますが、『東京ア』を見ると、例えば「しぐさ」は東京では3型から0型に、「誓い」は2型から0型に、「御輿」は1型から0型に、「八重歯」は0型から1型に変化しています。しかし前橋のお年寄り、すべて東京の古い型で発音しています。このような例は非常に多く見られます。

「阿呆」(1→2)「細工」(3→0)「座禅」(2→0)「大豆・離婚・列車」(1→0)「ラジオ」(0→1)「コンパス」(0→1)「ニコチン」(2→0)「バクテリア」(3→0)などのように、漢語や外来語も東京の古い型(矢印の左側の型)で発音しています。

さらに興味深いのは、東京アクセントには昔も今も見られない前橋独特の型が110語(調査語

	0型	1型	2型	3型	共	方				
桜	90	100	0	0	10	0	0	0	0	
煙	95	100	0	0	5	0	0	0	0	
頭	10	0	0	0	5	0	85	100	23	3
鏡	15	5	0	0	10	5	75	90	3	3
刀	25	10	0	0	0	0	75	90	23	3
仏	40	60	0	0	0	0	60	40	03	3
男	20	5	0	0	0	0	80	95	3	3
団扇	50	50	0	0	5	5	45	45	2	3
鉄	5	5	0	0	25	10	70	85	3	3
朝日	0	0	50	90	50	10	0	0	1	2
胡瓜	0	10	0	35	100	55	0	0	1	2
心	40	15	0	0	0	0	60	65	23	3
姿	0	10	50	80	50	5	0	5	1	3
涙	0	10	35	84	60	0	5	5	1	3
枕	20	15	25	50	25	10	30	25	1	3
袖	50	75	0	0	5	0	45	25	0	3
柱	30	25	0	0	5	0	65	75	03	3
紅葉	0	0	50	95	45	5	5	0	1	2
兎	80	95	0	0	15	0	5	5	0	2
狐	63	95	5	0	32	0	0	5	0	2
雀	60	89	0	0	30	0	10	11	0	2
背中	70	95	0	0	30	5	0	0	0	2
鼠	70	90	0	5	30	5	0	0	0	2
蚯蚓	75	95	0	5	25	0	0	0	0	2
葉	70	80	0	20	20	0	10	0	10	2
鯨	50	85	0	5	45	5	5	5	0	2
便り	70	95	0	5	20	0	10	0	0	2
後ろ	10	15	40	75	40	5	10	5	1	2
卵	10	0	0	0	86	100	5	0	02	2

表10 気仙沼のアクセント2006年調査

(高年層22名・中年層16名・若年層14名・少年層(高校生)20名)

全体の8.7%)認められたことです。例えば「欠伸」「瓦」「牧場(まきば)」「学費」「花瓶」は、東京は昔も今も0型ですが、前橋の高年層は3人とも1型です。「蛙」「紅葉」「反吐」「法螺」などの0型も東京では昔も今も存在しない型です。

「中学校」は東京ではチュウガ]ツコウという3型ですが、前橋は古いも若きもチュ]ウガツコウだそうです。神奈川県もそうだという今日のご発表がありました²、前橋独特の型の多くは、現在の前橋の若い人もお年寄りと同じ、東京アクセントとは違う型で発音しているそうです。

このような前橋独特のアクセント型は何なのか、この中には東京でも昔使っていたアクセント型があるのではないかなど、関東地方のアクセント分布と東京アクセントとの関係については、今後の研究課題であると思っています³。

東京アクセントには見られない規則性が前橋アクセントに認められるケースもあります。東京は「1月」「2月」「4月」「6月」「7月」「8月」は、「イチガツ]になる」「ニガツ]になる」のように、「ツ」にアクセント核があるマイナス1型ですが、「3月」「5月」「9月」は1型で例外です。しかし、前橋では、イチ]ガツ、ニ]ガツ、シ]ガツ、ゴ]ガツ、ロク]ガツ、ジュウイチ]ガツ、ジュウニ]ガツのように、すべて「ガ」の前が下がるマイナス3型だそうです。

ただ私の観察では、最近東京で、ニ]ガツとかシ]ガツと言っている若い人が増えているように思います。そうであれば、月名のアクセントは、東京でも前橋と同じような規則的な方向に変化しつつあるということになるわけです。

6. 東京・首都圏アクセント研究の今後の課題

以上、東京のアクセントや東京アクセントと地方アクセントとの関係について、私どもの調査結果を中心にお話をしました。その結果を踏まえて、私が今後皆さんにやっていただきたいと思っている東京・首都圏アクセントの研究課題を述べたいと思います。

(1) 東京アクセントの変化の方向の体系的把握

この点に関しては三つの希望を申し述べます。

一つは『東京語アクセント資料』に記載されている1万2,800語が、どういう方向に変化しているかということの徹底的な分析です。今日はごく一部の単語について分析した結果をお見せしましたが、これをこのプロジェクトでやっていただけるとありがたいと思っています。『東京ア』は最近エクセルに入力して公開されましたので⁴、パソコンを使った統計的な分析が可能ではないでしょうか。

二つめは形容詞・動詞の活用形の変化の動向です。『東京ア』は動詞・形容詞は終止形と連体

² 坂本薫「神奈川県小田原市方言のアクセント」。本報告書第2部に「小田原市方言のアクセントの古相について」として所収。

³ 中村(2002)の末尾には次の「注記」がある。「『中学校』は1型を前橋市独特の型としたが、この1型は『明解日本語アクセント辞典』(第2版)に「古いアクセント型」として3型とともに記載されている。(中略)この「中学校」の1型も前橋アクセントの古態性を示す例と言えよう」

⁴ 「首都圏言語」プロジェクトポータルサイト(http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/4_summary.html)で公開。本報告書第3部「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」成果公開サイト紹介(三井はるみ)参照。

形しか調査していません。他の活用形についてもぜひ調査・研究を進めていただきたいと思います。形容詞については最近、今日のご発表を含めて三樹陽介さんほかいろいろな方が研究しているようですが、動詞・形容詞の活用形の変化に関してはさらに体系的な変化の方向を把握する必要があると思います。

三つめは現在の東京の若年層のアクセントの調査です。『東京ア』の最若年話者は1962年生まれですから、現在50歳になっています。1982年の私どもの調査から30年経過した現在の東京アクセントの実態を知りたいものです。『東京ア』の1万2,800語全部とは言いませんが、20歳台だけではなく、現在の小・中学生のアクセントを調査すると、その後の変化の状況が見えてくるのではないかと思います。

(2) 東京アクセントが大きく変化した時期の推定

東京アクセントが変化した時期について、私は『東京ア』を大ざっぱに見て、関東大震災を境にして変化している単語が多いということを描いたことがあります。しかしこれはかなり主観的・直感的な判断であり、客観的な分析をしているわけではありません。ぜひ統計学的手法を使って分析していただきたいと思います。

さらに調査語を200語とか300語に絞って、都区内の各世代500人程度を調査すれば、東京アクセントが大きく変化した時期が浮かび上がってくるのではないかと思います。

(3) 東京アクセントの古層の把握

今日の話でも触れましたが、東京多摩地域や埼玉県秩父地方、また群馬県・山梨県、さらに千葉県・神奈川県も加えるべきかもしれませんが、東京周辺地域で高年層を調査することによって、東京アクセントの古層とどう関係があるかということが浮かび上がってくると思います。秩父地方については、篠木れい子さんや新井小枝子さんと一緒に調査した資料もあります(佐藤・篠木・新井・篠崎1998)。多摩地域については、あきる野市よりもっと奥の青梅市や檜原村付近などを調査する必要があると思います。

(4) 東京アクセントの全国各地への影響

最後に、いわゆる共通語化、東京アクセントの全国各地への影響ですけれども、先ほど申しましたように、すべての単語が共通語化の方向へ向かっているわけではありません。全国各地の有型アクセント地域での調査と全国各地の無型アクセント地域での世代別調査が必要です。無型アクセント地域については、私は宇都宮市・仙台市・福井市で調査しましたが、四国の愛媛県宇和町周辺や九州の宮崎県などはどうなっているのか。宇和町については、私の国立国語研究所在職中に調査したことがあります。宮崎県などは研究資料があるのかどうか知りませんが、もう少し多くの無アクセント地域で調査してみるべきだろうと思っています。福井市と仙台市が大きく違うように、西日本と東日本では共通語化の程度にかなりの差があることが予想されます。

最後に、今日のご発表⁵にもありますけれども、曖昧アクセント地域の調査です。私は最近、気仙沼市や宮城県北部、仙台から気仙沼にかけての宮城県北部はいわゆる曖昧アクセント地域ですが、この地域を多人数調査した結果、不思議なことに高年層が無型アクセント的で、中年層がより有型アクセント的という結果が出ました。これは常識に反するわけです。つまり、従来は有型から無型に変化しつつある過渡期が曖昧アクセントというのが通説ですから、高年層ほど無型アクセント的というのはこれまでの常識に反するわけです。山口幸洋さんが主張されているように、通説とは逆に、曖昧アクセントは無型アクセントが有型アクセントを獲得しつつある途上にあるという説に合うような結果が、私の調査からうかがえます。ただし、そう断定していいかどうかはいろいろな問題がありまして、今後の検証にお任せしたいと思っていますところです。

質疑応答

司会（三井はるみ） どうもありがとうございました。具体的な調査のデータを示していただきながら、今後の研究へのご提案もいただきました。それではご質問をどうぞ。

上野善道（国立国語研究所） さっき「朝日」と「命」の例があったんですけど、たぶん複合の違いですね。「朝日」というのは「青葉」と同じパターンなので、「命」の方がおそらく先に変化している。

佐藤 複合のパターンが違うんですね。

上野 ええ。つまり「命」は、もうこれは単純語ですよ。だけど「朝日」は「青葉」と同じタイプで、アサ]ヒはわりと古くまで残っていた。それがあの差になって出ているんだろうと思います。

佐藤 ああ、そうか。ただ、あの分布パターンから見て、イノ]チがやはり東京で古いという推定はどうなのでしょう。

上野 おそらくそれはそうだと思います、私は。

佐藤 おっしゃったのは、分布の状況が違うことがそれと関係してくると？

田中ゆかり はい。それは金田一先生の論文に、命類も古くは2型であった、関東型アクセントとして書かれていますし。それから秋永先生もそのことを書かれているし、大橋先生の調査でも出ているし、私の調査でも出ているから、これはもう確実にたぶん古いんです。

上野 むしろおかしいのは、東京だけが変化を遂げていたんですね。

佐藤 そうですね、そういうことですね。

田中 ツ]ツジ、名古屋の1型の話なんですけど、これはたぶんツツ]ジというのが、「ツ」が無声化して2型になっているのがもともとの東京アクセントで、無声化が弱化して1型が出るというのは東京の中心部でも出ていますし、神奈川県でもたくさん出ているから、名古屋で1型がたくさん出ているのは……

⁵ 亀田裕見「埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調 一久喜市高年層に見られるゆれ一」。本報告書第2部に「埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調 一久喜市高年層に見られるゆれとその解釈一」として所収。

佐藤 関西アクセントの影響ばかりとは言いにくいであろうと。

田中 そう、神奈川から連続的に静岡でツ]ツジが出ているので、アクセントシフトしないものだからシフトするというふうに分いたら2型だけれども、シフトしないと聞いたら1型だから、その点のところは反映されている可能性の方が。

佐藤 東京でもツ]ツジは出るんですか。

田中 出ています。新しい型としてかなり出ていて、神奈川でも大量に出ているので……

佐藤 ああ、じゃあ、無声化の影響も考えるべきであろうと。

田中 はい、それも、考えるべきだろうと。神奈川県から静岡県にかけて無声化が弱化する傾向が徐々に強くなるというご論文が日野資純先生にもあるし、秋永先生は無声化の弱化に加えてアクセントシフトも生じない傾向が強まると指摘されています。自分もやっぱり神奈川とか静岡とかは、無声化が弱化してシフトしない型が多くあらわれるので、東京も含めてその結果ツ]ツジがあらわれている、という方の可能性が高いかな、と思っています。

佐藤 なるほど。必ずしも納得したわけではありませんが、今後検討したいと思います。

上野 基本的に2型というのが嫌われていて、1型になるか0型になるかという、その2つのパターンに大きく分かれていく。

佐藤 そういことですかね。

上野 他の方言を見ていると、そういうのは結構ありそうですね。

佐藤 2型が嫌われる。

田中 佐藤先生がいくつか「地域型」とおっしゃっていたものが、金田一先生が関東アクセントとおっしゃっているものとかかなり重なっていて、やはり古態を示すものが多いと思うんですけども、やっぱりそれでは説明がつかないものとかがイレギュラーで出てくる。それはやっぱり首都圏の中のあちこちにちらほら出てきているので、もともと辞書とかで記録されている、あるいは古態として記録されているものが安定的にその型だったのかといったようなこと自体疑う必要があると思っています。

現在においても安定的にある型に収斂しているのかということ、やっぱり学生たちを調査してみてもちらほらと違うものがあるから、安定的にある型に収斂しているものと、いくつかのものにばらばらと何か……

佐藤 「頭」みたいなものね。

田中 はい。あるんじゃないのかなというのが何か実感。

佐藤 そうなんでしょうね。

田中 それが何の違いなのかはちょっとよく分からないけれども。でも何かそういう、「莓」とか「欠伸」とか「ほくろ」とか「後ろ」というタイプのものがあって、何かこう、ちらほらと頭高みたいなものが出たりしているんですよね。

佐藤 それもある程度人数を調査することによって、変化しているのかゆれているのかというのが分かるわけですね。

田中 はい。常に何かばらばらの状態で移行してきているのか、どこかに収斂する途中なのかみたいなことは、おそらくさつき先生が最後におっしゃった中心部の多人数調査みたいなこと

をやるとはっきりしてくるんじゃないかなと。

佐藤 まあ、なじみ度とか、いろいろな問題が出てきますよね。

田中 はい。

司会 今話題になったイ]チゴというアクセントとか、最後に取り上げられたイチ]ガツ、ニ]ガツ、シ]ガツという月の名前のアクセントですけれども、これはこのプロジェクトでちょっと首都圏の大学生のアクセントを調べたものがありまして、そうしますと、ニ]ガツはもう使う人の方が圧倒的に多いです。

佐藤 そうですよ。かなり上の方、中年層くらいまで言っているということですね。

司会 大学生だと 8 割出たと思います。イ]チゴについては、そんなに使用者は多くないんですけれども、もともと群馬や新潟では使われていたものだと思うんですけれども、埼玉や東京の北部くらいまでは、聞くことがある、という割合が高いんですね。それより南になると、聞かない、になるので、やっぱり何かの接触が生じていて、東京のものが周辺に波及するという以外に、周辺から接触で取り入れられるという方向も、田中さんは首都圏西部について指摘していらっしゃるけれども、あるのかなと考えています。

田中 助数詞付きのものは、助数詞の直前のところで下がる、みたいな単純な規則に結構収斂しているっぽいところはある。このことは、いろいろな人がいろいろな調査データで言ったりしているので、やっぱり何か簡単なルールの方に向かっていっているんだろう、みたいな感じがありますね。

司会 簡単ルールになるときも、それから中高が解消していくのも、何か一語一語伝播みたいな形で変わっていくのか、やっぱりルールのようなものが何かある時点で受け入れられるのかということも知りたいなと思っています。

すみません、まだご質問があるかもしれないですけど、最後にもう少し時間が取れるかと思しますので。どうもありがとうございました。（拍手）

引用文献

秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂。

小林滋子（1961）「三多摩方言アクセントの推移」『国語学』46, 27-41.

佐藤亮一（1983）「福井市、および、その周辺地域のアクセント—調査法と型の区別の現れ方との関連を中心に」『国語学研究』23, 86-68.

佐藤亮一（1984）「無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化—宇都宮市における小調査の結果から—」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 第2巻』明治書院, 211-234.

佐藤亮一（1988）「福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差, 個人差, 調査法による差」国立国語研究所報告 93『方言研究法の探索』三省堂, 123-219.

佐藤亮一（1990）「現代東京語のアクセント年齢差および辞典との差を中心に」佐藤喜代治編『国語論究 2 文字・音韻の研究』明治書院, 204-239.

- 佐藤亮一・三井はるみ・渡辺喜代子（1993）「東京アクセントの地域差と世代差—下町および五日市町—」佐藤亮一編『東京語音声の諸相(3)』文部省重点領域研究「日本語音声」A1 班研究成果報告書, 125-172.
- 佐藤亮一・篠木れい子・新井小枝子・篠崎晃一（1998）『東京周辺地域におけるアクセントの古態性に関する調査研究』科学研究費補助金（基盤研究(C2)）研究成果報告書.
- 佐藤亮一（2000）「アクセント」『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室, 20-27.
- 佐藤亮一（2011）「アクセント」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室, 20-38.
- 佐藤亮一（2013）「方言アクセントの個人差 —宮城県気仙沼市のアクセントについて—」『玉藻』47, 99-113.
- 柴田武監修, 馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料 上・下』文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集.
- 下野雅昭（1997）「名古屋のアクセントの推移と東京アクセント化 —「日本語音声」東京放送班の資料と対比して」『金城学院大学論集 国文学編』39, 167-180.
- 東京都教育委員会（1986）『東京都言語地図』東京都情報連絡室情報公開部都民情報課.
- 中村善枝（2002）「群馬県前橋市のアクセント —東京語アクセントとの関係に着目して—」『東京女子大学 言語文化研究』11, 127-138.
- 馬瀬良雄（1981）「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125, 1-19
- 馬瀬良雄・佐藤亮一（1989）「東京語アクセントの多様性」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』明治書院, 206-232.

小田原市方言アクセントの古相について

坂本 薫

(國學院大學大学院文学研究科文学専攻日本語学コース博士課程後期 1 年)

1. はじめに

小田原市は神奈川県西部、相模湾沿岸に位置する人口 19 万の市である。神奈川県の方言は西関東方言に属し、日野資純 (1965) の分類によると神奈川県南部方言にあたる。東京に隣接するという地理的環境から、共通語 (東京方言) に近いと思われるが、小田原市を含む神奈川県南部方言の先行研究は少なく、特にアクセントに関する分野はこれまでの研究は十分ではない。

本稿では、小田原市方言のアクセント体系と、古相の保持という実態を述べる。

2. 本稿で用いる表記について

音声の表記には基本的にカタカナを用いる。アクセントについては高い拍をゴシック体、低い拍を明朝体で表記した。音韻論的解釈は / / で囲み、拍を ○ で、アクセントの「下がり目」を] で示した。母音が無声化している拍についてはひらがなで示した。

3. 調査について

本稿では平成 24 年 5 月～平成 24 年 12 月と平成 25 年 6 月～7 月に、いずれも神奈川県小田原市で行った調査の結果について述べる。

3. 1 調査方法

調査は、調査票の読み上げの方式で行った。名詞は、項目語単独の読み上げのうち、それぞれの語に助詞 (が、に、を等) をつけた短文を作ってもらった。なお、後続する助詞・助動詞については一部の名詞を抜粋して確認のための調査を行った。動詞と形容詞については、言い切りの終止形のほかに、活用例を示しそれに倣い活用をしてもらい、必要があれば短文を作ってもらった。

3. 2 話者

老年層話者として以下の話者の発音を調査した。本稿では昭和 3 年生まれの女性の話者の発音について主に述べる。また、比較対象として、昭和 63 年生まれの男性の発音の調査結果も用いる。

1922 (大正 11) 年、小田原市本町生まれ。女性。自営業。外住歴 30～32 歳鹿児島県。

1928 (昭和 3) 年、小田原市水之尾生まれ。女性。無職。外住歴なし。

1939 (昭和 14) 年、小田原市本町生まれ。女性。自営業。外住歴なし。

1988 (昭和 63) 年、小田原市小八幡生まれ。男性。学生。外住歴なし

3. 3 調査語例

語例は主に平山輝男 (1957) 所収の「類別語彙表」に掲載の語を中心に、秋永一枝

(1981)、馬瀬良雄・佐藤亮一(1989)、佐藤亮一(1990)アクセントの変化やかつて存在した発音に関して言及のある語を加えた。また、本稿では尾高型のアクセントで発音される語を特に扱うため、平山輝男(1940)所収の「東京アクセント語例」で尾高下型に分類されている語例も加えた。調査後数は約1800。

4. 小田原市方言のアクセント体系

共通語のアクセントと同様、「下がり目」の有無、そしてその位置が弁別の特徴であり、その対立はn拍の語に対してn+1種ある(表1)。以下、動詞・名詞・形容詞のアクセントについてそれぞれ述べる。

表1: 小田原市方言のアクセント体系

拍	音韻論的解釈	語例
1	/○/	蚊、名
	/○]/	世、矢、絵
2	/○○/	飴、人、行く、着る
	/○○]/	石、足、昼、
	/○]○/	雲、跡、秋、鯉、会う、来る、良い
3	/○○○/	田舎、桜、畑、油、兎、鯨、上がる、運ぶ、遠い
	/○○○]/	夕べ、力、男、とさか
	/○○]○/	五つ、乙女、余る、生きる、熱い
	/○]○○/	緑、二十歳、嵐、命、狸、蚕、青葉、帰る
4	/○○○○/	合い鍵、従う、悲しい
	/○○○○]/	朔日
	/○○○○]○/	玉葱、悲しむ、集める、うつむく、尊い、詳しい
	/○○]○○/	朝顔
	/○]○○○/	音楽
5	/○○○○○/	相手方、酔っ払う
	/○○○○○]/	消防署
	/○○○○○]○/	寝ずの番、思い立つ
	/○○○○]○○/	縁の下
	/○○]○○○/	相撲取り
	/○]○○○○/	カーニバル

4. 1 名詞

4. 1. 1 一拍名詞

音韻論的解釈で/○/と表記される「下がり目」のない平板型と/○]/の起伏型の2つのアクセントの型がある。

平板型 音韻論的解釈/○/

(例) ナ(名) ナオ ナス(名を成す)

語例: 柄(え)、蚊、毛、子、血、戸、帆、実、身【第1類】

名、葉、日(一日)、日(太陽)、藻【第2類】

起伏型 音韻論的解釈 /○J/

(例) ナ (菜) ナオ ツム (菜を摘む)

語例：世【第1類】 矢【第2類】 絵、尾、木、酢、田、手、菜、荷、
根、野、火、穂、芽、目、湯、夜、輪【第3類】 巢、粉

4. 1. 2 二拍名詞

/○○/と表記される平板型と、/○○J/の尾高型、/○J○/の頭高型の3つのアクセントの型がある。平板型と尾高型の例で示したように、1拍目と2拍目の間に「下がり目」のない語は、例のように1拍目よりも2拍目の方が高いピッチで発音される。

平板型 音韻論的解釈 /○○/

(例) アメ (飴) アメオ ナメル (飴をなめる)

語例：飴、蟻、烏賊、牛、梅、枝、海老、顔、柿、風、金(かね)、壁、釜、雉、傷、桐、霧、釘、口、首、腰、酒、笹、里、皿、杉、鈴、裾、底、滝、竹、塵、爪、虎、鳥、庭、布、箱、端(はし)、鼻、羽、髭、膝、水、道【第1類】飽き、灰汁(あく)、上、魚(うお)、黄身、小手、これ、沢(尾高型も)、鋤、杉、虹、蔦、蕘、人、峰、元、槍

尾高型 音韻論的解釈 /○○J/

(例) イワ (岩) イワニ ノボル (岩に上る)

語例：石、岩、歌、音、紙、川、北、旅、寺、梨、夏、橋、旗、肘、冬、町、胸、村、雪【第2類】足、網、泡、家、池、犬、色、腕、馬、裏、鬼、鍵、髪、瓶、岸、草、櫛、靴、倉、栗、事、竿、坂、塩、炭、月、土、波、縄、糠、蚤、花、骨、山、綿【第3類】顎(あご)、麻、痣、仇(あだ)、明日(あす)、畦(あぜ)、穴、綾、毬(いが)、一、芋、飢え、蛆、腕、垣、熊、弦、昼など

頭高型 音韻論的解釈 /○J○/

(例) アメ (雨) アメガ フル (雨が降る)

語例：斧、神、雲【第3類】跡、粟、息、糸、稲、今、白、海、瓜、奥、帯、笠、糟、数、肩、鎌、絹、錐、屑、空、種、箸、針、松、麦【第4類】秋、汗、雨、鮎、桶、陰、蜘蛛、声、猿、露、鶴、春、鮒、窓、婿、夜【第5類】益、老い、鯉、琴、稚児、香具師(やし)、唾(つば)、友、母、文(ふみ)、美濃、見目、酔い

4. 1. 3 三拍名詞

平板型と、尾高型、中高型、頭高型の四つの型の対立がある。

平板型 音韻論的解釈 /○○○/

(例) アクビ (欠伸) アクビオ スル

語例：筏、田舎、鯛、飾り、霞、形、鯉、着物、鎖、轡(くつわ)、車、煙、仔牛、氷、小山、衣、魚、姑、印、使い、机、隣、膠、寝言、初め、鼻血、庇、額、羊、瞳、南、都、昔、鎧【第1類】間、桜、翼、釣瓶、蜥蜴、扉、百足【第2類】・黄金、小麦、岬(頭高も)・【第3類】馳、瓦、拳、畑【第4類】・油

(中高も)、簾(すだれ)、襷(尾高も)【第5類】・兎、鰻、狐、雀、背中、鼠、裸、雲雀、誠、操、蚯蚓(みみず)【第6類】・後ろ、鯨、薬、盥【第7類】秋蚕、家路、生き餌、泉、五日、居場所、いわく、鶉飼い、浮名、うろこ、しこ名、大豆、茶釜、円ら、手合い、手負い、手斧、豆腐(尾高型も)、土蔵、土鍋、七日、版木、蹄、三日…

尾高型 音韻論的解釈 /○○○]/

(例) アズキ(小豆) アズキオ ニル

語例: 錨【第1類】・小豆、二つ、二人、夕べ【第2類】・力【第3類】

頭(あたま)、戦、恨み、扇、男、面、女、鏡、仇(かたき)、刀、暦、宝、袴、鉢、林、東、光、響き、袋、仏、筵【第4類】合間、明日、汗疹、頭、泡(あぶく)、余り、歩み、裕(あわせ)、足蹴、痛み、折り、軒、動き、唸り、うねり、恨み、絵描き、落ち目、男、覚え、表、泳ぎ、女、帰り、限り、鮑(かんな)、節句、雑煮、たらこ、俵、鼓、唾(つばき)、紬、剣、とさか、とぐろ、囃子、鞆(ふいご)、もやし…

中高型 音韻論的解釈 /○○]○/

(例) ココロ(心) ココロガ アル

語例: 五つ、思い、境【第4類】朝日、油、心、柱【第5類】阿呆、覚え(尾高も)、乙女、垣根、掛け値、頭(カシラ)、狂い、栄螺(頭高も)、硯、備え、つつじ、堤、涙(頭高も)、柱(尾高も)、控え(尾高も)、迷い、報い、眼鏡(平板・頭高も)、求め、別れ(尾高も)、山葵(頭高も)

頭高型 音韻論的解釈 /○]○○/

(例) エクボ(鰐) エクボガ デキル

語例: 鰐、緑【第Ⅱ類】・鮑、栄螺、二十歳、岬(平板も)【第3類】嵐、紅葉、蕨(わらび)【第4類】命、鱈、胡瓜、石榴、姿、涙、錦、枕、眼【第5類】鳥、高さ、狸【第6類】・蚕、兜、便り、椿、病【第7類】青葉、梓、在りか、育児、演歌、落ち度、女形、快癒、学位、渦中、鹿の子、眼科、苦難、古式、賜杯、酒乱、巣箱、高み、ちょうちょ、手引き…

4. 1. 4 四拍名詞

平板型と、尾高型、語の四拍目の前に「下がり目」のある中二高型、三拍目の前に「下がり目」のある中一高型、そして頭高型の四つの型の対立がある。

平板型 音韻論的解釈 /○○○○○/

(例) アジツケ(味付け) アジツケガ コイ(味付けが濃い)

語例: 合鍵、秋茄子、悪名、味付け、後釜、後作、後厄、雨脚、網打ち、網元、飴玉、誤り、荒行、家柄、生き馬、生け捕り、生贄、居心地、一群、一芸、一言、一存、居所、忌み明け、岩陰、伺い、浮雲、受け入れ、受け持ち、後ろ手、薄絹、薄切り、疑い、腕づく、海鳴り、梅干し、裏付け、疫病、炎熱、大味、大入り、大受け、大口、大馬鹿、大幅、大持て、大本、奥書、奥付、奥行、行い、叔父さん、面差し、親元、音曲(オンギョク)、音信、顔出し、顔向け、掛け金、塊…

尾高型 音韻論的解釈 /○○○○○]/

(例) アシドメ(足止め) アシドメオ クー(足止めを食う)

語例： あくる日、集まり、誤り、一月（いちがつ）、一日（いちにち）、一刻、一冊、一隻、一匹、妹、襟元、弟、書き方、金貸し、金持ち、鎌倉、紙入れ、気の毒、食べ物、草臥れ（くたびれ）、九日、断り、酒飲み、塩漬け、塩焼き、正月、尻込み、贅沢、造作、一日（ついたらち）、道楽、戸袋、長生き、長持、縫い物、能書き、半年、昼過ぎ、綻び、骨折り、水入れ、水差し、耳鳴り、餅つき、物置、物差し、物知り、欲張り、喜び、六月、我儘、綿入れ…

中二高型 音韻論的解釈 /○○○]○/

(例) **アマガサ** (雨傘) **アマガサオ** サス (雨傘を差す)

語例： 雨傘、荒海、打ち水、大雨、大声、柿の木、杉の木、蒸籠（せいろう）、先生、竹箸、玉葱、冬瓜、年ごと、泣き声、箸置き、鼻水、花婿、半ドア、表情、豆粒、油菜、猪、付き合い、連れ合い、頬杖…

中一高型 音韻論的解釈 /○○]○○/

(例) **アサガオ** (朝顔) **アサガオガ** **サク** (朝顔が咲く)

語例： 汗ふき、尼寺、編み物、雨降り、稲刈り、渦巻き、卯の花、襟巻き、折り紙、駆け引き、国々、市役所、凧揚げ、近道、茶道具、綴じ糸、二次会、練り物、春風、人々、紫、持ち味、物事、山鳥、山吹…

頭高型 音韻論的解釈 /○]○○○○/

(例) **カミサマ** (神様) **カミサマニ** **イノル** (神様に祈る)

語例： 一切、いんちき、エプロン、オアシス、おちおち、音楽、各国、神様、眼中、館長、艦長、蝙蝠（こうもり）、椎茸、素人、シロップ、相続、大病、蛋白、たんぼぼ、忠孝、ちょうちょう、直後、勅使、討論、どんぐり、年内、氷点…

4. 1. 5 母音の無声化による「下がり目」の移動

起伏型で発音される語で、「きカラオチル」（木から落ちる）のように母音の無声化が生じる音環境（無声子音の間に狭母音[i]や[u]が挟まれる）のもと発音する場合、き**カラ** **オチル**のようにアクセントの「下がり目」が移動する場合がある。ただし、無声化が起きる全ての場で「下がり目」が移動するわけではなく、無声化しているにもかかわらず「下がり目」が移動しないケースも多く観察された。どのような場合で「下がり目」の移動が生じるかは今後の課題とする。

(例) **キガ** → き**カラ** **オチル** (木から落ちる)

トキガ → ト**きト** **バーイニ** **ヨル** (時と場合による)

4. 1. 6 長音・撥音を含む語

2拍目が長音・撥音で、直後に「下がり目」の無い語は、1拍目から高い。ただし、京阪式のアクセントに見られるような高起式のアクセントとは異なり、特に2拍目が撥音の場合は1拍目と2拍目の間にわずかな上昇がある場合もある。

(例) **ノー** (能) **ノーオ** **ミル** (能を見る)

ネン (念) **ネンオ** **オス** (念を押す)

尾高型で発音された語で、2拍目が撥音の語は観察されなかった。「モノ」（物・者）の2拍目の「ノ」が撥音化した「モン」は頭高型で発音される。

(例) **モノガ** (者) → **ワタシワ** **コーユ** **モンデス** (私はこういう者です)

また、長音の後に「下がり目」がある語例は、「カワ」（川）をややぞんざいに発

音したときの「カー」のような語中の[w]が脱落した語例でのみ観察された。これは本来の「川」の尾高型のアクセントが保たれているものと思われる。

(例) カワ[kawa]ガ → カー[ka:]ガ ナガレル

長音・撥音の前に「下がり目」がある語は他の語のアクセントと同様高低の差がある。

(例) ゾー (象) ゾーガ イル (像がいる)

語例：A (エー)、紀伊 (地名)、地位、十

アン (案) アンオダス (案を出す)

語例：運、縁、缶、銀、パン、ピン...

4. 2 動詞

4. 2. 1 二拍動詞

平板型と起伏型の型の対立がある。

平板型 (例) イク (行く)

語例：産む、売る、追う、置く、押す、貸す、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、吸う、空く、散る、継ぐ、積む、突く、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、拭く、減る、巻く、増す、揉む、止む、遣る、言う、割る【第1類 A】着る、する、煮る、寝る【第1類 B】

起伏型 (例) アウ (会う)

語例：刈る、添う、【第1類 A】

会う、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、食う、蹴る、漕ぐ、刺す、住む、剃る、立つ、取る、縫う、脱ぐ、練る、飲む、這う、吐く、吹く、降る、干す、掘る、蒔く、待つ、漏る、読む【第2類 A】来る、出る、見る【第2類 B】

表2：二拍五段動詞の活用形のアクセント

型	語例	終止・連体	未然・意向	連用・音便	假定・命令
起伏	置く	オク オクソーダ オクラシー オクトキガ オクコトガ オクノガ オクホーガ オクベーカ	オカナイ オカナカッタ オカセル オカレル オコー	オキタイ オキマス オキニユク オキソーダ オイタ オイテ	オケバ オケ

平板	書く	かく かくソーダ カクラシー かくトキガ かくコトガ カクノガ かくホーガ カクペーカ	カカナイ カカナカッタ カカセル カカレル カコー	かきタイ カキマス カキニユク かきソーダ カイタ カイテ	カケバ カケ
----	----	--	---------------------------------------	--	-----------

4. 2. 2 三拍動詞

平板型と起伏型（中高型・頭高型）の型の対立がある。

平板型（例）アソブ（遊ぶ）

語例：上がる、当たる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる、嫌う、削る、探す、探る、沈む、慕う、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、ゆずる【第1類A】・明ける、植える、借りる、枯れる、消える、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える、与える、重ねる、並べる、始める【第1類B】運ぶ、違う【第2類A】叱る、噓せる

中高型（例）アルク（歩く）

語例：余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、起こす、落とす、思う、乾く、崩す、砕く、曇る、縛る、叩く、頼む、作る、包む、詰まる、照らす、懐く、悩む、習う、憎む、濁る、ひがむ、光る、許す、隠す【第2類A】生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる【第2類B】怒る、襲う、竦（すく）む、辿る、噤（つぐ）む、名指す、

頭高型（例）カエル（帰る） 入る【第2類A】通る

表3：三拍五段動詞の活用形のアクセント

型	語例	終止・連体	未然・意向	連用・音便	假定・命令
平板	遊ぶ	アソブ アソブソーダ アソブラシー アソブトキガ アソブコトガ アソブノガ アソブホーガ アソブペーカ	アソバナイ アソバナカッタ アソバセル アソバレル アソポー	アソビタイ アソビマス アソビニユク アソビソーダ アソンダ アソンデ	アソベバ アソベ

中高	動く	ウゴク ウゴくソーダ ウゴクラシー ウゴくトキガ ウゴくコトガ ウゴクノガ ウゴくホーガ ウゴクベーカ	ウゴカナイ ウゴカナカッタ ウゴカセル ウゴカレル ウゴコー	ウゴキタイ ウゴキマス ウゴキニユク ウゴキソーダ ウゴイタ ウゴイテ	ウゴケバ ウゴケ
頭高	帰る	カエル カエルソーダ カエルラシー カエルトキガ カエルコトガ カエルノガ カエルホーガ カエルベーカ	カエラナイ (カエンナイ) カエラナカッタ (カエンナカッタ) カエラセル カエラレル カエロー	カエリタイ カエリマス カエリニユク カエリソーダ カエッタ カエッテ	カエレバ カエレ

4. 2. 3 四拍動詞

平板型と起伏型（中高型）の対立がある。特に若年層で起伏型への統合が進んでいるが老年層では対立が保たれている語が多い。

平板型（例）シタガウ（従う）

語例：窺う、疑う、従う、養う【第1類A】・与える、重ねる、並べる、始める【第1類B】、編み出す、打ち抜く、掲げる、切り込む、動じる、取り持つ、封ずる、めり込む

中高型（例）オドロク（驚く）

語例：余る、嘲る、悲しむ【第1類A】・表す、驚く、喜ぶ【第2類A】・集める、数える、調べる、助ける、流れる、離れる、隠れる【第2類B】・うつむく、潰える、うっちゃる

表4：四拍五段動詞の活用形のアクセント

型	語例	終止・連体	未然・意向	連用・音便	假定・命令
平板	従う	し タ ガウ し タ ガウソーダ し タ ガウラシー し タ ガウトキガ し タ ガウコトガ し タ ガウノガ し タ ガウホーガ し タ ガウベーカ	し タ ガワナイ し タ ガワナカッタ し タ ガワセル し タ ガワレル し タ ガオー	し タ ガイタイ し タ ガイマス し タ ガイニユク し タ ガイソーダ し タ ガッタ し タ ガッテ	し タ ガ エ バ し タ ガ エ
中高	表す	ア ラ ワス ア ラ ワすソーダ ア ラ ワスラシー ア ラ ワすトキガ ア ラ ワすコトガ ア ラ ワスノガ ア ラ ワスホーガ ア ラ ワスベーカ	ア ラ ワサナイ ア ラ ワサナカッタ ア ラ ワサセル ア ラ ワサレル ア ラ ワソー	ア ラ ワし タ イ ア ラ ワシマス ア ラ ワシニユク ア ラ ワしソーダ ア ラ ワし タ ア ラ ワし テ	ア ラ ワ セ バ ア ラ ワ セ

4. 3 形容詞

4. 3. 1 二拍形容詞

2拍の形容詞のアクセントは全て頭高型である。

(例) コイ (濃い)

語例：無い、良い (よい・いい)、濃い、酸い

表5：2拍形容詞の活用形のアクセント

型	語例	終止・連体	未然	連用	假定
起伏	良い	ヨ イ (イーとも) ヨ イ ソーダ ヨ イ ヨーダ ヨ イ ラシー ヨ イ トキガ ヨ イ コトガ ヨ イ ノガ ヨ イ ホーガ	ヨ カ ロー	ヨ カ ッタ ヨ ク ナル ヨ ク ナイ ヨ ク テ ヨ サ ソーダ	ヨ ケ レバ

4. 3. 2 三拍形容詞

3拍の語には平板型と起伏型の対立がある（後述）。

5. 古相の保持

今回行った調査により、小田原市方言の老年層話者のアクセントにいくつかの特徴を観察することができた。そして、それらの特徴は、東京方言のアクセントに関する先行研究で言われている伝統的なアクセントの特徴と重なる部分が多くあった。そこで、以降に東京方言アクセントの古相と考えられる特徴を述べる。

5. 1 三拍名詞の中高型のアクセント

秋永一枝（1981）に「古くは所属語彙も少なくなかったが、多く頭高型（青葉・朝日・黄粉…）に転向し、（後略）」とある。老年層話者を対象とした調査では、以下の語で中高型のアクセントが観察できた。

語例： ア**サ**ヒ（朝日）、ア**ブ**ラ（油）、オ**ボ**エ（覚え）、カ**キ**ネ（垣根）、カ**ケ**ネ（掛け値）、カ**シ**ラ（頭）、ク**ル**イ（狂い）、コ**コ**ロ（心）、サ**ザ**エ（栄螺）、ス**ズ**リ（硯）、ソ**ナ**エ（備え）、つ**ツ**ジ（躑躅）、つ**ツ**ミ（堤）、ナ**ミ**ダ（涙）、ハ**シ**ラ（柱）、ひ**カ**エ（控え）、マ**ヨ**イ（迷い）、ム**ク**イ（報い）、メ**ガ**ネ（眼鏡）、モ**ト**メ（求め）、ワ**カ**レ（別れ）、ワ**サ**ビ（山葵）

5. 2 多拍語の頭高型のアクセント

東京方言アクセントの古相の例の一つである、五拍以上の語にみられる頭高型のアクセントは、数は少なかったものの、以下の語で観察された。

カ**マ**イタチ（鎌鼬）、ノ**ビ**チジミ（伸び縮み）、ヒ**ー**ジーサン（ひい爺さん）、ヒ**ー**バーサン（ひい婆さん）、ヒ**ロ**コージ（広小路：地名）、マ**ツ**ノウチ（松の内）

5. 3 動詞の同音異義語のアクセント

同音異義語「拭く」・「吹く」や「突く」・「着く」は、現代の東京方言では活用形のアクセントで同じように発音される場合がある。小田原方言の話者では一部で揺れがみられたものの、おおむね対立が保たれており、伝統的なアクセントを保持しているといえる。

表6：「拭く」・「吹く」の活用形のアクセント

語例	終止・連体	未然	連用	假定・命令
拭く	ふ ク ふ ク ソーダ ふ ク ラシー ふ ク トキガ ふ ク コトガ ふ ク ノガ ふ ク ホーガ ふ ク ベーカ	ふ カ ナイ ふ カ ナカッタ ふ カ セル ふ カ レル ふ コ ー	ふ キ タイ ふ キ マス ふ キ ニユク ふ キ ソーダ フ イ タ フ イ テ	ふ ケ バ ふ ケ

吹く	ふク ふクソーダ ふクラシー ふクトキガ ふクコトガ ふクノガ ふクホーガ ふクベーカ	ふカナイ ふカナカッタ ふカセル ふカレル ふコー	ふきタイ ふキマス ふキニユク ふきソーダ フイタ フイテ	ふケバ ふケ
----	--	---------------------------------------	--	-----------

5. 4 形容詞の2つの型の保持

形容詞のアクセントは、東京方言では起伏型への統合が進んでいる。小田原市方言の老年層話者を観察したところ、3拍の形容詞については形容詞単独の発音だけでなく、活用形のアクセントでも平板型と起伏型の対立が観察された。なお、起伏型の形容詞の連用形と仮定形のアクセントは、もともと伝統的な頭高型と比較的新しい中高型とで揺れが観察された。

平板型/○○○/
赤い、浅い、厚い、甘い、荒い、薄い、遅い、重い、固い、軽い、暗い、遠い

起伏型/○○]○/
熱い、多い、黒い、白い、高い、近い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い

表7：3拍形容詞の活用形のアクセント

型	語例	終止・連体	未然	連用	仮定
平板	赤い	アカイ アカイソーダ アカイラシー アカイトキガ アカイコトガ アカイノガ アカイホーガ	アカカロー	アカカッタ アカクナル アカクナイ アカクテ アカソーダ	アカケレバ
起伏	黒い	クロイ クロイソーダ クロイラシー クロイトキ クロイコト クロイノガ クロイホーガ	クロカロー	クロカッタ (クロカッタ) クロクナル クロクナイ (クロクナイ) クロクテ (クロクテ) クロソーダ	クロケレバ

6. まとめ

本稿では神奈川県小田原市方言の老年層のアクセントの体系を記述し、調査結果

のうち、東京方言アクセントの古相と思われるいくつかの特徴を述べた。

冒頭でも述べたとおり、神奈川県内の方言はこれまであまり調査がされてこなかった地域であり、その方言を記述すること自体が意義を持つ。小田原市方言のアクセントの体系は、東京方言アクセントと同様、 n 拍に対し $n+1$ 種のアクセントの型の対立があった。古相を保っている例として名詞・動詞・形容詞の別にいくつかの事象を報告した。その中では、明らかに東京方言のアクセントの古相を残しているように思われる例もあったが、古相を一部で保ちつつもすでに変化が生じているものもあった。今後の変化を観察していくためにも、伝統的な方言の記述を急ぎたい。

参考文献

- 飯豊毅一ほか（1984）『関東地方の方言 講座方言学5』国書刊行会。
秋永一枝編（1981）『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。
NHK 放送文化研究所編（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典』NHK 出版。
佐藤亮一（1996）『『東京語アクセント資料』の検証 - 下町多人数調査結果と比較して - 』『言語学林 1995 - 1996』三省堂，135-149。
日本放送協会編（1951）『日本語アクセント辞典』日本放送出版協会。
日野資純（1961）「神奈川県の方言」『神奈川県の歴史』神奈川県立図書館シリーズ 6，131-154。
平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』育英書院。
平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院。
平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』東京堂出版。
馬瀬良雄・佐藤亮一（1989）「東京語アクセントの多様性」『講座日本語と日本語教育』2，206-232。
山田美妙（1893）『日本大辞書』（複製版）名著普及会。

埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調 —久喜市高年層に見られるゆれとその解釈—

亀田 裕見
(文教大学文学部)

1. 曖昧アクセントにおける音調のゆれ

曖昧アクセントと呼ばれる方言アクセントは全国に散在する。曖昧アクセントとは、話者において音韻論的型の意識が不明瞭であり、発話においても型があるようではっきりせず「ゆれ」が見られるアクセント、と一般的に理解されている。そのような地域では、話者は個人内・個人間で客観的に聞いて異なるアクセントで話しながら、それに違和感を持っていない。本論で取り上げる埼玉県久喜市について、金田一(1977)は「一般に型の区別が明瞭でない」けれども「きわめて規則的な型の対応関係がある。」。発話される音調が違って地元の人には「それほどちがったアクセントで話しているとは思っていないらしい」という記述がある。なぜそのような状態が共時的に存在可能なのであろうか。本論では埼玉県の東部に分布する埼玉特殊アクセント地域に属する久喜市の高年層における音調をもとに、曖昧アクセントにおけるゆれの程度やゆれの状態を分析していきたい。

埼玉特殊アクセントは金田一春彦氏の昭和初期の調査によりその存在が知られ、多数の研究者による調査・分析があるが、この狭い地域の中で地域差が大きいことが指摘されている。例えば、「雨」はアに対してメの方が高く、逆に「飴」はアの方がメより高くなる音調がよく聞かれ、この音調が京阪式アクセントの音調に似ていることで注目を集めたが、これは東京式のアクセントの変種と位置づけられている。研究はこのような状態を通時的に位置づけようとするものと共時的に解釈しようとするものに分かれる。しかし、その際ゆれについて詳述されているものはあまりない。本論ではこの埼玉特殊アクセント地域の中から、久喜市における調査結果を基にゆれのあり方を共時的に分析する。久喜市ではゆれが非常に多い。金田一(前掲)では「久喜式アクセント」と呼び、「草加式アクセント」と栃木や茨城に分布する「無型アクセント」との「中間的性質」をもったもので、「箸」と「橋」、「雨」と「飴」といった同音異義語を区別して発音しているように聞こえるが、その形は東京のアクセントと違うと述べられている。実際その「中間的性質」というものは、まさに個人内・個人間のおおきな音調相のゆれとして見ることができる。

曖昧アクセントの研究として、佐藤(1974)がある。宮城県の無型アクセント地域と接する曖昧アクセント地域で「助詞を付けない語単独の発音と助詞を付けたときの発音とで、アクセントの山の位置が異なることが多いという点も、曖昧アクセントの特徴の一つである」という指摘がされている。これは久喜市にそのまま当てはまる。また、「文の形で調査した方が、文節言い切りの形で調査したときよりも、ゆれ幅の小さい比較的安定した音相が得られるという傾向は、この話者に限らず、曖昧アクセント話者に多く見られる現象である」という指摘もある。これについては、久喜市ではそのような話者もいれば逆である話者もいる。しかし、これらは曖昧アクセン

トを考える上で非常に重要な点であることは間違いない。

秋永・佐藤・金井（1971）は埼玉特殊アクセント地域を調査地点に含んでおり、多数回発話で調査しているかは定かでないが、発話形式によるアクセントの傾向の違いが示されており、「単独の形の方がより早く、次に付属語のついた形の場合にアクセントの型の区別が失われていく」と報告されている。さらには1拍語や2拍語の短い語の方が3拍語より早く型区別が失われていくとも述べられている。

大野（1984）では久喜市は隣接する白岡町と菖蒲町と同様に「やや曖昧な埼玉アクセント」と位置づけ、菖蒲町の3拍名詞について「1・6類が○●○／○●●△」、「2・4類が○●○／○●○△」「3・5類が○●◎／○●◎△か●○○／●○○△」とし、3・5類で「このように2つの型を持つことが特徴」とする。ゆれではなく型が二つあるという分析である。

2. 調査概要

本論では、このような久喜市の3拍名詞におけるゆれの傾向から読み取られることをまとめていきたい。従来、2拍名詞に関する研究は多いが、3拍以上の語についての研究はあまりなかった。ゆれの状態を見るのには長い語の方が適していると考ええる。

2007～8年および2013年に埼玉県久喜市の高年層15名を調査した。話者は大正5年～昭和14年生まれの生え抜き男女で、2013年度時点の平均年齢は83歳である。3拍名詞35語（追加調査した6名にはさらに9語）を単独の発話（以下「単独」）と・助詞ガをつけた文発話（以下「文」）でそれぞれ順番をランダムに入れ替えて3回発話していただいた。（同時に2拍語の調査もし、2回目・3回目発話は2拍語と混ぜた順序で発話）調査語は以下の通りである。

- I類：着物・形・車・鼻血・鯛
- II類：毛抜き・小豆・間・桜・トカゲ
- III類：二十歳・岬・小麦・サザエ・力
- IV類：頭・男・鋏・暦・宝
- V類：命・油・涙・朝日・柱
- VI類：烏・鼠・兎・狸・蓬
- VII類：兜・苺・便り・蚕・鯨

（追加語：五つ・心・夏日・願い・お箸・お玉・試験・卵）

3. ゆれの実態

型の弁別意識が曖昧である点を2拍名詞のミニマルペアの比較発話から確認する。

4. 音韻論的型以外の音調規則

本論ではこのようなゆれのあり方を「音韻論的型」と「音声学的規則」の存在とその適用における力の張り合い関係の異なりとして解釈を試みる。このような解釈の可能性についてはすでに上野善道氏によって提示されている。埼玉特殊アクセント地域の音調についても、久喜市にほどちかい蓮田市について、上野(1984)で、東京式と同じ位置の「上げ核」に氏の言う「句音調」{「○○〓〇…」}が加わっていると解釈している。この解釈によって重起伏の音調相の解釈が可能になっている。ただ、音調にゆれはないという前提での解釈のようである。本論のいう「音声学的規則」は氏の「句音調」に近いものと言ってよいかと思うが、この規則がいわゆる「句」にかかっているのかどうかという点は別途熟考すべきである。今回は取り上げないが、語の前になんらかの修飾語句を置いて、単語が文頭に来ない発話の調査を試みたが、多くが文頭であろうと非文頭(句の途中)であろうと、「音声学的規則」が現れることが分かった。

上野氏の蓮田市の分析に音調のゆれは示されていないが、「一口に「曖昧化」と言っても、その内容は種々で、その度合いにも色々の段階があり、明瞭と曖昧が一本の線で截然と分けられるような物ではない」、「そういう所では個人差もまた大きい」、「ある世代に一斉に曖昧化が起こるのではなく、いち早くそうなっている人と、かなり遅くまで明瞭な段階を保つ人とが共存していることは考えられる。」と述べ「全体の音調型が句音調とアクセント素の弁別特徴の和としてだけで説明できるとは限らないようである。」、「句音調とアクセント核との関係(共起関係や、句音調から核への変質を含む歴史的関係など)も同然問題になる」という指摘は非常に重要である。まさに、本論はそのような解釈の可能性として、音韻論的型と音声学的規則が、常に対等の力をもって現れるのではなく、音韻論的型が常に優勢な東京語とは異なり、前者のみ、または後者のみ、または両者が現れる、と設定する解釈を示すものである。

5. 音調をつくる規則とその適用の解釈—二人の話者を例に—

以下では音調相を上昇位置と下降位置の数字の組み合わせで表す。例えば文発話で[○●●△]の場合、括弧の左側に上昇、右側に下降の位置を[2-3]のように示す。

上昇位置 1 : 「○○○△ 2 : [○「○○△ 3 : [○○「○△

下降位置 1 : ○〓○○△ 2 : ○〓〓〓〓△ 3 : ○〓〓〓〓△ 4 : ○〓〓〓〓△ 〓 : 下降なし

1.5 : 2 拍目の拍内下降 2.5 : 3 拍目の拍内下降

まずA氏(S12 生まれ女性)のケースを取り上げる。3回発話のゆれの音調から語をグループa~dに分類した。その結果が表4である。図3にはそれぞれ左側に語単独発話、右側に文発話の3回発話の結果をこの数字で表した。3回分の音調は発話順ではなく発話の似ているものを近くに配置した。グループそれぞれの音調のゆれの特徴をまとめると

グループa : 単独・文とも[2-2]で安定。

グループb : 単独ではゆれが多様、文は[2-3]・[2-2]に収束。文で下降3が現れる点の特徴。

グループc : 単独で[1-1][1-2]が主、文で[1-2][2-2]が主。文で上昇1が現れる点の特徴。

グループd : a~cに当てはまらないもの。単独で[2-2][2-0][1-0]、文で[2-2][2-3][2-0]など多様。下降に「〓」がよく現れる点の特徴

【図3】 A氏の発話のグループ分け

グループa			グループb			グループc			グループd					
小豆	2-2	2-2	形	1-2	2-3	二十歳	2-0	2-3	油	2-0	2-2	鱈	2-2	2-0
	2-2	2-2		1-2	2-3		2-2	2-3		2-2	2-2		2-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-2		1-2	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2
お玉	2-2	2-2	着物	1-2	2-3	桜	1-0	2-3	頭	2-0	2-2	車	1-0	2-0
	2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-3		1-0	2-2		1-2	2-0
	2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		1-2	2-0
人	2-2	2-2	曆	2-2	2-3	男	2-0	2-3	袂	2-0	2-2	ネズミ	1-0	2-0
	2-2	2-2		1-2	2-2		2-0	2-3		1-0	2-2		2-2	2-3
	2-2	2-2		1-1	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2		2-2	2-3
五つ	2-2	2-2	練	1-2	2-3	宝	1-0	2-3	試験	1-0	2-2	小麦	1-2	2-4
	2-2	2-2		1-2	2-3		2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2
明日	2-2	2-2	お玉で	2-2	2-3	涙	2-0	2-3	心	2-0	2-2	罫	1-0	2-4
	2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-3		2-2	2-2		1-2	2-4
	2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-3
命	2-2	2-2	力	2-2	2-3	柱	1-0	2-3	夏日	1-0	2-2	トカゲ	1-0	2-4
	2-2	2-2		2-2	2-2		1-0	2-3		1-0	2-2		1-0	2-3
	2-2	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2		1-0	2-3
卵	2-2	2-2	毛抜き	1-2	2-3	間	1-0	1-3	鼻血	2-2	2-0	ウサギ	2-0	2-4
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	1-3		2-2	2-0		2-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	2-2		2-2	2-2		2-2	2-2
頼み	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	1-3	蕎麦	1-0	2-0		2-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	1-3		2-2	2-2		1-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2
お箸	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2
	2-2	2-2		1-2	2-3		1-0	2-2		2-2	2-2		1-2	2-2

【表3】 A氏の発話の規則適用の解釈

グループ	音韻論的型解釈	単独発話					文発話				
		音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Iの適用	音声学的規則IIの適用	音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Iの適用	音声学的規則IIの適用
a	/○○○/	[2-2]	27	○	○	○	[2-2]	27	○	○	○
b	/○○○/	[2-2]	18	×	○	○	[2-3]	22	○	○	×
		[1-2]	12	×	○	○	[2-2]	18	×	○	○
		[1-0]	6	○	○	×	[1-3]	2	○	○	×
		[2-0]	1	○	○	×					
c	/○/○○/	[1-1]	6	○	○	×	[2-2]	9	×	○	○
		[1-2]	6	△	○	○	[1-2]	5	△	○	○
		[1-0]	3	△	○	×	[2-4]	1	×	○	×
							[2-0]	1	×	○	×
d	/○○○/	[2-2]	22	×	○	○	[2-2]	30	×	○	○
		[1-0]	12	○	○	×	[2-0]	8	○	○	×
		[1-2]	9	×	○	○	[2-3]	5	×	○	△
		[2-0]	5	○	○	×	[2-4]	5	×	○	×

○:適用 ×:不適用 △:特殊な適用

【図4】 B氏の発話のグループ分け

グループa	グループb	グループc	グループd	グループe
カ 2-2 2-2 2-2 2-2	カ 1-2 1-2 1-2 1-2	カ 2-2 2-3 2-2 2-2	カ 1-1 1-1 1-1 1-1	カ 2-2 2-4 2-2 2-2
キ 2-2 2-2 2-2 2-2	キ 2 2 1 2 2-2 2-2	キ 2 2 2 2 2-2 2-2	キ 1 1 1 1 1-1 1-1	キ 2 2 2 4 2-2 2-2
ク 2 2 2 2 2-2 2-2	ク 1 2 2 2 2 2 2 2	ク 2 2 2 0 2 2 2 0	ク 1 1 1 1 1 1 1 1	ク 2 2 1 0 2 2 2 2
ケ 2-2 2-2 2-2 2-2	ケ 1-2 2-2 2 2 2 2	ケ 2-2 2-3 2 2 2 0	ケ 1-1 1-1 1 1 2 2	ケ 1-0 1-0 1 2 2 2
コ 2-2 2-2 2-2 2-2	コ 1-2 2-2 2-2 2-2	コ 2-2 2-2 2-2 2-2	コ 1-1 1-1 2-2 1-1	コ 2-2 2-11 2-2 2-4
ク 1 2 1 2 1-2 2-2	ク 1 2 1 2 2-2 1-2	ク 1 2 1 2 2-2 1-2	ク 1 1 1 1 1-1 1-1	ク 1 2 1 2 2 2-2 2-2
ケ 1 2 2 2 1 2 2 2	ケ 1 2 2 2 1-1 2-2	ケ 1 2 2 0 2-2 2-2	ケ 1 1 1 1 2-2 2-2	
コ 1-2 2-2 1 2 1 2	コ 1 2 2 2 2 2 2 2	コ 2-0 2-3 2 2 2 0	コ 1-2 2-3 1 2 2 0	
カ 1-2 2-2 2-2 2-2	カ 2-2 2-2 2-2 2-2	カ 2-2 2-0 2-2 2-2	カ 1-2 2-2 2-2 2-3	
キ 1 2 2 2 1-2 2-2	キ 1 2 2 2 2-2 2-2	キ 2-2 2-2 2-2 2-2	キ 1-2 2-2 2-2 2-3	

【表4】 B氏の発話の規則適用の解釈

グループ	音韻論的型解釈	単独発話					文発話				
		音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Iの適用	音声学的規則IIの適用	音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Iの適用	音声学的規則IIの適用
a		[2-2]	9	○	○	○	[2-2]	9	○	○	○
b	/○○○/	[1-2]	16	○	○	○	[2-2]	24	○	○	○
		[2-2]	10	○	○	○	[1-2]	6	○	○	○
		[1-1.5]	4	△	○	△					
c	/○○○/	[2-2]	39	×	○	○	[2-3]	36	○	○	×
		[1-2]	11	×	○	○	[2-2]	9	×	○	○
		[1-1]	1	×	○	○	[1-3]	6	○	○	×
		[2-0]	3	○	○	×	[1-2]	2	×	○	○
		[1-0]	1	○	○	×					
d	/○○○/	[1-1]	14	○	○	×	[1-1]	12	○	○	×
		[1-2]	2	△	○	○	[1-2]	6	△	○	○
		[2-2]	4	×	○	○	[2-2]	3	×	○	○
		[2-1.5]	1	△	○	△					
e	/○○○/	[2-2]	13	×	○	○	[2-2]	11	×	○	○
		[1-2]	3	×	○	○	[2-4]	3	○	○	×
		[2-0]	1	○	○	×	[1-0]	2	○	○	×
		[1-0]	1	○	○	×	[1-2]	1	○	○	×

○:適用 ×:不適用 △:特殊な適用

これを次の (ア) ~ (ウ) の 3 つの規則が組み合わされて適用されていると解釈してみる。

(ア) 音韻論的型 下り核 /○○○, ○○○], ○○]○, ○]○○/

(イ) 音声学的音調規則 I [「○○○…」] 又は [○「○○…」]

(ウ) 音声学的音調規則 II <○○]○…>

組み合わせとして(ア)=(ウ)+(イ), (ア)+(イ), (イ)+(ウ), (イ)のみ, がある。表3に示す。

上野 (前掲) では蓮田市を上げ核と句音調 {「○○]○…」} で解釈している。本論の久喜市の音韻論的型 (ア) では, 上昇位置が/○○○/以外の語では「2」「1」が混在し「3」もなく, また上野氏の解釈の根拠として大事と思われる重起伏が現れにくいところから, 上げ核では解釈が難しいと考え, 下り核に設定する。また, (イ) (ウ) のように音声学的音調規則を上昇の I と下降の II に分けた。

A氏と同様のことをもう一人B氏 (T14 生まれ女性) に対しても行った。図4と表4に示す。

グループ a : 単独・文とも[2-2]で安定。

グループ b : 単独・文とも[1-2][2-2]まれに下降に1.5。

グループ c : 単独で[1-2][2-2][2-0], 文で[2-3][1-3][2-2]。文で下降3が現れる点の特徴。

グループ d : 単独・文とも[1-1][1-2][2-2]。下降1が現れる点の特徴。

グループ e : 単独で[2-2][1-2][1-0][2-0], 文で[2-2][2-4][1-0][2-0]。文で下降4や0が現れる点の特徴。

以上のように解釈した二人の話者の表3と表4を比較してみる。両者とも/○○]○/では (ア) と (ウ) が重なるためゆれが少なく安定した音調になる点が共通している。また/○○○]と/○○○/の語単独発話では, (ウ) が (ア) より優先され, 語単独発話に下降が実現される点も共通している。この二つの型は文発話になると傾向が異なり, /○○○]は (ウ) より (ア) が優先されて下降「3」が出てくる。とはいえ (ウ) が優勢な下降「2」も少なくない。つまり, (ア) の音韻論的型が絶対ではなく, 音声学的音調規則が型を無視する場合もあるということである。特にA氏の方にその傾向が強い。/○○○/の文発話では (ア) より (ウ) が優先されて下降が出てくる。また, このように語単独と文発話の音調が異なる理由も, 規則の適用で文発話より語単独発話の方が (ア) より (ウ) が優先されることから生じているという説明ができる。/○]○○/はA氏とB氏で異なる。両氏とも語単独発話では下降「1」という (ア) が優先された音調が主である。しかし, 文発話ではA氏は下降が「2」となり, (ウ) が優先されているのに対し, B氏は (ア) の下降「1」の方が多い。

本論では二人のケースしか提示できなかったが, S10 生まれ女性の話者では, A氏・B氏と反対に語単独発話では (ア) が適用され, 文発話になると (ウ) の方が優勢的に適用されるようなケースもある。T13 生まれ男性は/○○]○/でも語単独発話では (ア) も (ウ) も適用されずに (イ) のみで, 従って下降がない音調が多くある。

(ア)の音韻論的型自体の判別もA氏・B氏より難しい話者も多い。一応、表5には全話者について各語の型を判別して一覧にした。語によって傾向はあるものの話者によってばらばらである。特に(ウ)が優先された発話が多数を占められる話者においては/○○○/と/○○○/の判別がつきにくい。少なくとも大野(前掲)のようなIⅥ/IIⅣ/IIIⅤというきれいな語類の対立ではない。大野氏で文発話では様々であるのに、どの類でも語単独で○●○か○●○になるという報告は本論の(ウ)が語単独で強く適用されていた結果と考えられる。

6. 「曖昧アクセント」という久喜市アクセントの位置づけ

以上のように、久喜市の音調のゆれが音韻論的型(下り核)と音声学的音調規則I(上昇)、II(下降)の三つの規則の適用および不適用の組み合わせによって起こっていることを説明した。しかし、前節や表2で見えてきたとおり、型意識が希薄になっていることは確かである。それでも出現する音調には傾向がある。その音調のバリエーションは音韻論的型を無視し音声学的音調規則の方が強く適用されることによって多様に生成される。決して無型アクセントではない。型や規則の適用は発話の単位や個人によって差があり、音韻論的型と音声学的音調の力の拮抗関係が安定していないことがまさに「ゆれ」の実態であり、「曖昧アクセント」の実態なのではないか。本論のような捉え方に

【表5】全話者の音韻論的型

語	アクセント語類	T5 生男	T11 生女 b	T11 生女 a	T13 生男	T14 生女	S② 生女	S5 生男	S6 生女	S7 生男	S9 生男 a	S9 生男 b	S10 生女	S12 生女	S12 生男	S14 生女
着物	I	②	③	③	①	③	③	①	①	③	③	①	③	③	③	①
形	I	③	③	①	①	③	③	②	②	③	①	①	③	③	①	①
車	I	①	③	②	①	①	①	③	③	①	③	③	①	①	①	①
鼻血	I	①	③	①	①	①	①	①	②	①	①	②	②	①	①	①
翳	I	①	①	①	①	③	①	③	①	①	③	③	①	①	①	①
毛抜き	II	①	③	③	①	②	①	②	①	①	③	①	①	③	③	③
小豆	II	②	①	②	③	②	①	③	①	①	③	③	①	②	③	③
間	II	①	③	②	③	②	③	②	③	③	③	②	③	③	③	①
桜	II	③	①	③	③	③	①	①	①	①	①	①	①	③	③	①
トカゲ	II	③	①	②	③	①	③	②	①	①	③	②	①	①	①	①
二十歳	III	①	①	③	②	③	①	②	①	①	③	③	①	③	①	②
岬	III	①	①	③	①	③	①	②	①	③	③	③	①	①	③	①
小麦	III	②	②	①	③	①	②	①	①	③	②	①	②	①	①	③
サザエ	III	②	②	①	③	③	②	③	①	③	②	①	③	①	①	①
力	III	①	③	②	①	②	②	②	①	③	③	②	③	③	③	③
頭	IV	②	①	②	③	②	①	③	①	①	③	①	③	①	③	③
男	IV	①	②	②	③	②	①	③	①	①	③	①	③	③	③	③
鉄	IV	①	①	②	②	②	①	②	①	③	③	②	③	③	③	③
暦	IV	②	①	②	②	②	①	①	③	③	③	③	①	③	③	③
宝	IV	②	①	②	③	②	③	①	①	③	③	③	③	③	③	③
命	V	①	①	①	①	①	②	①	①	②	①	①	①	②	①	①
油	V	①	①	③	③	③	①	②	①	①	③	①	③	①	③	①
涙	V	①	②	①	①	①	②	①	①	②	③	①	①	③	①	①
朝日	V	①	②	②	①	①	②	①	①	①	③	①	②	②	①	①
柱	V	③	②	③	③	③	③	①	①	①	③	②	③	③	①	①
心	V	/	②	/	/	③	①	/	/	①	/	/	②	①	②	/
五つ	V	/	②	/	/	③	②	/	/	①	/	/	②	②	③	/
烏	VI	①	②	②	③	①	②	③	①	①	①	③	①	①	①	①
鼠	VI	①	③	①	①	①	①	②	①	③	③	①	③	①	①	①
兎	VI	①	③	③	②	③	①	③	①	③	③	①	①	①	①	①
狸	VI	①	①	②	①	①	①	③	①	①	①	①	①	①	①	①
蓬	VI	①	①	③	③	③	/	③	①	①	②	②	①	①	③	①
兜	VII	①	①	③	①	②	①	②	①	②	③	③	③	①	①	①
苺	VII	②	①	③	①	③	①	③	①	①	③	①	①	①	③	①
便り	VII	①	②	①	③	②	②	③	①	③	①	③	①	①	①	①
釜	VII	①	①	①	③	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
鯨	VII	①	①	①	①	③	①	②	①	③	③	③	③	③	①	①
一人	VII	/	②	/	/	③	②	/	/	③	/	/	②	②	③	/
お玉		/	②	/	/	②	②	/	/	①	/	/	②	②	③	/
お箸		/	②	/	/	①	②	/	/	①	/	/	②	②	②	/
試験		/	②	/	/	②	②	/	/	②	/	/	②	①	③	/
卵		/	②	/	/	③	①	/	/	②	/	/	①	②	③	/
夏日		/	②	/	/	①	②	/	/	②	/	/	①	①	①	/
願い		/	③	/	/	③	①	/	/	③	/	/	①	②	③	/

①:/0100/ ②:/0010/ ③:/0001/ ④:/000/

より、「型意識の曖昧さ」というだけの定義からさらに踏み込んでいけると考える。

さらに通時的に考えてみると、音韻論的型より音声学的音調規則が優勢になるところに明確な型意識のあるアクセントから曖昧アクセント、あるいは別の体系のアクセントに移行する契機があると思われる。つまり、このようなゆれの多い曖昧アクセントの状態が長く続くというのも考えにくいのである。このような状態が次世代にどのように引き継がれていくのか。木野田（1972）には東京アクセント化していくという報告があるが、もし共通語化という働きがなかったら次の音韻論的型の体系を生み出すのか、無型アクセントとなるはずのものであったのか。まだ不明な点も多く、全国に散在する曖昧アクセントが全てこのような分析が可能であるとも限らないが、本論のように共時的解釈することで、通時的にも曖昧アクセントの位置づけを明確にし、曖昧アクセントの中の更なる細分類ができるのではないだろうか。

文献

- 秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄（1971）「第2章第1節 利根川上・中流域のアクセント」『利根川—自然・文化・社会—』弘文堂，164-175.
- 上野善道（1977）「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』（岩波書店），281-360.
- 上野善道（1984）「新潟県村上方言における特殊アクセントの諸相—その曖昧化の課程—」『金田一春彦博士古稀記念論文集第2巻』（三省堂），390-347.
- 大野真男（1984）「埼玉県東北部における特殊アクセントの諸相—その曖昧化の過程—」『現代方言学の課題第2巻記述的研究篇』（平山輝男博士古稀記念会編）（明治書院），260-280.
- 木野田れい子（1972）「埼玉県埼玉群久喜町のアクセント—曖昧アクセントから東京アクセントへ—」『都大論究』10，58-67.
- 金田一春彦（1977）「関東地方に於けるアクセントの分布」『日本語方言の研究』（東京堂出版），217-335.
- 佐藤亮一（1974）「アクセントの「ゆれ」をめぐって—曖昧アクセント地域を中心に—」『青山語文』4，71-86.
- 吉田健二（1993）「埼玉特殊アクセントの崩壊過程」『国文学研究』111（早稲田大学国文学会），100-90.

付記

日本語学会 2013 年度春季大会で「曖昧アクセントの一解釈—埼玉特殊アクセント地域における三拍名詞のゆれの分析から—」として発表したものである。

データ統合・共有を目指したWeb言語地図の構築

—成果公開サイト「日本大学文理学部Web言語地図」の試み—

林 直樹・田中ゆかり

キーワード：WebGIS Web言語地図 地理的言語データ データ統合・共有

要 旨

本稿では、異なる研究者によるデータをWeb上で共有・統合することを目的に構築された「日本大学文理学部Web言語地図」の概要を報告する。最初にWeb言語地図の利用方法のうち、言語地図の描画方法を説明する。次に、Web言語地図にデータを追加するために、個人がどのようにデータを管理するのかを述べ、作成したデータをWeb上で管理するための方法を解説する。最後に、Web言語地図の理念である研究資源の共有という試みにおける今後の課題について言及する。

1. はじめに

「日本大学文理学部Web言語地図」（以下、Web言語地図）は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究」の1グループである、日本語日本文学班の研究の一環として構築された。

従来研究者ごとに管理・分析されていた言語データを一元的にアーカイブする構想に基づき、インターネット上に蓄積したものがWeb言語地図である。この試みは、重要視されながらもなかなか進展しない言語データの共有という理念を、インターネット上において具現化しようという発想に基づく。本プロジェクトが提案する研究資源の共有システムへの賛同者は、参加登録の上、このWeb言語地図にデータの追加・管理が行えるようにした。これは、個別に所有する研究資源の共有化によって、研究資源を有効活用することを意図したものである。さらに、何度でも簡単に言語地図を描画できるようにし、描画しつつ解釈を加えるというような動的なデータ分析も指向した。

研究資源である言語データの共有が重要な課題となることは、すでに荻野(1999a)に指摘がある。一方、荻野(1999b)では、言語研究者の多くが言語データの共有を指向しているものの、アンケートデータを主要な研究資源とするタイプの研究者の間において、言語データの共有化が進んでいないことも示されている¹⁾。

言語地図による分析となじみがよい地理的言語データの共有に特化したデータアーカ

イブについても、大西(2002)・出野他(2002)などでその有用性とともにも構想が語られているが、いずれも具体的なデータの共有・公開には至っていないようである²⁾。

以上のように、1990年代の後半以降、言語データ共有の重要性は研究資源タイプを超えてたびたび言及されてきており、その共有化構想が示された例もあるものの、2013年1月現在において、実現された例はわれわれの確認の限りみとめられない。この背景には、コンピューターの性能や技術的な制約などがあったと思われる。しかし、こんにちではインターネット上でデータをアップロード・ダウンロードするサービスも普及しつつあり³⁾、管理者・利用者双方向においてインターネットを介したデータ共有を実現化する素地は整いつつあると考えられる。このような時代状況の中での新しい試みとして、Web言語地図は構築された。

2. 「日本大学文理学部Web言語地図」概要

Web言語地図は、下記URL (http://www.chs.nihon-u.ac.jp/jp_dpt/nichigo-nichibun/gengo-map/) にアクセスすることで利用できる。本サイトは、タブレット型PCによる閲覧にも対応している。

言語データを描画する地図にはGoogle Mapを採用したため、すべて無料で利用でき、Google Mapの仕様に基つきベースとなる地図の表示を変更することもできる⁴⁾。

Web言語地図の主要な機能は、以下の2つである。

- 1) 言語地図の描画
- 2) 言語データの管理

1) は、Web言語地図にアクセスすることによって、誰でも本サイトに格納されているデータを選択した上で、自由に言語地図を描画し、閲覧することができる。一方、2) については、データの信頼性・サイト管理の安全面から、申請の上登録が許可された利用者のみ関与可能なシステムとした。以下では、1) 言語地図の描画方法を3.で、2) 言語データの管理のために必要なデータの統合・共有方法を4.で、2) 言語データの管理方法を5.で説明する。

なお、Web言語地図については日本大学文理学部で開催した展示会「WebGISで体感する江戸・東京」(2012年10月15日～20日)、ならびに著者による2012年度日本語学会秋季大会における学会発表(2012年11月4日:林・田中2012)において試験的な公開を行った。それぞれの場において受けたコメントを反映させるかたちで、プロジェクト期間満了時に公開予定の最終公開版⁵⁾ではいくつかの機能を追加する。追加予定の機能については、各章当該部分において順次述べていくことにする。

3. 言語地図の描画

ここでは、Web言語地図を用いた言語地図の描画方法を、実際の画面を示しながら説明する。Web言語地図でWeb上に描画できるのは、次の3種のデータである。

- 1) 言語情報データ
- 2) 話者情報データ
- 3) 鉄道データ

以下、それぞれの描画方法について順に述べていく。

3.1. 言語情報データ

まず、言語情報データの描画方法を示す。Web言語地図は、記号の種類で表されるアイテムデータと、記号の大小で表される数値データという2種類の言語情報データを、それぞれに適した形で地図上に描画できる。

- ① アイテムデータの描画：画面左上のアイテムボックスのうち、「個別」タブに登録されているデータから任意の項目を選択する。項目を選択すると、当該項目が出現する地点に☆や△などのアイコンがプロットされる（図1）。



図1：言語情報データ描画画面（アイテムデータ）
「厚い」終止形0型を用いた描画

- ② 数値データの描画：画面左上のアイテムボックスのうち、「出現度数」に登録されているデータから任意の項目を選択する。項目を選択すると、選択した項目の出現度数に応じた円が地図上にプロットされる（図2）。
- ③ 描画画面の操作：図1・2のように描画された地図は画面右上のバーで拡大・縮小といった操作が行える⁶⁾ため、同一のデータに基づいて広域・狭域の地図を表示することもできる。
- ④ 描画画面の保存：描画画面を保存する場合は、それぞれのOSに応じた方法で画

面のキャプチャを行う⁷⁾。

- ⑤ 準備中の追加機能：どのような特徴が何度数現れ、それがどのように表されているのかを表示する「凡例」がある。この機能が実装されれば、アイテムデータと数値データを同時にプロットする場合などでも、何が表示されているのか迷わないようになる。



図2：言語情報データ描画面面（数値データ）
終止形2型の出現度数を用いた描画

3.2. 話者情報データ

言語地図データを描画すると、プロットされた地点の話者がどのような属性であるのかを以下のような形で確認することができる。

- ① 話者情報の表示：アイコンがプロットされた地点を選択すると、生年や性別など、当該地点の話者情報がポップアップ形式で表示される⁸⁾。
- ② 絞り込み描画：話者情報データから必要な情報を選択すると、絞り込み描画を行うことができる⁹⁾。この機能により、調査者、調査年、回答者の生年・性などの属性を指定した結果のみを用いた言語地図の描画が可能となる。

3.3. 鉄道駅データ

Web言語地図では、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業のプロジェクトを構成する1グループである地理情報班から提供を受けた、首都圏（1都3県）鉄道駅データをWeb言語地図で展開できる。

- ① 鉄道駅データの描画：画面左下のアイテムボックスのうち、「路線駅」に登録されているデータから任意の項目を選択すると、路線ごとの鉄道駅がプロットされる(図3)。
- ② 鉄道駅の開通年・廃止年の選択表示：鉄道駅の開通年・廃止年といった情報を選択すると、特定の年代の鉄道敷設状況を参照できるようになる。首都圏の言語事象分布の背景にあると想定される、言語形成期当時の交通アクセス状況を視覚的に検証することが可能となる。



図3：鉄道駅データ描画面
2013年1月現在の山手線駅を用いた描画

4. 言語データの統合・共有

次に、上記のように言語データを描画し、Web上にアーカイブするための、データの統合・共有方法を解説していく。なお、これらの作業はテンプレートに基づいて行えるよう、テンプレートデータとテンプレートデータの作成マニュアルをダウンロードできる機能をWeb言語地図に搭載している。

ここではWeb言語地図にすでにアップロードされている試行データを例に取り、データの統合・共有プロセスを具体的に示すことで、個人が所有するデータをWeb言語地図上に追加できるようなデータ形式に整える方法を示す。

4.1. 試行データ

ここで説明のために用いる試行データは、首都圏を調査対象とした異なる調査者による2種類の調査データである。ひとつは首都圏西部域データ（調査者：田中ゆかり，調査年：1992年，分析対象者：72人），もう一方は東京東北部データ（調査者：林直樹，調査年：2010年，分析対象者：44人）。どちらも主に高年層（調査時60歳以上）を対象としたリスト読み上げ式の面接調査に基づいている。試行のための分析項目として共有したのはアクセントデータで、3・4拍形容詞4語の終止形と連体形、計8項目である。

4.2. データ形式の統合

以下、データ形式の統合方法について具体的に述べていく。

- ① ファイル形式の統合：まず、それぞれが管理するオリジナルデータのファイルをCSV形式にする¹⁰⁾。
- ② 入力情報の統合：Web言語地図にアップロードするために必要な、(1) 話者情報データ・(2) 言語情報データをそれぞれ用意する¹¹⁾。

(1) 話者情報データ：話者情報データは、当該話者の生育年・性別・出身地・緯度経度情報など、フェイス項目を管理するためのデータである（表1）。

表1：データ形式例（話者情報データ）

ID	名前	性	生年 (西暦)	生年 (年号)	調査年	調査者	調査時 年 齢	緯度	経度
1	T-1	1	1912	明治45年	1992	田中ゆかり	80	139.48488	35.92164
2	T-2	1	1915	大正4年	1992	田中ゆかり	77	139.32042	35.86208
3	H-1	1	1946	昭和21年	2010	林直樹	64	139.79831	35.75768
4	H-2	1	1924	大正13年	2010	林直樹	86	139.88835	35.69277

これは、話者がどのような属性を持つのかを管理するためのデータといえる。この中には、当該話者情報を地図上にプロットするための地点情報が、緯度経度として入力されている¹²⁾。

(2) 言語情報データ：言語情報データは、当該話者にどのような言語的特徴が現れたのかを管理するためのデータである。このデータは、語彙・文法・音声などの特徴を問わず入力することができる。アイテムデータの場合は、対象とする特徴が出現したか否かを、0=非出現・1=出現、というような0/1形式で入力する。数値データの場合は、対象とする特徴が何回数出現したかを連続した数値で入力

する。この形式で整えられた試行データを表2に示す。

表2：データ形式例（言語情報データ）

ID	名前	厚い 終止0	厚い 終止2	厚い 連体0	厚い 連体2	3拍形容詞I類 終止2	3拍形容詞I類 連体2
1	T-1	1	0	1	0	0	0
2	T-2	0	1	1	0	1	0
3	H-1	0	1	0	1	1	1
4	H-2	1	0	1	0	2	2

表2では、試行データの左から3列目以降にアクセントデータが入力されている。3列目は「厚い」終止形が0型（LHH）で発話されたか否か、4列目は2型（LHL）で発話されたか否かを表している。表中グレーの網掛けで表示した部分は数値データで、3拍形容詞I類・終止形、ならびに連体形において2型（LHL）が何度数出現したのかを表している。このようにアイテムデータと数値データを異なる形式で管理することによって、3.1で示した2種のデータタイプ別の描画が可能となる。

- ③ 話者情報データ・言語情報データをつなぐキー：表1・表2で示した話者情報データと言語情報データから構成される試行データは、それぞれは「ID」と「名前」が共通しており、この項目が2つのデータをつなぐキーとなっている。話者情報データと言語情報データのキーが一致しない場合はデータが正確に構築されず、地図上にプロットすることもできないので注意が必要である。

以上のデータ作成方法は、Web言語地図右下に掲げられている「マニュアル」から閲覧することができ、テンプレートデータもダウンロード可能となっている。

5. 言語データの管理

次に、4.の手続きを経て作成されたデータをWeb言語地図で管理するための方法を解説する。先にも触れた通り、Web言語地図を用いたデータの登録・管理は、申請許可を受けた利用者のみが参加できるシステムとしている。以下では、参加登録、データの管理の方法について示す。

5.1. 参加登録

Web言語地図でデータを管理するための個人画面に進むためには、事前に参加登録を行う必要がある。参加登録を行う際は、日本語日本文学班ポータルサイトに掲載してい

る利用規約・参加規約を閲覧し、それらを理解の上、賛同できるようであれば、Web言語地図画面右下の参加登録画面にて諸事項を記入し、申請手続きに進む。参加登録が許可されると、本サイト管理運営者から、管理画面のURL・ID(メールアドレス)・パスワードが参加登録者の申請したID(メールアドレス)に送付される。

5.2. 管理画面による言語データの管理

- ① 管理画面へのログイン：本サイト管理運営者から送付されたURLに移動し、ID(メールアドレス)パスワードを用いて個人の管理画面にログインする(図4)。



図4：Web言語地図データ管理画面

- ② データの追加：管理画面左中ほどの「csvインポート」を選択し、データをアップロード・インポートする(以下、本稿ではデータをWeb上に追加することをアップロードとする)。なお、一度アップロードされたデータは基本的にそのままWeb上に集積される¹³⁾。これは、アップロードされたデータの履歴管理と、すでに投稿されたデータで描画された言語地図の再現性を確保するための措置である。
- ③ アイテムデータの管理：管理画面左上の「個別」タブを選択し、地図上に配置するアイコンのタイプならびに色を調節する。現在選択できるアイコンは8種類、選択できる色は12種類であるため、最大で96パターンまで対応することが可能である。
- ④ 数値データの管理：管理画面左上の「出現度数」を選択し、出現度数に応じた円の大きさを調節する。出現度数の範囲も自由に設定できる。たとえば、設定した階層によって円の大きさを変える、といった変更も可能である。

- ⑤ 変更データの確認：このような手順を踏んで統合されたデータは、3.1の地図画面ですぐに確認することができる。
- ⑥ データの修正・削除：Web言語地図では、一度投稿したデータを修正する場合は、修正データを新規データとして再度アップロードする必要がある。これは、アップロードされたデータの履歴管理と、すでに投稿されたデータで描画された言語地図の再現性を確保するための措置である。よって、データを修正する場合は自身が所有するオリジナルデータを修正し、改めて②の手順を踏むことになる。

6. Web言語地図を利用する際の注意点

最後に、Web言語地図を利用する際の注意点について、2点ほど簡潔に述べる。

Web言語地図を利用して描画・分析を行う場合、Web言語地図に虚偽のデータや不正確なデータが紛れることがないとはいえない。このような問題を考慮したため、前述したように参加登録がなければデータの管理はできないようなシステムをとっている。しかし、Web言語地図を用いて分析を行う場合は、登録データの性質・属性をよく理解した上で使用する必要があるだろう。データの性質・属性はデータ選択画面で閲覧することができる。

また、Web言語地図の公開データのみを用いた報告などがなされる場合も想定される。本サイトはCreative Commons Licenses (<http://creativecommons.jp/licenses/>) の考えにのっとり、研究・教育を目的とした非営利利用については、「クレジット表示・非改変」の条件の下、申請不要・無料での二次使用を許可している¹⁴⁾。そのため、本サイトにおけるデータ共有に同意した提供者本人が意図しない形で二次利用される可能性があることについても、十分な理解が必要だろう。

7. 今後の課題

以上、日本大学Web言語地図を用いたデータ描画方法、Web上にデータをアーカイブするためのデータ統合・共有プロセス、ならびにその管理方法を解説した。Web言語地図を用いたデータの管理・分析が広く行われるようになれば、より動的なデータ管理・分析に繋がると予想される。しかし、本Web言語地図は未だ試行段階にあるため、運用をしながら本システムの改善をしていくことになる。そのためには、本サイトの利用者・登録者がひとりでも多くなることを期待したい。

その他予期される課題として、利用者が増えた場合のデータ形式の不統一、著作権にかかわる問題などがある。

本サイトの利用に際して、お気づきの点などがあれば、国文学科または本プロジェクト専用のアドレス (nichigo-nichibun@chs.nihon-u.ac.jp) まで、ぜひお知らせいただきたい。

【付記】

本研究は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究」(研究代表：加藤直人)によるものである。

【謝辞】

調査ならびに本プロジェクトにご協力くださった多くの方々に厚く御礼申し上げます。Web言語地図の改訂にあたっては、「WebGISで体感する江戸・東京」展示会(2012年10月15日～20日)、ならびに富山大学で開催された2012年度日本語学会秋季大会(2012年11月4日)の場で受けたコメントを参考にしました。鉄道駅GISデータは同プロジェクト地理情報班から提供を受けました。

引用文献

- 出野憲司・大島一郎・久野マリ子・竹林暁(2002)「インターネット上で方言情報を共有する試み—東京都言語調査から—」『第16回日本音声学全国大会予稿集』,pp.65-70.
- 大西拓一郎(2002)「全国型資料と調査の課題—Jdnet構想—」佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎編『方言地理学の課題』明治書院,pp.389-402.
- 荻野綱男(1999a)「言語研究と言語データの共有 第1回調査の主旨と電子メール使用」『日本語学』18(9), pp.118-122.
- 荻野綱男(1999b)「言語研究と言語データの共有 第6回データ収集に関する問題」『日本語学』19(2), pp.90-96.
- 林直樹・田中ゆかり(2012)「地理的言語データの統合的分析—首都圏アクセントを事例とした試行—」『日本語学会2012年度秋季大会予稿集』pp.241-246.

参考サイト

電通総研メディアイノベーション研究部「クラウドサービス利用者への利用実態と意識に関する調査」(<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2012/pdf/2012103-0920.pdf>) (2012年12月26日最終閲覧)

注

- 1) 荻野(1999b)では、電子コーパスを主要な研究資源とする研究者に比べ、アンケートデータならびに実験データを主要な研究資源とする研究者は、データ共有の割合が低いことを示している。
- 2) 出野他(2002)では、『新・東京都言語地図』のデータを用いたサイトを公開する予定でURLが記載されているものの、2012年12月26日現在閲覧することはできないようである。
- 3) 2012年9月に行われた調査によると、ネット上で任意にデータ管理ができるクラウドサービスを推定748万人が利用している(電通総研メディアイノベーション研究部)。

- 4) 通常の地図・地形地図・航空写真の3種類が選択できる。その他、画面右に表示されている人型のアイコンをドラッグすることにより、Google Earthに移行することもできる。ただし、Google Earthではアイコンなどは配置されない。
- 5) 2013年3月末日予定。
- 6) タブレット型PCの場合はピンチイン・ピンチアウト（2本の指を画面上に載せてその間隔を縮める、もしくは広げる動作）を行うと、拡大・縮小が行える。
- 7) WindowsであればPrtScキーで、Macであれば「コマンド+Shift+3」キーで行うことができる。Web上の画面を画像として保存するサービスは、Web Screenshots (<http://ctrlq.org/screenshots/>)・Fast Stone Capture (<http://www.gigafree.net/tool/capture/faststonecapture.html>) などがある。
- 8) 管理上の理由により、すべてのデータを一覧することはできない。
- 9) 林・田中（2012）においてWeb言語地図を用いて調査時期・調査地域の異なるふたつのデータを統合の上、言語変化過程の解釈を試みたところ、データを一元的に描画する方式をとっていたために調査時期の違いが反映されず、誤読の可能性をもつことが確認された。異なるデータを一元的に描画する利点も生かしつつ、このような誤読を回避するために、描画対象データの選択機能を追加することとした。
- 10) ソフトへの依存がない点で汎用性が高く、2013年現在一般的と思われるためにCSV形式を採用した。Excelなどのソフトでデータを作成した場合は、CSVに変換して保存を行うことでアップロード可能な形式となる。「名前を付けて保存」→「ファイルの種類」でCSV形式を選択して保存。
- 11) 話者情報データ・言語情報データを別々に管理せず、一括管理する場合のデータにも対応できるように、テンプレートデータとテンプレートデータ作成マニュアルをWeb上に掲げている。
- 12) 調査地点データを住所で管理している場合は、東京大学空間情報科学研究センターが提供する「CSVアドレスマッチングサービス」(http://newspat.csis.u-tokyo.ac.jp/geocode/modules/addmatch/index.php?content_id=1)を使用することで、緯度経度に変換することが可能である。
- 13) 退会後もWeb言語地図上での公開、提供データの共有化が継続される。詳細は、ポータルサイトから閲覧可能なWeb言語地図の利用規約・参加規約参照。
- 14) 本サイトのCCライセンス条件は、「権利者表示-非営利-改変禁止 (CC-BY-NC-ND)」。保護期間切れまたは権利放棄相当のパブリック・ドメインはもとよりこの限りではない。また、営利目的の二次使用については別に定める利用規約にのっとり事前申請の上、有料と定める。詳細は、ポータルサイトから閲覧可能なWeb言語地図の利用規約参照。

(はやし なおき, 大学院博士後期課程・文理学部RA)
(たなか ゆかり, 本学教授)

首都圏方言若年層の音声の変種

久野 マリ子

(國學院大學)

1. 首都圏方言の大学生が話している音声の実態

首都圏方言の実態を示す事象を把握しやすい大学生の話しことばについて報告する。

丁寧ではないくだけた会話の場面で首都圏方言の大学生が話していることばに、観察される現象をみていく。首都圏出身の学生達の多くは、自分は共通語・標準語の話し手であるを意識している。彼らの話し方は、伝統的地域方言を受け継がず、埼玉や千葉や埼玉に住んでいる移住者2世、3世で、1世の親が話す学習した共通語を母方言にしている。そのため、共通語や標準語の話し方がどのようなものであるかは自覚的ではない。

次に、首都圏方言の大学生の音声と若者語の実態の一部を報告する。

平成24年25年4～6月に國學院大學で調査した。平成24年度の調査では、学生は222人。内訳は東京42、埼玉41、神奈川33、千葉25である。あとは、栃木12、静岡7、長野5、北海道4、茨城4、広島4。平成25年どの調査でもほとんどの学生の生育地が首都圏であるのが特徴である。調査方法は久野担当のクラスでアンケートを実施した。設問に対して該当する形式を選択し、該当しなければ自由記述にしてもらった。学生はほとんどが1、2年生で、3年生、4年生も含む。専攻は経済、法学、文学、人間開発、神道文化の全学部。

2. 調査項目

音声的变化は語毎の個別の変化ではなく、音環境が揃えば一斉に変化するという性質がある。ここでの調査項目は、個人差やつかの間の流行や臨時的な語の変化ではなく多くの学生に見られる変異事象と思われる項目を選んだ。

3. 結果

3.1 「雰囲気」をフィンキと発音するかどうか。フィンキが間違いであると気づいたのはいつか。小学生の時か、中学生の時か、高校生の時か、大学生の時か。

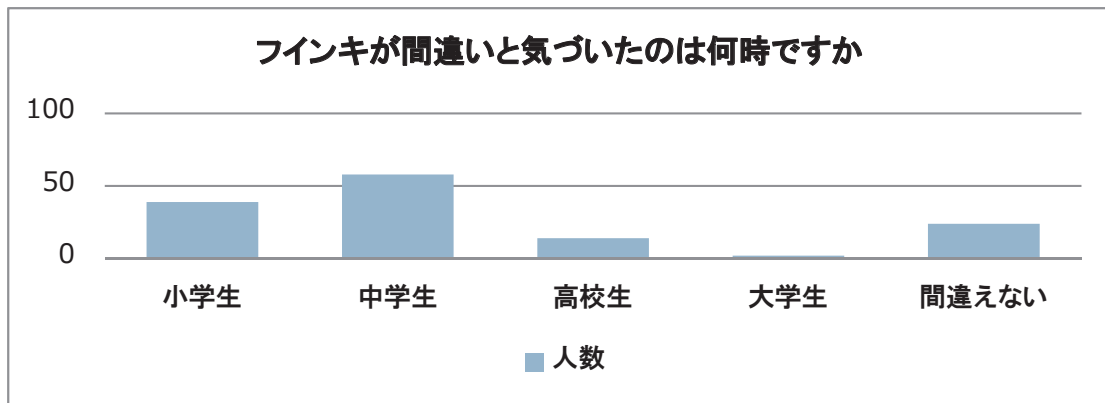
「雰囲気」を「フィンキ」と発音する事象が指摘されている。関西の研究者は関西の新しい方言だとする報告をしている。携帯電話やワープロの変換でも最近の機種では「ふいんき」と入力しても雰囲気(ふんいき)の誤りとして、正しい漢字表記が現れるし、携帯電話では「ふいんき」「ふんいき」どちらの入力でも「雰囲気」と変換される。

グラフ1からも明らかなように、首都圏の若年層ではほとんどの学生が「雰囲気」を「フィンキ」と言っていたことがわかる。小学生、中学生の時に気づいた学生が多いのは漢字を学習することによって、フィンキをフンイキに引き戻したと解釈される。

「雰囲気」を「ふいんき」と発音する現象は小田原方言の老年層では認められないから、こ

の現象は新たに起こった日本語音声の変異であることがわかる。

ここで注意したいのは、「ふいんき」と間違っただけでないと答えた学生がかなりの数であることである。音声変化が一斉に起こるという予測からすれば、この変化はまだ語的な変化の段階にあるのかもしれない。同じ環境での語例調査が必要である。

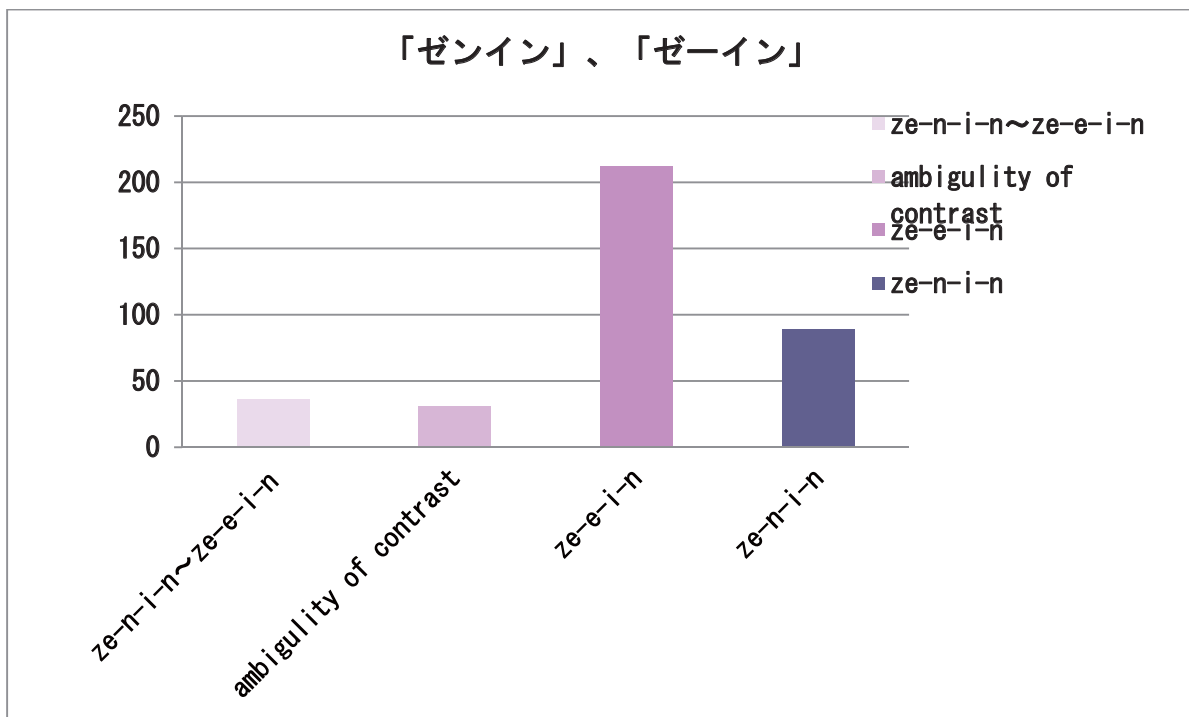


グラフ1 フイんキが間違いと気づいた時期

3. 2 「全員」「原因」を「ゼーイン」「ゲーイン」と発音するか

次がグラフ2である。

「雰囲気」を「フイんキ」と発音する事象は、撥音と母音イが連続する環境である。類似の環境で、全員を「ゼーイン」という発音を聞くことが増えているので、この事例について調査した。



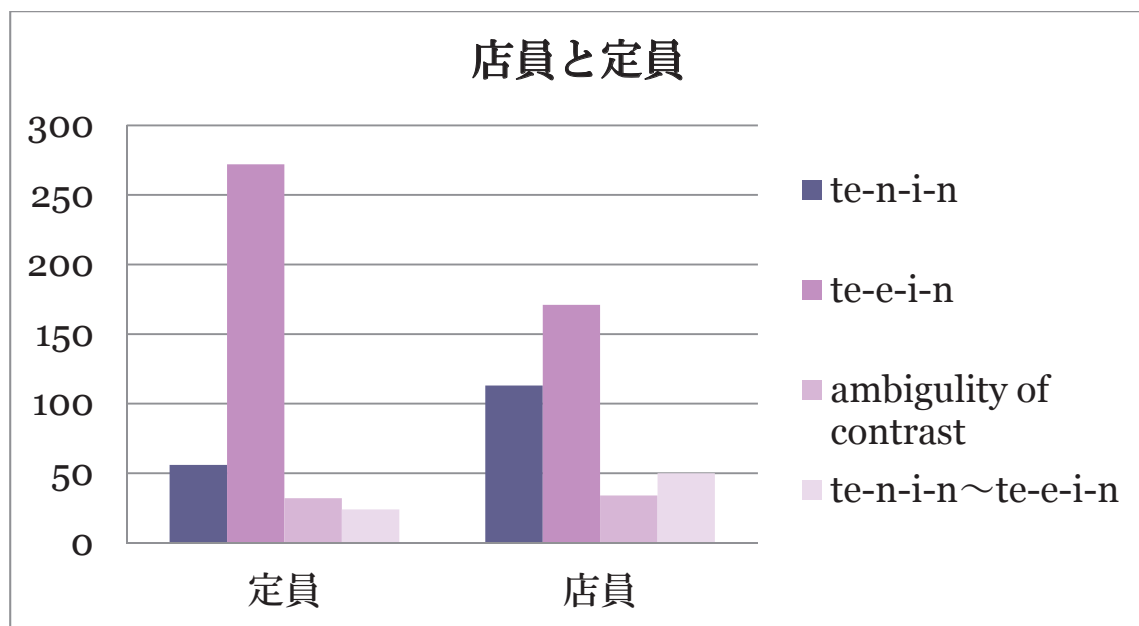
グラフ2 「全員」(ゼンイン・ゼーイン)

多くの学生が「全員」を「ゼーイン」と発音していることがわかる。やはり「ゼーイン」とは言わないと答えている学生がいる。この語の場合、学生にとって、ミニマルペアとなる語「税印」「鯨飲」などが使用語彙ではない。調査の時、なじみ度に注意する必要があった。

3.3 「定員」と「店員」

「定員」「店員」について、発音が異なっているかを調べた。グラフ3である。

この語は第2拍目が長音か撥音かで対立する語である。どちらの語も学生にとって馴染み度は高いが、「定員」も「店員」も同じ音に発音すると答えた学生が多くいることがわかる。「店員」は「テンイン」よりも「テーイン」と解答した学生の方が多い。撥音よりも長音のほう優勢である。それが、グラフ3である。

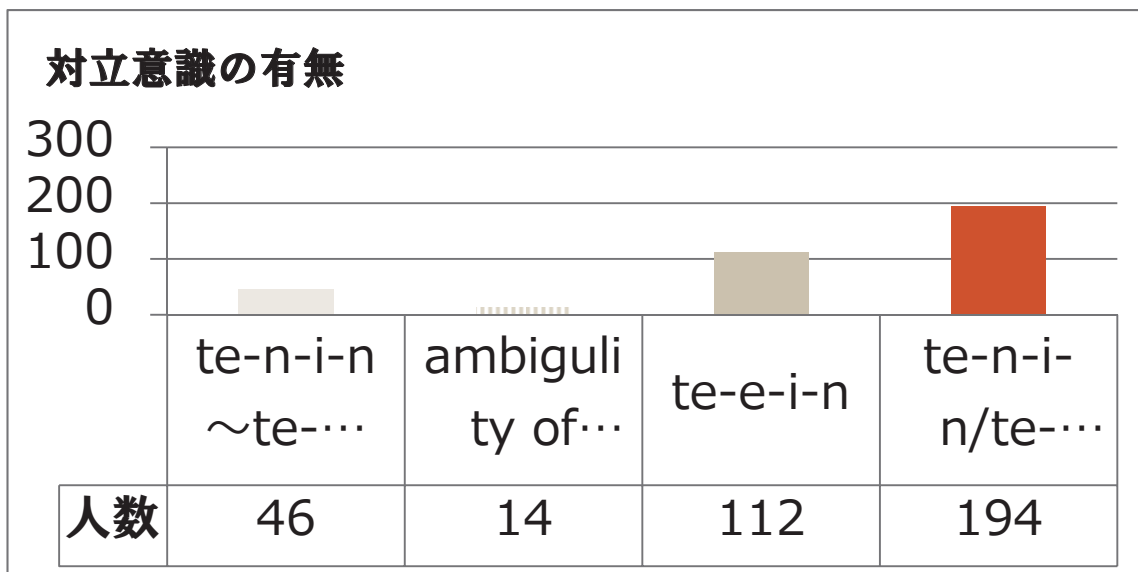


グラフ3 「店員」と「定員」

次に「店員」と「定員」が同じ発音だと自覚しているかどうかを聞いた。それが、グラフ4である。

グラフ4から、「定員」も「店員」も同じように発音していると答えた学生が112名いることがわかる。一方、二つの語を違う音であると意識している学生は194名と最も多い。しかし、どちらも発音が混ざると答えた学生が46名いることから、この二つの語が同じ音かあるいはユレルと意識している学生が多いことがわかる。

少数であるが14名はあまりその差がはっきりしないという学生がいる。

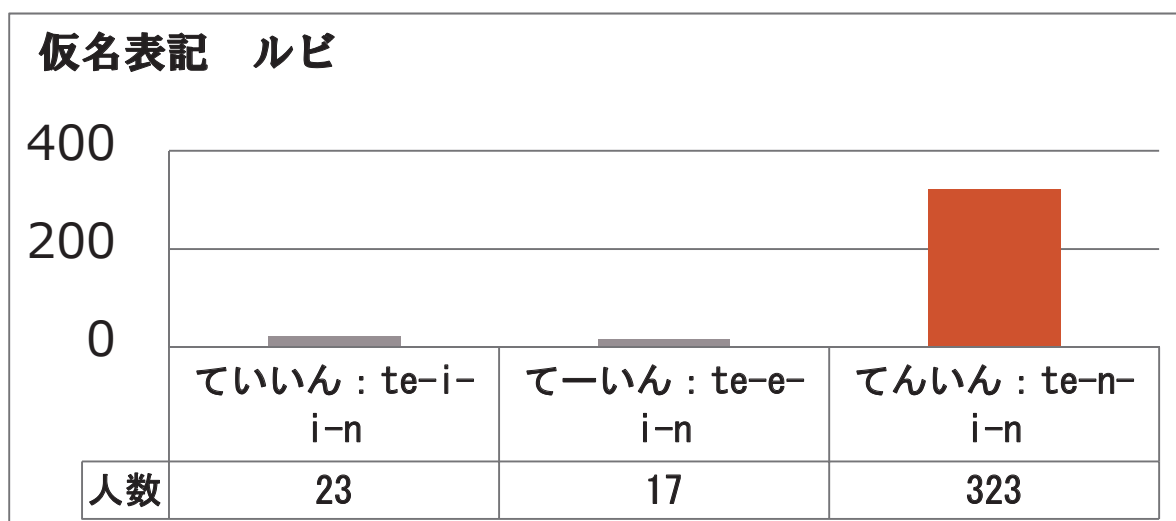


グラフ4 「定員」と「店員」の対立意識

それでは、同じように発音しているという学生が多い中、音韻対立としての意識が薄れているかどうかを調べたのが、**グラフ5**である。

「店員」に読み仮名のルビを質問した。大多数の学生が「ていいん」と正しくルビをつけている。40名の学生が「定員」と同じ仮名を書いている。

このことから発音では「定員」「店員」は同じように発音しているが、第2拍目がそれぞれ異なる文字であることはまだ意識されている。音声と文字の意識の変化に差が見られる例である。学生の中には、発音は同じだが、「は」と書いて「ワ」と読むのと同じような仮名遣いの問題と捉えているというコメントを書いた学生もいた。



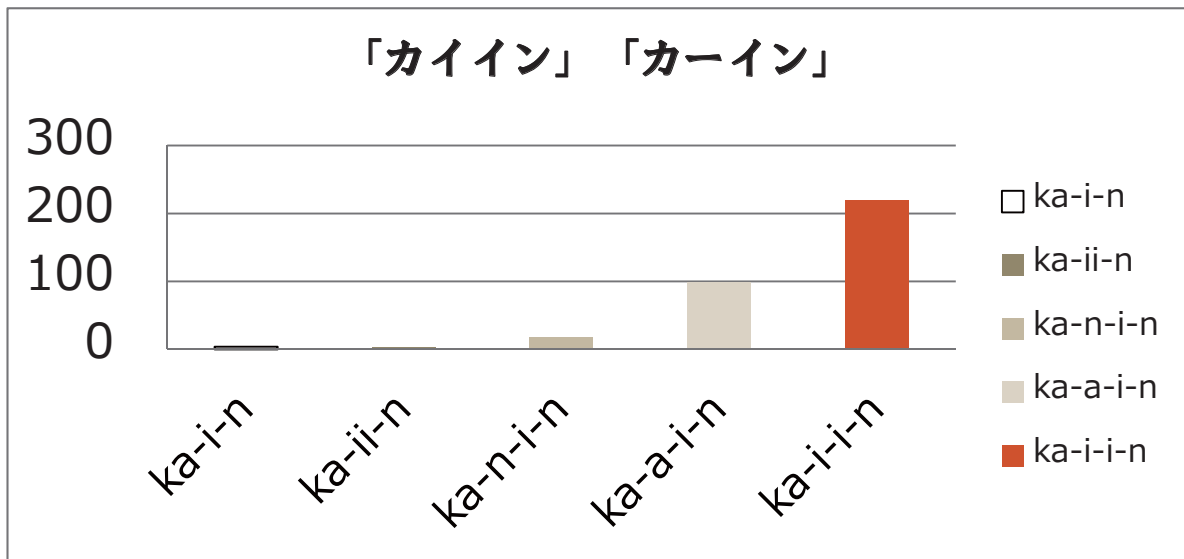
グラフ5 「店員」の読み仮名のルビ

3. 4 「会員」

以下、第2拍目がイと長音で対立する語について調査した。

「会員」という語で、アイの連母音のイが融合して長音化する例である。グラフ6

伝統的東京方言のように第2拍目が融合して、ケーインとなると答えた学生はいない。アイの連母音が融合してアーに発音する学生がかなりいることが分かる。ただ、第2拍と第3拍の音声の表記に苦労している回答が多かった。融合しかけているか、融合しても伝統的な首都圏方言の連母音の融合とは異なるアーに融合する例が多いことがわかる。アイの連母音がエーになる方言の他にアーになる方言は、十津川村方言とか、出雲方言に報告があるが、関東方言では珍しい。

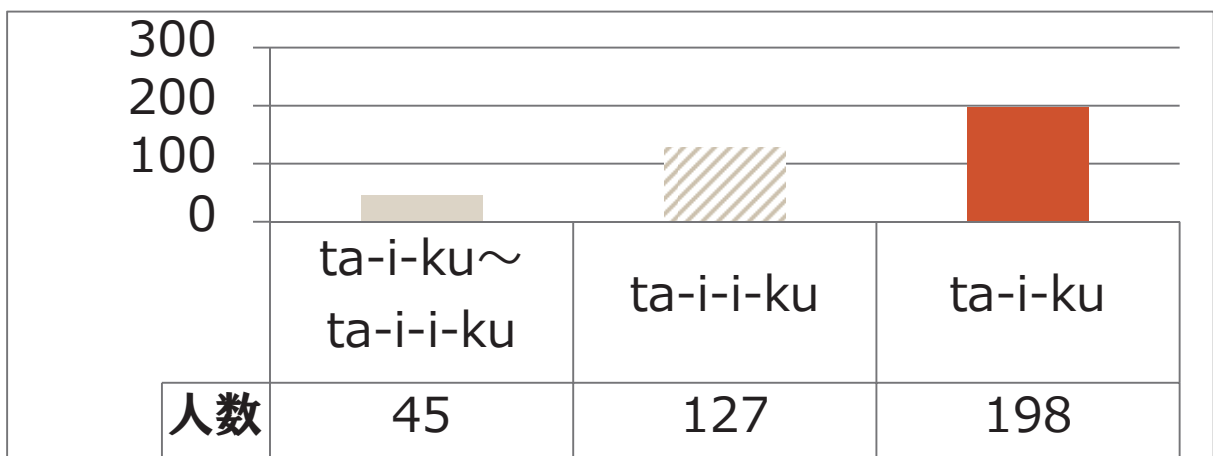


グラフ6 「会員」(カイイン・カーイン)

3. 5 「体育」「女王」

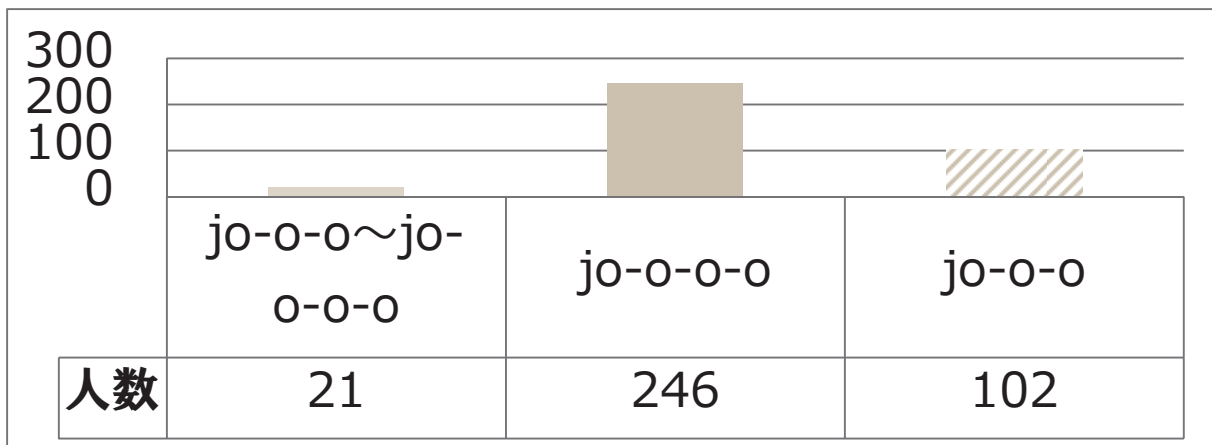
次に東京にある気づかない音声特徴をみていく。

グラフ7は「体育」をタイクというかタイイクと言うかのグラフである。



グラフ7 「体育」(タイク・タイイク)

グラフ8は「女王」を、「ジョオウ」というか「ジョオオウ」というかのグラフである。



グラフ8 「女王」(ジョオウ・ジョオオウ)

いずれも、「タイク」「ジョーオー」が最も多い。伝統的東京方言では、「タイク」「ジョーオー」が優勢で、自覚されないまま首都圏方言に受け継がれている例である。この事象は首都圏の若年層だけでなく、小田原方言の高年層にも優勢であることから、かつて広く関東方言で優勢であった事象であることが推測される。

4. この調査からわかること

以上述べてきたように、首都圏方言の若年層に音声変化がみられる。その現象は、個別ごとの語毎の音変化ではなく広がっていることが予測される。つまり、第2拍が撥音、次がイ母音の語において4拍以上の語の語中の撥音と長音の対立が薄れ、中和現象を起こしていることである。母音がイ以外の語においても緩やかではあるがそのような現象が起きていることが予測されるが今後の課題である。このような中和の現象は、撥音+母音、撥音+いが目立つが、撥音+母音であれば発音上は対立がないと答える学生も少数であるがいる。さらに、この変化は日本語全体に広がっている可能性があるが、これも今後の課題としたい。

参考文献

- 秋永一枝ほか(2007)『東京都のことば』明治書院。
- 井上史雄編(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』(昭和56・57年度 文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)。
- 大島一郎・久野マリ子(1991)「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(1)(文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書)。
- 大島一郎・久野マリ子(1993)「東京都の言語実態の諸相」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(3)(文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放

送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書).

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996)『言語学大辞典 第6巻』三省堂.
- 木川行央・久野マリ子 (2012)「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」『Scientific approaches to language 11』神田外語大学.
- 国広哲弥・中本正智 (1984)『東京語のゆれ調査報告』(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」総括班).
- 久野マリ子編 (2009)『首都圏方言の研究』國學院大學大学院文学研究科.
- 久野マリ子編 (2010-2013)『首都圏方言の研究』(1) - (4) 國學院大學大学院文学研究科久野研究室.
- 久野マリ子・木川行央 (2012)「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要 18』神田外語大学.
- 國學院大學日本文化研究所編 (1995)『東京語のゆくえ』東京堂.
- 斎藤純男 (2006)『日本語音声学入門【改訂版】』三省堂.
- ジェフリー・K・プラム、ウィリアム・A・ラデュサー著、土田滋、福井玲、中川裕訳 (2003)『世界音声記号辞典』三省堂.
- 東京都教育委員会編 (1986)『東京都言語地図』東京都教育委員会.
- 日本音声学会 (1976)『音声学大辞典』三修社.

首都圏における方言の地域資源としての活用—通信調査の結果から—

亀田 裕見
(文教大学文学部)

1. 研究目的

日本各地で、方言が土産物に印刷されたり、商品の名前に方言が使われたり、また方言でコピーが書かれた観光ポスターやパンフレットが作られたりするのを目にする。このような方言の使用は、方言本来の地域言語集団における意思伝達という目的外の用法である。つまり「方言の拡張用法」というべきものである。背景には方言に「経済価値」があるという考え方がある。すなわち、方言を使うことで土産物の売上げが伸びたり、観光客が増加したりするというのである。これらに関する研究は、言語景観または方言景観として、散見される。本論では、このような方言資源の利用について、方言を多く使う地域ではなく、あえて首都圏で調査をした結果を報告する。本論でいう首都圏とは、東京都・神奈川県・埼玉県、千葉県のみとする。

これまでの言語景観としての研究は、事例の散発的な報告であることが多い。本論は量的な面からも検討したい。そのため、一律の働きかけとして通信調査を行った。

2. 調査の概要

各市町村の3つの部署「広報課」・「観光課」・「教育委員会」に、さらに「商工会議所」の4ヶ所に送付した。送付先は首都圏だけで合計で918ヶ所。回答が得られたのは568ヶ所になる。回収率は表に示すとおり、約60%であった。ちなみに、首都圏と比較するために、山形県・大阪府・高知県の三県にも同様の調査をした。こちらは合計437ヶ所で、回答が得られたのは219ヶ所であった。

【表1】通信調査送付先数

	広報課	観光課	教育委員会	商工会議所	合計
千葉県	54	54	51	42	201
埼玉県	73	65	64	56	258
東京都	62	61	62	59	244
神奈川県	58	57	33	67	215
首都圏小計	247	237	210	224	918
山形県	32	32	32	32	128
高知県	34	32	34	29	129
大阪府	48	49	43	40	180
合計	361	350	319	250	1280

【表2】調査回答回収率

	広報課	教育委員会	観光課	商工会議所	平均
千葉県	61.10%	74.50%	61.10%	47.60%	61.10%
埼玉県	80.80%	73.40%	73.80%	35.70%	66.00%
東京都	61.30%	54.80%	77.00%	42.40%	58.90%
神奈川県	62.10%	54.50%	63.20%	53.70%	58.40%
首都圏平均	67.20%	65.20%	69.20%	45.10%	61.70%
山形県	59.40%	50.00%	68.80%	31.30%	52.30%
高知県	32.40%	47.10%	50.00%	20.70%	37.50%
大阪府	66.70%	55.80%	79.60%	20.00%	55.50%
全平均	63.20%	60.50%	67.40%	50.00%	60.30%

量に対して、質についても首都圏では地方と異なる特徴があると予想される。日高（1996）では方言を利用することにより、次のような効果があると述べている。

- 第1 方言により強く地域色を出せる（地域性）
- 第2 地域の個性をアピールできる（独自性）

- 第3 類似・同類の他商品から区別できる（個性化）
- 第4 他地域の人々の関心を引くことができる（意外性）
- 第5 その地域の人々の心情を率直・的確に表現できる（迫真力）

首都圏の方言利用では、この全ての効果があるとは考えにくいと思われる。いずれにせよ、本論の特徴は、一律の働きかけに対する数量的な反応を報告するという点にある。

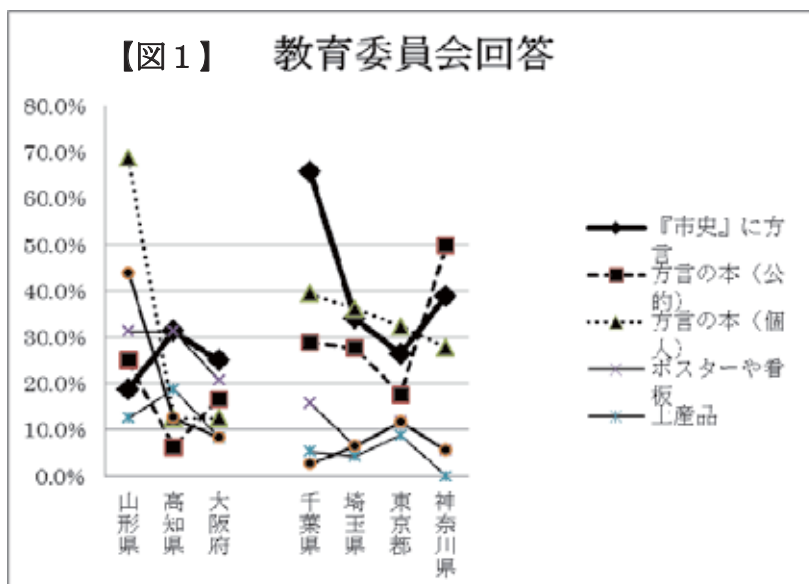
以下、調査の結果を三つに分けて報告する。

3. 事例数の特徴

各調査先に尋ねた事例は次のような内容である。

- ・広報課
 - ①市民憲章・標語・スローガン ②広報誌に地元の方言
 - ③ ポスターや看板 ④包装をつけた特産品や商品⑤標識
- ・観光課
 - ①土産物 ②特産品や商品 ③観光客むけポスター・看板
 - ④ 鉄道の駅や道の駅で商品・パンフレット・看板
- ・教育委員会
 - ① 『市史』に方言の記述があるか ②方言の本（公的）③方言の本（個人）
 - ⑤ ポスターや看板 ⑥土産物 ⑦特産品や商品 ⑦市民サークル
- ・商工会議所
 - ①標語・スローガン・キャッチコピー ②ポスターや看板 ③土産物
 - ④包装をつけた特産品や商品 ⑤ピーアールやコピー
 - ⑥ 観光促進活動 ⑦地元の消費活動を活性化

この中から、これは教育委員会からの回答された事例数を図1に示す。特産品や土産物に方言



を使用するのは山形県以外では非常に少ない。首都圏で目立つのは、千葉県に「市史」や「町史」のに方言の記載があるところが多い点である。また、神奈川県で公的に方言に関する本の作成が多い。その一方で、神奈川県が一番方言の利用が少ない。つまり、神奈川県においては、方言は「かつてあったもの」と意識され、その記録を残すことについては積極的だが、現在方

言を活用することには抵抗があると解釈される。

4. 使用される方言の特徴

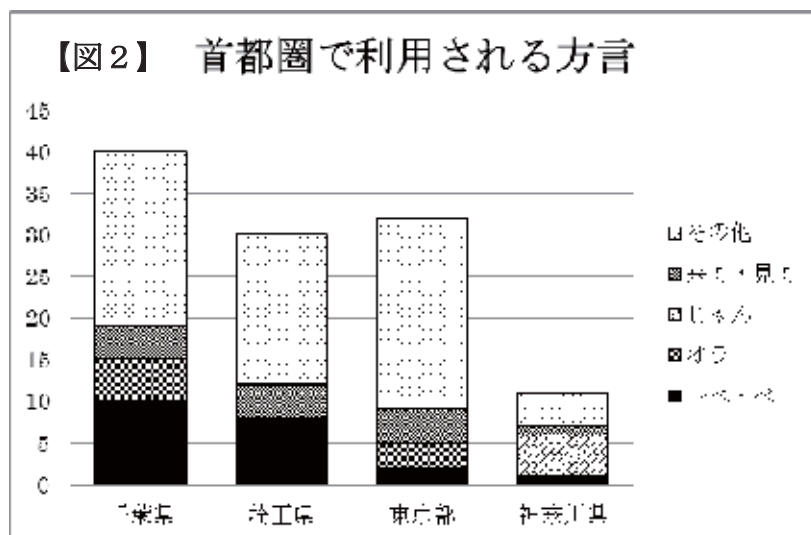
次に、使用されている具体的な方言の単語とその数量について、グラフ2に示す。

まず、全体的な報告の事例が、神奈川県が圧倒的に少なく、千葉県と埼玉県に多いです。東京都の報告も多いが、これは島嶼部などの観光地の報告が多いためである。使用されている語は、バラティがあまり豊富ではない。よく使われることばには、千葉県・埼玉県で意志・推量・勧誘の意味を表す表現「～べ」「～ペ」がある。神奈川県では同意を求める表現「～じゃん」がある。また、千葉県や東京都には一人称の「オラ」もある。ここに資料を挙げていないが、山形県や高知県などの地方と比べると、首都圏では使用される単語の種類が少ないのが特徴であるといえる。使う場面も、商品に方言を書き込むようなものはほとんどなく、観光客をターゲットにした「いらっしやい」「見てください」「また来てください」などの表現に方言をつかっていることが多い。

先ほどの図1とあわせて考えるに、神奈川では、現在においてはほとんど方言を使用しないと認識しているが、「～じゃん」だけは唯一現在使用している方言という自覚があり、これを神奈川方言と認めているということになる。

【表3】 報告事例で使われている具体的な方言

	～べ・ペ	オラ	～じゃん	「来て・見て」呼びかけ	その他
千葉県	10(25%)	5(13%)(おらが)	—	4(10%)	21(53%)
埼玉県	8(26%)	—	—	4(13%)	18(58%)
東京都	2(6%)	3(9%)(おらほ)	—	4(12%)	23(70%)
神奈川県	1(9%)	—	5(45%)	1(9%)	4(36%)

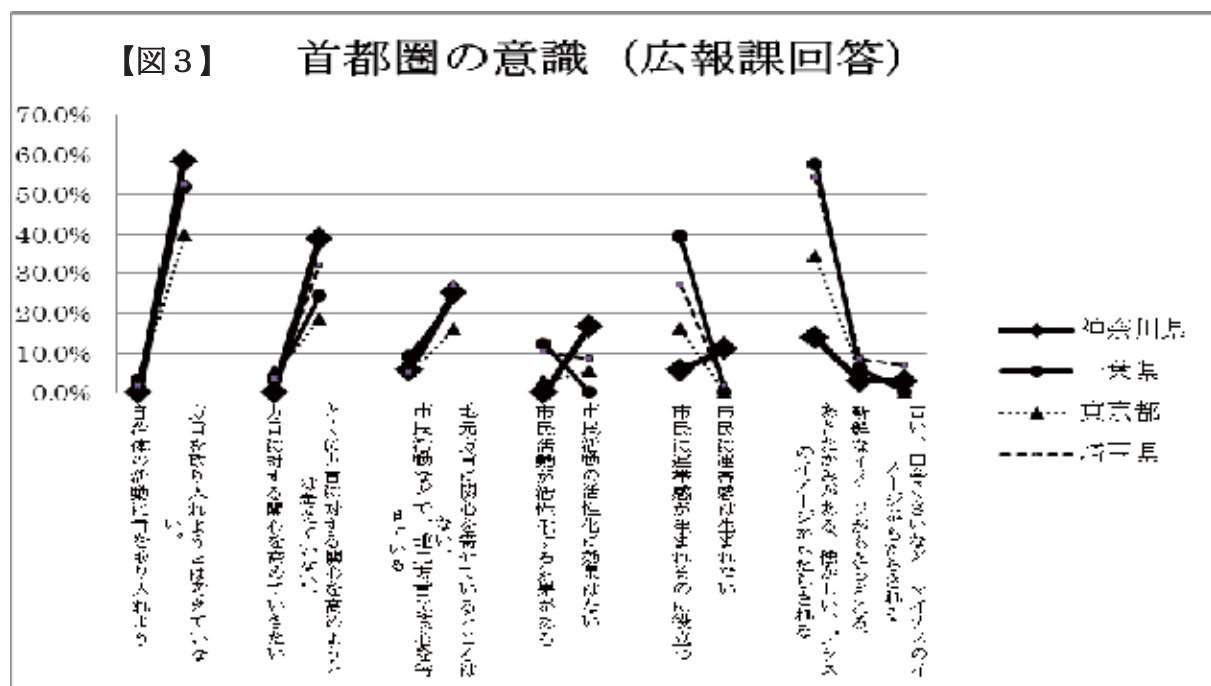


5. 意識調査の特徴

最後に、方言を様々な場面で使用することに対する意識についての結果をみる。広報課の調査結果を取り上げる。質問内容は以下のとおりである。

1. 自治体の活動に、地元方言を取り入れようと考えている。
2. 自治体の活動に、とくに地元方言を取り入れようとは考えていない。
3. 自治体として、地元方言に対する関心を高めていきたいと考えている。
4. 自治体としては、とくに地元方言に対する関心を高めようとは考えていない。
5. 市民活動などで、地元方言に感心を寄せているところがある。
6. 市民活動などで、地元方言に感心を寄せているところはほとんどない。
7. 地元方言に対する感心を高めると、市民活動が活性化する効果があると考えている。
8. 地元方言に対する感心を高めても、市民活動の活性化に効果はないと考えている。
9. 地元方言に対する関心を高めると、市民に連帯感が生まれるのに役立つと思う。
10. 地元方言に対する関心を高めても、市民に連帯感はい生まれないと思う。
11. 自治体の活動に地元方言を使用すると、あたたかみがある、懐かしい、プラスのイメージがもたらされると思う。
12. 自治体の活動に地元方言を使用すると、新鮮なイメージがもたらされると思う。
13. 自治体の活動に地元方言を使用すると、古い、田舎くさいなど、マイナスのイメージがもたらされると思う。

図3は各市町村の広報課の回答結果である。首都圏は全体として、自治体の活動に方言を取り入れるのに消極的である。しかし、千葉県や埼玉県では、方言を使用すれば暖かみや懐かしさという印象がもたらされる、また市民の間に連帯感が生まれるという、はっきりしたプラスイメージに繋がると考えている。これに山形県や高知県と同じである。これに対し、東京都や神奈川県ではプラスイメージを積極的に感じていない。特に、神奈川県は、わずかな差ですが、方言の利用効果に否定的な結果がでており、市民の連帯感はい生まれない、市民活動の活性化に効果はないと考えている。



6. 首都圏の方言資源利用のタイプ分け

以上の結果をまとめる。首都圏は比較他県に比べれば、市民活動や商業活動・観光活動における方言利用は圧倒的に少ない。冒頭で述べた日高（1996）の方言利用効果の5種類についてそれぞれ考えると次のようになる。

まず、第1の地域性については、市民の連帯感をもたらされると期待されている。第2の独自性、第3の個性化、第4の意外性、第5の迫真力については、あまり期待されていないようである。これは方言語彙のバリエーションが乏しいためかと推測される。つまり、「この方言を使えば、それぞれの土地を思い起こさせる」という力が首都圏の方言にはあまりないということであろう。迫真性については、そもそも首都圏では実際の日常における方言使用が減っているためと考えられる。

首都圏における方言の利用方法については、商品に方言を書き込んだり、商品や土産物の命名に活用したりする事例はわずかしかない。使われているのはパンフレットやポスターに書かれた「いらっしやい」「来てください」「見てください」のような呼びかけ型が多い。呼びかけの対象者は観光客だけでなく、地元の住民に対するものも含まれるようである。また、地方でよく目立つ「あおり文句」型の方言使用も首都圏には見られない。「あおり文句」とは、商品の効能や特色をより詳しく伝えるための、メイン商品名に付属して書かれている言葉や、消費者に向けたメッセージのことである。例えば下の写真のように埼玉県「うまかんべー」という名前のトマトには「うまかんべー」と叫びたくなるかも」という文句が付けられている。

さらに、注目すべきは首都圏内でも相違がある点である。首都圏には3タイプあるといえる。第1のタイプは「千葉県・埼玉県タイプ」です。この両県では、商業・観光効果(外的アピール)への期待はそれほど大きくない。しかし、地元の市民の連帯感(すなわち内的アピール)への期待がある。

第2のタイプは「神奈川県タイプ」です。神奈川県では、現在の活動として方言を使用する発想がほとんどないようである。現在は「～じゃん」の他には方言はほとんどないという認識がされているようである。方言は過去にはあったのものとして、方言集などの出版物で記録することについては積極的である。

最後の第3のタイプが「東京タイプ」である。島嶼部での方言利用は積極的で地方タイプ。島嶼部や都心以外の東京都下は「千葉県・埼玉県タイプ」という二つに分かれる。

この3つのタイプは、県単位にみた結果であるが、今後の課題として、県単位ではなく都心からの距離という視点から考えてみることも必要そうである。

文献

日高貢一郎（1996）「方言の有効活用」『方言の現在』（明治書院），362-384.

付記：この内容は「都市言語セミナー11」（2013年8月）でポスター発表した内容である。

首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例 — 多摩地域の「のめっこい」を例として —

三井はるみ
(国立国語研究所)

1. はじめに

首都圏（東京を中心とする都市圏、ほぼ1都3県のエリア）の言語は、そこに生まれ育った人の日常語であると同時に、全国、世界から人の集まる都市の言語であり、標準語の基盤となる基準性を求められる言語でもある。人口の流動性、情報と物の流通量の多さ、社会的多様性により、新しい事象が生じやすく変化も早く、社会的サブグループによる違いも目立つ。このような首都圏の言語の全体像を見通すことは容易ではなく、いずれの観点から切り込んでも、常に「それは一部に過ぎない」という不全感がぬぐえない。特に地域の日常語としての方言は、共通語との明確な違いが捉えにくいこともあって影が薄く、首都圏内にことばの地域差があるということも、現在一般にはほとんど意識されなくなっている。

そのような中で、本稿ではあえて、地域の中の方言の観点から首都圏内の一エリアの状況を取り上げてみたいと思う。対象とするのは、東京23区の西側に位置する多摩地域である。東京都の人口約1323万人のうち、多摩地域（島嶼部を除く23区以外の東京都）には約420万人が居住する（2012年現在）。人口の流入は多く、共通語化はいち早く完了し、特に若年層にとって「方言」は、基本的には「どこかよそのことば」である。このような中で、一部のかろうじて残存した在来方言が、地域性の表象として利用されるケースが現れてきた。この事例を通して首都圏地域における地域語の一側面を見てみたい。

2. 在来方言の地域資源としての利用

全国的な「方言の価値の上昇」の時代の中で、従来地元方言の存在意義が意識されにくかった首都圏西郊多摩地域でも、近年、地元の在来方言をネーミングやキャッチフレーズに利用する例が見られるようになってきた。

- (1) 地域でいちばんののめっこい信用金庫（青梅信用金庫キャッチフレーズ、本店：青梅市）（図1）
- (2) ふんごまっしええ！ 武蔵村山へ！（ウォーキングイベント、武蔵村山商工会、2010年10月16日）（図2）
- (3) うまかんべえ〜祭（東大和市グルメコンテスト、第1回：2012年4月28日）
- (4) 来さっせえ 奥多摩（奥多摩観光協会ニューズレタータイトル、2007年創刊）
- (5) おこじゅ、おっぺし餅（和菓子の商品名、(有)紀ノ国屋、本店：武蔵村山市）
- (6) あしっこ（立川市立第九小学校周年記念誌タイトル、100周年：1980年、130周年：2002年）



図2 ふんごまっしええ! 武蔵村山へ!
(2010年9月, 多摩都市モノレール車内)

図1 地域でいちばんのめっこい信用金庫
(2011年6月, 青梅信用金庫玉川上水支店)

地域の人に向けて、あるいは来訪者に向けて、地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気を出し出すこのような使われ方は、方言主流社会では以前から見られたものだが(日高1996他)、共通語中心社会である首都圏では、必ずしも目立つものではなかった。さらにこれらの単語や表現は、すでに大方の人々の日常生活の場で用いられなくなって久しく、住民に転入者の割合が高いことと相まって、受け手にとっては全く初めて目にする事ばであることも珍しくない。むしろそのことが新鮮味につながり、利用価値を高めていると考えられる。つまりこの現象は、地元の在来方言が、地域を表象する利用可能な資源として再発見され、再生利用が行われるようになったもの、と位置づけることができる。近年指摘されている「フォークロリズム¹による方言の利用」(日高2009)、「コミュニケーション・ツールとしての「ジモ方言」²の使用」(田中2011)にあたる事例である。

このように地域資源として再生利用される在来方言(俚言)として、特に「のめっこい」ということばが目につく。

- (7) 地域でいちばんのめっこい信用金庫(青梅信用金庫, 2007年度～)³ = (1)再掲
- (8) 元気の種まき ～みんなでのめっこく～(日の出町総合健康事業, 2010年度～)
- (9) のめっ恋まち東村山 ～自然・歴史・文化があふれ、人と人がふれあうまち～(東村山市観光振興プランキャッチフレーズ, 2012年3月策定)

¹ 民俗文化が本来のコンテクスト(文脈)を離れて見出される現象(日高2009)

² 生育地で使用されている「方言」であるものの、自分自身の方言としては使用せず、自分より上の世代である両親や祖父母世代の使用方言として見聞きしているもの(田中2011:19)

³ 同信金理事長のインタビュー記事である森田(2007)には、キャッチフレーズとして「のめっこい」を導入した経緯が述べられている。「地域との結びつきを深める」という経営姿勢を地元方言でシンボル化することの意義、それによって期待されるインパクトやメリットに触れており、地域資源としての方言の再生利用の明確な意図がうかがわれる。4節参照。

- (10) のめっこい料理めしあがれ（奥多摩町地域誌『たまもの』2，特集タイトル，2009年4月）
 (11) 丹波山温泉 のめっこい湯⁴（山梨県丹波山村営の温泉施設名，2000年4月26日営業開始）

ここでは、この「のめっこい」という語を代表例として取り上げ、①在来方言の再生利用の実態と背景、②再生利用によって生じる新たな受容と変容の兆し、の二点について報告する。資料は、この語に関して行った4種の小調査、①意味・用法に関する方言集調査、②多摩地域とその隣接地域における利用例調査、③受容と理解に関するWeb調査、④受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査の結果による。

3. 「のめっこい」の意味・用法

3.1 多摩地域の方言集から

はじめに在来方言での「のめっこい」の意味を確認する。「のめっこい」は主として関東西部に分布する⁵形容詞で、「手触りがなめらかである」「口当たり・喉ごしがなめらかである」という接触感覚に関する意味（〈接触感覚〉の意味）と、そこから派生したと考えられる「人間関係が円滑である，親しい，親しみがある」という抽象的な意味（〈人間関係〉の意味）を併せ持っている。図3は、多摩地域（隣接地域を含む）の方言集に記載されている「のめっこい」の意味を地図上に示したものである。以下に記述例を挙げる。

- (12) のめっこい：なめらか。「夕べいっぺえ飲んだら，今朝がた，顔がのめっこいや。」（鈴木為佐生（1987）『立川の方言』立川市教育委員会）【立川市】
 (13) のめっこい：人付き合いがいい。仲がよい。「のめっこくやってるってえ話だで」（武蔵野市開発公社（2009）『武蔵野界限 むかし語り』）【武蔵野市】
 (14) のめっこい（形）①表面がなめらかである。つるつるしている。②人間関係がうまく行っている。円滑である。「あの人はのめっこいからその話は俺の方からしとくべー。」（関谷和（2004）『子どものころ聞いたことば話していたことば（増補・改訂版）』）【埼玉県入間市】

〈接触感覚〉の意味のみを載せるもの（(12)），〈人間関係〉の意味のみを載せるもの（(13)），両方の意味を載せるもの（(14)）がある。ただしこれが地域差を反映したものとは即断できない。2010～2011年に立川市内生育の60～80歳代の話者4名に確認したところ，70～80歳代の話者は、「のめっこい」ものの典型として、「白くてきめの細かい肌」を挙げた上で、「仲がよい，話しやすい」といった人間関係に関する使い方にも「違和感はない」とのことであった。檜原村

⁴ 促音を含まない「のめこい」は諸方言集には記載がない。施設名とする際に語形の方角らしさを薄めたものと見られる。のめこい湯公式サイトには、「【のめこいとは？】…「のめっこい」とは丹波山村の方言で「ツルツル」「スベスベ」という意味です。」（<http://www.nomekoiyu.com/index2.html>，2013年8月8日閲覧）とあり，説明中の語形は促音を含む「のめっこい」である。

⁵ 『日本方言大辞典』で「のめっこい」の使用地域として挙げられている都県は，秋田，栃木，群馬，埼玉，東京，神奈川，山梨である。



図3 多摩地域の方言集における「のめっこい」の意味⁶

生育の80歳代の話者2名（2012年確認）もほぼ同様であった。一方立川市の60歳代の話者は、この語は上の世代が使うのを聞くといい、使うとすると「うどんの喉ごしがよい」ことにほぼ限られる、とした。〈接触感覚〉の意味から〈人間関係〉の意味が派生する一方で、この語自体の使用が衰退して意味も退縮し、その中で、〈接触感覚〉の中のさらに特定の状況へと意味の限定が生じていることがわかる。

3.2 多摩地域の市町議会会議録から

方言集では、〈接触感覚〉〈人間関係〉二つの意味のうち、前者を挙げるものの方が件数としては多かった。一方キャッチフレーズ等では、〈人間関係〉の意味で用いられているものがほとんどである。実際の使用傾向はどうなのだろうか。

「のめっこい」は、方言形（俚言）でありながら、市町村議会のような、地域の公的な場でも使用されることがある。市町議会会議録には、次のような例が見られる⁷。

- (15) 補助金は一種の潤滑剤、一滴の油によって、極めて動きがのめっこくなったり、こすっばくなったりいたします。（1996年9月19日 東村山市議会平成8年9月定例会 小町佐市議員 1938年生）
- (16) (保育園民営化の説明に対して) 近隣にはこのことがありますよという話は早めにしておか

⁶ 資料とした方言集は文献末に掲出した。

⁷ Web上で公開されている、各市町議会会議録検索システムにより、検索を行った。

ないとのめっこくいかないのではないかと思うので、その辺の考えをお願いいたします。

(2010年3月29日 福生市議会平成22年全員協議会 小野沢久議員 1946年生)

(17) 私が言っているのは、せめて町の下に活断層がありますよと、そういう情報提供をもうちょつとのめっこくやった方がいいんじゃないかと、そういう発言のあれなんですよ。(2008年12月3日 瑞穂町議会平成20年6月定例会 上野勝議員 1948年生)

(18) (学校の教職員の) 異動というものは本当に怖いもので、我々がしっかりとのめっこくなつたなあという、のめっこいというか、そういうことですね。のめっこくなってきたなあというふうになってきたときに、サッと異動してしまうという、この危うさがあるわけです。(2010年3月23日 武蔵野市議会平成22年予算特別委員会 近藤和義議員 1947年生)

(15)のように物理的ななめらかさに近い意味で用いられている例もあるが、ほとんどは、(16)～(18)のように、地域社会における〈人間関係〉に関する用例である。(16)は「関係が円滑」、(17)は「きめ細かく」、(18)は「懇意」といった意味であり、(16)(17)はそれぞれ〈接触感覚〉の意味から、(18)は(16)のような意味からさらに派生したものと考えられる。キャッチフレーズ等において〈人間関係〉の意味での使用例が多いことには、このような使用状況の素地がある。

3.3 「のめっこい」の意味・用法と方言利用

「のめっこい」という語は、他の方言形同様全体としては使用が衰退し、その中で意味が一部の食感に限定されていく傾向が見られる。一方、派生義である〈人間関係〉の意味は、地域生活の中で重視される「密な付き合いに基づいて人間関係をスムーズに運ぶ」という行動規範を余すところなく表現するものである。そのため、このような話題が取り上げられやすい場(典型的には、地元出身者を中心とした地域の会合)では、相対的に使用頻度が高くなる。他の表現に代え難い場合もあるようである(例(18)参照)。こういった使用状況のもとで、「のめっこい」は、地域の人間関係の親密さを積極的に表す語として見出され、キャッチフレーズ等として前面に押し出されて利用されるようになったものと推測される。

地域資源としての方言利用を含む、現代社会における方言の意識的な活用の背景には「コミュニケーションを円滑で温かみのあるものにしたいという関係者の意図が潜む」という指摘がある(小林2007:vii)。「のめっこい」の〈人間関係〉の意味への拡張は、このような機能を意味そのものとして直接的に体现していると見られる点、興味深い。

4. 地域資源としての方言利用の動機


多摩地域で方言をネーミングやキャッチフレーズとして利用する理由は、他の地域と同様、地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気醸し出すところにあると考えられる。利用主体は、自治体(3)(8)(9)(11)や地域の公共的団体(観光協会(4)、商工会(2)、公立学校(6))が多いが、企業(信用金庫(1)、和菓子屋(5))の例もある。ここで、「のめっこい」という語

を戦略的にキャッチフレーズに取り入れた青梅信用金庫のケースを取り上げ、具体的にどのような動機で「のめっこい」という語が採用されたか、資料等によって見てみる。

青梅信用金庫は、青梅市に本店を置く信用金庫で、多摩地域北西部（主として青梅線沿線と中央線以北エリア）および、それに隣接する埼玉県南部（旧入間郡地域）に店舗網を持つ。同信金では、2007年度からの中期経営計画で、地域との結びつきを重視する姿勢を「地域でいちばんのめっこい信用金庫」とキャッチフレーズ化し、重点施策として掲げるとともに、ロゴマークとして、ポスター、胸章、名刺、広告（HP、のぼり、チラシ、袋、ティッシュ、車内広告）等に用いている（図1参照）。

同信金HPでは、トップページに「のめっこい」の説明を掲げている（<http://www.aosyn.co.jp/nometoha.htm>, 2013年7月16日閲覧）。そこでは、「西多摩や埼玉南西部地域の一部で使用されています。意味：（肌が）すべすべしている、（うどん等の）のど越しがいい、親しみやすい。」と説明した後に、「あおしんは「地域のお客様との一体となる親密な関係」をつくることを「のめっこい」の意味として定義しました。」としている。この語が営業エリアと重なる地域独自のことばとの認識の上で採用されたこと、在来方言の意味をベースに、営業理念を表すことばとして再定義を試みようとする姿勢がうかがわれる。

同信金理事長のインタビュー記事（森田 2007）から、キャッチフレーズとして「のめっこい」が導入された背景を項目化してまとめると、次のようになる。



課 題	<ul style="list-style-type: none"> ■ 周りに規模の大きな信用金庫が生まれる中で、どうやって信用金庫の使命を果たすか。
戦 略	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地域との結びつきをいっそう深める。
基本姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ①相手を裏切らない ②相談できる ③頼りになる
シンボル化	<ul style="list-style-type: none"> ■ 「のめっこい」 関係＝地元方言 ■ 別の提案「地元で最初に相談できる信用金庫」→不採用
効 果	<ul style="list-style-type: none"> ■ インパクトがある。アピールする。 ■ お客さんはこのことばを知らなくてもよい。話の糸口になる。

図4 「のめっこい」採用のプロセス（森田2007 を項目化）

営業エリアの重なるより規模の大きい信金に対する独自性を模索した結果、地域との結びつきを深めるという戦略が見出され、その姿勢を表象するシンボルとして、内容的にも合致する地元方言が採用されたことがわかる。さらに、金融機関が地元方言を堂々とキャッチフレーズに用いることのインパクト、知らないことばであるがゆえにかえってコミュニケーションの糸口になるというメリットも考慮されている。

生活言語から切り離された方言を、地域性の表象として企業活動に取り入れた例であり、「地元らしさを示しながら、親しみや身近さの雰囲気醸し出す」という機能を意識した、典型的な地域資源としての方言の再生利用であることがわかる。また、意味の変化の方向から見ると、3.

2.節で取り上げた実際の使用例の偏り以上に、「のめっこい」という語の意味を、「親しみや身近さの雰囲気醸し出す」という方言の利用の意図に合致する方向に人為的にシフトしているとも見られる。使用状況が意味変化を誘発している、あるいは両者に相互作用が生じていると考えることができる。

5. 接触機会の増加と用法の変化の兆し

キャッチフレーズ等として取り上げられることによって、「のめっこい」ということばは、本来この語を使用していなかった人々の耳目に触れる機会が増加した。これによりこの語を認知し新たに使用する人が現れる兆しがある。一方、実際の使用場面には触れないことから、意味が不確かであり、与えられたわずかな文脈を元に、独自に再解釈して使用する例も見られる。特に〈人間関係〉の意味は、短いフレーズからは正確に推測しにくいと見られ、多様な意味変種が生まれている。

ただしそれらは数としてはまだわずかなものであり、アンケート調査等の方法では十分に事例を収集できないと予想された。そこで、わずかな事例を効率的に収集する手段として、Web上の記事の検索を行った（2011年5～6・12月、2012年1月）。Web上の記事の執筆者は比較的若い世代の人が多く、今回の目的に関してはメリットである。

Web上で「のめっこい」とその活用形を検索すると、ネーミングやキャッチフレーズとして取り上げられた例については、「のめっこい湯」（(11)）に関する記事が多く、青梅信用金庫のキャッチフレーズ（(1)（7））に関する記事も見られる（その他は方言集が多い。地の文に方言と意識して、または意識せずに使われている記事もわずかにある）。このうち、「のめっこい湯」に関する記事の大部分は、旅行記等の温泉の感想であり、その中で「のめっこい」の意味について、丹波山村公式サイトの説明を元に触れているものが多い。意味に関するゆれなどは見られない。

これに対し、青梅信用金庫のキャッチフレーズは、様々な取り上げられ方をしている。

まず、「バスの車内放送で初めて聞いた」という接触機会の発生をうかがわせる例がある（都営バス情報センター「都内最長路線 梅70」2008年10月14日の記事、<http://blogs.yahoo.co.jp/ywmr869/archive/2008/10/14>、2013年7月16日参照）。この筆者は青梅信用金庫のHPで「のめっこい」の意味を確認している。

一方次の例では、本来の意味からずれが生じている。

(19) あおしん優勝！都の頂点だ。最後まであきらめない「のめっこい野球」の勝利だった。

（略）あおしんが標榜する新しいキャッチコピー「地域でいちばんのめっこい信用金庫」を象徴するようなどる臭い得点であったが（略）代打浜中がのめっこく選んで歩き、石井のヒットなどで無死満塁とした。（青梅スポーツ167「あおしん都信金大会で優勝！」2007年07月17日の記事、<http://omesports.exblog.jp/5906912/>、2013年7月16日参照）

(20) 『のめっこい』とは青梅の方言で、親切とかかわいいという意味らしいです。（略）私も負けずとのめっこいことをしようと「エアタオルをご使用下さい」という表示がある所

でタオルで手を拭いてるジェスチャーをしたら友人にドン引きされました。のめっこいって難しい。（牛屋の店「のめっこい」2009年4月6日の記事, <http://ameblo.jp/ushiya3/entry-10237451346.html>, 2012年1月8日参照)

(19)では「粘り強い」「しつこい」といった意味で使われている⁸。(20)では、「親切とかかわいという意味」としながら、人をおもしろがらせる行動を「のめっこいこと」と言っている。従来の「のめっこい」には全くなかった使い方である。ただし、以上の例はいずれも、何らかの形で青梅信用金庫の情報に触れていることが推測される。接触機会が増えたとは言っても、現時点では、直接接以上に広まる気配は見られない。

6. 首都圏若年層の現状と今後の動向

現在「のめっこい」という語に現れている、このような限定的な接触機会の増加と用法の変化の兆しは、一時的な現象に止まるだろうか。それとも、1980年代に多摩西部地域から広がった「うざったい」のように、今後使用者・使用地域が拡大していくだろうか。拡大する場合、それに伴って意味の面ではどのような変容が生じるだろうか。

このような今後の動向に関し、現時点で変化の方向を予測し、もし変化が進行していく場合には、その動きを追跡する起点とするために、「のめっこい」と関連語について、受容・理解・イメージに関する首都圏大学生アンケート調査を行った⁹。

それによると、「「のめっこい」ということばを知っているか」については、回答者356名中、「知っている」と回答したのは1名のみであった。この回答者の出身地は新潟県で、祖父母から聞いて知っているが、自分では使わない、という。多摩地域由来の「のめっこい」は、現在首都圏の大学生には知られていないことが確認された。次に「「のめっこい」ということばを使ってみたいか」尋ねたところ、この語を知っている1名を除いた回答は、「使ってみたい 63名 (17.7%)」「使ってみたくない 123名 (34.6%)」「わからない 169名 (47.5%)」(無回答1名)であった。知らないことばであるにもかかわらず、17.7%もの回答者が「使ってみたい」と回答しており、この語に触れる機会があれば使用が広まる可能性がうかがわれる。さらに、「「のめっこい」ということばはどんな感じがするか」6つの評価語から当てはまるものをすべて選んでもらったところ、「古くさい 181名 (50.8%)」「新しい 12名 (3.4%)」「おもしろい 186名 (52.2%)」「おもしろくない 4名 (1.1%)」「心地よい 24名 (6.7%)」「不快な 80名 (22.5%)」と、「古くさい」と「おもしろい」がいずれも過半数となった。両方を同時に選択した回答者も71名 (19.9%)いる。「古くておもしろい」という価値観がこの語の採用を後押しする可能性がある。¹⁰

なお、5節で取り上げたように、「のめっこい」という語は、本来とは違った意味で受け取られ

⁸ 類音類義語である「ぬめっこい」との類音牽引の可能性がある。

⁹ 2011年6～7月に、青山学院大学、慶應義塾大学、國學院大學、専修大学、日本大学、文教大学で実施した。配布・回収には、「首都圏言語」プロジェクトのメンバーの協力を得た。この項目の有効回答者数は356名。うち、首都圏1都3県(東京・神奈川・埼玉・千葉)出身者は218名。【調査A】とする。

¹⁰ この採用態度は、2節で取り上げた在来方言の再生利用とは異なり、「方言おもちゃ化」に基づく「ニセ方言」の使用態度と共通する。(田中2011:31)

ている可能性がある。この点について、以上とは別の首都圏3大学の学生314名に、「「のめっこい」はどういう意味だと思うか」自由記述で回答してもらった（2011年7月実施，携帯メールによる回答。【調査B】とする）。単語のみを提示し，文脈は示していない。その結果を表1に示す。本来の意味である「なめらか」という回答はわずか7名（2.2%），「親しい」は0名であり，最も多かったのは「かわいい」であった（例（20）参照）。また，「ヌメヌメ」「ヌルヌル」「ネバネバ」など粘着性の不快な接触感覚の意味が上位を占めた。3位の「しつこい」（例（19）参照），5位の「のろい」，7位の「面倒くさい」もすべて不快感情を伴うマイナスの評価語である。【調査A】の「「のめっこい」はどんな感じがするか」で，「不快な80名（22.5%）」が「心地よい24名（6.7%）」を上回って約1/4を占めた背後には，このような意味解釈があるものと推測される。さらに，もしも今後若年層でこの語の使用が広がることがあった場合，本来の意味と異なる「かわいい」または，不快な感覚感情を表す語として再出発することが予見される。

表1 「のめっこい」の意味

意味	人数	%
かわいい	47	15.0
ヌメヌメしている	39	12.4
しつこい	25	8.0
ヌルヌルしている	24	7.6
のろい	17	5.4
ネバネバしている	13	4.1
面倒くさい	9	2.9
飲みにくい等（音の類似）	8	2.5
ぬるい	7	2.2
なめらか	7	2.2
のめり込みやすい	7	2.2
（異なり 62種類）	314	100.0

（自由記述回答をグルーピング，上位11種を掲出）

7. 地域語の観点から見た首都圏の言語

以上、「のめっこい」という語を代表例として取り上げ，首都圏における地域資源としての方言利用の実態の一端について報告を行った。本稿はたった1語を扱ったケーススタディに過ぎない。しかしここには，共通語化が早く徹底的に進み，方言の存在価値があまり意識されることのない首都圏西郊地域が，「方言の価値の上昇」の時代の中で，どのように地域の中の方言に對しているか，という現状の一端が如実に現れている。

もとより，方言の地域資源としての活用のあり方は，首都圏内部でも一様ではない。このことについては，首都圏全市区町村の行政，教育委員会，商工会への悉皆通信調査を行った，本報告書第2部所収の亀田論文「首都圏における方言の地域資源としての活用 ―通信調査の結果から―」を参照してほしい。

1節で述べたように，首都圏の言語は多様性，重層性に富み，常に変化にさらされている。そのような中で「地域の日常語」としての首都圏のことばの実態と動向を把握し，それが，都市言語としての首都圏のことば，標準語の基盤である基準言語としての首都圏のことばとどのように関

係し合いながら存在しているのか、究明していきたいと考えている。

文 献

- 小林隆 (2007) 「方言機能論への誘い」 小林隆(編)『シリーズ方言学3：方言の機能』v-viii. 東京：岩波書店.
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』東京：岩波書店.
- 日高貢一郎 (1996) 「方言の有効利用」 小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎(編)『方言の現在』362-384. 明治書院.
- 日高水穂 (2009) 「秋田における方言の活用と再活性化」『月刊言語』38(7): 24-31.
- 森田昇 (2007) 「"のめっこい" がキーワード —信用金庫に徹し格好いいことをやる必要もない—」『財政金融ジャーナル』7: 14-17.

付 記

本稿は、社会言語科学会第29回研究大会(於：桜美林大学, 2012年3月11日)におけるポスター発表、「首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例 —多摩地域の「のめっこい」を例として—」の内容に修正を加えたものである。また、本稿の一部をまとめ直し、三井はるみ「地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面」(『国語研プロジェクトレビュー』第4巻第2号, 118-126, 2013年10月, 国立国語研究所, <http://www.ninjal.ac.jp/publication/review/0402/pdf/NINJAL-PReview040206.pdf>)として公表した。発表に有益なコメントをくださったみなさま、また、研究開始当初から多くのサポートをくださったプロジェクトメンバーのみなさまに感謝いたします。

図3に使用した方言集

●区部 ●【杉並区】森泰樹 (1980) 『杉並の伝説と方言』杉並郷土史会 ●北多摩郡 ●【武蔵野】財団法人武蔵野市開発公社 (2009) 『武蔵野境界 むかし語り：語り部宮崎勇氏にきく』, 【国立市】原田重久 (1977) 『武蔵野わらべ唄と方言』武蔵野郷土史刊行会, 【立川市】立川市教育委員会・鈴木為佐生 (1987) 『立川の方言』, 【立川市】立川市西砂川地区文化会 (1998) 『方言で語り合おうふるさと西砂川 [西砂川方言辞典]』, 【東村山市】東村山郷土研究会 (2011) 『東村山とその周辺のことば』, 【武蔵村山市】武蔵村山市教育委員会 (1990) 『武蔵村山の昔がたり —村山ことばによる口頭伝承—』 ●南多摩郡 ●【稲城市】坂浜歴史研究会 (1982) 「坂(さあ)浜(はま)ことば (方言) 昭和57年調」, 【八王子市】鈴木樹造 (1983) 『八王子方言考』かたくら書店, 【八王子市】塩田真八 (1965) 『八王子の方言』八王子文化サロン, 【八王子市】塩田新八 (1965) 『八王子の方言』 ●西多摩郡 ●【瑞穂町】瑞穂町教育委員会 (1993) 『瑞穂の方言』, 【埼玉県入間郡】関谷和 (2004) 『子どものころ聞いたことば話していたことば 埼玉県入間郡元狭山村 (二本木) の方言覚え書き (増補・改訂版)』, 【羽村市】平井英次 (1982) 『多摩の方言と人情 第二編』教育報道社, 【檜原村】小泉輝三朗 (1984) 『檜原方言記 付：方言語集』武蔵野郷土史刊行会

【フォーラム】

街のなりたちと言語景観

東京・秋葉原を事例として

田中ゆかり

日本大学

早川 洋平

上智大学大学院生

富田 悠

上智大学大学院生

林 直樹

日本大学大学院生

【要旨】言語景観研究に基づく地域類型論の構築を目指した事例研究として、本稿では、外国人来訪客の多い地域でありながらサブカルチャーの街としても知られる JR 秋葉原界隈、通称アキバをとりあげ、2010 年に行なった調査結果に基づき報告を行なう。調査対象は実店舗の掲示類、並びに店舗運営の Web サイトである。実店舗・Web 調査結果からは次の点が明らかになった。

「日本語」「英語」以外の言語として「中国語(簡体字)」への対応が手厚い。一方「韓国語/朝鮮語」は単言語としても併用言語としても出現頻度が低い。家電系や免税系は多言語傾向が顕著だが、サブカル系は「日本語」単言語が主流。

上記結果から、アキバは他地域における“標準タイプ”化と異なる多言語化の状況にある特異性をもつことが確認された。また、この背景には外国人来訪者の傾向性や店舗分野の違いといった、アキバの街を構成する要素が関係していることを指摘した*。

キーワード：言語景観，多言語化，標準タイプ，秋葉原タイプ，街のなりたち

1. はじめに

言語景観研究は、Landry and Bourhis (1997) 以降、視覚的表示にあらわれる使用言語・使用文字種を中心に、それぞれのコミュニティにおける言語選択上の特色について、検討をしてきた。言語景観研究の最新の成果の一つである Shohamy *et al.* (eds.) (2010) からは、こんにちまでの言語景観研究は、次の 5 つのトピックが代表的なものであることがわかる。すなわち、(a) 多言語化する言語景観、(b) 上からの変化が言語景観に与える影響、(c) 恩恵とくに経済効果の観点からの言語景観形成、(d) 言語景観が通行者に与える印象、(e) 言語景観にみる多言語主義

* 本稿は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究(代表：加藤直人)」の一環である。また、本稿は、第 142 回日本言語学会(2011 年 6 月 於：日本大学文理学部)におけるポスター発表「街のなりたちと言語景観 東京・秋葉原を例として」を基にしている。発表時にいただいた質問・コメントは、本稿執筆に際して非常に有益であった。本稿で引用した韓国人観光客の動向にかんする日本政府観光局による記事については、ユン・ジヒョン氏(日本大学文理学部)からご教示いただいた。また、査読の過程において『言語研究』編集委員会査読者からは有益なコメントをいただいた。以上の方々に改めて感謝申し上げます。なお、本稿の執筆分担は次のとおり。田中ゆかり(全体統括・1 章・2 章・6 章)、早川洋平(3 章)、富田悠(4 章)、林直樹(5 章)。

である。この代表的な5つのトピックからみると、本稿はトピックの(a)~(d)につらなるものと位置づけられる。とりわけ、言語景観という客観的な指標に基づいた街の類型化を目指すという観点からは、(d)の系列にもっとも強く関連する研究とみることができるだろう。

さて、「街」はさまざまな顔をもち、さまざまな印象をわたしたちに与える。その印象を構成するものもさまざまある。目に見えるものもあるだろうし、目に見えないものもあるだろう。本稿では、街の印象を構成し、記述する要素の一つとして、言語景観研究を捉えていきたい。言語景観研究は、Landry and Bourhis (1997)で示されているように視覚的表示においてどのような言語が選択され明示化されているのか、についてみていくことが中心ではあるが、耳に聞こえてくる言語がどのようなものなのか、という観点に立つアプローチもある(田中・上倉・秋山・須藤2007)。街の印象を形作るものの一つとして、どのような言語が視覚的にあるいは聴覚的に前景化しているのかを捉えることが、街の印象やなりたちを類型化していく手がかりとなりそうである。このような立場からは、言語景観研究の成果によって、街をいくつかのパターンに分類することが可能かもしれない。言語景観による街の類型化という考え方である。さまざまなタイプの街を類型化していくには、そのための指標の確立が期待される。地域間の対照研究や類型化に際しては、そこで用いられる指標が、客観的な調査と分析に耐えるものである必要があるだろう。

本稿では、上述のような言語景観による街の類型化の試みの第一歩として、東京圏を代表する街の一つ、千代田区に位置する秋葉原を事例としてとりあげることにする。秋葉原、通称アキバは、電気街としてよく知られるのと同時に、近年ではサブカルチャーの街としても知られる(東京都千代田区編1960, 秋葉原振興会「秋葉原アーカイブス」)。外国人観光客からの人気も高いエリアで(日本政府観光局「訪日外客統計」)外国人観光客に関連した話題にもこと欠かない¹。以上のようなことから、秋葉原は外国人観光客をターゲットとした多言語化の先進地域であることが予想される。加えて、電気街からサブカルの街へ、という街の変遷が言語景観の重層性として観察される可能性も有する。このような街のなりたちからは、秋葉原の言語景観には多様性と特異性の両面があらわれることが期待される。また、街全体として秋葉原タイプといってよさそうな一つの類型を形成している可能性ももつ街である。

なお、本稿では、試行の対象とする「秋葉原」地区をJR秋葉原駅界隈と定める。JR秋葉原駅界隈の店舗における視覚的掲示物を調査対象とし、現実の街における言語景観の実態を捉える。あわせて、それら店舗が運営するWebサイトの言語景観を調査し、実店舗とWeb上の言語景観を比較する。調査結果から、秋葉原の現状を把握したのち、公的ガイドラインに基づく多言語表示(河原編著2004, バックハウス2009)の“標準タイプ[日英中(簡)韓+ピクトグラム]”化(田中2009)

¹「アキバ「免税の聖地」に「アキバ再生 外国人頼み」2010年11月20日読売新聞14版記事；銀座・アキバ「春節特需」中国人観光客の出足好調」2011年02月05日読売新聞4版記事など。

との対比や、場や項目による差異等から、秋葉原らしさを形成する言語景観とは何か、みていきたい。また、これまで、東京圏の街を対象に行なわれてきた言語景観研究（正井 1972, 井上 2001, Inoue 2005, Backhaus 2005, Backhaus 2006, 庄司・バックハウス・クルマス編著 2009, バックハウス 2011）などとの比較も視野に入れながら、秋葉原の位置づけをさぐりたい。

2. 秋葉原言語景観調査概要

調査は（イ）～（ロ）の3種類実施した。実施時期についても併せて示す。

（イ）店舗掲示類調査：2010年5月～6月

（ロ）掲示類追加調査：2010年12月～11年2月

（ハ）Web調査：2010年12月～11年2月

調査範囲を図1に示す。中央通り、裏通り（仮称）、電気街口前通りに面する店舗と大規模家電店2店舗（ヨドバシカメラマルチメディア Akiba と石丸電気本店）を調査した。（ロ）は、（イ）の調査域内の免税系5店舗と永山免税店秋葉原本店を対象とした。中華人民共和国国民の個人旅行者に対する査証発行要件が緩和された2010年7月1日前と、その後を比較する観点から実施した。

（イ）と（ロ）は、二種類の掲示物（フロアガイドならびにメッセージ）を対象とした。掲示物の標本化は公道上からのデジタルカメラ撮影により行ない、得られた画像データから読み取れる文字列を分析対象とした。（ハ）は、実店舗調査を行なった店舗またはグループが運営するWebサイトにおいて使用される言語を分析対象とした。標本数など詳細は各章参照。

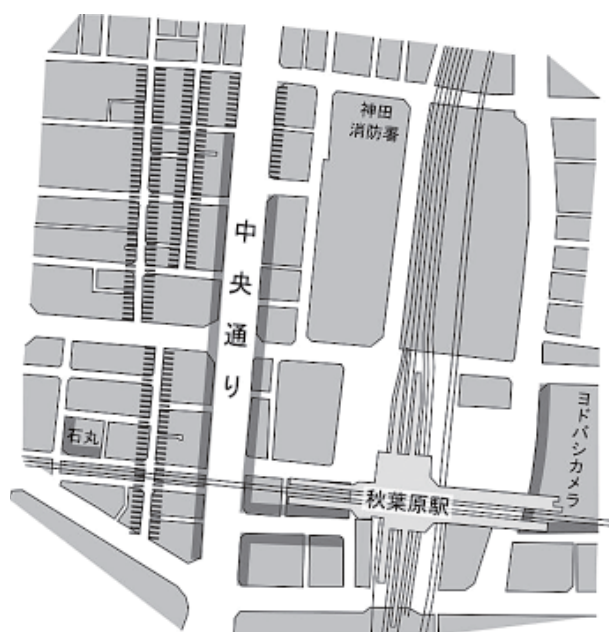




図1 調査範囲（：全項目，：一部項目）

3. フロアガイドからみた秋葉原

3.1. フロアガイドとは

今回の調査ではフロアガイドを「建物の何階に何があるかを示す掲示物」と定義する。図2の左側の様な一覧型の他、右側の様な単一階のみの案内もフロアガイドとみなす。使用言語は文字種で判断するが、アルファベット表記が一般的な商品名や店名は日本語に数えた。なお集計対象にはビル外壁や窓ガラスに掲示されている物も含めた。

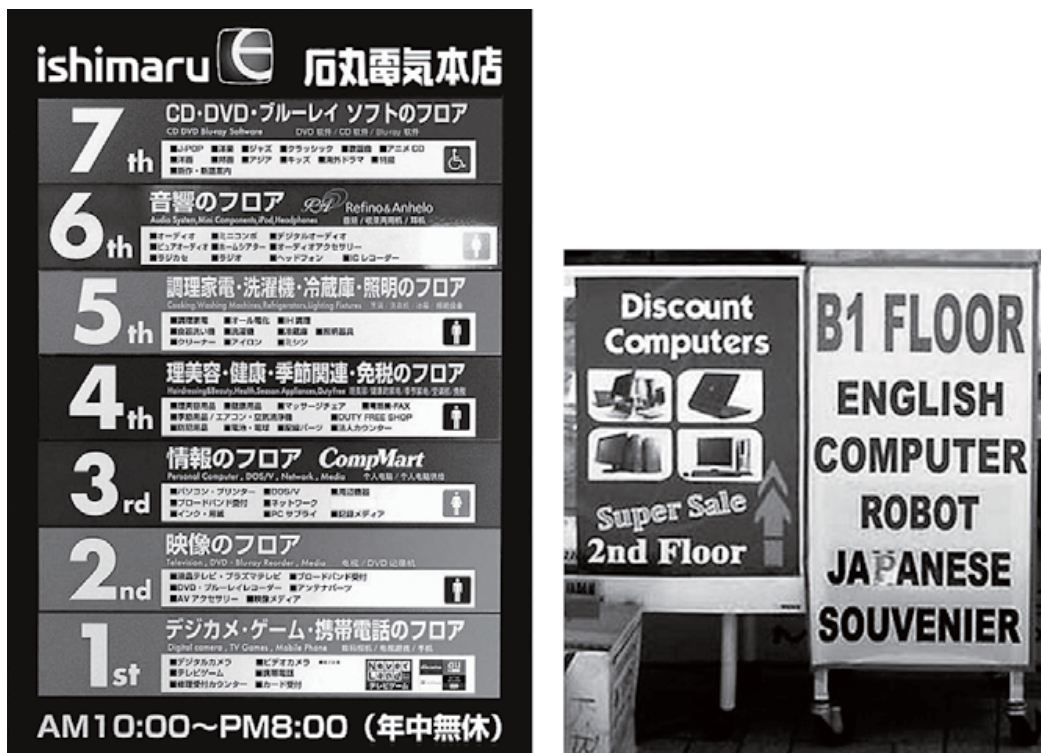


図2 フロアガイドの例（左：一覧型，右：単独型）

3.2. フロアガイド調査概要

調査は2010年5～6月の平日11～15時に複数回行なった。調査対象は、図1で網掛けとゲタ(≡)で囲んだ範囲に位置する店舗である。地区区分は店舗の入口が面している通りとした。ただし、中央通り沿いの店舗で裏通り側にも入口がある場合は中央通りに、駅前通り沿いの店舗で中央通り側にも入口がある場合は駅前通りに含めた。調査店舗数を表1に、調査掲示物数を表2に示す。なお、表2の数字は異なり枚数である（同一内容、同一サイズの掲示が複数あった場合はそれらをまとめて一枚と数えた）。他の地区区分から離れている大規模家電店（ヨドバシカメラマルチメディア Akiba と石丸電気本店）は別に集計した。

表1 調査店舗数

地区	掲示有	掲示無	計
石丸本店	1	0	1
ヨドバシ	1	0	1
駅前通り	42	3	45
中央通り	81	34	115
裏通り	56	48	104
計	181	85	266

表2 調査掲示物数(異なり枚数)

地区	一覧型	単独型	計
石丸本店	2	0	2
ヨドバシ	3	2	5
駅前通り	37	32	69
中央通り	79	113	192
裏通り	44	105	149
計	165	252	417

3.3. フロアガイド調査結果

表3 調査掲示物数(異なり枚数)地区別集計〔小数点第2位四捨五入〕

言語数	日	英	簡	繁	韓	他	中央通り	駅前通り	裏通り	ヨドバシ	石丸	合計
0							34 (15.0%)	3 (4.2%)	48 (24.4%)			85 (16.9%)
1							150 (66.4%)	44 (61.1%)	130 (66.0%)	4 (80.0%)		328 (65.3%)
							10 (4.4%)	17 (23.6%)	8 (4.1%)			35 (7.0%)
2							2 (0.9%)					2 (0.4%)
							7 (3.1%)	6 (8.3%)	9 (4.6%)			22 (4.4%)
3							12 (5.3%)	1 (1.4%)				13 (2.6%)
							5 (2.2%)		1 (0.5%)		ㄨ(100.0%)	8 (1.6%)
							1 (0.4%)					1 (0.2%)
4								1 (1.4%)				1 (0.2%)
							1 (0.4%)					1 (0.2%)
合計						22ㄨ(100.0%)	7ㄨ(100.0%)	197ㄨ(100.0%)	5ㄨ(100.0%)	ㄨ(100.0%)	ㄨ(100.0%)	50ㄨ(100.0%)

簡：中国語簡体字，繁：中国語繁体字 言語数0 = 掲示物なし

表3から、地区を問わず日本語(以下,[日])単言語の表示がもっとも多いことがわかる。また英語(以下,[英])単言語表示も全体では二番目に多く、この二つで大半を占めた。

二言語を併記する場合は[日英]と[英中国語簡体字(以下,[中(簡)])]の二種類のみがあらわれた。

三言語以上を使用している店舗は表4に示すとおり、15店中10店が免税店、家電店、ゲームセンターで占められており、アニメや漫画、パソコン部品といったサブカルチャー関連(以下、サブカル系)の店舗は含まれない。

表 4 多言語フロアガイド掲示店

三言語表示	四言語表示
秋葉原駅前歯科	@home cafe ドンキ店
AOKI 秋葉原店	アキバあそび館
LaOX 本店	クラブセガ秋葉原
LaOX 免税店	クラブセガ秋葉原新館
オノデン	ドンキホーテ秋葉原店
石丸電気 AKIBA	ヨドバシカメラマルチメディア Akiba
石丸電気本店	
タイトーステーション	
メディアランド	

また、三言語以上の表示では韓国／朝鮮語（以下〔韓〕）が初めてあらわれ〔韓〕対応の優先度の低さがうかがえる。

地区ごとにみると裏通りではフロアガイド未設置率が高い。これは他の地区と比べ低層建築が多いためである。未設置店を除外して集計すると裏通りは〔日〕単独の比率が 87.2% に跳ね上がる（中央通りは同 78.1%）。中央通りで〔日〕単独の比率がやや低いのは、多言語対応が進んでいる免税店が中央通りに集中しており、裏通りの多言語化率を相対的に下げているためだと思われる。

3.4. フロアガイド追加調査

2010 年 12 月と翌年 2 月に、免税店 5 店（AkkyONE、LaOX 免税専門店、オノデン、ヨドバシ Akiba、Sofmap AKIBA DutyFree's）を再調査、永山免税店秋葉原本店を追



図 3 シールによるフロアガイド修正

加調査した。Sofmap は旧 SofmapPC 総合館時代の[日]単独から[日英中(簡)韓]と四言語に増加したが、その他の店舗に変化はなく、フロアガイドの更新頻度が低いことがわかる。(フロア改装時には上からシールを貼って修正するパターンが数例みられた。図3参照)

3.5. フロアガイド調査のまとめ

フロアガイドでは[日]単言語がもっとも多く、多言語化自体があまり進んでいない。多言語化した場合も言語の組み合わせは店ごとにさまざまで、[日英中(簡)韓]の“標準タイプ(田中 2009)”にはこだわっていないようである。これは秋葉原の多言語化が各店の自主的なものであり、実際の来店者に合わせた戦略的なものだからだと考えられる。

街全体を見渡すと、中央通りは多言語化、裏通りは[日]単言語の傾向があり、業種もこれに一致して免税店は中央通り、サブカル系店舗は裏通りと大まかな性格差がみられた。しかし秋葉原は変化の激しい街であり今後もこの傾向が続くとは限らない。またラジオ会館建て替えに伴う 2011 年 7 月の店舗移転では、サブカル系の店でも[日英中韓]表示が取り入れられたことは新しい動向である。

4. メッセージからみた秋葉原

4.1. メッセージの定義と調査概要

今回の調査ではメッセージを「店舗側から客に向けたアピール」と定義する。たとえば「免税」「銀聯カード使えます」「海外向け製品取り扱い」「安さ秋葉原 No.1」等である(図4, 図5)。ただし、特定商品の宣伝は除外した。

店の分野ごとにメッセージの種類と使用言語がどのように対応するかみていく。



図4 オノデンの入口



図5 AkkyONEの外壁

4.2. メッセージ調査報告と分析

4.2.1. メッセージ調査範囲

2010年5月～6月に実施した調査は、図1で網掛けの範囲の店舗を調査対象とした。公道から店舗の写真を撮影し、読み取れる範囲の文字を分析対象とした。

4.2.2. 店舗分野とメッセージの分類

今回の調査では、多言語化が進んでいると思われる4種類(「免税」「歓迎」「銀聯」「海外向け)」のメッセージを詳細分析の対象とし、それ以外は「その他」とした。

上記範囲内の店舗から、家電系、免税系、サブカル系、ゲームセンターなど(以下、ゲーセン系)の4分野を抽出し、比較する。分析対象店舗数は55。うちメッセージ表示のあった店舗数は31で、分析対象となったメッセージ数は286である。

4.2.3. メッセージ調査結果

メッセージのある店舗を分野ごとにみると次のようになる(表5)。

表5 店舗分野別メッセージ数と平均

店舗分野 (n)	メッセージ数	1店舗当たりの平均
家電系 (13)	114	8.8
免税系 (5)	128	25.6
サブカル系 (10)	40	4.0
ゲーセン系 (3)	4	1.3

メッセージ数を単純にみると、免税系、家電系が、サブカル系、ゲーセン系を大きく上回っている。1店舗当たりの平均メッセージ数を分野別にみると、免税系が圧倒的に多い。家電や免税品を求めて秋葉原を訪れる外国人観光客のニーズに応えるためであろう。

メッセージ内容の内訳を分野別にみると、家電系、免税系では「免税」「歓迎」「銀聯」「海外向け」などのメッセージがあらわれるが、サブカル系は「その他」が多い(図6)。分野によって掲出されるメッセージ内容も異なることがわかる。

メッセージにおいて使用される言語で、もっとも多いのが[英]125。[中(簡)]117とともに[日]106よりも多い。[韓]は13と[英][中(簡)][日]に比べ極端に少ない。この他、ロシア語9、スペイン語(以下,[西])7、ポルトガル語(以下,[葡])4、フランス語(以下,[仏])2、アラビア語(以下,[ア])1があらわれた。東京圏デパートにおける言語景観調査(田中・上倉・秋山・須藤2007)では中国語繁体字が出現するが、秋葉原におけるメッセージ調査においては1例もあらわれなかった。

メッセージの種類からみると、「歓迎」は[ア]以外のすべての言語、「免税」は[葡][仏]以外のすべての言語、「海外向け」は,[韓][仏][ア]以外のすべての

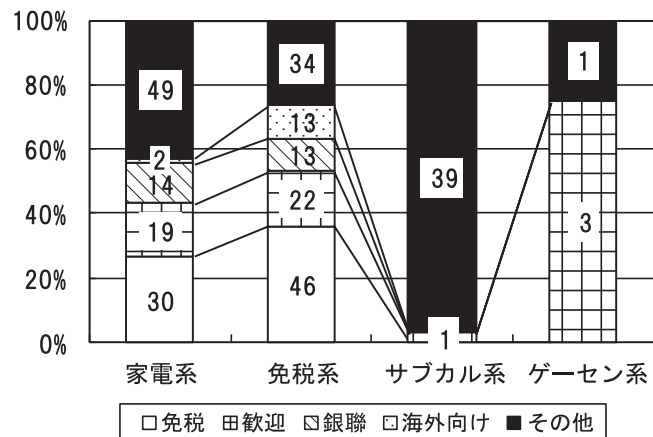


図6 店舗分野別メッセージ種類内訳 (n=286)

言語にあらわれた。一方、「銀聯」は中華人民共和国の中央銀行にあたる中国人民銀行の主導で2002年に設立された決済カードという性質から[中(簡)]にのみあらわれた。

4.2.4. 「その他」 = 「秋葉原らしさ」

4.2.3.におけるメッセージの分類からみた傾向性においては、「その他」の詳細分析を行わなかった。しかし、「その他」に含めたメッセージの内容をみていくと、店舗ジャンルごとに、傾向がうかがえた。たとえば、免税系、家電系の店舗では「Discount」のような安さを主張するものや、「中国語を話す店員がいます」のような案内から、「防犯カメラ作動中」や「飲食禁止」などの注意を喚起するものまで、



図7 宝田無線店頭

さまざまな種類の表示が満遍なくみられたこと。一方、サブカル系やゲーセン系では、「18歳未満立ち入り禁止」などの注意喚起、禁止の表示が多かったことなどである。また、大型店を除くと、店舗がJR秋葉原駅に近いほどメッセージの数が多く、店舗の立地もメッセージ数を左右する要因の一つであると考えられる。

以下では、このような秋葉原らしさを形成すると推測される「その他」メッセージが顕著にあらわれている店舗をとりあげ、秋葉原らしさとは何かを探りたい。

典型として、秋葉原駅電気街口から至近に立地する宝田無線を取り上げる(図7)。メッセージ調査結果からは、同店舗にあらわれる特徴として、「その他」メッセージ数が27と全店舗平均(4.0)より非常に多くあらわれることを指摘できる。加えて、手作り(パソコンで作成後、ラミネート加工したものなど)の臨時的掲示が多いということも特徴として指摘できる。

ここで確認したような、「手作り感」あふれるメッセージ数の多さとその種類の豊富さ、同時にそれらが所狭しと貼られた「ごちゃごちゃ感」。これらが「秋葉原らしさ」の一部を形成していると考えられる。

4.3. メッセージ免税店追加調査

2010年12月から翌年2月にかけて、大型家電量販店や免税店を対象に再調査を行なった。調査対象としたのは、AkkyONE、LaOX免税専門店、オノデン、ヨドバシAkiba、Sofmap AKIBA DutyFree's、永山免税店秋葉原本店である。

4.3.1. メッセージ免税店追加調査結果

すべての店舗において、メッセージ数の増加がみられた。増加したメッセージを内容の観点からみると、「その他」の増加が目立つ。

店舗として顕著な変化がみられたのは、Sofmap AKIBA DutyFree's。これは、PC総合館が免税専門店として2010年11月に新装開店した店舗である。改装前の2010年5月～6月の調査結果と比べ、メッセージ数は16から50と3倍以上になり、「中国へ直接発送可」等、内容面においても新しいタイプが加わった。また、改装前に実施した調査にはほとんどあらわれなかった[韓]が、新装開店したこの店舗ではデフォルト言語として取り入れられており、新たな傾向として指摘できる。

4.4. メッセージ調査のまとめ

家電系、免税系の店舗ではメッセージ数ならびに種類が多く、使用言語も多様であるのに対して、サブカル系、ゲーセン系の店舗ではメッセージ数・種類ともに少ないだけでなく、ほとんどが[日]単言語であった。また使用言語では[英]と[中(簡)]が[日]を上回っており、増加する中国語圏、とくに簡体字を使用する大陸からの来訪者に重点的な対応をしていることがわかる。

増加する外国人来訪者に対応する日本全国の観光地の中で、言語景観の観点から秋葉原が異色の存在となっているのは、さまざまな言語・内容のメッセージによる

「ごちゃごちゃ感」と、日々変化する観光客のニーズに素早く対応する「手作り感」あふれるメッセージによるものと考えられる。

5. Web上の店舗サイトからみた秋葉原

5.1. Web調査概要

Web調査は、2010年12月～2月に行なった。図1で網掛けとゲタで囲んだ範囲にある店舗の運営するWebサイトのうち、「サイトの最上位ページ」「店舗紹介ページ」「ショッピングサイトの最上位ページ」を調査対象とした。

ページ数の集計は原則としてhtmlファイルの個数としたが、「同一ドメイン内に各言語版のhtmlファイルが置かれている」「ページ内にフレームがあり、複数のhtmlファイルで構成されている」「実質的なトップページの前に扉ページや年齢認証ページのhtmlファイルがある」場合は、それぞれをまとめて1ページと数えた。

なお、「ソフマップ1号店」のように、同一名称で号数などが異なる複数の店舗はまとめて1グループと数えた。ただし、独立したサイト(ドメイン)をもつ店舗は分けて扱った(たとえばヨドバシ.comとヨドバシマルチメディアAkiba)。分析対象グループ数は203、分析対象ページ数は394である。

言語認定の基準は、ある言語がページ全面に使われているか、ある言語のページが独立して存在するかのいずれかとした。この点は実店舗の掲示類調査における言語認定基準と異なる。

5.2. Web調査結果

Webページで使用されている言語と使用言語数をまとめたものを表6として示す。

表6 Web使用言語数(%は小数点第2位四捨五入) 簡:中国語簡体字 繁:中国語繁体字

言語数	使用言語						計
	日	英	簡	繁	韓	他	
1							334(84.8%)
							2(0.5%)
							3(0.8%)
							1(0.3%)
2							25(6.3%)
							3(0.8%)
3							9(2.3%)
							3(0.8%)
4							5(1.3%)
5							5(1.3%)
							2(0.5%)
6							1(0.3%)
7							1(0.3%)
計							394

まず、全体の 84.8% を [日] 単言語使用が占めていることがわかる。日本語以外の単言語使用はごくわずかであり、複数言語併用している店舗サイトも 13.7% のみである。複数言語使用では [日英] の組み合わせがもっとも多く、ついで [日英中(簡)] である。“標準タイプ(田中 2009)” である [日英中(簡)韓] は、1.3% しかあられない。[日][英][中][韓] 以外は 5 言語以上併用にのみあられる。その他の言語であられたのは [仏][西] が各 3、ドイツ語、イタリア語、オランダ語が各 1 である。

同一店舗における使用言語数を Web ページとフロアガイドとで比較すると、使用言語数が一致する店舗が 114 (46.5%)、フロアガイドの方が多い店舗が 112 (45.7%)、Web ページの方が多い店舗が 19 (7.8%) みられた。言語認定基準が異なるという問題があるが、Web ページに比べ実店舗(フロアガイド)の方により多くの言語が使用される傾向にある。

次に、Web における取扱商品・サービスの属性(以下、属性)別の使用言語傾向をみたものを図 8 に示す。ここでは、単言語使用か複数言語使用かのみ注目した。なお、1 店舗に複数の属性を認めた場合もある。たとえば、AKKY は免税・家電どちらの属性も認められることから、どちらの属性においても使用言語を集計した。

集計の結果(図 8)、すべての属性で単言語使用の割合が勝っているものの、相対的には免税、家電属性で複数言語使用の割合が高く、漫画、電子部品、カードゲームといったサブカル系の属性では単言語使用の割合が高い傾向がみられた。

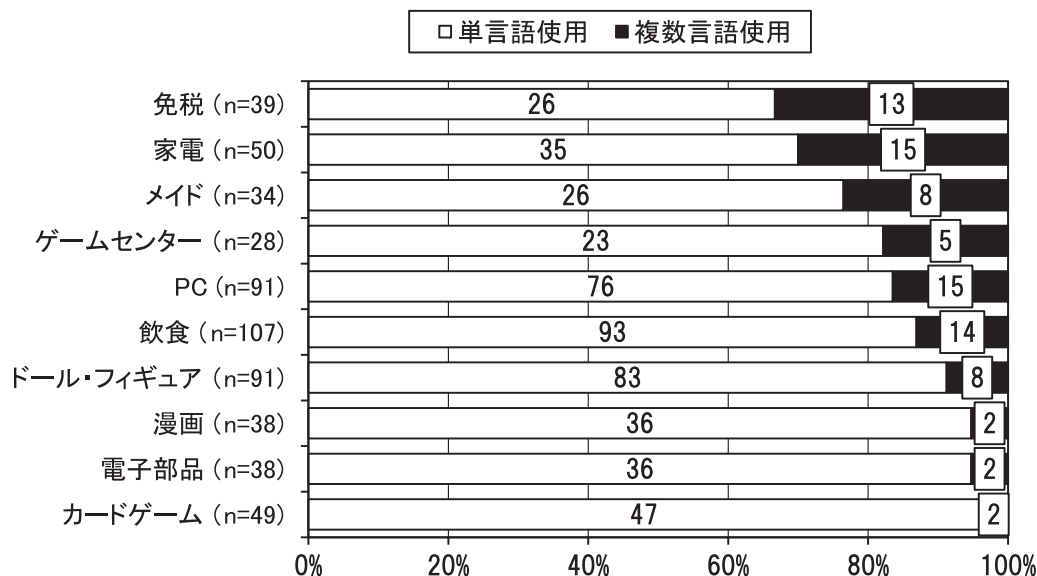


図 8 属性別言語使用傾向

5.3. Web 調査のまとめ

Web 調査結果をまとめると、まず [日] 単言語使用が大半であるということが

わかる。また、[日]以外では[英]が最多だが出現数は少ない。実店舗フロアガイドにおける使用言語数との比較においては、Web ページの使用言語数が少ない。また、取扱商品・サービスの属性別にみると、免税・家電は複数言語使用が多く、サブカル系は単言語使用が多いことが確認された。

以上から、秋葉原店舗 Web サイトの運営方針は、[日]使用者のみを対象としたものが主であることが確認される。言語サービスの観点から多くの言語に対応したページをもつ自治体や観光サイトとは異なる傾向で、首都圏のデパート（田中・秋山・上倉 2007）と同様、秋葉原の店舗 Web サイトの多言語化はさほど進んでいないことがわかる。

また、実店舗の分析結果と同じく、免税・家電といった属性は言語使用数が多く、サブカル系は少ない傾向が確認された。分野による多言語化の差は実店舗・Web で共通しているといえる。

6. おわりに

秋葉原言語景観調査の結果を大まかにまとめると、次の 2 点になる。

[日][英]以外の言語として、[中(簡)]への対応が手厚い。一方、[韓]は単言語としても併用言語としても出現頻度が低い。

家電系や免税系は多言語傾向が顕著だが、サブカル系は[日]単言語が主流。街のなりたちと重なる言語景観の層が確認された。

は積極的な買い物行動が目立つ[中(簡)]話者への対応が先行した結果と推測される。[韓]の出現頻度の低さは、韓国人観光客の主たる日本観光目的において秋葉原における買い物行動が上位ではないことによるとと思われる²。ただし、本稿においても調査時期の新しい掲示物追加調査では“標準タイプ”である[日英中(簡)韓]をはじめとした[韓]を含む掲示類があらわれつつあるため、使用言語の観点において将来、秋葉原タイプが“標準タイプ”に回収されていく可能性は否定できない。

については、サブカルイメージ言語としての[日]単独用法という側面がうかがえる³。どの程度意図的なものかについては不明だが、少なくとも外国人観光客の排除を目的としたものではなさそうだ⁴。

² これについては、本稿の基となったポスター発表時に韓国人の聞き手から、韓国人観光客における秋葉原ショッピングの人気度の低さと関連性があるという指摘を受けた。また、日本政府観光局サイト記事からは、日本を訪れる韓国人観光客は高級旅館や高級商品ショッピングを期待していることがわかる（「Selling Japan インバウンド動向海外の訪日旅行トレンド 54 韓国発（Travel Journal 2007.7.2）」、「旬刊旅行新聞（2007.4.11，2007.11.10）」）。

³ 「メイド喫茶は日本語が大事」2010年11月25日読売新聞2版「ルックイースト（櫻井孝昌）」からは、日本語がクール・ジャパンを表象するイメージ言語として捉えられていることがわかる。

⁴ 隣地調査の際、少なからぬ外国人観光客がサブカル店舗に訪れている実態を目にしたこと、ならびに本稿の基となったポスター発表の際、注3で引用したような内容を支持するコメントが日本語の非ネイティブから複数寄せられたことなどから推測するものである。

東京圏における言語景観を広く視野にいれたものに Backhaus (2005, 2006, 2007), 田中 (2009), バックハウス (2011) がある。これらを総合すると 2000 年代以降の東京圏言語景観に生じている主な事態は、公的性質の高い表示における上からの変化に連動する[日英中(簡)韓+ピクトグラム]化(言語景観の“標準化”), ならびにニューカマーの増加にともなう当該コミュニティを特徴づける言語景観の増大(言語景観の“エスニック化”例: 新宿区新大久保)の二つに大きくまとめられる。このような東京圏における大きな傾向からみると、秋葉原の言語景観は、いずれとも異なる局面をもつことが浮かび上がった。とりわけ本稿の主要な調査によって示された[韓]の出現頻度の少なさは、言語選択の観点における秋葉原の特徴とみていいだろう。この他、メッセージの内容の店舗分野による偏りや、ごちゃごちゃと張り出される臨時的掲示物などが秋葉原の言語景観の特異性を形成しているといえそうである。

こういった秋葉原タイプとでも呼べそうな秋葉原言語景観の特異性については、さらに文字種による分析や、今回調査対象としなかった項目などからみえてくることも多いと考えられる。たとえばサウンドスケープや各言語話者を店頭配置した多言語対応サービス等がすぐに思い浮かぶ。また、手作りの掲示類がごちゃごちゃと掲出されているという猥雑さが秋葉原らしい景観を形成している可能性を指摘したが、その検証などについては、アプローチも含め、今後の課題としたい。

客観的な調査と街ごとの比較を可能とする指標として、どのようなものを立てることが可能か、という問題については、視覚的表示について量的に把握することが可能なものを、共通の指標として確立させることはできそうである。一方、量的把握が困難なメッセージ内容などについては、どのように把握していくべきか、ということについては課題が残る。また、言語景観の観点から街の類型化を試みるに際しては、どのような地域を調査対象としていくのか、ということも重要と考える。情報地理学的な指標を用いた客観的な地域抽出方法の検討なども、今後の課題としたい。

参 照 文 献

- Backhaus, Peter (2005) Signs of multilingual in Tokyo: A diachronic look at the linguistic landscape. *International Journal of Sociology of Language* 175/176, 103-121.
- Backhaus, Peter (2006) Multilingualism in Tokyo: A look into the linguistic landscape. *International Journal of Multilingualism* 3(1): 52-66.
- Backhaus, Peter (2007) *Linguistic landscapes: A comparative study of urban multilingualism in Tokyo*. Multilingualism Matters 136. Bristol, Buffalo, Toronto: Multilingualism Matters Ltd.
- バックハウス, ペート (2009) 「日本の言語景観の行政的背景 東京を事例として」 庄司博史・ペート・バックハウス・フロリアン・クルマス (編著) 『日本の言語景観』 145-170. 東京: 三元社.
- バックハウス, ペート (2011) 「言語景観から読み解く日本の多言語化 東京を事例に」 中井精一・ダニエル・ロング (編) 『世界の言語景観 日本の言語景観 景色のなかのことは』 122-128. 富山: 桂書房.
- 井上史雄 (2001) 『日本語は生き残れるか』 東京: PHP 研究所.

- Inoue, Fumio (2005) Econolinguistic aspects of multilingual signs in Japan. *International Journal of Sociology of Language* 175/176, 157-177.
- 河原俊昭 (編著) (2004) 『自治体の多言語サービス』東京：春風社 .
- Landry, Rodrigue and Richard Y. Bourhis (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16(1): 23-49.
- 正井泰夫(1972)『新宿の都市言語空間』正井泰夫『東京の生活地図』152-158 . 東京：時事通信社 .
- Shohamy, Elana, Eliezer Ben-Rafael, and Monica Barni (eds.) (2010) *Linguistic landscape in the city*. Bristol, Buffalo, Toronto: Multilingual Matters Ltd.
- 庄司博史・ペート・バックハウス・フロリアン・クルマス (編著) (2009) 『日本の言語景観』東京：三元社 .
- 田中ゆかり (2009) 「首都圏の多言語表示 “標準化” の観点から」 『日本語学』 28(5) : 10-23.
- 田中ゆかり・秋山智美・上倉牧子 (2007) 「ネット上の言語景観 東京圏のデパート・自治体・観光サイトから」 『月刊言語』 36(7): 74-83.
- 田中ゆかり・上倉牧子・秋山智美・須藤央 (2007) 「東京圏の言語的多様性 東京圏デパート言語景観調査から」 『社会言語科学』 10(1): 5-17.
- 東京都千代田区 (編) (1960) 『千代田区史 上・中・下』東京：東京都千代田区 .

参考サイト (最終閲覧日：2012年4月5日)

- 秋葉原振興会「秋葉原アーカイブス」<http://www.akiba.or.jp/archives/index.html>
- 日本政府観光局「訪日外客統計」http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism_data/visitor_data.html
- 日本政府観光局「Travel Journal 2007.7.2」 「Selling Japan インバウンド動向 海外の訪日旅行トレンド 54 韓国発」「高級旅館」の人気高まる ターゲットは20～30代OL(名村裕樹)
http://www.jnto.go.jp/jpn/downloads/tj_070702.pdf
- 日本政府観光局「旬刊旅行新聞 2007.4.11」 「狙い目は働く女性(名村裕樹)」
http://www.jnto.go.jp/jpn/services/receive_tourism_data/articles_asiareport_070411.html
- 日本政府観光局「旬刊旅行新聞 2007.11.10」 「文化, それとも買い物?(安田彰)」
http://www.jnto.go.jp/jpn/services/receive_tourism_data/articles_tourism_news_071110.html

執筆者連絡先：

田中ゆかり
〒156-8550 世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部国文学科
yukari@chs.nihon-u.ac.jp

[受領日 2012年2月28日
最終原稿受理日 2012年4月7日]

Abstract

**Linguistic Landscape of Akihabara Based on Fieldwork in 2010:
A Test Case for Establishing Regional Typology**

YUKARI TANAKA
Nihon University

YOUHEI HAYAKAWA
*Graduate Student,
Sophia University*

HARUKA TOMITA
*Graduate Student,
Sophia University*

NAOKI HAYASHI
*Graduate Student,
Nihon University*

With an eye toward establishing a regional typology based on linguistic landscape research, this paper reports research carried out in 2010 on Akihabara, or “Akiba”, a district that attracts many tourists from abroad and is known as a “sub-culture” area. Fieldwork and observation of store websites revealed the following.

Aside from “Japanese” and “English”, “Chinese” (written in simplified characters) is common on signs and websites for stores. On the other hand, “Korean” is not often seen in either monolingual or bilingual contexts.

Multilingual texts are prominent at electronics and duty-free stores, but in sub-culture stores, the monolingual Japanese type is prevalent.

These results confirm that Akiba is in a state of multilingualization that differs from the “standard” type seen in other areas. The study also points out that the distinctive multilingualism of Akiba reflects characteristics of the area, such as the type of tourists it attracts and the genres of its stores.

国語教育と方言¹

小林 初夫

(福島県双葉郡浪江町立幾世橋小学校²・福島市立岡山小学校(兼務))³

皆さん、こんにちは。今、久野先生からご紹介をいただきました、福島県の南相馬市というところで小学校の教師をしております小林初夫と申します。よろしくお願いします。

1. はじめに

1. 1 東日本大震災の発生と原発事故による避難

南相馬市というのは、最近、テレビのニュースなどでもよく報道されていまして、東日本大震災で地震や津波の被害もあったんですけども、それよりも何よりも東京電力の原子力発電所が近くにありまして、その被害が非常に大きいということで、連日、テレビなどで話題になっております。今回事故が起きてはじめて、私の家が原子力発電所から 18 キロの所にあったということがわかりました。

地震が起こった 2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、グラグラグラと大きく長い時間ゆれまして、大変だと思ったんです。その時は学校にいて、ちょうどあの時間は子どもたちが下校している時間で、半分ぐらいの子は帰って、あと半分ぐらいは校庭で遊んでいたんです。その時に非常に大きなゆれがきて、びっくりしました。避難訓練では机の下にもぐるとか、いろんなことをやっているけれども、実際に起きるとどうしていいかわからない、何をしてもいいかわからないという状態で、ただただおどおどしていたわけです。

それから校庭のまん中に集まって、そこに子どもたちが固まっていて、様子を見ていたのですが、保護者の方も心配して次々と迎えに来て、保護者の方に児童を引き渡しました。そのあと、津波がくるかもしれないということで、うちの学校は海からちょっと離れていて、山手のほうにあるんですけども、川が近くにあるので危ないということで、その近辺は避難するようにという指示が出て、私の学校の体育館が避難所になったんです。

そして体育館に急いで避難所を作ってくださいという指示がありました。でも、避難所なんか作ったことがないし、どんなことをやっていいかわからないので、おどおど困っていたんです。ただ、体育館にマットがあるので、マットをひいたほうがいいかなと思って、マットをひいて、学習発表会とかそういうもののためにゴザもあるので、そのゴザをひいたり、いろんなことをして避難所らしきものを作って、夜になってから市役所の人に引継ぎをして自宅に帰ったんです。家に帰るまでの途中は停電で暗くて、道路が陥没していたり大変な状態でしたが、家に帰ったら、

¹ 本稿は、國學院大學文学部日本文学科におけるゲスト授業「国語教育と方言」(2012年1月17日(火))の録音に基づき原稿化したものである。

² 東京電力福島第一原子力発電所事故による警戒区域内所在のため休校中。

³ ゲスト授業時の所属は、福島県南相馬市立上真野小学校。

家の中も大変な状態でした。屋根瓦は落ちて、ブロック塀は倒れ、食器棚や本棚はすべてグチャグチャな状態だったんです。家の戸を開けて入るんですが、開けて入るところが、もう入ることができないという状態です。物がグチャグチャに散らばっていて、どうしようもない状態でした。

次の日、それを片づけようとしたんですが、道路にブロック塀とか瓦が落ちているんです。それで隣近所で集まってその片づけをしたんです。自分の家の片づけはそれが終わってからということで、その日は隣近所の片づけだけをやっていました。ところがその夜、急に原発の事故のために避難してくださいという避難指示が出て、家の外に出たらもうすごいんです。車が道路にずらっと並んでいて、本当にすごい状態でした。そのあとは避難所を転々として、それから住まいが5ヶ所ぐらい変わりました、いま現在は福島市に避難して、生活をしています。

異動はなかったの、学校は変わらなかったものですから、南相馬市に通っているのですが、峠を越えて通うので冬場は大変です。毎朝5時に起きて6時に家を出ていくという生活をしておりまして、ちょっときついのですが、まあがんばっています。

1. 2 方言への関心と取り組み

私は小学校の教師をしていますが、方言に非常に関心があって、方言の勉強をしながら国語教育をやっています。大学のときに常磐線の電車に乗っていたら、私の住んでいる所から仙台までは80キロぐらいあるんですけども、その80キロぐらいでも乗り降りする人たちのことばがいろいろ違っているので面白いなと思って、方言にだんだん興味をもっていきました。大学のときの講義で、方言学の講義を受け、方言が学問の研究の対象になるということにびっくりしまして、それなら自分でもいろいろ調べてみようと思って、調査して集めた資料を使い卒業論文を書いて、卒業してからも関心があるのでずっと続けています。

そのかわり、方言に関係することでお手伝いできることは、いろいろお手伝いをしています。地元のテレビ番組とか、生涯学習の講座とか。それから仙台の宮城教育大学と、福島県の警察学校で授業をもっています。いろいろ聞いてみると、警察学校で方言の授業をやっている所は日本全国で福島しかないということを知って、私も大変驚いたんですけども、先駆的な試みをしてるなと思いました。

今現在、福島県、宮城県、岩手県には、全国の警察の方が応援に、2週間、3週間派遣されてきて、よその都道府県のパトカーが走っています。よその警察官がたくさんいて、その会話を聞いてみると、方言が飛び交っているんです。そこで警察官たちに質問してみると、「こちらのことばは、わからないことばがあるな」とか、逆に避難所にいる人たちに、「ここに来たおまわりさんのことばはどうですか」と聞くと、「なんだかちょっとわからなかったな」とか、いろんな印象を語ってくれて非常に面白いんです。

それで福島県に来た警察官にインタビューしたり、調査したりすれば、面白い資料が得られそうだなと思っていたところ、この春、警察官を増員するということが、全国から来た警察官を、福島県の警察官として採用するというのをやるんです。そうすると、応援部隊が今度の3月末から来なくなっちゃうんです。非常に残念だなあと考えています。やっぱり思ったときにすぐやらなくちゃいけないなと思いました。でも、採用したときに採用時の研修があるので、もしかし

たら、そのときに何かお手伝いできることがあるのではないかと考えています。

警察官がパトカーでパトロールしたときに、無線でいろいろ指示を出したり、連絡をしたりします。かつては、それをそれぞれの警察署単位で無線でやっていたんです。ところが、今は福島市にある本部で全县の無線を管理している、そういう集中管理システムになったものですから、わからないことばが飛び交っていて困ることが時々あるそうです。不審な車のナンバー照会というのを無線でやるのですが、そのとき、「・(点) 532」と言うときに、点を「ポツ」と言ったり、「ポチ」と言ったりする。そういうのが無線に入ってきて、「最初はふざけてるんじゃないかと思った」と、通信指令室の若い福島県出身の警察官が言っていました。なるほど、そういう無線用語でさえも違って来る、地域差がある、これは面白いネタがいろいろ集められそうだなと思ったので、早速、通信指令室にそういうことがあったときには書き留めておいてくださいとお願いしてきました。

そんなふうにして、いろんなところに方言やことばの面白さがあると、ネタ集めをして、学校で紹介したり授業で活用したりしているわけです。けれども小学校の教師なので、国語が終われば算数、算数が終われば社会、理科と他の教科も教えています。

2. 国語教育の現状と課題 —国語の授業を考える—

2. 1 国語の授業は好きですか？

私は、方言やことばにすごく興味、関心があって、国語はもともと好きでした。けれども、大学のときに教育実習をしたり、その後教師になっていろいろな学校の授業を見に行ったり、自分たちの学校の研究会で、お互いに先生方で授業を見合ったりしながら思っていたことは、国語の授業はあまり楽しくないなあという印象と、これが本当に国語の授業なのだろうかという疑問です。

皆さんにちょっとお聞きしたいんですが、ここにいる皆さんは、国語の授業、あるいは国語が好きでしょうか。小学校のころを思い出してみても、国語の授業が楽しかった人、ちょっと手をあげてみてください。——はい、ありがとうございます。どちらかといえば楽しかった、まあ楽しかったという人、手をあげてください。——はい、ありがとうございます。あんまり楽しくなかったという人。——はい、わかりました。すごく苦痛だったとか、面白くないとはっきりいう方はいらっしゃいますか。——さすがにこれはない。はい、ありがとうございます。

国語の授業で、私がいろいろな話を聞いて思ったのは、国語の授業には正解がないから好きだという人がいます。正解がないから何を言っても正解になると。算数や数学の好きな人に聞くと、国語の授業は正解がないから嫌いだという人がいて、逆のようなことを言うのですが、はてはて国語の授業とは一体何なのかと考えてみたときに、国語の授業というのは、読んだり、書いたり、話したり、聞いたりする、そういう力をつける、ことばの力をつけるのが国語の授業であり、国語の教育です。国語の教科書には、みんながそういうことを勉強できるようにするためのいろいろな教材が載っているわけです。

しかし、国語の授業はことばの授業なので、ことばの力をつけるわけですがけれども、そういうあたりまえのことが、あんまりできていないのではないかというような感じが、昔から非常に

しています。大学生のときもそう思っていて、大学生のときに思っていた気持ちが今も変わっていないんです。教師になっていろんな授業を見たり、自分で授業をしたりして見て、今でもその気持ちが変わっていないんです。

2. 2 変わらない国語の授業

それはどういうことなんだろうといろいろ考えてみると、国語の授業そのものが昔からあまり変わってはいないということです。国語教育学とか、そういう学問的な国語教育の分野でいろんな実践がなされたり、研究がなされたりもしているのですが、基本的なところはあまり変わっていないような感じがします。

『学習指導要領』というのがあって、授業はそれに沿って行われています。この『学習指導要領』がこのあいだ改訂されました。国語の目標がどんなふう変わったのかというのを見たのですが、まったく変わっていませんでした。その目標というのは、「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝えあう力を高めるとともに、思考力や想像力および言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」という、なんだか硬い文章で、長ったらしいですね。教員採用試験には、こういうのが虫食い問題で出るんです。そういうときに線を引いて、思考力、言語感覚、そんなことばを覚えるんですけども、どうもここに書いてあることばは変わらない、やっている中身もあまり変わってないということを、いろんな授業を見て感じます。

2. 3 ことばの力を育てる授業になっていない

国語の授業というのは、ことばの力をつける授業であるはずなのに、なぜかことばの授業になっていないというのが多いのです。国語の教師＝文学の教師みたいに見られていた時代があったんですけども、今もそういうのがすごくあって、国語の教師というと、本たくさん読んでますねとか、小説、作家は誰が好きですかとか、そんなことを聞かれるようなことが時々あるということが、先生方との集まりでよく話題になります。国語の教師＝文学の教師、国語の教師＝国文学・日本文学の教師みたいな感じで、国語の教師＝ことばの教師、国語の教師＝国語学・日本語学の教師という認識はあまりないんです。

それは教科書にもはっきり反映していて、いろんな教科書会社の教科書を見ますと、言語事項に力を入れている、ことばについて大事にしている教科書もありますが、それよりも文学作品などの文章に力を入れている教科書が多いのです。その傾向は、教科書をずっと見てみると、どうも昔からあまり変わっていないような感じがします。そうすると、教える教師の意識も変わらないので、同じような授業のくり返しが行われている。だから国語の授業は昔と今であまり変わっていないのではないかという感じがします。

2. 4 「伝統的な言語文化」＝古典 か？

『学習指導要領』の中に、「言語活動」と「伝統的な言語文化」ということばが入ってきましたので、これを機会に、身近な地域素材の教材として方言を取り上げることがしやすくなってき

たのではないかと思います。

そのためにどんなことをしたらいいのかということですが、今、国語教育で「言語活動」と「伝統的な言語文化」が、キーワードになっています。でも、何をやっていいのか、実際のところ、現場の教師はわからないで迷っていて、先行的な実践があると、それをみんなまねします。そうすると同じようなものがずっとできてくるということで、伝統的な言語文化で、方言を扱っている授業実践というのが、まだほとんどないので、今その実践をやれば、方言を教材として授業することができるということに教師が気がついて、それがじわじわと全国的に広まっていくのではないかと思います。

そういう先行的な実践例がないために、今は伝統的な言語文化というと、どうしても古典とか古文、漢文の読み方に偏ってしまっています。また、声に出して読むのがいいと誰かが言うと、それが流行って、教師は教室や廊下に「声に出して読もう」なんて書いて掲示しているんです。

2. 5 国語教育に方言を取り入れる必要性

子どもたちのことばの環境は、それぞれ地方によって違います。それぞれ違った所で、違ったことばが、子どもの身近な所で飛び交っているわけですから、それを利用してというか、それをまず見つめさせる。子どもたちに見つめさせなくてはいけないし、それを見たり聞いたりする目や耳を育てなくてはいけないと思うんです。でも、なかなかそういう見たり聞いたりする能力というのは育たないというか、育てる機会があまりないというのが、実際のところなんです。

教師がそういうことをさせなければ、教師自身がその地域のことばに関心をもたなくてはいけないのですが、教師自身もあまり関心をもたない。この町も、隣の町もことばは同じだ、あまり変わらない、と。でも、本当にそうか。実際は違っているんです。でも、そういう感覚をもつためには、子どもたちにそういう感覚を鋭くさせるためには、教師がそういう感覚をもつ必要がある。教師がそういう感覚をもつためには、関心をもたなくてはいけないし、そういう勉強をしなくてはいけない。そのために、教員養成の段階で勉強するきっかけがなくてはいけない。大学の、少なくとも国語の免許を取るような学生の方には、その地域のことば、方言を見つめるような授業は必修であったほうがいいのではないかと思います。国語教育に方言を取り入れることは必要であり、なくてはならないことだと思います。

2. 6 「聞く」ことを鍛える

もう一つそう思う理由は、さっき、言語活動と言いましたけれども、子どもたちに何か言語活動をさせるためには、話すでも、聞くでも、書くでも、そうですね、子どもたちのことばを教師がわかっていなくてははいけません。でも、子どもたちのことばを教師がわかっているかという、あまりわかっていない。なぜか。教師は話して教えるから一方通行になりがちで、子どもから聞くということがあまりない、ありそうでないんです。子どもたちにいろんな発表会とかをさせていますけれども、その発表会でも、「もっと大きな声で」とか、「聞こえません」と言ったりして、後ろのほうに教師がいて、「ここまで聞こえてこない」と注意する。

しかし、大事な指導は、発表のときに「もっと大きな声で」ではなくて、聞いている子どもた

ちに、「みんなよく聞いて」、「はい、静かに聞いて」というふうにして、聞く指導をしたほうがよほど聞く力が育つというか、発表するほうに、もっと大きな声を出してと言うよりも、送信よりも受信の装置を鍛えたほうが、かえって効果があるのです。

2. 7 『学習指導要領』に対応させた方言の扱い方

『学習指導要領』の中で、小学校低学年には、「丁寧なことばとふつうのことばとの違いに気をつけて話すこと」と書いてあります。ですから、低学年の段階で、丁寧なことばとふつうのことば、二つのことばがあるということに気づかせなくてはならない。

それから3、4年の中学年になると、「丁寧なことばを用いるなど、適切なことばづかいで話すこと」とあります。ですから、中学年になると、丁寧なことばを使って、そして相手に応じて、場面に応じて、適切なことばの使い分けをしなさいということをやするわけですね。

そして5、6年、高学年になると、「共通語と方言との違いを理解し、また必要に応じて共通語で話すこと」となっています。ということは、小学校高学年の段階で、共通語と方言の違いを理解しなくてはならない。共通語と方言があるということに気がついて、その違いを理解しなくてはならない。何が共通語で、何が方言であるかということ、区別できるようにならなくてはならない。

これが小学校6年間での国語教育の話すことの目標になっているのです。しかし、これを評価するテスト、試験はあまりありません。もし、あったとしても採点や評価が非常にむずかしい。じつは国語教育の現場では、話すこと、音声言語というのは、大事だ大事だといいいながらあまり大事にされていない。書きことばにくらべ、話しことばは大事にされていないというところがあります。

それから「伝統的な言語文化」というのが入ってきたのですが、実際、何をやったらいいかわからなくて、まだあまり現場の実践はないんですけれども、例として古文、漢文、あるいは近代以降の文語調の文章というのが例に出ています。しかしその中で、「話しことばと書きことばの違いに気づくこと」というのが高学年の中にあって、「時間の経過によることばの変化や世代によることばの違いに気づくこと」という一文が、新しい学習指導要領に入ったんです。

これは、方言を扱ういいチャンスの一つではないかと思います。こういうところで方言を扱わないと、古文、漢文などの音読だけになってしまい、地域のことば、方言というほうに関心が向いていかないのではないかと思います。

3. 小学校での国語の授業の実際

3. 1 「しっぽのやくめ」の授業例

実際に国語の授業で、どんな授業が行われているかということ、たくさん紹介したいのですが、時間も限られていますので、きょうは一つだけ持ってきました。「しっぽのやくめ」という文です。皆さんのお手元の資料の中にあると思います（次ページ）。これは以前、光村図書の教科書に載っていたのですが、いつの間にか消えてなくなりまして、今は「光村ライブラリー」



長いしっぽです。
これは、ちんの
しっぽでしょう。

どうぶつのはしっぽは、
いろいろなかよくめを
しています。



太いしっぽです。
これは、ちんの
しっぽでしょう。



これは、くもざるの
しっぽです。
くもざるは、しっぽで
くだものをもぎとります。
くもざるのはしっぽは、
手のようなやくめを
しているのです。

これは、きつねの
しっぽです。

きつねは、きゅうに
むきをかえるとき、

しっぽを強くふります。

きつねのしっぽは、

船のかじのような

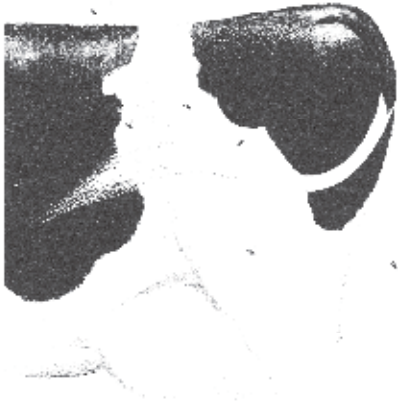
やくめをしているのです。



先の方に、

ふさふさした毛が
生えています。

これは、なんの
しっぽでしょう。



これは、牛の
しっぽです。

牛は、しっぽで、

はえやあぶを

おいはらいます。

牛のしっぽは、

はえたたきのような

やくめをしているのです。



「しっぽのやくめ」(光村ライブラリー(第5巻)『からすの学校 ほか』(光村図書出版, 2002))

の『からすの学校』という本に入っています。小学校1年生の教科書にあつて、子どもが初めて学校で学ぶ説明文、人生最初に出会う説明文がこの文章でした。

私が国語の授業をあちこち見て歩いたときに、この授業が非常に多かったんです。動物が出てくるし、なんだか楽しそうで扱いやすいというので、先生方はよくこの授業をやっていました。ちょっとこれを皆さんに読んでいただきたいのですが、おひとりずつというのは大変でしょうから、みんな一斉にこれを読んでください。はい、どうぞ。

(会場唱和)

どうぶつのしっぽは、いろいろなやくめをしています。

長いしっぽです。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、くもざるのしっぽです。

くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります。

くもざるのしっぽは、手のようなやくめをしているのです。

太いしっぽです。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、きつねのしっぽです。

きつねは、きゅうにむきをかえるとき、しっぽを強くふります。

きつねのしっぽは、船のかじのようなやくめをしているのです。

先のほうに、ふさふさした毛が生えています。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、牛のしっぽです。

牛は、しっぽで、はえやあぶをおいはらいます。

牛のしっぽは、はえたたきのようなやくめをしているのです。

はい、ありがとうございました。お手元の資料は教科書を縮小コピーしたもので、実際の大きさというのは、こんな大きさです(写真1)。こんな感じです。カラーで非常にきれいな絵になっています。まず、「どうぶつのしっぽは、いろいろなやくめをしています」と書いてあつて、最初のところに、こんな絵が三つあります。これはあとで出てくるしっぽのやくめと関連してくるのですけれども、最初、「長いしっぽです。これはなんのしっぽでしょう」となっています。次のページは見えませんので、だいたい教師は子どもたちに、「はい、これはなんのしっぽかな?」と考えさせます。子どもたちはいろいろ考えますが、中にはもう次のページを見ている子もいるんです。すると、「あっ、〇〇ちゃん、見てはだめだ



写真1

よ」と注意する。でも、もう見てますからね。

次、「これは、くもぎるのしっぽです」。でも、くもぎるなんていうさるの名前、ここではじめて聞く人が多いんですね。「知ってる、知ってる」という声があるけれども、これをチラッと見て知ってるのであって、くもぎるを知っているわけではないんですね。そして、これはくもぎるのしっぽだと。「ああ、これはくもぎるっていうんだね、そっかあ、果物をもぎとるんだ、果物をもぎとることできるなんて、すごいなあ」などと、教師は子どもに向けていろいろ語りかけます。子どもたちはそれを興味深く聞いているわけです。そして「くもぎるのしっぽはなんの役目してるの？」なんて聞くと、「手のような」などと子どもが言うわけです。「そうだよな、はい、手のように線を引きましょう」。あるいは「手のようなとノートに書きましょう」と言って書かせます。

次、「太いしっぽです。これはなんのしっぽでしょう」。子どもはこれを見ると、「きつね」と言う。これは次のページを見て言う子どももいますが、山間部の学校だと、「みんな、きつねを見たことある？」なんて聞くと、「ある。おじいちゃんがこのあいだ捕まえてきた」などと言います。「そうか、おじいちゃんが捕まえてきたのか、すごいなあ。どのぐらいの大きさだった？」「このぐらい」「あのぐらい」などと答える。

楽しそうですけれども、ほとんど国語から脱線していますね。(笑い)「そうか、そうか」。「きつねのしっぽって、みんな、こんなふうにかすの、知ってたかな？」「知らない」。「今はじめて知った？」「うん、知った」。「教科書にはいいこと書いてあるよね」などと言う。「急に向きを変えるときにしっぽをどうするの？」と聞くと、「強くふる」と答える。「そうだね、強くふるに線を引きましょう」と指示する。あるいは逆に、「どんなときにしっぽを強くふるのかな？」と聞くと、「急に向きを変えるとき」と答える。「そう、急に向きを変えるときに線を引きましょう」と指示する。こんなふうの流れでいく授業が行われています。

次、「船のかじのようなやくめをしている」。「船のかじって何だろうね？」。大人ならわかりますけれども、子どもにかじと言うと、ぼうぼう燃えてる火事だと思うんです。「船が火事になったんだ、大変だ」とかいろいろなことを言い出す。そのときに最初のページの絵がヒントになってくるわけです。

次、「先のほうに、ふさふさした毛が生えてる。これはなんのしっぽだろう？」「牛」。あたりまえです。これはどう見ても牛にしか見えません。くもぎる、きつね、牛と、だんだんむずかしくなるのではなくて、だんだん簡単になってきている。「そう、これは牛のしっぽだね。牛はしっぽでなにをするの？」と聞くと、子どもはここを見て、「はえやあぶをおっぱらっています」と答える。「おいはらっている」と言う子どもはほとんどいません。「そう、おっぱらってるってことは、おいはらっていることなんだよ」なんて言いますが、「おっぱらってる」と言ったときに、「おっぱらう」が「おいはらう」だということを、丁寧に教えなくてはいけないんです。

「じゃあ、みんな、ほかにしっぽのある動物、どんな動物がいるか、みんなの知っている動物をノートに書きましょう」。そして次々としっぽのある動物をノートに書く。書き終わった頃を見計らって、発表させる。あるいはその発表したものを板書する。「皆さん、たくさん動物知ってるね。すごいねえ」、ほめられた子どもたちは笑顔。教師も笑顔で、活発な国語の授業は終

わっていくわけです。

3. 2 ことばの力は育っているか

さて、ここです。この授業で、子どもたちのことばの力、言語能力は何がついたのでしょうか。あるいは何がつくのでしょうか。そういうことを考えると、どうも楽しい、面白いで終わっているような授業はたくさんあるのですが、ことばの読み取りをきちんとやっている授業というのは、あまり見られない。私は授業研究会などで、そういうことを言ったり、あるいはそういうことを質問すると、「1年生は入門期なので、楽しくやらないと、国語嫌いをつくってしまう」とか「初めて出会う説明文で、そんなむずかしいことをやっていたのでは、子どもたちが説明文嫌いになってしまう」と先生方から返されることがよくありました。

しかしながら、本当に知的で楽しい授業を組み立てれば、決して子どもたちはつまらないとか、嫌いだというふうにはならないということを、私は自分の授業でいろいろと試みております。それにはどういうことが大事かという、まず基本的に国語の授業がことばの授業になっているということです。ここにはたくさん絵がありますけれども、もちろん、絵を見るのはいいことです。絵と文章を対応させて読んでいくことはいいことですが、このことばを大事にしなくてはいけない、ことばが大事であるということをもう少し意識しなくてはいけないと思います。

3. 3 ことばを大事に考える授業とは

3. 3. 1 くもざるのしっぽ —対義語、語源、連濁

どういうことかといいますと、たとえば、このくもざるのしっぽの場合には、「長いしっぽです」というときに、「長い」ということばの反対が「短い」であり、「短い」があつて「長い」があるということにも、留意しなくてはいけない。長い手足としっぽがあり、くもを連想させるからくもざるというのだという予備知識を教師がもっていることも大切。また、「くも」＋「さる」が「くもざる」であるという、ここで複合していることを教えることもいいことだと思います。

3. 3. 2 「もぎとる」と「とる」 —類義語

また、ここで大事なのは、「くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります」というところで、「くもざるはしっぽで何をするの」と聞くと、「くだものをとる」とか「りんごをとる」と答えて、「はい、そうですね」と言っ、終わってしまうのがほとんどですが、私はそこで終わりません。

私はどういうふうにしたかという、本物のりんごを教室に持っていきました。そして私がりんごの木になって、(実演)「はい、先生はりんごの木です。はい、ここにりんごがあります。はい、〇〇さん、りんごをとってください」と言う。子どもは、「えっ、本当にいいの?」と聞きます。「いいよ、はい、どうぞ」。「はい、とって」。「とってください」。私は力を入れて強くつかんでいるのでとれない。「ああ、残念だね。とれなかったね」。「それじゃあ、とってくださいでとれなかったから、もぎとってください」と言います。「もぎとって」のところを強調して言

います。そうすると、クイツと、子どもはこうやってとります（実演）。「おっ、すごい、とれた」。私は子どもが手をねじったとたんに手を離します。すると、「あれ、どこが違う、もう1回見てみよう」、そしてもう1回やらせると、「とる」のときには下にやったけれども「もぎとる」のときには、こうやった。（実演）「これはなんだい？」と聞くと、「ねじった」とか「回した」ということばが出てくる。それをすぐに板書します。そして「何かもぎとったことがある？」と聞くと、「柿もぎしたことがある」とか「トマトをもぎったことがある」と返ってきます。「そう、もぎったことがある、そうすると、『もぎる』と『とる』は違うんだね」ということを、子どもたちにそこで気づかせるわけです。「とる」ではとれない、でも「もぎる」だととれる。そういうことに気づかせて、「もぎとる」は、ねじってとってる、力を入れてとる、「とる」ではとれないような、強くくっついてるものをとることが「もぎとる」なんだと、子どもたちにわからせるようにします。また、「もぎとる」は、「もぐ」と「とる」が合わさったことばだということを教えると同時に、ねじって切り離すことだと教えることも大切です。子どもの家庭や地域の実態も大事です。「何かもぎったことがある？」と聞いたとき、いちごの栽培農家が多い地区では、「いちごは、もぎとるって言わないの？」と聞くと「言わない」と返ってくる。「なんていうの？」「いちごはつむ」。「あっ、いちごつみて言うね」。そうすると「つむ」と「もぎとる」は違うんだなということにも気づかせることができる。

3. 3. 3 うしのしっぽ —先の「ほう」、はえたたきの「ような」

それから牛のしっぽで、「先のほうにふさふさした毛が生えています」のところは、普段授業で使う指示棒を利用して、「この棒の先のほうってどこかな、ちょっと、〇〇くん、さわってみてください」などと言います。実際にやってみましょう（写真 2）。この棒の先のほうってどのへんですか。ちょっと人差し指でさわってください。— そのへんですね。



写真 2

いま3人の方にさわってもらったところ、「先」はどこでしょうと、「先」と言ったときには先端をさして、「先のほう」と言うと、このへんもかなと。「先のほう」と言うとき「ほう」を強調すると、だんだん示す部分が先端から離れてきます。そんなふうにして、「先のほう」の「ほう」に注目させる、「先」ではない。そういうことを、「先」も「先のほう」も同じとってしまうと、大事な意味をあいまいにしてしまうので、ここで正確にことばにこだわって教えることが大事です。

それで「先のほうにふさふさした毛」ということで、パソコンの画面をきれいにするものがありますね。短い柄がついて、上のほうがふさふさした、デスクトップクリーナーというのでしょうか。あれを用意しまして、「先のほうにふさふさした毛というのはこういうものだね」と、パッと出して見せました。「先」と「先のほう」が違うということを教えることはとても大事です。「消防署のほうから来ました」なんて言いますね。（笑い）「消防署のほうから来ました。消

火器はいりませんか」と。消防署から来たならまちがいはないけれども、消防署のほうからはあやしいですね。ただ、方向しかさしてない。そんな変な訪問販売から身を守るためにも、「先のほう」の「ほう」は大事にしたほうがいいのかと私は思います。

それから、「牛のしっぽはなんのやくめをしますか」と聞く。すると、「はえたたきのやくめをする」と答える子どもが必ずいます。そのとき、私は「はえたたきのやくめ、ほほう」と言って、はえたたきをパッと出します。そして『「はえたたきのやくめ」って書いてあるかなあ?』と言うと、子どもたちは本文を読み返し、『「はえたたきのような」って書いてある』と気づく。板書して、はえたたきを見せながら、どう違うのかを考えさせます。子どもたちはだんだんと気づいてきます。はえたたきというのは、はえをバシッと殺します。でも、牛はしっぽで殺せないんです。ヒュッヒュッヒュッと振って、ただ追い払うだけです。それからのはえたたきだと、どこにでも持って動いていけるので、はえの移動に合わせて人間も動いて、バシッとできますけれども、牛はしっぽで、いろんな所に行くと、はえをパシパシはやらないですね。牛は動かないで自分の所に来たハエを追い払うだけです。ですから、似てるけれども違うんです。だから「はえたたきのような」となっている。そんなことで「ような」ということを、ここで強調して教えるわけです。

そんなふうにして、何気なく言い換えたり、あっさり流しているようなところを流さないで、しっかりことばにこだわって、ことばに注意して、気をつけてやっていく。それによって子どもたちが次に説明文を読むときに、ことばに気をつけて読むようになるんです。そして、何かちょっと違いがあるなと感じたときに、その違いは何だろうということを考えるようになるのです。

3. 4 国語の授業で最も大切なこと —ことばの力を育てるにはどうすればよいか

似たようなことばだからといって、簡単に言い換えて済ませるのではなく、どう違うのかを考えさせることが大切です。

たとえば、「きれい」と「美しい」の違いを教えるときに、「部屋をきれいにするって、どんなふうにすることかな?」と考えさせる。すると「掃除機をかける」とか、「窓を拭く」などと出てくる。次に、「部屋を美しくするには?」「美しい部屋ってどういう部屋?」と聞く。「きれいにしてから、花とか何かを飾ったり…」と、お掃除プラスアルファが出てくればしめたもの。何か違うことを感じている。

「ご飯をきれいに食べなさいって言われたらどうする?」と聞く。「ご飯つぶを一つぶも残さないで食べる」。「じゃあ、ご飯を美しく食べなさいって言われたらどうする?」と聞く。「しせいよくすわる」。「背すじをピンとのばす」。「ちゃわんとはしをきちんと持つ」。だんだんと違いに気づいてきます。違いの説明がうまくできなくても、違いに気づかせることが大切です。その違いに気づいたときに子どもたちは、「ああ、なるほど!」と思い、今度は自分で作文を書いたりするときに、ふさわしい的確なことばを使って表現できるようになるのです。そんなふうにして、ことばを大事にして教えていく授業をしなければ、国語の授業がことばの授業として成立しないんです。

「しっぽのやくめ」で、こんな授業を見たことがあります。ここに出てくる動物について自

由に調べるように課題を出して、子どもたちが図鑑などで調べてきたことを発表し合います。くもぎるやきつね、牛について百科事典的な知識を並べさせるんです。それはもう国語ではなくて理科です。

かつて、「じゃがいもの一生」という説明文教材があり、学校でじゃがいもを栽培し、それを観察させながら説明文の読み取りをさせるという実践が各地で行われました。これは国語の授業ではなくて理科の授業です。国語の授業は、その説明文に書いてあるじゃがいもの説明について読み取ることによって、説明文の読み方や、ことばについて学習しなくてはいけないんですけれども、じゃがいもを栽培しながら読むととなると、それはもう国語ではないんです。

国語の授業というのは、ことばの授業なのに、なぜか一步まちがうと理科や社会の授業になってしまう。また、そうなっても、おかしいとは感じないで、熱心に教えてしまう。そういう国語の授業がけっこう多いんです。国語の授業はことばの授業になって成り立つものであって、ことばの力をつけることが国語の授業で最も大切なことです。そうするためにどうしたらいいかということを考えなくてはならないと思います。

4. 方言教材の必要性

4. 1 ことばのゆれ

ことばに関心をもたせるために、方言の授業をすると、子どもたちは熱心に取り組みます。ちょっと古い実践を資料として持ってきました⁴。

「ことばのゆれ」という現象は、皆さんご存じでしょうか。『国語学大辞典』には次のように説明があります。

ゆれ fluctuation【事実】言語体系には不安定な部分もあって、個々の言語形式に即していえばゆれているものがある。諸方面のゆれの現象があるが、語形のゆれを中心にみると、それは、ある単語の同一の機能をもつ語形が、同一の共時態において、二つ（以上）共存している不確定な状態である。「ニッポン／ニホン、イク／ユク、トートイ／タットイ、カッテ／カツテ、セー／セ（身長）、ホー／ホホ（頬）、ジューフク／チョーフク（重複）／ムズ（ツ）カシイ、コマヌ（ネ）ク、イリグ（ク）チ、サンカ（ガ）イ（三階）、イッシヨ（シヨ一）ケンマー」のようなものが現代日本語におけるゆれの例としてあげられる。（以下略）

（国語学会編『国語学大辞典』東京堂、1980、「ゆれ」の項）

これを授業にしたら面白いだろうと思っていたのですが、教科書を調べると、教材になっていないんです。こんな面白いものがなぜないのかと雑談で話題にしていたら、宮城教育大学の松本宙先生が、教材文にして授業をしてみようじゃないかとおっしゃって、「ことばはゆれている」という教材文を作ったんです（次ページ）。子どもたちの身近にあることばを取り入れて、教材文にしてはいかがでしょうかとご提案したところ、私の住んでいる小高町（今は南相馬市ですが、前は福島県相馬郡小高町でした）のことばをちょっと入れてくださいました。この教材文を使って6年生で授業をしてみました。すると子どもたちの反応がとていいんです。小高町の

⁴ 松本宙(1997)「「ことばのゆれ」を教材化する」(宮城教育大学国語国文学会編『国語科の新しい授業を創る』明治図書、所収)

ことばはゆれている

松本 宙

東京の「新習」を、かなの通り「シンジュク」と言う人は少ない。東京では、たいていの人は「シンジク」と言っているようだ。「さびしい」という語を「さみしい」と言う人も見られる。さて、この文を讀んでいるあなたはどうか言っているだろうか。発音だけでなく、「よい」と「いい」のような言い方もある。「よい」と「いい」とどちらが正しいだろうか」と聞いたら、「どっちでもええ」と答えた人がいたという笑い話がある。

「シンジュク」と「シンジク」、「サビシイ」と「サミシイ」、あるいは、「よい」と「いい」のように、同じことを言うのにいくつもの言い方があって、使い分けに迷うような場合がある。まるで、時計の振り子のように二つのことばの關をふらふらゆれているので、こういう現象を「ことばのゆれ」と呼んでいる。私たちのまわりにはこのようなゆれの例が山のようにある。「あたたかい」と「あったかい」はどうちがうのか。「手術」ということばも「シジュツ・シジュツ・シジツ」のようにいろいろな発音がされている。「言った」と言うところを「ユッタ」と言う人もいる。「行く」

にも「ユク」と「イク」の二つの言い方がある。私たちの小高町では、「持ち上げる」ことを「タンガク」と言うが、「タガク」と言う人もいる。「昨日」を「キノー」とも「キンニョ」とも言う。これらは発音のゆれだ。



キノー
キンニョ

日本の切手にはローマ字で「日本」と印刷してある。千円札や一万円札にも「NIPPON」
と書いてある。それでも「日本」という国の名がニッポンかニホンかはいつも問題になっている。東京の「日本橋」はニホンバシだが、大阪の「日本橋」はニッポンバシである。「工場」という漢字はコウバともコウジョウとも読む。これは漢字の読み方のゆれである。

「お金が足りない」ことを「足らない」という人がいる。「足らない」はもともと西日本の方の言い方らしく、地方による言い方の違い、つまり方言間のゆれと見える。「言った」は西日本では「ユータ」となる。「水が飲みたい」と「水を飲みたい」では、あな

たはどちらを使うだろうか。「テレビゲームがしたい」と「テレビゲームをしたい」について同じである。「今日は暖かい」と言うが、「今日は暖かだ」とどどが違つか。二つの言い方があることは確かである。「見ることが出来る」ことを、「見られる」と言うか「見れる」と言うか。「食べることが出来る」ことを「食べられる」と言うか「食べれる」と言うか。「見れる」や「食べれる」は正しい言い方ではないと言う人も多いが、今では大勢の人が使っている。つまり、ゆれている。「怒いだけれども」という言い方について、小高町でアンケートをしてみた。怒いだケレドモ」「怒いだゲント」「怒いだゲンドモ」「怒いだゲンチョ」「怒いだゲンチモ」と、五通りもの答えが返ってきた。これは個人によるゆれだが、こんなに変化がある「ゆれ」もめずらしい。

ことばのゆれの例は私たちのまわりにもいくつも見つか。「やばり」を「やっばり」というのは、書きことばと話しことばのちがいがいとも知れないが、「やっばし」だの「やっば」だのということばを使っている人もいるだろう。たぶんその人は、みんなのまえで発表するときなどは「やっばり」と言うが、親しい友達の間では「やっばし」「やっば」を使う、というような使い分けをしているのではないだろうか。若者の間で「ちがった」を「ちがかった」と言ったり、「きれいだった」を「きれかった」と言ったりするのはやっばりである。これも「やっばり」「やっばし」「やっば」のような使い分けがありそうだ。ゆれていることばも、よく観察するとこのように、場面による使い分けが見つかるともある。まわりの人たちのことばを観察してみると、意外な発見があるかも知れない。

このように、ことばは様々にゆれている。発音のゆれ、漢字の読み方のゆれ、地方差によるゆれ、「見られる」「見れる」のような、ことばのきまりのゆれ、それに「やっばり」と「やっばし」「やっば」のような、場面によるゆれなどである。しかし、このような様明のゆれは例もたくさんある。あなたのまわりにも、たくさん「ことばのゆれ」があるはずである。これを機会に、自分自身やまわりの人たちのことばをじっくりと観察してみようだろうか。

わっていくわけです。

3. 2 ことばの力は育っているか

さて、ここです。この授業で、子どもたちのことばの力、言語能力は何がついたのでしょうか。あるいは何がつくのでしょうか。そういうことを考えると、どうも楽しい、面白いで終わっているような授業はたくさんあるのですが、ことばの読み取りをきちんとやっている授業というのは、あまり見られない。私は授業研究会などで、そういうことを言ったり、あるいはそういうことを質問すると、「1年生は入門期なので、楽しくやらないと、国語嫌いをつくってしまう」とか「初めて出会う説明文で、そんなむずかしいことをやっていたのでは、子どもたちが説明文嫌いになってしまう」と先生方から返されることがよくありました。

しかしながら、本当に知的で楽しい授業を組み立てれば、決して子どもたちはつまらないとか、嫌いだというふうにはならないということを、私は自分の授業でいろいろと試みております。それにはどういうことが大事かという、まず基本的に国語の授業がことばの授業になっているということです。ここにはたくさん絵がありますけれども、もちろん、絵を見るのはいいことです。絵と文章を対応させて読んでいくことはいいことですが、このことばを大事にしなくてはいけない、ことばが大事であるということをもう少し意識しなくてはいけないと思います。

3. 3 ことばを大事に考える授業とは

3. 3. 1 くもざるのしっぽ —対義語、語源、連濁

どういうことかといいますと、たとえば、このくもざるのしっぽの場合には、「長いしっぽです」というときに、「長い」ということばの反対が「短い」であり、「短い」があつて「長い」があるということにも、留意しなくてはいけない。長い手足としっぽがあり、くもを連想させるからくもざるというのだという予備知識を教師がもっていることも大切。また、「くも」＋「さる」が「くもざる」であるという、ここで複合していることを教えることもいいことだと思います。

3. 3. 2 「もぎとる」と「とる」 —類義語

また、ここで大事なのは、「くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります」というところで、「くもざるはしっぽで何をするの」と聞くと、「くだものをとる」とか「りんごをとる」と答えて、「はい、そうですね」と言っ、終わってしまうのがほとんどですが、私はそこで終わりません。

私はどういうふうにしたかという、本物のりんごを教室に持っていきました。そして私がりんごの木になって、(実演)「はい、先生はりんごの木です。はい、ここにりんごがあります。はい、〇〇さん、りんごをとってください」と言う。子どもは、「えっ、本当にいいの?」と聞きます。「いいよ、はい、どうぞ」。「はい、とって」。「とってください」。私は力を入れて強くつかんでいるのでとれない。「ああ、残念だね。とれなかったね」。「それじゃあ、とってください」とれなかったから、もぎとってください」と言います。「もぎとって」のところを強調して言

4. 2 方言を調べよう

子どもたちに方言の授業をするときに、いろんな扱い方があるんですけども、私が1つ、実践したもので紹介したいのは、「方言を調べよう」という宿題を出す方法です。

これはまず、その地域で方言がたくさん出てくるのではないかと予想されるものを、項目としてあげるわけです。たとえば、『方言辞典』のようなものや、『日本言語地図』という方言の分布地図、そういうものを見て、地域差がありそうなものを探して、作るのです。そういう文献で調べるほかに、教師自身がその地域で耳をすましていろいろと聞くということも大事です。教師自身もそうやって、前もって取材というか、調査をしておく。そしてこれを子どもたちに渡して、子どもたちが調べてきたものを、今度は教室で発表させたりするわけです。

子どもたちが実際に書いてきたものを二人分持ってきました（次ページ）。5年生の齊藤さん。これはちゃんと許可をもらっていますので、名前出していますけれども、こんなふういっぱい、バーッと書いてくるんです。小学校5年生が調べてきたものです。びっしり書いてあります。それから同じく5年生の高野さんが書いたものもあります。

これを子どもたちに発表させると、じつに楽しそうに発表します。おじいさん、おばあさんから聞いてきたことばで、自分たちが毎日耳にしていることばなので、とても上手に発音することができます。おじいさん、おばあさんは、孫に聞かれるとはりきって答えますので、おじいさん、おばあさんもうれしくなって、生き生きしてくるんですね。そうすると、「こんな方言もあるから」と、びっしりと書いたノートやレポート用紙を私に持ってきてくれます。とてもうれしいおみやげです。私はうれしくなって、その家に行って直接お話を聞いたり、また教室に来ていただいてお話をしてもらったりしています。

おじいさん、おばあさんのことばに、愛着をもっている子はいいんですけども、親の考え方で、おじいさん、おばあさんのことばは「昔のことばだ」、「方言は古いことばだからあまり使わないほうがいい」などと子どもたちに教えている親もいます。そういう子どもは、おじいさん、おばあさんのことばに、あまりよいイメージをもっていない。残念ですが、そういう子どももいるんです。

でも、こういうを宿題を出して発表させたとき、たとえば、「かわいい」で「めんこい」と出てきたときに、『めんこい』というのは、じつは奈良時代のことばで、『万葉集』にもあるんだよとか、『なじょしっぺ』というのは『竹取物語』にも出てくるよと教えるわけです。『あけず』って『古事記』にもあるんだよって。そうするとおじいさん、おばあさんが古典のことばをしゃべってるってことでびっくりして、おじいさん、おばあさんを尊敬しだしたという、そういう子どももいるのです。

そういうふうにすることによって、子どもは方言の中に古語が残っているということを知っただけでも驚きで、家に帰って、おじいさん、おばあさんにそれを報告する。おじいさん、おばあさんに対する認識が変わる。それでおじいさん、おばあさんがとてもうれしくて、こんなことは初めてだと喜ばれることもあるのです。家族も巻き込む、そういう学習はとてもいいと思います。

方言を調べよう

上真野小学校 5年 名前 (高野 夏希)

共通語	方言	使い方
牛	べーご	べーごの子、生まつちや(牛の子どもが、生まれた)
かわい	あんにま	あそここのばちめんいなる
① 気味が悪い	きあわり	この道 ちんちんなる
② どうしよう	なじよし、ハハ	すい道でないう、なじよしハハ
③ おでこ	なづま	なづまが広いなる
つら	しが	あら屋根にしがは、た
④ 兄	あんにま	あんにまが来たはあ
⑤ 姉	あんにま	あんにまが来たはあ
⑥ 赤ちゃん	おとまご	あんにまが来たはあ
子守り	あとのもり	まようはあどのもりたはあ
⑦ うるさい	せつな	このかうしせつな又こと
⑧ おどろく	たまげた	あーたまげたなる
⑨ はずかしい	しょうしい	あら、しょうしいこと
こじき	ほえと	ほえと来た
⑩ かげ口(懸口)	ざんぞ	ざんぞかた、てる
いやだ	ヤンだ	あーら、ヤンだ、こじき
とんぼ	とんぼ	とんぼが、いと
⑪ 行こう	いぐべ	ほら、いぐべ
⑫ だいじようぶ	だいじようぶだ	こんなの、だいじようぶだ
くものす	くものす	くものす、だかちま、た
ちようちよ	ちようま	ちようま飛人、てる
かまきり	かまきり	かまきり、と
かまきりの卵	かまきりの卵	かまきりの卵、あ、た、と
こわす	ぼ、こす	ちんちんぼら、こした
⑬ うもろこし	とうみま	とうみまが、た、は、よ
おふる	じや、ほ	い、ち、ほ、さ、入、ハ、ハ、あ
⑭ かみなり	らい、ま	らい、ま、あ、で、から、は、ず、く、ハ、ハ、あ
いなずま	ヒ、カ、セ、カ	あ、せ、カ、セ、カ、な、と、あ
おてだま	いしなぐ	いしなぐ、ハ
⑮ かたぐるま	かたぐるま	かたぐるま、して、も、ら、て、い、なる
トイレ	セ、チ、ム	セ、チ、ム、さ、入、て、く、る、から

「方言を調べよう」ワークシート

方言を調べよう

上真野小学校 5年 名前 (高藤 彩華)

共通語	方言	使い方
牛	べーご	べーごの子、生まつちや(牛の子どもが、生まれた)
かわい	めんげー	あそここのばちめんげーなる
① 気味が悪い	うだぞ	イブアブ見て、うだぞ
② どうしよう	どうしやハ	今日のスイミング行くか、休憩か、どつどつ
③ おでこ	でまんとこ	赤、ちんちん、あ、だ、ん、こ、ん、ん、く、て、可、愛、い
つら	しが	さ、む、さ、か、さ、び、く、て、軒、に、しが、が、下、つ、た
兄	あんにま	あんにまお物音が、た、い、し、に、お、る、が、へ
④ 姉	あんにま	あんにま、お、ん、ね、い、ち、れ、い、し、し、に、お、る、が、へ
赤ちゃん	赤んぼ、あ	ま、ご、の、お、と、ほ、お、い、し、に、お、る、が、へ
子守り	あとのもり	あ、と、の、あ、と、の、も、り、ほ、た、い、だ、い、な
うるさい	せつな	お、い、て、お、け、で、せ、つ、な
⑤ おどろく	びくりにまげた	わー、た、ま、げ、た、ま、た、い
⑥ はずかしい	しょうしい	し、や、う、い、く、て、し、れ、お、ー
こじき	あまのり、ほい	あ、ま、の、り、も、の、も、い、ほ、い、な、く、な、つ、た
⑦ かげ口(懸口)	ざんぞ、どらく	と、ど、ろ、く、の、ド、ツ、ク、を、す、す、こ、じ、ま、屋、く、な、い
いやだ	やんだ	そ、れ、は、や、ん、だ
とんぼ	あけず	あ、け、ず、が、と、て、い、る
⑧ 行こう	やべ、いぐべ	買、い、物、ま、や、べ
⑨ だいじようぶ	いべ	心、配、い、げ、く、て、い、べ
くものす	くものす	家、中、に、く、も、の、ハ、トリ、お、て、あ、る
ちようちよ	ちようま	ち、や、ま、が、で、ら、さ、ま、と、て、い、る
かまきり	かまきり	か、ま、き、り、の、卵、を、か、ま、か、が、つ、ら、い、る
かまきりの卵		
⑩ こわす	ぼ、こす	ぼ、こ、す、は、お、い、に、お、い、し、て、ま、し、て、さ、した
⑪ うもろこし	とうみま	夏、の、お、や、は、ト、ウ、ミ、マ、で、す
おふる	すいしよ	す、い、し、よ、に、入、る、と、ま、さ、し、よ
⑫ かみなり	らい、ま	らい、ま、が、ま、だ、ラ、ド、ラ、ド、ラ、リ、ウ
いなずま	いなずま	父、立、ろ、で、真、暗、い、空、に、イ、ナ、ズ、マ、リ、が、ま、だ、ら、
おてだま	いしなぐ	昔、あ、と、び、の、い、し、な、ぐ、が、あ、そ、び、さ、し、た
⑬ かたぐるま	かたぐるま	子、供、は、お、父、に、く、ご、こ、馬、に、て、お、い、見、て、い、
トイレ	セ、チ、ム、ハ、ハ	セ、チ、ム、ハ、ハ、に、行、く

① 木筒が落ちる でんぐら、つま、つ、い、て、で、ん、ぐ、ら、
 ② ニれで エンジ、ニれ、に、お、り、
 ③ ニれで エンジ、ニれ、に、お、り、

5. これからの国語教育

5. 1 子どもたちの将来のことばを形作る教育

ことばというのはこれからどうなっていくのか。将来どういうふうにならっていくのかというのは、私も非常に興味があるんですけども、ことばがどうなっていくのかというのは、子どもたちが今、どんなことばでしゃべっているか、どんな意識でしゃべっているか、現在の子どもたちを取り巻くことばの状態と、子どもの価値観というか、意識によって取捨選択されて、ことばを学習していく。小中学生は、いま学習途上で不安定な時期だと思うんです。

それが将来どんなことばになって完成するのか、どんな形になっていくかということを考えたときに、その子どもたちが学習途上である小中学生のときに、どういう国語教育を受けたかというのがとても重要だと思うんです。ことばを見る目とか、聞く耳を敏感にするために、国語教育が果たす役割は非常に大きいと思うんです。教師のことば観とか、指導観とか、教材観とか、あるいは教師がもっている方言コンプレックスとか、そういうものが子どもたちに影響してくると思うんです。都会の教師と地方の教師の意識とか、そういうものが都会の子どもと地方の子どものことばにも影響しているんじゃないかと思います。『学習指導要領』がありますけれども、授業の中ではかなり教師の裁量に任されている部分が多いので、教師がどういうふう教材を扱うか、どういうふう授業をするかというのは、教師の自由裁量が大きいので、教師の興味、関心に左右される部分が多いと思います。

5. 2 地域素材を見つける —学校用語の地域差

地域差があるものは面白いので、どんどん扱っていいと思うんです。「秘密のケンミンSHOW」という番組は非常に人気がありますね。学校用語でも地域差があります。

5. 2. 1 印刷用紙

私が福島で教師をやっていて感じたのは、印刷用の紙が印刷室に置いてあって、学校はたくさんプリントを印刷するんですけども、3種類の紙が置いてあります。一番悪い紙はザラ半紙、次が中質紙、上質紙と3つあって、ザラ半紙には、学校によって、いろんな言い方があったんです。ある学校に行くと「タイヨウ紙」と書いてあり、別な学校に行くと「タイオウ紙」と書いてある。何だろうと思ったら、何にでも使えるので「対応紙」なのだそう。なるほど、これは面白いなと。教師が転勤して移動する、その移動によって、そういうことばもあちこちに移動しているんですね。移動してそのまま根づく場合もあれば、枯れちゃう場合もあるんですけども、印刷用紙の呼び方というのが非常に面白いし、各学校の印刷室に貼ってあるわけです。ただ、ちょっと残念なのは、最近、ザラ半紙や中質紙よりも、こういうコピー用紙が安くなりましたので、上質紙が多くなったんです。そうすると、印刷室に貼ってあったラベルも、最近、なくなった学校が多くて、もうちょっと早く調べておけばよかったなと残念に思っています。どこの学校も3種類の紙を使っていたので、3つの名称が必ずあったんです。

5. 2. 2 修正液

それから修正液もけっこう使います。事務をとっているときに。ボールペンとか万年筆で書いていますから。その修正液がありますけれども、それを「白チン」と呼んだりするんです。初めて、「白チン貸して」と言われたときに、なんのことかわかりませんでした。じつはけがをしたときにつける「赤チン」ってありますね。あの赤チンから白チンということばができたようです。

5. 2. 3 縄跳びの縄

それから冬場の体育の授業は縄跳びです。とくに南相馬市は原発事故の影響で、あまり外に出られませんから、体育館の運動が多いんですが、縄跳びをするときの縄で、短い縄と長い縄があります。その短い縄のことを、「たんなわ（短縄）」と呼んでいるのですが、長い縄のことは、「ながなわ（長縄）」と呼んでいるところと、「おおなわ（大縄）」と呼んでいるところがあるんです。まだ分布は調べていませんが。

5. 2. 4 徒競走

それから「かけっこ」です。走ることを「はねる」と言うので、かけっこは「はねっくら」ですが、会津地方では、走ることを「とぶ」と言うので、かけっこは「とびっくら」と言います。ですから、「さあとぶぞ、よーいドン」と言ったときに、子どもたちは走り出すのですが、他の地区から転勤してきたばかりの教師はピョンと跳んだそうです。

5. 2. 5 職務専念義務免除

休みをとるときに、年次休暇の他に年次休暇にならない休みがあって、職務に専念する義務を免除するというものが、地方公務員にはあります。それを「職専免」と一般に言うんですが、「義務免」という言い方をするところもあります。これも地域によって若干違っているということに、最近気がつきました。

5. 2. 6 自主学习／自主勉強

子どもたちがやってくる自主学习のことを「自学」と言います。これはいつから出てきたのか、昔はなかったと思うんですが。宿題のプリントのほかに、自主的に勉強してきたノートを出してもよいことになった。国語、算数、理科、社会なんでもいいから1ページ、勉強してきたものを教師に見せるというもので任意のものだった。それがいつの間にか、教師や学習係の児童が点検するようになり、「はい、〇〇くん、持ってきたかな、早く出しなさい」と、なった。自主学习の「自学」は必ず出さなくてはいけない宿題になったんです。すると今度は、自学とは別に、任意で自主的な勉強をやってきてノートを出さず児童が出てきた。これが「自主勉」です。自主学习も自主勉強も、同じことだと思ってしまうんですが、必ずやっていく義務的なノートは「自学」で、それとは別に任意でやっていくのは「自主勉」と命名されたのです。よそでもおそらく生まれている可能性はあるのではないかという感じがします。

5. 3 方言調べは自分の耳で聞いて

子どもたちに方言調べの宿題を出すときには、家族に聞いたり、近所で聞いたりして、必ず自分の耳で聞いて、自分で書くようにと指示しています。というのは、本を書き写したり、親に書いてもらったりすると、正確でない場合があるんです。「あれ、これは変だな」と思ったら、やっぱり変だった。おかしいなと思ったら子どもが書いたものではなかったという、そういうことが今まで何回かありました。一番忘れられないものを紹介します。

質問文は、「枝豆をすりつぶして、そこに砂糖を入れて、餅に絡めたやつをなんといいますか」と聞くものです。これは仙台で有名になった「ずんだ餅」というものです。仙台では「ずんだ餅」ですが、福島県の「じんだ餅」と言っていたはずの地域で、「ずんだ餅」と書いてきた子どもがいたので、変だなと思って聞いたんです。そしたら、その家では「じんだ餅」と言っているけれども、おじいさんは「ずんだ餅」と書いた。なぜか。仙台で有名だから「ずんだ」が正しくて、「じんだ」はまちがっているんじゃないか。だから孫に教えるときには、正しい方言を教えなくてはいけないと思って、「じんだ」を「ずんだ」にしてしまったというのです。

「ずんだ」はもともと「じんだ」で、「じ」が「ず」に変わったのです。しかし、仙台でお菓子として有名になったものですから、福島で「じんだ」と言っていた人が、仙台で有名になった「ずんだ」に言い換えている。そんな人が少しずつ現れて、だんだん宮城のほうから「ずんだ餅」が、南のほうに来て、「ずんだ餅」の逆流現象が起きているような感じがして、面白いと思ったんです。

5. 4 方言を扱った授業の実際

方言の授業が紹介されたテレビの番組がありますので、最後にその中の一部分を皆さんにご覧いただきたいと思います。子どもたちが調べてきた方言を、方言辞典で確かめるという授業をやりました。方言辞典は三省堂の『都道府県別全国方言辞典』（佐藤亮一編，2009）を使いました。ちょっとご覧ください。（VTR 視聴）

時間がなくなってきた、途中、早口になってしまいました。あちこちバラバラにお話したので、まとまりがなかったんですけれども、ちょうど時間にもなりましたので、お話はここまでにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

第3部

研究ツール・アーカイブ・データベース

首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践*

鎌水 兼貴

(国立国語研究所)

1. はじめに

東京を中心とする「首都圏」と呼ばれる地域は、人口の流動性が大きく、構成員も多様である。そのため、首都圏の言語は、地域の特徴がなく全国で通用するが、内部の細かい違いについては複雑だと考えられている。首都圏の言語の研究は、地域的に無標な「日本語」としておこなわれるか、もしくは言語意識や社会属性といった個人差の視点からおこなわれるのが一般的である。

首都圏は日本の政治・経済・文化の中心地であり、この地域の言語は、他地域に比べて共通語に強い影響を与えていることが予想される。現代日本語は、東京の言語を基盤として成立しており、東京を中心とする首都圏の言語動態の把握は、現代日本語の形成過程を理解する上で不可欠である。

しかし首都圏では、共通語と方言の差については意識されにくい。実際に首都圏の言語と共通語との差異はわずかであり、首都圏においては「方言」と呼ばれるような言語の地域差への関心は低く、言語地理学的調査も低調である。

首都圏の若年層であっても新たな言語現象は発生する。それは今後の日本語の形成にも重要な意味があると思われる。ところが、新しい言語現象が発見されても、首都圏において共時的にどのような状態で存在しているかについて、地理的調査を通じて把握しようとすることはあまりない。大都市は調査が困難な地域であるが、時期を逃すとすぐに言語使用の状態が変化してしまうおそれがある。

このような問題を解決するには、言語動態の把握にすぐれた探索的な調査手法の開発が課題となる。従来から、実施がしやすく、回答も短時間に大量に収集可能という点で、大学の授業における学生を対象としたアンケート調査が活用されてきた。しかし質問紙の集計には時間を要するため、調査結果を当該授業内で活用することが困難であった。授業内調査には、授業時間の妨害という側面があるため、1回の調査で良好な結果が出なかったからといって、繰り返し調査を実施することは容易ではない。

そのため、調査設計においてデータの効率的な収集が必要となる。インターネット経由、特に携帯電話の電子メールによるデータ収集は、個人識別可能な回答データが短時間で収集可能であ

* 鎌水兼貴(2013)「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」(国立国語研究所論集 6, pp.217-243)からの転載。本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト(萌芽・発掘型)「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(プロジェクトリーダー:三井はるみ <http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>)の研究成果である。また、2013年1月22日の国立国語研究所 NINJAL サロンでの発表を元に改訂したものである。

RMS システムの調査実験に協力していただいた各大学の学生の皆様に感謝の意を表す。また、国立国語研究所共同研究プロジェクトメンバーの皆様には RMS システムの利用面で多くの助言をいただいた。ここに御礼申し上げる。

り、結果報告までの時間を短縮することができる。そこで本研究では、携帯電話のメールによって収集した回答をリアルタイムで集計して言語地図の表示までおこなう、統合的な調査システム「RMS システム (Real-time Mobile Survey System)」を開発した。これは授業内調査の問題点を解決するだけでなく、調査結果を授業でも活用できるという利点がある。

本稿では、この新しい調査システムの概要を解説するとともに、実際に複数の大学の授業において実施した調査結果を示すことで、首都圏若年層に対して短期間で多人数調査を実施する意義について論じる。

2. 首都圏の言語について

2. 1 「首都圏」の範囲

本稿では、「首都圏の言語」という表現を用いるが、この「首都圏」の指す範囲はさまざまである。昭和 31 年に制定された「首都圏整備法」では、関東地方の 1 都 6 県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、茨城県、栃木県、群馬県）および山梨県を「首都圏」と定めている。しかし、内閣府（2011）では、「首都圏」を南関東の 1 都 3 県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）としており、根拠として国勢調査における「関東大都市圏」（総務省統計局 2012a）の範囲が 1 都 3 県とほぼ同じ¹であることをあげている。

この「関東大都市圏」や、金本・徳岡（2002）の「都市雇用圏」などは、通勤・通学による移動を基準とした定義であり、ほぼ 1 都 3 県、都心からおよそ 70km までの範囲を「地域的なまとまり」としてとらえている。2010 年度の国勢調査における都道府県別昼夜間人口比率（総務省統計局 2012b）をみると、東京都が 118.4% と全国で最も高い反面、周囲 3 県は、神奈川県 91.2%、千葉県 89.5%、埼玉県 88.6% と全国でも著しく低い。これは東京都に周辺 3 県からの通勤・通学者が流入していることをあらわしている²。

言語においても、「首都圏の言語」を「東京を中心とした言語的に均質と思われる地域的なまとまり」と考えるとき、地理的には 1 都 3 県に近い範囲とするのが妥当と思われる。

2. 2 首都圏若年層の言語について

首都圏の言語は、もともと共通語との類似性が高い。これは 1950 年代の全国規模の方言調査である『日本言語地図』（国立国語研究所編 1966-74 以下、LAJ）の結果からもわかる。

図 1 は、1 都 3 県における 2 つの時代の共通語使用率の調査結果である。左の河西（1981）は、LAJ の 82 項目における都道府県別共通語使用率³であり、右の井上（1997）は、河西と同じ 82 項目の使用度を中学生に調査した「全国中学校言語使用調査」（以下、井上調査）の結果である。両調査は調査時の年齢が大きく異なっており、平均した生年でみると、高年層を対象とした

¹ 「関東大都市圏」は 1 都 3 県から埼玉県西部・千葉県南部を除き、栃木県南部・茨城県南部・山梨県東部を加えた地域であり、実質的に 1 都 3 県となっている。

² 東京都内でも 100% を超えるのは、中心部の、ほぼ旧東京 15 区の範囲のみである。

³ 河西（1981）では「標準語」という用語を用いているが、「地図の見出し語」を便宜的に標準語とみなしているだけであるため、本稿では「共通語」とした。

LAJ はおよそ 1895 年生まれ、中学生を対象とした井上調査はおよそ 1981 年生まれとなる。調査時期の差は約 40 年だが、生年では 90 年近い差である。

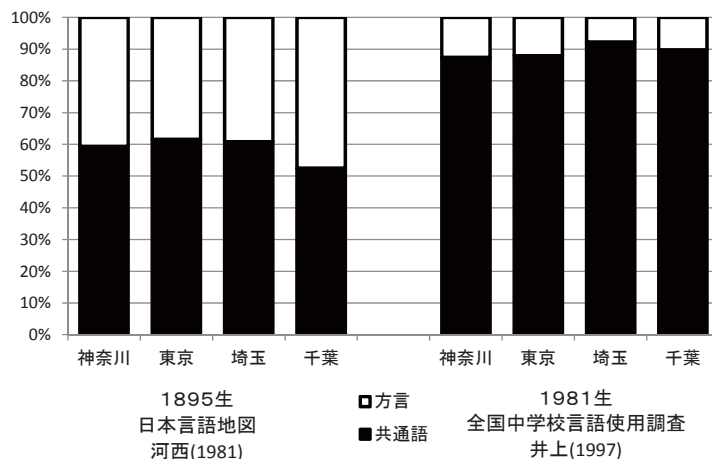


図 1 1 都 3 県における共通語形使用率

図 1 をみると、1 都 3 県の共通語形使用率は、LAJ の世代ですでに 6 割前後である。全国平均値である 37% に比べて非常に高く、もともと首都圏の伝統的方言が現代共通語と類似していたことがわかる。さらに井上調査の世代では 9 割が共通語形となっており⁴、首都圏の若年層にとっては「方言」というものを意識することが難しいことがわかる。

首都圏若年層におけるわずかな非共通語形についても、伝統的方言形の場合は、使用そのものが急速に衰退しているか（概念自体の衰退も含む）、使用される場合でも、使用意識において共通語に準じた扱いになっている（「俗語」「くだけた共通語」など）ことが多い。

首都圏では、戦後、移住によって人口が爆発的に増加した。移住者は首都圏にもとからある伝統的方言は採用しにくい。現在は移住 2 世、3 世の時代となっており、彼らは首都圏で生育した人々であるが、自分たちの使用する言語は、従来の伝統的方言とは異なる、地域性の希薄な言語だと意識する傾向がある。また、首都圏内部の地域的差異についても意識されることは少なく、言語的に均質だという意識があると思われる。

⁴ 実際にはこの 1 都 3 県のみならず、全国的に共通語使用率が高い。この調査で全国最低だった佐賀県でも 82.2% である。共通語能力の向上と方言能力の衰退は完全に対称ではないが、首都圏においては、もとの伝統方言形が共通語形と類似していることから、方言形が衰退しやすい環境にある。

2. 3 首都圏若年層における地理的調査の必要性

井上（1994）は「東京新方言」という術語を用いて、共通語使用の中核である首都圏の若年層であっても非共通語化現象が存在することを示している。さらに井上（2000）では「言語変化の雨傘モデル」によって、首都圏で使用される非共通語形が、「共通語」のように全国に急速に拡散することを示している。そして、その非共通語形の中には、首都圏周辺地域の方言形⁵の流入もあるとしている。ある方向から非共通語形が流入する場合、非共通語形が急速に拡散するまでは、かならず首都圏の内部にも言語の地域差が存在すると思われる。

しかし、1都3県の合計人口は2010年度の時点で3562万人（国勢調査 総務省統計局2012c）と巨大であり、「都市の多様性」という先入観が生じやすい。そのうえ1都3県は言語的に均質だという意識もあるため、たとえ言語的な差異がみつかったとしても、地域差の可能性は考慮せず、属性差（年齢・性別・学歴・所属集団など）や個人差（パーソナリティや意識）に目が向きやすいと思われる。

たしかに首都圏では、東京への通勤・通学者が多く、テレビや新聞などのマスコミも東京から発信されている。しかし首都圏の人々が共有しているのは中心部の東京だけであり、日常生活の場は、それぞれの生育地域にあると思われる⁶。多くの人は高校卒業までは生育地周辺で生活しており、言語形成における地理的要因は、他の要因と比べても決して小さくないと予想される。

以上から本研究では、首都圏の若年層において新規の言語現象が発生した場合、そこには地域差が含まれている可能性があると考ええる。そのためには、積極的に新規の言語現象を探索する必要がある。

若年層における地域差は、その形成過程を実時間で観察することができる。伝統方言のかつての地域差とあわせて分析することにより、首都圏の言語形成過程の解明につながると思われる。このことは現代日本語の形成過程にも関わる重要な研究だといえる。

ただ、首都圏のような大都市部では、調査の承諾が得にくい。もし首都圏の言語が地域的に均質であるなら、任意の一地点での調査だけで、属性差・個人差などを把握することができる。しかし地域差があるとすれば、多地点での地理的調査が不可欠である。首都圏で多くの調査対象者を探すことは容易ではない。調査地点数が少ない場合、たとえ差異を発見したとしても誤差の範囲であることを否定できない。そもそも探索的調査の場合は、多くの言語現象について地理的調査を実施しても、どれも首都圏全域で地域差がみられないこともありうる。

首都圏若年層の言語の地理的調査は、研究上の重要性は高いものの、労力が大きく、思わしい結果が出ない可能性がある。このような調査をおこなう場合、調査設計において相当の工夫が必要である。

⁵ 有名な例としては、ジャン（中部地方より）、ウザッタイ（東京都多摩地方より）、チガクナイ（北関東より）など。

⁶ 東京を中心とした放射状の交通手段が発達している反面、周辺地域間の移動については整備が遅れていることからわかる。たとえば埼玉県と神奈川県の人が行き来をする頻度は高くないであろう。

3. 首都圏若年層に対する効率的な調査

3. 1 調査コストを低くする必要性

前節で述べたように、首都圏の若年層は共通語使用率が非常に高く、地理的な言語動態をとらえようとしても、そもそもどのような言語現象に地域差があるのか、といったところから探さなければならぬ。

準備調査によって数多くの項目の調査を実施して、本調査の調査項目を選定できれば理想的だが、ある程度の人数と項目数を調査するだけでも一定のコストがかかる。アンケート調査であれば大量人数の回答を確保できるが、探索的調査である以上、簡単に望んだ結果が出るとは限らない。1回の調査であっても、調査票の準備から結果の集計まで、ある程度の時間を要する。しかも首都圏での言語現象は普及が早いため、あまり調査間隔を空けることができない。

非効率的な探索的調査を継続的に実施しようとするならば、1回あたりの調査コストを下げなければならない。そのためには、調査対象が限定されていても、研究者にとって実施しやすい環境の中で、繰り返し探索的調査を実施するのが現実的である。

多くの研究者にとって実施しやすい調査は、授業時に受講生に対して実施するアンケート調査だと考えられる。学生の生育地を用いて地理的分布をみる方法である。方法としては簡単にみえるが、大学の授業における調査の問題点について、あらかじめ検証する必要がある。

以下、大学生という対象の問題、学生の回答意欲の問題、授業妨害の問題の3つの面から考察する。

3. 2 授業時を利用した大学生に対するアンケート調査

授業における調査は、一種の集合調査である。受講生から短時間に効率よく回答を収集できる。大学における1つの授業は数か月にわたって開講されるため、同一学生に対する複数回の調査も可能な環境にある。つまり1回の調査が失敗したとしても、同一の調査対象に対して再調査が実施できるため、探索的調査に適しているといえる。

その一方で、大学生を調査対象とすることには、次のような問題点がある。

第一に、学校の立地による回答者の生育地の偏りの問題がある。大学の場合は高校のように立地周辺のみには偏ることはなく、大学を中心とした比較的広範囲のデータを取得することができる。ただし、1つの大学だけで首都圏全体をカバーすることは難しく、さらに広範囲のデータを収集したい場合には、複数の学校の授業で連携して調査を実施する必要がある。

第二に、学生の大学内での言語接触の影響についてである。たしかに大学進学後に普及した表現については、現在通学する大学の影響が強いことが予想される⁷。しかし大学生の年齢は、すでに柴田（1956）のいう「言語形成期」以降である。高校までに習得した表現については、ある程度固定化したとも考えられる。また大学生のほとんどが高校卒業後4年以内であり、遠方の大学に進学した学生も、移住先の言語の影響は限定的と考えられる。注意は必要だが、学生の生育地情報を用いて分布を調べることには意味があると思われる。

⁷ ここでは大学の立地する地域の言語の影響のことをさすが、「キャンパスことば」のような集団語については、地域ではなく所属する大学が差異に関係する。

第三に、大学生だけの調査は高学歴に偏っており、同世代の全体を代表していないという問題がある。そもそもサンプリング調査でない以上、統計的には世代を代表しているとはいえないが、それとは別に、高学歴層の回答は、規範的な方向に偏る可能性があり、特に俗語的扱いを受けやすい新しい表現については注意が必要である。しかし現在の日本の大学進学率は5割強と高く、大学生という社会的属性が少数派であるとはいえない。また、学術的な質問がしやすい点は、むしろ大学生であることの利点といえる。分析においても、調査対象の属性がある程度統一されることで解釈がしやすくなる面もある。

3. 3 回答意欲を高める調査

アンケート調査は、面接調査とは異なり、たとえ調査票内での指示を徹底したとしても、回答者側の全員が質問側の意図を正確に理解して回答しているとは限らない。質問文に疑問をもったままの回答や、質問の意図を誤解した回答があっても、その場で再回答を促すことができないため、どうしても一定の割合で無回答や無効回答、信頼性の低い回答など、不正確な回答が生じる。これに対しては、回答者数を増やして疑問回答を誤差の範囲に収めることや、逆にすべての回答を調べて疑問回答を排除する、といった処理が必要である。

田中（2004）は、アンケート調査における回答は、あくまで意識の反映であり、実態とは異なることがあると指摘している。そのため、結果に疑問が生じた場合には、回答だけでなく質問内容も疑わねばならない。しかし、こういった問題以前に、回答者が調査自体に不信感をもっていたり、調査内容に興味をもてない場合は、回答する意欲が低くなり、回答率が低下する可能性がある。

本研究の調査目的は、言語の地域差の探索であり、言語的背景は不可欠な質問項目である。しかし生年、性別、生育地、現住地、両親の出身地といった個人情報をたずねるため、回答を敬遠される可能性がある。回答してもらうためには、調査以前に個人情報を確実に慎重に扱うことが重要である。

授業内調査では、たとえ学生に調査の目的を説明したとしても、結果の提示が保証されない場合は、調査に対する興味が高まらない可能性がある。授業と関係した内容ではあっても、単に調査対象として学生を扱うのでは、学生側の好奇心を奪い、回答意欲の低下につながる。従来の質問紙調査では、データの入力作業、集計作業に多大な労力を要するため、学生に対して授業時間中はおろか、開講期間内に調査結果を示すことも難しい場合が少なくなかった。

学生の回答意欲を増すためにも、調査してから結果の出力までに時間がかからないことが理想的といえる。

3. 4 授業を妨害しない調査

調査者側の問題も考えなければならない。最大の問題は、授業中に調査をすることによる授業内容への影響である。授業時間内に調査を実施する場合、回答時間中の授業は中断せざるをえない。さらに調査結果をその授業内容に利用できない場合、実質的に授業の妨害となっていることを認識すべきである。他者の協力を得て、授業内調査を依頼する場合には、その授業に活用でき

ない調査を実施すること自体が問題となる可能性もある。

そもそも学生に対する調査は、教室における教員と学生の関係を利用した、半ば強制力をもった場における情報提供行為である。学生は、調査の内容にかかわらず、教員からの要請に応じなければならない状態におかれている。それだけに調査内容は、授業内容と関係があることが望ましい。授業内容に関係するのであれば、調査結果は迅速に授業で活用可能な状態にする必要があり、関係が低い場合には、最低限の時間で調査を完了できるようにしなければならない。

調査の所要時間は、授業の妨害時間でもある。つまり短時間で調査を完了することが、妨害を減らすことになる。もちろん質問数を少なくすれば調査時間が短くなるが、それでは調査の意味が薄れてしまう。質問数が多くても短時間で回答できるような方法を採用する必要がある。

集計結果の活用までを迅速にするためには、回答データの電子化までが短時間でおこなわれることが望ましい。質問紙のデータを手作業で入力するのではなく、WEB や電子メールなど、インターネット経由でデータを送信するなら、最初からデータは電子化されており、集計に要する時間は最小限となる。問題となるのは実施環境の整備である。PC 教室のような特殊な教室の使用を前提とする調査は実施可能な環境を狭める。通常の教室でも調査が実施できるような調査が望ましく、そのためには携帯端末等の利用が考えられる。この点については後で検討する。

調査の実施時間や、集計時間が短縮される場合、調査結果を踏まえて再調査を実施することが容易となる。すなわち、結果が思わしくない場合に質問を変えて再調査をしたり、学生の反応によって調査内容を追加したりすることができる。調査から結果公開までの時間を短縮することは、授業の妨害となる調査から授業に活用する調査へと変わることにつながる。このように、調査を授業中に活用するためには、結果に応じて質問の追加、変更を可能にする仕組みが必要である。

3. 5 授業で活用可能な調査システムの必要性

以上、首都圏若年層の地域差について、大学の授業を利用して探索的調査を実施する際の問題点を考察した。従来の調査方法とは異なる、新しい調査において必要な5点を、その効果とともにまとめる。

- | | |
|------------------------|--------------------|
| a. 同一回答者に対して繰り返し調査ができる | → 調査項目数を増やす |
| b. 他の授業での結果と組み合わせられる | → 回答者を増やす、対象地域を広げる |
| c. 迅速に結果を提示できる | → 調査が授業を妨害しないようにする |
| d. どの場所でも全員に実施できる | → 通常の教室での授業で活用する |
| e. 調査内容を臨機応変に設定できる | → 授業内容に沿った活用をする |

上記 a~e は相互に関係している。a と e によって柔軟な調査設計が可能となり、b と d によって大人数調査としての威力が発揮される。c はすべてに関係する。事前に準備した調査項目をたずねるだけでなく、学生から得た調査項目についての調査をその場で実施することも可能となるため、授業内容にも調査を組み込みやすくなる。また、他の授業のデータとも組み合わせることで結果表示ができるため、他の授業で調査して良好な結果が得られた項目のみを調査する、といった使

用もできる。

目的はやや異なるが、木村（2009）は、高校などの学校への調査依頼時に考慮すべき点について、①サンプリングの問題、②学校に負担の少ない設計、③個人情報保護への配慮、④学校へのフィードバック、の4点をあげている。②の学校の負担については、コスト低減のために、研究者間でデータを共有する仕組みの必要性を提言している。これは上記 a～e の必要性にも通じるものがある。

本研究のような探索的調査において、調査の項目数と地理的範囲の両方を個人で広げることは容易でない。他の調査を参照でき、結果を組み合わせて使用できるようなシステムを構築することで、1回の調査は小規模であっても有効活用することができる。

集計結果を短時間に学生にフィードバックすることによって、授業内調査は「授業時間を妨害する存在」から「授業に活用できるツール」へと変化する。それだけではなく、学生と教員の関係も変化する。学生と教員が、従来の「調査を強制する側、される側という対立関係」から、「ともに授業を作り上げる協力関係」へと再構築されることになる。これは、学生の調査への参加意欲を向上させ、回答率の上昇や、無効回答の減少にもつながることが期待される。

アンケート調査を授業に活用する試みは、これまでは個人の努力によって実現されてきた。授業で調査を実施し、次回の授業までに集計結果や言語地図を示すのであれば、特別なスキルがなくとも、ある程度は実現可能である。しかし調査者個人の労力に大きく依存する場合、現実的には誰もが可能とはいえない。前述の a～e を満たすような調査を、特別な知識を必要とせず、誰でも実施できるようにするためには、技術的な補助が不可欠であり、専用の調査システムの開発が必要となる。

4. 言語地図形式による回答結果の自動出力

4. 1 言語地図作成の工程

新しい調査システムの開発においてデータ収集とともに重要なのが結果提示の迅速化である。特に結果提示において、言語の地域差を示すためには言語地図が必要となる。ここでは言語地図作成の自動化について、先行研究から考察する。

言語地理学的研究において言語地図は分析の中心をなすものである。調査の規模にかかわらず、調査終了から言語地図の完成までには、以下の工程を経る。

A 回答の電子化 → B 回答の整理 → C 地図化・集計処理

A の回答の電子化は、調査者が調査票に記入した回答内容をデータ化する作業である。電子化以前はカードへの転記であったが、現在では、電子データで処理することが一般的である。大規模調査になるとデータ入力作業は多大な労力となる。選択式回答の場合にはマークシート方式や、WEB アンケートのような電子入力方式が効率的であるが、専用のシステムが必要となる。

B の回答の整理は、選択式回答の場合を除いて自動化は困難である。自由記述式回答の整理作業は単純ではなく、整理方法に分析的観点を含むため、C の地図化・集計処理の結果を受けて、

繰り返し回答の整理をおこなう必要がある。自動化は困難であるが、回答の異なり数が多い場合には、回答データの整理、検索等、コンピュータを利用して整理を補助する処理をおこなう。通常は、表計算ソフトなどを用いて人がおこなう。

Cの地図化・集計処理については、手作業によって作成していた時代は、最も労力を要する工程であった。集計処理に関しては、単純集計であれば手作業で回答の書かれたカードを分類しなければならなかった。しかしコンピュータの普及以降は、回答データを電子化することにより、個人でも表計算ソフトや、統計ソフトを利用することで、処理が可能になった。一方、地図化作業についても、白地図上に回答に対応した記号を繰り返し押印する作業が続くため、大規模な調査ほど言語地図の完成までに時間を要していた。作業工程が複雑であるため、コンピュータが普及してからも個人で言語地図を作成することは難しかった。そのため言語地図作成の高速化、省力化は、さまざまな研究者によって試みられてきた。

以上から、調査結果を迅速に提示するためには、Aの回答の電子化部分と、Cの言語地図の作成部分を高速化する必要がある。以下、それぞれについて検討する。

4. 2 言語地図作成の自動化

まず、Cの言語地図の作成部分について概観する。言語地図の電子化の歴史については岸江(2007)によってまとめられている。基本的な作成原理は大型計算機を用いた徳川・山本(1967)によってすでに確立されていた。1950年代に国立国語研究所で調査された『日本言語地図』のための膨大な調査データの整理を効率化する目的で大型計算機による言語地図の作成が検討された。地点番号(緯度、経度に対応)を座標として言語地図をプロットする手法である。グラフの散布図と同等の手法で実現できるため、非常に単純である。地図の出力についても、荻野(1975)においてX-Yプロッターを利用することで、高品質の地図を実現している。荻野(1981)の開発した言語地図作成システムGLAPSは、こうした言語地図作成ツールの先駆けといえる。

1980年代になると、パーソナル・コンピュータの普及により、最終出力だけでなく、画面上でもグラフィカルな地図を扱うことが可能になった。これにより、福嶋(1983)のSEALや、前川(1988)のEGLなど、使用者に配慮した、対話型の言語地図作成ツールが開発された。大西(2002)は、『方言文法全国地図』の編集作業において、Adobe Illustrator用のプラグインとして言語地図を作成するシステムLMSを開発し、研究用だけでなく、大型版の版下としても耐えうる高品質な言語地図を作成できるようになった。近年では、地理学における地理情報システム(GIS)の普及により、単に地図を作成するだけでなく、統計処理と組み合わせた複雑な解析も可能になった。これにより分析方法も発展するものと思われる。

しかし、これらのツールを使用するためには、ある程度の技術の習得が必要であり、誰でも使用可能なものとしては認知されていない。コンピュータ上で言語地図を作成するための一般的な解説書は、GISソフトであるMANDARAやArcGISの利用について書かれた中井(2005)しかなく、現在でも、言語地図の作成には相当のハードルがあることがわかる。

4. 3 回答データ入力自動化

つづいて A の回答の電子化部分について述べる。面接調査の場合は、調査者が調査票に手書きで記入するため、現在でも電子データ化は手作業による入力一般的である。ここではアンケート式の調査結果の電子化について、速報性の観点から概観する。

回答データの電子化において、最も効率的な方法は、回答者が回答時点で電子データとして入力することであろう。しかしインターネット登場以前は、回答者と調査者の間のデータのやりとりが問題であった。フロッピーディスク等の物理的な記憶媒体のやりとりには手間がかかる。ワークステーションの端末に全員で接続することによって共有することも可能であったが、専用の端末室での作業が必要となる。

1990年代後半よりインターネットが普及すると、データ収集部分が電子化された研究例がみられるようになった。田中（2004）や荻野（2004）によって電子メールを利用した調査手法が紹介されたほか、中井（2005）は、電子メールを用いたアンケート結果を GIS ソフトで地図化する方法について解説している。大西他（2011）による「方言メール調査」システムでは、電子メールで回答を収集し、自動的にデータベース化をおこなっている⁸。

選択式回答の場合、電子データの自動収集が可能になると、言語地図作成の全工程を自動化する研究もあらわれた。林・日高（2008）は WEB を用いたアンケートシステムを開発し、データ収集から地図表示までを自動化した。PC 教室での授業を想定して開発されており、授業時間中に調査から結果提示まで可能であり、学生にとっても調査の意義を理解しやすい。

このほか、1990年代に開発された高橋（2003）の SUGDAS は、データ入力部分の自動化はされていないものの、授業内調査と短時間での報告を念頭において、電子データの入力から言語地図の出力までの流れを見通している点で、本研究の趣旨に近い。SUGDAS は選択式回答が中心であったが、高橋（2007）は『方言文法全国地図』の電子データを分析するために改良した GAI-Sugdas で、回答語形を画面上で選択する方式によって、回答の整理の省力化も図っている。電子データの利用を前提としたシステムとして非常に重要な位置にあるといえる。

5. 携帯メールを用いた調査

5. 1 インターネット経由での回答データの収集

前節で述べたように、調査結果を迅速に提示するためには、データ収集段階でインターネットを使用することが必要である。回答者が電子メールや WEB 経由でデータを送信することにより、従来の質問紙による調査で必要だったデータ入力作業が不要となり、データ利用までの時間が短縮できる。ただし PC や携帯端末などの電子機器の利用度には個人差がある。インターネットの利用度も社会的属性の 1 つであり、橋元（2004）はインターネットをよく利用する人の回答の偏りに言及している。しかし授業内調査の場合は、教室内の全員が対象となるため、この問題は避けられる。

荻野（2004）は、自身の実施した電子メール調査の経験をもとに、PC における、電子メール

⁸ データの自動収集部分は筆者が作成を担当しており、本研究の RMS システムの元にもなっている。

とWEBの調査の比較をおこなっている。電子メールの長所については、(1) 回答者にとって調査の全体がわかる、(2) 回答者の心理として返信しやすい、(3) 回答者がアドレスによって特定できる、(4) 回答者がどういう集団であるか把握できる、という点をあげている。

一方、WEBの長所については、(1) データが形式化されている、(2) サブクエスチョンへの対応が容易である、(3) メール調査よりも利用者が回答しやすい⁹、という点をあげている。

電子メールでは回答者の特定が、WEBでは調査の流れのコントロールが、それぞれ利点とされていることがわかる。荻野(2004)は結論として、連絡を電子メールでおこない、メール内に示したアドレス経由でWEB調査を実施することを提唱している。現在多くのWEBサービスが、登録にメールアドレスを採用していることから、妥当な方法であるといえる。

荻野の研究から10年近くが経過し、若年層の間では、新しいコミュニケーション・ツールの利用が増加した。現在主流であるTwitterやFacebook、LINEといったコミュニケーション・ツールを調査に活用することも考えられ、実際に多くの調査で利用されている。しかし、こうしたツールは企業のWEBサービスの延長であるため、会員登録していない人は利用できない。授業内調査は受講生全員の参加を目指すため、古くから存在する、ほぼ全員が利用できる電子メールの利用が適当と思われる。

つづいて授業場面でのデータ収集方法について検討するため、アンケート調査の媒体別特徴を表1にまとめた。電子メールについては携帯電話のほかにPCやWEBでの利用があるが、重複点が多いので省略した。以下、WEBを用いた調査と、携帯電話の電子メール(以下、携帯メール)を用いた調査について、質問数、調査場所、料金的負担、速報性、複数回調査という調査コストに関わる観点から検討する。

表1 アンケート調査の媒体別特徴

調査媒体	紙	WEB	携帯メール
質問数	○ 回答によって質問が分岐するような場合には、わかりにくくなる。	○ 調査の流れをプログラムでコントロールできる。	× 最大1通20問が限度。複雑な質問は難しい。
調査場所	○ どこでも可能。ただしその場で実施しない場合、回収率が下がるおそれがある。	△ WEB利用環境が必要。携帯からのWEB利用であればどこでも可能。	○ 携帯メールが使用できれば、どこでも可能。
料金的負担	○ 全くかからない。逆に調査者側に印刷費や郵送費などの負担が発生する。	△ PC教室で行う場合は負担がない。携帯でのWEB利用は人によっては料金的負担が大きくなる。	△ 携帯メールは日常的に使用する人が多く、料金的負担が気にならない人が多い。
速報性	× データ入力に時間がかかる。	○ 最初から電子データとしてデータが得られるため、サーバー側のプログラムを用いることで自動集計が可能。	○
複数回調査	△ 回答者が前回と同一人物であることを確かめるため、IDの発行等が必要となる。大学であれば学籍番号が使いやすい。	△	○ 携帯電話は個人と結び付いているため。メールアドレスで同一人物か判断可能。

⁹ WEBの長所について荻野自身の意見は(1)(2)だけである。(3)は調査時の回答者の意見として紹介している。

5. 2 WEB 調査と携帯メール調査の比較

表 1 をみると、WEB による調査は欠点が少ない。質問紙に近い複雑な調査も可能であり、回答欄の整合性についても、プログラムを作成すれば自動的にチェックが可能である。入力ミスが減少し、効率的であるため、調査会社で広く使用されている方法である。

大学の授業で WEB による調査を実施する場合、PC 教室においては容易に実施可能である。すでに前述の林・日高（2008）において実現されている。PC のない通常の教室においては、学生の所有する端末、すなわち携帯電話を利用することが考えられる¹⁰。しかし、携帯電話の利用には通信料金が発生する。スマートフォンの急速な普及により、携帯電話からの WEB 利用も増加しているが、全員が利用しているわけではない。携帯電話で WEB を利用しない学生にとって、WEB の利用は料金的負担が大きい¹¹。このため、全学生を対象とする場合、携帯電話からの WEB 利用には慎重であることが望ましい。

一方、携帯メールの場合、ほぼ全員が携帯電話を常時所持しており、所有者以外の利用が基本的にない点が特徴的である。携帯端末と結合したメールアドレスから回答者を特定できるため、同一人物に対して複数回調査をおこなう場合に、個人 ID の発行やログイン処理などをすることなく、データの蓄積が可能である。これは回答側の入力負担の軽減にもつながる。その反面、メールアドレスを蓄積することになるため、メールアドレスの流出防止等、調査システムの開発において注意を払わなければならない。

また、WEB よりは安いものの、携帯メールにも料金負担は存在する。携帯電話所持者のほぼ全員がメール機能を利用していると考えられるため、調査における費用負担感は低いと思われるが、負担が発生している点は意識する必要がある。

電子メールの入力欄には自由に内容を入力できてしまうため、回答欄の制御は不可能である。質問数が多いと入力ミスを誘発するおそれがある。荻野（2004）の調査では、調査票自体が電子メールの本文に入っており、指定の場所に追記して返信してもらう、という仕組みであった。携帯電話でも同様の返信はできるが、携帯電話の小さい画面では、長文の調査票を表示すると、改行場所の違いなどにより表示が乱れることで、返信が困難になる可能性がある。携帯メールによる調査は、調査規模に制約があるといえるだろう。

以上から、携帯メールは、少ない質問を繰り返し実施する、本研究のような調査に適しているといえる。田中（2006）は、「新規登場事象」の探索的な調査手法として携帯メールの活用を提案している。現代の若年層は携帯電話での文字入力に慣れており、ほぼ全員が短時間に入力することができる。頻繁に調査を実施しても支障はないと思われる。これまでは学生に手を上げさせていたような、授業中に気軽に質問するような調査も、携帯メールを使ったシステムであれば実現できる可能性がある。

¹⁰ 学生全員に iPad のような通信端末を配布する大学もある。この場合は、通常の教室においても全員に WEB 調査が可能であるが、一般的ではないため、通常は個人所有の端末を利用する必要がある。

¹¹ 学内に、学生用の無線 LAN が整備されていれば、学生への料金的負担はない。

6. RMS システム

6. 1 RMS システム概要

以上から、首都圏若年層の言語の地域差を探索するためには、授業中に学生が携帯メールで回答し、その場で調査結果である言語地図が出力できるようなシステムが、最も効果的だと思われる。そのため本研究では専用の新しい調査システムを開発した。この調査は、「リアルタイムに結果を見ることができる携帯電話を利用した調査」であることから、“Real-time Mobile Survey (RMS)” (リアルタイム携帯調査) と命名し、RMS を実施するために開発した調査システムを「RMS システム」と呼ぶことにする。

RMS システムは、①調査者が調査項目を登録する、②回答者が調査項目に対して回答のメールを送信する、③調査結果である言語地図が WEB 上に表示される、という3段階の流れから構成される。データは自動的にデータベースに蓄積され、①②③のプログラムからアクセスされる。

図2にRMS システムの概要を示す。システムは、インターネットに接続した専用サーバーを利用することを前提とし、以下の4部分に分かれる。

- ①調査管理 (調査票や調査者情報を管理する)
- ②回答処理 (電子メールのデータを解析する)
- ③結果表示 (回答の整理や地図表示をおこなう)
- ④データベース (データの格納をする)

RMS システムでは、④のデータベースは、専用の管理システムは利用せず、単にテキストファイルをフォルダに分類して格納している。①②③の部分は、プログラムによって実現される。

現在開発している RMS システムは、サーバーはレンタルの UNIX サーバー、プログラムは Perl スクリプトを利用している。Perl スクリプトは筆者が作成した。

なお、調査票について、現在のシステムでは、回答者に質問文を見せるための機能が考慮されていない。調査者が別途作成した質問用紙を配布するか、もしくは黒板 (ホワイトボード) やプロジェクターで提示することを前提としている。しかし、言語調査の中には、絵を見せたり、音声を聞かせたりする質問項目もある。将来的には③結果表示の部分を、結果だけではなく、質問文の提示にも使用できるように変更する必要があるだろう。総合的なプレゼンテーションをする部分として発展させる予定である。

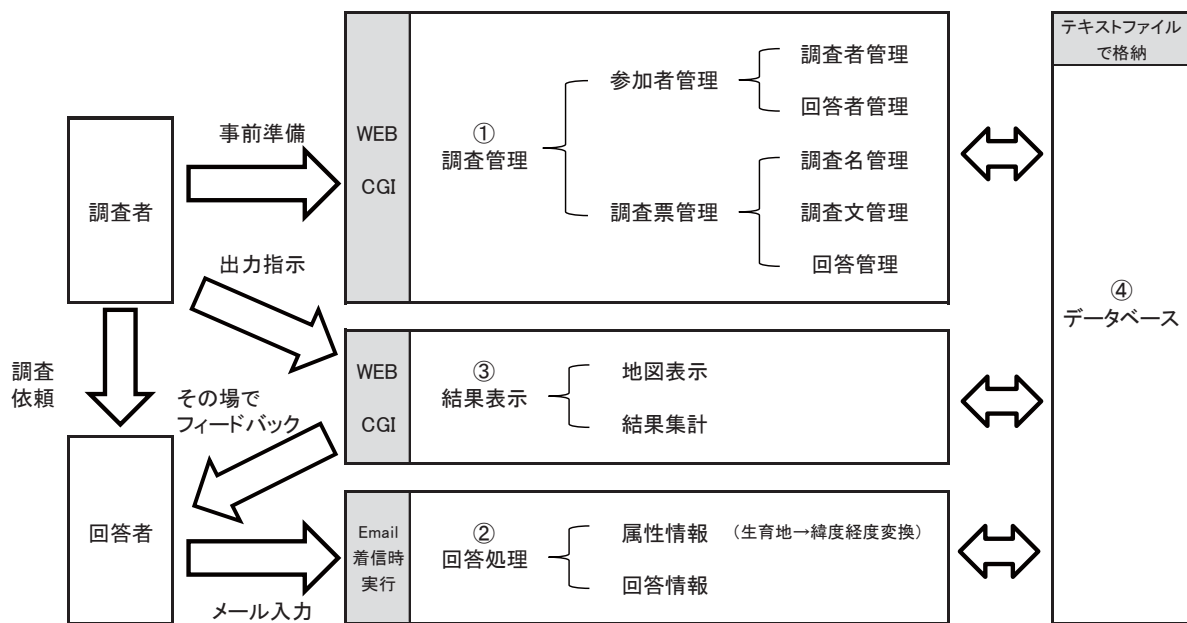


図 2 RMS システム全体図

6. 2 各段階の説明

図2で示したRMS システムのそれぞれの部分について解説する。調査システムは鑑水(2011a)や鑑水(2012)でも解説がなされているが、その後若干の改良が加えられている。執筆時点(2013年7月)でも未実装の機能が存在するが、今後の課題として解説する。

6. 2. 1 調査管理

図2の①調査管理は、実施する調査そのものを管理する部分である。Perl スクリプトであるrms.cgiによって実現される。インターネットからのアクセスは、たとえば、

<http://xxxx.xxx/rms.cgi> (xxxx.xxx は実装するサイトのアドレス) のようになる。内部は、(a) 参加者管理と (b) 調査票管理という2つの処理からなっている。

(a) 参加者管理

調査者、回答者はともに調査の参加者である。さまざまな参加者による調査を一括して管理するため、参加者の管理は重要な部分となる。参加者管理は、(1) 調査者管理と (2) 回答者管理の2つに分かれる。

(1) 調査者管理： 個人的な調査をする場合と、複数の調査者でグループを作る場合がある。調査者には、個人の管理のほかに、グループ単位の管理が必要となる。システムへのアクセス権の管理もするため、調査者はIDとパスワードを登録する。これはrms.cgiと、後述する結果出力のためのmap.cgiにアクセスする際の認証に用いられる。

(2) **回答者管理**： 回答処理中の属性情報の登録によっておこなわれる。複数の授業に出席する学生によって回答者が重複することがある場合には、回答の共有レベルの指定に従って、回答者を統合することができる。現在は実装されていない。

(b) **調査票管理**

調査は調査票単位で管理される。しかし、調査と調査票は一対一で対応しない。同一の調査票で異なる対象に実施する場合もあれば、異なる調査票を同一の対象に実施する場合もある。調査票自体が改訂されることもある。

異なる調査結果同士を比較しやすくするために、システム上では、個々の質問文単位で管理している。それぞれの質問文には、調査者が管理しやすいうようにタグを付与することができる。これにより結果出力時にタグを参照して、複数の調査の結果を組み合わせることができる。高密度地図の作成において有用である。

調査票管理は、(1) 調査名管理、(2) 調査文管理、(3) 回答管理の3つに分かれる。

(1) **調査名管理**： 複数の調査文をグループ化し、1つの調査として扱うことができるようにする。現在は実装されていない機能であり、今後の課題である。調査文はタグ付けや階層化などにより整理する必要がある。「調査項目データベース」のような独立したデータベースを別に作成して、RMS システムから参照する方法も考えられる。

(2) **調査文管理**： 質問文、質問の種類、質問のタグ、絵や音声の有無、選択肢、関連質問など、調査文に関する情報が管理される。作成者は調査文ごとに共有許可を与えることができる。

(3) **回答管理**： 回答情報を「回答者×質問項目」という1枚の表データとして扱う。その表中の1セルを選択することで、回答に関する詳細情報の閲覧ができ、修正・整理をおこなうことができる。表は、属性情報と回答情報とにわけて表示される。修正画面では、元のメール内容も表示され、データの変換が正しいかをチェックすることができる。回答ミスによる項目のずれの修正などもここでおこない、自動的にデータベースに結果が反映される。回答データのダウンロードや、外部データのアップロードもここでおこなう。そのため質問紙でおこなった調査についても、外部データとしてアップロードすることで、RMS システムで利用することができる。

6. 2. 2 **回答処理**

図2の②回答処理は、調査実施時に回答の電子メールを受信する部分であり、システム全体の重要な部分の1つである。サーバーが、指定のメールアドレス宛のメールを受信した際に、メール転送機能を用いて、メール内容がPerl スクリプトに送られる。Perl スクリプトは、メール内容を解析し、回答者の属性情報、質問への回答情報にわけて、データベースに格納する。そのため、RMS をレンタルサーバーで実現する場合、メール転送時のスクリプトの実行が可能であるか確認する必要がある。もし不可能な場合には、一定時間ごとにスクリプトを実行するような機能

(cron) が必要となる。

回答処理は、(a) 属性情報と (b) 回答情報にわかれる。RMS では、質問番号がアルファベットの場合に属性情報、数字の場合に回答情報とみなされる。

(a) 属性情報

RMS 調査において、回答者は、準備なしに調査に参加できるわけではない。あらかじめ属性情報を送信することによって、メールアドレスが ID となり登録される。これにより再度調査をする場合でも属性情報の登録が不要となる。

件名に①調査管理で指定した「調査名」を指定することで、自動的にメールはその調査名の調査に参加する人の属性情報とみなされる。町丁目単位の生育地、転居歴、性別、配偶者・両親の出身地など、あらかじめアルファベット記号と属性情報の関係を調査文管理で指定しておくことによりデータベースに登録される。

図 3 は、属性情報のメールの例である。RMS 調査において位置情報の詳細度は、個人情報と研究のバランスを考慮して、町丁目単位としている。a,b,c は回答者の生育地に関する質問であるが、あらかじめ調査文管理で a を都道府県、b を市区町村、c を町丁目と指定しておくこと、この電子メールをサーバーが受信する際に、東京大学空間情報科学研究センターの「シンプルジオコーディング実験」を利用して自動的に緯度経度に変換される (図 4)。こうしてメールアドレスと位置情報が結び付けられる。

なお、メールアドレスと生育地などの個人情報が一覧となって収集されるため、個人情報の取り扱いに十分注意する必要がある。ただし RMS システムでは、メールアドレスには自動的に ID が振られ、画面上では ID のみが表示される。そのため調査者が直接メールアドレスを閲覧することはできないようになっている。

調査時に携帯電話を忘れてしまうことや、電池の残量不足で携帯メールが使用できない場合がある。こうした場合に対処するために、登録時に特定の ID を 1 つ以上登録しておくことが推奨される (学生対象の場合には学籍番号や氏名が一般的)。これにより、WEB から入力した場合でも回答の蓄積が可能となる。現在 WEB 入力については未実装である。

メール作成 (新規)

宛先	ans@chosa.in
件名	kaito
本文	a 東京都 b 立川市 c 緑町 d 男 e 1993 f 東京都立川市

図 3 属性情報のメール例

生育地	緯度	経度	信頼度
東京都江戸川区平井	35.703	139.85	5
静岡県静岡市清水区興津中町	35.056	138.52	5
兵庫県相生市赤坂	34.814	134.48	5
東京都新宿区東五軒町	35.706	139.73	5
埼玉県上尾市小泉	35.969	139.57	5
神奈川県厚木市松枝	35.448	139.36	5

図 4 住所から緯度・経度への変換例

問題点としては、前述したように、メールアドレスや学籍番号、氏名といった個人情報が自動的にデータベース化されることがあげられる。システム上、調査者がメールアドレスを閲覧できないようにしているとはいえ、個人を特定可能な情報に関しては、特に学生の許諾を得ていない場合、一定の調査期間が終了したら、データベースから削除することが望ましい。将来的には自動的に切り離す機能が必要であろう。ただしこの場合、同一人物が複数の調査で回答した場合、別の人として扱われる¹²。

(b) 回答情報

回答データも、件名に調査管理で指定した「調査名」を指定することで、自動的にその調査に対する回答とみなされる。本文には、行頭に設問記号である数字が入り、つづいて選択肢や自由回答が入る。

図5は回答情報のメールの例である。問1～3は選択式で、問4・5は記述式となっている。選択式の場合は回答の整理の必要がないため、すぐに地図出力が可能である。

また、調査名を空欄にすることで調査者が事前に登録をしていない状態でも調査をおこなうことができる。回答の制限時間を設ける場合には、設問記号も不要となり、本文に回答するだけでデータの蓄積が可能である。このような臨時的な調査については現在は未実装の機能である。

データの登録状況を後から確認可能にするため、送られてきたメールは、①オリジナルのメール、②調査ごとに振り分けたメール内容を指定方法によって変換したデータ、という2つの状態で蓄積される。このとき調査名が不明のメール(件名にミスがある場合)は、調査名不明(unknown)として蓄積される。②の指定方法による変換とは、あらかじめ文字コード・改行コードの変換や、表記(半角・全角、ひらがな・カタカナなど)の統合のような、異なるメール環境から送信されても正常に処理できるように基本的な処理をおこなうことである。通常はこの処理で問題はおきないが、文字化け等や設問の区切りミスといった問題が発生した場合には、回答管理において修正作業をおこなうことができる。②にミスがないことを確認したら、①のオリジナルメールは破棄することができる。

メール作成(新規)	
宛先	ans@chosain
件名	kaito
本文	1 a 2 b 3 a ; b 4 ヤナサッテ 5 かわいい感じ

図5 回答情報のメール例

¹² 現在は同一期間に異なる授業でRMS調査が実施される場合、同一の学生が何度もフェイス情報を入力することになる。このためメールアドレスの共有条件についても検討する必要がある。

6. 2. 3 結果表示

図 2 の③結果表示は、集まったデータの処理に関する部分である。Perl スクリプトである、map.cgi によって実現される。インターネットからのアクセスは、たとえば、

http://xxxx.xxx/map.cgi (xxxx.xxx は実装するサイトのアドレス) のようになる。内部は、(a) 地図表示、(b) 結果集計の 2 つに分かれる。

(a) 地図表示

結果の出力部分は、回答者へのフィードバックとなるものであり、RMS システムにおける最も重要な部分の 1 つといえる。データベースに蓄積されている回答データを、言語地図という形で視覚的に表示する部分である。

まず実施した調査名を選択し、それから調査項目を選択すると言語地図が表示される。言語地図は、緯度経度の情報をそのまま座標に置き換えて表示する、最も単純な正距円筒図法を採用している。日本地図を作成する上で、岡本義雄氏（大阪教育大学）作成の「日本列島海岸線データ & 県境データ」を加工して利用している。国土地理院の「地球地図日本」のデータも利用可能である。

言語地図は、質問文ごとに表示されるが、そのときに前述の調査文管理で付与されたタグと同じタグをもつ調査の一覧が表示される。その一覧を選択することで、複数の調査結果を重ね合わせた地図が自動的に出力される。同一の質問であっても、参加者管理で異なるグループとして登録されている調査者の調査は一覧に表示されないため、調査データの無断利用を防止することができる。

言語地図は PNG 形式の画像として出力され、利用することができる。現時点では、言語地図しか出力できないが、地域差がない項目については、言語地図よりもむしろグラフ表示のほうが効果的である。そのため今後は棒グラフや円グラフ、折れ線グラフといった表示についても実装する予定である。

(b) 結果集計

結果集計は、回答の基礎集計出力をおこなう部分である。主に自由記述式の回答に利用する部分であるが、現在は回答の一覧と回答者数、割合しか出力できない。

選択式回答の場合は、ほぼ自動的に集計することが可能だが、自由記述式の場合は、回答の整理に時間を要する。そのため、高橋（2007）の GAJ-Sugdass にあるような、質問ごとの異なり語形を出力し、回答の整理を補助する機能を実装予定である。回答が多岐にわたる場合には、異なり語形を出力するだけでは分類の困難さはあまり改善しない。そこで鎌水（2007）の回答語形間の類似度を用いた自動分類などを利用して、効率性を高めていきたいと考えている。

6. 2. 4 データベース

①調査管理や②回答処理で蓄積されたデータは、図2の④データベースに格納される。③結果表示をおこなう際には、このデータを利用する。データベースは、テキストファイルとして、調査者単位でディレクトリにて管理される単純なものである。調査人数が大量になった場合は、データ処理に時間を要することが予想される。将来的にはデータベース管理システム (DBMS) を利用するように修正することも考えられる。

個々のデータファイルの書式は独自のものであるため、現状では利用しやすい形式に変換しなければならない。今後は鎌水他 (2010) が提案したような、XML を用いた方言調査に適したデータ記述方式に対応することも検討する必要があるだろう。鎌水 (2011b) は、異なる方言資料を統一的に扱うことを提案しており、その際に扱いやすい形式であることも重要だと思われる。

フェイスシートのデータには回答者の個人情報が含まれるため、データの漏洩を防止しなければならない。メールアドレスは、②回答処理で ID 番号に変換して、回答データとは別のデータとして格納している。しかし今後は暗号化など、セキュリティ面を考慮した処理についても検討する必要がある。非常に重要な課題である。

6. 3 複数の調査の組み合わせ

以上が RMS システムの概要である。最後に、複数の調査を組み合わせた場合のデータの扱いについて述べる。表2は、複数の大学、複数の授業における架空の調査例である。4日間で以下の調査がおこなわれたとする。

- (1) 火曜日の2時間目に、A大学の授業①で、事前に準備した調査1(6問)と、授業中に思いついた新たな調査2(2問)を実施した。
- (2) 火曜日の3時間目に、A大学の授業②で、事前に準備していた2問のほかに、前の時間の授業①で良好な結果が出た調査1の3問と調査2の1問を加えた調査3(6問)を実施した。そして授業中に新たな調査4(1問)を実施した。
- (3) 2日後の木曜日の2時間目に、別のB大学の授業で、A大学で良好な結果が得られた質問からなる調査5(5問)を実施し、授業中に新たな調査6(1問)を実施した。
- (4) 最初の調査から一週間が経過した火曜の2時間目に、A大学の授業①で、他の授業で良好な結果が得られた質問からなる調査7(2問)を実施した。

以上の調査の、質問文と回答者の関係を表示したものが、図6のイメージである。

表 2 複数授業での RMS 調査実施例（数字は質問数）

授業時間	授業名	調査	事前	他授業	授業内
火曜2限	A大学授業①	調査1	6		
		調査2			2
火曜3限	A大学授業②	調査3	2	4	
		調査4			1
木曜2限	B大学授業	調査5		5	
		調査6			1
火曜2限	A大学授業①	調査7		2	

		質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10	質問11	質問12		
A 大学 授業 ①	回答者1	○	○	○	△	△	△	×	×	×				← 調査7	
	回答者2	○	○	○	○	△	△	△	×	×	×	○	△		△
	回答者3	○	○	×	×	×	△	△	△	△	×	×	×		○
	回答者4	○	○	×	×	×	△	△	○	○	△	△	×		×
	回答者5	○	○	×	×	×	△	△	×	×	×	○	△		△
	回答者6	○	○	×	×	×	△	△	△	△	×	×	×		○
	回答者7	○	○	×	×	×	○	○	△	△	×	×	×		×
	回答者8	×	×	×	△	△	△	△	×	×	×	○	△		△
	回答者9	○	○	×	×	×	△	△	△	×	×	○	○		○
授 業 A 大 学 ②	回答者10				○	○	△	△	×	×	×	△	△	← 調査4	
	回答者11				×	×	×	○	○	△	△	△	△		
	回答者12				△	△	×	×	×	○	○	△	△		
	回答者13				○	○	△	△	×	×	×	△	△		
B 大 学 授 業	回答者14				×	×	×	○	○	△	△		△	← 調査6	
	回答者15				△	△	×	×	×	○	○		○		
	回答者16				○	○	△	△	×	×			×		
	回答者17				×	×	×	○	○	△	△		△		
回答者18				△	△	×	×	×	○	○		○			
人数	8	9	9	9	18	18	18	9	18	18	4	4	14		

図 6 複数の調査回答の組み合わせイメージ

図 6 の表の下に示されている数字が、質問ごとの総人数である。良好な結果が得られ、複数の授業で追加調査がされた場合、多くの人数の回答が得られることになる。

このとき、前述の調査文管理によって、同一質問に同じタグを付与することによって、これらのデータは統合されて自動的に出力することが可能となる。

一回の調査では少人数の回答しか得られないとしても、複数の授業で多人数の回答を自動的に表示することができるのが、RMS システムの特徴といえる。

7. RMS システムを利用した調査例

7. 1 関東方言形カタス

RMS システムを利用した首都圏若年層の調査の例として、方言形カタスの分布についてとり上げる。

「片付ける」の方言形であるカタスは、北関東を中心に関東地方の広範囲で使用されてきた。井上（1985）の東京～福島間のグロットグラムの結果や、井上編（1988）の東京都と神奈川県に

おける2世代言語地図から、神奈川県で使用されていないことや、若年層ではやや衰退傾向にあることなどが判明していた。しかし早野（1996）は千葉県松戸市の調査から、移住者や二世がカタスに東京的イメージをもったために、再び普及傾向に転じたとしている。

しかし、これらの先行研究からは、関東地方におけるカタスの普及状況を把握することができない。そこで大学生の関東地方での使用分布についてRMS調査を実施することにした。

7.2 カタスのRMS調査

カタスは、RMSシステムの調査実験開始当初（2011年6月）から、調査項目に採用され、ほとんどの調査実験で調査されてきた。そのため2013年6月までに1800人余りの大学生の回答を得ている。

それぞれの授業の調査での質問番号は異なっているが、共有設定に任意のタグを設定することで、地図表示時に同一タグを使用した質問の結果を組み合わせることができる。（この調査では、共有タグ名は `katasu` としている）。このため、調査回数を重ねるごとに、自動的に地点密度の高い地図が出力される。

使用に関する質問の選択肢は、カタスについては「a：言う」「b：聞いたことがある」「c：聞かない」の3段階とした。現時点では、同じタグがついていると、選択肢が異なる質問も統合されてしまう問題がある。統合するかどうかは表示時に選択可能だが、どの調査がどの選択肢で実施されたかは表示されないため、今後は選択肢に関する処理が必要になると思われる。

回答と地図記号の対応は、言語地図の出力時に決定することができる。授業でプロジェクターを用いる場合はカラー出力が効果的であるが、紙で配布する場合はモノクロで出力する必要があるため、異なる記号を割り当てることができる。現在は記号の種類は少ないが、本稿のカタスの選択肢は3段階であるため、「a：■」「b：○」「c：+」の記号を割り当てた。

地図記号は生育地にポイントされる。生育地の質問文は「5～15歳までに最も長く居住した場所」となっている。回答者の転居歴を考慮せずにすべて表示しているが、今後は転居歴によって表示するかどうかを選択できるようにする必要があるだろう。

7.3 調査結果

RMSシステムを用いたカタスの使用に関する調査結果を図7～9に示す。首都圏の大学での調査であるため、生育地は関東南部に偏っており、東京の周辺部の地図で示す。図7が2011年6月に初めてRMSの実験をおこなった授業（2クラス）での結果、図8が2012年に国立国語研究所プロジェクトで実施した統一調査での結果、図9が2011年6月から2013年6月までに調査したすべての結果を重ね合わせたものである。

図7をみると、カタスは首都圏のほぼ全域で使用されているように見える。不使用者（「o：聞いたことがある」「+：聞かない」の回答者）もいるものの、分布の傾向は不明である。この状態では首都圏ではカタスが再普及し、普及は完了したとってしまうだろう。

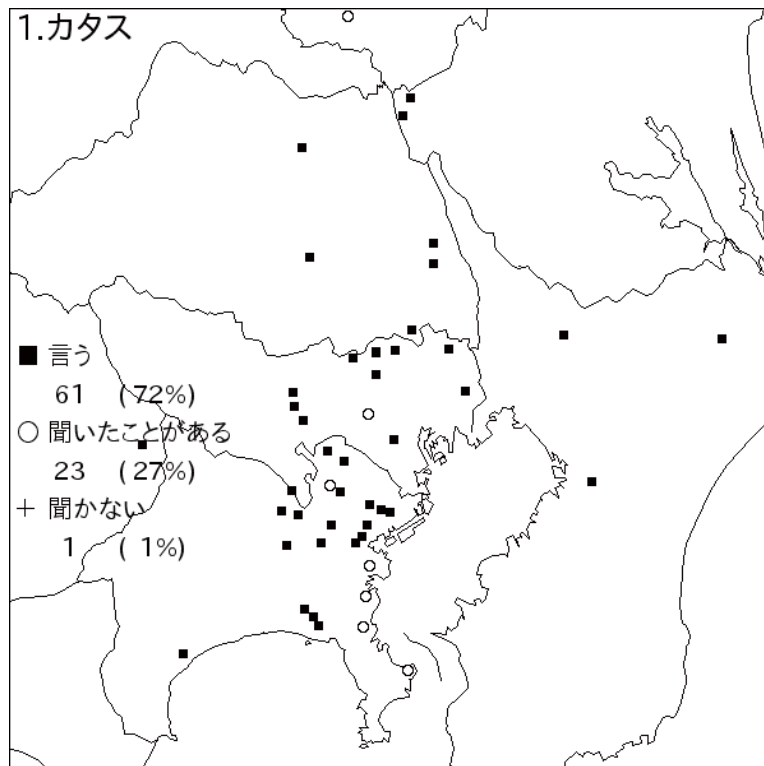


図7 カタスの分布 (2011年の調査)

つづいて図8をみる。2012年7～11月に国立国語研究所共同研究プロジェクトのメンバーで共同で実施した調査の結果である。調査では、携帯メール以外にも、質問紙を用いた調査も実施している。RMSシステムでは、携帯電話以外で実施した調査についても、結果を読み込むことで統合することができる。

地点数が増加したことにより、カタスは首都圏で完全には普及しておらず、神奈川県や、埼玉県の西部、東京都の西部に不使用者が多いことがわかってきた。先行研究において、神奈川県で使用されていなかったことや、千葉県でカタスが再普及中であったことをあわせると、カタスは関東東部から南西部に普及したと予想できる。しかし、図8では東京都多摩地域や神奈川県のデータが少ない。特に東京都の多摩東部地域に使用者がいないようにみえるが、本当にそうなのか判断しにくい。

図9はこれまでの調査結果すべてを重ね合わせたものである。2年間(3年度)で、9大学32授業の1834名の回答者を対象とした。全員が首都圏生育者ではないが、それでも首都圏内の地点はかなり高密度になっており、分布も解釈しやすい。特に東京都の多摩東部地域でカタスが不使用者であることが明確となり、カタスが普及する過程で、東京都多摩東部への普及が遅れていることがわかった。

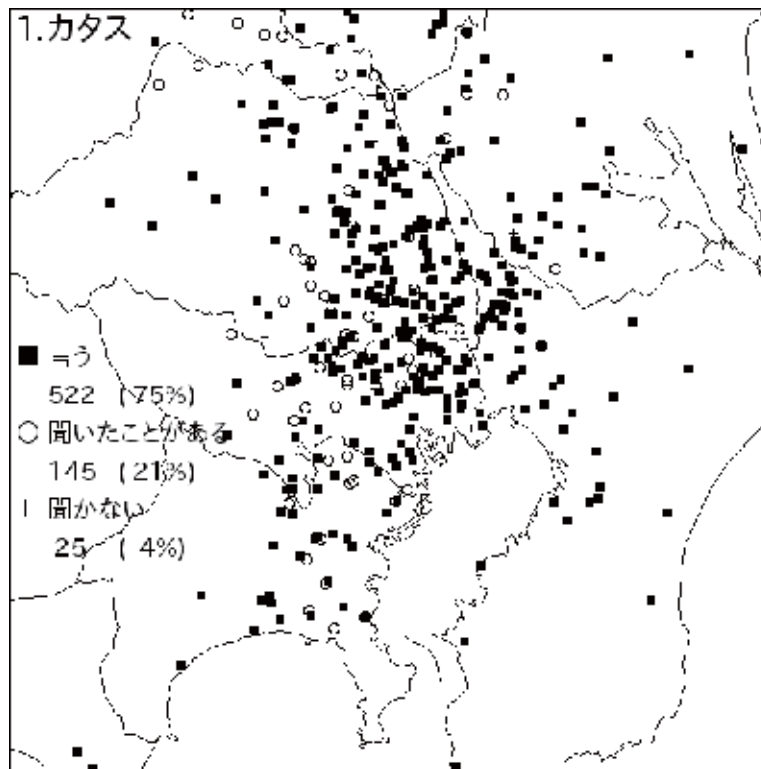


図8 カタスの分布 (2012年のプロジェクトでの調査)

なぜこのような分布になったかについて、1枚の共時的な地図だけでは、分布の形成過程がわからない。そのため、国立国語研究所の共同研究プロジェクトのRMS調査では、カタスの使用意識（使用頻度、通用範囲、通用場面、丁寧度）についても調査を実施した。その結果、鎌水・三井（2013）では、意識項目にも地域差が存在することがわかった。現在は、東京都の多摩東部地域だけが不使用地域になっているが、意識項目の地域差から、南に隣接する神奈川県や、東に隣接する東京都23区南東部も、カタスの普及が遅かったということが推定できるとした。

このように、首都圏において高密度の地点で表示することで、言語の動態を示すことが可能となる。1回の授業調査は40名程度であることが多かったが、RMSは授業中に短時間で実施でき、その場で結果を示すことが可能であるため、複数の大学、複数の授業において、効率よく効果的なデータを収集することができたといえる。

カタスについては2年間の調査データを重ね合わせて表示したが、短期間に使用状態が変化する場合、重ね合わせるのではなく、調査時期ごとに比較したほうがよい。RMS調査は短期間で広範囲に高密度のデータが得られるため、継続的に調査を実施することで、実時間の言語変化を地理的に観察することができる。RMSシステムは、変化の速い首都圏若年層の言語動態を把握するのに適したツールだといえることができる。

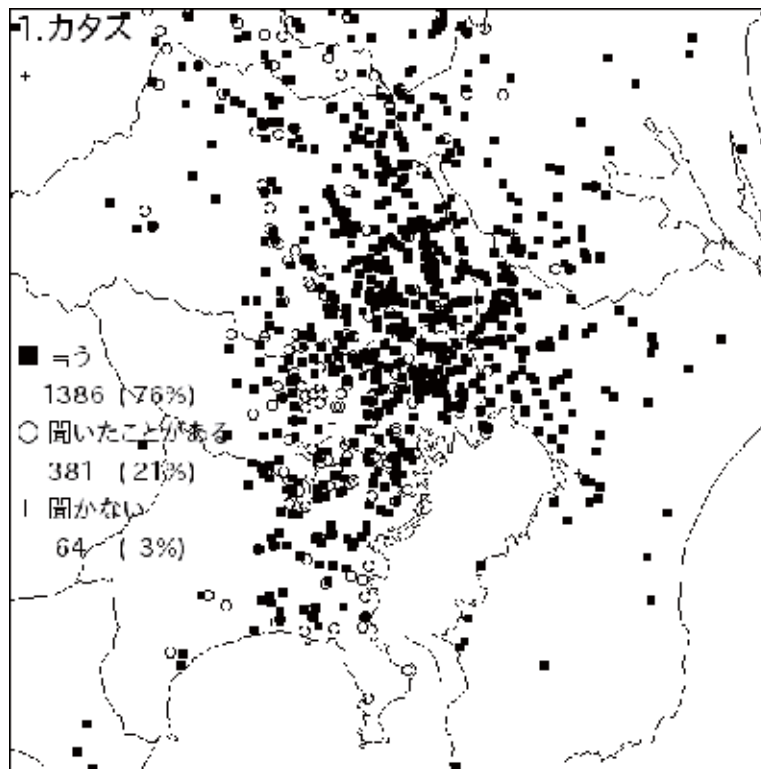


図9 カタズの分布 (2011年6月～2013年6月の全調査)

7. 4 授業におけるRMSシステムの利用

RMSシステムを利用することで、授業時間中に調査だけでなく、結果の提示や解説までをおこなうことができた。これ自体は意義があることだが、実際の授業においては、受講生数が少ないこともある。1回の授業で得られる回答が少ない場合は、結果が明確でなく、調査に対する理解も深まらないおそれがある。そのため教室内の調査結果を示したあとで、他の授業(他の大学)での結果を組み合わせた調査結果についても示すことが効果的と思われる。多くの場合、教室内的の結果が、周辺地域も含めた結果につながっていることを示すことができるため、学生の参加感を損なうことなく、調査の理解に役立つと思われる。

首都圏の言語は地域性が薄く、首都圏の内部は言語的に均質だと意識されていると述べたが、首都圏の大学において同じ教室内であっても言語的な均質性が完全でないことを認識させることは、首都圏における方言学の教育の面で効果的である。方言調査に対して興味をもたせ、また調査に協力しようという意識をもたせることにつながるとと思われる。

統計的に示すことはできないが、RMS調査に参加した学生の反応には、「新鮮だった」「すぐ結果がわかってよい」「楽しかった」といった肯定的評価が多かった。その一方で、教室内では少数派となる首都圏外の出身者からは「表示されるのは首都圏ばかり」「全国の結果が知りたい」といった不満もあった。結果を示す時間も限られており、授業における工夫にも限界がある。全国地図を常に画面上に表示するなど、システム面からの工夫も必要であろう。

また、言語地図の表示については、現在は教員が学生にプロジェクターで見せることを前提と

しているが、今後は学生側でも自由に地図を閲覧し、見やすいように加工できるようにすることも必要であると思われる。RMS システムでは、言語地図の記号を自由に選択できるため、学生が利用することで、言語地図の作成や分析の学習にもなる。このような教育ツールとしての改良も、今後の検討課題であろう。

8. おわりに

本稿では、首都圏若年層の調査において携帯メールを用いた調査を実施する意義と、開発したリアルタイム携帯調査システム (RMS システム) の概要と利用例について解説をおこなった。

インターネットの普及にともなって、調査・分析の方法も大きく変化している。携帯端末の普及は、各個人がデータ入力端末をもつことになるため、機動力のある調査に向いている。

面接調査は今後も重要であるが、従来の質問紙によるアンケートについては、今後インターネットを利用した調査が増加すると思われる。新しい、より言語実態を反映することができる調査手法の開発は、今後の方言研究の発展に寄与することであろう。

RMS システムは現時点では試験段階であり、国立国語研究所の共同研究プロジェクトのメンバー以外は、システムにアクセスできない。しかし、授業での利用という点で効果のある調査システムであり、研究者間でのデータの共有という点でも重要だと思われる。試験の協力者を拡大しつつ、最終的にはシステムの公開利用を予定している。

今後も RMS システムを改良・活用して、首都圏若年層における多様な言語状況の解明に役立てていきたいと考えている。

文献

- 福嶋秩子 (1983) 「パソコンによる言語地理学」『国語学』133, 105–106.
- 橋元良明 (2004) 「オンライン調査による社会調査の問題点」『日本語学』23(8), 明治書院, 180–190.
- 早野慎吾 (1996) 『首都圏の言語生態 (地域語の生態シリーズ関東篇)』, おうふう.
- 林良雄・日高水穂 (2008) 「Google Maps を用いたことばのアンケートシステム」『秋田大学教育文化学部研究紀要 (自然科学)』63, 21–25.
- 井上史雄 (1985) 『関東・東北方言の地理的・年齢的分布 (SF グロットグラム)』東京外国語大学語学研究所.
- 井上史雄 (編) (1988) 『東京・神奈川言語地図』東京外国語大学井上史雄研究室.
- 井上史雄 (1994) 『方言学の新地平』明治書院.
- 井上史雄 (1997) 『社会方言学資料図集—全国中学校言語使用調査 (1993・1996) —』東京外国語大学.
- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』大修館書店.
- 金本良嗣・徳岡一幸 (2002) 「日本の都市圏設定基準」『応用地域学研究』7, 1–15.
- 河西秀早子 (1981) 「標準語形の全国的分布」『言語生活』354, 筑摩書房, 52–55.
- 木村治生 (2009) 「学校通しによる質問紙調査の可能性と限界」『社会と調査』2, 社会調査協会, 28–34.

- 岸江信介 (2007) 「パソコンで作る方言地図」 小林隆・小西いずみ・三井はるみ・井上文子・岸江信介・大西拓一郎・半沢康 『方言学の技法』, 岩波書店, 91-133.
- 国土地理院「地球地図日本」 <http://www1.gsi.go.jp/geowww/globalmap-gsi/download/index.html> (2013年7月31日参照)
- 国立国語研究所 (編) (1966-74) 『日本言語地図』 東京, 大蔵省印刷局.
- 前川喜久雄 (1988) 「PC9801 上の言語地図作成支援システム, EGL」 第 15 回近畿音声言語研究会.
- 内閣府 (2011) 「補論 1 首都圏人口の変化の長期的推移」 『地域の経済 2011』
http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr11/pdf/chr11_4-1.pdf (2013年7月31日参照)
- 中井精一 (2005) 『社会言語学の調査と研究の技法』 東京, おうふう.
- 荻野綱男 (1975) 「コンピュータによる方言地図の作成と解析」 『第 20 回日本方言研究会発表原稿集』 30-39.
- 荻野綱男 (1981) 『方言調査分析用パッケージプログラム GLAPS の使い方』 私家版.
- 荻野綱男 (2004) 「電子メールによる質問調査法—調査の具体的な方法とその特徴—」 『日本語学』 23(8), 明治書院, 168-179.
- 岡本義雄 「日本列島海岸線データ& 県境データ」
http://www.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~yossi/programs_trash.html (最終閲覧日, 2013年7月31日)
- 大西拓一郎 (2002) 「言語地図作成の電算化—『方言文法全国地図』 第 5 集を例に—」 『日本語学』 21(11), 明治書院, 21-35.
- 大西拓一郎・鎌水兼貴・三井はるみ・吉田雅子 (2011) 『方言の形成過程解明のための全国方言調査—方言メール調査報告書—』 (国立国語研究所共同研究報告 10-02), 国立国語研究所.
- 柴田武 (1956) 「言語形成期というもの」 石黒修・泉井久之助・金田一春彦・柴田武 (編) 『子どもことば』 (ことばの講座 6), 東京創元社, 243-266.
- 総務省統計局 (2012a) 「平成 22 年国勢調査 大都市圏・都市圏 全国図」
http://www.stat.go.jp/data/chiri/map/c_koku/daitoshi/pdf/2010.pdf (2013年7月31日参照)
- 総務省統計局 (2012b) 「平成 22 年国勢調査 従業地・通学地による人口・産業等集計結果 結果の概要」 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kihon4/pdf/gaiyou.pdf> (2013年7月31日参照)
- 総務省統計局 (2012c) 「第 1 表 男女別人口及び世帯の種類 (2 区分) 別世帯数—全国, 市部, 郡部, 都道府県, 20 大都市」 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kihon1/pdf/gaiyou2.pdf> (2013年7月31日参照)
- 高橋頭志 (2003) 「『全国大規模言語地図』 調査・作成システム—スグダス言語調査システムと SUGDAS.exe—」 『国語学会 2003 年度春季大会予稿集』 203-210.
- 高橋頭志 (2007) 『日本語方言の層位—GAJ-Sugdass2006—』 群馬県立女子大学文学部国文学科高橋頭志研究室.
- 田中ゆかり (2004) 「質問して何がわかるか—言語調査法入門—」 『日本語学』 23(8), 明治書院, 6-18.
- 田中ゆかり (2006) 「『新規登場事象』をとらえたい 探索的調査法による多人数調査」 伝康晴・田中ゆかり (編) 『方法』 (講座社会言語科学 6), ひつじ書房, 55-72.

- 徳川宗賢・山本武（1967）「電子計算機で言語地図を作る試み」『計量国語学』40, 27-30.
東京大学空間情報科学研究センター「シンプルジオコーディング実験」
<http://newspat.csis.u-tokyo.ac.jp/geocode/modules/geocode/>（2013年7月31日参照）
- 鐘水兼貴（2007）『方言文法地図』における共通語化の状況—多変量解析を用いた分析—『日本語学』26(11), 明治書院, 112-119.
- 鐘水兼貴（2011a）「携帯電話を利用した首都圏若年層の言語調査」『情報処理学会研究報告〔人文科学とコンピュータ研究会〕』2011-CH-92, 1-13.
- 鐘水兼貴（2011b）「多様な方言資料を統一的に扱うための検索システムの開発」『日本語学会 2011年度秋季大会予稿集』263-270.
- 鐘水兼貴（2012）「携帯電話を利用したリアルタイム方言調査システム」『日本行動計量学会第40回大会抄録集』349-352.
- 鐘水兼貴・小西いずみ・松丸真大（2010）「方言調査データのXMLによるデータベース化」『情報処理学会研究報告〔人文科学とコンピュータ研究会〕』2010-CH-88, 71-81.
- 鐘水兼貴・三井はるみ（2013）「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」『第31回社会言語科学学会研究大会発表論文集』162-165.

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」 プロジェクト成果公開サイト紹介

三井 はるみ

(国立国語研究所)

1. はじめに

国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」(以下、本プロジェクト)では、Webによる研究成果の発信を企画し、2013年6月30日に、4種の資料・データベースを公開した。ここでは、それら4種の資料・データの紹介を行う。

本プロジェクトは、「首都圏の言語の総合的研究の基盤を築くこと」を目的として、(1)研究会活動、(2)新規調査研究活動、(3)研究資産の再構築、の三つを活動の柱として展開してきた。資料・データベースのWebサイトでの公開は、このうちの、「(3)研究資産の再構築」に関連して行うものである。

2. プロジェクト成果公開サイトの概要

「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト(以下、プロジェクトサイト)は、国立国語研究所サイトの中にある (<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>)。研究所トップページから、「トップ>研究活動>共同研究プロジェクト>萌芽・発掘型>首都圏の言語の実態と動向に関する研究>プロジェクトのHP」とたどることで到達できる(右図)(2014年1月20日現在)。現時点では、Google検索で「首都圏言語」と入力して検索すると、当サイトが最初に表示される。プロジェクトサイトトップページは次ページのとおり。

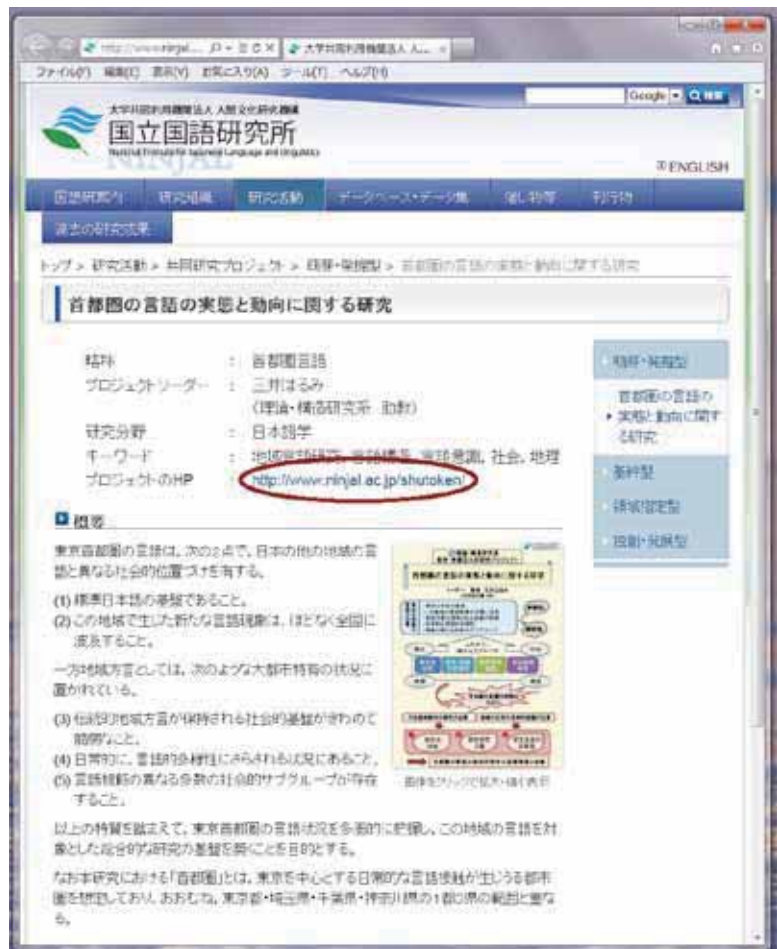




図1 プロジェクトサイトトップページ
(<http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>)

コンテンツは次の5つである。

(1) 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する研究

2012年に実施した、首都圏8大学の学生を対象とした言語調査の結果報告。

38項目に関する分布地図（1項目につき、関東・全国各1枚）を示し、項目ごとに解説を付した。

(2) 東京のことば研究者インタビュー

東京・首都圏の言語研究の第一人者であり、かつ、御自身が東京のことばのネイティブスピーカーでいらっしゃるお二人の先生方（田中章夫先生、野村雅昭先生）へのインタビュー（2012年実施）。各約10分程度の動画と文字化。

(3) 首都圏の言語に関する研究文献目録

東京都（島嶼部を除く）・埼玉県・千葉県・神奈川県の上・下3県の言語に関する研究文献目録。図書、論文、発表予稿集を含む。2013年6月30日現在1951件を採録。文字列検索機能あり。

(4) 東京語アクセント資料

柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』上・下（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）を、原著者の了承を得て電子化し、検索機能を付した。全データをExcel形式でダウンロード可。併せて、原著書に収められていなかった調査票を電子化して公開。

(5) 研究成果

書籍、報告書、論文、学会発表、プログラム、データベース、研究会記録等、本プロジェクトの研究成果のリスト。

各コンテンツは、トップページのコンテンツタイトルをクリックすることで開けるほか、左メニューを展開して、各コンテンツの各ページに直接アクセスしたり、検索を行ったりすることができる。なお、(1)～(4)は、今後、それぞれ独立したデータベース・データ集として、「国立国語研究所データベース・データ集」(<http://www.ninjal.ac.jp/database/>)のページから直接リンクが張られる予定である。

以下、(1)～(4)の各資料・データベースについて説明を加える。

3. 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する研究

首都圏の若年層における言語の地域差を調べるため、2012年度に首都圏の大学生に対して実施した、言語使用と言語意識に関するアンケート調査の結果報告である。「概要」「調査票」「地図と解説」から成る。

「地図と解説」では全調査内容のうち、語形の使用に関する38項目について、分布地図（関東地方と全国）と全国使用率を示し、解説を付した。項目は「地図検索」の検索窓から選ぶことができる。地図はクリックにより拡大表示することができる。（図2）

図2 「地図と解説」画面



本報告書第1部所収の「非標準形から見た東京首都圏若年層の言語の地域差」(三井はるみ)、第2部所収の「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」(鎌水兼貴)は、この調査結果の分析である。また本調査に先立ち、プロジェクトでは、若年層が回答しやすい調査手法についても研究を行い、携帯電話のメールを用いたアンケート調査システム(RMS = Real-time Mobile Survey system)を開発した。本調査はこのシステムを活用している。システムの概要については、鎌水兼貴(2013.11)「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」『国立国語研究所論集』7(本報告書第3部に再録)を参照。

- 地図選択
- 1.カラス (片付ける)
 - 2.モス (燃やす)
 - 3.バナナムシ (ツマグロオオヨコバイ(黄色い小さな虫))
 - 4.ダイジ (大丈夫)
 - 5.アオタン (青あざ)
 - 6.ヨコハイリ (割り込み)
 - 7.ズルコミ (割り込み)
 - 8.[イ]チゴ (イを高く発音する)
 - 9.コロコ (2つ目のコを高く発音する)
 - 10.アルグダ (ありそうだ)
 - 11.アルツテ (歩いて)
 - 12.アンマ (あまり)
 - 13.食堂イクベ (食堂に行こう)
 - 14.イタタキアル? (行ったことある?)
 - 15.ウザッタイ (不快だ)
 - 16.自転車のウラ (自転車の後ろ)
 - 17.エグツ (あからさまにひどい)
 - 18.シヤ(視野) (~もありだ)
 - 19.シレル (知ることができる)
 - 20.スルナシ (するな)
 - 21.センヒキ (定規)
 - 22.ソースツ (そうすると)
 - 23.ソースント (そうすると)
 - 24.ソーナン? (そうなの?)
 - 25.ソレナ (そうだね)
 - 26.ダベ? (だる?・でしょ?)
 - 27.チガクッタ (違った)
 - 28.チガクテ (違って)
 - 29.先生チャウ (先生ではない)

4. 「東京のことば」研究者インタビュー

4. 1 内容

2012年に実施した、田中章夫先生、野村雅昭先生のお二人の先生方へのインタビューから、エピソードトークの一部、各約10分程度の動画と文字化を公開した。

実際の画面は図3のとおり。プロジェクトサイトトップページ、または左メニューから「「東京のことば」研究者インタビュー」に入ると、「概要」の下に、「田中章夫先生インタビュー」「野村雅昭先生インタビュー」の順に、それぞれ「経歴」「収録データ」「動画」の項目がある(A)。「動画」の項目の写真またはタイトルをクリックすると、「利用条件」画面が現れる(B)。同意する場合は「同意して閲覧する」をクリックし、動画と文字化のページに移る(C)。動画をクリックすることで再生できる。掲載した文字化は、あいづち、言いよどみなどがある程度忠実に反映した、漢字平仮名交じり表記である。スクロールすることにより、動画の進行に合わせて見ることができる。

4. 2 企画の経緯

首都圏の言語の研究には、方言研究、近代語研究、社会言語学的研究といった、様々な背景のもとで行われてきた蓄積がある。またその中核となる、「東京のことば研究」に関しては、東京出身の研究者による、母語話者としての自らの内省と観察を深く反映させた研究が行われてきていることが、大きな特色である。

そこで本プロジェクトでは、東京・首都圏の言語研究の第一人者であり、かつ、御自身が東京のことばのネイティブスピーカーでいらっしゃる先生方に、お話しをうかがい、同時に記録させていただく機会を得たいと考え、「東京のことば」研究者インタビューを企画した。

これまでに、田中章夫先生(1932(昭和7)年、赤坂生まれ、2012年5月6日収録)、野村雅昭先生(1939(昭和14)年、元広尾生まれ、2012年12月7日収録)からお話しを伺うことができた。

インタビューの内容は、大きく、①「東京のことば」研究についてのお考え、②かつての東京の様子・生活などに関するエピソード、に分かれる。このほかに、若干の項目について調査票を用いた言語調査に応じていただいた。収録後、すべて文字化を行った。

先生方の「東京のことば」研究についてのお考えは、御自身の研究の軌跡に発し、学界の研究状況を広く見渡し、具体的に取り組むべき課題をもお示しいただくという、我々にとってたいへん示唆に富むものであった。また、エピソードトークは幅広い話題にわたったが、特に、昭和20年前後の時代のお話しは、先生方の個人的なエピソードの中に当時の東京の社会状況がまざまざとうかがわれ、非常に興味深い内容であった。

お忙しい中お時間を取ってお話しをお聞かせくださり、また、このような形でインタビューの一部を公開することをご承諾くださった先生方に感謝いたします。

4. 3 公開部分の選定

公開にあたっては、2時半から3時間に及んだインタビュー全体の中から、ひとまとまりの内

図3 「「東京のことば」研究者インタビュー」の画面

A

田中章夫(たなか・あきお)先生インタビュー

経歴

1932(昭和7)年、東京市赤坂区生まれ、赤坂・麻布で生育、香川大学、国立国語研究所、大阪外国語大学、学習院大学、東員大学(台湾)を歴任。
「東京のことば研究」に関連する著書に、『東京語 ―その成立と展開―』(1993年、明治書院)、『標準語(ことばの小径)』(1991年、誠文堂新光社)、『日本語雑記帳』(2012年、岩波書店)など。

収録データ

日 時	2012年5月6日(日) 14:00-16:50
場 所	国立国語研究所 小会議室 木川行央(神田外語大学)=インタビュアー1 久野マリ子(國學院大学)=インタビュアー2
聞き手	三井はるみ(国立国語研究所) 亀田裕見(文教大学) 鎌水兼貴(国立国語研究所)
録音・録画担当	三樹陽介(韓国・朝鮮大学校、収録時は國學院大学)
文字化担当	庄安浩史・竹内はるか・坂本薫・中村明裕・程田直之(以上、國學院大学大学院生)

動画



空襲の話[前]



東京山の手空襲の話[後]
(7'33")

入しているところがあります。

C

東京山の手空襲の話[後] (7'33")



で転ぶと、ずうっと行って、最後はこの、このぐらいのところを、道を落っこちる(笑)、落っこちるわけ。
んでそこを過ぎてさ、あの、九条駅と一乗橋ね、今の氷川小学校の前に、あの、まあ、ああ、そこに、ああ、あの、TBSのちょっとこっちね、あの、んー、そこに広いね、あの、九条駅と一乗橋があって、ちょうど、あの、まだ赤坂はね、あっちこっちにそついうね、また、家が建ってないね。

田中 (笑) 僕らは野原、野原つってただけど。

B

以下の利用条件をお守りください

- ・学術研究、教育・文化的利用を目的とした、非営利の使用に限ります。
- ・引用の際は、出典を明記してください。
- ・改変を加えたものを公開しないでください。
- ・再配布を禁止します。
- ・著作権その他の権利を侵害しないでください。

利用条件に同意する

容を持ち、かつ、先生方のお話しぶりがよく現れていると思われる、連続した10分程度の部分を選定した。「東京のこぼれ」研究者インタビュー」ということであれば、まずは研究に直接関連する部分の公開が期待されよう。ただ、多岐にわたる内容の一部のみを切り取った場合、意図が正しく伝わらないなど、支障が生じることが懸念された。また、お話しぶり、という点では、なんと言っても、印象的なできごとをお話くださっている時に、生き生きとしたくつろいだ語り口でいらっしやると感じられた。そこで今回はまず、②のエピソードトークの一部を動画と文字化で公開させていただくこととした。インタビュー全体については、別途、公開の方法を検討中である。

今回収録させていただいたインタビューは、お話しの内容はもちろんだが、それに加えて、東京都心部のネイティブスピーカーの談話としても、記録に止めさせていただくべきものと考えている。今後は、その観点からの分析も行っていきたい。例えば、談話標識の現れ方に着目することにより、話の運び方の「東京らしさ」を浮かび上がらせる、といった分析等が挙げられよう¹。

5. 首都圏の言語に関する研究文献目録

5. 1 内容

研究を進めるために最も基本的な研究資源として、研究文献目録を作成した。2013年6月30日の公開時点で、「図書」「論文」「予稿集」合わせて、収載件数1951件、である。

Web版では、文字列検索により検索、絞り込みを行うことができる。図4は、検索語「山の手」で絞り込みを行った結果である。

5. 2 作成の経緯

「首都圏の言語に関する研究」は、対象地域も方法論も限定しにくいだが、文献採録にあたり、ここでは、「首都圏の言語の総合的研究の基盤を築く」というプロジェクトの目的に照らして、対象地域・方法論とも、「あまり限定せず、できるだけ網羅的に」という方針をとった。具体的には、対象地域を「東京都（島嶼部を除く）、埼玉県、千葉県、神奈川県」の1都3県とし、方法論や言語分野にかかわらず、地域の言語を対象として意識している研究であれば、ある程度広くゆるやかに採用することとした。

文献情報は基本的に、既存のデータベースである、日本方言研究会編（2005）『20世紀方言研究の軌跡』（国書刊行会）、「日本語研究・日本語教育文献データベース」（国立国語研究所HP）、「国立国語研究所蔵書目録データベース」（国立国語研究所HP）、「日本方言研究会方言書目」（日本方言研究会HP）から、関連文献をピックアップした。それに、主要学会の近年の研究発表原稿集のタイトル、および、その他個人的に存在を把握した文献を加えた。

研究文献目録の作成は三樹陽介（作成時は國學院大學、公開時は韓国・朝鮮大学校、現在は国立国語研究所 所属）が担当した。本報告書第3部の「首都圏の言語に関する研究文献目録」か

¹ 三井はるみ（2013）「話の進め方の地域差：相手に説明するときの話し方」（木部暢子他編著『方言学入門』第3章第2課①, pp.60-61）では、今回公開していない談話の一部を資料として、このような観点からの分析を試みた。

全 10 件中 1 ~ 10 件を表示 (Filtered from 1,951 total entries) 検索 山の手

番号	種別	発行年月	編著者	題名	所収誌・書名	発行地	発行所	ページ
626	論文	1951年 12月	柴田武・中村通夫	山の手ことばと下町ことばの違い	人類科学3	京都	九州会連合会 編、開書房	
757	論文	1959年 09月	黒上たつみ・藤澤子・ 吉武ゆき	(国語学)これが東京語 一山の手ことばへ	言語生活96	東京	筑摩書房	
1131	論文	1979年 07月	中澤よしあ	方言島日記 東京・山の手ことばと下町ことば	月刊ことば03-07	東京	英樹社	
1220	論文	1983年 11月	萩野福男	山の手と下町における敬語使用のちがい	言語研究84	東京	日本言語学会 編、三省堂	
1252	論文	1989年 11月	柴田武	東京語の歴史 ——山の手言葉の形成	国語と国文学65- 11	東京	東京大学国語国文学会 編、国 文学会	pp.16- 34
1535	論文	1997年 03月	田中章夫	特徴「魁れ(東京ことば)。——山の手は「行っちゃった」、 下町は「行っちゃった」	東京人12-03	東京	東京都歴史文化財団	pp.29- 43
1617	論文	1999年 10月	田中章夫	「新山の手ことばの性格」	近代語研究10	東京	武蔵野書院	
1703	論文	2004年 03月	西原菜津子	特徴「スタイル」の換えき ——東京山の手方言話者のスタイル の切換え	阪大社会言語学研 究ノ一6	豊中	大阪大学大学院文学研究科社 会言語学研究会	pp.23- 41
1710	論文	2004年 09月	三井はるみ	特徴「隣のことは ——現代社会方言の地域分帯「山の手 ことば」「下町ことば」をめぐって	言語33-9	東京	大修館書店	pp.22- 38
1743	論文	2009年 07月	野村雅昭	山の手ことばはどこに	みやびブックレット 10	津市 川	みやび出版	

全 10 件中 1 ~ 10 件を表示 (Filtered from 1,951 total entries) 検索 山の手

図4 「首都圏の言語に関する研究文献目録」検索例（「山の手」）

らみる研究動向」(三樹陽介)は、2013年6月30日公開時点の文献目録に採録された「論文」を資料として、研究動向の分析を行ったものである。

5.3 補充・改訂

2013年6月30日公開版を元にして、現在、目録の補充・改訂作業が進行中である。サイト公開後、担当を引継ぎ、現在は、吉田雅子(実践女子大学、共同研究者)が作業を行っている。2013年12月27日に第1回改訂版をupした。この2013年12月27日改訂版をもとに、冊子版『首都圏の言語に関する研究文献目録』を作成した。

目録は今後も引き続き、補充、改訂、アップデートしていく予定である。特に、現在公開している文献情報は、「種別」「発行年月日」「編著者」「題名」「所収誌・書名」「発行地」「発行所」「ページ」という書誌情報のみであるが、今後は拡充し、「地域」「言語分野」「研究法」といった、研究情報を付加する予定で、準備を進めている。

6. 東京語アクセント資料

柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編(1985)『東京語アクセント資料』上・下(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集)を、原著者の了承を得て電子化し、文字列検索機能を付した。また、原著に収められていなかった調査票の調査文を電子化し、初めて公開した。

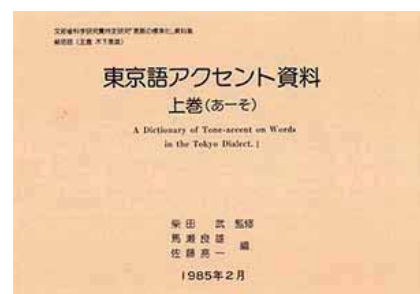


図5 原著上巻表紙

見出し番号	見出し	語形番号	語形	回答番号	新	N	明	全	X	y	A	b	C	d	E	F	g	H	i	J	K	l	m	N	o	P	q	r	s	備考
63 769	苺(種)	1	イチゴ/オ	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
63 769	苺(種)	1	イチゴ/オ	2	1			1						3	3								1			2				

図7 『東京語アクセント資料』検索例 (イチゴ/)

『東京語アクセント資料』は、現代東京語でアクセントゆれの予想された語についての網羅的
 多人数調査の結果である。今回データを電子化したことで、今後の分析の可能性が大きく広が
 った。電子化と公開をご承諾いただき、ご協力くださった関係者のみなさまに、感謝いたします。

7. おわりに

以上、「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイトの紹介を行った。
 ここで公開した資料・データベースは、プロジェクト共同研究者のみならず、多くの関係者の協
 力を得て完成した、利用価値の高い資料群である。今後は、これらの資料・データベースを活用
 し、研究を一層進展させていきたい。また、これらの有用な資料・データベースを、プロジェク
 ト関係者以外にも広く利用してもらえるよう、機会を捉えてアナウンスし、首都圏地域の言語研
 究の活性化につなげていきたい。

「首都圏の言語に関する研究文献目録」からみる研究動向

三樹 陽介

(国立国語研究所)

1. はじめに

本稿では「首都圏の言語に関する文献目録」を用いた研究動向分析を試みる。

「首都圏の言語に関する文献目録」は、国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」の一環として作成されたものである。首都圏の言語においては、これまで、近代語研究、方言研究、都市言語研究、言語動態研究等、様々な分野からのアプローチによって研究が蓄積されてきた。この文献目録は、このような蓄積の上に立って今後の研究の展望を得るために、研究資産再構築の一つの手段として作成されたものである。

なお、この目録では「首都圏」を、東京を中心とする都市圏、具体的には東京（島嶼部を除く）・神奈川・千葉・埼玉の1都3県として、作業を行った。

2. 文献目録の作成方針

まず、既存の文献データベースを、「首都圏」「東京語」「新語」等関連するキーワードで検索し、論文・書籍の情報を取得した。主たる基盤データベースは以下の通りである。

- ①「日本語研究・日本語教育文献データベース」(国立国語研究所)

<http://www.ninjal.ac.jp/database/bunken/> (2012年11月23日検索)

- ②『20世紀方言研究の軌跡』(日本方言研究会編 2005 国書刊行会)

- ③「国立国語研究所蔵書目録データベース」(国立国語研究所)

<http://libgw.ninjal.ac.jp/mylimedio/search/search-input.do>

(2012年11月23日検索)

- ④「日本方言研究会方言書目」(日本方言研究会)

<http://dialectology-jp.org/wiki.cgi?page=%A5%C7%A1%BC%A5%BF%A5%D9%A1%BC%A5%B9%2F%CA%FD%B8%C0%B4%D8%B7%B8%BD%F1%CC%DC>

(2012年12月13日検索)

その後、①②④については、データベース全体を見直し、また、関係書籍の引用文献、学会発表予稿集等から、関連論文・書籍を追加した。文献の収集にあたっては、「首都圏という地域の言語を対象として意識している研究」について、「地名・動植物名研究等の周辺分野を含め、関連すると考えられるものをある程度広く、網羅的に収集する」という方針を採った。

このようにして収集したタイトルは、1775年から2012年6月までに刊行された論文約1,500件、書籍約400件(2013年1月15日現在)である。このうち、本稿では「論文」のみを分析対象とした。

本文献目録には、「文献名」「著者」「所収誌」「巻号」「発行所」「発行年」「掲載ページ」等

の情報が含まれている。そのほかに「地域」「分野」「方法」「言語分野」など、内容に関する分類を行い、タグを付けている。これらは今後の公開に向けて、現在整備中である。

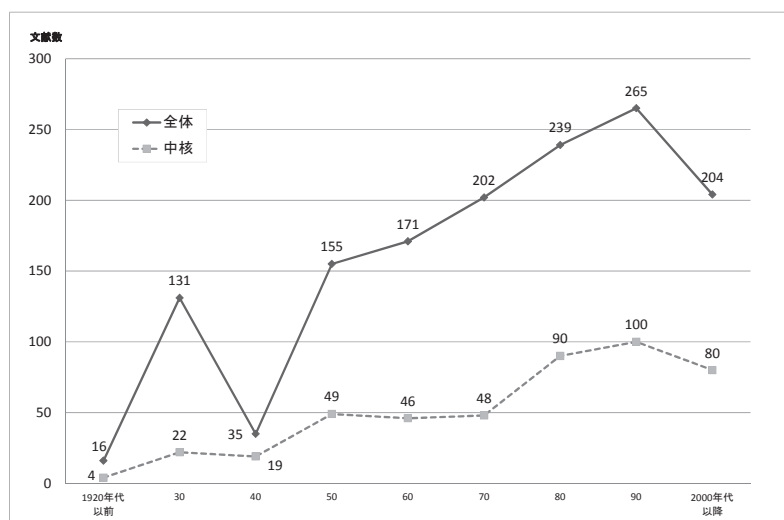
3. 文献目録「論文編」の概要

3-1. 全体像

まず、採録件数についてみていく。グラフ1は論文採録件数を年代別に示したものである。上側の実線が全体の採録件数である。1880年代後半から採録がある（岡村増太郎1886「安房国方言歌」『人類学会誌』、等）が、採録された文献の内容についてみると1920年代までは方言集がほとんどであり、また、採録件数自体も少ない。30年代に入ると採録論文数は急増し、戦中・戦後期にあたる40年代で一時急落するものの、その後は徐々に採録件数が増えている。採録論文数は1990年代に頂点を迎えるが、2000年代に入ると減少に転じる。

下側の点線は「中核文献」として精選したものの採録件数である。先にも述べたように、本文献目録では周辺分野も含め、関連すると考えられるものをある程度広く採録しているが、中核文献はそうした周辺分野のもの等を取り除き、約500件を精選したものである。

グラフ1. 年代別、採録件数



本稿では詳しく述べないが、参考までにその採録件数をグラフに示した。多少の上下動はあるものの、やはり1990年代を頂点とするように、徐々に緩やかに採録件数が増えており、また2000年代に入ると採録件数は減っている。なお、40年代では全体の論文数は著しく減少しているが、中核文献の数は30年代とほぼ同数である。

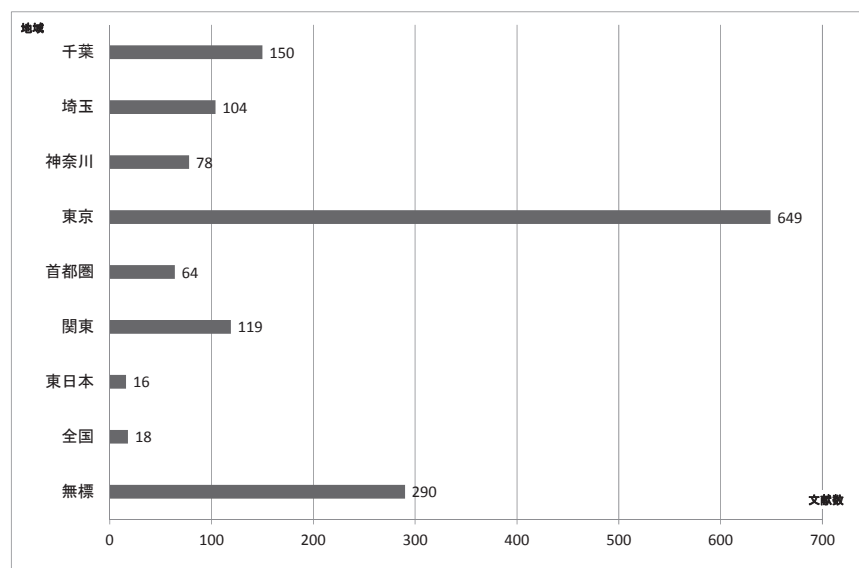
3-2. 地域別件数

次に地域ごとの文献件数についてみていく。グラフ2は地域ごとの文献採録件数についてまとめたものである。分析にあたり、採録した文献を地域別に分類した。文献によって、地域を限定したものと、複数の都県や広域を同一の対象地域として扱っているものがあることから、東京・千葉・埼玉・神奈川・首都圏・関東・東日本・全国の8つに分類した。

また、具体的な地域を特定できないものや、8つの分類以外の地域を加えた複数の地域にわたるものもある。前者の大部分は特定の地域を想定しない現代日本語研究にあたるもので、スタンダードな日本語という観点から、標準語・共通語・現代日本語、等として捉え論じら

れている（花田康紀 1999「現代日本語の音声をめぐる--1999年における標準的な日本語のばあい」『国士館大学教養論集』24-02、等）。ここで論じられていることばは事実上東京を中心とする首都圏のことばであり、その実態・動態の研究となっていることから採録した。これらの文献については地域を特定することは難しいため、「無標」として処理した。また、後者については複数領域にまたがるものとして整理した。そのため合計数は実際の採録件数とは合致しないものとなっている。

グラフ2. 地域別、文献採録件数



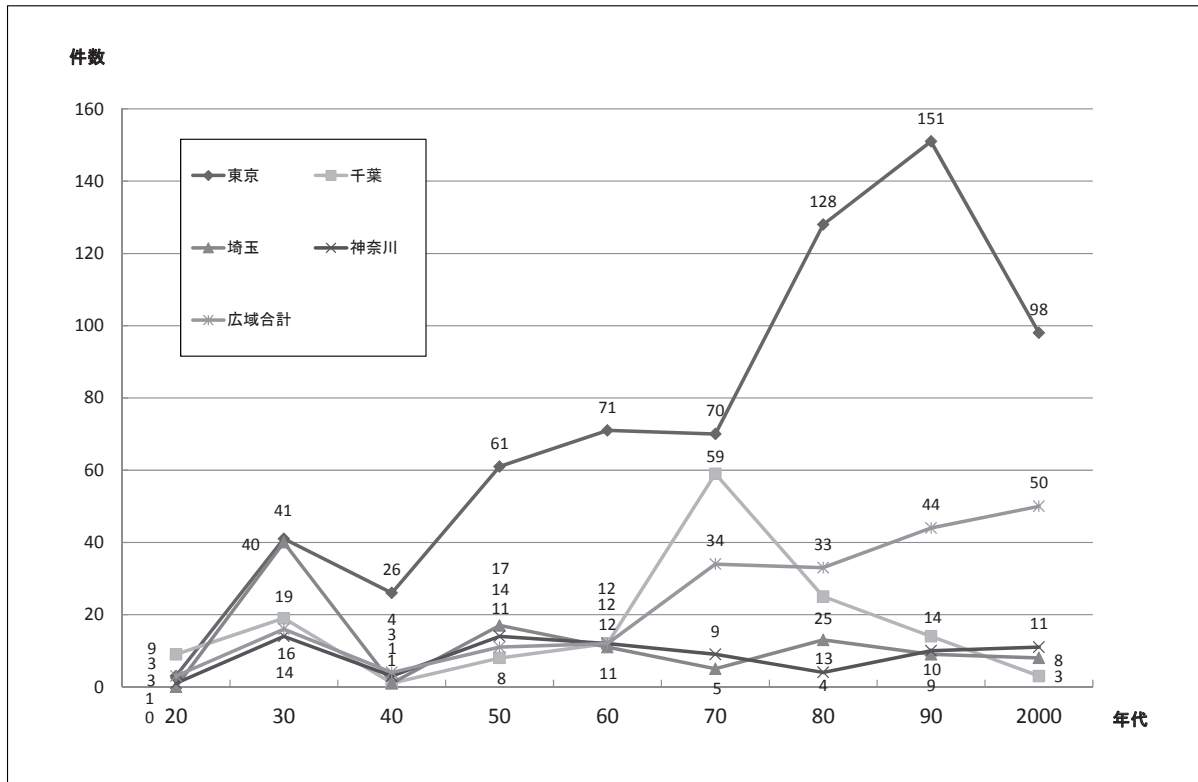
地域別採録文献数では、東京について扱った文献が最も多く、無標、千葉、関東、埼玉、神奈川、首都圏、全国、東日本の順となっている（グラフ2）。都県別にみると、東京を対象とした文献の採録件数が圧倒的に多く、それに比較して神奈川・埼玉・千葉の地域言語研究の採録件数

は少ない。この3県の中では千葉を対象とした文献がやや多いが、これには70年代に多くの調査がなされたことが影響していると考えられる。広域では、東日本と全国とが極端に少ない。これは「首都圏という地域の言語を対象として意識している研究」について収集するという本文献目録の性格によるものだが、「周辺分野を含め、関連すると考えられるものをある程度広く収集する」という方針から、この地域の言語研究のために有益であるものとして採録している文献がここに含まれている。

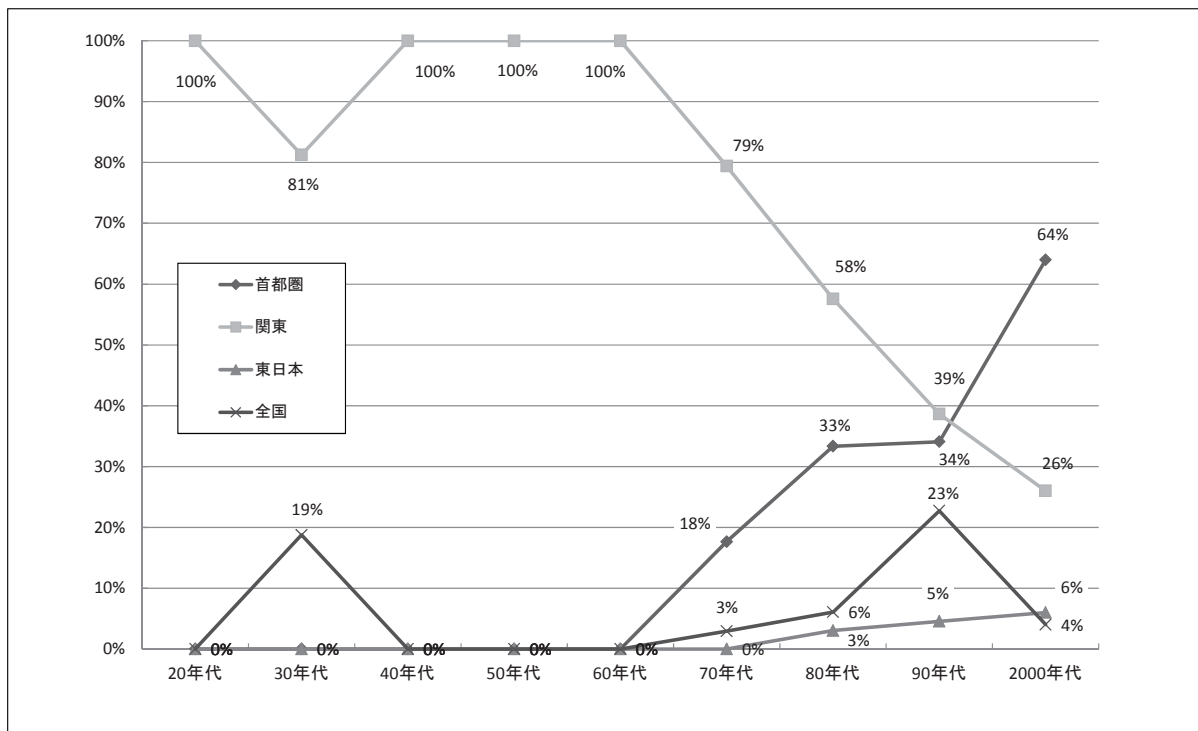
3-3. 地域・年代別、文献数

グラフ3は、東京・千葉・埼玉・神奈川の各都県単独と、複数の都県にまたがる広域を対象とした文献について、それぞれ年代別の採録件数を示したものである。やはりここでも東京の採録件数が突出しているのが目立つ。80・90年代に入ると採録件数の飛躍的な増加がみられ、90年代にピークを迎えているが、しかし2000年代に入ると大幅な減少に転じる。他の地域は押し並べて採録件数は多くはないが、30年代では埼玉の研究が多いこと、70年代では千葉の研究が多いことが特徴的である。

グラフ3. 地域ごとの年代別文献数



グラフ4. 広域地域別、採録件数比率



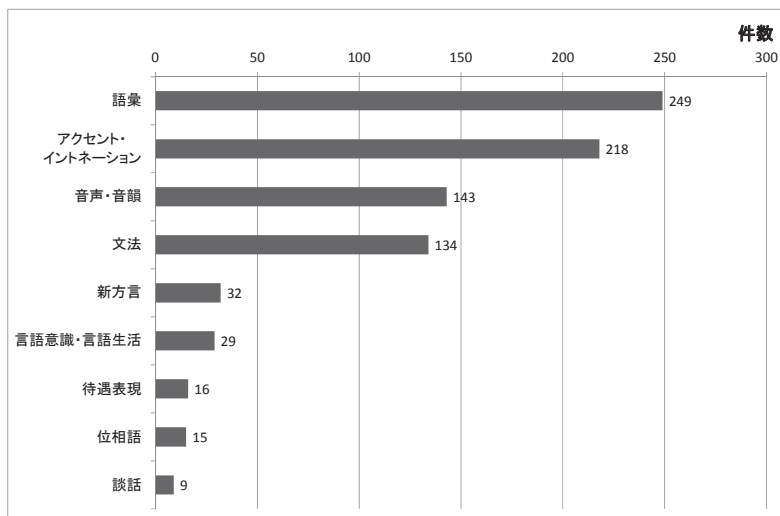
また、70年代頃から単一県を対象とした研究に比べ、広域を対象として扱った研究が増えている。グラフ4は広域地域ごとの採録件数の比率を年代別に示したものである。広域地域を扱った研究では、70年代まで、関東をひとくくりにした研究が主だった。40～60年代の採録件数比率は100%である。しかし、70年代を境に関東を扱った研究が減少していき、一方で首都圏を意識した研究がみられるようになる（野村雅昭 1970「現代東京語の展望」『言語生活』225 筑摩書房 等）。

これは、それまでの単一都県や関東といった地域ではなく、首都圏という地域が意識され、注目されてきたということである。「中央としての東京」から連続する「首都圏」という地域が意識され、注目されてきていることの表れといえる。

広域の内訳をみると、関東地域を言語地理学的に扱った研究と、東京を中心とする都市圏の言語を意識した研究が増えている。首都圏の言語を意識した研究は2000年代に入ってから急増しており、一方で単一都県のような狭域を扱った地域言語研究は2000年代からは減少している。広域を対象とした研究が徐々に数を伸ばしていることがわかる。

3-4. 言語分野別、文献採録比率

グラフ5. 首都圏を対象とした研究の分野内訳

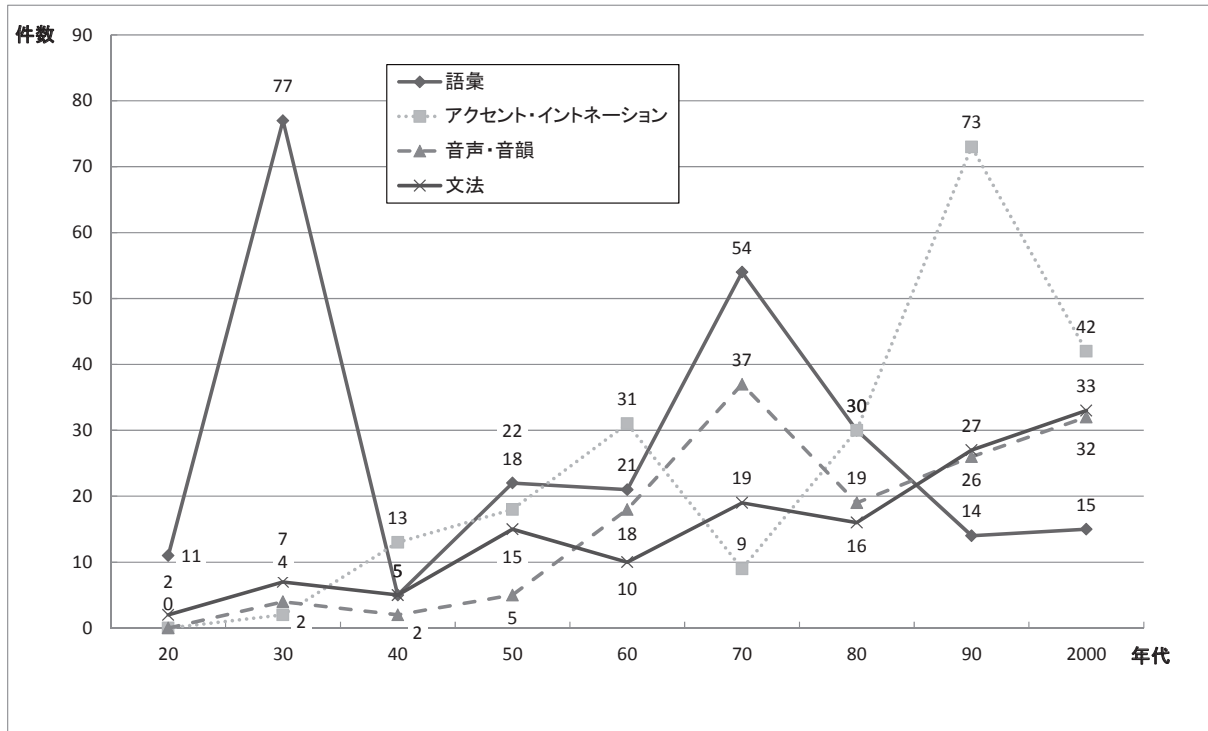


グラフ5は言語分野別採録件数を示したものである。言語分野は多岐にわたることから、グラフ5では代表的な9項目をあげた。複数の分野を含むものは、複数領域にまたがるものとして各箇所それぞれ分類し、処理した。このほかにも分類が難しいものもあり、「その他」として分類した（煩雑さを避けるため、グラフ5には示さなかった）。

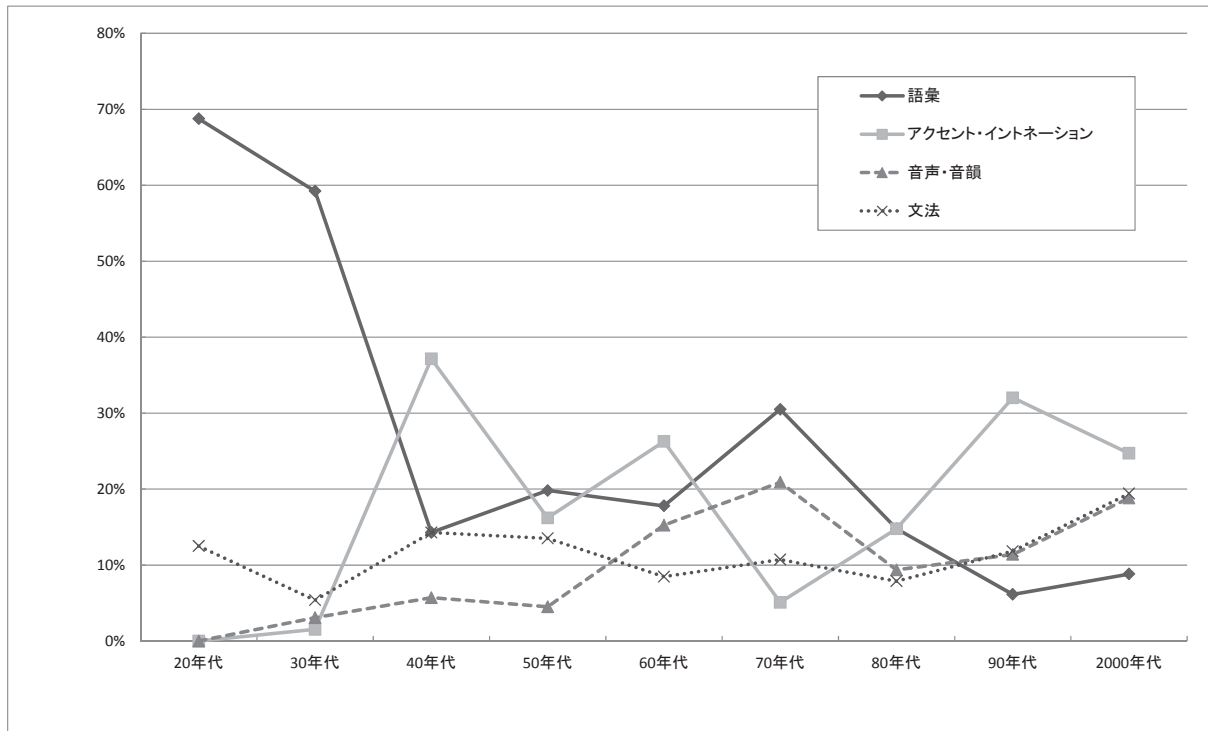
今後さらに整備していく予定である。言語分野別採録件数では、「語彙」「アクセント・イントネーション」「音声・音韻」「文法」の4項目の採録件数が特に多いことが目立つ。

グラフ6は、これらの主要な4項目について年代別に分類したものである。研究黎明期の30年代では語彙の研究が多いが、これは方言集が多いためである。また70年代でも語彙研究が多いが、これは千葉での方言研究が盛んだったことが影響している。さらに80年代以降は音声・アクセント研究が盛んとなってきており、広域、特に首都圏を対象とした研究が増加していることとの関連性がうかがえる。

グラフ6. 年代別言語分野内訳



グラフ7. 主要言語分野別採録比率



グラフ7は主要研究分野について、年代ごとに採録比率を示したものである。

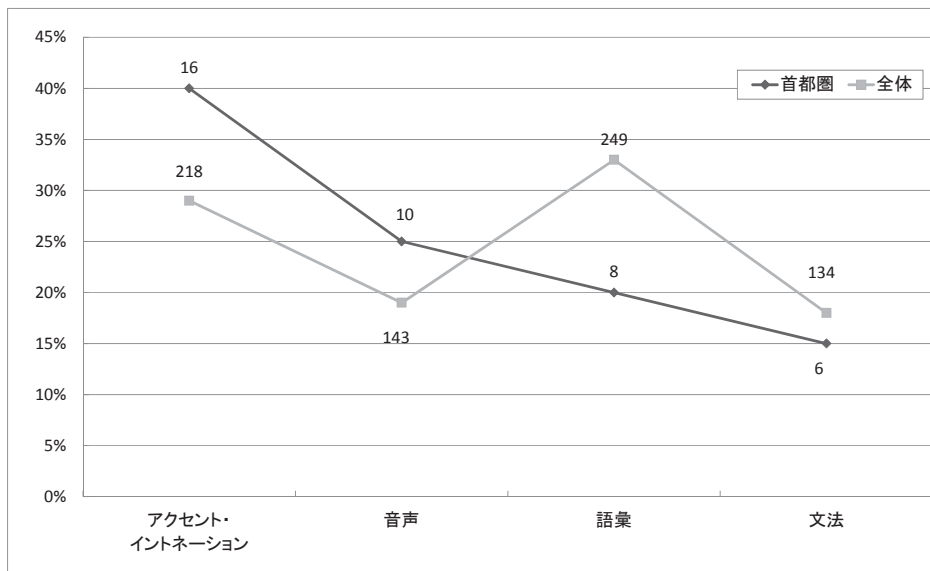
30・70年代に語彙研究が多く、70年代に音声・音韻研究が多い。これをグラフ3と合わせて比べてみると、30年代に埼玉の語彙研究が多かったこと（杉山正世 1933「蝸螂と蜥蜴との称呼（埼玉県）」『郷土研究むさしの』11 武蔵野郷土会 等）、70年代に千葉県の方言研究が盛んだったこと（藤原文夫・谷萩かほる 1975「房総半島（中・南部）のヒキガエル方言」『資料の広場』7 中央図書館 等）、とリンクする。

また、90年代以降はアクセント・イントネーション研究の比率が高くなっている。なお、40年代でもアクセント・イントネーション研究の比率が高くなっているが、採録文献の絶対数が少ないため、グラフ7からは、特にアクセント・イントネーション研究が盛んだったとは判断するのは難しい。参考にとどめる。

「首都圏」あるいは「首都圏方言」という術語が他の言語分野に比べて多く用いられるのもアクセント・イントネーション分野の特徴である（嶺田明美 2006「首都圏出身在住の若年層女性の母音調音の実態について」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』17 昭和女子大学、田中ゆかり 2003「首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの 「気づき」 「変わりやすさ」の観点から」『語文』106 日本大学国文学会、等）。これは首都圏を対象とした研究の増加とリンクしていると考えられる。

グラフ8は首都圏を対象とした研究と、文献目録全体での各言語分野の採録比率を分類し、示したものである。首都圏を対象とした研究では、音声・音韻、アクセント・イントネーションといった音声分野での研究の比率が、語彙・文法などに比べて高い。

グラフ8. 言語分野別採録比率（首都圏と全体）



一方で語彙や文法などに関する文献は多くなく、それらは単一都県や関東地域等を扱ったものにより多くみられる。その他には新方言、談話分析のほか、都市言語研究の問題点等について扱ったものなどがある。

4. まとめと今後の展望

以上、本文献目録の概要を研究動向に着目してみてきた。「首都圏の言語に関する文献目録」を用いて研究動向分析を行い、主に、以下の①～④の点について論じた。

- ① 文献採録数は90年代を頂点に基本的には右肩上がり。2000年代で減少する。
- ② 単一県を対象とした研究は多くなく、70年代以降、広域を対象とした研究が増加。
- ③ 広域を対象とした研究は70年代までは関東地方を一括りにしたものが主だったが、70年代以降、首都圏を意識した研究がみられるようになる。言語体系として一体感を持つ「首都圏」という地域が意識され、注目されてきていることの表れといえる。
- ④ 言語分野別にみると語彙研究が多いが、首都圏を意識した研究ではアクセント・イントネーション研究、音声研究が多い。

③のように、近年の研究動向として、広域を対象とした研究が増えてきている。これまでも東京のことばを対象とした研究は多かったが、その範囲を東京以外へも広めている結果である。一方で千葉・埼玉・神奈川などの地域方言を単独で扱った研究は多くない。

このように、本文献目録を俯瞰することで、対象地域の変化、着目される言語そのものの側面の変化、首都圏の社会状況の変化が研究に与える影響等、首都圏の言語に関する研究の流れと広がりとがみえてくる。このことは、首都圏の言語がその性質に応じた独自の研究方法を必要としていることを示唆するものと考えられる。

今後は、タグの整備とともに方法論からの分析を行う予定である

参考文献

- 井上史雄（2008）『社会方言学論考』明治書院
田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
日本方言研究会編（2005）『20世紀方言研究の軌跡』図書刊行会

文献目録参考画像

以下は本文献目録の画像である。地域タグで「首都圏」がついたものの一部を示した。

番号	編著者	論文名	誌名/書名	巻号	発行所	発行年月	ページ
0344	秋永一枝	東京弁アクセントから首都圏アクセントへ	言語学林 1995-1996		三省堂	1996年04月	pp.663-680
0345	吉岡泰夫	<新刊・寸感>馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香編 「首都圏女子大生のキャンパスことば 横浜・フェリス女学院大学」	日本語学	17-10	明治書院	1998年09月	pp.98-100
0346	加藤大鶴	首都圏における外来語平板アクセントと馴染み度	早稲田日本語研究	7	早稲田大学	1999年03月	pp.49-60
0347	伊藤雅光	<新刊・寸感>馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香編 「首都圏女子大生のキャンパスことば—横浜・フェリス女学院大学1998」	日本語学	18-04	明治書院	1999年04月	pp.80-82
0348	早野慎吾	首都圏の新方言形チツタ	名古屋・方言研究会会報	16	名古屋・方言研究会	1999年05月	pp.45-53
0349	田中ゆかり	アクセント型の獲得と消失における「意識型」と「実現型」首都圏西部域若年層における外来語アクセント平板化現象から	国語学	51-03	国語学会	2000年12月	pp.16-32
0350	橋元良明・小松亜紀子・栗原正輝・班目幸司・アヌラグ・カンヤブ	首都圏若年層のコミュニケーション行動 インターネット、形態メール利用を中心に	東京大学社会情報研究所調査研究紀要	16	東京大学社会情報研究所	2001年10月	pp.94-210
0351	佐々木英樹	東京湾岸言語地図 3千葉県千葉市・市原市・袖ヶ浦町[1989-92] 4東京都・千葉県境界地帯南部[1992-94] 5東京都・神奈川県境界地帯東部[1994-97]第1分冊	駒沢女子大学研究紀要	8	駒沢女子大学	2001年12月	pp.77-102
0352	早川文代・馬場康維	流行語としての“まったく”の客観化 首都圏におけるアンケート調査	日本家政学会誌	53-05	日本家政学会	2002年05月	pp.437-446
0353	佐々木英樹	<かまきり>と<とくかげ>の混乱と適応 東京湾岸言語地図から	駒沢女子大学研究紀要	9	駒沢女子大学	2002年12月	pp.79-115
0354	田中ゆかり	首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの「気づき」「変わりやすさ」の観点から	語文	106	日本大学国文学会	2003年06月	pp.119-95
0355	吉岡泰夫	コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライネスの地域差・世代差 首都圏と大阪のネイティブ話者比較	社会言語科学	07-01	社会言語科学会	2004年09月	pp.92-104
0356	友定賢治・陣内正敬	関西方言、関西的コミュニケーションの広がりの意味するもの—全国6都市調査から—	社会言語科学	7-1	社会言語科学会	2004年9月	pp.84-94
0357	田中 ゆかり	東京首都圏における関西方言の受容パターン「間接接触」によるアクセサリイ的受容	関西方言の広がりどコミュニケーションの行方 研究叢書339		和泉書院	2005年12月	pp.159-178
0358	嶺田明美	首都圏出身在住の若年層女性の母音調音の実態について	昭和女子大学大学院日本文学紀要	17	昭和女子大学	2006年03月	pp.1-7
0359	田中ゆかり	特集、日本語の謎——方言「東京首都圏」に「方言」はあるのか	国文学 解釈と教材の研究	51-04	学燈社	2006年04月	pp.60-62
0360	川上 葵	<研究ノート>最近の首都圏語のアクセント変化	音声研究	10-02	日本音声学会	2006年08月	pp.72-76
0361	田中ゆかり	「とびはね音調」の探査とイメージ 東京首都圏西部域高校生調査から	語文	126	日本大学国文学会	2006年12月	pp.66-54
0362	斎藤孝滋	談話構造分析の計量的視点による一試案 首都圏大学生話者の場面別談話を対象として	多文化・共生コミュニケーション論叢	2	フェリス女学院大学多文化・共生コミュニケーション学会	2007年02月	pp.23-33
0363	斎藤孝滋 編	首都圏在住女子大学生における場面別形容詞活用体系! 東日本話者編!	多文化・共生コミュニケーション論叢	2	フェリス女学院大学多文化・共生コミュニケーション学会	2007年02月	pp.35-81
0364	荻野綱男	<ノート>最近の東京近辺の学生の自称詞の傾向	計量国語学	25-08	計量国語学会	2007年03月	pp.371-374
0365	山岸智子	持続時間の長い撥音に関する知覚と経験の関連性 近畿方言話者と首都圏方言話者	言語文化と日本語教育	33	お茶の水女子大学日本語文化学会	2007年06月	pp.31-35

付 記

本稿は、日本語学会 2013 年度春季大会（2013 年 6 月 1・2 日）でのブース発表（三樹陽介・三井はるみ「首都圏の言語に関する研究文献目録」紹介）を改稿したものである。なお、「首都圏の言語に関する研究文献目録」は Web 版で公開中である。

プロジェクト URL <http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>

研究発表会開催記録

〔共同研究発表会〕

- 第1回 2011年2月25日(金) 15:00~16:30
国立国語研究所セミナー室
田中ゆかり(日本大学)
「アキバの言語景観」
三井はるみ(国立国語研究所)
「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及とその背景」
- 第2回 2011年10月30日(日) 14:00~16:10
國學院大學渋谷キャンパス 3号館 3307教室
テーマ：地理的研究と歴史的研究の橋渡し
竹田晃子(国立国語研究所)
「東京語調査」の概要—山手線沿線調査を中心に—
飛田良文(国立国語研究所名誉所員)
【講演】「私のとらえたい東京語」
鎌水兼貴(国立国語研究所)
指定討論
- 第3回 2012年3月12日(月) 15:00-17:00
国立国語研究所セミナー室
テーマ：ミニ調査報告会
鎌水兼貴(国立国語研究所)
「全国若者ことば調査の概要と結果速報」
亀田裕見(文教大学)
「埼玉県西部地域における伝統的方言の分布調査の経過報告」
久野マリ子(國學院大學)
「首都圏方言の伝統的古相の記述とその変容 —小田原市穴部方言の音声—」
- 第4回 2012年7月22日(日) 14:00~17:00
日本大学文理学部 7号館4階国文学科学生室
テーマ：首都圏地域のアクセント
佐藤亮一(国立国語研究所名誉所員)
【講演】「東京・首都圏アクセント研究の課題」 PDF
林直樹(日本大学大学院生)・田中ゆかり(日本大学)
「地理的言語データの統合的分析 —首都圏形容詞アクセントを事例とした試行 —」
坂本薫(國學院大學大学院生)
「神奈川県小田原市方言のアクセント」

亀田裕見（文教大学）

「埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調 —久喜市高年層に見られるゆれ—」

第5回 2012年12月2日（日）15:00～17:10

国立国語研究所セミナー室

テーマ：当プロジェクトの研究成果から

亀田裕見（文教大学）

「首都圏における方言の地域資源としての活用 —通信調査の結果より—」

鎌水兼貴（国立国語研究所）

「全国若者言葉調査」の結果報告

三井はるみ・鎌水兼貴（国立国語研究所）

「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」

〔ゲスト授業〕

國學院大學文学部日本文学科ゲスト授業

2012年1月17日（火）12:50～14:20

國學院大學渋谷キャンパス 3号館3308教室

小林初夫（福島県南相馬市立上真野小学校）「国語教育と方言」

〔パネルセッション〕

Urban Language Seminar 11（第11回国際都市言語セミナー）

2013年8月17日（土）～18日（日）

広島市文化交流会館

MITSUI Harumi, YARIMIZU Kanetaka, KAMEDA Hiromi, KUNO Mariko, TANAKA Yudari

“A Study of the geographical distribution of lexical variation among younger generation speakers in the Tokyo metropolitan area” (Oral)

Mariko Kuno, Haruka Takeuchi, Hirofumi Zayasu, Kaoru Sakamoto, Akihiro Nakamura, Anastasia Dubrovina, Keiko Kino,

「首都圏方言の若年層に見る特殊拍に関する音変化」 (Oral)

Naoki HAYASHI, Yukari TANAKA

“Patterns of Response to New Pronunciation in the Metropolitan Periphery :TobihaneIntonation and Compound-Word Accent” (Oral)

TANAKA, Yukari

“Patterns of Response to“Tokyo-esque”Pronunciation:Based on a Nationwide Survey of Tobihane Intonation” (Oral)

亀田裕見

「首都圏における方言の地域資源としての活用 —通信調査の結果より—」 (Poster)

鎌水兼貴

「若者語の地理的分布」 (Poster)

執筆者一覧

- 三井はるみ (国立国語研究所理論・構造研究系 助教)
亀田 裕見 (文教大学文学部 准教授)
久野マリ子 (國學院大學文学部 教授)
田中ゆかり (日本大学文理学部 教授)
鍮水 兼貴 (国立国語研究所時空間変異研究系 プロジェクト非常勤研究員)
飛田 良文 (国立国語研究所 名誉所員)
佐藤 亮一 (国立国語研究所 名誉所員)
小林 初夫 (福島県双葉郡浪江町立幾世橋小学校・福島市立岡山小学校(兼務)
教諭)
竹田 晃子 (国立国語研究所時空間変異研究系 特任助教)
三樹 陽介 (国立国語研究所時空間変異研究系 プロジェクト非常勤研究員)
林 直樹 (日本大学文理学部 助手A)
坂本 薫 (國學院大學大学院文学研究科博士後期課程1年)

国立国語研究所共同研究報告 13-02

首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書

首都圏言語研究の視野

2014 (平成 26) 年 2 月 25 日発行

編者 三井はるみ

発行 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042 (540) 4300 (代表)

<http://www.ninjal.ac.jp/>

NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-02

The Current States and Changes
in the Japanese Spoken
in the Metropolitan Area

MITSUI Harumi (ed.)

February 2014

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS